公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（38）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保（かわくぼ）遺跡４
Ａ地点

（鹿屋市串良町）

縄文時代早期編

第１分冊

2021年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



川久保遺跡Ａ地点遠景

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴って，平成26年度から平成29年度にかけて実施した川久保遺跡Ａ地点の縄文時代早期・前期・古代・中世の発掘調査の記録です。

川久保遺跡は，鹿屋市串良町に所在し，旧石器時代，縄文時代草創期・早期・前期・後期・晩期，弥生時代，古墳時代から近世までの遺構や遺物が発見されました。縄文時代早期は276基の集石や12基の連穴土坑ほか多数の遺構が検出され，また出土した土器型式も縄文時代早期前半の前平式土器から，早期末の轟系土器群まで，ほぼ途切れることなく出土しています。また，中世に関しては，掘立柱建物跡・土坑墓・土坑が，溝や古道に区画されて検出されており，出土した輸入陶磁器等の存在とともに，地域の歴史を考えるうえで貴重な発見となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめ，多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心を広げ，地域の歴史や文化への理解を高める一助になれば幸いです。

最後に，発掘調査から報告書刊行まで御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成において御指導・御協力いただきました皆様に対し厚く御礼申し上げます。

令和３年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　中原一成

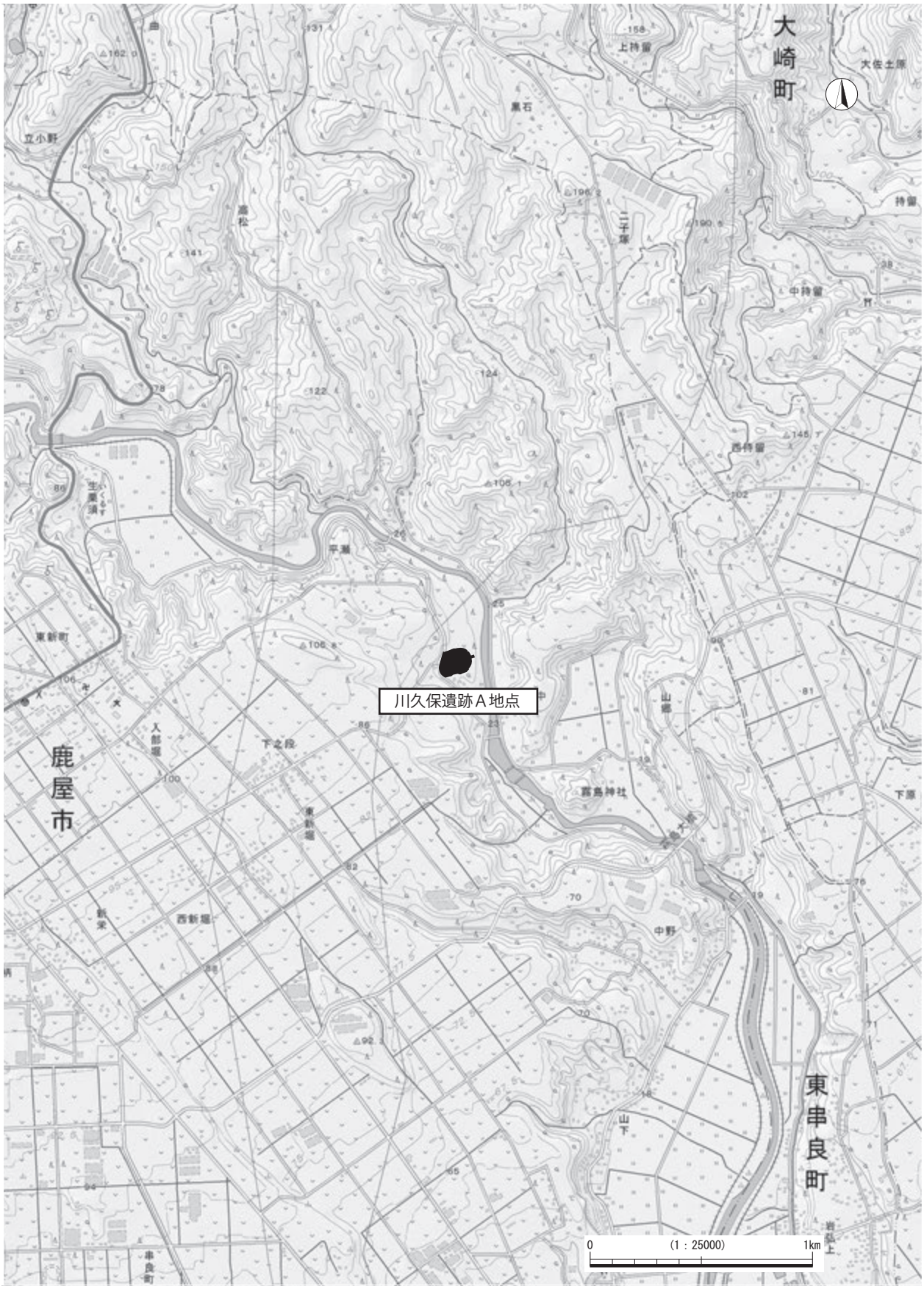
報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	かわくぼいせきよん　えーちてん　じょうもんじだいそうき・ぜんき・こだい・ちゅうせいへん
書　　名	川久保遺跡４　Ａ地点　縄文時代早期・前期・古代・中世編
副　書　名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ　リ　ー　ズ　名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第38集
編　集　者　名	岩永勇亮　肥後弘章（埋蔵文化財調査センター）　松崎卓郎　中田裕樹（埋蔵文化財サポートシステム）
編　集　機　関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団　埋蔵文化財調査センター
発　行　年　月	西暦2021年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調　査　起　因
かわくぼいせき 川久保遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 串良町 ほそやまだ 細山田	46203	203-349	31° 26′ 40″	130° 56′ 26″	試掘調査 2015.11.４～ 2016.１.28 本調査 ①2014.５.12～ 2015.１.28 ②2015.５.９～ 2016.１.27 ③2016.５.11～ 2017.１.27 ④2017.５.８～ 2018.３.９	27,327㎡ （表面積） 96,403㎡ （延面積）	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
川久保遺跡 Ａ地点	散布地	旧石器時代	礫群　28基	ナイフ形石器，台形石器，剥片尖頭器，細石刃核，細石刃，石核，磨石，敲石，叩石	畦原型細石刃核が多く出土する傾向がある。
		縄文時代草創期	礫群　４基	隆線文土器，細石刃核，細石刃，石鏃，石核，磨石，敲石，叩石	
		縄文時代早期	集石　276基 連穴土坑　12基 土坑　21基 磨石集積遺構　１基	岩本式土器，前平式土器，志風頭式土器，加栗山式土器，吉田式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器，右京西式土器，轟Ａ式土器他，耳栓，石鏃，石核，磨石，敲石，叩石	南九州の縄文時代早期のほとんどの型式が出土している。
		縄文時代前期	集石　23基	西之薗式土器，轟Ｂ式土器，曽畑式土器，磨製石斧，石鏃，磨石	－
		縄文時代後期・晩期	土坑	黒川式土器，刻目突帯文土器，打製石斧	－
		弥生時代	竪穴住居跡	下条式土器，山ノ口式土器，石包丁	－
		古墳時代	竪穴住居跡 鍛冶関連遺構	成川式土器，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄滓，勾玉，管玉	－
		古代・中世	掘立柱建物跡　34基 竪穴建物跡　３基 古道跡，溝跡 土坑墓　３基	須恵器，土師器，黒色土器，墨書土器，瓦器，青磁，白磁，滑石製石鍋，土錘	溝と古道で区画されたなかに，建物跡が並ぶ
		近世	炭焼窯跡　２基	古銭，五輪塔，石臼	－

要約	川久保遺跡Ａ地点は，旧石器時代から縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と連綿と生活の痕跡が見られる複合遺跡である。縄文時代早期の遺構としては，276基を検出した集石のほかに，早期前半の連穴土坑12基などが検出されている。早期の土器は，ほぼすべての型式が出土している。また，中世の掘立柱建物跡群が溝と古道で区画されて検出されている。



川久保遺跡Ａ地点位置図

例言

1　本編は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う川久保遺跡発掘調査報告書「川久保遺跡４　Ａ地点　縄文時代早期・前期・古代・中世編」である。

2　本遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」）へ調査委託し，埋文調査センターが実施した。本遺跡は，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地点に区分して調査を行った。

4　川久保遺跡Ａ地点の調査は，平成26年度～平成29年度まで実施し，全てを完了した。なお平成26年度は，大福コンサルタント株式会社，平成27年度・平成28年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，平成29年度は，株式会社島田組に発掘調査支援業務を委託した。詳細については，第Ⅰ章に記した。

5　整理・報告書作成事業については，平成29年度は，埋文調査センターの第一整理作業所，平成30年度・平成31年度は，第二整理作業所において実施した。なお平成30年度は，大福コンサルタント株式会社，平成31年度・令和２年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託した。

6　掲載した遺構番号は，遺構・土器・石器がそれぞれ通し番号で本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。本文・挿図・表・図版の番号は，一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡略号は，「ＫＫＢ」である。

8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

9　本編で使用したレベル数値は，海抜絶対高である。

10　本編で使用した方位は全て国土座標第Ⅱ系による座標北（Ｇ.Ｎ.）であり，磁北はこれより西偏約６度30分である。

11　遺構の埋土や土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局)を参考にした。

12　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者及び受託業者が行った。また，空中写真の撮影は，株式会社ふじたに委託した。

13　本編に係る遺構及び遺物の実測・トレース図の作成は，岩永・肥後・受託業者が整理作業員とともに行った。また，遺物実測（石器）の一部を大福コンサルタント株式会社，株式会社埋蔵文化財サポートシステム，株式会社島田組，株式会社九州文化財総合研究所に委託し，岩永・肥後・受託業者が監修を行った。

14　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）の写場で，岩永・肥後・受託業者及び埋文調査センターの福永修一・西園勝彦が行った。

15　本編の執筆は，次のように分担した。

第Ⅰ章　……岩永・肥後・松崎
第Ⅱ章　……肥後・黒川
第Ⅲ章　……岩永・松崎
第Ⅳ章
　第１節　縄文時代早期の成果
　　遺構　……岩永・坂井
　　土器　……　岩永・肥後・冨永・磯村
　　石器　……松崎・本村
　第２節　縄文時代前期の成果
　　遺構　……岩永・坂井
　　土器　……岩永
　　石器　……松崎・本村
　第３節　古代の成果
　　遺構　……岩永・冨永
　　遺物　……中田・井手
　第４節　中世の成果
　　遺構　……岩永・冨永
　　遺物　……中田・井手
　第５節　自然科学分析　……岩永（編集）
第Ⅴ章　総括
　第１節　……岩永・松崎
　第２節　……岩永・松崎
　第３節　……岩永・中田
図版　……肥後

16　本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，埋文センターで保管し，　展示・活用を図ることにしている。

凡例

1　本編に掲載してある遺構図・遺物出土状況等の１グリッド（１マス）は，10m四方である。

2　遺構の平面図の基本的な縮尺は１／２０である。

3　遺構の断面図については，基本的には平面図と同縮尺とした。

4　遺構の実測で用いた表現方法については，実測表現の凡例のとおりである。

5　遺構配置図は，縮尺をそれぞれ別途に掲載した。

6　遺構番号に関しては，調査時に付したものから，報告書掲載順に振り直した。

7　遺物図の基本的な縮尺は，以下のとおりである。土器：１／３，石斧：１／２，礫器・磨石類：１／３，剥片石器：１／１

8　上記の縮尺で図版に収まらない実測図に関しては，適宜，縮尺を変更して掲載した。

総目次

【第１分冊】
巻頭図版
序文
報告書抄録
川久保遺跡Ａ地点位置図
例言・凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯
　第２節　事前調査
　第３節　本調査
　第４節　整理・報告書作成
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
　第３節　東九州自動車道関連の遺跡
第Ⅲ章　調査の方法と層序
　第１節　調査の方法
　第２節　層序
第Ⅳ章　調査の成果
　第１節　縄文時代早期の成果
　　１　遺構
　　２　遺物

【第２分冊】
　第２節　縄文時代前期の成果
　　１　遺構
　　２　遺物
　第３節　古代の成果
　　１　遺構
　　２　遺物
　第４節　中世の成果
　　１　遺構
　　２　遺物
　第５節　自然科学分析
第Ⅴ章　総括
　第１節　縄文時代早期
　第２節　縄文時代前期
　第３節　古代・中世

【第３分冊】
写真図版

本文目次

巻頭図版
序文
報告書抄録
川久保遺跡Ａ地点位置図
例言・凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　事前調査 …… 1
　第３節　本調査 …… 2
　第４節　整理・報告書作成 …… 6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 10
　第１節　地理的環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 10
　第３節　東九州自動車道関連の遺跡 …… 14
第Ⅲ章　調査の方法と層序 …… 19
　第１節　調査の方法 …… 19
　第２節　層序 …… 24
第Ⅳ章　調査の成果 …… 30
　第１節　縄文時代早期の成果 …… 30
　　１　遺構 …… 30
　　２　遺物 …… 170

挿図目次

第 1 図　周辺遺跡位置図 …… 13
第 2 図　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡位置図 …… 18
第 3 図　周辺地形及びグリッド配置図 …… 20
第 4 図　標準土層図 …… 24
第 5 図　土層断面図位置図 …… 24
第 6 図　土層断面図① …… 25
第 7 図　土層断面図② …… 26
第 8 図　土層断面図③ …… 27
第 9 図　土層断面図④ …… 28
第 10 図　土層断面図⑤ …… 29
第 11 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石配置図 …… 37
第 12 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石配置図 …… 38
第 13 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石配置図 …… 39
第 14 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石１ …… 40
第 15 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石２ …… 41
第 16 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石３ …… 42
第 17 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石４ …… 43
第 18 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石５ …… 44
第 19 図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石６ …… 45
第 20 図　縄文時代早期Ⅶｂ層上位検出集石１ …… 45
第 21 図　縄文時代早期Ⅶｂ層上位検出集石２ …… 46
第 22 図　縄文時代早期Ⅶａ層下位検出集石１ …… 47
第 23 図　縄文時代早期Ⅶａ層下位検出集石２ …… 48
第 24 図　縄文時代早期Ⅶａ層下位検出集石３ …… 49
第 25 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石１ …… 50
第 26 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石２ …… 51
第 27 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石３ …… 52
第 28 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石４ …… 53
第 29 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石５ …… 54
第 30 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石６ …… 55
第 31 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石７ …… 56
第 32 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石８ …… 57
第 33 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石９ …… 58
第 34 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石10 …… 59
第 35 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石11 …… 60
第 36 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石12 …… 61
第 37 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石13 …… 62
第 38 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石14 …… 63
第 39 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石15 …… 64
第 40 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石16 …… 65
第 41 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石17 …… 66
第 42 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石18 …… 67
第 43 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石19 …… 68
第 44 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石20 …… 69
第 45 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石21 …… 70
第 46 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石22 …… 71
第 47 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石23 …… 72
第 48 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石24 …… 73
第 49 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石25 …… 74
第 50 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石26 …… 75
第 51 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石27 …… 76
第 52 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石28 …… 77
第 53 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石29 …… 78
第 54 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石30 …… 79
第 55 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石31 …… 80
第 56 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石32 …… 81
第 57 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石33 …… 82
第 58 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石34 …… 83
第 59 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石35 …… 84
第 60 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石36 …… 85
第 61 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石37 …… 86
第 62 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石38 …… 87
第 63 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石39 …… 88
第 64 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石40 …… 89
第 65 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石41 …… 90
第 66 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石42 …… 91
第 67 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石43 …… 92
第 68 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石44 …… 93
第 69 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石45 …… 94
第 70 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石46 …… 95
第 71 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石47 …… 96
第 72 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石48 …… 97
第 73 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石49 …… 98
第 74 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石50 …… 99
第 75 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石51 …… 100
第 76 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石52 …… 101
第 77 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石53 …… 102
第 78 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石54 …… 103
第 79 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石55 …… 104
第 80 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石56 …… 105
第 81 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石57 …… 106
第 82 図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石58 …… 107
第 83 図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石１ …… 108
第 84 図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石２ …… 109
第 85 図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石３ …… 110
第 86 図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石４ …… 111
第 87 図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石５ …… 112
第 88 図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石１ …… 112
第 89 図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石２ …… 113
第 90 図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石３ …… 114
第 91 図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石４ …… 115
第 92 図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石５ …… 116
第 93 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石１ …… 116
第 94 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石２ …… 117
第 95 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石３ …… 118
第 96 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石４ …… 119
第 97 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石５ …… 120
第 98 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石６ …… 121
第 99 図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石７ …… 122
第100図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石８ …… 123
第101図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石９ …… 124
第102図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石10 …… 125
第103図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石11 …… 126

第104図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石12 …… 127
第105図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石13 …… 128
第106図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石14 …… 129
第107図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石15 …… 130
第108図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石16 …… 131
第109図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石17 …… 132
第110図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石18 …… 133
第111図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石19 …… 134
第112図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石20 …… 135
第113図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石21 …… 136
第114図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石22 …… 137
第115図　磨石集積 …… 138
第116図　磨石集積出土石器 …… 138
第117図　集石内出土土器１ …… 146
第118図　集石内出土土器２ …… 147
第119図　集石内出土石器１ …… 148
第120図　集石内出土石器２ …… 149
第121図　縄文時代早期　連穴土坑・土坑配置図… 153
第122図　縄文時代早期Ⅶａ層検出連穴土坑１…… 154
第123図　縄文時代早期Ⅶａ層検出連穴土坑２…… 155
第124図　縄文時代早期Ⅶａ層検出連穴土坑３…… 156
第125図　縄文時代早期Ⅶａ層検出連穴土坑４…… 157
第126図　縄文時代早期Ⅶａ層検出連穴土坑５…… 158
第127図　縄文時代早期Ⅶａ層検出連穴土坑６…… 159
第128図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑１ …… 160
第129図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑２ …… 161
第130図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑３ …… 162
第131図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑４ …… 163
第132図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑５ …… 164
第133図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑６ …… 165
第134図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑７ …… 166
第135図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑８ …… 167
第136図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑９ …… 168
第137図　縄文時代早期Ⅶａ層検出土坑10…… 169
第138図　１～３類土器分布図 …… 170
第139図　１類土器 …… 172
第140図　２類土器１ …… 174
第141図　２類土器２ …… 175
第142図　３類土器 …… 177
第143図　４類土器分布図 …… 178
第144図　４ａ類土器 …… 179
第145図　４ｂ類土器 …… 179
第146図　４ｃ類土器 …… 179
第147図　５類土器分布図 …… 182
第148図　５類土器１ …… 183
第149図　５類土器２ …… 184
第150図　６類土器分布図 …… 187
第151図　６類土器１ …… 188
第152図　６類土器２ …… 189
第153図　６類土器３ …… 190
第154図　６類土器４ …… 191
第155図　６類土器５ …… 192
第156図　６類土器６ …… 193
第157図　６類土器７ …… 194
第158図　６類土器８ …… 195
第159図　６類土器９ …… 196
第160図　６類土器10 …… 197
第161図　６類土器11 …… 198
第162図　６類土器12 …… 199
第163図　７類土器分布図 …… 203
第164図　７類土器 …… 205
第165図　８～10類土器分布図 …… 206
第166図　８類土器 …… 208
第167図　９類土器 …… 208
第168図　10類土器 …… 209
第169図　11類土器分布図 …… 210
第170図　11類土器 …… 211
第171図　12類土器分布図 …… 213
第172図　12類土器１ …… 214
第173図　12類土器２ …… 215
第174図　12類土器３ …… 216
第175図　12類土器４ …… 217
第176図　12類土器５ …… 218
第177図　12類土器６ …… 219
第178図　12類土器７ …… 220
第179図　12類土器８ …… 221
第180図　12類土器９ …… 222
第181図　13～15類土器分布図 …… 225
第182図　耳栓・垂飾品分布図 …… 226
第183図　13類土器 …… 227
第184図　14類土器 …… 227
第185図　15類土器・その他土器 …… 228
第186図　耳栓１ …… 228
第187図　耳栓２・垂飾品 …… 229
第188図　Ⅶ層出土石器分布図 …… 231
第189図　Ⅵ層出土石器分布図 …… 234
第190図　Ⅶ層出土石器１ …… 236
第191図　Ⅶ層出土石器２ …… 237
第192図　Ⅶ層出土石器３ …… 238
第193図　Ⅶ層出土石器４ …… 239
第194図　Ⅶ層出土石器５ …… 240
第195図　Ⅶ層出土石器６ …… 241
第196図　Ⅶ層出土石器７ …… 242
第197図　Ⅶ層出土石器８ …… 243
第198図　Ⅵ層出土石器１ …… 244
第199図　Ⅵ層出土石器２ …… 245
第200図　Ⅵ層出土石器３ …… 246
第201図　Ⅵ層出土石器４ …… 247
第202図　Ⅵ層出土石器５ …… 248
第203図　Ⅵ層出土石器６ …… 249
第204図　Ⅵ層出土石器７ …… 250
第205図　Ⅵ層出土石器８ …… 251
第206図　Ⅵ層出土石器９ …… 252
第207図　Ⅵ層出土石器10 …… 253
第208図　Ⅵ層出土石器11 …… 254
第209図　Ⅵ層出土石器12 …… 255
第210図　Ⅵ層出土石器13 …… 256
第211図　Ⅵ層出土石器14 …… 257

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 12
第２表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表① …… 14
第３表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表② …… 15
第４表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表③ …… 16
第５表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表④ …… 17
第６表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表⑤ …… 18
第７表　石器分類表 …… 22
第８表　石材分類表 …… 23
第９表　Ⅶａ層検出集石に伴う土坑法量一覧 …… 58
第10表　縄文時代早期集石１ …… 139
第11表　縄文時代早期集石２ …… 140
第12表　縄文時代早期集石３ …… 141
第13表　縄文時代早期集石４ …… 142
第14表　縄文時代早期集石５ …… 143
第15表　集石内出土土器観察表 …… 144
第16表　磨石集積及び集石内出土石器観察表 …… 145
第17表　縄文時代早期土坑 …… 169
第18表　１類土器観察表 …… 171
第19表　２類土器観察表 …… 175
第20表　３類土器観察表 …… 176
第21表　４類土器観察表 …… 180
第22表　５類土器観察表 …… 185
第23表　６類土器観察表１ …… 200
第24表　６類土器観察表２ …… 201
第25表　６類土器観察表３ …… 202
第26表　７ａ類土器観察表 …… 204
第27表　７ｂ類土器観察表 …… 204
第28表　８類土器観察表 …… 207
第29表　９類土器観察表 …… 207
第30表　10類土器観察表 …… 207
第31表　11類土器観察表 …… 212
第32表　12類土器観察表１ …… 223
第33表　12類土器観察表２ …… 224
第34表　13類土器観察表 …… 229
第35表　14類土器観察表 …… 230
第36表　15類土器・その他土器・耳栓観察表 …… 230
第37表　Ⅶ層出土石器観察表 …… 258
第38表　Ⅵ層出土石器観察表 …… 259

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～末吉ＩＣ）建設を計画し，当該事業区間における埋蔵文化財の有無について，県教委に照会を行った。これを受けて，鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）は，平成12年２月に，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。この分布調査結果をもとに事業区内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業計画の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化や道路建設工事計画の変更に伴い，遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間については，平成14年４月に再度分布調査を実施した。その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成16年３月には，国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は，日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は，日本道路公団が鹿児島県へ再委託することになり，これまでの確認書や協定書は，そのまま継承されることになった。また，日本道路公団からの再委託による発掘調査は，曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は，国土交通省からの受託事業として委託することになった。なお，平成21年度までの当該区間の確認調査は，事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが，平成23年度からは，文化庁の国庫補助事業を導入し，県内遺跡事前調査事業として鹿児島県教育委員会が実施することになった。これをふまえ平成23年度は，荒園遺跡・永吉天神段遺跡・堂園平遺跡，平成24年度は，町田堀遺跡・牧山遺跡・京の塚遺跡（現細山田段遺跡）・宮脇遺跡，平成25年度は，小牧遺跡・安良遺跡・木森遺跡，平成26年度は，川久保遺跡・春日堀遺跡・小牧古墳群（現安楽小牧Ｂ遺跡）の確認調査を実施した。

近年は，東九州自動車道建設事業等の増加に伴い，埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ，その対応が困難な状況となりつつあった。そこで，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年度に設立し，国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。川久保遺跡については，平成26年度に埋文センターによる確認調査で旧石器時代，縄文時代早期及び晩期，古墳時代，古代の遺物包含層が確認された。なお本調査は，民間調査組織と支援業務委託を契約して実施することとした。また，遺跡が広範囲に及ぶため，地形等を勘案して調査区をＡ～Ｄ地点に区分することとした。

第２節　事前調査

１　分布調査・詳細分布調査

川久保遺跡に関する分布調査は，詳細分布調査を含めて２回実施した。１回目の分布調査は，文化財課が平成12年２月に志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間について実施した。この結果，川久保遺跡を含む50か所の遺跡で，面積にして854,100㎡を確認した。その後，より詳細な情報を得ることを目的として平成14年４月に県文化課が詳細分布調査を実施した。この結果，川久保遺跡を含む遺跡面積の合計は，384,400㎡を確認した。

２　試掘調査

川久保遺跡における試掘調査は，遺跡の東側を中心に平成25年度に県教委が実施した。試掘調査の結果，古墳時代の遺構や遺物包含層を確認した。また，平成27年度の本調査時には，Ａ地点・Ｂ地点について薩摩火山灰層以下の状況確認のため試掘トレンチを設けた。その結果，Ｂ地点では遺構や遺物は確認されなかったが，Ａ地点の約1,000㎡で縄文時代草創期から旧石器時代の包含層を確認した。

３　確認調査

川久保遺跡の確認調査は，平成26年11月４日～平成27年１月28日に実施した。調査対象は，遺跡の西側の約4,700㎡であった。調査は，６ｍ×２ｍのトレンチを11か所設定し，掘削を行った。調査の結果，遺跡の全面で中世から縄文時代早期の包含層を２面確認し，遺跡の一部の約900㎡からは，旧石器時代の包含層を確認した。本時の確認調査範囲は，後日Ｃ地点として本調査が行われた。

調査体制

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　〃　　所長　井ノ上　秀　文
調査企画　〃　　次長兼総務課長　中　島　　治
　　〃　調査課長兼縄文調査室長　前　迫　亮　一
　　〃　　調査課第二係長　今　村　敏　照
調査担当　〃　　文化財主事　光　永　　誠
　　〃　　文化財主事　本　髙　謙　治
事務担当　〃　　総務課主事　池之上　勝　太

第３節　本調査

試掘調査・確認調査の結果をふまえ，本調査は，平成26年度～平成30年度までの５か年で実施している。第１回は，平成26年４月11日～平成27年３月12日まで，第２回は，平成27年５月９日～平成28年１月27日まで，第３回は，平成28年４月11日～平成29年３月10日まで，第４回は，民間が平成29年５月９日～平成30年１月26日まで実施し，埋文調査センターが平成29年４月11日～平成30年３月９日までの期間で調査を実施した。また，第５回は，平成30年12月10日～平成31年２月22日までの期間で調査を実施した。なお，平成30年度が川久保遺跡の本調査最終年度であるが，Ａ地点の本調査は，平成29年度が最終年度である。

以下では概要と体制を記し，経過は日誌抄で記述する。

１　概要

平成26年度

大福コンサルタント株式会社に支援業務を委託し，遺跡の東側を中心に5,830㎡の調査を実施した。その結果，縄文時代前期と晩期の遺物，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡及び鍛冶関連建物跡，古代・中世の掘立柱建物跡，溝状遺構や道跡等を発見した。

平成27年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託し，川久保遺跡全体で18,534㎡を対象に調査を実施した。その結果，縄文時代前期・晩期の遺構･遺物，弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡，古代の土坑，中世の掘立柱建物跡及び溝状遺構を発見した。また，トレンチ調査により，旧石器時代，縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。

平成28年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託し，遺跡全体で34,230㎡を対象に調査を実施した。その結果，旧石器時代細石器文化期の遺物，縄文時代早期の集石遺構と遺物，縄文時代前期・晩期，弥生時代の遺物，古墳時代の竪穴住居跡・製鉄関連の遺構と遺物，中世の土坑・道跡と遺物を発見した。

平成29年度

埋文調査センター（直営）と調査支援業務を委託した株式会社島田組（民活）の２班体制で本調査を実施した。調査対象面積は，37,809㎡である。Ａ地点の調査の最終年度である。その結果，旧石器時代は，ナイフ形石器文化期から細石器文化期の遺構と遺物，縄文時代草創期の礫群・連穴土坑等の遺構と遺物を発見した。また，縄文時代早期の連穴土坑・土坑・集石遺構等の遺構と遺物，縄文時代後期の石器集積遺構と遺物を確認した。さらに，縄文時代晩期の集石遺構と遺物，弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴住居跡・土坑等の遺構と遺物を発見した。また，本調査と並行して遺物洗浄・注記の基礎整理作業を実施した。

平成30年度

埋文調査センター（直営）で本調査を実施した。調査対象面積は，2,283㎡である。調査の結果，縄文時代晩期の集石遺構と遺物が出土した。古墳時代では，土坑１基と焼土を検出した。遺物は，古墳時代は，成川式土器が出土し，古代は，土師甕・内黒土師器・須恵器等が出土した。中世の遺物は，青磁が出土している。また，本調査と並行してＣ地点の報告書の刊行とＡ地点の遺物洗浄や注記等の基礎整理作業を実施した。

２　調査体制

平成26年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃　　センター長　堂　込　秀　人
調査企画　　〃　総務課長兼係長　山　方　直　幸
　　〃　　調査課長　八木澤　一　郎
　　〃　　調査第二係長　寺　原　　徹
調査担当　　〃　　統括調査員　岩　永　勇　亮
事務担当　　〃　　主事　岡　村　信　吾
現地指導　東アジア古代鉄文化研究センター(愛媛大学)
　　センター長（教授）　村　上　恭　通
　　鹿児島大学法文学部人文学科
　　教授　本　田　道　輝
　　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　　准教授　中　村　直　子
　　佐賀大学文化教育学部
　　教授　重　藤　輝　行
　　広島大学文学研究科
　　准教授　野　島　　永

調査の委託
委託先　大福コンサルタント株式会社
主任技術者　原　口　道　朗
主任調査支援員　重　留　康　宏
調査支援員　岩　下　直　樹
調査支援員　花　田　寛　典
委託内容　発掘調査支援業務
測量業務
土木業務
検査　中間検査：平成26年10月28日
完成検査：平成27年２月20日（実地検査）
平成27年３月４日（成果物検査）

平成27年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃　センター長　堂　込　秀　人
調査企画　〃　総務課長兼係長　有　村　　貢
〃　調査課長　八木澤　一　郎
〃　調査第二係長　寺　原　　徹
調査担当　〃　統括調査員　岩　永　勇　亮
〃　副統括調査員　倉　元　良　文
〃　副統括調査員　松　下　建　生
事務担当　〃　主事　荒　瀬　勝　己
現地指導　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長　中　村　直　子
調査の委託
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
主任技術者　權現領　美千代
主任調査支援員　島　内　浩　輔
調査支援員　松　﨑　卓　郎
調査支援員　立　神　勇　志
調査支援員　坂　井　靖　奈
調査支援員　沖　野　沙和美
調査支援員　磯　村　康　行
研修生　冨　永　朋　実
委託内容　発掘調査支援業務
測量業務
土木業務
検査　中間検査：平成 27 年 10 月 27 日
完成検査：平成 28 年３月１日（実地検査）
平成 28 年３月 11 日（成果物検査）

平成28年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃　センター長　堂　込　秀　人
調査企画　〃　総務課長兼係長　有　村　　貢
〃　調査課長　八木澤　一　郎
〃　調査第二係長　宗　岡　克　英
調査担当　〃　統括調査員　岩　永　勇　亮
〃　副統括調査員　湯場﨑　辰　巳
〃　副統括調査員　山　形　敏　行
事務担当　〃　主事　荒　瀬　勝　己
現地指導　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長　中　村　直　子
調査の委託
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
主任技術者　牧　　美千代
主任調査支援員　島　内　浩　輔
調査支援員　松　﨑　卓　郎
調査支援員　中　田　裕　樹
調査支援員　内　田　賢　一
調査支援員　立　神　勇　志
調査支援員　中　村　耕　治
調査支援員　沖　野　沙和美
調査支援員　磯　村　康　行
調査支援員　冨　永　朋　実
委託内容　発掘調査支援業務
測量業務
土木業務
検査　中間検査：平成 28 年 10 月７日
完成検査：平成 29 年２月 22 日（実地検査）
平成 29 年２月 24 日（成果物検査）

平成29年度（直営）

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃　センター長　前　迫　亮　一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中　村　伸一郎
〃　調査課長　中　原　一　成
〃　調査第一係長　今　村　敏　照
調査担当　〃　文化財専門員　山　形　敏　行
〃　文化財専門員　石　畑　浩　一
〃　文化財専門員　三　垣　恵　一
〃　文化財専門員　徳　永　愛　雄
〃　文化財専門員　楸　田　岳　志
（平成29年５月～11月）

〃　文化財専門員　本　髙　謙　治
〃　文化財専門員　相　良　典　隆
〃　文化財調査員　木　場　浅　葱
〃　文化財調査員　新屋敷　久美子
〃　文化財調査員　福　地　祥　平
（平成29年５月～８月，12月～平成30年３月）
事務担当　〃　主事　荒　瀬　勝　己
〃　事業推進員　川　﨑　麻　衣
現地指導　鹿児島県考古学会
会長　本　田　道　輝
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長　中　村　直　子
調査の委託
委託先　株式会社島田組
主任調査支援員　宮　下　貴　浩
調査支援員　大　橋　裕　子
委託内容　測量業務
検査　中間検査：平成29年11月22日
完成検査：平成30年３月６日（成果物検査）

民間組織への業務委託は，平成30年１月26日をもって終了した。

その後，当初の計画どおり，直営による調査を２月まで継続するにあたって，調査を円滑かつ効率的に実施するため，発掘業務の一部を別途民間調査組織に委託して実施した。

委託先　株式会社島田組
委託期間　平成30年２月１日～平成30年２月23日
委託内容　測量業務
土工業務
検査　完成検査：平成30年３月13日（成果物検査）

この他，Ⅵ・Ⅶ層及びⅨ層（縄文時代早期から旧石器時代）の調査において，測量業務の迅速化を図るために「遺構実測図作成業務委託」を実施した。

委託先　株式会社ジパングサーベイ
委託期間　平成29年10月12日～平成30年２月23日
委託内容　測量業務
検査　完成検査：平成30年３月13日（成果物検査）

平成29年度（民活）

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃　センター長　前　迫　亮　一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中　村　伸一郎
〃　調査課長　中　原　一　成
〃　調査第一係長　今　村　敏　照
調査担当　〃　文化財専門員　馬　籠　亮　道
事務担当　〃　主査　荒　瀬　勝　己
〃　事業推進員　川　﨑　麻　衣
調査の委託
委託先　株式会社島田組
主任技術者　山　本　隆　広
主任調査支援員　宮　下　貴　浩
調査支援員　大　橋　裕　子
調査支援員　清　岡　廣　子
（～８月）
調査支援員　丹　生　泰　雪
（９月～）
委託内容　発掘調査支援業務
測量業務
土工業務
検査　中間検査：平成29年11月22日
完成検査：平成30年２月23日（実地検査）
完成検査：平成30年３月６日（成果物検査）

平成30年度（直営）

事業主体　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃　センター長　前　迫　亮　一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中　村　伸一郎
〃　調査課長　中　原　一　成
〃　調査第三係長　三　垣　恵　一
調査担当　〃　文化財専門員　楸　田　岳　志
〃　文化財専門員　本　髙　謙　治
〃　文化財調査員　大　坪　啓　子
事務担当　〃　主査　小　牧　智　子
〃　事業推進員　塩　屋　奈諸美

３　調査の経過（日誌抄より）

本調査について，日誌抄を月ごとに集約して記した。なお，ここでは，Ａ地点についてのみ記している。

平成26年度

５月　Ｆ～Ｊ35～38区　表土掘削。Ｃ～Ｅ32～34区　表土掘削，Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ｖａ層遺構検出。Ｂ～Ｅ35～38区，Ｈ～Ｋ34・35区　表土掘削，Ⅳ層遺構検出及び掘削。

６月　Ｃ～Ｅ32～34区　Ｖａ層遺構検出及び掘削。Ｂ～Ｅ35～38区　Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ｖａ層遺構検出及び掘削。Ｈ～Ｋ34・35区，Ｆ～Ｊ35～38区Ⅳ層遺構検出及び掘削。Ｇ32～34区　表土掘削，Ⅳ層遺構検出及び掘削。

７月　Ｈ～Ｋ33・34区，Ｆ～Ｊ35～38区　Ⅳ層遺構検出及び掘削。Ｄ～Ｇ35・36区　表土掘削，Ⅳ層遺構

検出及び掘削。

8月　B～E35～38区　Ⅴ層遺構検出。F～H35～38区　Ⅳ層遺構検出及び掘削。G32～34区　Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ⅴa層遺構検出。　F・G38・39区　Ⅴa層遺構検出及び掘削。G～I35～38区　Ⅴa層遺構検出及び掘削。

9月　G～I35～38区　Ⅴa層遺構掘削。D～G35～37区　Ⅳ層遺構掘削，Ⅴa層遺構検出及び掘削。

10月　I～K33・34区　Ⅳ層包含層掘削。C～K35～38区　Ⅴa層遺構検出及び掘削。G32～34区　Ⅳ層遺構検出及び掘削。D～G35～37区　Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ⅴa層遺構検出及び掘削。

11月　D～K35～38区　Ⅳ層包含層掘削，Ⅴa層遺構検出及び掘削。F・G39・40区　Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ⅴa層遺構検出及び掘削。

12月　D36・37区，I～K35～38区　Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ⅴa層遺構検出。E～I35～38区　Ⅳ層遺構検出及び掘削。

1月　E～H36～38区　Ⅳ層遺構検出及び掘削，Ⅴa層遺構検出。D～G32～34区　Ⅴa層遺構検出。

平成27年度

5月　G～K34・35区　Ⅴa層遺構検出及び掘削。B～D32～35区　表土掘削，Ⅴa層遺構検出及び掘削。B～G31区　表土掘削，Ⅴa層遺構検出。

6月　G～K34・35区　Ⅴa層包含層掘削。B～G31区　Ⅴa層遺構検出及び掘削。

7月　G32・33区　Ⅳ層包含層掘削，Ⅴa層遺構検出及び掘削，Ⅴ層包含層掘削。E～K32～35区　Ⅴa層遺構掘削，Ⅴa層包含層掘削，集石検出。B～D32～35区　Ⅴa層遺構掘削（古墳時代）。

8月　F・G32・33区　Ⅴa層包含層掘削。I・J35区　Ⅴa層包含層掘削，集石検出。B～G31区　Ⅴa層遺構掘削。

9月　B～D32～35区　Ⅴa層遺構掘削（古墳時代）。

10月　6日　空撮。

11月　B～G31～35区　Ⅴa層遺構掘削（古墳時代）。

12月　A～F31～35区　無遺物層掘削。

1月　A～F31～35区　無遺物層掘削。

2月　B～E32・33区　Ⅴc層無遺物層掘削。

平成28年度

5月　B31～35区，C・D31～35区，E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区　無遺物層掘削，Ⅵ層包含層掘削。B26区，C～E25・26区表土掘削，Ⅳ・Ⅴa層遺構検出及び掘削，Ⅳ層包含層掘削。F24・25区，G24～26区，H～K23～26区表土掘削。

6月　B～D31～35区　Ⅶ層包含層掘削，Ⅷ層遺構検出及び掘削，Ⅸ層（旧石器）包含層掘削。E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区　Ⅶ層包含層掘削。F24・25区，G24～26区，H～K23～26区，Ⅳ層包含層掘削。

7月　E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区　先行トレンチ掘削。K・L32～36区，M32～35区　表土掘削。B26区，C～E25・26区　Ⅵ～Ⅷ層包含層掘削，先行トレンチ掘削。

8月　B～D31～35区　Ⅸ・Ⅹ層包含層掘削。E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区　Ⅷ～Ⅹ層包含層掘削。K・L32～36区，M32～35区　Ⅳ・Ⅴ層包含層掘削。B26区，C～E25・26区表土掘削，Ⅳ層包含層掘削。F24・25区，G24～26区，H～K23～26区　Ⅴ～Ⅶ層包含層掘削。J～L23～26区，M24～27区　表土掘削，Ⅲ・Ⅳ層包含層掘削。

9月　B31～35区，C・D31～35区，E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区　Ⅸ・Ⅹ層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区　表土掘削，Ⅴ層遺構検出。B26区，C～E25・26区　Ⅴ～Ⅶ層包含層掘削。

10月　G・H32～34区，I・J33・34区　Ⅴ層遺構掘削。B26区，C～E25・26区　Ⅵ～Ⅷ層包含層掘削。J～L23～26区，M24～27区　Ⅳ層包含層掘削。

11月　K・L32～36区，M32～35区　Ⅵ層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区　Ⅳ・Ⅴ層遺構掘削。B～F27区　表土掘削，Ⅳ層包含層掘削。J～L23～26区，M24～27区　Ⅴ層包含層掘削。F～L27区　Ⅳ・Ⅴ層包含層掘削。B～F28～31区，G28～31区　表土掘削，Ⅳ層包含層掘削。

12月　K・L32～36区，M32～35区　Ⅵ層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区　Ⅴ層包含層掘削。B～F27区　Ⅳ層包含層掘削・遺構掘削。J～L23～26区，M24～27区　Ⅴ層包含層掘削。F～L27区　Ⅳ～Ⅶ層包含層掘削，Ⅷ層遺構検出及び掘削。B～F28～31区，G28～31区　Ⅳ層包含層掘削・遺構掘削。

1月　K・L32～36区，M32～35区　Ⅶ層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区　Ⅴa層遺構掘削。B～G30・31区　Ⅳ層包含層掘削・遺構掘削。

平成29年度（直営）

5月　B～G26～31区　Ⅴa層遺構検出及び掘削。F27区，G28～30区　表土掘削。B・C27～29区，F・G26・27区，G～I29～31区，I27区，J～L27～31区　Ⅴ層遺構検出及び掘削。

6月　8日　空撮。
F・G26・27区　Ⅴc～Ⅵ層遺構検出及び掘削。
F～K27・28区　Ⅵ層包含層掘削。H29区，H～J30区　表土掘削，Ⅴ層遺構検出及び掘削。

Ｇ～Ｉ 32 ～ 34 区　Ⅵ層包含層掘削。Ｇ～Ｉ 32・33 区　Ⅶａ層包含層掘削。

７月　Ｇ～Ｋ 32・33 区　Ⅶａ層包含層掘削。Ｇ～Ｋ 32・33 区　Ⅶｂ層包含層掘削。Ｌ・Ｍ 32 区　Ⅸ層包含層掘削。

８月　Ｂ～Ｅ27・28区　Ⅵ層包含層掘削。Ｇ～Ｉ31区表土掘削。Ｇ33区，Ｋ32・33区　Ⅶｂ層包含層掘削。Ｈ～Ｍ32・33区　Ⅸ層包含層掘削。Ｇ～Ｉ32区，Ｋ32区　先行トレンチ掘削（Ⅸ層以下）。

９月　Ｆ27区，Ｊ30区　Ⅵ層包含層掘削。Ｂ～Ｅ27・28区，Ｊ～Ｌ28～32区　Ⅵ～Ⅶ層包含層掘削。Ｅ・Ｆ29～31区　Ⅴａ層包含層掘削。

10月　Ｂ～Ｌ27区，Ｂ27・28区，Ｂ～Ｄ28区，Ｉ28区先行トレンチ（旧石器）。Ｃ・Ｄ28区　Ⅷ層遺構検出。Ｈ27区　Ⅸ層包含層掘削。Ｈ28区　Ⅵ～Ⅸ層包含層掘削。Ｈ30区　Ⅵ層包含層掘削。Ｉ29・30区　Ⅵ～Ⅸ層包含層掘削。Ｉ29・30区　Ⅴ層包含層掘削。Ｉ31区　Ⅸ層包含層掘削。Ｊ27区　Ⅵ～Ⅸ層包含層掘削。Ｊ28区　Ⅵ・Ⅶ層包含層掘削。Ｊ29区　Ⅴ～Ⅶ層包含層掘削。

11月　Ｅ・Ｆ28区　Ⅴ層包含層掘削。Ｈ～Ｊ29・30区，Ｈ・Ｉ30区　Ⅴ～Ⅶｂ層包含層掘削，遺構検出及び掘削。Ｉ～Ｋ27区，Ｊ～Ｌ28～30区，Ｊ・Ｋ31区　Ⅸ層包含層掘削。

12月　Ｅ・Ｆ28区　Ⅴ層包含層掘削。Ｈ29・30区　Ⅵ・Ⅶ層包含層掘削。Ｉ27区，Ｉ～Ｌ28～30区，Ｋ27区，Ｋ31区　Ⅸ層包含層掘削。

１月　Ｂ・Ｃ30区，Ｄ29・30区，Ｅ・Ｆ28～30区　Ⅵ・Ⅶ層包含層掘削。Ｋ30区，Ｌ31区　Ⅸ層包含層掘削。Ｆ28・29区，Ｇ29区　確認トレンチ掘削（旧石器）。Ｂ29～31区，Ｅ～Ｈ29～31区　Ⅶ層包含層掘削。

２月　Ｄ30区，Ｂ～Ｆ31区，Ｈ31区　Ⅸ層掘削。Ｉ30・31区　Ⅵ層包含層掘削。Ｂ～Ｄ28区　確認トレンチ掘削（旧石器）。

３月　遺物洗浄・整理。９日　作業終了。

平成29年度（民活）

５月　Ｇ・Ｈ31～34区，Ｉ・Ｊ31～33区　Ⅴｂ層無遺物層掘削，Ⅵ・Ⅶ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｋ・Ｌ33区　Ⅶ・Ⅷ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｋ・Ｌ32・34～36区，Ｍ32・34・35区先行トレンチ掘削（Ⅸ層）。遺物仕分け。

６月　Ｇ・Ｈ31～34区，Ｉ31～33区　Ⅵ層包含層掘削。Ｊ31～33区　Ⅵ・Ⅶ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｋ・Ｌ33区　Ⅷ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｋ・Ｌ32・34～36区，Ｍ32・34・35区Ⅷ・Ⅸ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｊ35区，Ｋ34～36区，Ｌ34・35区　Ⅷ～Ｘ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。遺物仕分け，遺物洗浄，遺物収納箱作成。

７月　Ｊ35区，Ｋ～Ｍ32・33区　Ⅷ・Ⅸ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｊ33・34区，Ｌ～Ｍ32～34区Ⅸ層包含層掘削・遺構検出及び掘削。Ｋ～Ｍ33区Ⅸ～ⅩⅡ層先行トレンチ掘削・遺構検出及び掘削。遺物収納箱作成，遺物仕分け，遺物洗浄。

８月　Ｋ34～36区，Ｌ34・35区　Ⅷ～Ⅹ層包含層掘削，遺構検出及び掘削。Ｌ・Ｍ33区　Ⅸ～ⅩⅡ層トレンチ掘削，遺構検出及び掘削。遺物収納箱作成，遺物仕分け，遺物洗浄。

９月　遺物収納箱作成，遺物仕分け，遺物洗浄。

10月　遺物収納箱作成，遺物仕分け，遺物洗浄。

11月　Ｆ28・29区，Ｇ27・28区　古墳時代遺構検出及び掘削，遺物収納箱作成，遺物仕分け，遺物洗浄。

12月　Ｆ28・29区，Ｇ27・28区　古墳時代遺構検出及び掘削，遺物収納箱作成，遺物仕分け，遺物洗浄。

１月　26日　Ａ地点調査終了。遺物仕分け。

第４節　整理・報告書作成

Ａ地点に係る整理・報告書作成の基礎整理作業は，平成27年度，平成29年度～令和元年度に実施した。令和元年度～令和２年度には，旧石器時代縄文時代草創期編の報告書作成作業を実施し，令和２年度には，縄文時代早期・前期・古代・中世編の報告書作成作業を実施した。平成27年度は，平成27年５月11日～平成27年１月22日まで，平成29年度は，平成29年４月19日～平成30年３月９日まで，平成30年度は，平成30年５月７日～平成31年２月15日まで，令和元年度は，令和元年５月７日～令和２年２月14日まで作業を実施した。令和２年度は，令和２年５月７日～令和３年２月12日まで作業を実施した。

１　概要

基礎整理作業は，文化財課から委託を受けた埋文調査センターが実施することとなり，大福コンサルタント株式会社へ他遺跡分と合わせて，基礎整理作業の遺物洗浄・注記を部分業務として委託した。

平成29年度

埋文調査センターが基礎整理作業を実施した。遺物洗浄・注記・分類・実測等の業務を実施した。

平成30年度

基礎整理作業を福山中学校跡に新設した埋文調査センター第２整理作業所で行った。また，大福コンサルタント株式会社に集石トレース，石器実測を委託した。

令和元年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムにＡ地点の旧石器時代～縄文時代草創期の報告書作成業務を委託した。

令和２年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムにＡ地点の旧石器時代～縄文時代草創期編の編集作業等の報告書作成業務を委託した。

２　調査体制

平成27年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃　センター長　堂込秀人
調査企画　〃　総務課長兼係長　有村　貢
　　〃　調査課長　八木澤一郎
　　〃　調査第二係長　寺原　徹
作成担当　〃　文化財専門員　岩永勇亮
事務担当　〃　主査　荒瀬勝己
調査の委託
委託先　大福コンサルタント株式会社
　　調査支援員　岩下直樹
　　調査支援員　長濵武史
　　調査支援員　川俣幸次
　　調査支援員　倉本るみ子
委託内容　基礎整理作業（遺物洗浄・注記）

平成29年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃　センター長　前迫亮一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃　調査課長　中原一成
　　〃　調査第三係長　福永修一
作成担当　〃　文化財専門員　岩永勇亮
　　〃　文化財調査員　中村有希
　　〃　文化財調査員　北園和代
　　（平成29年12月～平成30年11月）
事務担当　〃　主査　荒瀬勝己
　　〃　事業推進員　川﨑麻衣

平成30年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃　センター長　前迫亮一
調査企画　〃　総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃　調査課長　中原一成
　　〃　調査第三係長　三垣恵一
作成担当　〃　文化財専門員　山形敏行
　　〃　文化財調査員　中村有希
事務担当　〃　主査　小牧智子
　　〃　事業推進員　塩屋奈諸美

令和元年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃　センター長　中原一成
調査企画　〃　総務課長兼係長　中島　治
　　〃　調査課長　寺原　徹
　　〃　調査第三係長　横手浩二郎
作成担当　〃　文化財専門員　岩永勇亮
　　〃　文化財専門員　山形敏行
事務担当　〃　主査　有川剛弘
　　〃　主事　上園慶子
遺物指導　南山大学人文学部
　　教授　大塚達朗
調査担当
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
　　主任調査支援員　島内浩輔
　　調査支援員　松﨑卓郎
　　調査支援員　坂井靖奈
　　調査支援員　中村耕治
　　調査支援員　礒村康行
　　調査支援員　冨永朋実
委託内容　整理作業及び報告書作成業務
検査　中間検査：令和元年10月18日
　　完成検査：令和２年３月４日（成果物検査）

令和２年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃　センター長　中原一成
調査企画　〃　総務課長兼係長　中島　治
　　〃　調査課長　寺原　徹
　　〃　調査第三係長　黒川忠広
作成担当　〃　文化財専門員　岩永勇亮
　　〃　文化財専門員　肥後弘章
事務担当　〃　主査　有川剛弘
　　〃　主事　上園慶子

調査担当
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
主任調査支援員　松　﨑　卓　郎
調査支援員　中　田　裕　樹
調査支援員　坂　井　靖　奈
調査支援員　本　村　実季子
調査支援員　井　手　基　子
調査支援員　冨　永　朋　実
委託内容　整理作業及び報告書作成業務
検査　中間検査：令和２年10月26日
完成検査：令和３年３月４日（成果物検査）

３　調査の経過（日誌抄より）

基礎整理作業については，日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成27年度

５月　オリエンテーション。遺物洗浄。遺物注記機（ジェットマーカー）による注記作業。土器・石器・礫の一次分類。実測石器の選別。
６月　剥片石器の超音波洗浄機による洗浄。遺物洗浄，ジェットマーカーによる注記作業。遺物分類。
７月　遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業。石器の分類。
８月　遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業。石器の分類。礫の計測。遺物洗浄完了。
９月　ジェットマーカーによる注記作業。土器・石器・鉄滓の分類。重要遺物選別。礫の計測・仕分作業。図面修正。
10月　注記修正。土器・石器・鉄滓の分類。分類石器の整理・収納。礫の計測。青銅製品・鉄製品処理。
11月　注記修正。土器・石器・鉄滓分類。包含層遺物分類。竪穴住居跡内出土遺物分類。石器分類・整理・収納。遺物台帳・礫台帳作成。図面修正。コンテナのチェックリスト作成。
12月　遺物分類。鉄滓・炭化物・顔料梱包材作成及び梱包，礫梱包，遺物台帳作成，写真撮影，収納作業。
１月　遺物台帳作成，台帳パソコン入力，データ確認作業，遺物洗浄，注記，分類作業終了。

平成29年度

４月　遺物洗浄，遺物分類，図面整理。
５月　遺物洗浄，遺物分類，図面整理，集石観察表作成。
６月　遺物洗浄，遺物分類，注記準備，図面整理，集石観察表作成。
７月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石観察表作成。
８月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）。
９月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）。
10月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）。
11月　遺物洗浄，遺物分類，注記，図面整理，集石観察表作成，自然科学分析委託準備（年代測定）。
12月　遺物分類，注記，図面整理，石器実測，自然科学分析委託準備（年代測定）。
１月　遺物分類，注記，図面整理，石器実測，自然科学分析委託準備（年代測定）。
２月　遺物分類，注記，土器接合，鍛造剥片抽出，自然科学分析委託準備（年代測定）。
３月　遺物整理，図面整理。

平成30年度

４月　遺物洗浄，遺物分類。
５月　遺物洗浄，遺物整理，注記，図面チェック。
６月　遺物洗浄，遺物整理，注記。
７月　遺物洗浄，遺物整理，注記，写真整理，石器実測委託準備。
８月　遺物整理，図面整理，石材分類。
９月　遺物整理，接合，注記，台帳チェック。
10月　遺物整理，接合，注記。
11月　遺物整理，接合，注記，遺物搬入。
12月　遺物整理，接合，注記。
１月　遺物整理，接合，注記，図面チェック。
２月　遺物整理，注記，図面チェック。
３月　遺物整理，台帳整理。

令和元年度

５月　準備工，土器分類，土器接合，石器分類，石器接合，旧石器遺構検討，台帳入力。
６月　土器接合，土器拓本・実測，石器接合，旧石器実測遺物検討・実測。旧石器遺構検討。
７月　土器実測，土器拓本，土器分類，土器接合・復元，土器トレース，土器接合，旧石器実測遺物検討・旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト。
８月　土器実測・拓本，土器トレース，土器復元，旧石器実測遺物検討・準備・実測・実測図確認・トレース・旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト。
９月　土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト。
10月　土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース修正，原稿執筆・レイアウト，フローテーション。
11月　土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，

土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，分布図作成・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト，フローテーション。

12月　土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，分布図作成・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト，フローテーション。

１月　土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，分布図作成・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト，収納作業。

２月　土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元・図版作成・原稿執筆・レイアウト，収納作業。

令和２年度

５月　準備工，土器選別・分類，土器注記・接合，土器実測，石器選別・分類，石器実測，フローテーション。

６月　土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器復元，石器選別・分類，石器実測，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆，フローテーション。

７月　土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器復元，石器選別・分類，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆，フローテーション。

８月　土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器復元，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆。

９月　土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆。

10月　土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆，フローテーション。

11月　土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元・色塗り，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，遺物写真撮影，原稿執筆，編集。

12月　土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元・色塗り，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，遺物写真撮影，原稿執筆，編集，入稿・校正。

１月　土器実測，土器拓本，土器接合・復元，石器実測，校正，収納作業。

２月　土器実測，土器拓本，土器接合・復元，石器実測，校正，収納作業。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

川久保遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。遺跡の所在する鹿屋市串良町は，大隅半島南部のほぼ中央に位置し，東側では，東串良町，南側に肝属川を挟んで肝付町，西側は，鹿屋市東原町・旭原町・笠之原町，北東は，立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地と，その間の丘陵，台地及び低地等の地形から形成されている。東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（1,119m）で，中生層の地層からなっている。西側の山地は，北部の霧島火山の山脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白尾岳・荒磯岳等500～600m級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山々から成る山地で，山容は，急峻で深い森林に覆われている。地質は，高隈山周辺に分布する新生代古第３紀の日南層群が基盤をなしている。山地間を埋めるように，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は堆積した後，現在に至るまで大小多くの河川で開折されている。大隅半島中央部の地形は，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面は，ほとんど浸食されずに残った広大な台地で形成されている。一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地等に水源をもつ大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾等に注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また何段かの河岸段丘も認められる。

第２節　歴史的環境

遺跡周辺の主な遺跡について，時代別に紹介する。

旧石器時代

大隅半島の主に曽於地域においては，これまで旧石器時代の遺跡はあまり知られていなかった。しかし近年東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われるようになり，大隅半島の旧石器時代の様相が明らかになりつつある。特に畦原型細石刃核が出土する遺跡が多く見られ，宮崎県から大隅半島にかけての畦原型細石器文化の広がりが確認されるようになってきた。二子塚Ａ遺跡では，Ⅵ層（薩摩火山灰）の下層から黒曜石・チャート・鉄石英等の剥片10点が出土している。天神段遺跡では，ナイフ形石器文化期（２期）と細石器文化期の３文化層が確認されている。礫群及び遺物集中域も数多く検出され，石器製作跡も確認されている。遺物は，ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器及び細石刃核・細石刃等多くの資料が得られている。細石刃核の中には，畦原型細石刃核も見られる。荒園遺跡・次五遺跡・春日堀遺跡では，細石器文化期の遺物が出土しており，畦原型細石刃核を含んでいる。小牧遺跡・見帰遺跡・安楽小牧Ｂ遺跡・宮脇遺跡では，ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃核・スクレイパー・剥片等が出土している。その他に榎崎Ａ遺跡・榎崎Ｂ遺跡・西丸尾遺跡・白水Ｂ遺跡等からは，ナイフ形石器文化期・細石器文化期の遺構や遺物が出土している。

縄文時代

大隅半島においては，縄文時代の遺跡が数多く知られている。特に早期については，その傾向が顕著である。しかし，草創期の遺跡は少なく，最近まで鹿屋市伊敷遺跡・上楠原遺跡・志布志市東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡が知られていたのみであったが，近年見帰遺跡・安楽小牧Ｂ遺跡・大崎町宮脇遺跡等で，草創期の遺物が出土している。早期では，鹿屋市益畑遺跡の竪穴住居跡が知られていたが，志布志市春日堀遺跡・大崎町天神段遺跡・平良上Ｃ遺跡・永吉天神段遺跡・鹿屋市小牧遺跡・牧山遺跡・田原迫ノ上遺跡等で発見が相次いでいる。前期では，牧山遺跡で轟式の埋設土器が特筆される。天神段遺跡では，曽畑式土器に伴う磨製石剣が出土し，西日本最古の石剣であることが判明した。中期の遺跡は少ないが，細山田段遺跡では，200基を超える土坑と深浦式に伴って近畿系の大歳山式・鷹島式，瀬戸内系の船元式等が出土し，広範な交流が窺える。後期では，小牧遺跡において竪穴住居跡と埋設土器・石皿立石等多彩な遺構が検出されている。町田堀遺跡では，中岳Ⅱ式が伴う竪穴住居跡・埋設土器・石斧集積遺構等が出土している。また，２号住居跡からは，橿原文様を施し，朱や漆が塗られた天附型の石刀が出土している。牧山遺跡では，中岳Ⅱ式の埋設土器が出土し，さらに南九州では珍しい石冠も出土している。晩期では，遺構の検出は少ないが，永吉天神段遺跡で竪穴住居跡や落とし穴が検出され，柿木段遺跡で落とし穴・土坑・石斧埋納遺構等が検出されている。

弥生時代

弥生時代においては，中期の遺跡が圧倒的に多く，前期・後期の遺跡は少ない。前期の土器は出土数も少なく天神段遺跡・町田堀遺跡で高橋式の小破片が出土しているのみである。中期前半では，鹿屋市吉ケ崎遺跡で焼失家屋が発見され住居内に約10点の完形土器が残されていた。天神段遺跡では，中期前半の入来式を伴う住居跡が検出されている。中期中頃になると竪穴住居跡等多くの遺構が検出された王子遺跡をはじめとして集落を形成す

る遺跡が増加している。山ノ口式土器を伴う十三塚遺跡・田原迫ノ上遺跡・牧山遺跡・永吉天神段遺跡・荒園遺跡・安良遺跡等で竪穴住居跡が検出されている。田原迫ノ上遺跡では，掘立柱建物や円形周溝・方形周溝も検出される。牧山遺跡では，青銅製の鑿も出土している。永吉天神段遺跡では，円形周溝墓を中心とした土坑墓群・掘立柱建物が検出され，鉄鏃を副葬した土坑墓も検出されている。後期の遺跡はほとんど見られず鹿屋市高付遺跡・鎮守ケ迫遺跡で高付式・松ノ尾式が出土している程度である。

古墳時代

大隅半島は，県内でも有数の古墳地帯で，前方後円墳17基，円墳304基が知られている。また，南九州特有の地下式横穴墓も数多く存在する。集落遺跡では，町田堀遺跡で中津野式を伴う住居跡が検出され，小牧遺跡では東原式を伴う大型の住居跡等が検出されている。永吉天神段遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡等でも竪穴住居跡が検出されている。荒園遺跡では，焼失家屋も見られた。志布志湾沿いには，横瀬古墳・唐仁古墳群・塚崎古墳群等の国指定史跡の高塚古墳や地下式横穴墓が多く存在するが，内陸部に高塚古墳は存在しない。代わって立小野堀遺跡では190基，町田堀遺跡では92基の地下式横穴墓が調査されている。また，立小野堀遺跡では，大型の鈴１個と小型の鈴４個がセットで副葬されている地下式横穴墓が２例検出されている。また，愛媛県の市場南組窯産の初期須恵器の大甕も出土しており５世紀前半の最古段階の地下式横穴墓の可能性も考えられている。町田堀遺跡では，円形周溝や弧状周溝を伴う地下式横穴墓や切り合い関係にある地下式横穴墓が見られる。また，立小野堀遺跡・町田堀遺跡では，墓の造られていない空間で大量の土器破片が出土し，土器破砕を伴う祭祀が行われた可能性も考えられている。

古代

大隅半島では，古代の所産と思われる須恵器や土師器は出土しているが，遺構を伴う遺跡が少ないのが現状である。鹿屋市宮ノ脇遺跡では，青銅製の帯金具（丸鞆）が出土しており，有位者の存在が窺える。肝付町波見西遺跡では，掘立柱建物や土師器の坏や椀がまとまって大量に置かれた遺構が検出されている。肝付町の西山ノ上遺跡では，採集品ではあるが須恵器の風字硯が出土しており識字者がいたことが想定される。永吉天神段遺跡では，掘立柱建物や土坑が検出されている。荒園遺跡では，埋土中に開聞岳起源の紫コラ（ＡＣ874年）を含む片薬研堀が検出されている。春日堀遺跡では，掘立柱建物や竪穴建物・溝状遺構等が検出されている。溝状遺構の最下部からは土器や須恵器が多く出土し埋土中に紫コラを含んでいることが確認されている。天神段遺跡では，掘立柱建物・竪穴状遺構・土坑・炉跡・焼土跡等が検出され，土師器には，墨書土器・刻書土器・焼塩壺が含まれる。

中世・近世

川久保遺跡の北側には，北原城跡があり，その他細山田城跡・霧島城跡にも近接している。城跡で調査が行われている鹿屋市稲村城跡では，土師器・青白磁・備前焼・東播系陶器等が出土している。天神段遺跡では，掘立柱建物跡・溝・古道・鍛冶遺構が検出され，土坑墓も検出されている。１号土坑墓は，青磁椀・白磁皿・青白磁小壺・和鋏・毛抜き・和鏡・銅銭・入れ子状態の滑石製石鍋と鉄製の紡錘車等，豊富な副葬品を有するものである。小牧遺跡では，掘立柱建物跡・竪穴建物・溝状遺構等が検出され，青磁・白磁・土師器・東播系陶器等が出土している。永吉天神段遺跡では，掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・火葬土坑が検出され，青磁・白磁・東播系陶器・滑石製石鍋・銅鏡等が出土している。

〈参考・引用文献〉

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書は，鹿県埋文報，（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは，（公財）鹿県埋文調査センター，（公財）鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書は，公財鹿県埋文調セ報に略することとした。

鹿児島県教育委員会2005「二子塚Ａ遺跡」鹿県埋文報189

（公財）鹿県埋文調査センター2014・2015・2017「天神段遺跡１・２・３・４」公財鹿県埋文調セ報３・６・18・19

（公財）鹿県埋文調査センター2016「荒園遺跡１」公財鹿県埋文調セ報12

（公財）鹿県埋文調査センター2018「見帰遺跡」公財鹿県埋文調セ報23

瀬戸口望1981「東黒土田遺跡」鹿児島考古15号

河口貞徳1982「鎌石橋遺跡」鹿児島考古16号

串良町教育委員会「益畑遺跡」串良町埋文報11

（公財）鹿県埋文調査センター2018「平良上Ｃ遺跡」公財鹿県埋文調セ報11

（公財）鹿県埋文調査センター2015・2016・2017・2018「永吉天神段遺跡１・２・３・４」公財鹿県埋文調セ報８・13・17・22

（公財）鹿県埋文調査センター2016「牧山遺跡１」公財鹿県埋文調セ報14

（公財）鹿県埋文調査センター2015・2016「田原迫之上遺跡１・２」公財鹿県埋文調セ報５・15

（公財）鹿県埋文調査センター2015・2017「町田堀遺跡１・２」公財鹿県埋文調セ報７・20

鹿児島県教育委員会1984「王子遺跡」鹿県埋文報34

鹿児島県教育委員会2010「石縊・十三塚遺跡」鹿県立埋セ報164

鹿屋市教育委員会1984「高付遺跡」鹿屋市埋文報２

（公財）鹿県埋文調査センター2015・2016「田原迫之上遺跡１・２」公財鹿県埋文調セ報５・15

（公財）鹿県埋文調査センター2016「立小野堀遺跡１」公財鹿県埋文調セ報16

鹿屋市教育委員会1986「宮の脇遺跡」鹿屋市埋文報４

高山町教育委員会1986「波見西遺跡」高山町埋文報３

串良町教育委員会1994「稲村城跡」串良町埋文報４

高山町教育委員会1997「高山郷土誌」

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺構台帳番号		遺跡名	所 在 地	地形	時 代	備　　考
1	**203**	**349**	**川久保遺跡**	**鹿屋市串良町細山田川久保**	**河岸段丘**	**旧石器時代，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世**	**本報告書**
2	468	43	遠見ヶ丘遺跡	曽於郡大崎町野方上立小野・曲迫	台地	中世	
3	203	293 294	立小野Ａ・Ｂ遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文時代	
4	203	299	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地		
5	203	296	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生時代	
6	468	6	二子塚Ａ遺跡	曽於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器時代，縄文時代（早・晩），弥生時代，古墳時代	平成11年度本調査
7	468	4	二子塚Ｂ遺跡	曽於郡大崎町持留・野方二子塚	台地	縄文時代，弥生時代	
8	468	22	二子塚Ｃ遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生時代（中・後～終末）	
9	468	18	大佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方大佐土原	山地	弥生時代（中）	
10	468	116	佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方佐土原	台地	縄文時代，古墳時代	
11	468	26	枦山城跡	曽於郡大崎町持留枦山	台地	弥生時代，古墳時代，中世	別称「山ノ城」，推定
12	468	2	川上神社遺跡	曽於郡大崎町持留貫ノ下	山腹段斜面	縄文時代（後）	
13	468	67	持留牧遺跡	曽於郡大崎町持留牧・東尾ノ花	台地	縄文時代，古墳時代	平成９年度農政分布調査
14	468	117	茶ノ木遺跡	曽於郡大崎町持留茶ノ木上	台地	古墳時代	
15	468	52	細山田段遺跡 (京の塚遺跡)	曽於郡大崎町細山田段・茶ノ木	台地	縄文時代（早～晩）	平成25～27年度本調査
16	203	304	細山田段遺跡	鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文時代（後・晩），弥生時代（前），古墳時代	平成８年度農政分布， 平成11年度農政分布で拡大
17	203	325	京の塚古墳	鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	古墳時代	
18	203	351	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文時代，弥生時代	
19	203	292	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞穴	縄文時代	
20	203	334	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
21	203	350	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	旧石器時代，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世	平成27～29年度本調査
22	203	300	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	縄文時代（後・晩），弥生時代（中），古墳時代	平成25～29年度本調査
23	203	352	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳時代	
24	203	344	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉末）	
25	203	329	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
26	203	335	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	203	298	生栗須遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生時代	
28	203	295	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生時代，古墳時代	平成25～29年度本調査
29	203	346	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生時代，古墳時代	
30	203	347	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文時代	
31	203	348	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文時代，弥生時代	
32	203	354	瓜々良蒔遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生時代	平成12年度本調査
33	203	357	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文時代，弥生時代	
34	203	356	枦場遺跡	鹿屋市串良町有里枦場	台地	弥生時代	
35	203	355	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生時代，古墳時代	
36	203	323	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳時代	
37	203	353	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生時代	
38	203	324	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚	台地	古墳時代	
39	482	10	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳時代	
40	468	103	下原遺跡	曽於郡大崎町持留	台地	縄文時代（後），弥生時代，古墳時代	
41	482	29	岩弘上偶善寺跡古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世（室町）	
42	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳時代	



第１図　周辺遺跡位置図

第３節　東九州自動車道関連の遺跡

東九州自動車道については，平成26年度に鹿屋串良ＪＣＴ～加治木ＪＣＴ間が開通している。現在，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間で工事が行われている。この区間では，23遺跡が存在し，平成30年度までに20遺跡で本調査が行われている。ここでは，これらの遺跡の概要を第２～５表にまとめ記載する。詳細は，報告書等を参照して頂きたい。

第２表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表①

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25・30年度に埋文センター調査（隣接地）	H30年度 刊行 Ｒ２年度 隣接地刊行予定	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，敲石
					縄文早期	土坑	石坂式，押型文，下剥峯式，石鏃，磨石，石皿
					縄文前・中期	落とし穴，土坑	
					縄文後・晩期	—	磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石
		縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が２基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	縄文早・後期	土坑，集石	小牧３Ａ，西平式，丸尾式
					弥生中期	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳時代	竪穴建物跡，地下式横穴墓，溝状遺構	笹貫式，鉄鑢，鉄鐸，須恵器
					古代～中世	帯状硬化面，掘立柱建物跡，竪穴建物跡，土坑，土坑墓，柱穴他	土師器，須恵器，青磁，白磁，滑石製石鍋，炭化米塊
					近世	土坑，柱穴	—
		古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。					
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約３m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
5	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	吉田式，妙見・天道ヶ尾式，塞ノ神Ａ式，塞ノ神Ｂ式，苦浜式，耳栓，石鏃，磨石，異形石器
					弥生	—	弥生土器，石包丁
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また，塞ノ神式土器の壺形土器や，耳栓，異形石器，円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。※遺跡ＧＩＳの変更に伴い，遺跡名を「小牧古墳群」から「安楽小牧Ｂ」に変更。					
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，　連穴土坑， 土坑，集石，磨石集積	前平式，加栗山式，吉田式，札ノ元Ⅶ類，石坂式，中原Ⅴ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神Ｂ式，打製・磨製石鏃，石錘，局部磨製石斧
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了		縄文早期	竪穴建物跡，集石，土器集中，連穴土坑，土坑	前平式，加栗山式，吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，石鏃，石匙，磨石，敲石
					縄文中・後期	—	春日式，凹線文系土器
					古墳～古代	—	須恵器
					中世	掘立柱建物跡，杭列状遺構	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見され，遺物では縄文時代早期の土器，石器，石匙，磨石・敲石の他，中・後期の土器，古墳～古代の須恵器，土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 菱田川右岸 標高約５m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				

第３表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表②

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 R２年度 作業中	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神式，打製石鏃，打製・環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，砥石，穿孔円礫
					弥生	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳～飛鳥	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，棒状礫集積遺構	甕（東原式，笹貫式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棒状礫，磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，杭列跡，焼土跡	土師器
					近世	土坑，溝状遺構，古道，遺物集中	陶器，磁器
		縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴建物跡，古墳・飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器等をはじめ，弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					
11	牧ノ上Ｂ	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	平良上Ｃ	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H28年度 刊行	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，埋設土器，チップ集中	吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，平栫式，石鏃，石匙，打製・磨製石斧，扁平打製石斧 ，磨石，石皿，礫石器，石核
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	宮脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石器，石核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，磨石，叩石
					縄文早期	集石，　土坑，土器集中	加栗山式，小牧３Ａ，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，打製石鏃，磨石
					近世	―	薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。					
15	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
16	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H28年度 （第1地点） 刊行 H30年度 R元年度 R２年度 （第2地点） （第3地点） 作業中	旧石器	―	畦原型細石核・細石刃，敲石
					縄文早期	集石，土坑，剥片・チップ集中	前平式，吉田式，加栗山式，下剥峯式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，壺形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿
					弥生中期	竪穴建物跡，土坑	吉ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石
					古墳	竪穴建物跡	成川式，須恵器，砥石
					古代以前	片薬研堀溝状遺構	―
					中世	掘立柱建物跡，　土坑，溝状遺構，帯状硬化面	土師器，東播系須恵器，備前焼，陶器，青磁，華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石，弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					

第４表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表③

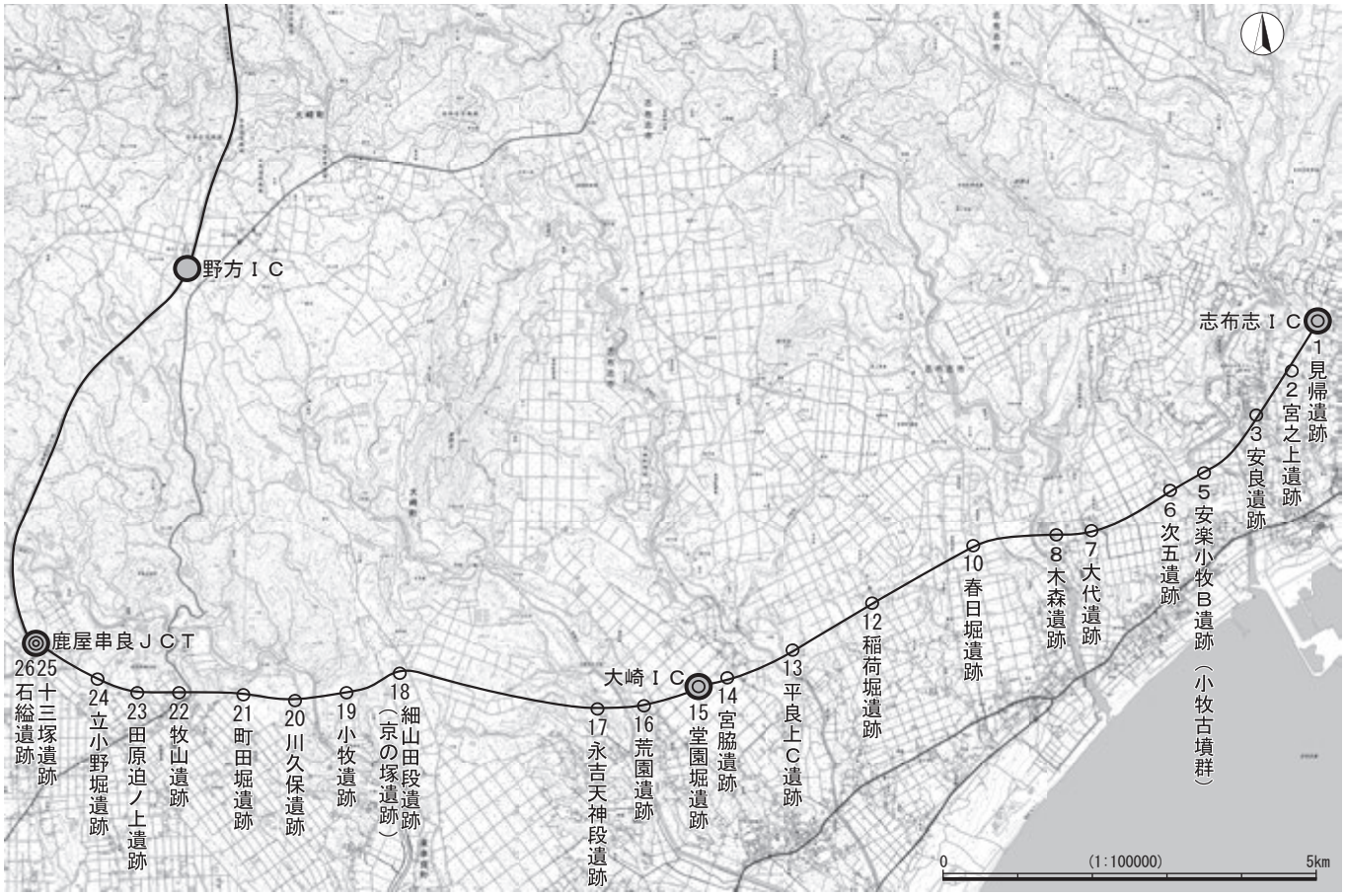
番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
17	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H27年度 (第1地点) 刊行 H28年度 (第2地点1) 刊行 H29年度 (第2地点2) 刊行 H30年度 (第3地点) 刊行 H31年度 (第2地点3) 刊行	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴建物跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥生	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，　土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古墳	竪穴建物跡，土坑	成川式，須恵器
					古代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，土坑墓， 地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼， 湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
18	細山田段	曽於郡 大崎町 西持留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 Ｒ２年度 刊行	縄文早期	集石，埋設土器	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，右京西式，打製石鏃，石匙，磨・敲石，石核
					縄文前期～中期初頭	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核
					縄文後期	土坑	辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，磨・敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					近世以降	溝状遺構・古道	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。					
19	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 Ｒ２年度 作業中	旧石器	—	細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，平栫式，条痕文，石匙，磨石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石
					縄文後期	竪穴建物跡，石皿立石遺構，伏甕，石斧集積遺構，集石，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式，山ノ口式，砥石
					古墳	竪穴建物跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑	土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子，輔羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼
		旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。					

第５表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表④

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 （Ｃ地点） 刊行 Ｒ元年度 Ｒ２年度 （A,B,D地点） (1)(2)刊行 作業中	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，畦原型細石核
					縄文早期	竪穴建物跡，集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石	曽畑式，磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	竪穴建物跡	下城式，山ノ口式
					古墳	竪穴建物跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，道跡	成川式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の鞴の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 刊行 H29年度 (2) 刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平栫式
					縄文後期	竪穴建物跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡	入佐式，山ノ口式，土製勾玉
					古　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，橿原文を施す完全な石刀が出土している。					
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 （Ａ地点1） 刊行 H30年度 Ｒ元年度 Ｒ２年度 （A地点2,B,C,D地点） 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式，条痕文
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，西平式，太郎迫式，三万田式，中岳Ⅱ式，打製・磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，打製・磨製石斧，磨製・打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が１点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。					
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H26年度 (1) 刊行 H27年度 H28年度 (2) 刊行 Ｒ元年度 (3) 作業中 ※H23～24は埋文センター作業	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器碗，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。					

第６表　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡一覧表⑤

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 刊行 Ｒ３年度以降 (2) 作業 ※H24は埋文センター作業	縄文前・中期	―	深浦式
					縄文後期	―	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	―	山ノ口式
					古　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	―
		縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。					
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	―	石坂式
					縄文後期	―	凹線文，市来式，三万田式
					縄文晩期	―	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古　墳	―	成川式
					中世～近世	道路状遺構	洪武通寶（加治木銭）
		弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴建物跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴建物跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。					
26	石縊	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文，鎌石橋式，轟Ａ式，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	―	山ノ口式，須玖式
		縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟Ａ式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。					



第２図　東九州自動車道関連（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定方法，整理・報告書作成作業の方法，遺物・石材の分類基準の概要について述べる。

１　発掘調査の方法

川久保遺跡の発掘調査は，平成26年度～平成30年度の５か年にわたり実施した。調査対象表面積は，27,327㎡，調査対象延面積は，96,403㎡である。Ａ地点は，平成26年度～平成29年度まで発掘調査を実施した。Ａ地点の調査対象表面積は，25,887㎡，調査対象延面積は，70,427㎡である。Ａ地点は，串良川右岸に隣接する笠野原台地の東側縁辺部の河岸段丘に位置し，調査地は，畑地，山林，宅地等に利用されていた。本遺跡の調査区割り（グリッド）は，大隅河川国道事務所の設置した道路建設用センターライン「ＳＴＡ154」と「ＳＴＡ155」を結ぶ延長線を基軸として，西側から東側に向かって１・２・３‥‥，北側から南側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ‥‥とする10ｍ間隔で設定した。グリッドは，主に遺構や遺物の出土位置の管理に用い，基本測量や地形測量，遺物の取上げや遺構のポイント等は，国土座標第Ⅱ系を基準とする座標を用いた。本調査に当たっては，調査区内の雑木や雑草の伐採を行った後，文化財課による試掘調査と埋文センターが実施した確認調査の結果に基づき，重機で表土を除去した。表土掘削後は，10ｍグリッドを設定し，主にⅣ層以下を人力によって掘り下げた。出土した遺物については，必要に応じて出土状況の写真撮影を行った後，トータルステーションで出土位置を記録し，取り上げを実施した。まとまりのある遺物や遺構に伴う遺物については，縮尺10分の１で実測を行った。遺構については，検出状況の写真撮影を実施した後，人力により埋土の掘削を行い，調査の段階に応じて適宜，写真撮影を行った。また，遺構の規模に応じて縮尺10分の１，20分の１で実測を行った。遺物包含層間にあるＶ層やⅧ層等の無遺物層は，重機で除去し，下層の遺物包含層を人力によって掘り下げる作業を繰り返した。なお，今回報告する旧石器時代～縄文時代草創期は，Ⅷ層の薩摩火山灰層より下位のⅨ～ⅩⅢ層に相当する。調査中に生じた掘削土については，調査区に仮置きした他，大隅河川国道事務所から指定された調査区外へ搬出し，調査が終了した調査区については，重機により埋め戻し整地を行った。

２　遺構の認定方法

遺構の認定は，検出面，埋土の状況や色調，規模等を担当者で検討し総合的に判断したうえで行った。遺構の時期の判断は，検出面の層位，埋土の堆積状況や色調，遺構内遺物等を検討して行った。竪穴住居跡は，埋土形状，床面の状況や貼床の有無，焼土域や柱穴の有無，遺物の出土等を総合的に検討し判断した。方形，円形，楕円形等形状が異なるが，検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し区別した。掘立柱建物については，柱痕の有無やピットの間隔，埋土状況等を総合的に検討し判断した。時期は，それぞれのピットから出土する遺物で時期差が見られる場合，それぞれを検討して判断を行った。集石遺構や礫群は，礫の密集度，検出状況，掘り込みや被熱の有無等を総合的に判断して認定した。当遺跡では，礫群と集石遺構の区別について，薩摩火山灰のⅧ層を基準としてⅨ層以下を礫群，Ⅷ層以上を集石として名称を使い分けた。礫群の時期に関しては，検出面や周辺の遺物等を検討したうえで判断した。道路状遺構は，硬化面が筋状に見られる遺構で，硬化面に沿って一部に溝状遺構が伴っていた。時期判断は，遺構内遺物や埋土の状況等を検討して行った。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

Ａ地点では，概ね次のような作業手順により整理作業を進めた。遺物の水洗は，主として発掘作業現場で行った。石器については，超音波洗浄機を使用した。発掘調査現場では，乾燥後，主に土器の注記を実施した。注記後は，遺物カードと共に袋詰めを行い遺物台帳に必要事項を記入した。現場で水洗・注記作業を完了できなかった遺物については，埋文調査センターで実施した。注記作業は，注記用の機械と手作業で実施した。続いて遺物の一次選別を実施したが，遺物の総数が膨大であったため，旧石器時代から縄文時代にかけての遺物を中心に作業を実施した。土器の一次選別では，縄文時代の時期ごとに大きく分類を行った。石器の一次選別では，器種分類と石材の分類を行った。石器の器種分類は，石器，石核，礫に大きく分類した。石器については，剥片石器，剥片，概ね径５㎜以下の小片は，砕片として分類した。礫については，大きさや加工，使用痕の有無，被熱の痕跡等を考慮して分類した。自然礫については，大きさや石材，被熱の痕跡の有無を台帳に記録して廃棄した。石材の分類については，肉眼的特徴による分類を基本とした。二次選別では，一次選別時より遺物の細かな観察に努めた。土器は，型式ごとに細分を行った。石器は，石核，剥片石器，特徴のある剥片，礫石器類の細分を進めた。二次選別完了後は，それぞれの遺物の座標データの整理を実施した。座標は，グリッド配置図に準じた任意座標には変換せず，公共座標を利用した。この座標を基に層ごとの遺物分布図の作成を行った。接合作業は，この分布図の成果を基にして，それぞれの集中域内，次に



第３図　周辺地形及びグリッド配置図

隣接する集中域を中心に実施した。実測遺物の選別では，遺構出土，集中域出土，接合資料，包含層出土遺物の順で行った。遺物量が多いため実測が必要な遺物でも図化されていない遺物が存在する。実測や製図作業は業者に委託し，担当者が確認作業を行った。製図が完了した図面から業者に指示して図版レイアウトを作成した。遺構図，土層図等は，担当者が原図の修正を行い，受託者が製図，レイアウトを実施した。写真については，職員および受託者が撮影・選別し，レイアウトを行った。縄文時代早期・前期・古代・中世に関しては，文章執筆，編集作業を担当者の指導の下で支援調査員が実施した。出土遺物や記録の整理作業は，担当者の指導で受託業者が実施した。

4　土器の分類

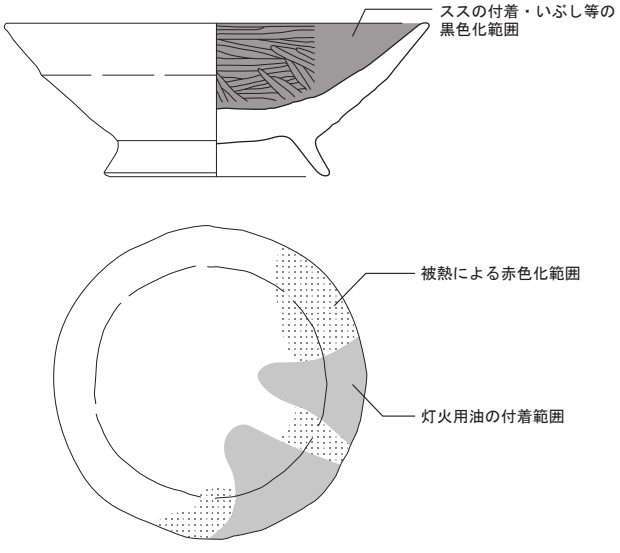
本遺跡ではⅦｂ・Ⅶａ層～Ⅵ層から縄文時代早期の土器群が，Ｖａ層から縄文時代前期の土器群が出土している。縄文土器の分類は以下のとおりである。

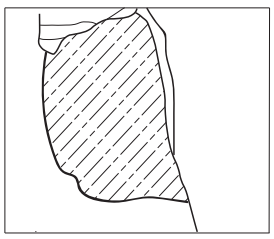
１類土器　岩本式土器
２類土器　前平式土器
３類土器　志風頭式土器
４類土器　加栗山式土器・札ノ元Ⅶ類土器
　　小牧３Ａタイプ
５類土器　吉田式土器
６類土器　石坂式土器
７類土器　下剥峯式土器
８類土器　押型文土器
９類土器　手向山式土器
10 類土器　変形撚糸文土器
11 類土器　塞ノ神Ａ式土器
12 類土器　塞ノ神Ｂ式土器
13 類土器　苫浜式土器
14 類土器　右京西式土器
15 類土器　轟Ａ式土器
16 類土器　西之薗式土器
17 類土器　轟Ｂ式土器
18 類土器　曽畑式土器

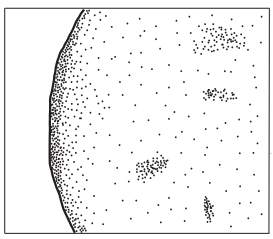
なお，各土器型式は可能な限り細分をおこない，詳細は総括に記載した。掲載遺物番号は，縄文土器は１番から始まり，古代遺構の遺物は 400 番から始まる。石器は頭にＳが付く番号（Ｓ１～）から始まる。遺構内遺物は頭に遺構名が付く番号（土坑１－１等）を付している。

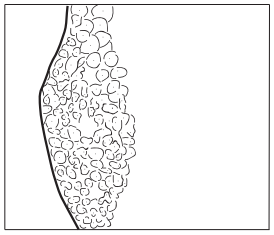
5　石器の分類

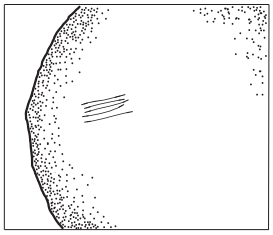
本遺跡では，縄文時代早期に比定されるⅦｂ・Ⅶａ層～Ⅵ層及び縄文時代前期に比定されるＶａ層から，多数の石器類が出土した。石器の分析を行うにあたっては，第７表及び第８表に示した石器分類表及び石材分類表に従って分類を行った。なお，出土した石器の器種及び点数等については，本文中にて報告する。




節理面及び風化の弱い自然面


自然面（礫面）


敲打痕


磨面・研磨面・擦痕

第７表　石器分類表

器種		分類	概　　要
剥片石器	打製石鏃		素材に押圧剥離が施されて三角形状を呈するよう整形された石器。形状の違いにより細分した。
		1	全体の形状が正三角形を呈するもの。
		2	全体の形状が二等辺三角形を呈するもの。
		3	全体の形状が五角形を呈するもの。
		4	柳葉形を呈し，側縁がやや緩やかに曲線を描くもの。
		5	未製品や欠損品。その他。
	磨製石鏃		全面，あるいは部分的に研磨が施されて三角形状を呈するよう整形された石器。
	石槍		両面加工が施された槍先形の石器。
	尖頭状石器		尖頭部が作出されて槍先形を呈するが，二次加工が石槍とは異なる石器。
	石匙		素材に二次加工が施されて刃部及び摘み部が作出された石器。摘み部と刃部の位置関係の違いにより細分した。
		1	縦長を呈するもの。
		2	横長を呈するもの。
		3	その他不明なもの。
	削器		剥片の側縁に，縁辺の長さの二分の一以上に連続的な調整によって刃部を作り出した石器。
	石錐		軸部と摘み状の頭部をもつ石器。
	異形石器		二次加工が施されているものの，用途等が不明な石器。
礫石器	磨製石斧		礫や大型の剥片を素材とし，全面あるいは部分的に研磨が施されて刃部が作出されている石器。
		1	器厚が厚く，重量感がある。刃部が蛤の形態をするものが多い。
		2	形態的には短冊形や撥形等が含まれる。定角式磨製石斧を含む。
		3	細長で鑿形石器と呼称されるタイプのもの。
		4	その他。1～3に当てはまらないもの。
	打製石斧		礫や大型の剥片を素材とし，素材に二次加工が施されて刃部及び着柄のための基部が作出されたもの。
		1	明瞭な抉りを持たず，短冊形（長方形）の器形を呈する。
		2	基部幅が刃部幅より狭い撥形を呈するもの。
		3	不明品，欠損品，その他
	礫器類		礫の一部に打撃を加え，簡単な加工を加えたのみの石器。石斧的なもの，片刃打割器的なもの，掻器的なもの，削器的なものなどがある。
	磨・敲石類		主に円礫を素材とし，素材の一部に磨る・敲く作業によって生じたと思われる磨痕・敲打痕を持つ石器。
	石皿類		大礫を利用し，磨面・凹面を有する石器。磨石とセット関係にあり，木の実を磨り潰したりしたものと考えられる。
	軽石製品		軽石を素材とした石器。穿孔や凹み等加工痕が見られる。

第８表　石材分類表

石材	分類	概　　要
黒曜石	1	光を通し，不純物を大量に含むもの。鹿児島市の三船，大口市の日東，五女木，錦江町の長谷等の原産地資料に類似する。
	2	飴色～黒色を基調とし，不純物をほとんど含まない良質のもの。えびの市の桑ノ木津留，大口市の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似する。
	3	黒色で不純物を全く含まない良質のもの。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類似するが，一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系の物も含まれる。
	4	青灰色で不純物の少ないもの。針尾中町や長崎県佐世保市東浜，淀姫等西北九州の原産地資料に類似するが，原産地不明の一群も含まる。
	5	不純物の少ない黒色の黒曜石。まれに白色の不純物を含む。霧島山系と思われる。
	6	灰～灰白色を基調とする黒曜石で，大分県姫島の原産地資料に類似するもの。
	7	上記以外のその他のもの。
安山岩	1a	黒色を呈し，砂質感が強い。斜長石が殆ど含まれない。西北九州産であると考えられる。
	1b	1aが風化したもの。
	2	斜長石が殆ど含まれず，珪質の光沢が見られる。西北九州産と思われる。
	3a	上牛鼻産と考えられる。斜長石が密に含まれる。黒色もしくは青灰色を呈し，光沢感が強い。風化していない，もしくは，弱い風化が見られる。
	3b	2に類似するが，風化が強い。
	4	上記以外の一般的な安山岩や，その他のもの。
凝灰岩		火山灰や火山砂などが堆積し，凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰角礫岩を含む。
花崗岩		御影石とも呼称。石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。
蛇紋岩等		主に蛇紋石から成り，表面に蛇のような文様が見られるもの。ぬめっとした肌触りを有し，光沢がある。
頁岩	1	風化が顕著で，白色もしくは乳白色を呈するもの。
	2	風化が見られる。層状剥離や白筋が見られるものが多い。
	3	２に類似するが，風化がない，もしくは弱いもの。
	4	漆黒色を呈するもの。粒子が細かい。
	5	風化が全くない。光沢があり，黒色・黄橙色・白色・乳白色・青灰色などを呈する。珪質の頁岩。
	6	粘板岩に類似したもの。薄茶色を呈し剥離が強い。シルト質の頁岩。
	7	硬質頁岩の一種。長石が粒状に多量に含まれるものも含む。青灰～灰白色を呈する。
	8	上記以外のその他のもの。
砂岩	1	粒子の粗いもの。
	2	粒子の細かいもの。
粘板岩		極微小な砂粒（泥粒）が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが，青灰色～茶黄色を呈する。
ホルンフェルス		硬質化が著しく，鉱物が相累なって帯状もしくは斑状をなすもの。ただし，硬質化（もしくは，硅質化）した頁岩は本類に含めず，頁岩に分類した。
めのう系		めのう・玉髄・石英・タンパク石・鉄石英・水晶・石英斑岩などを総称して，本類に含めた。
チャート		珪酸を含み光沢感を有する。

第２節　層序

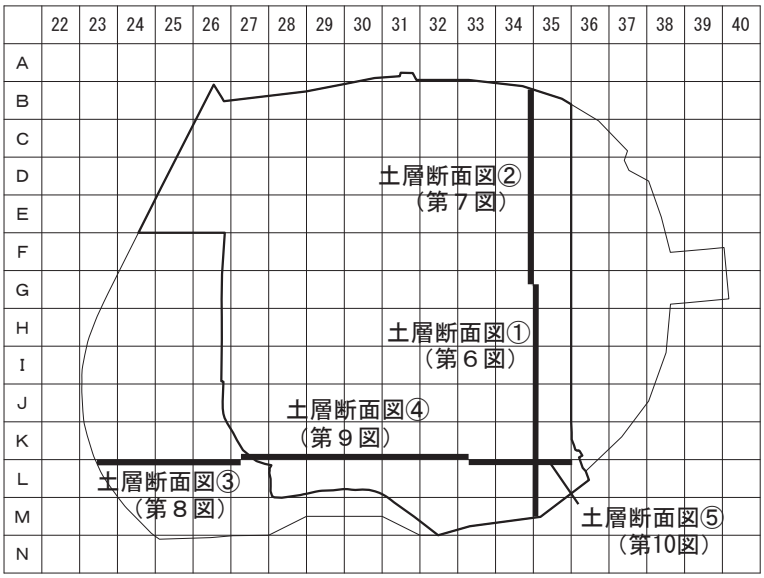
Ａ地点では，後世の宅地や畑地の造成による削平のためＢ～Ｄ地点で確認された基本層序のⅡ・Ⅲ層が認められずⅣ層～ⅩⅣ層までを確認した。Ⅳ層は，主に古墳時代の遺物包含層で，大きくａ・ｂの２層に分層した。Ａ地点西側の谷部では，Ⅳａ層が非常に厚く堆積しており，この部分のみⅣａ層をさらに６層に分層している。Ⅴ層は，アカホヤ火山灰層とアカホヤ火山灰層に挟まれる形で堆積する噴砂シラス層で，アカホヤ関連の層をａ～ｃ，噴砂シラス関連の層をｘ・ｙに分層した。Ⅴ層の堆積状況としては，鬼界カルデラの爆発で幸屋降下軽石のⅤｃ層が堆積し，その後アカホヤ火山灰層のⅤｂ層が降り積もり，直後に液状化が発生してシラスを含んだ砂（噴砂）が下層から噴出している。噴砂は，比重の重い小礫層であるⅤｙ層が沈み，上層にⅤｘ層である砂が堆積している。さらにⅤｂ層が上部に堆積してシラス層を挟んだ状態となっている。その後，アカホヤの二次堆積層であるⅤａ層が堆積する状況であった。Ⅵ・Ⅶ層は縄文時代早期の遺物包含層で，Ⅶ層はａ・ｂの２層に分層されている。Ⅷ層は，桜島起源の薩摩火山灰である。ａは火山灰層で，ｂは軽石が点在する層である。Ⅸ層は，細石器文化期の遺物包含層でａ～ｃの３層に分層している。Ｘ層はナイフ形石器文化期の遺物包含層で，ＸⅠ層は無遺物層である。ⅩⅡ・ⅩⅢ層は，ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。ⅩⅣ層は，無遺物層の二次シラス堆積層である。

層名	色調・土質	層厚（cm）
Ⅰ層	暗褐色土	20～40
Ⅳａ層	明褐色土	20～30
Ⅳｂ層	明黄褐色土	5
Ⅴａ層	淡黄褐色土	10～30
Ⅴｂ層	黄褐色火山灰土	10～30
Ⅴｘ層	灰白色砂	30～120
Ⅴｙ層	黄灰白色砂	10～20
Ⅴｂ層	黄褐色火山灰土	10～20
Ⅴｃ層	黄橙色軽石	5
Ⅵ層	暗褐色土	20～30
Ⅶａ層	黒褐色土	10～30
Ⅶｂ層	黒色土	20～30
Ⅷａ層	淡黄褐色火山灰土	20～40
Ⅷｂ層	淡黄褐色軽石	5
Ⅸａ層	暗褐色粘質土	10
Ⅸｂ層	黒褐色粘質土	20
Ⅸｃ層	暗茶褐色粘質土	5
Ｘ層	にぶい黄褐色粘質土	15
ＸⅠ層	明黄褐色砂質土	10～100
ⅩⅡ層	暗褐色硬質土	30
ⅩⅢ層	黄褐色砂質土	15
ⅩⅣ層	明黄褐色砂質土	100～

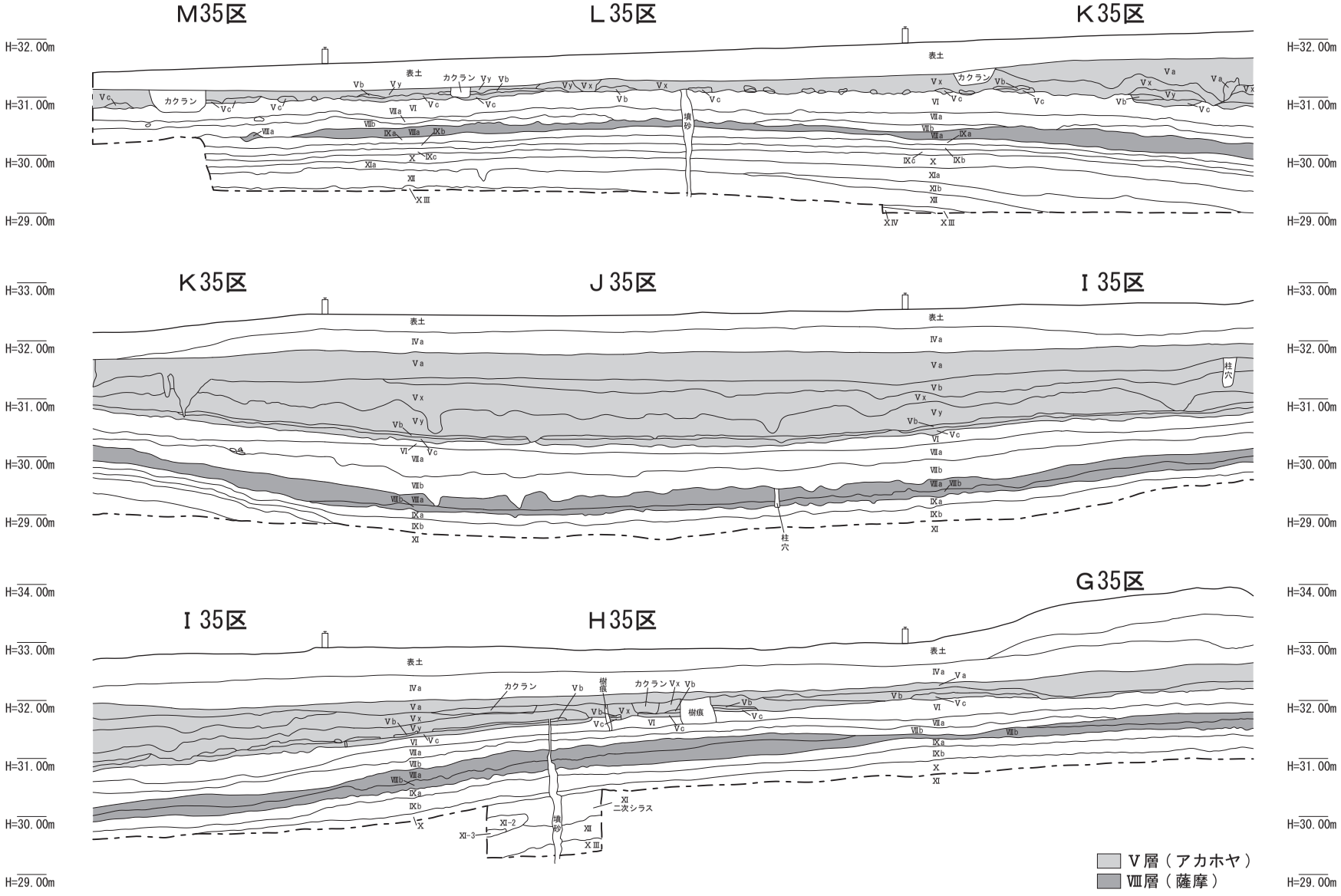
Ⅴ層（アカホヤ）　Ⅷ層（薩摩）

第４図　標準土層図

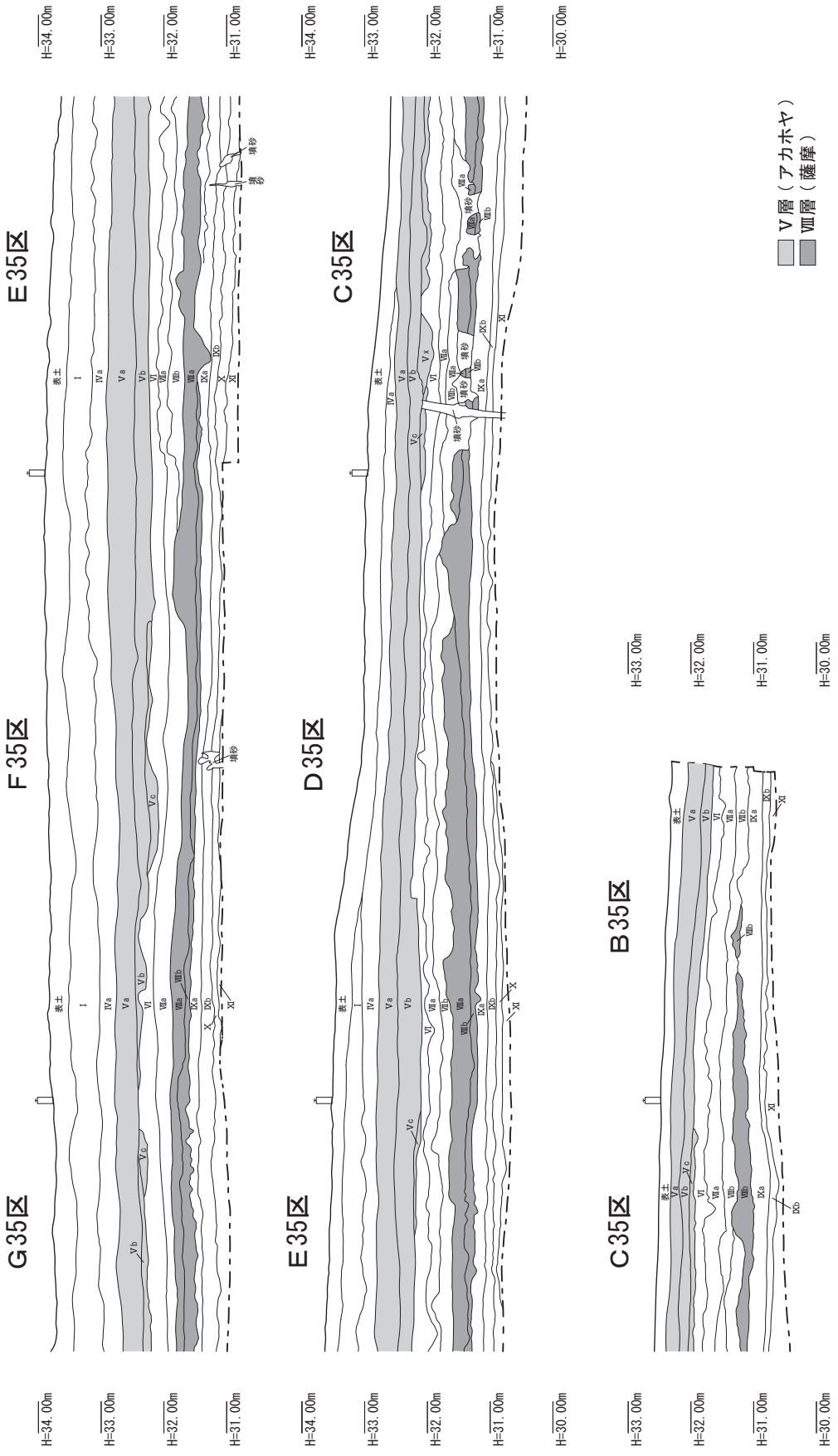
Ⅰ　層：表土である。旧耕作土，造成土を含む。場所により分層できる。
Ⅳａ層：縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層である。
Ⅳｂ層：池田降下軽石を含んだ層である。縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層である。
Ⅴａ層：アカホヤ火山灰を基本とする二次堆積の腐植土である。縄文時代前期の遺物を少量包含する。
Ⅴｂ層：アカホヤ火山灰一次堆積層である。幸屋降下軽石が点在する。無遺物層である。
Ⅴｘ層：噴砂シラスの砂層である。無遺物層である。
Ⅴｙ層：噴砂シラスの小礫層である。噴砂シラスに含まれた小礫が比重により沈んだ層である。無遺物層である。
Ⅴｃ層：幸屋降下軽石層である。ブロック状に堆積している。無遺物層である。
Ⅵ　層：縄文時代早期を主体とする遺物包含層である。
Ⅶａ層：縄文時代早期の遺物包含層である。
Ⅶｂ層：硬質である。縄文時代早期の遺物包含層である。
Ⅷａ層：薩摩火山灰層（Ｐ14）である。無遺物層である。
Ⅷｂ層：薩摩火山灰の軽石が点在する。無遺物層である。
Ⅸａ層：細石器文化期から縄文時代草創期の遺物包含層である。
Ⅸｂ層：細石器文化期から縄文時代草創期の遺物包含層である。
Ⅸｃ層：細石器文化期から縄文時代草創期の遺物包含層である。
Ｘ　層：ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
ＸⅠ層：二次シラスの再堆積層である。
ⅩⅡ層：ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
ⅩⅢ層：ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
ⅩⅣ層：二次シラス堆積層である。無遺物層である。



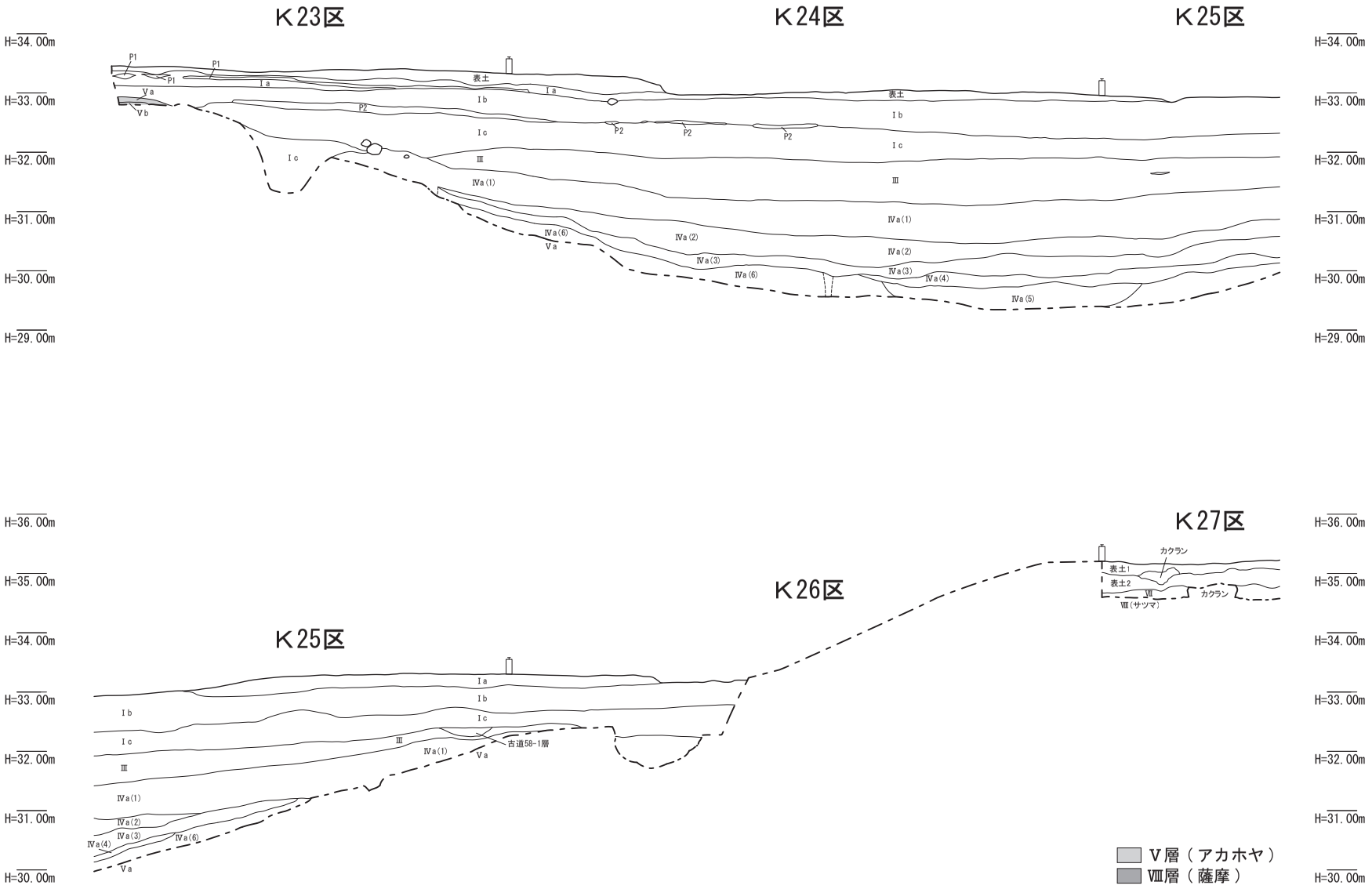
第５図　土層断面図位置図


M35区
L35区
K35区
K35区
J35区
I 35区
I 35区
H35区
G35区
表土
カクラン
樹痕
柱穴
二次シラス
H=32.00m
H=31.00m
H=30.00m
H=29.00m
H=33.00m
H=34.00m
Ⅴ層（アカホヤ）
Ⅷ層（薩摩）

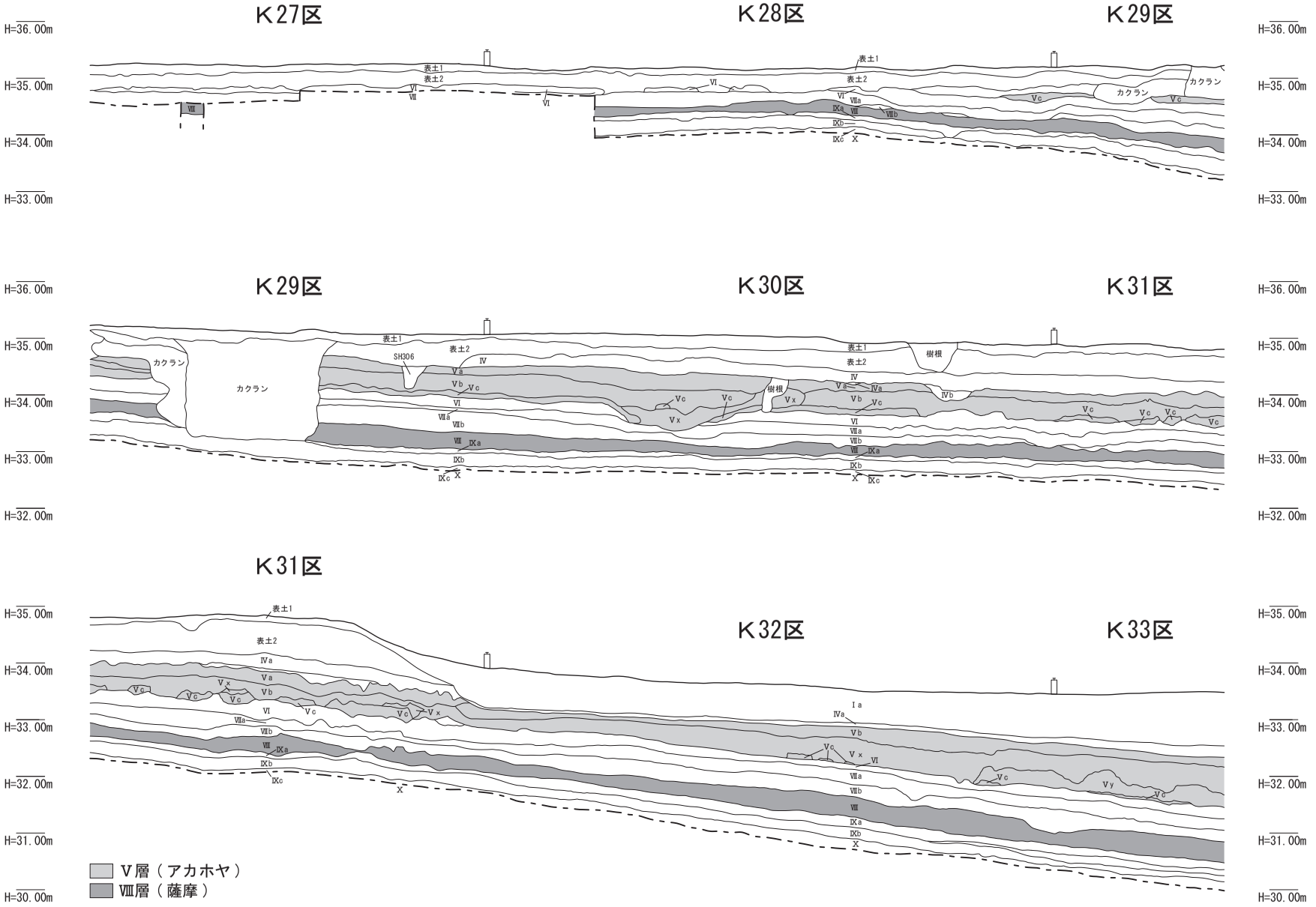
第６図　土層断面図①


G35区
F35区
E35区
D35区
C35区
B35区
H=34.00m
H=33.00m
H=32.00m
H=31.00m
H=30.00m
表土
埋没土
堰砂
Ⅴ層（アカホヤ）
Ⅷ層（薩摩）

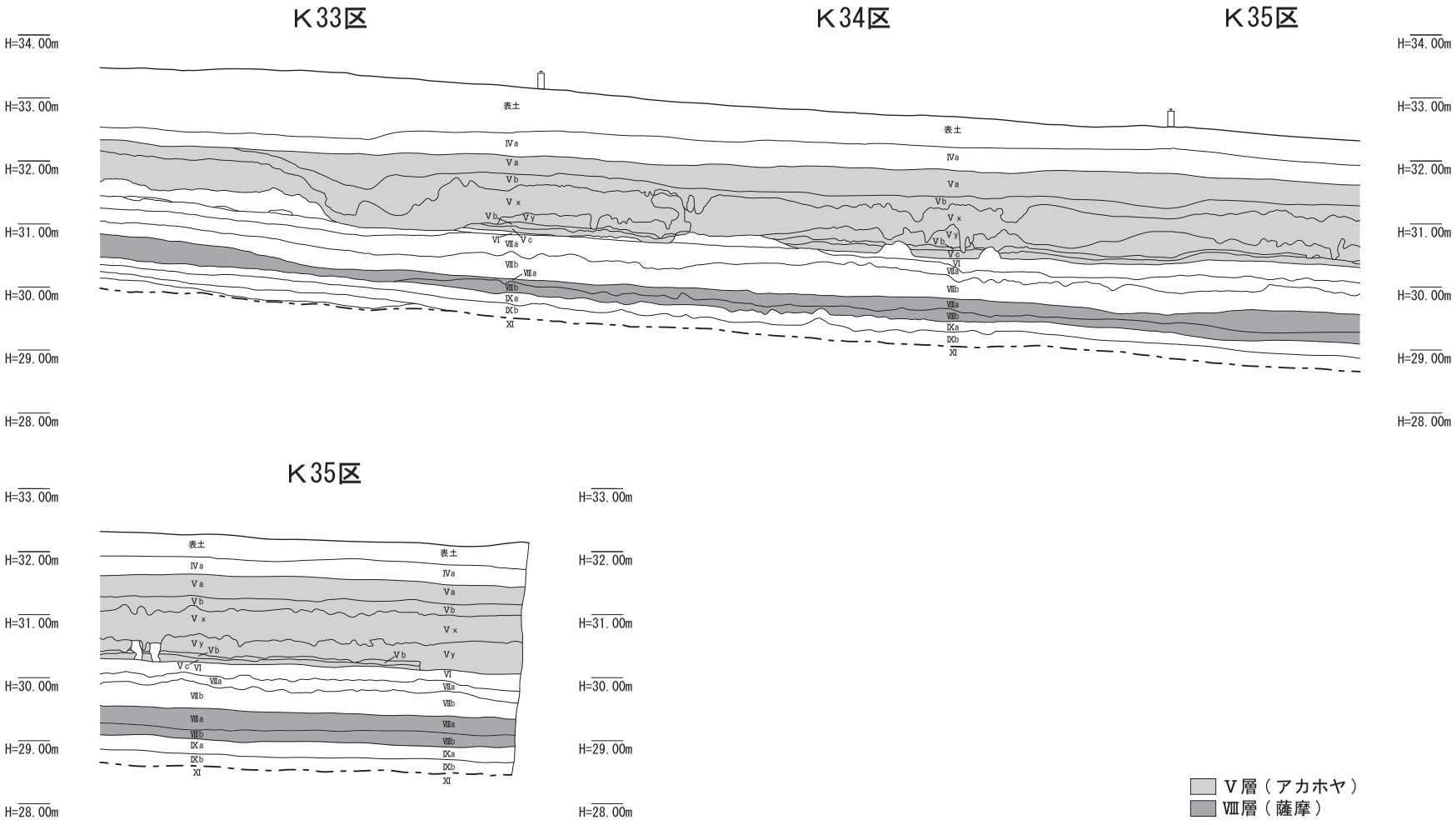
第７図　土層断面図②


K23区
K24区
K25区
K26区
K27区
H=34.00m
H=33.00m
H=32.00m
H=31.00m
H=30.00m
H=29.00m
H=36.00m
H=35.00m
表土
表土1
表土2
カクラン
Ⅶ
Ⅷ(サツマ)
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
Ⅲ
Ⅳa(1)
Ⅳa(2)
Ⅳa(3)
Ⅳa(4)
Ⅳa(5)
Ⅳa(6)
Va
Vb
P1
P2
古道58-1層
V層（アカホヤ）
Ⅷ層（薩摩）

第８図　土層断面図③


K27区
K28区
K29区
K30区
K31区
K32区
K33区
H=36.00m
H=35.00m
H=34.00m
H=33.00m
H=32.00m
H=31.00m
H=30.00m
表土1
表土2
SH306
カクラン
樹根
Ⅴ層（アカホヤ）
Ⅷ層（薩摩）

第９図　土層断面図④


K33区
K34区
K35区
K35区
H=34.00m
H=33.00m
H=32.00m
H=31.00m
H=30.00m
H=29.00m
H=28.00m
表土
Ⅳa
Ⅴa
Ⅴb
Ⅴx
Ⅴy
Ⅴc
Ⅵ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅷa
Ⅷb
Ⅸa
Ⅸb
Ⅺ
Ⅴ層（アカホヤ）
Ⅷ層（薩摩）

第10図　土層断面図⑤

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　縄文時代早期の成果

１　遺構

川久保遺跡Ａ地点ではⅧ層（薩摩火山灰層）とＶ層（アカホヤ火山灰層）に挟まれたⅦ層とⅥ層から縄文時代早期の遺構が検出されている。最も多い遺構としては集石が276基検出されている他，連穴土坑，土坑が検出されている。

（１）縄文時代早期集石

縄文時代早期の集石はⅦ・Ⅵ層から276基検出された。内訳はⅦ層検出が208基，Ⅵ層検出が68基である。基本的には検出された層ごとに遺構を掲載しており，さらに調査時の記録を基に，各層の上位，下位というような分類をおこない掲載をした。各層ごとの掲載順序は，まず土坑を伴うもの，礫の集中が見られる集石で，使用時の原形を保っている可能性が高いもの，さらに構成礫の多い順に掲載している。その他，構成礫石材・構成礫の大きさ等に特徴のあるもの等は別途特徴を記載する。また，集石は基数が多いため，各層の集石の客観的な特徴に関しては，その文末に記載することとする。

Ⅶ層検出集石

Ⅶ層は大きくⅦａ層とⅦｂ層に分層することができる。Ⅶｂ層からは20基，Ⅶａ層からは188基の集石が検出されており，約75％がⅦ層からの検出となっている。

Ⅶｂ層検出集石（第14～19図　集石１～16号）

集石１号から集石16号はⅦｂ層から検出された。分布は調査区の中央から南西側で検出されている。なお，Ⅶｂ層で検出された集石には土坑を伴うものが多い。

集石１号はⅧ層（薩摩火山灰層）に掘り込まれた土坑から検出された集石である。土坑は長軸約1.2m，短軸約１mの長方形を呈している。土坑は南向きの緩斜面に掘られているが，土坑底面は平坦に成形されている。底面からの立ち上がりは北側が緩く立ち上がり，南側は急に立ち上がる。土坑内の礫は約65％が５～10cm大の礫であり，石材はホルンフェルスが約40％と最も多い値となっている。

集石２号から集石８号は全て直径50～60cm大の小型の土坑を伴っている。深さはどれも20cm未満と浅い土坑であるが，集石７号の礫の検出状況から見ると，土坑はさらに上位から掘り込まれていた可能性が考えられる。集石６号の土坑は土坑内埋土がⅦｂ層の土よりもさらに黒色が強かったため，遺構プランが明確に確認できた土坑である。構成礫は集石７・８号を除くと全て土坑内に集中している。構成礫の大きさは全ての集石で５～10cm大の礫が多い値となっているが，集石５・７号は10～15cm大の礫も約５cm未満の小礫で構成されている。

集石３号は土坑の底面中心に20cm大の大型の礫を１個据えた集石である。それ以外にも掘り込み部底面には大きめの礫を平坦面を上にして配置されている状況が確認された。

Ⅶｂ層検出集石の構成礫石材は集石２・４号のように70％以上を安山岩が占めるものもあれば，集石６号のようにホルンフェルス主体のものもある。集石８号は礫の数も少なく，集石と土坑の関係ははっきりしない。集石３号では炭化物を極微量伴い，集石５号では被熱を受けた礫が見られ，炭化物も極微量検出されている。集石６号はほぼ角礫のみで構成された集石であり，被熱を受けた礫は確認されなかった。

集石９号から16号は土坑を伴っていない。

集石11号はやや礫の集中域が不明であるが，その他の集石は礫の集中が見られる。構成礫の大きさは全ての集石で５～10cm大の礫を主体としており，構成礫石材は集石14号がホルンフェルスを主体としていることを除くと全て安山岩主体である。集石９号の礫は被熱を受けたものが確認でき，集石14号では極微量の炭化物が検出されている。

Ⅶｂ層上位検出集石（第20・21図　集石17～20号）

集石17号から20号はⅦｂ層上位で検出された。４基全てが調査区の南端部であるM32区から検出されている。

集石17号から19号は土坑を伴っている。

集石17号は直径90cm弱の土坑を伴い，礫は土坑の中に集中するが，一部の礫は土坑外の東側に散乱する。

集石18号は直径約60cmの土坑を伴い，礫は土坑の中に集中するが，一部の礫は土坑外の南側に散乱する。

集石19号は直径約50cmの土坑を伴い，10～15cm大の礫が土坑の中に集中し，一部の礫は土坑外の北側に散乱する。

集石20号は礫の集中域を持たない。集石17号から20号は全て５～10cm大の礫を主体として構成されている。

Ⅶｂ層検出集石について（第10表）

Ⅶｂ層から検出された集石には土坑を伴うものが11基あり，半数以上の集石に土坑が伴っていることとなる。土坑の直径は１号と17号を除くが50～60cmの土坑となっている。さらにⅦｂ層上位で検出されたM32区の集石17号から19号の３基の集石は，土坑内の礫が一方向に掻き出された様な様相を示し，また隣接するM33区から検出された集石７号も同様に土坑外の礫が北側に散乱する様相が見られた。

集石を構成する石材に関しては，石材を確認した12基の集石のうち，安山岩の割合が７割を超えるものが３基，５割を超えるものが６基，計９基の集石が安山岩を主体，もしくは安山岩の割合が高くなっている状況である。それに対しホルンフェルスが５割を超えるものが１基，ホルンフェルスの割合が安山岩よりも高いものが２基となっている。

集石を構成する礫の大きさに関しては，20基全ての集石で６～10cm大の礫が主体的に利用されていた。

Ⅶａ層検出集石

Ⅶａ層からは185基の集石が検出されている。調査時の所見から，検出面のⅦａ層下位・Ⅶａ層・Ⅶａ層上位に分けて掲載する。なお，川久保遺跡では場所によりⅦａ層の堆積が薄くなっている箇所があったため，検出面が明確ではないものは全てⅦａ層検出としている。

Ⅶａ層下位検出集石（第22～24図　集石21～27号）

集石21号から27号はⅦａ層下位から検出された。分布はほぼ全ての集石が調査区南側に集中するが，集石25号のみ調査区の中心域から検出されている。Ⅶａ層下位から検出された集石には土坑を伴うものは見られない。

集石21号は数は少ないながら礫が集中する集石であり，原形を保っていると考えられる。約90％が10～15cm大の礫である。

集石22号から27号はどれも明確な礫の集中域を持たない集石である。全て５～10cm大の礫を主体としているが，集石24号のみ10～15cm大の礫の割合もやや高くなっている。また集石24号からは土器が３点出土しているが，いずれも細片であり土器型式は不明である。さらに焼土塊も２点出土している。

集石27号には赤化した礫が６個，破砕した礫が３個確認できた。

Ⅶａ層検出集石（第25～82図　集石28～194号）

集石28号から194号はⅦａ層から検出された。分布は調査区の中心から南西の方向にかけて多く分布しているが，Ｃ27区等一部北側にも分布の集中が見られる。

集石28号から47号は土坑を伴っている。土坑の大きさは様々であり（第９表），形状も円形のものの他に，集石28号のように隅丸方形状を呈するものや，集石33号のように楕円形のものも見られる。土坑の大きさは最大のもので集石36号の直径約140cm，最小のもので集石43号の直径約40cmである。

集石28・31号は隅丸方形の土坑を伴い，ともに土坑の立ち上がりが急であり，土坑の深さも約30cm以上と深いという特徴を持つ。礫はともに土坑内に集中し，構成礫の大きさはともに60％近くを5～10cm大の礫を主体としているが，集石28号は大きめの礫も多く見られ，10～15cm大の礫が約20％，15cm以上の礫も見られる。集石31号は5cm以下の礫の割合が約35％と小礫が目立つ集石である。

集石29・30・32・34・35・36・38・40・42・43・44・45・46・47号は円形の土坑を伴う。礫は土坑内に集中するものが多いが，集石44・45・47号のように土坑外に礫が散乱するものもある。

集石29号は円形の土坑を伴う集石の中では最も構成礫数が多く229個の礫から構成されている。礫の大きさは約50％が５～10cm大の礫であるが，それよりも大きな礫も約30％見られる。また被熱した礫も確認できる。第９表で確認できるように，Ⅶａ層検出の土坑を持つ集石のなかでは最も深い掘り込みをもっている。

集石30号は200個の礫から構成されている。石材は安山岩を主体とし，構成礫の大きさは５～10cm大と11～15cm大の礫がほぼ同数となる。さらに21cm以上の大きさの礫が33個と，Ⅶ層・Ⅵ層の縄文時代早期集石の中では最も多い数量になっている。

集石34・35号はほぼ同じ大きさの土坑を伴っている。検出位置は20m程離れているが，構成礫数がほぼ同じであり，構成礫石材の安山岩・ホルンフェルス・砂岩の割合もほぼ同等，礫の大きさも５cm以下の小礫の割合が非常に少なく，11～15cm大の礫の数量が他の集石と比べて多いという非常に似た特徴を持つ集石である。多くの集石の主体を成すのが5～10cm大の礫であるが，集石44号は11～15cm大の礫を主体として作られており，さらに大きい礫の使用も目立つ。

集石40号は20cm以上の大きな礫を含む。

集石45・46号は隣接して検出された。ほぼ同程度の大きさの土坑を伴い，礫は土坑埋土中ではなく，土坑の上部に散乱している状況で検出されている。５cm以下の小礫の割合が大きいのが特徴である。

集石33・37・39・41号は楕円形の土坑を伴う。集石41号を除くどの集石も土坑内での礫の集中がやや散漫な状況が見られる。

集石33号は多くの集石が安山岩を主体としているのに対し，ホルンフェルスが約60％を占める。また，５cm以下の小礫が多いのも特徴である。

集石39号は鬼界カルデラ噴火時の地震に伴い発生した噴砂の影響を受けており，土坑の中心付近から北方向にかけて直線上に一部の礫が紛失している状況が見られる。

集石41号は20cm以上の大きな礫を含む。

集石48号から80号は礫の集中域を持つ。集石48・49・50号は隣接して検出された集石である。平面図では２か所，断面図でも２か所に確実に集石が作られているのが確認できる。集石50号に関しては，図面上でははっきりとはしないが，「集石49号よりも下位で礫の集中が残存

する場所が見られた」とされているため，可能性として集石50号とした。しかしながら，確実な集石としては，集石48・49号の２基である。集石48号と49号には確実な時期差があり，集石48号がより古いことが分かる。集石の周辺に散在する礫もその出土レベルの上下から，下位のものは集石48号，上位のものは49号に付随すると考えられる。しかしながら，周辺の地形は南東方向に緩く傾斜しているため，集石48号に付随すると考えられる周辺の礫は，集石よりもレベルの高い位置に散在していることになる。

集石51号は約半数の礫が，５cm以下の小礫で構成されている。30cm以上の大型の礫も２個確認できるが，東側の大型の礫は出土した位置から，集石とは無関係の可能性が高い。礫の堆積に厚みが見られ，断面図を見ると上下２層に分けることができそうであり，元々あった集石を再利用する形で同じ場所に集石を作った可能性も考えられる。

集石52号は５～10cm大の礫を主体とするが，11～15cm以上の礫も目立つ集石である。北側と西側・東側の一部には15cm程度の礫で縁取りをしている様にも見える。また，配置される礫の底面が非常にきれいに揃っているのも特徴的である。礫自体もまず15cm程度の中型の礫を配置し，その後に隙間やその上に10cm以下の小型の礫を配置している様である。様々な点で丁寧に作成されていることが見てとれる。

集石53号からは石坂式土器が出土している。礫の集中域を持ち，西から東へ緩く傾斜する面に形成されている。175個の礫からなっており，60％以上が５～10cmの礫で構成されているが，11～15cmの礫も20％程度あり，さらに16～20cmの礫も見られる。約半数の礫の石材が安山岩である。

集石56号は５～10cm大の礫と11～15cm大の礫の割合がほぼ同数となる集石であり，16cm以上の大きさの礫の割合も高くなっている。

集石57号からは石坂式土器が出土している。集石57号の検出された地点（ＬM32・33区）は浅い窪地になっており，その窪んだ部分に集石を形成している。構成礫数は90個，構成礫の石材は約90％が安山岩である。

集石63号は構成礫の約90％が安山岩である。南側に礫の無い部分が確認できたが，その部分に関して特筆する特徴は見られなかった。

集石64号は５cm以下の小型の礫を持たない。全て11cm程度以上の礫で構成され，20cm以上の大型の礫も見られる。周辺からは縄文時代早期前半の土器である加栗山式土器や倉園Ｂ式土器が出土している。

集石66号は自然流路の様な傾斜の底の部分の浅い窪地に立地している。構成礫の約90％が安山岩である。また，ほぼ全てを11～15cm程度の中型の礫で構成し，５cm以下の小礫は２点のみである。

集石69号から80号は構成礫数が50個以下の集石である。礫数は少ないが礫自体は集中している。安山岩を主体とする集石が多く，集石78号のように安山岩のみで構成される集石もある。

集石69号は安山岩46％，ホルンフェルス42％と，安山岩とホルンフェルスがほぼ同じ割合で構成されている。

集石70・71号は集石を構成する礫の石材にホルンフェルスを主体として使用している。集石70号は75％，集石71号は約60％の礫がホルンフェルスである。集石71号は東側へ傾斜する斜面に作られており，10cm程度以上の中型の円礫を主体に構成されている。

集石80号は安山岩・ホルンフェルス・砂岩がそれぞれ同じような割合で構成される。

集石81号から194号は礫の集中域を持たない集石である。ほとんどが安山岩を主体とし，礫の大きさは５～10cm大の礫を使用している。

集石81号は250個の礫で構成される。断面図を見ると，南西側にわずかにレベルの違う礫群が確認されることから２基の集石である可能性がある。石材は半数以上が安山岩で構成され，５～10cm大の礫を主体としている。被熱により破砕・赤色化している礫が確認できる。石坂式土器や塞ノ神式土器が出土している。

集石82号は東向きの緩斜面で検出され217個の礫で構成されている。西側に礫が集中しているが，確実な集石の中心は不明である。石材は約70％を安山岩，約80％を５～10cmの大きさの礫で構成する。

集石83号も石材の構成は確認できていないが，礫の大きさは約80％を５～10cm大の礫で構成している。

集石84号は５～10cm大の礫を主体としている。塞ノ神Ｂ式土器が２点出土している。集石内に１点のみ20cm以上の平坦な大型礫が出土しているが石皿や台石ではなく，使用痕等も確認できなかった。

集石86号は123個の礫で構成される。明らかに礫の大きさに差がある２つの集中が見られ，またわずかにではあるがレベル差も確認できることから，２基の集石がある可能性が考えられる。塞ノ神式土器が出土している。

集石88号は調査区南端で検出され，調査区外へ広がる可能性が高い。20cm以上の礫が２個確認でき，やや大きめの礫が目立つ。

集石89号は20cm以上の礫が１個確認できるが，出土レベルが他の礫より低いため，集石85号とは無関係の可能性が高い。

集石92号は西から東へ緩やかに傾斜する斜面に作られている。やや大きめの礫が目立ち，被熱した礫も確認できた。

集石93号でも被熱した礫が確認されている。

集石95・96号からは石坂式土器が出土している。いず

れも安山岩を主体とする集石であり，集石95号はホルンフェルスの割合も30％と高い。集石95号は，東から西へ緩く傾斜する面から検出されている。礫は散在している状況で検出され，構成礫数は82個，75％程度が５～10cmの礫で構成される。集石96号では黒曜石も１点出土している。ほぼ平坦な地形で検出され，周囲の礫も全て集石96号の構成礫と考えられる。構成礫数は75個，80％近くが５～10cmの礫で構成されている。

集石97号からは吉田式土器が出土している。上位の礫と下位の礫にレベル差があるのが気にかかる。構成礫の中には赤化したものや，破砕したものも確認できる。構成礫数は77個，80％以上が５～10cmの礫で構成されている。

集石98号からは前平式土器が出土している。構成礫数は72個，そのうち80％以上が５～10cmの礫で構成されている。

集石99号は構成礫の85％が安山岩であり，安山岩の比率が非常に高い。南側に礫が集中し，わずかに離れて北側に礫が散在しているが，検出レベルからも同じ集石を構成する礫である可能性が高い。

集石105号からは石坂式土器が出土している。ほぼ平坦な地形で検出され，南北方向に礫が散在している。構成礫数は65個，75％程度が５～10cmの礫で構成されている。

集石107号は砂岩の割合が高い。集石に伴う土坑は確認されていないが，断面図を見ると掘り込みの中に集石を作っていた可能性も考えられる。

集石108号は安山岩を主体としている。構成される礫の大きさは５cm以下と，５～10cm大の礫の割合がほぼ同じであり，11～15cm大の礫の数も多い。集石に伴う土坑は確認されていないが，断面図を見ると，集石がすり鉢状になっており，掘り込みの中に作られていた可能性も考えられる。

集石110号はホルンフェルスを主体とする。

集石112号は構成礫の90％が安山岩である。礫の大きさは11～15cm大の礫の割合が多くなっている。集石113号も11～15cm大の礫の割合がやや高くなっており，20cm以上の大型の礫も確認できる。

集石118号からは加栗山式土器が出土している。一見すると南側に礫の集中域があるように見えるが，北から南へ緩く傾斜する下位部分にあたるため，集中域なしとした。構成礫数は52個，そのうち90％近くが５～10cmの礫で構成されている。

集石120・121号からは石坂式土器が出土している。いずれも被熱した礫が確認されている。

集石120号は，ほぼ平坦な地形で検出され，礫は広く散在している。構成礫の中には赤化したものや，破砕したものがわずかではあるが確認できる。構成礫数は51個，90％近くが５～10cmの礫で構成されている。

集石121号も，ほぼ平坦な地形で検出され，一見すると南側に礫の集中域があるように見えるが，それらは小礫の集まりであり，やや大きめの礫はそれほど集中していないため，集中域なしとした。構成礫数は50個，約60％が５～10cmの礫で構成されている。

集石122号からは塞ノ神式土器が出土している。

集石128号はホルンフェルスが主体の集石であり，集石構成礫の73％がホルンフェルスである。被熱した礫が確認され，塞ノ神式土器が出土している。川久保遺跡Ａ地点縄文時代早期集石の大部分が，安山岩を主体とする集石であるが，集石128号はその中で最も安山岩の割合が低い集石である。このようにホルンフェルスを主体とし，安山岩の割合が低い集石は，他に集石33・70・134・202号の計５基の集石があげられる。

集石134号もホルンフェルスの割合が55％と多くなっている集石である。

集石137号では被熱礫が確認されている。

集石140号からは塞ノ神式土器が出土している。塞ノ神式土器はⅥ層を中心に出土する土器であり，流れ込みと考えられる。被熱した礫も確認されている。

集石141号は構成礫の78％が安山岩であり，礫の大きさは５～10cm大と，11～15cm大の礫が同じ程度の割合となっている。被熱した礫も確認されている。

集石142号は安山岩が54％と半数を超えているが，ホルンフェルスの割合も43％と高くなっている。

集石147号は石材の構成は確認されていないが，礫の大きさは５～10cm大と11～15cm大が同数となっている。

集石149・150号は11～15cm大の礫の割合が大きくなっている。

集石151・153・156・162号は被熱礫が確認されている。

集石154・157号は５～10cm大と，11～15cm大の礫の構成比が同程度となっている。

集石164・165・166号はいずれもホルンフェルスの割合が高い集石であり，164号は安山岩と同数，165号はホルンフェルスが安山岩よりも高い比率になっている。

集石167号は被熱礫が確認されている。

集石168・171号は５～10cm大と，11～15cm大の礫の割合が同程度となっている。

集石172号からは石坂式土器が出土しており，被熱礫も確認されている。

集石178・179・181号はいずれもホルンフェルスの割合が高くなっている集石である。

集石183・189・190・194号は被熱礫が確認されている。

集石187号は構成礫の50％が安山岩であるが，ホルンフェルスの割合も43％と高くなっている。

集石190・191号の構成礫は砂岩を主体としている。

Ⅶａ層上位検出集石（第83～87図　集石195～205号）

集石195号から205号は，Ⅶａ層上位で検出された。調査区の中央から北側にかけて検出されており，M33区からは特に集中して検出されている。

集石195・196号は土坑を伴い，隣接して検出された。ともにⅥ層から掘り込まれている。集石の周辺にも散礫が出土しているが，どちらの集石に帰属するかは不明である。ただし，西側に位置する集石195号の構成礫がやや大きめの礫を用いているのが確認できている。集石195号に伴う土坑は，直径約70㎝，深さ約10㎝，集石196号に伴う土坑は，直径約78㎝，深さ約５㎝である。土坑の埋土等に差はなく，新旧関係は確認できなかった。

集石197・198号は礫が集中する集石であり，原形をとどめている可能性が高いと考えられる。ともに５～10㎝大の礫を主体としている。

集石199号から205号は礫が散在し，原形をとどめていない。全て５～10㎝大の礫を主体としている。

集石202号は構成礫の74％をホルンフェルスで構成し，高い比率となっている。

集石203・204号では被熱礫が確認されている。

Ⅶａ層検出集石について（第９～13表）

Ⅶａ層では185基と多数の集石が検出されている。そのため，細分された層ごとや土坑の有無ごとに，集石を見ていくこととする。

Ⅶａ層下位で検出された集石はどれも散礫状態で検出され，唯一礫が集中する集石21号も礫数が９個と，使用時の原形は保っていない可能性が高い。石材を確認できたものは全て安山岩の割合が高く，また大多数の集石が６～10㎝大の礫を主体的に利用していた。

Ⅶａ層で検出された集石のなかで，土坑を伴う集石は20基確認されている。土坑の形状は３種類に大別でき，円形14基，楕円形４基，隅丸方形２基である。石材は安山岩を主体とするものが多いが，集石33号のみはホルンフェルスの割合が多くなっている。構成礫の大きさは６～10㎝大の礫を主体とするものが多いが，円形の土坑を伴う集石30・34・35号の３基に関しては，11～15㎝大の礫が多くなり，また30・35号については21㎝以上の礫の割合も多くなっている。

Ⅶａ層で検出された集石のなかで，土坑を伴わない集石は147基確認されている。９割以上の集石が安山岩を主体，もしくは安山岩の割合が高くなっており，礫の大きさも９割以上の集石が６～10㎝大の礫を主体としている。

Ⅶａ層上位で検出された集石に関しては，石材の割合が分かるものは少ない。構成礫の大きさに関しては６～10㎝大を主体とするものが多い。

Ⅵ層検出集石

Ⅵ層からは71基の集石が検出されている。調査時の所見から，検出面はⅥ層下位・Ⅵ層に分けて掲載する。

Ⅵ層下位検出集石（第88～92図　集石206～212号）

集石206号から212号はⅥ層下位から検出された。分布はほぼ全ての集石が調査区南側に集中している。４基の集石に土坑が伴っていた。

集石206号から209号には土坑が伴っている。

集石206号は216個の礫から構成され，土坑の内外に礫が集中している。礫の分布状況から，土坑の深さは原形をとどめている可能性も考えられる。土坑は円形で，直径約100㎝，深さ約25㎝を測る。礫の石材は半数が安山岩であり，礫の大きさは５～10㎝大の礫を主体としているが，11～15㎝大の礫や，それ以上の大きさの礫も多い。集石の北側には鬼界カルデラ噴火に関連する地震に伴う噴砂孔が確認できるが，遺構への影響は少ないと考えられる。

集石207号は長軸約110㎝，短軸約93㎝，深さ約25㎝の楕円形の土坑を伴っている。礫は土坑内に集中するが，集石の中心部から南側にかけては礫が見られない，または非常に少ない状況である。また，西側の礫は床着状態で検出されているが，北側から東側の礫は床から浮いた状態で検出されているのが特徴である。西側の礫の状況からすると，土坑は検出面よりさらに上から掘り込まれていたと考えられる。集石を構成する礫の大きさは５～10㎝大の礫を主体とするが，11～15㎝大の礫も多い。ただ，集石206号と比較すると16㎝以上の礫は少ない。

集石208号は長軸約85㎝，短軸約70㎝，深さ約８㎝の楕円形の土坑を伴っている。礫は土坑内にほぼ集中するが，集石の北側にも散在している。土坑内の礫は床面よりもわずかに浮いた状態で検出されている。90個の礫で構成され，５～10㎝大の礫を主体としている。

集石209号は土坑を伴う集石としたが，礫は土坑の床面から完全に浮いた状態で検出されており，また礫は散在し数量も少ないため，流れ込みの礫である可能性も高い。

集石210号から212号は土坑を伴わず，Ⅵ層下位で検出されている。集石210号は調査時点では１基の集石として報告されていたが，礫のレベルの違いや，その分布状況から最大で３基の集石である可能性が考えられる。まず中央に円形状の礫の集合が確認できる。その北側には30㎝大の礫を中心に，わずかに低いレベルで礫の集合が確認できる。また，南側にも散礫状態ではあるが，さらに低いレベルで礫の分布が確認できる。

集石211号は76個の礫が散在している。５～10㎝大の礫を主体としている。土器片が２点出土しているが，小片のため詳細は不明である。

集石212号はⅥ層とⅦａ層の境目で検出された集石である。手向山式土器が出土している。集石を構成する礫は，安山岩とホルンフェルスがそれぞれ６：４の割合で構成されている。また，礫の大きさは６～10cm大が75%を占める。

Ⅵ層検出集石（第93～114図　集石213～276号）

集石213号から276号はⅥ層中から検出された。分布は調査区の南側から西側に偏り，北側や東側にはわずかにしか分布しない。２基の集石に土坑が伴っていた。

集石213・214号は土坑を伴っている。集石213号はややいびつな楕円形の土坑を伴い，長軸約90cm，短軸約68cm，深さ約12cmを測る。

集石214号はややいびつではあるが，円形の土坑を伴っている。直径約75cm，深さ約18cmを測る。土坑の立ち上がりは床面から急に立ち上がる形状である。礫の石材は安山岩を主体とし，６～10cm大の礫が最も多いが，11～15cm大の礫が目立つ。

集石215号から233号は，礫の集中域を持つ。集石215・216・217号は隣接して検出された。上面観から３基としたが，検出レベルはほぼ同レベルであり，特に集石216・217号の境界はやや曖昧なため，集石216・217号は１基の集石である可能性も考えられる。集石215号からは塞ノ神式土器が出土している。礫は３基合わせての数ではあるが，石材は安山岩，大きさは６～15cm大の礫を主体としているが，流紋岩の割合も約15%と高くなっている。

集石218・219号も隣接して検出された。断面図を見ると，２つの集石間には明らかに境目が確認できるため，２基の集石である可能性が高い。集石219号は６～10cm大と11～15cm大の礫がほぼ同程度出土しているのが特徴である。遺物としては前平式土器が出土している。

集石220号は深さ約35cmに渡り礫が整然と検出されている。確認した限りでは，明確な掘り込みは確認できなかったが，集石の両端の立ち上がりが，ほぼ垂直であるため，掘り込みがあった可能性が高い。石材はホルンフェルスの割合が安山岩よりも高くなっているという特徴を持つ。

集石221号は，直径約75cmの円の中に礫が集中する。石材は安山岩，６～10cm大の礫を主体としている。

集石222号は南から北へ緩く傾斜する斜面に作られている。北側の礫は斜面の下方へ転がった礫であると考えられる。量的には安山岩が多いが，ホルンフェルスの割合も高い。また，11～15cm大の礫も目立つ。

集石223号は礫の数量こそやや少ないが，集石221号とよく似た特徴を持つ。直径75cmの範囲に礫が集中する集石であり，塞ノ神Ｂ式土器２点が出土しており，石材は安山岩，５～10cm大の礫を主体とする。

集石224号からは炭化物が出土している。

集石225号の石材はホルンフェルスが51%と，半数以上がホルンフェルスで構成されている。

集石228号から233号は，集石の構成礫数が50個以下となっている。全て安山岩で６～10cm大の礫を主体としている。特に集石229・230号は約８割が安山岩である。集石231号では被熱した礫が確認されており，集石233号では炭化物が出土している。

集石234号から276号は礫の集中域を持たない。

集石234号は128個の礫で構成される。ある程度集中している礫と，周辺の散在している礫には明らかにレベル差が見られるため，同一集石を構成していた可能性は低い。Ⅵ層で検出された集石は，ほぼ全ての集石が６～10cm大の礫を主体としている。そのなかで，この集石234号のみが０～５cm大と11～15cm大の礫の割合が高くなっている。このことから見ても，集石234号を構成していた礫以外の礫もカウントしている可能性が高いと考えられ，周辺の散在している礫は集石234号関連の礫ではない可能性が高い。志風頭式土器と石坂式土器が出土している。

集石235号は125個の礫で構成される。明確な集石の中心は不明であるが，礫のレベルから見ると，遺構の南西側の礫のレベルがやや低いため，そこに凹みを作り，集石を作った可能性が考えられる。塞ノ神Ｂ式土器が１点出土している。

集石237号は北西から南東方向に緩く傾斜する斜面に作られている。92個の礫で構成され，安山岩49%，ホルンフェルス43%と，安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ同程度となっている。このように，Ⅵ層中の集石に関しては，Ⅶ層中検出の集石と比較して，ホルンフェルスの割合が高い集石が多くみられる。

集石238号からは，塞ノ神Ｂ式土器が３点出土している。その他にも，明確ではないが塞ノ神式土器と考えられる土器小片が５点出土している。

集石239号は88個の礫で構成され，安山岩45%，ホルンフェルス32%と，安山岩主体とは言えない礫構成比となっている。

集石240号を構成する礫は広く散在している。被熱した礫が確認されている。

集石242号は73個の礫で構成され，安山岩40%，ホルンフェルス38%と，その割合は同程度となっている。

集石243号は構成礫の81%が安山岩であり，主体を成している。集石245号も同様に安山岩を主体としている。このように，安山岩の割合が８割前後の，安山岩を主体とする集石もⅦ層に引き続き確認できる。集石243号からは，塞ノ神Ｂ式土器が出土している。

集石246号は安山岩48%，ホルンフェルス37%と，ホルンフェルスの割合も高い。塞ノ神Ｂ式土器が出土して

いる。

集石249号は安山岩を主体としている。遺物としては，塞ノ神Ｂ式土器が出土している。また集石の周辺からも塞ノ神Ｂ式土器が多く出土している。

集石251号から276号は構成礫数が50個未満となっている。

集石251号は安山岩71％と，安山岩を主体としているが，砂岩の割合が18％と，安山岩に次ぐ割合になっている。被熱した礫が確認されている。

集石252号は安山岩43％，ホルンフェルス41％と，安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ同程度となっている。

集石254号はホルンフェルスが58％と高い割合となっている。礫は散在し，赤化した礫や破砕した礫が検出された。塞ノ神Ｂ式土器が出土している。

集石255号は安山岩を主体としている。集石255・256号からは塞ノ神Ｂ式土器が出土している。

集石258号は安山岩44％，ホルンフェルス38％と，安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ同程度となっている。塞ノ神Ｂ式土器が出土している。

集石260・261号は安山岩を主体としている。集石261号は地層横転部分で検出されている。ここで確認された地層横転は，その検出状況からⅤ層からⅧ層で起こっているため，少なくとも縄文時代前期以降に起こったと考えられる。集石261号はその横転のⅥ層部分から検出されており，地層横転の影響を受けたにしては礫の出土状況は整然としている。

集石264号は安山岩48％，ホルンフェルス52％と，ホルンフェルスの割合が安山岩よりもわずかに高くなっている。塞ノ神Ｂ式土器が14点出土している。その他にも明確ではないが，塞ノ神式と考えられる土器小片６点が出土している。

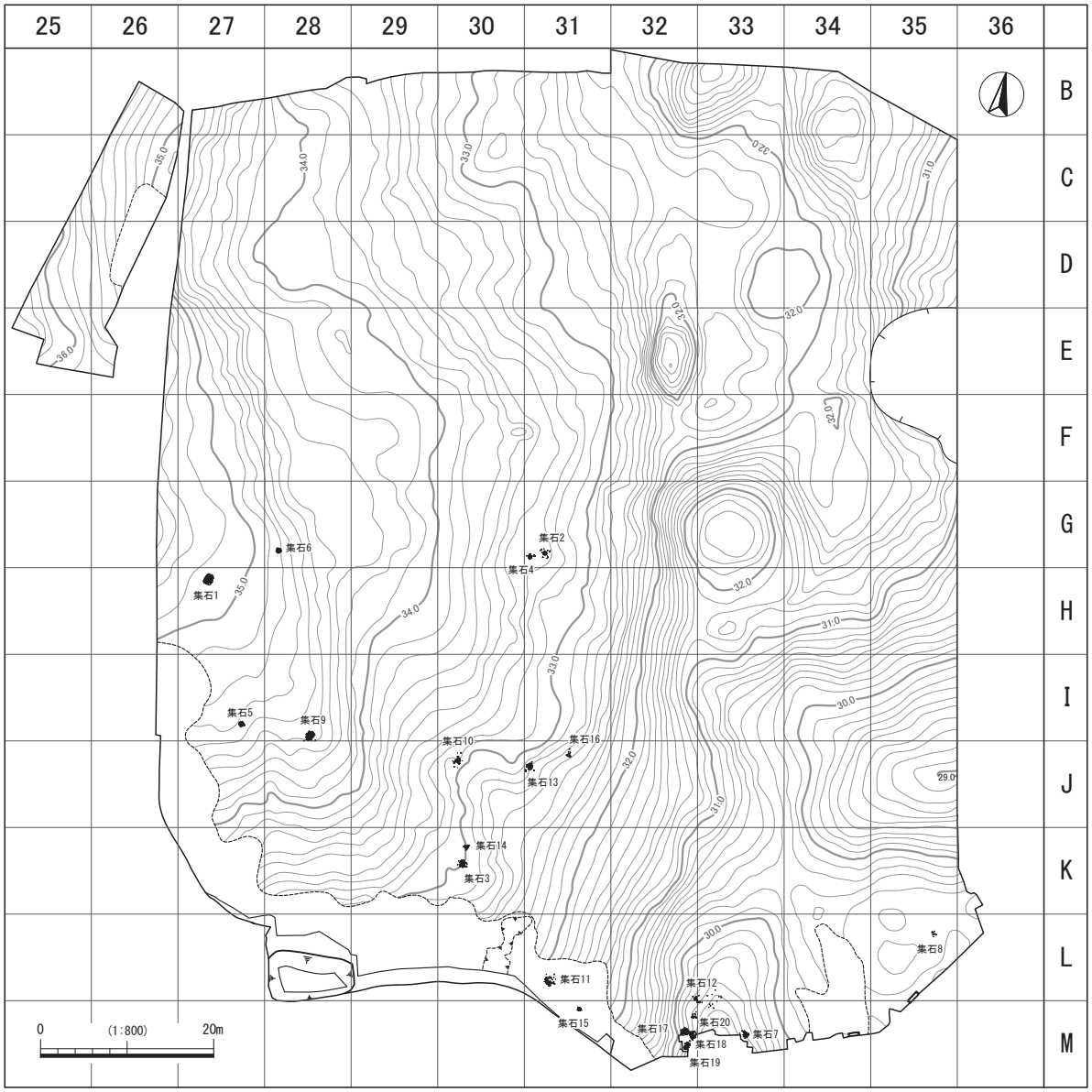
集石265号もホルンフェルスの割合が安山岩よりも高くなっている。被熱した礫も確認された。

集石266号からは塞ノ神Ｂ式土器が出土した。

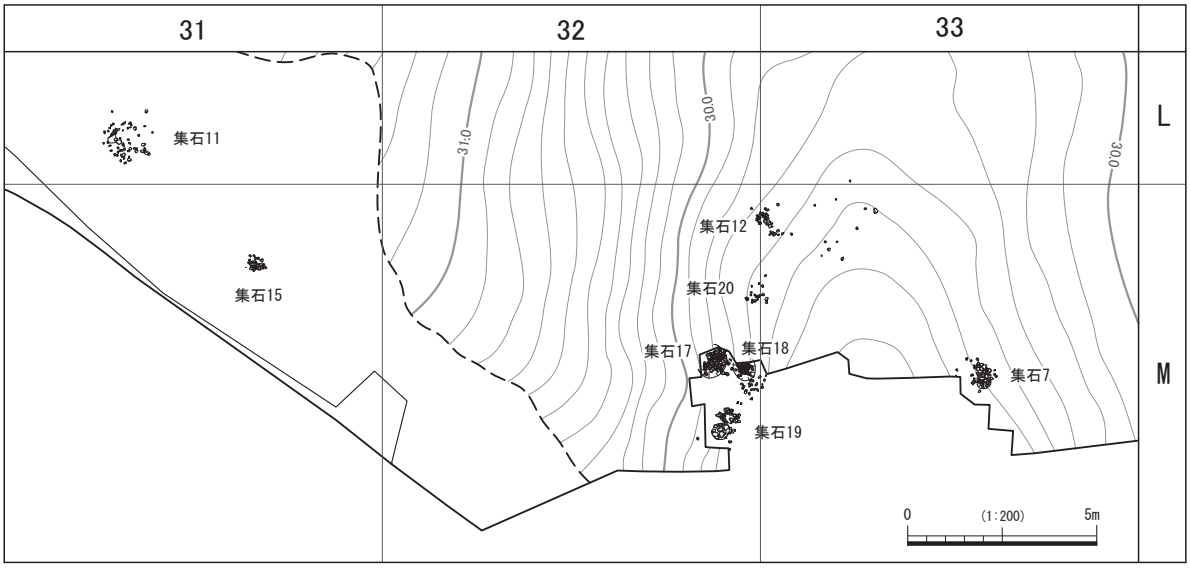
集石269・273・274・276号では被熱した礫が確認されており，集石270号からは炭化物が出土している。

Ⅵ層検出集石について（第13・14表）

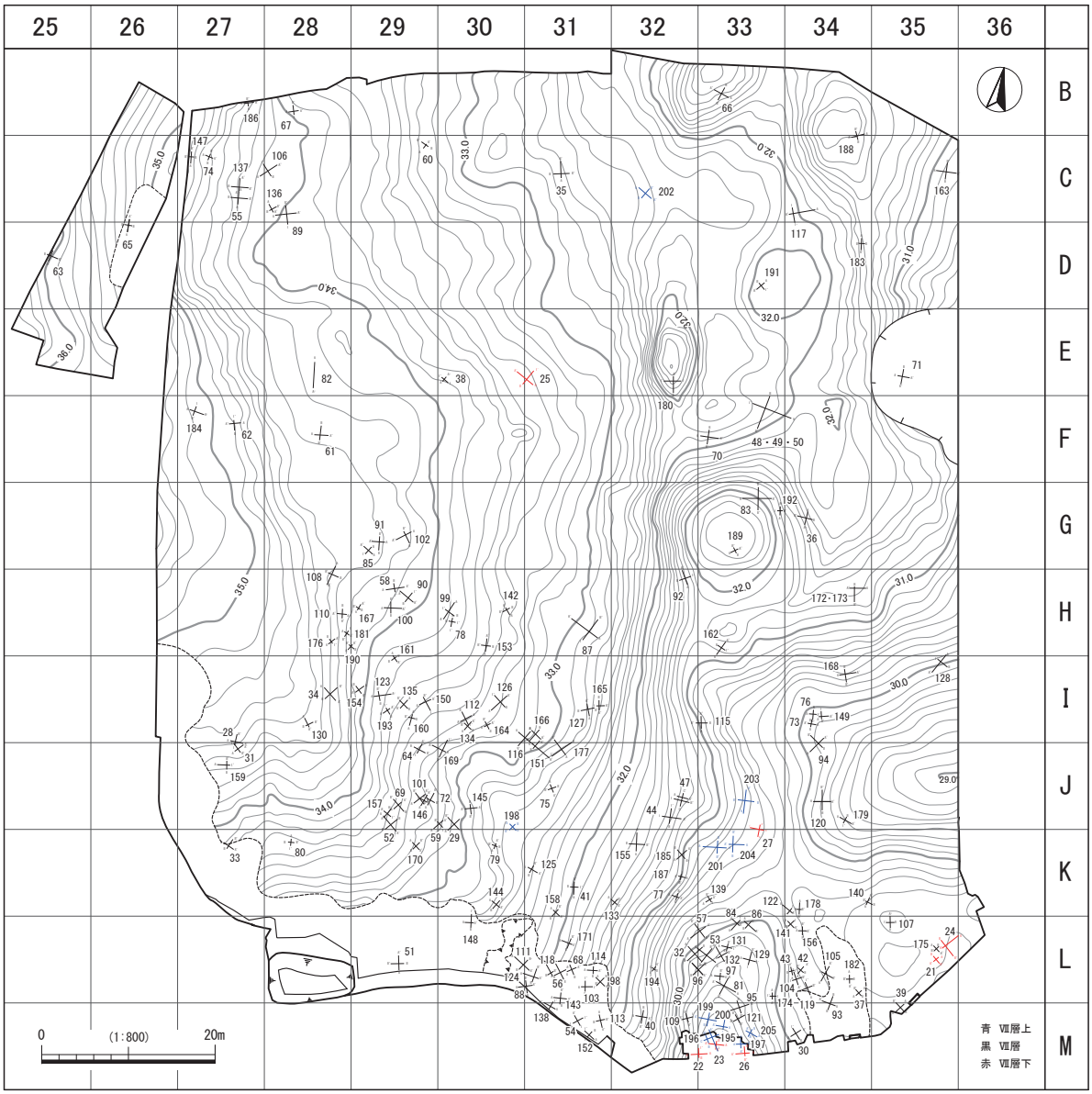
Ⅵ層で検出した集石の多くから塞ノ神Ｂ式土器が出土している。土坑を伴う集石の割合はⅦ層と比較すると少なくなっている。礫の大きさに関してはⅦ層から引き続き，６～10㎝大の礫を主体とするものがほとんどであるが，集石を構成する礫の石材に関しては，安山岩を７割以上使用するような集石の割合が減り，ホルンフェルスの割合が高くなるもの，または安山岩とホルンフェルスの割合が近くなるものが多くなる傾向が見られた。



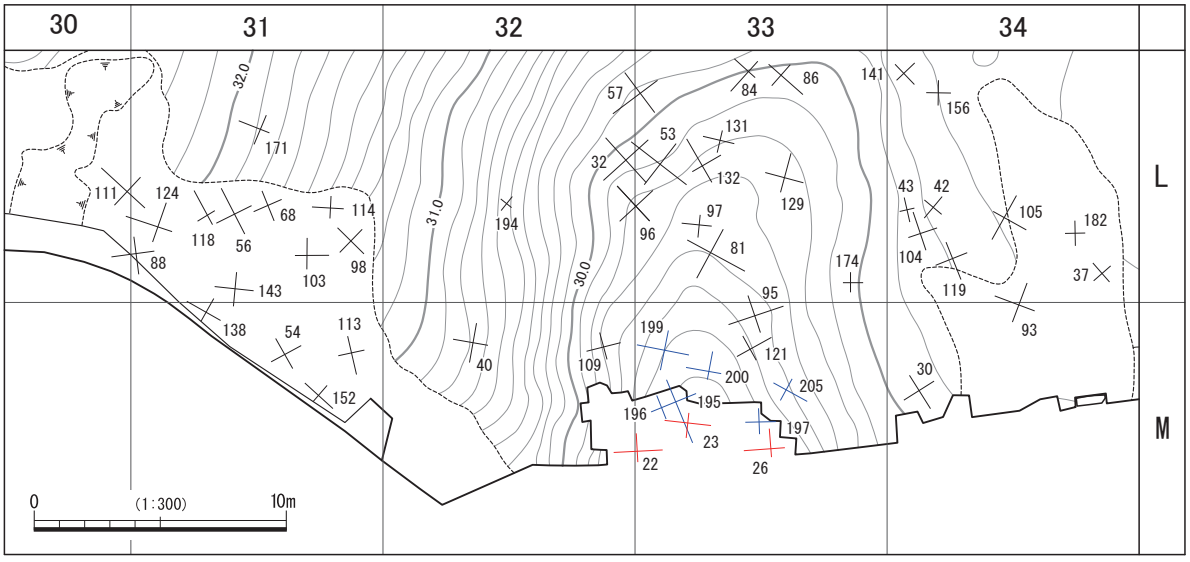
Ⅷ層上面コンタ図



第11図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石配置図



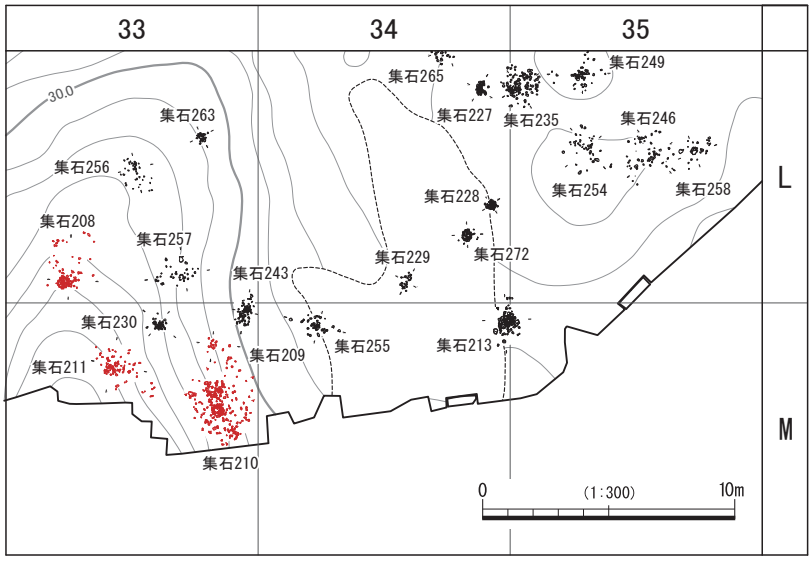
Ⅷ層上面コンタ図



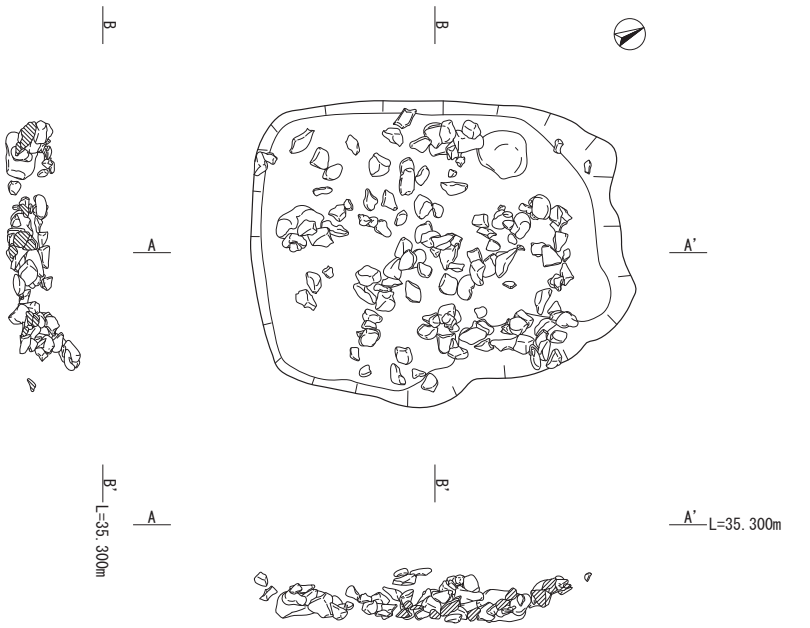
第12図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石配置図



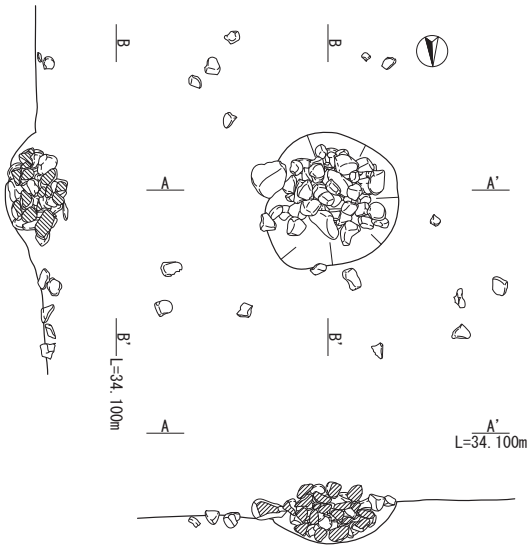
Ⅷ層コンタ図



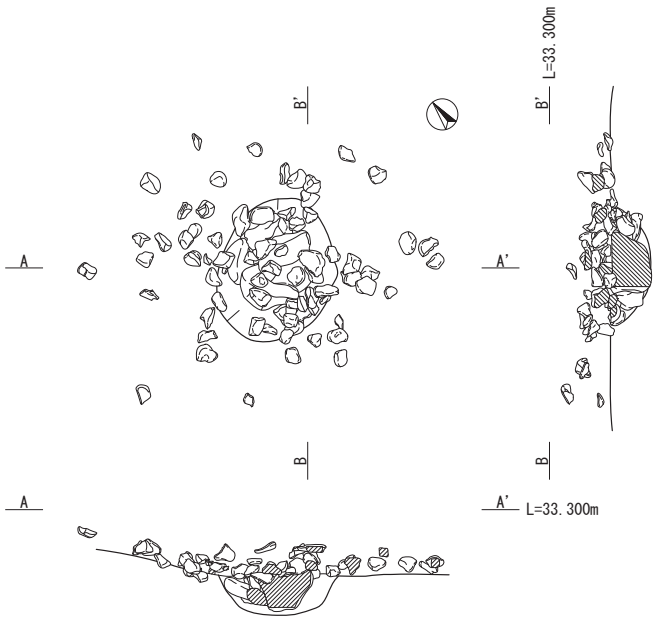
第13図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石配置図



集石１号



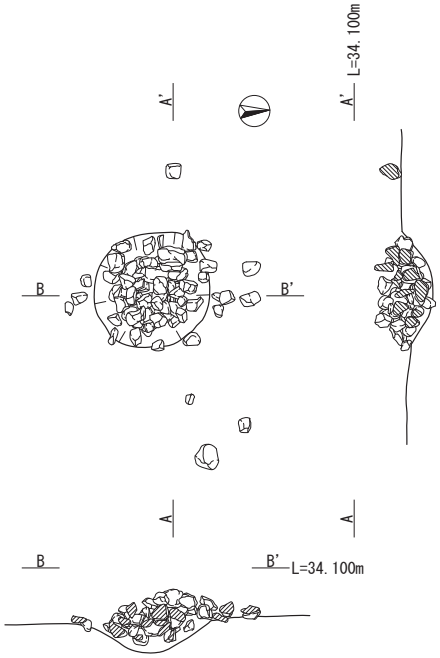
集石２号



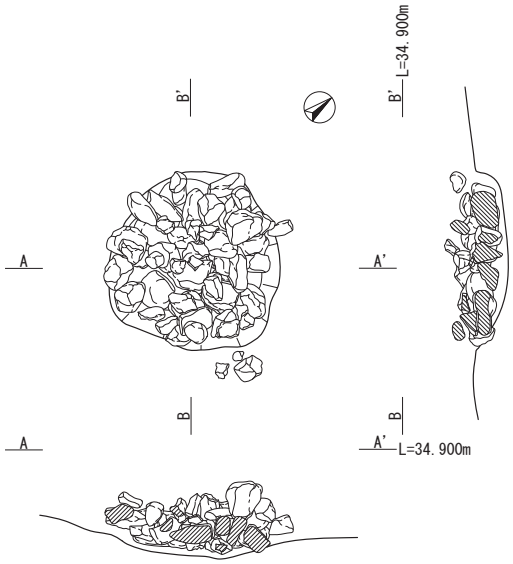
集石３号



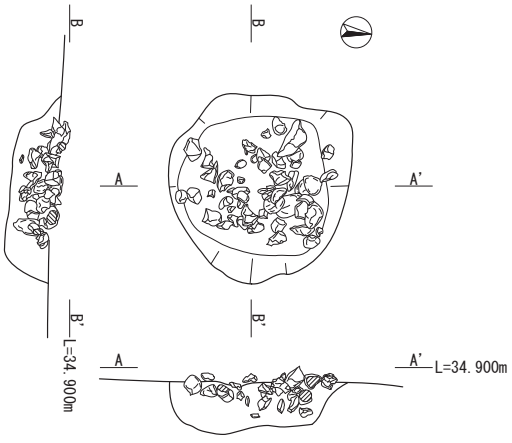
第14図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石１



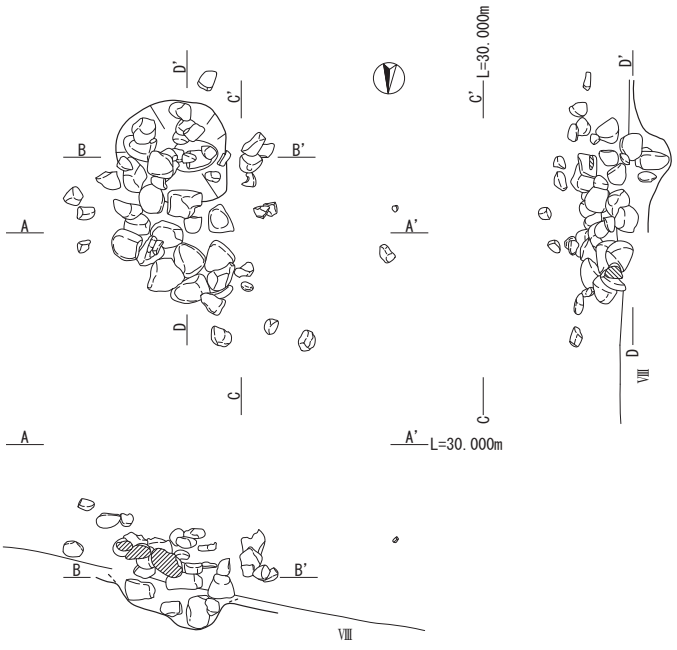
集石４号



集石５号



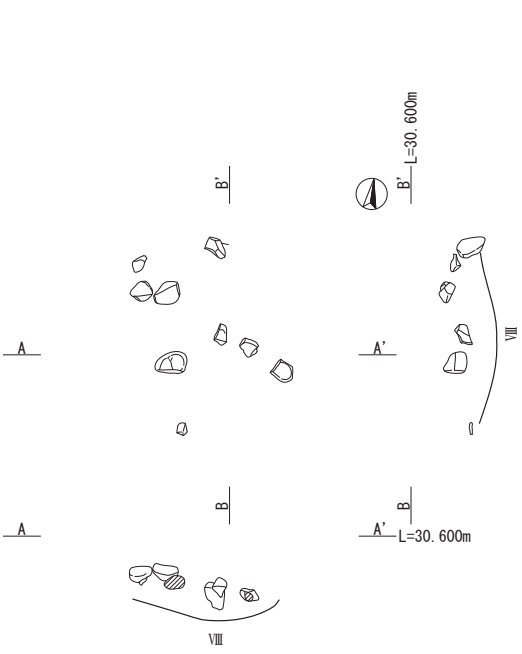
集石６号



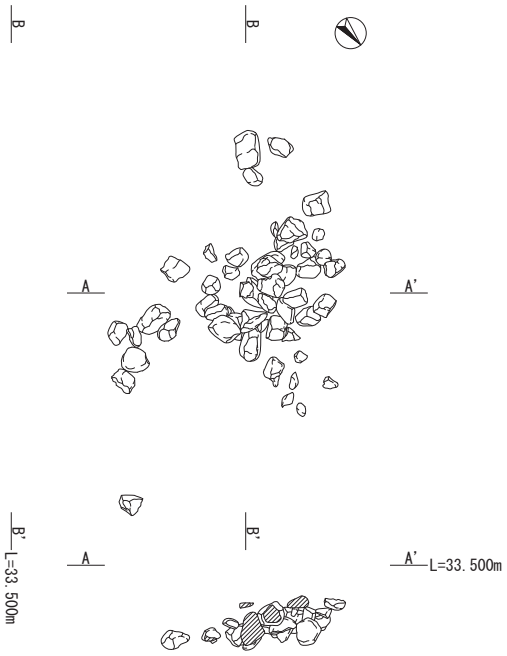
集石７号



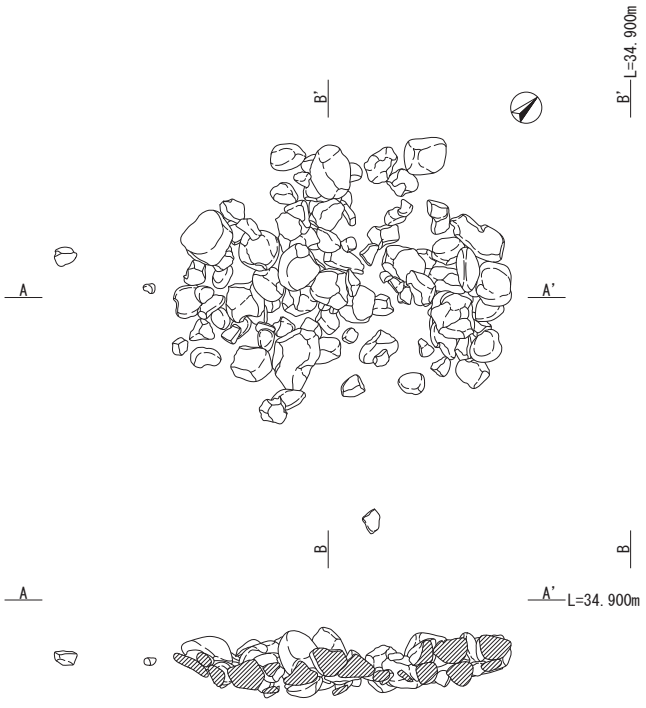
第15図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石２



集石８号



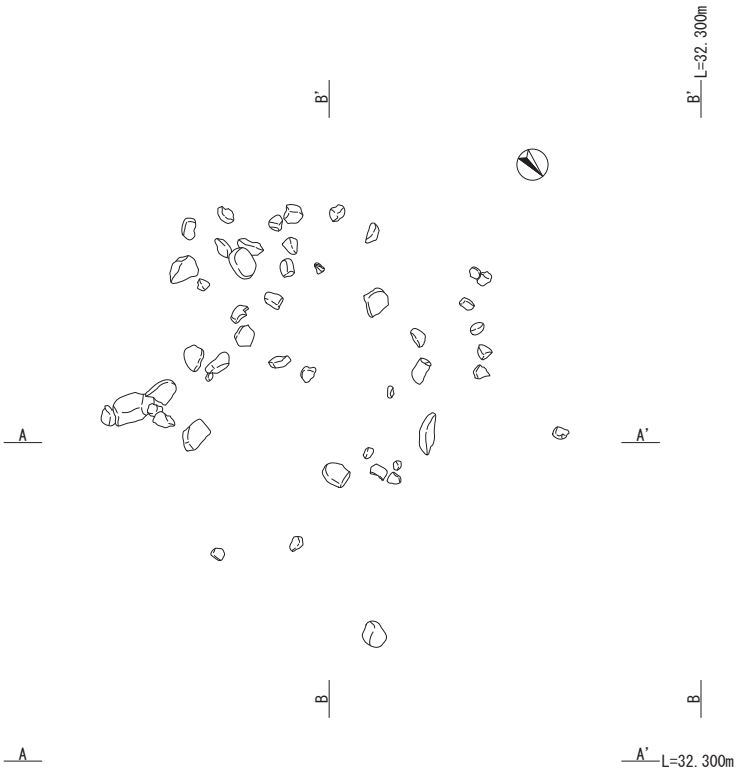
集石10号



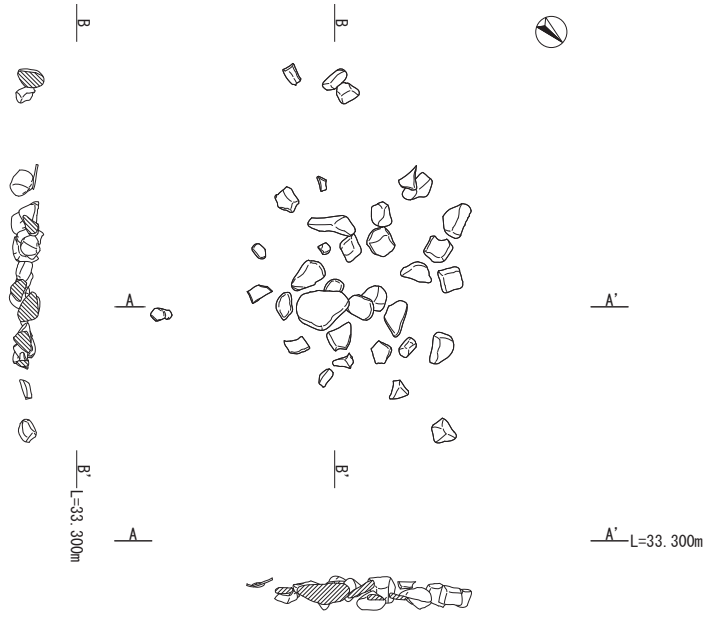
集石９号



第16図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石３



集石11号



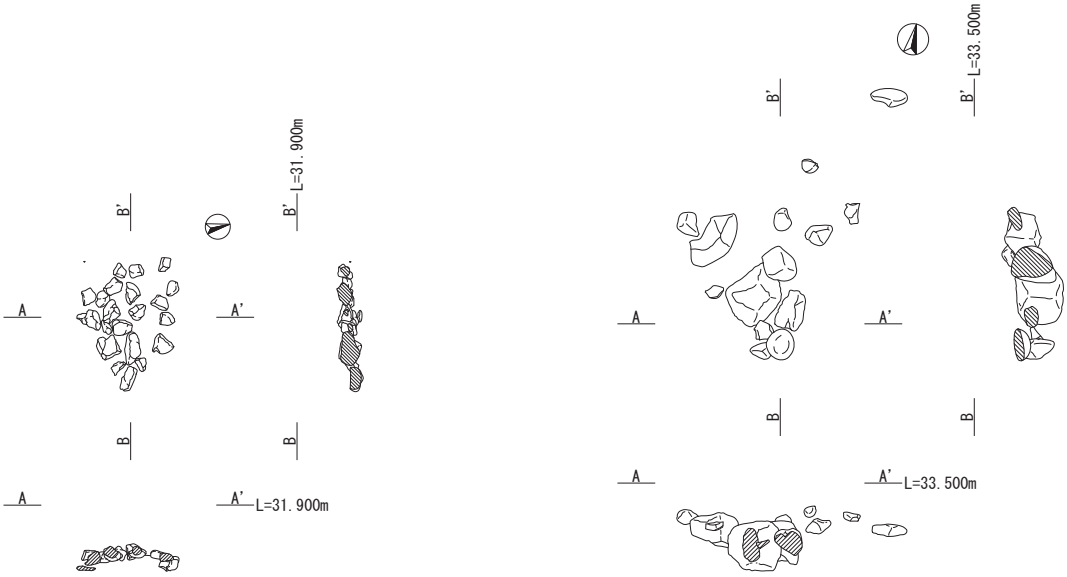
集石13号

0 1m

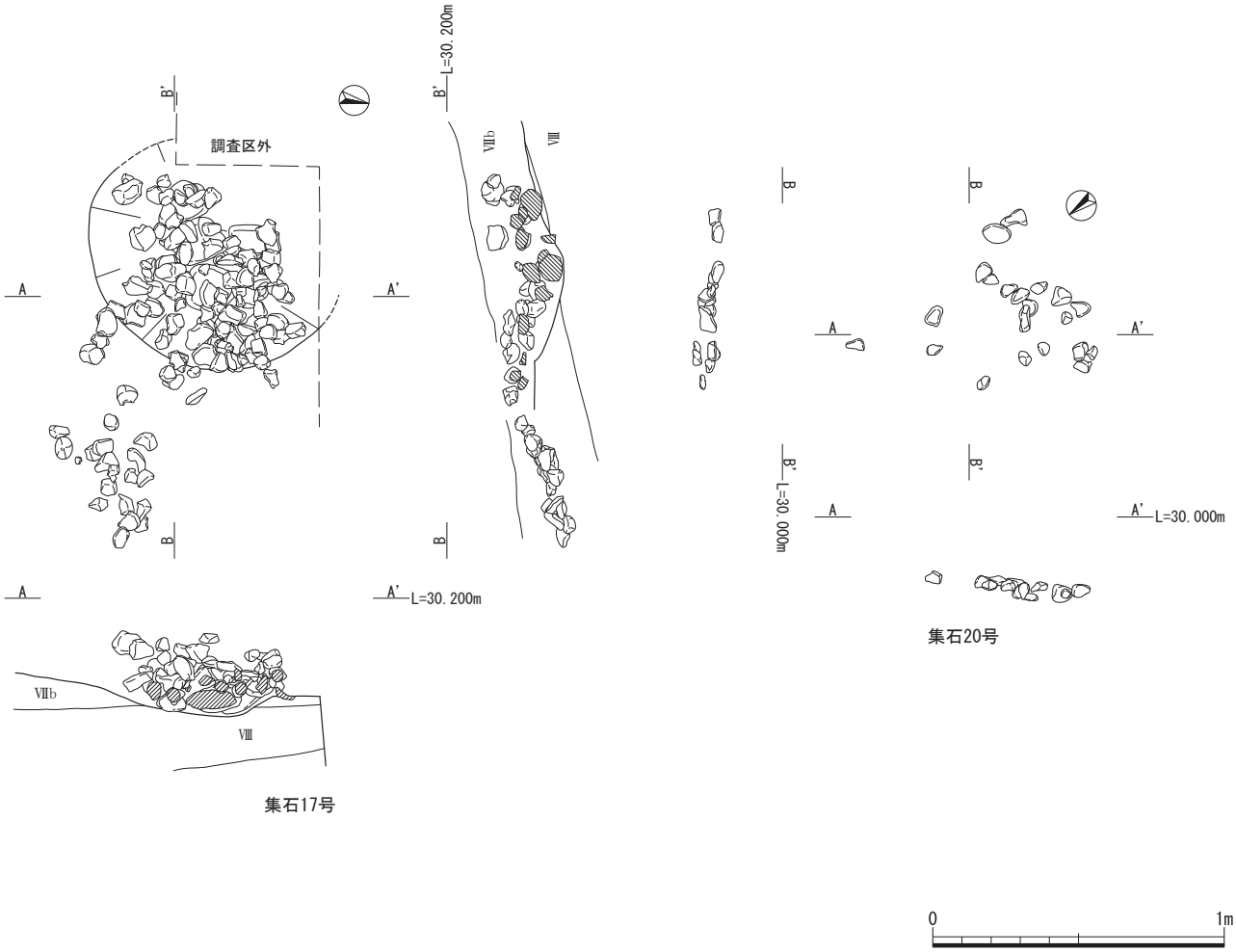
第17図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石４



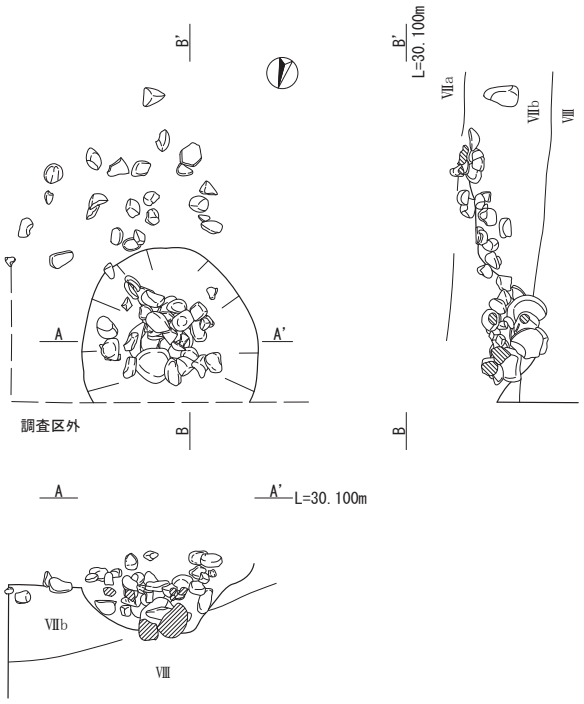
第18図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石５



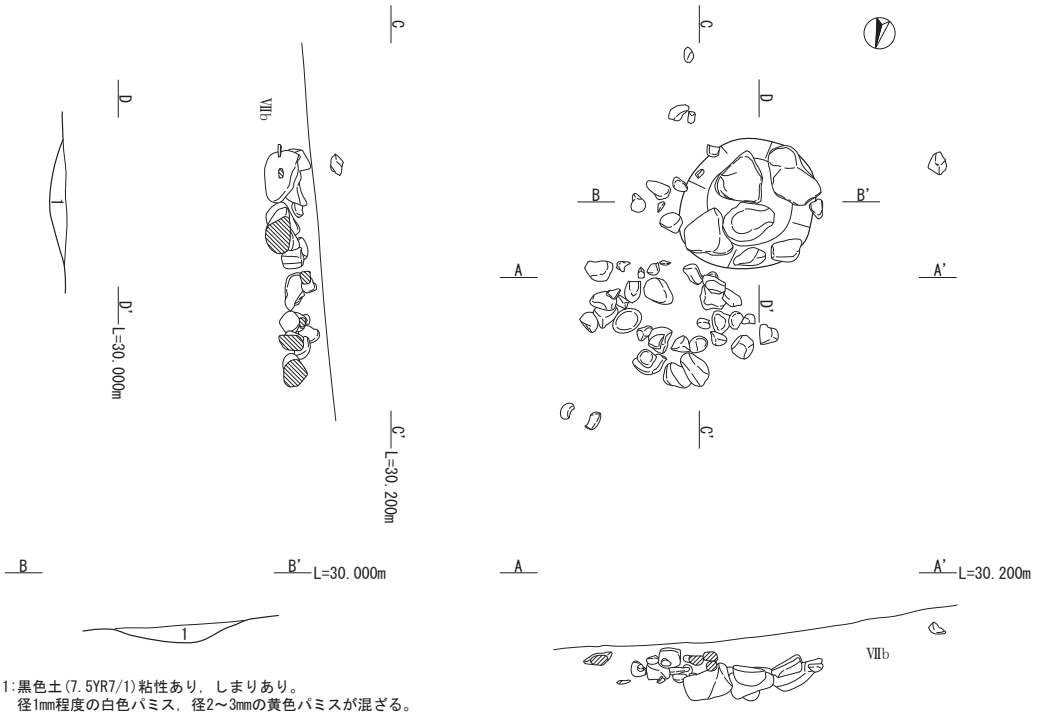
第19図　縄文時代早期Ⅶｂ層検出集石６



第20図　縄文時代早期Ⅶｂ層上位検出集石１



集石18号

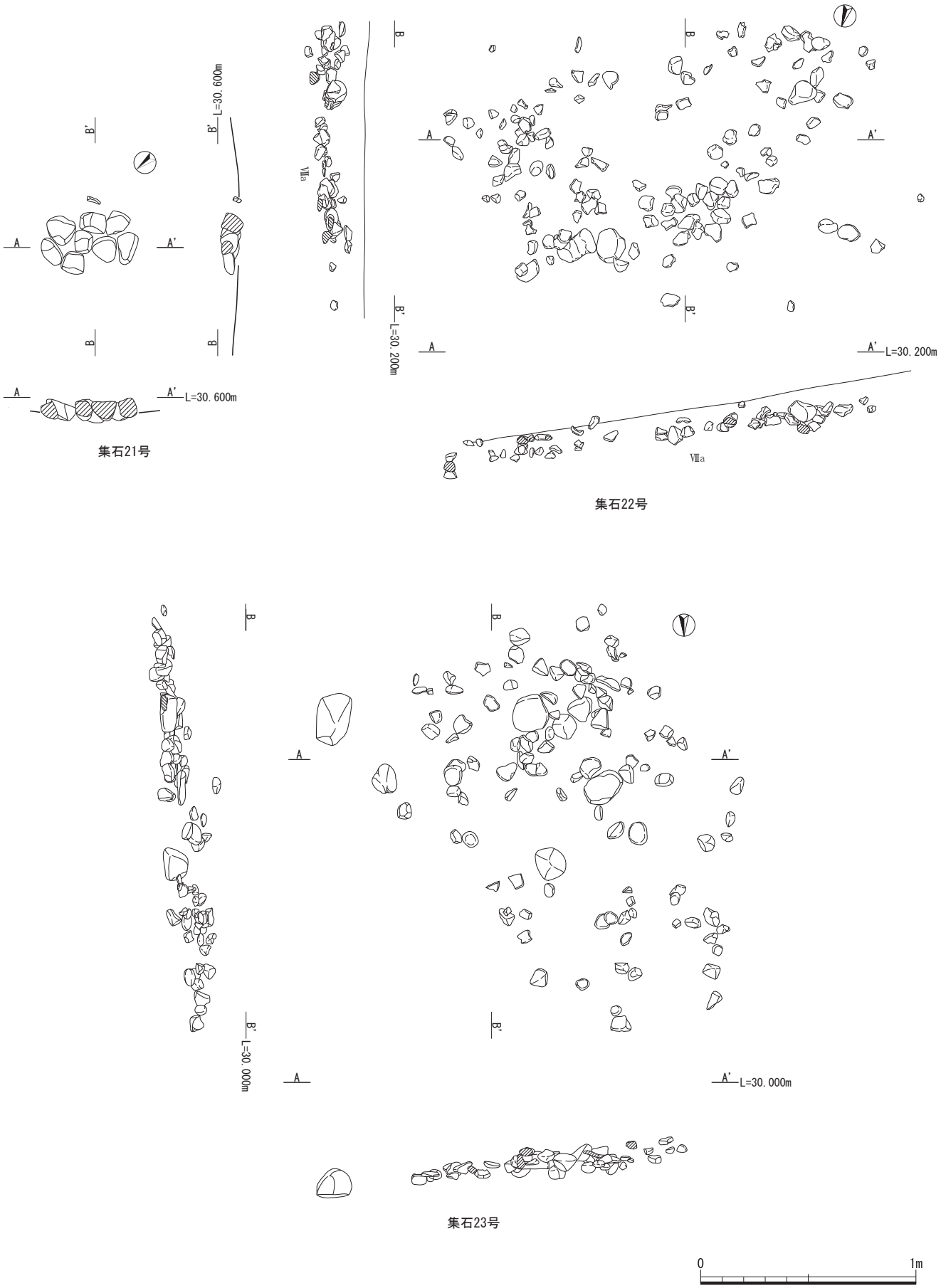


1:黒色土(7.5YR7/1)粘性あり，しまりあり。
径1mm程度の白色パミス，径2～3mmの黄色パミスが混ざる。

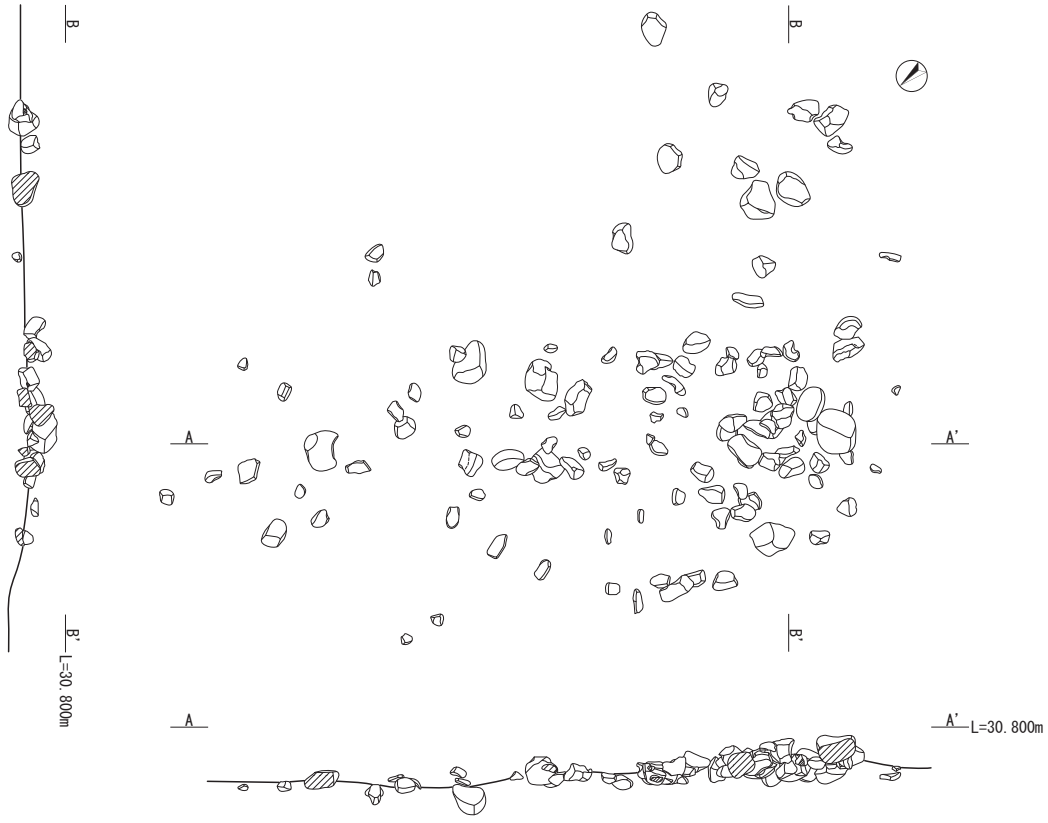
集石19号



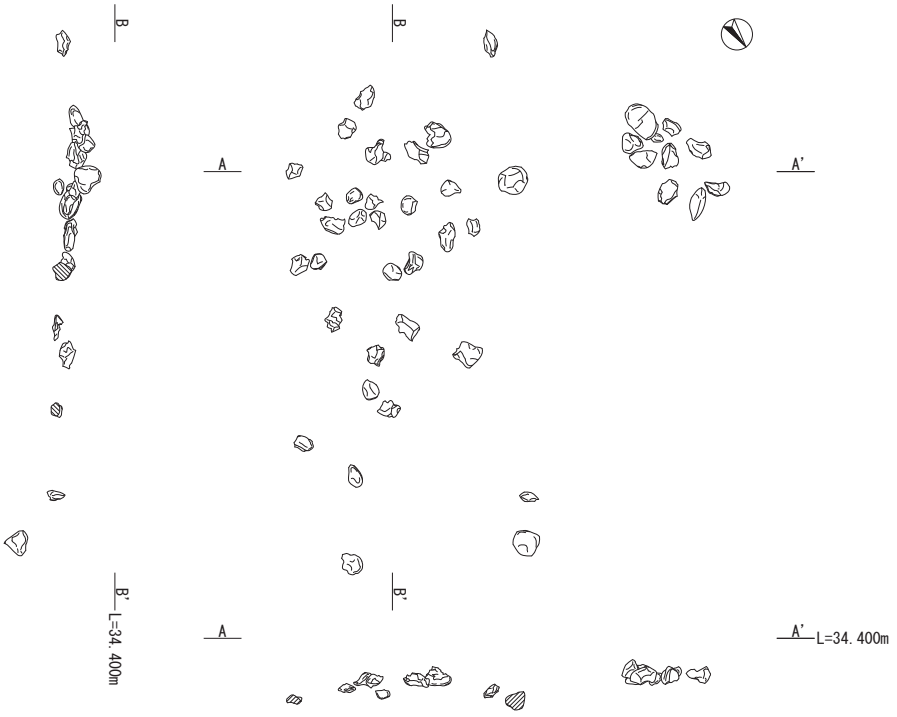
第21図　縄文時代早期Ⅶｂ層上位検出集石２



第22図　縄文時代早期Ⅶａ層下位検出集石１



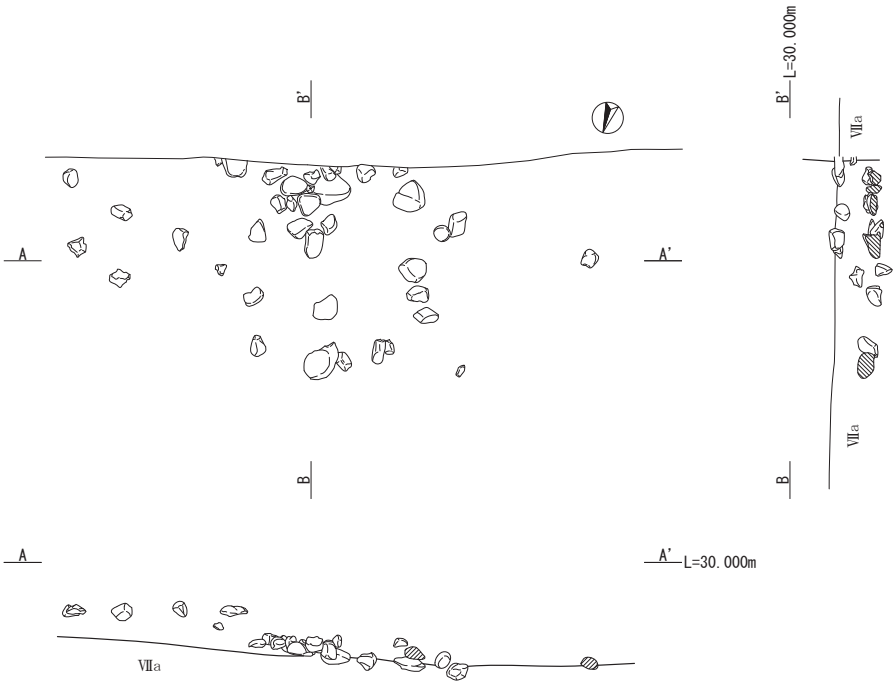
集石24号



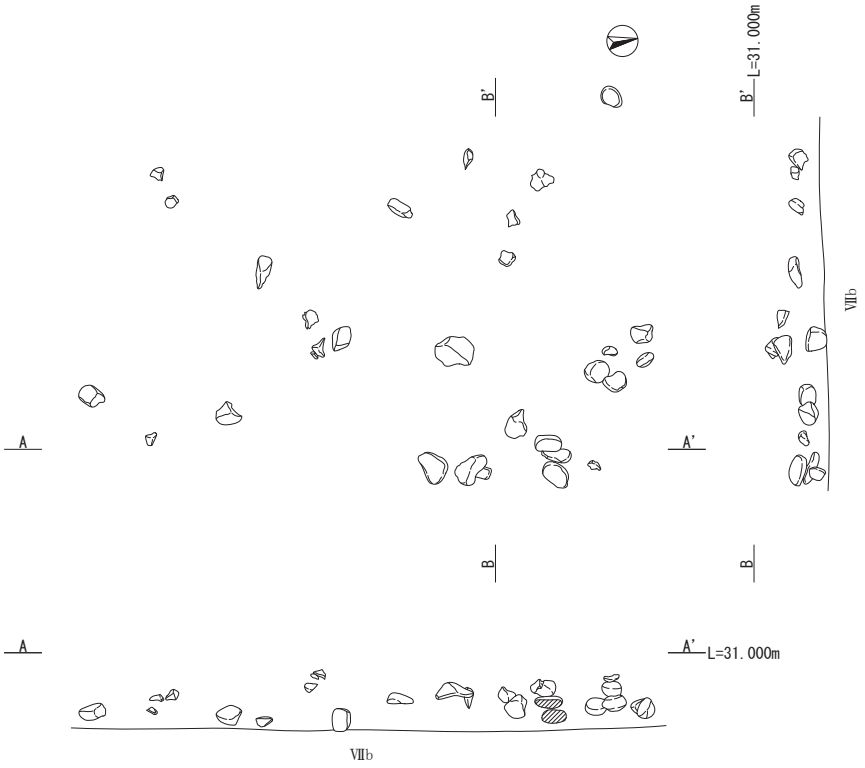
集石25号



第23図　縄文時代早期Ⅶａ層下位検出集石２



集石26号



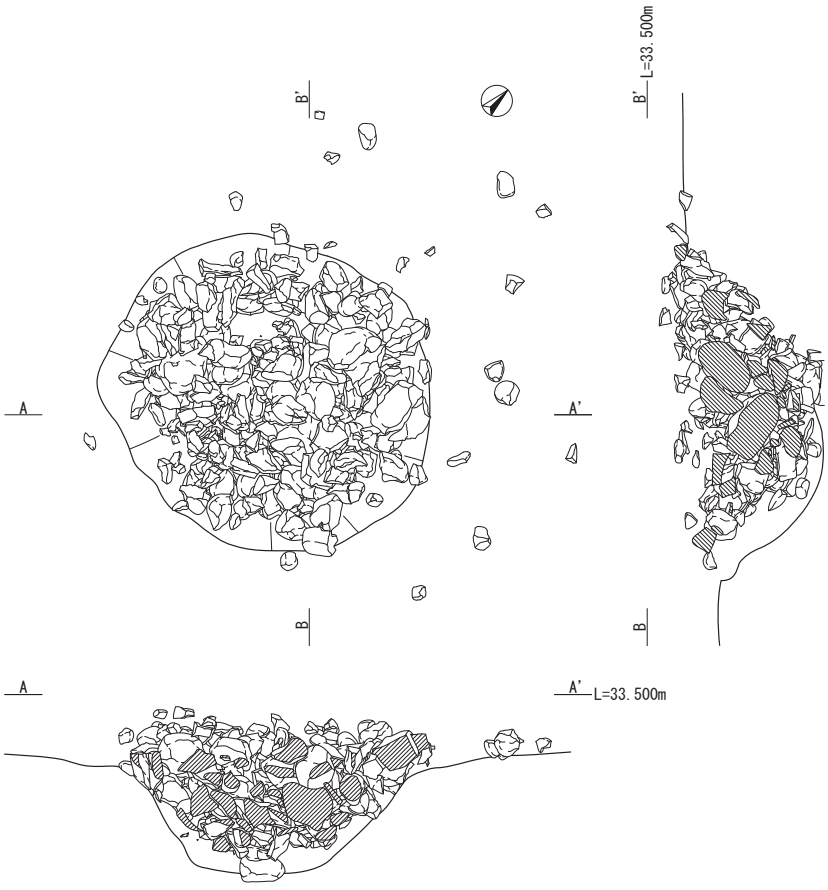
集石27号



第24図　縄文時代早期Ⅶａ層下位検出集石３



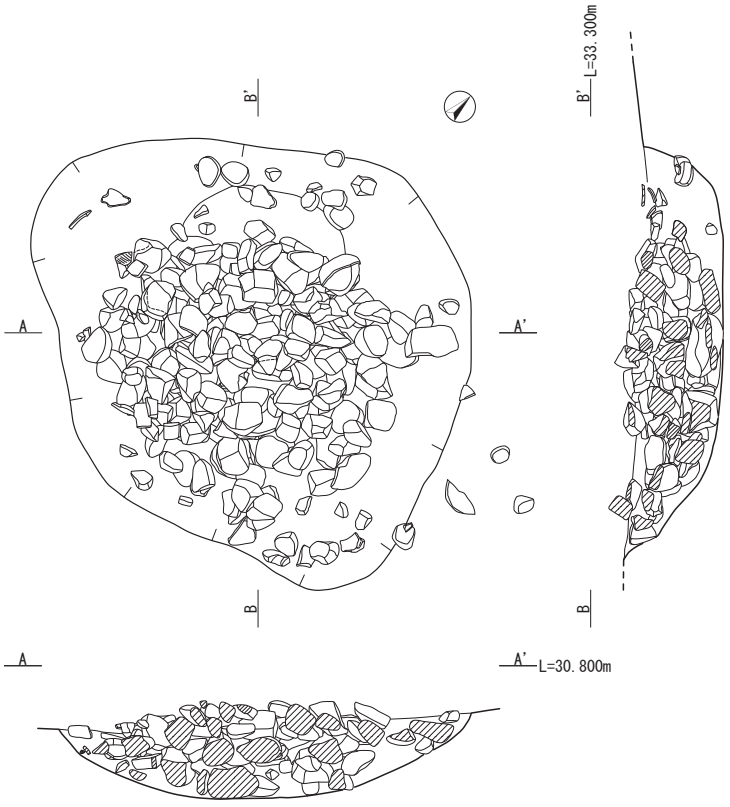
集石28号



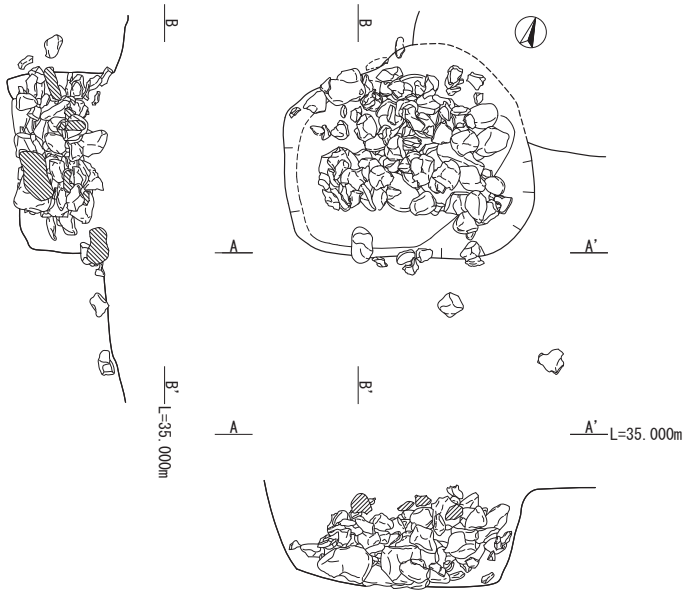
集石29号



第25図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石１



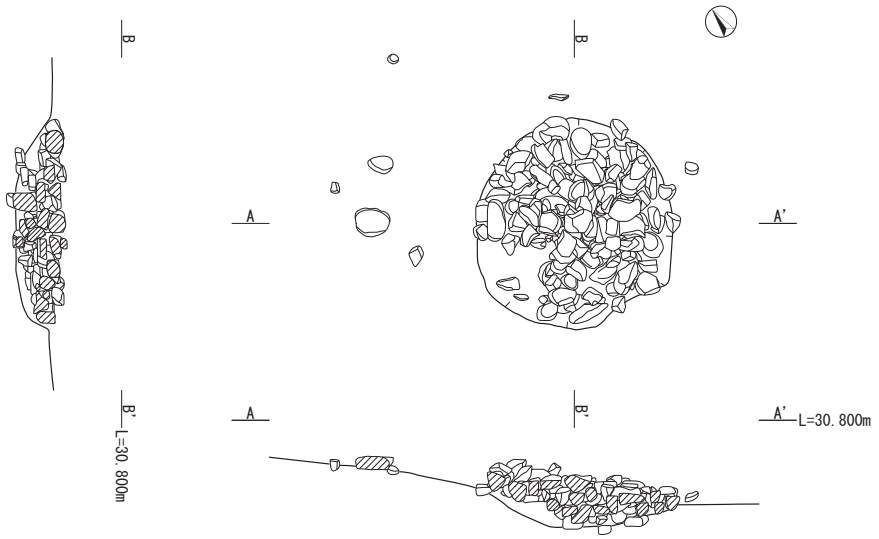
集石30号



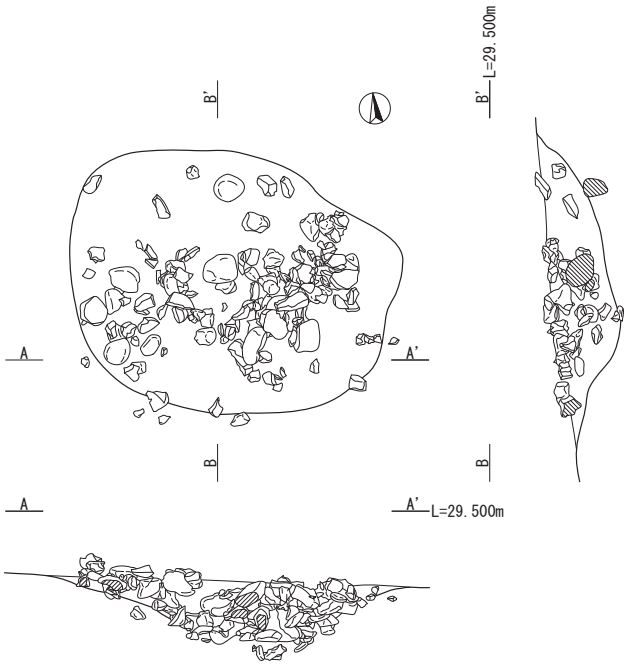
集石31号

0 1m

第26図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石２



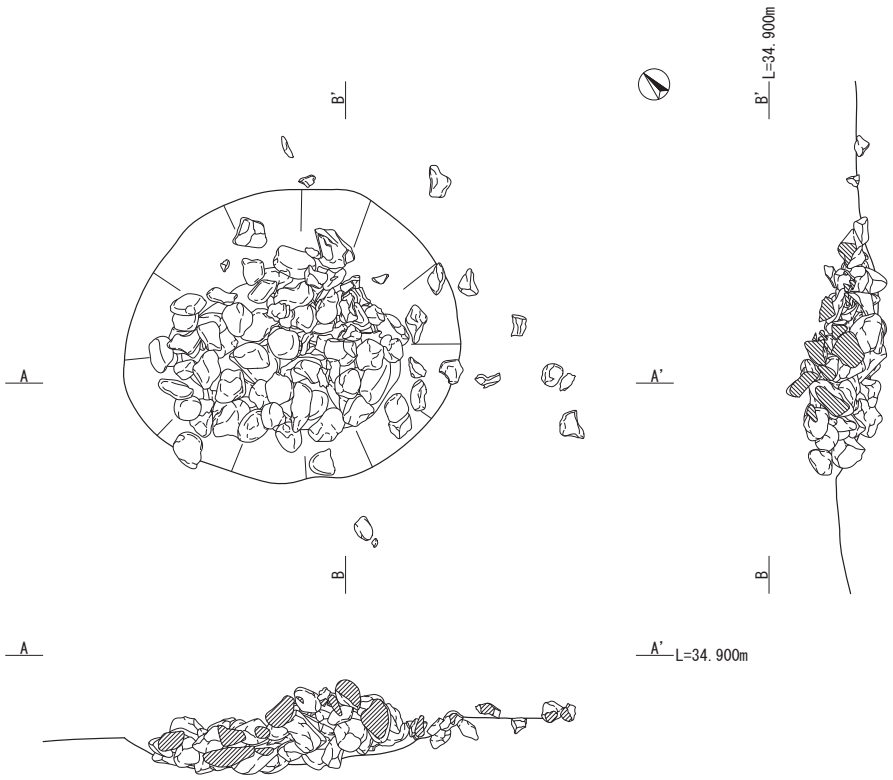
集石32号



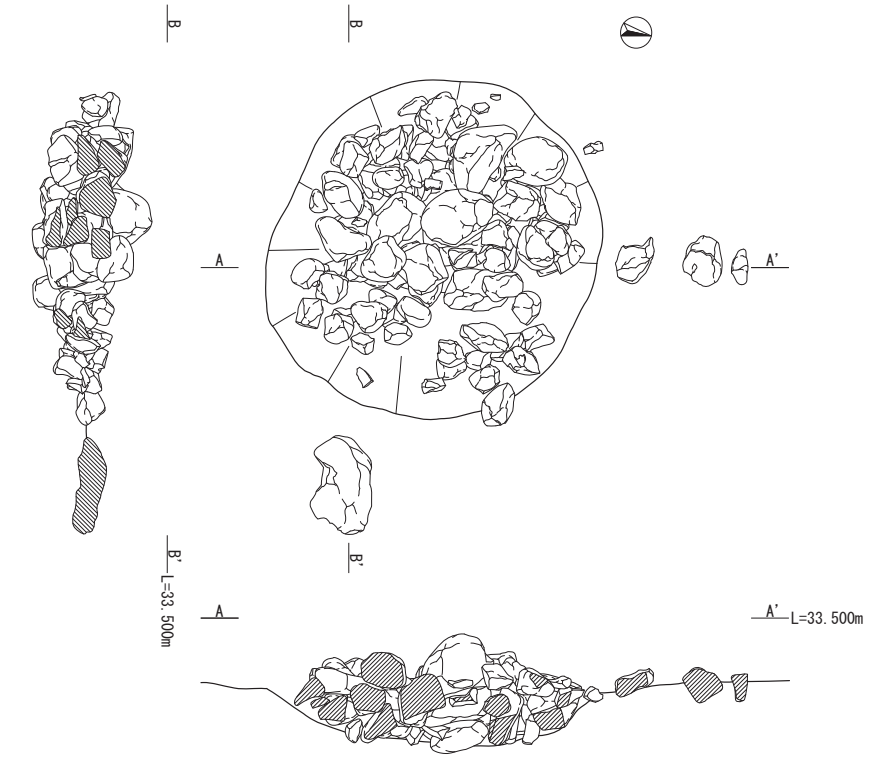
集石33号



第27図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石３



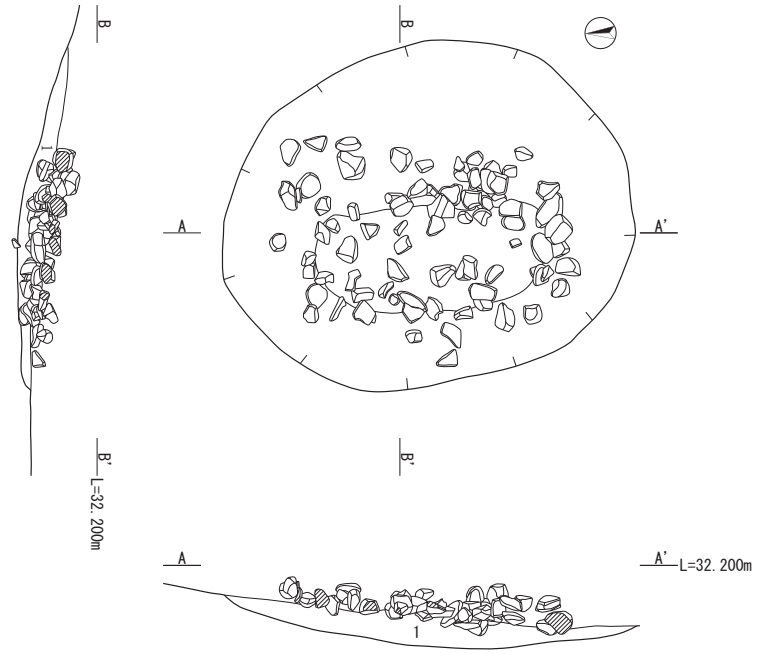
集石34号



集石35号



第28図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石４

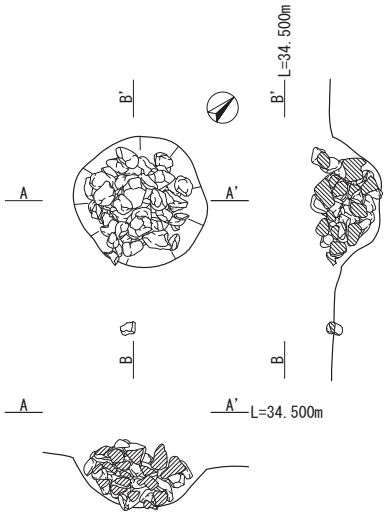


1:暗褐色土(10YR3/3)粘性やや強い，しまりなし。

集石36号



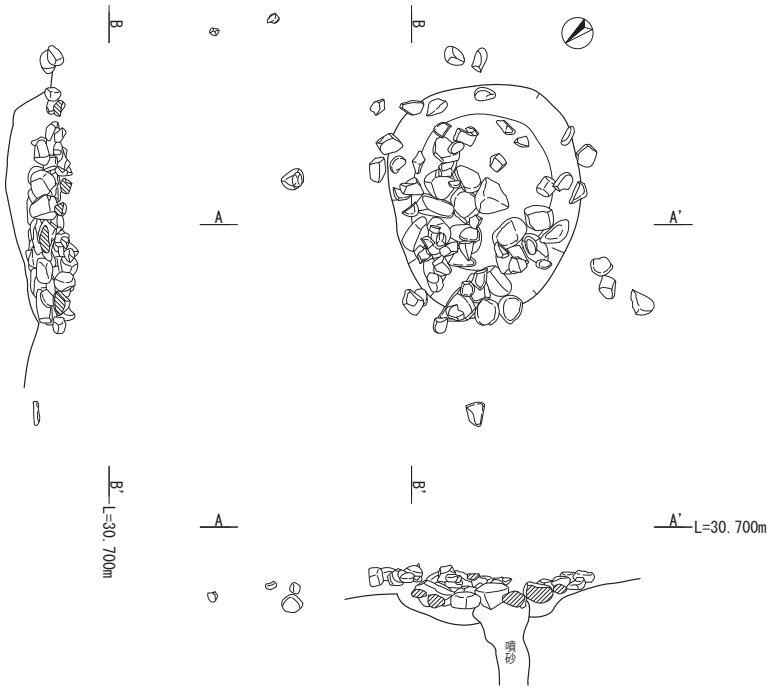
集石37号



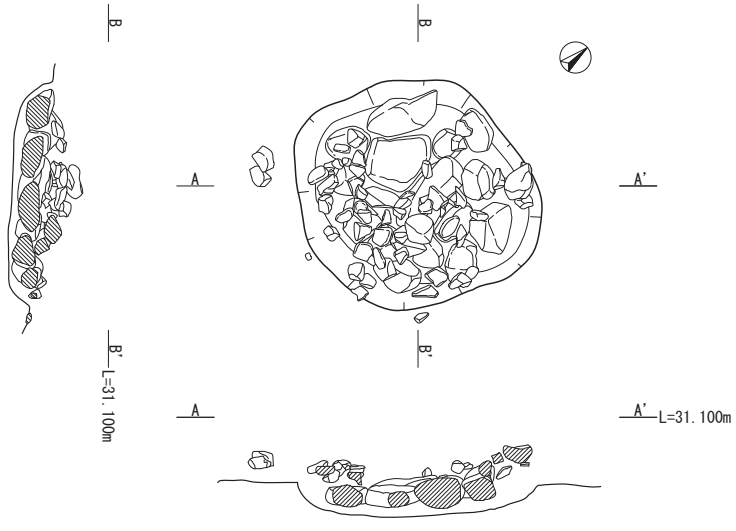
集石38号



第29図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石５



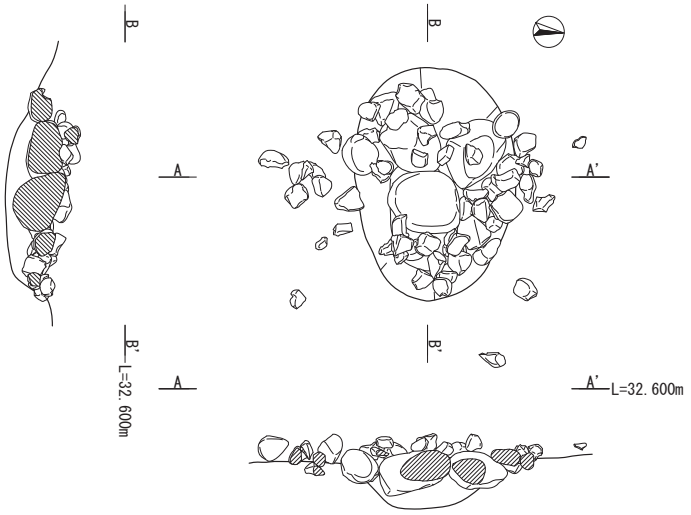
集石39号



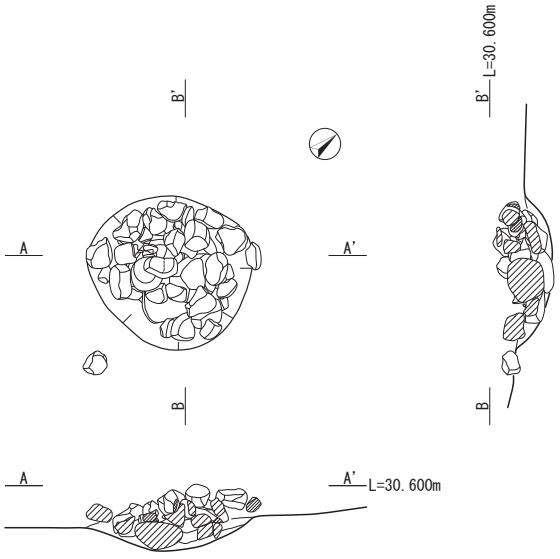
集石40号

0 1m

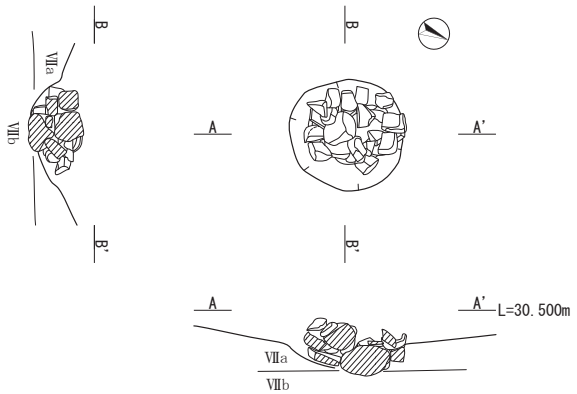
第30図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石６



集石41号



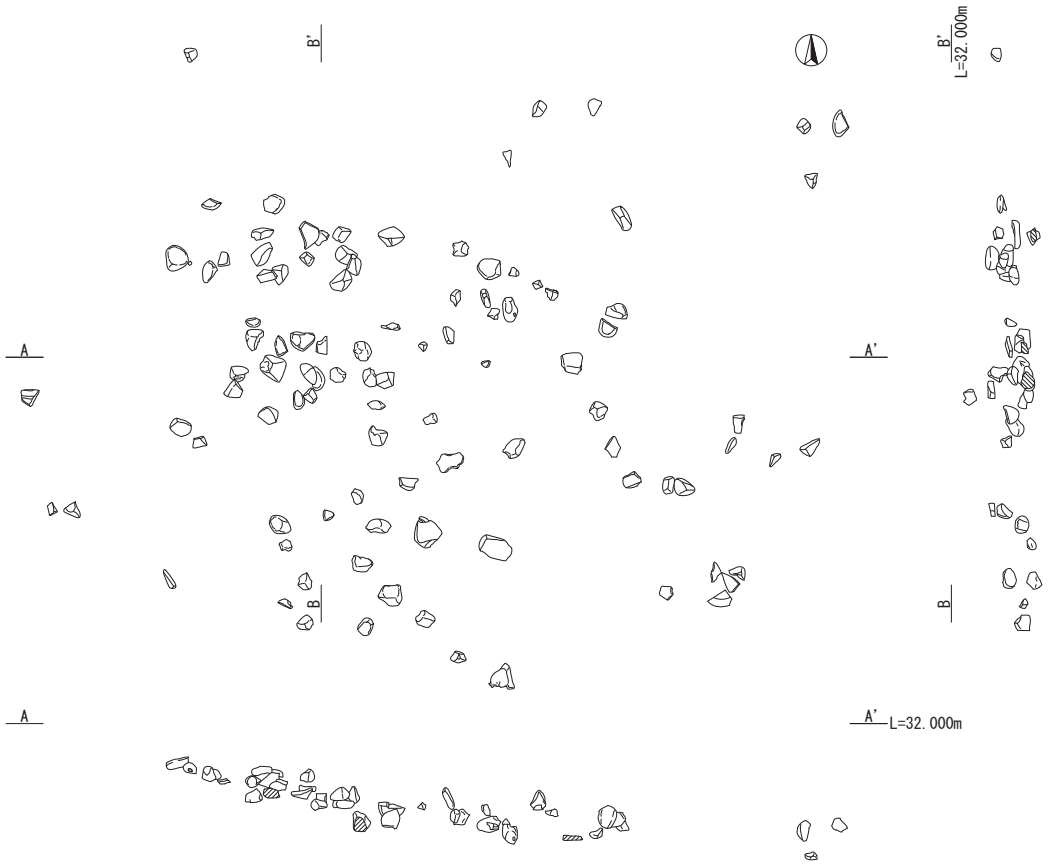
集石42号



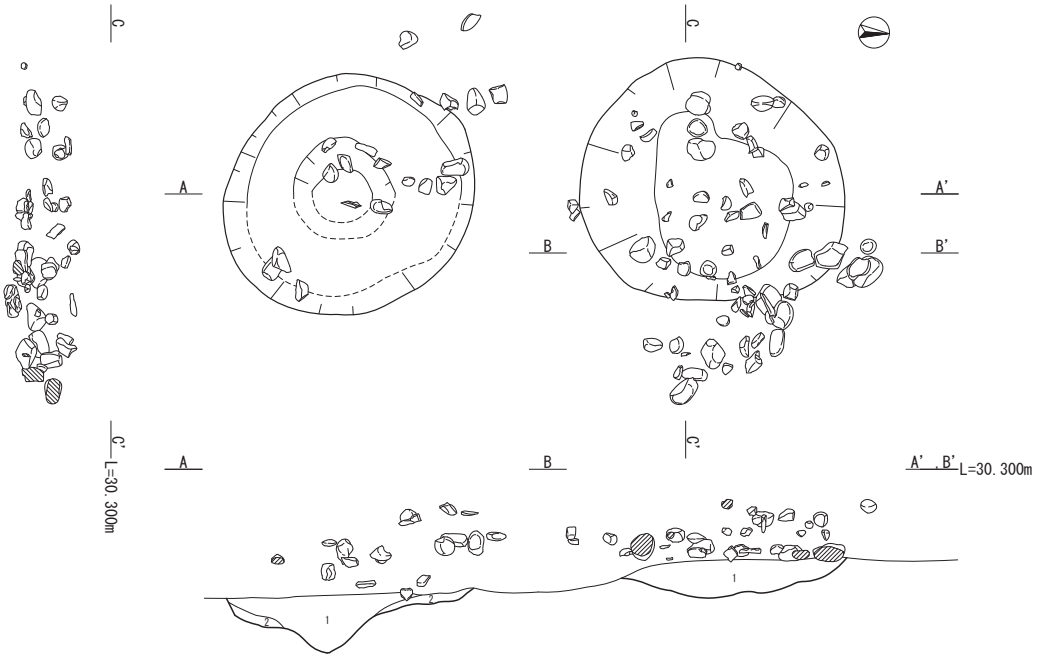
集石43号



第31図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石７



集石44号

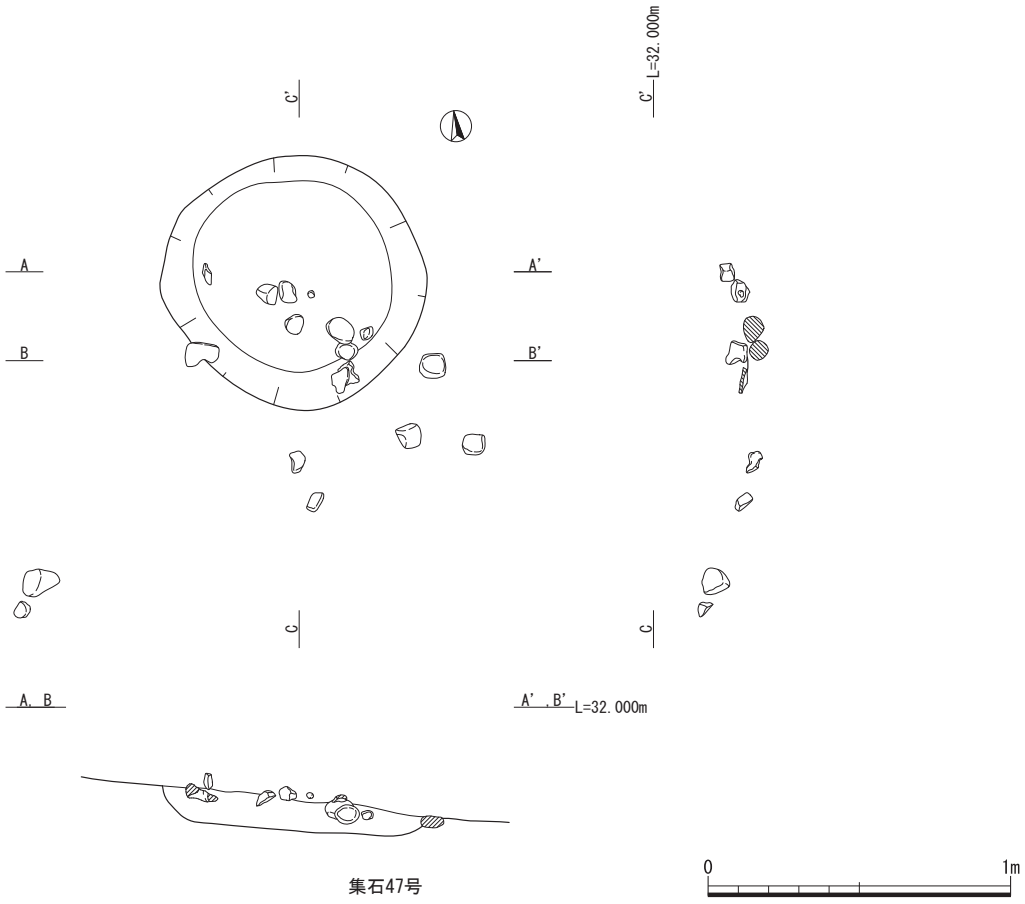


※埋土注記は本文中に記載。

集石46号　　集石45号

0　　1m

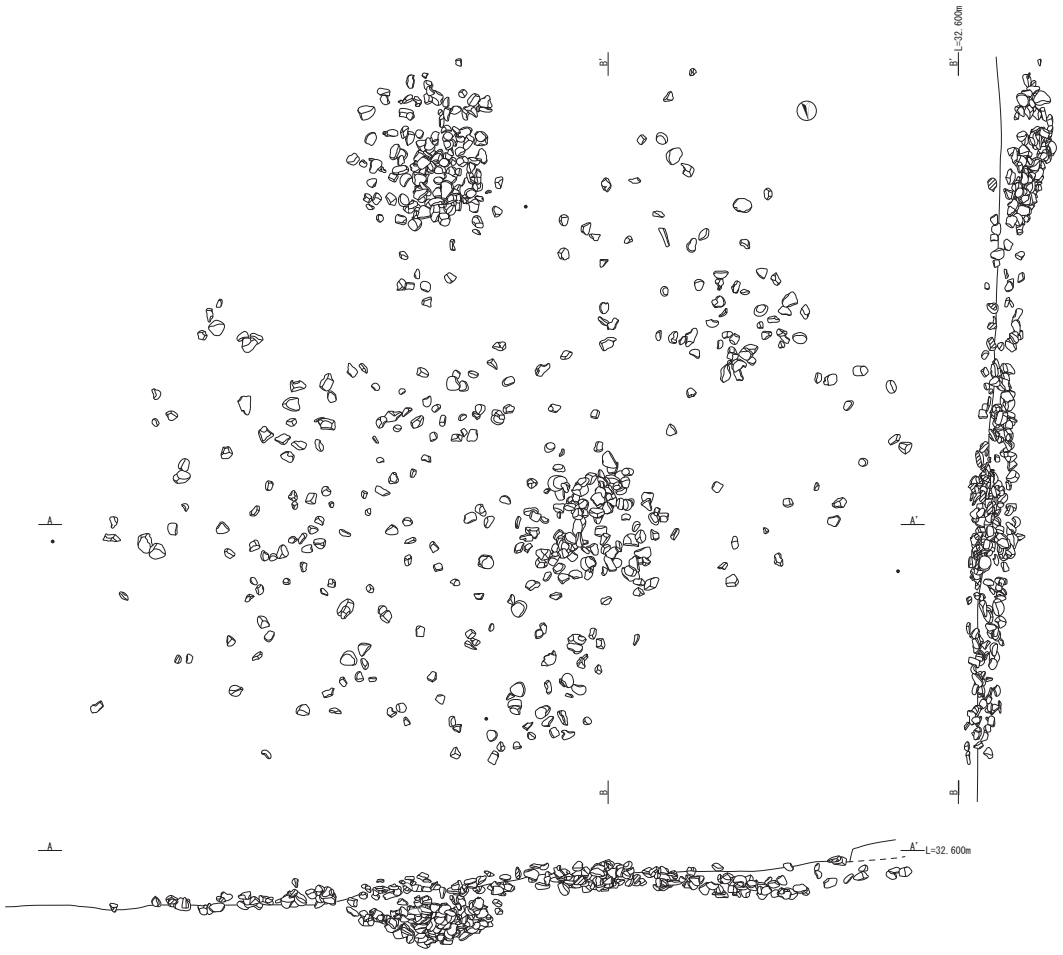
第32図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石８



第33図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石９

第９表　Ⅶａ層検出集石に伴う土坑法量一覧

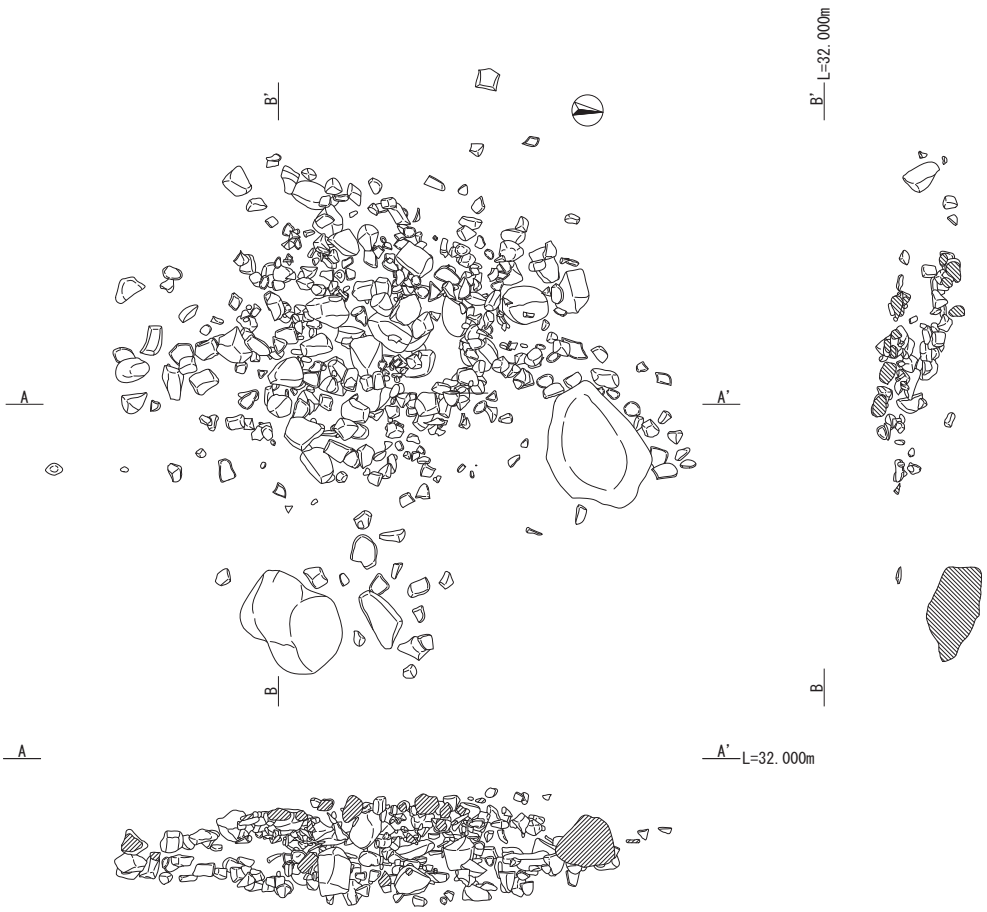
集石番号	土坑形状	大きさ（cm）		深さ（cm）	備　考
		長軸	短軸		
28	隅丸方形	110	100	30	
29	円形	直径　110		35	
30	（円形）	直径　120		25	
31	隅丸方形	80	60	35	
32	円形	直径　65		10	
33	楕円形	110	90	25	
34	円形	直径　110		10	
35	円形	直径　110		20	
36	円形	直径　140		(10)	
37	楕円形	90	60	15	
38	円形	直径　45		15	
39	楕円形	75	60	15	
40	円形	直径　75		10	
41	楕円形	75	50	20	
42	円形	直径　55		10	
43	円形	直径　40		10	
44	円形	直径　75		不明	
45	円形	直径　90		15	
46	円形	直径　80		20	
47	円形	直径　90		10	



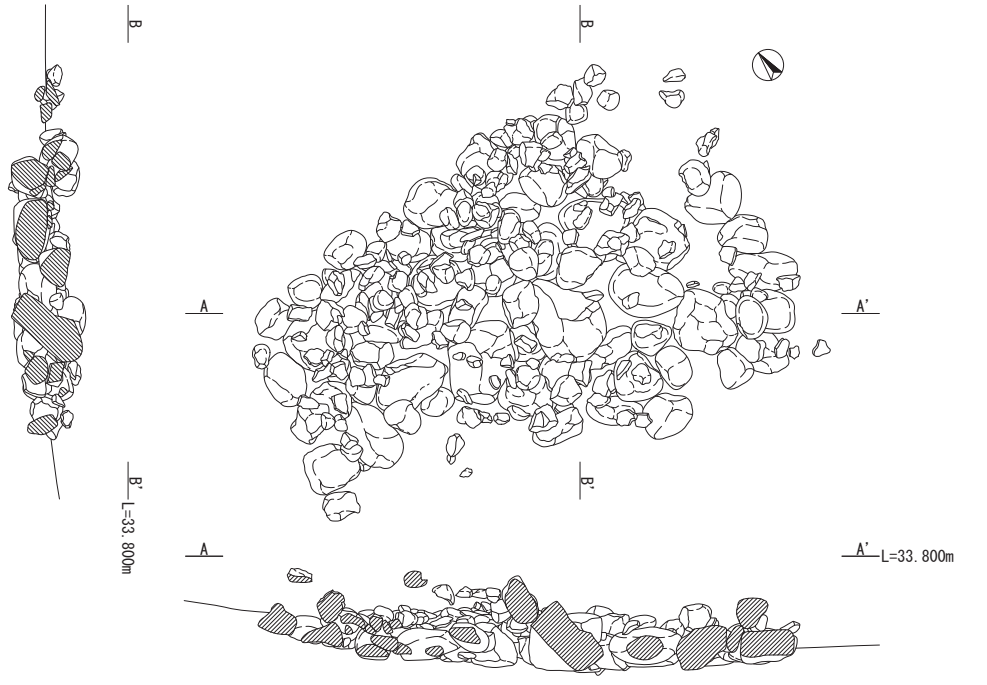
集石48・49・50号

0　1m
(1:40)

第34図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石10



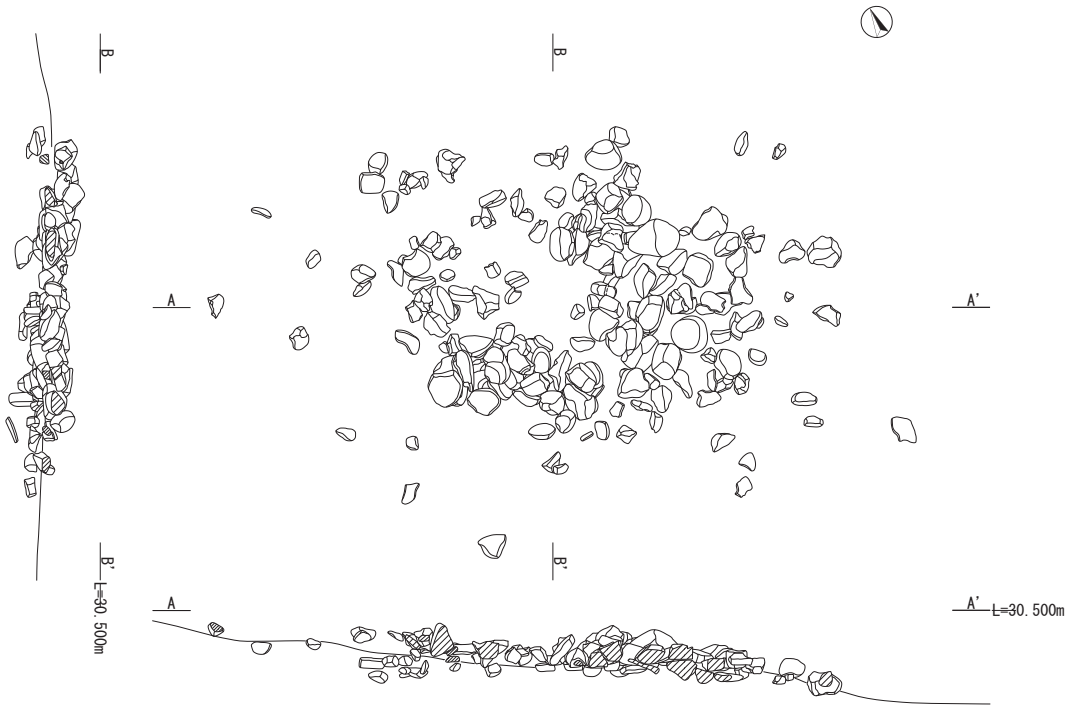
集石51号



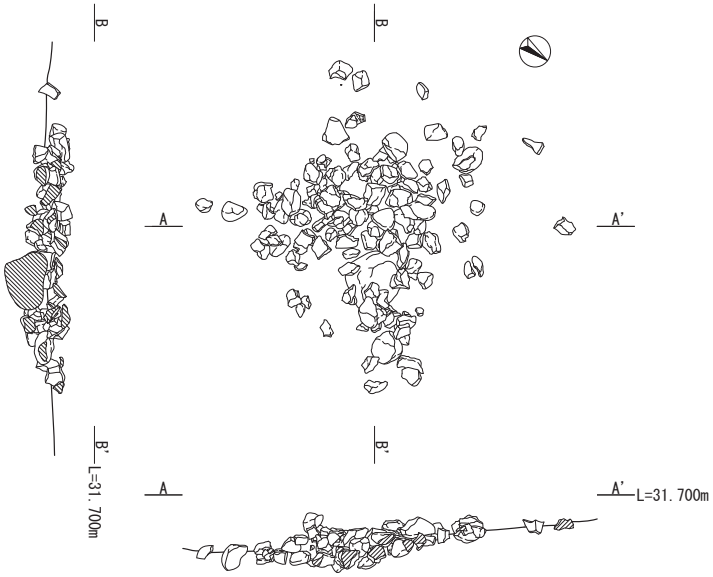
集石52号



第35図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石11



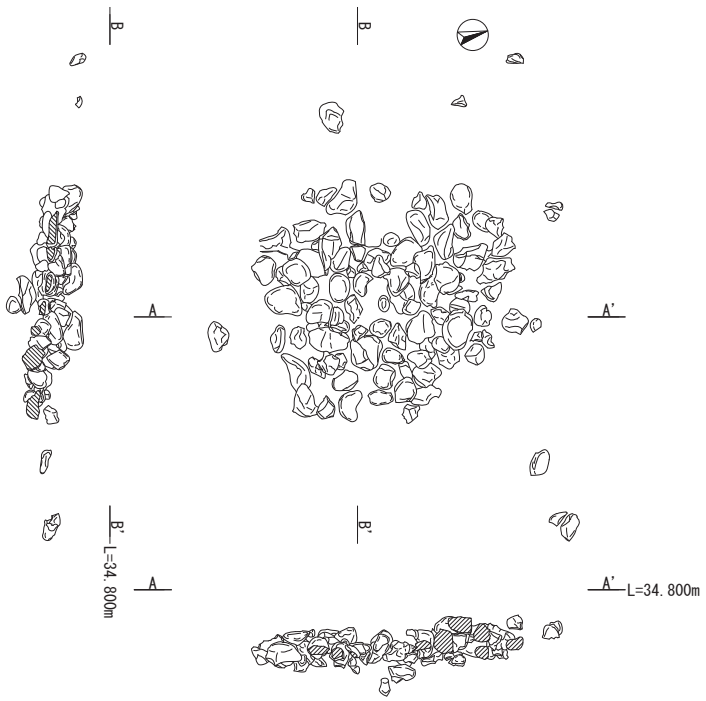
集石53号



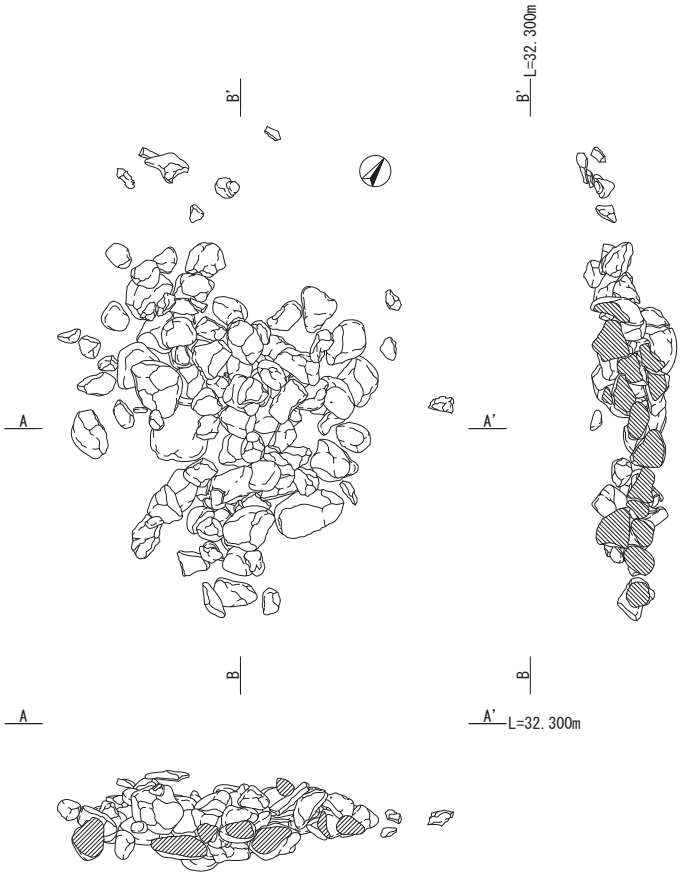
集石54号



第36図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石12



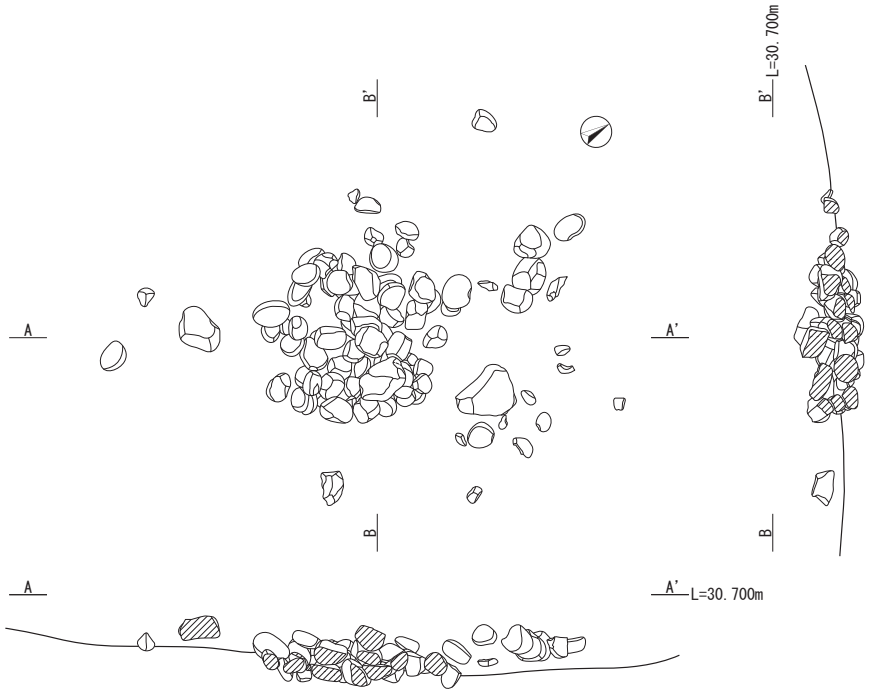
集石55号



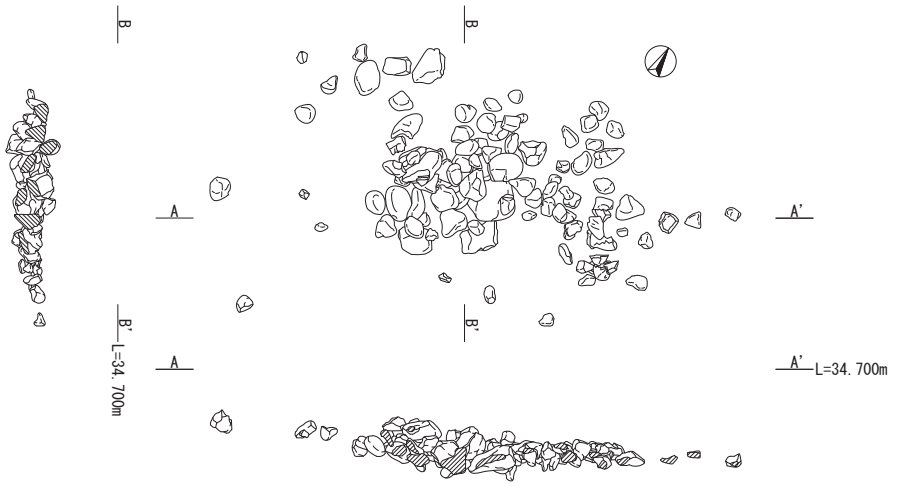
集石56号

0 1m

第37図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石13



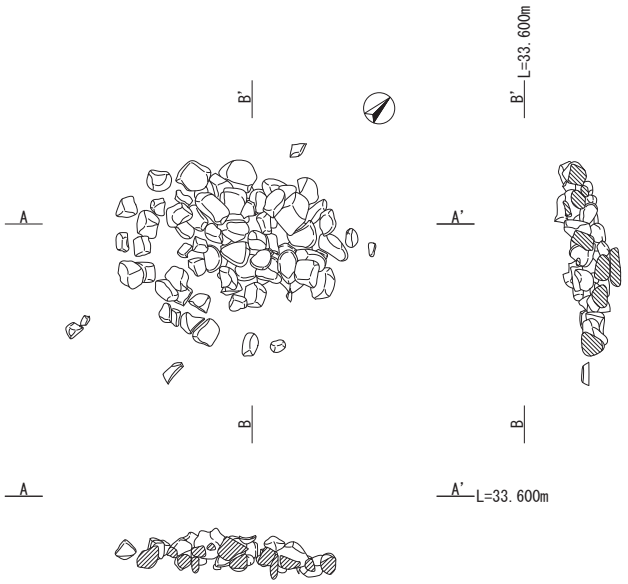
集石57号



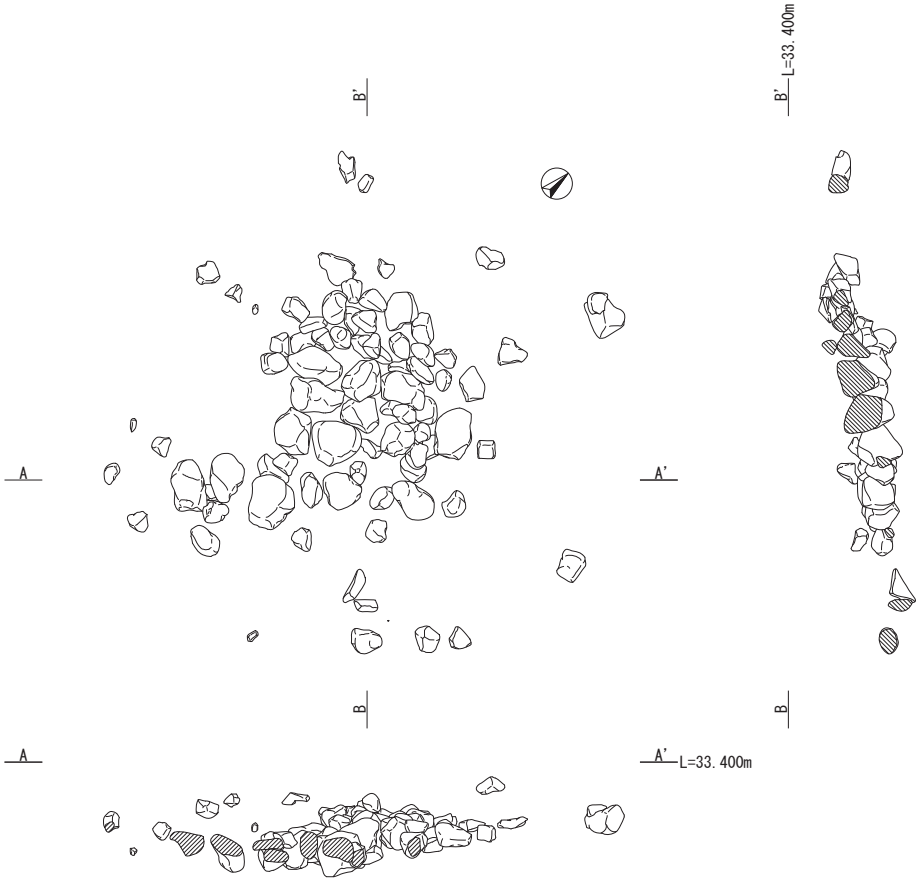
集石58号



第38図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石14



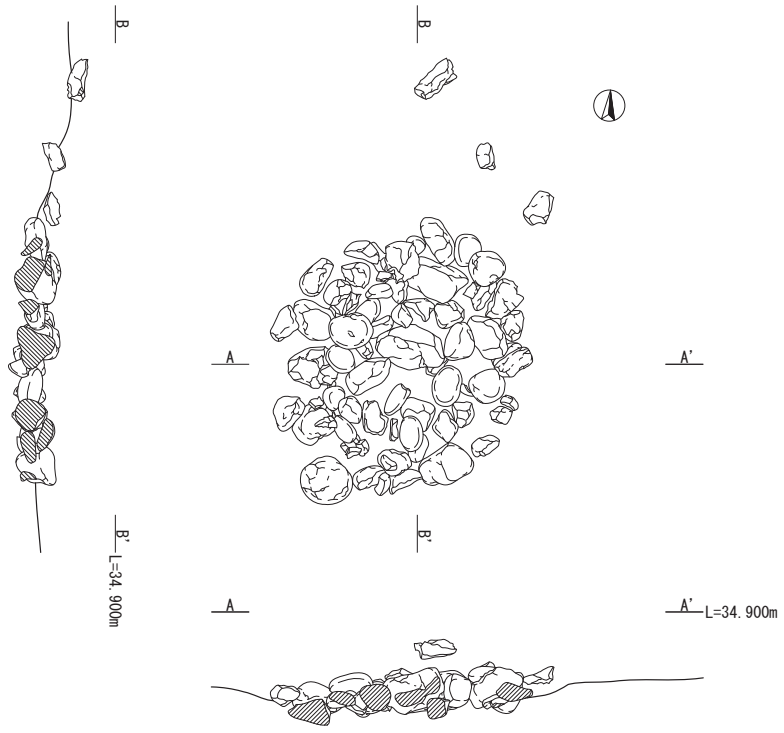
集石59号



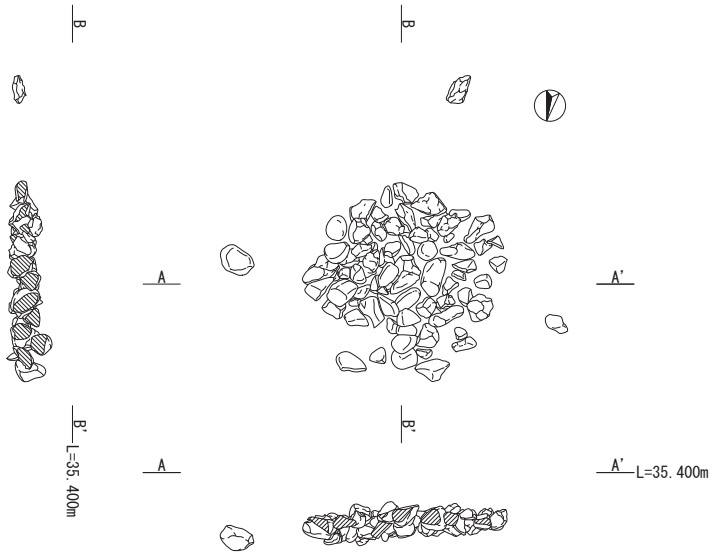
集石60号



第39図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石15



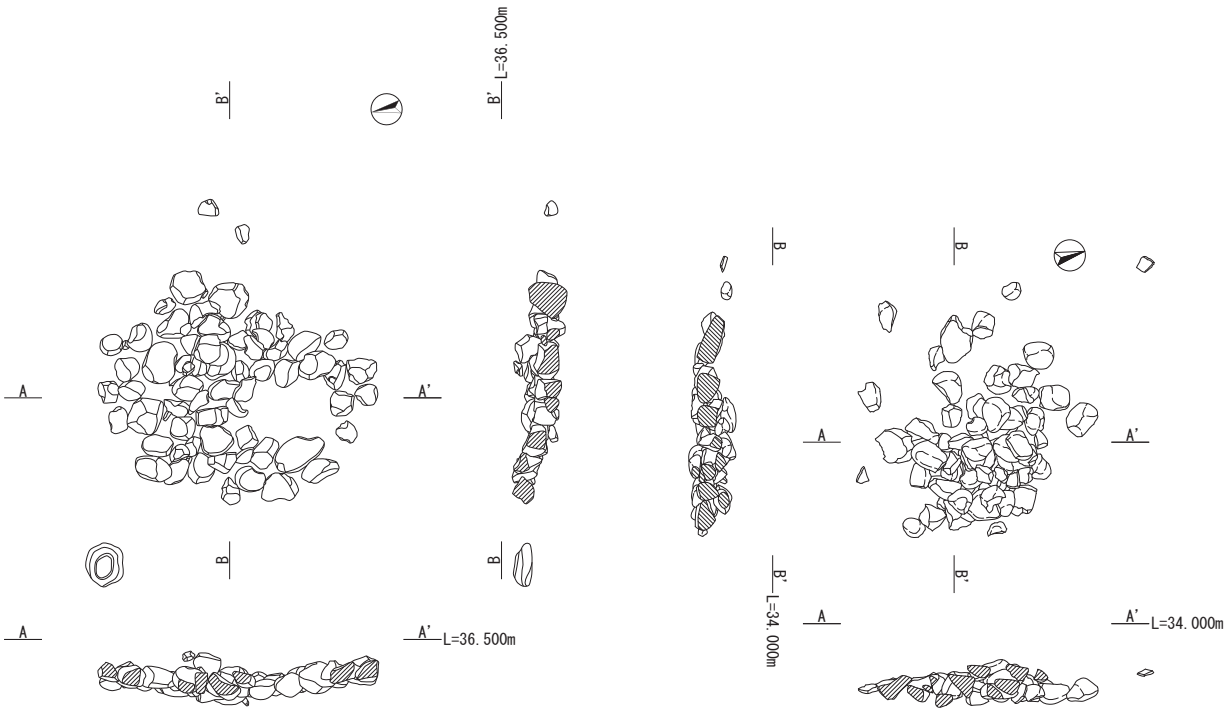
集石61号

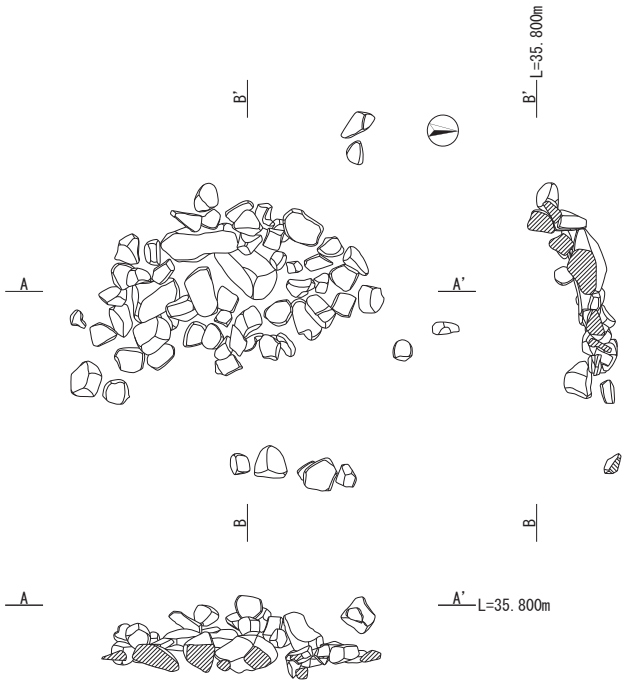


集石62号



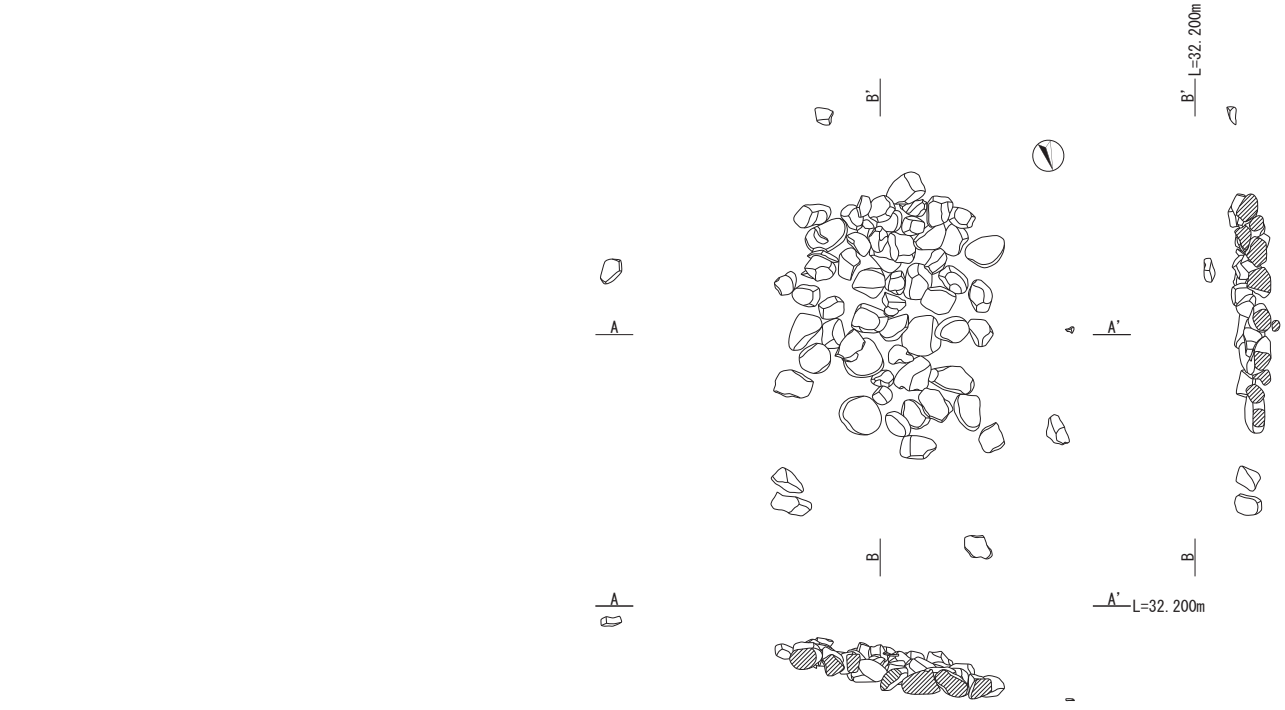
第40図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石16



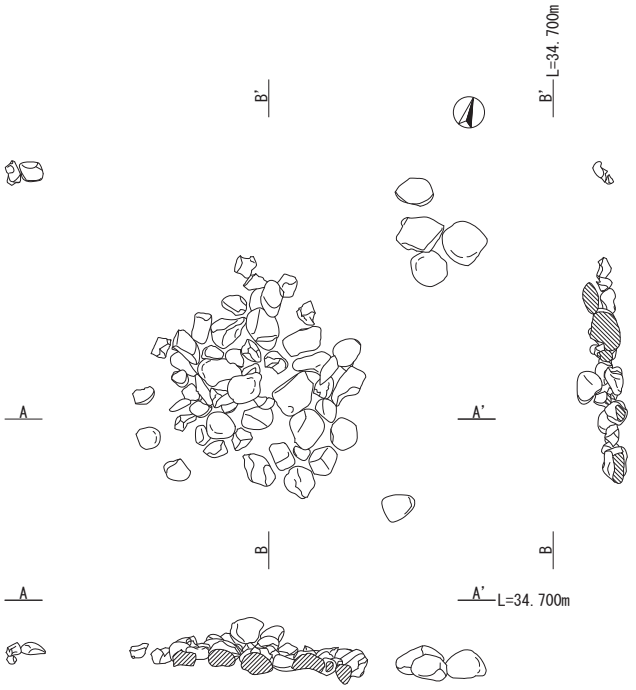




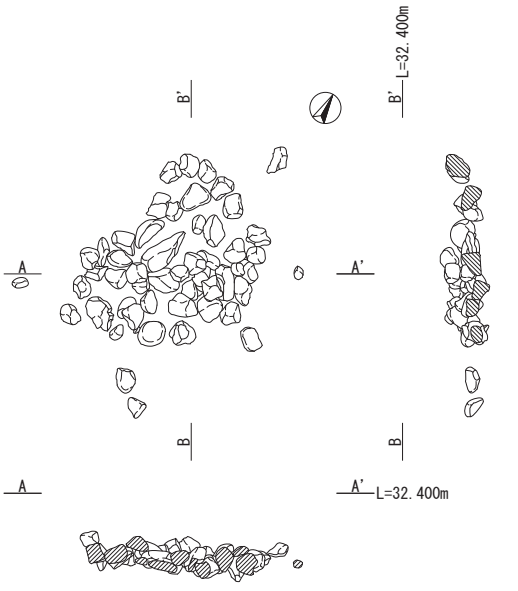
第41図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石17



集石66号



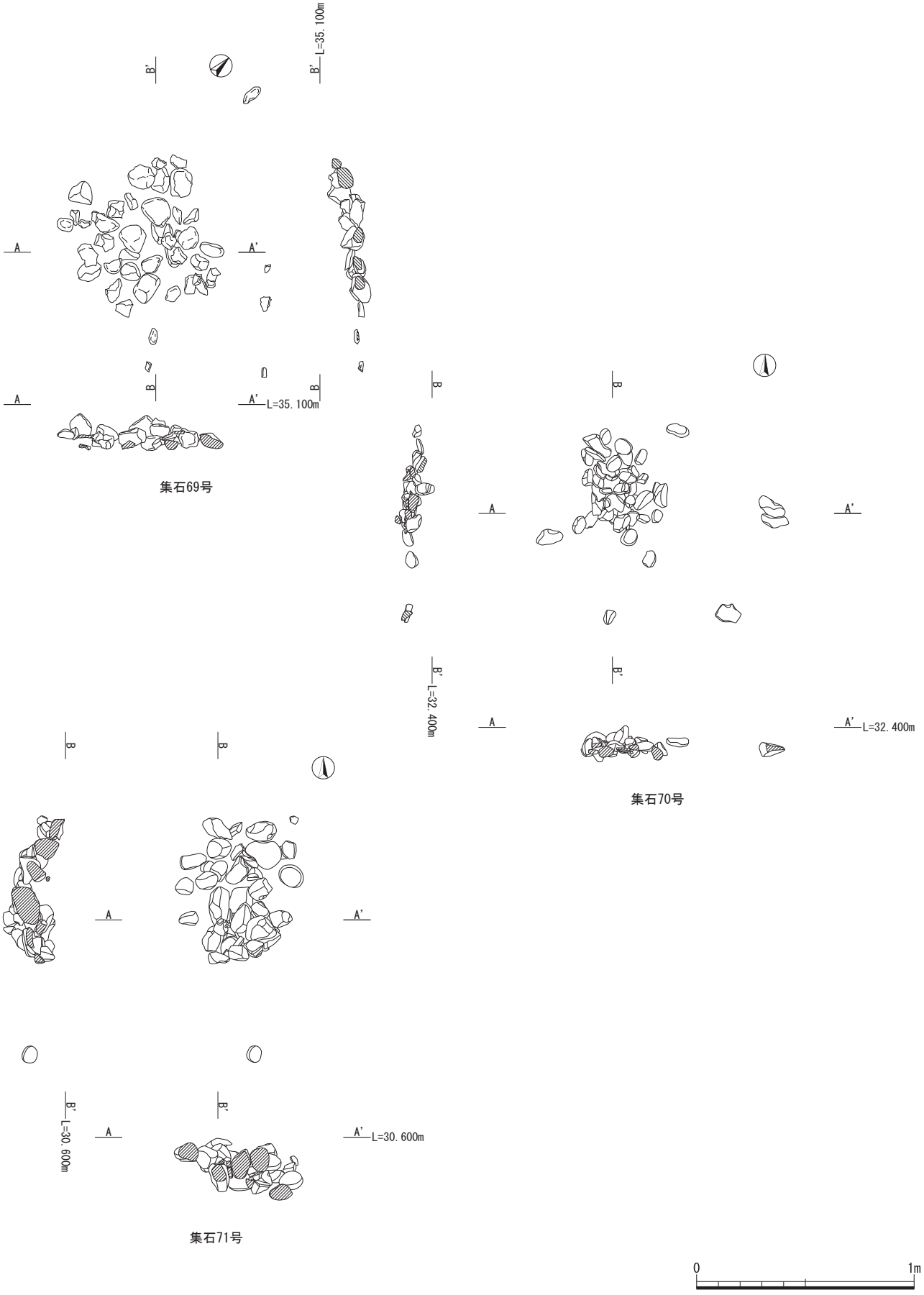
集石67号



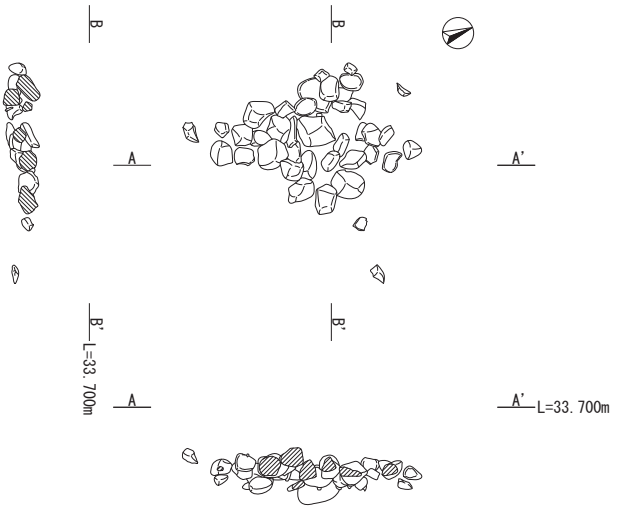
集石68号



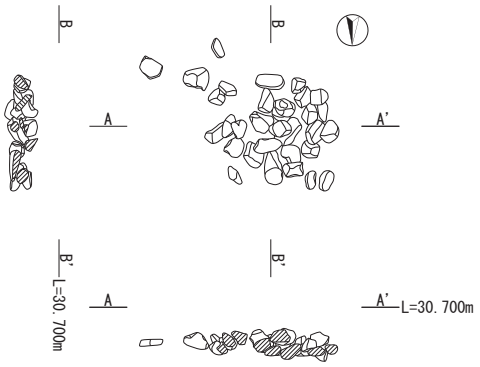
第42図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石18



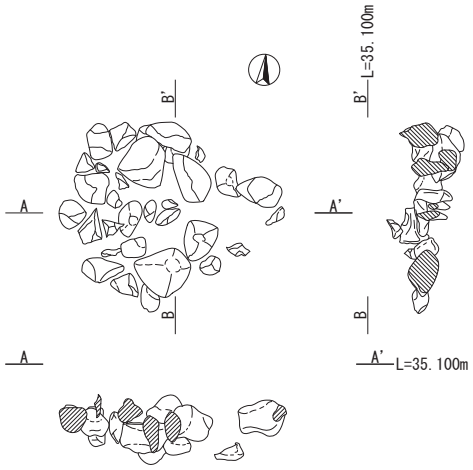
第43図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石19



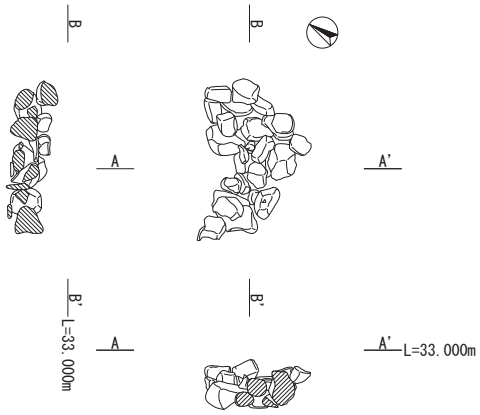
集石72号



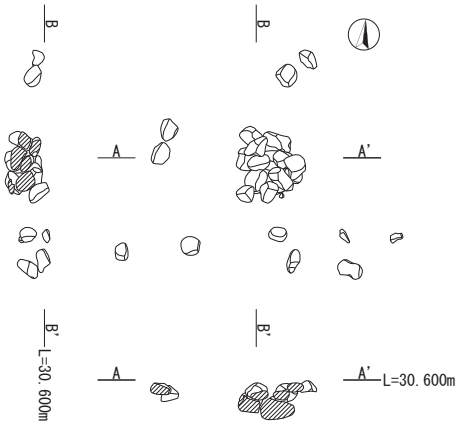
集石73号



集石74号



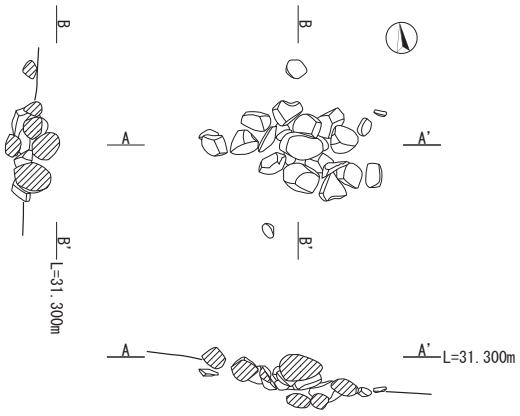
集石75号



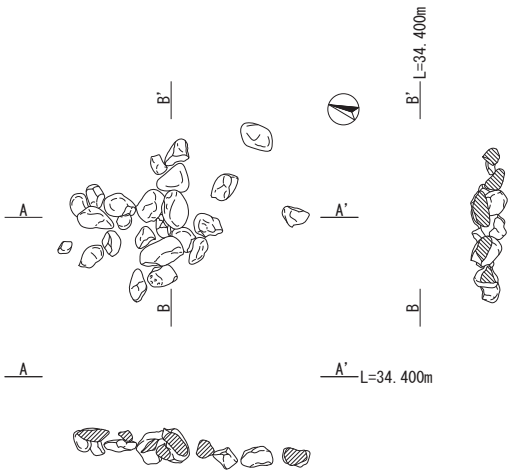
集石76号



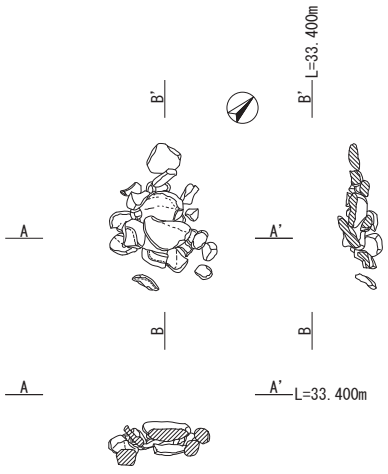
第44図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石20



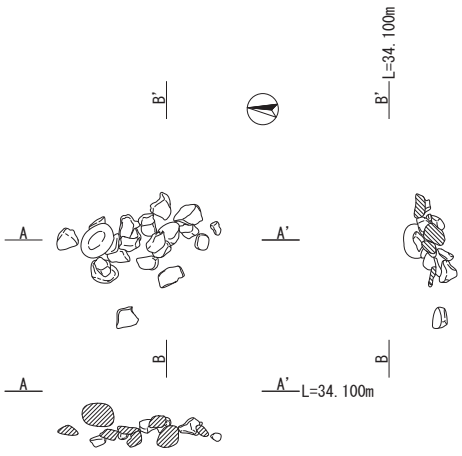
集石77号



集石78号



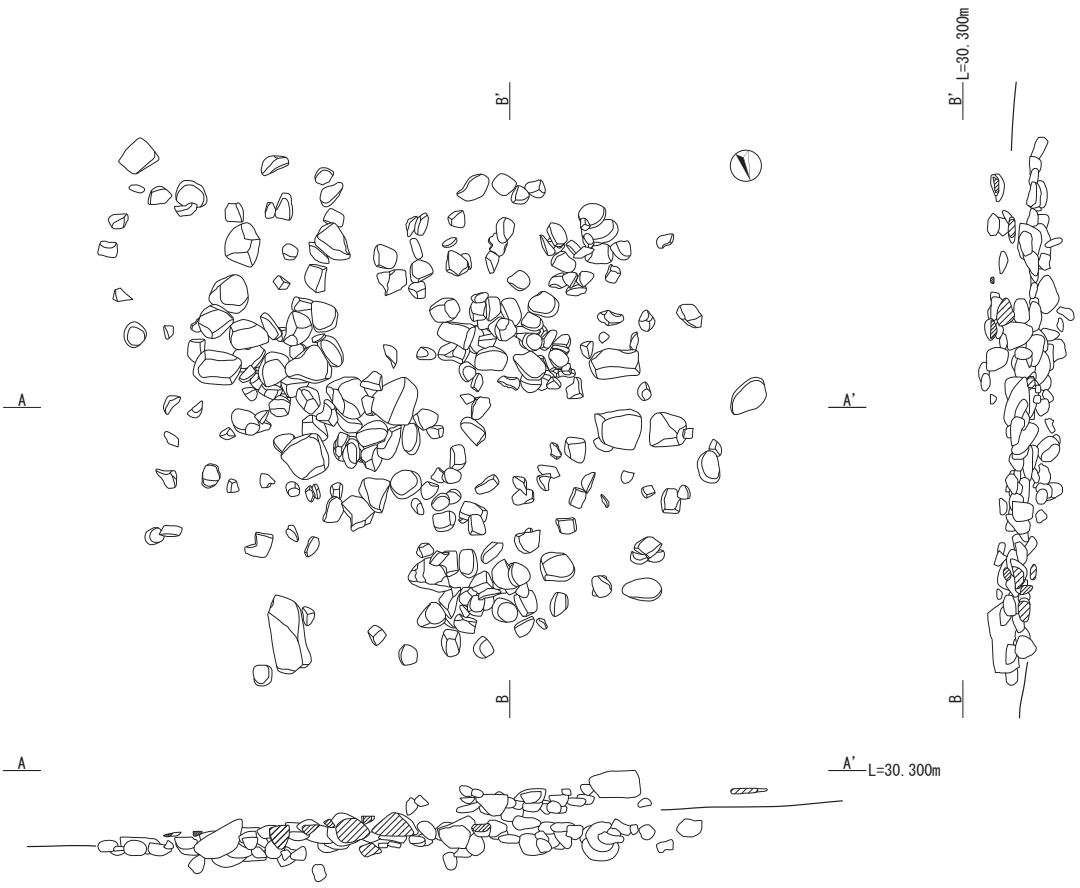
集石79号



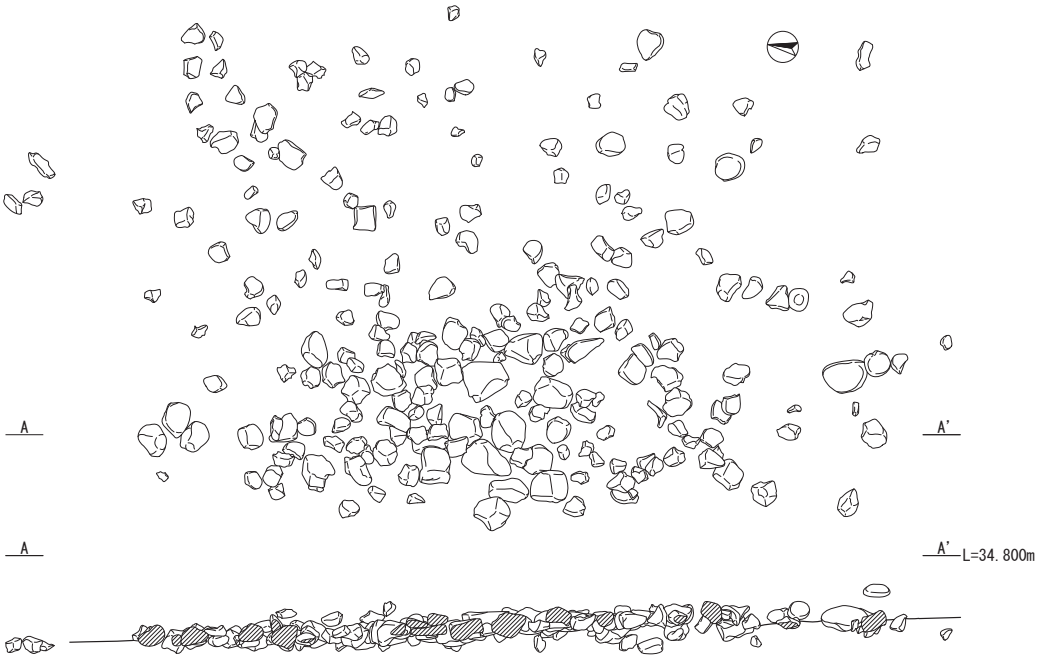
集石80号



第45図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石21



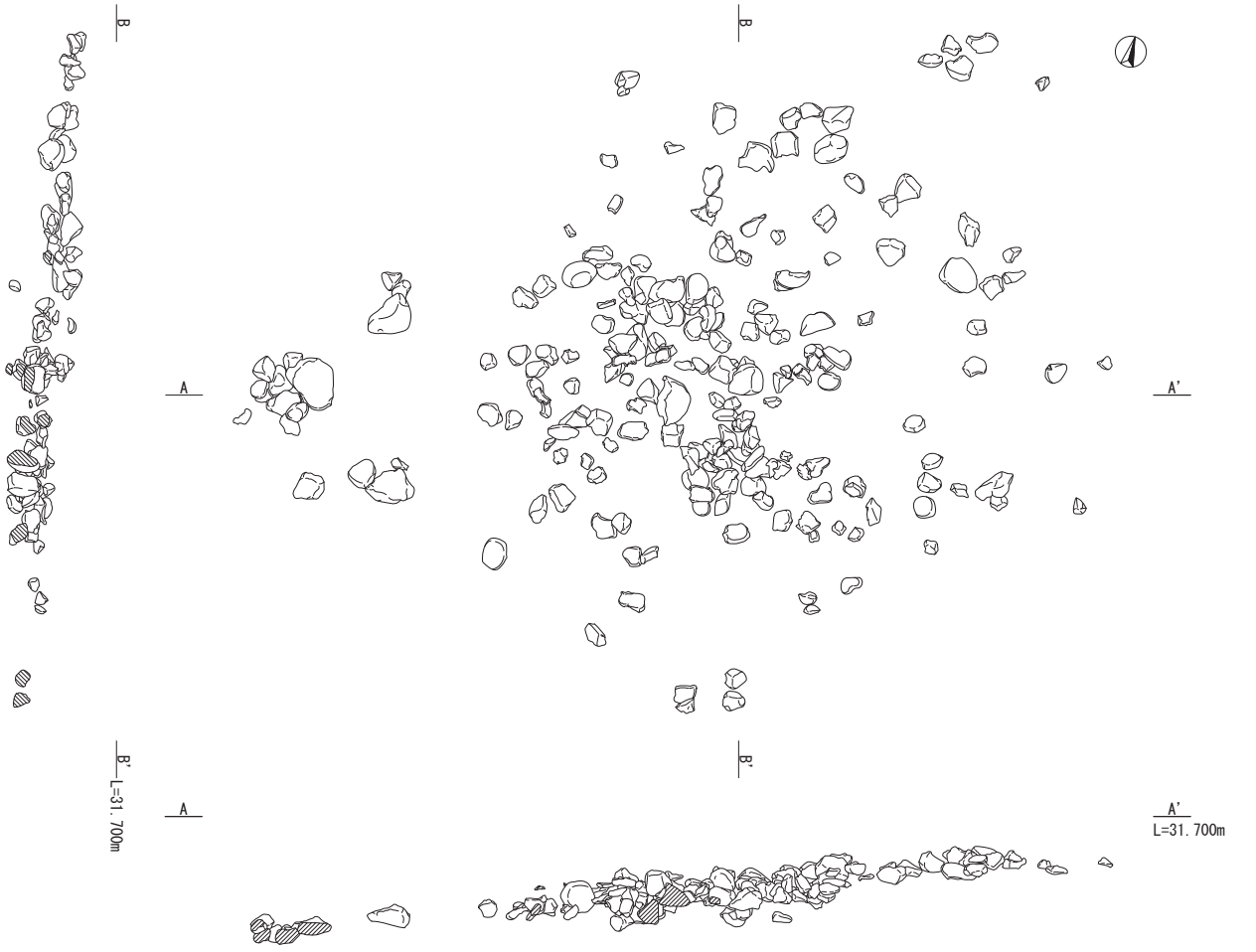
集石81号



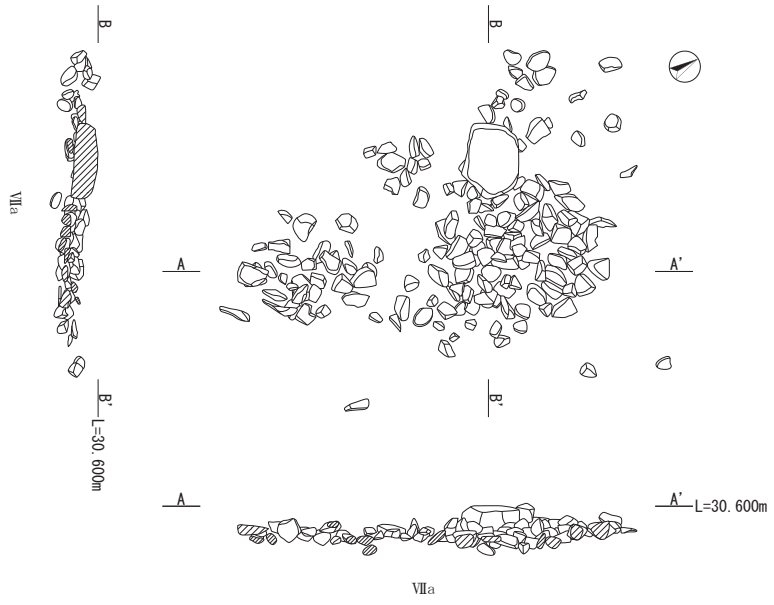
集石82号



第46図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石22



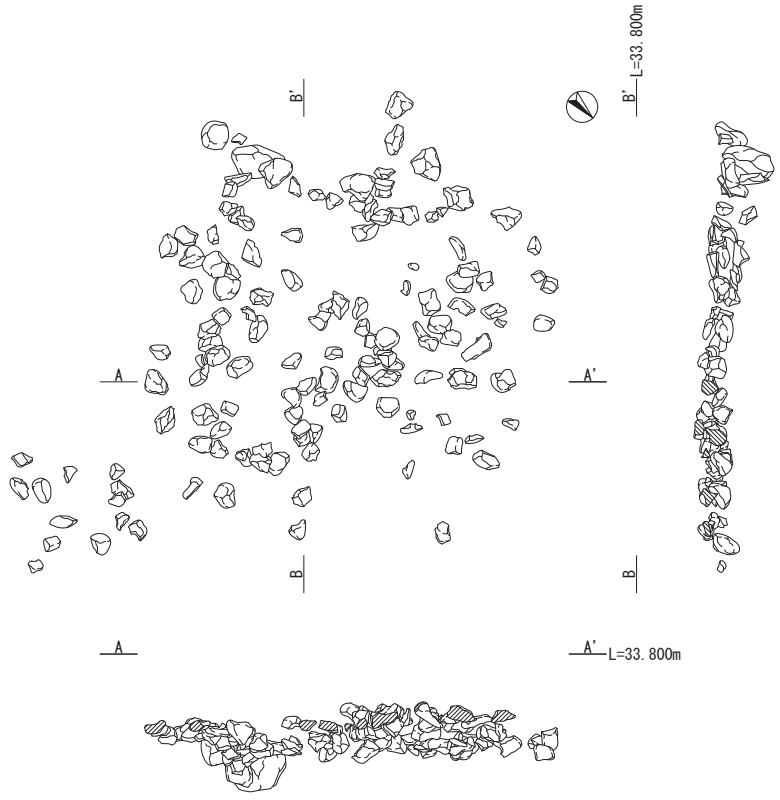
集石83号



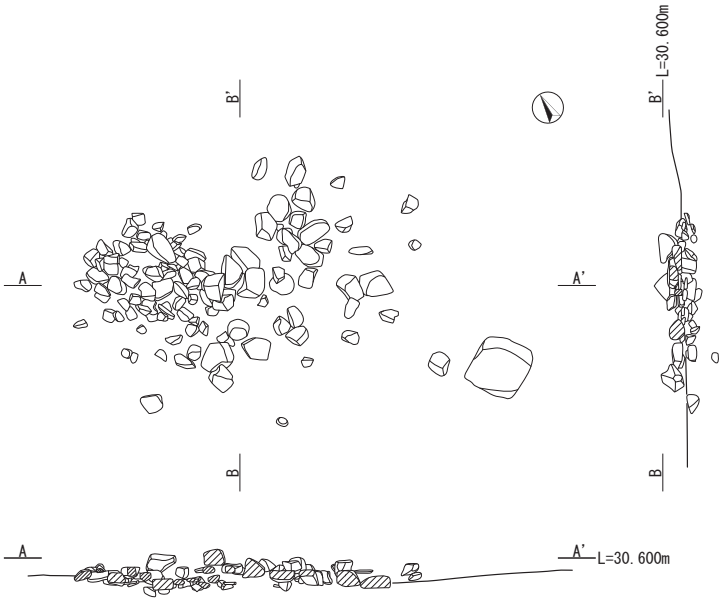
集石84号

0 1m

第47図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石23



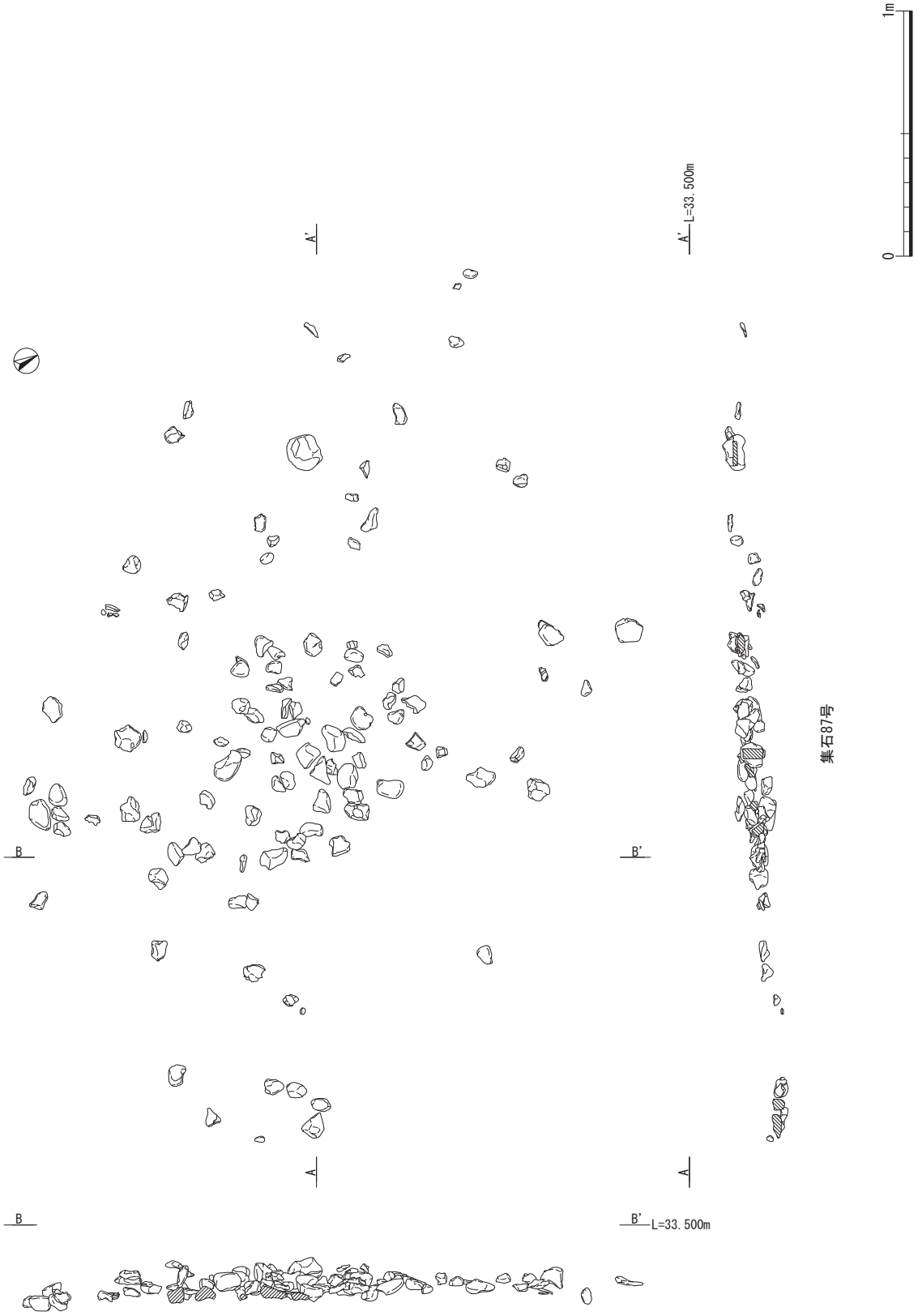
集石85号



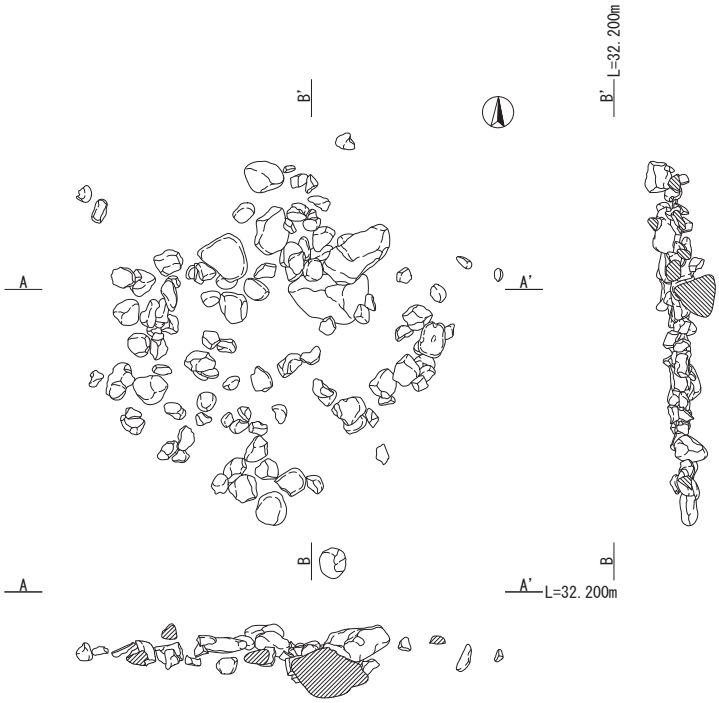
集石86号

0 1m

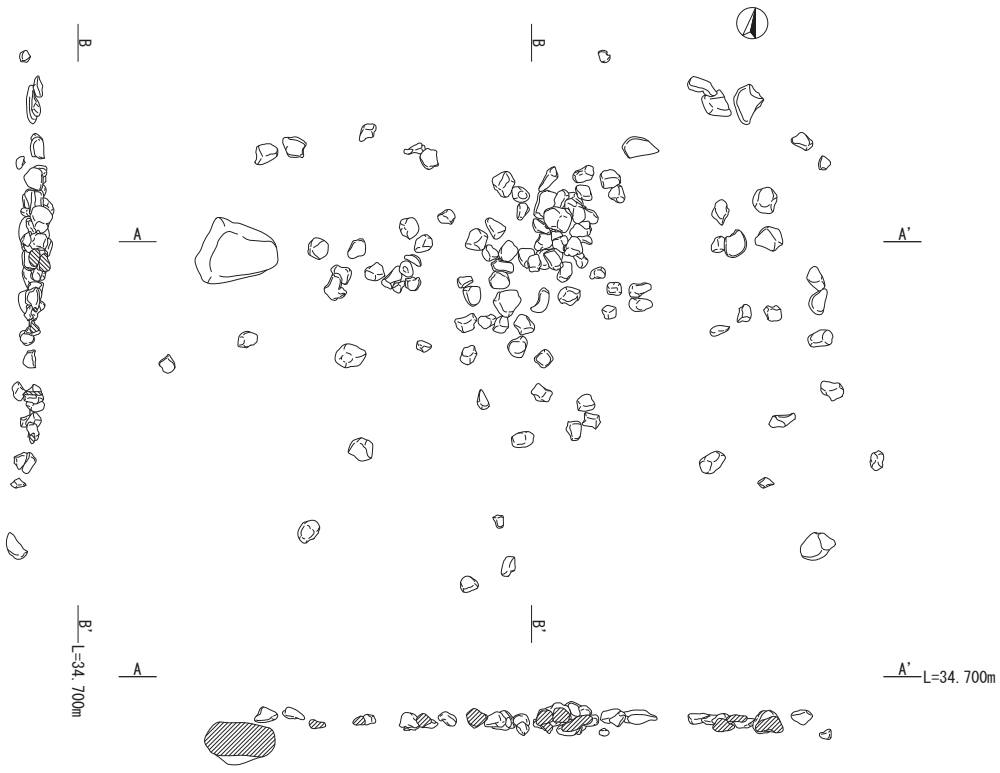
第48図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石24



第49図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石25



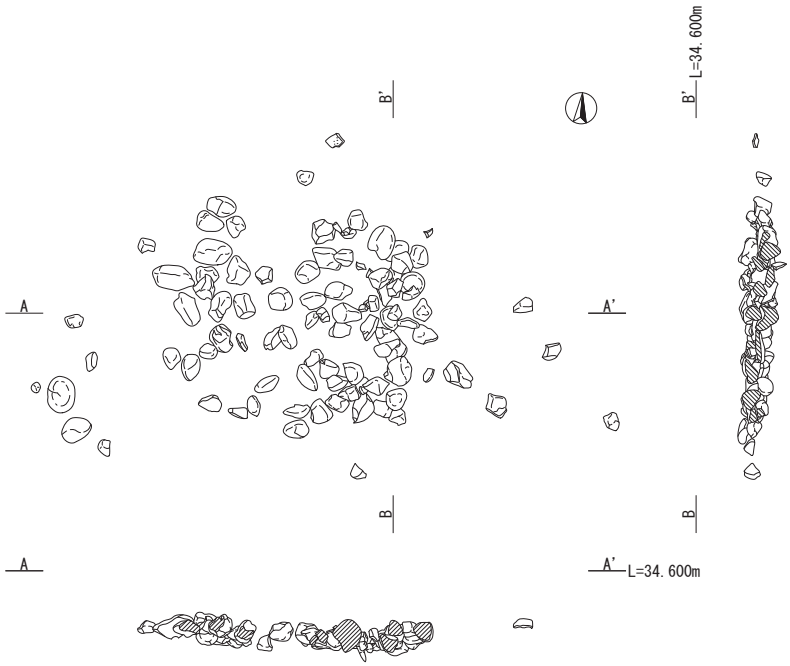
集石88号



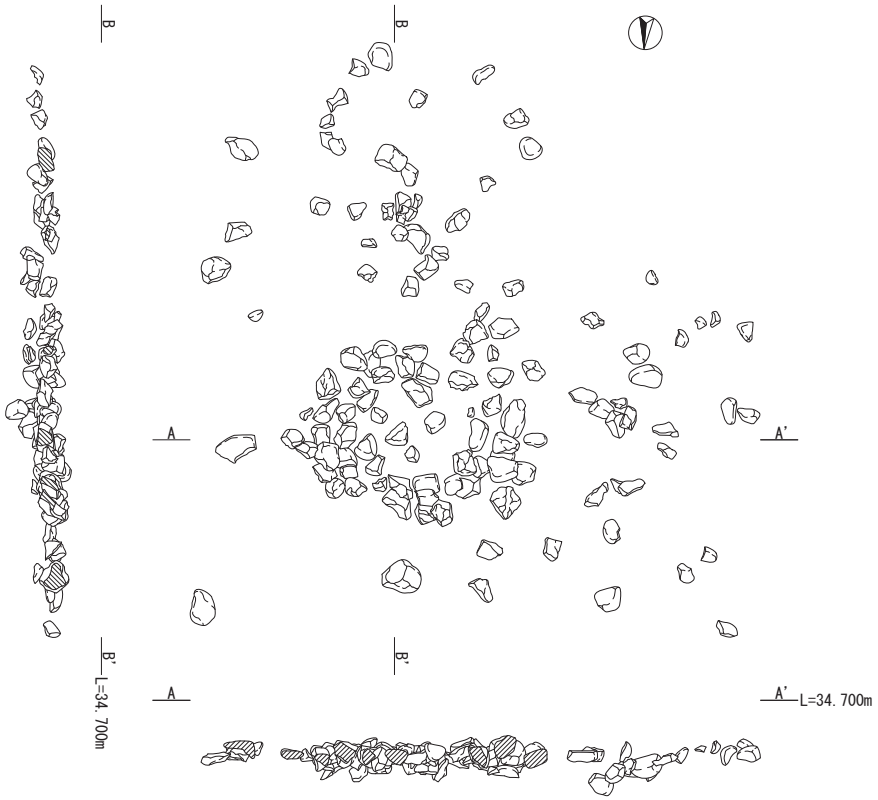
集石89号



第50図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石26



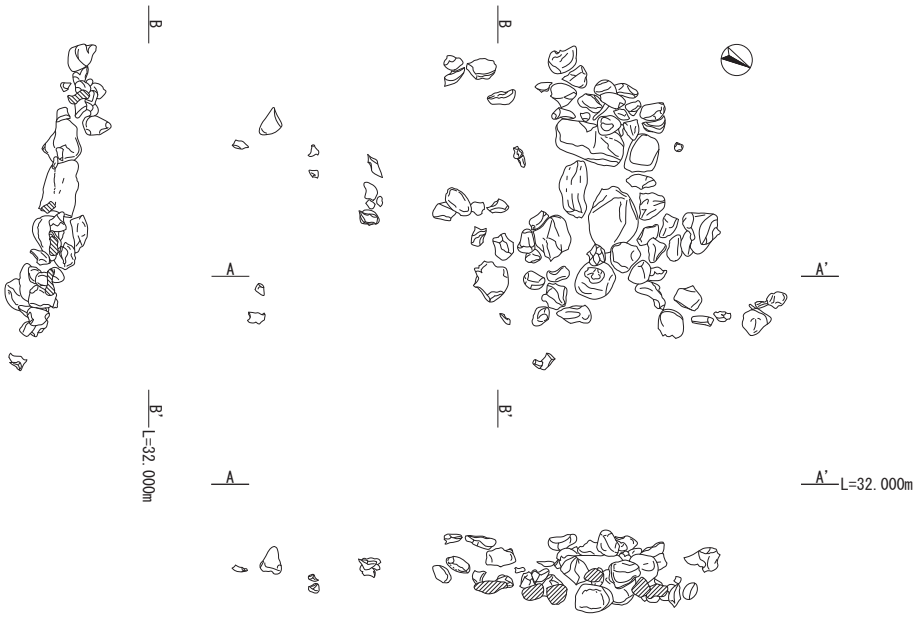
集石90号



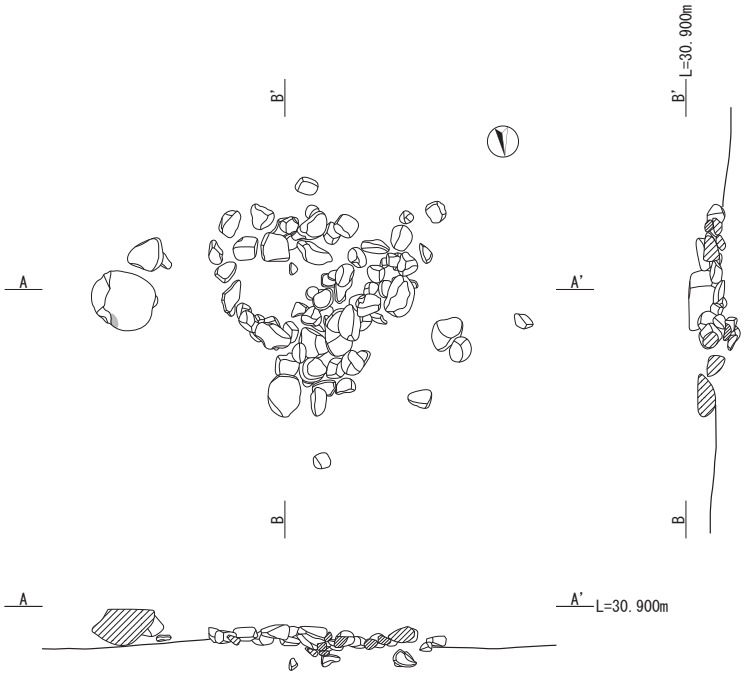
集石91号



第51図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石27



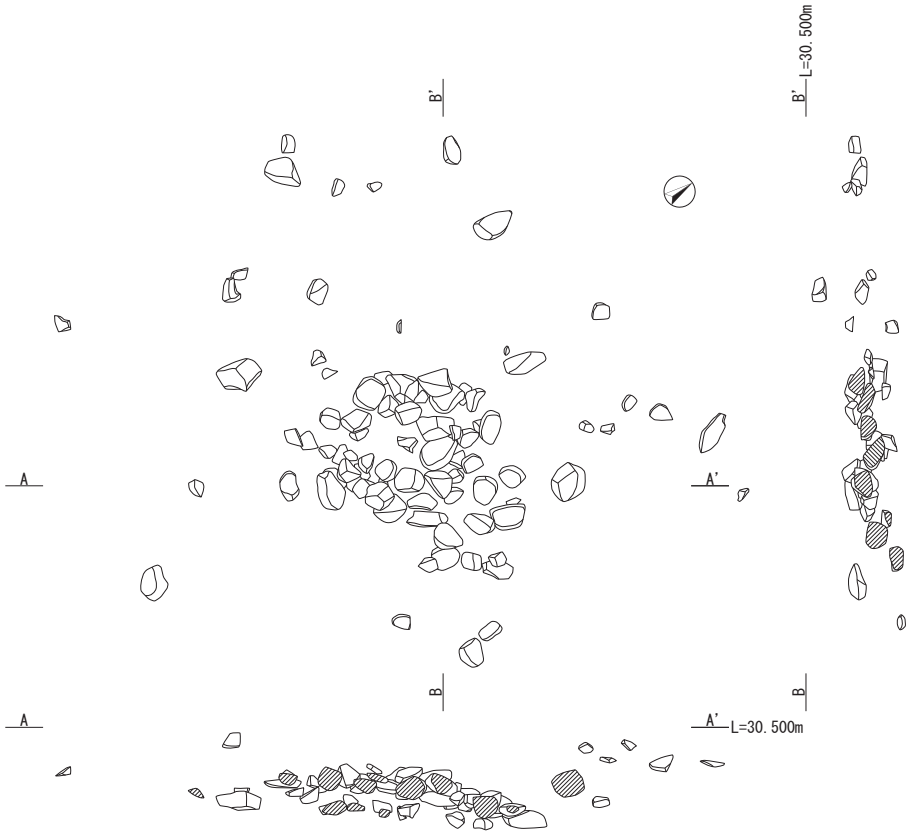
集石92号



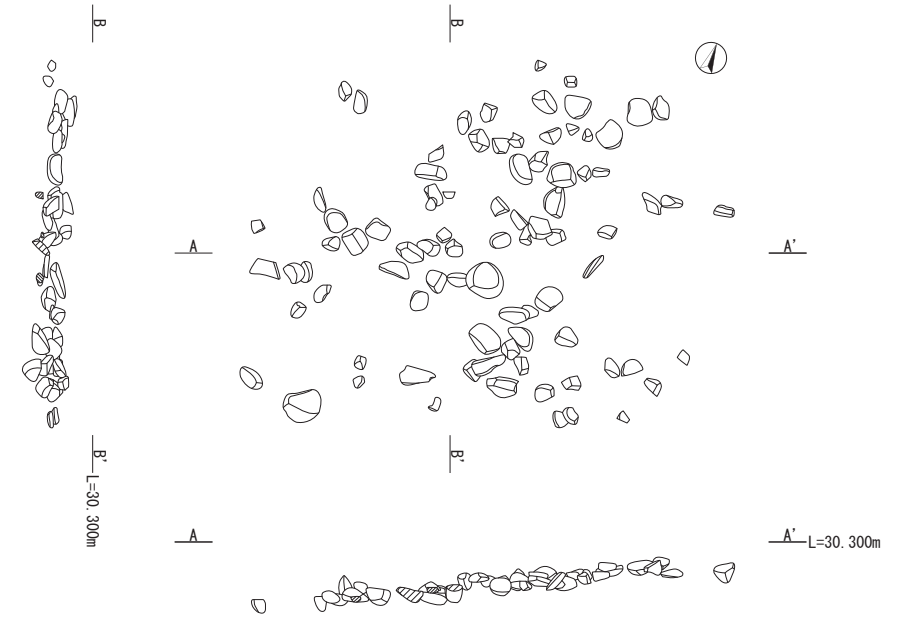
集石93号



第52図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石28



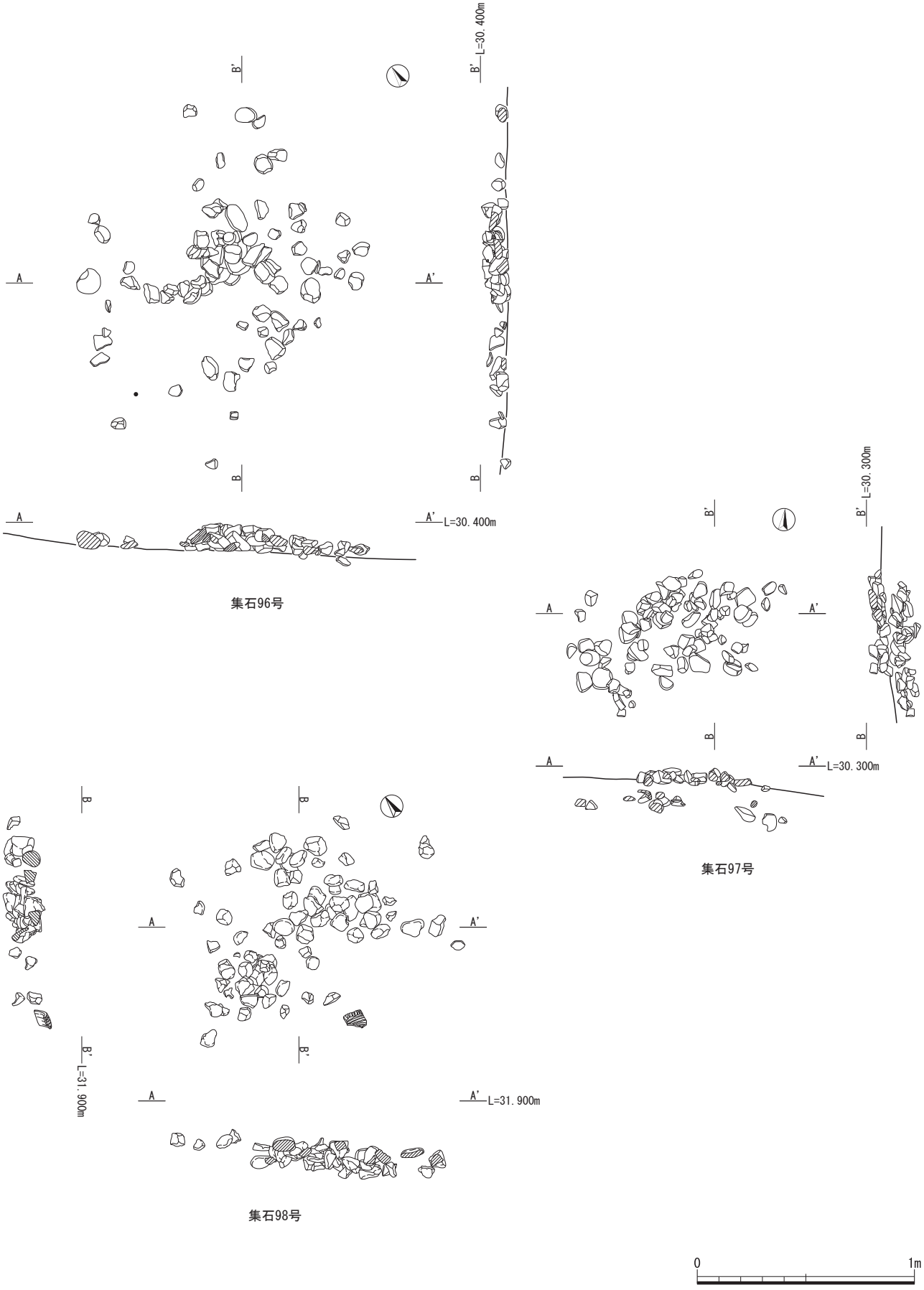
集石94号



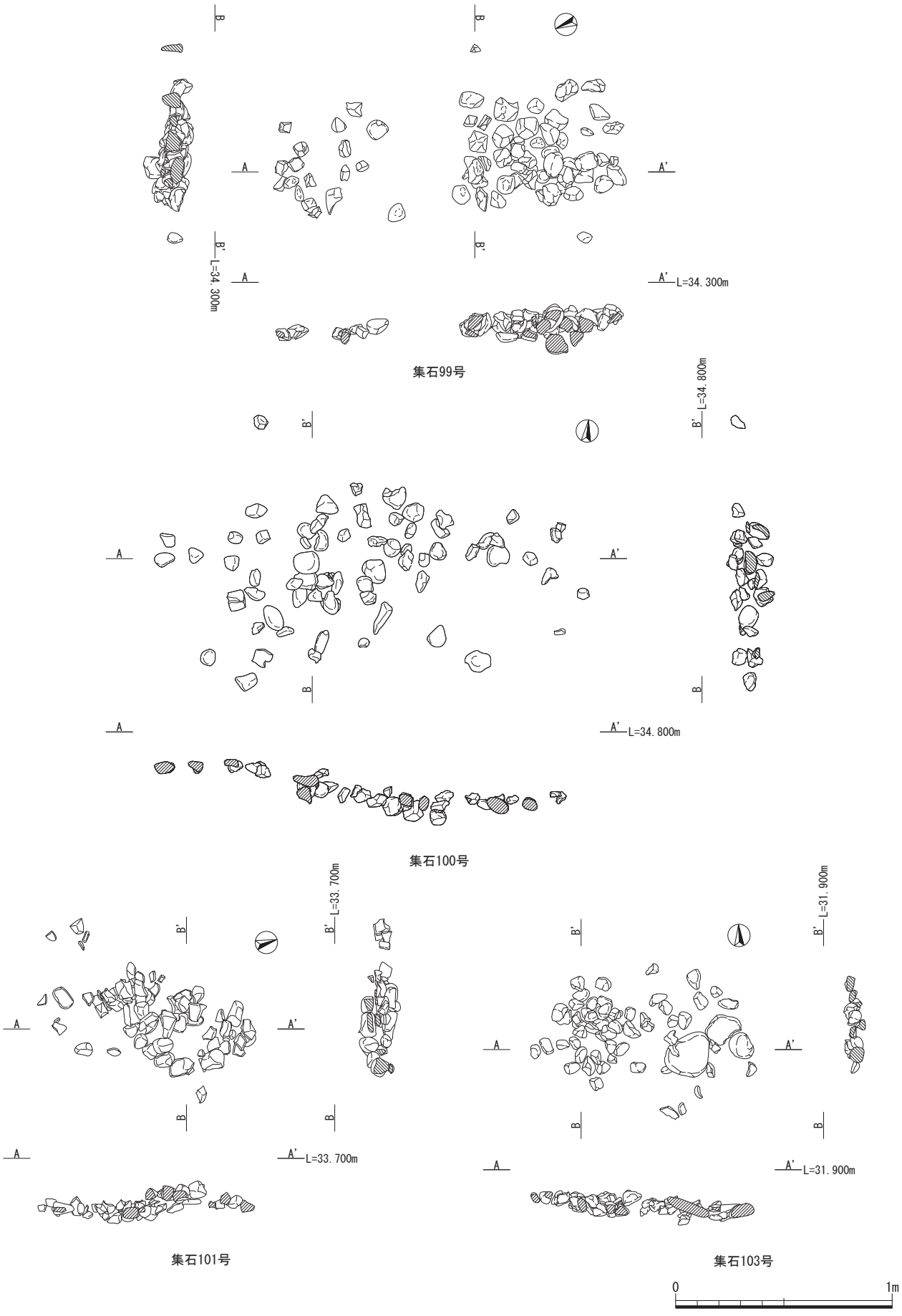
集石95号



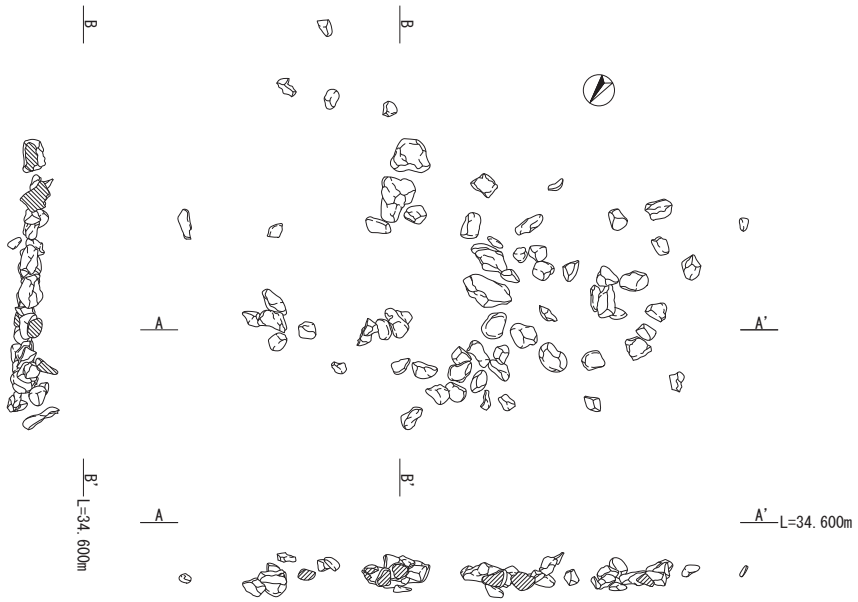
第53図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石29



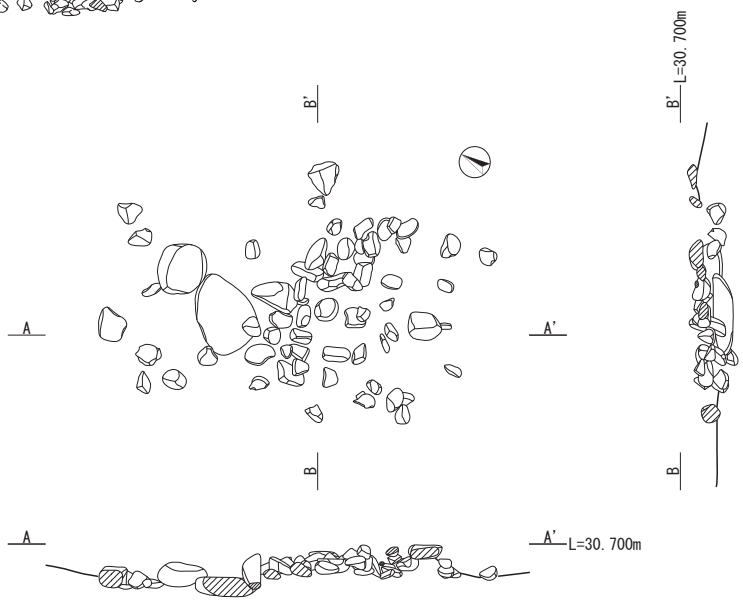
第54図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石30



第55図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石31



集石102号



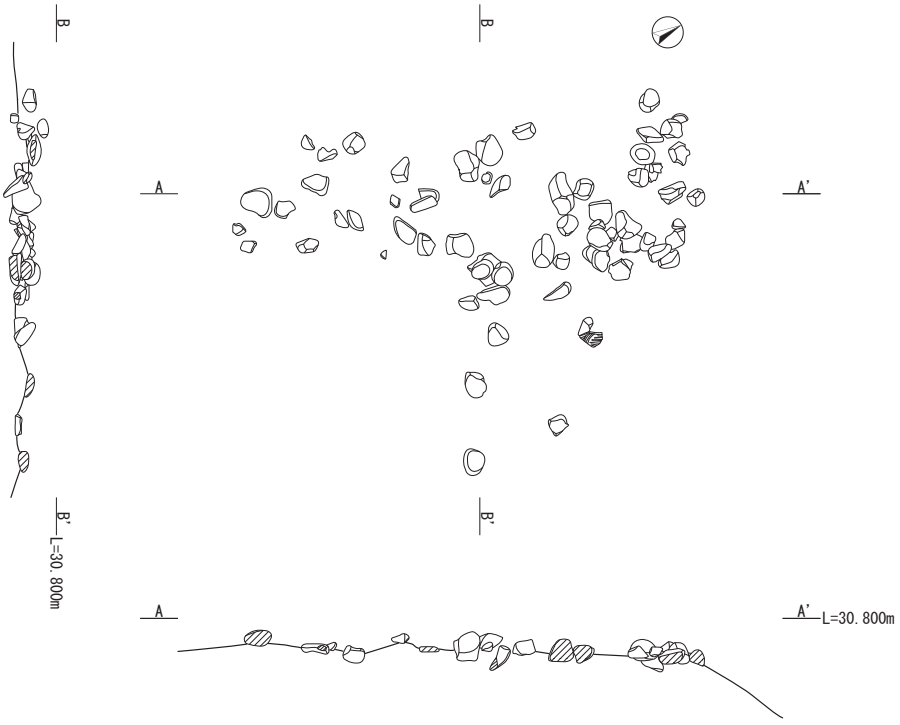
集石104号



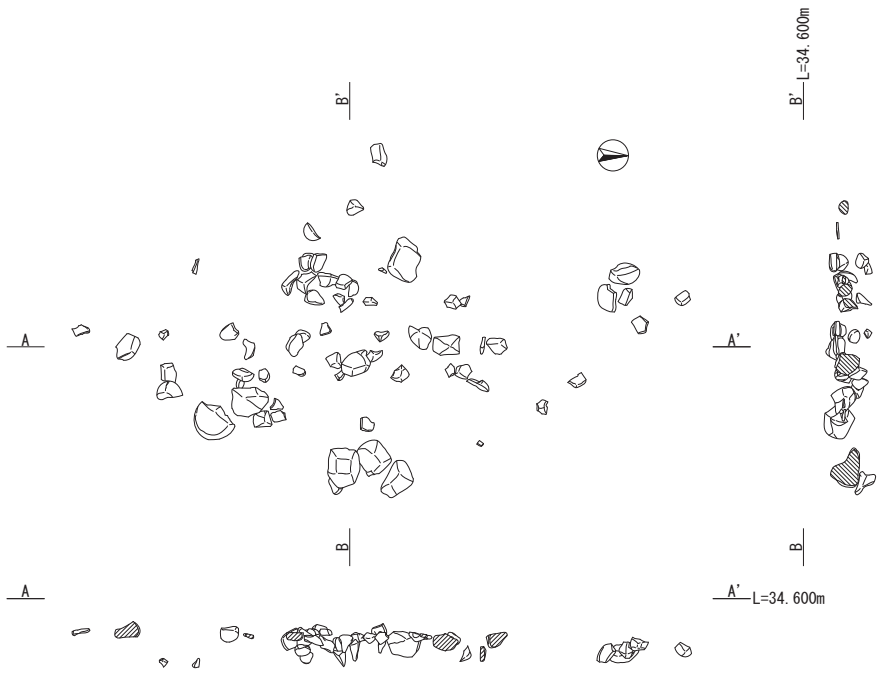
集石107号

0 1m

第56図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石32



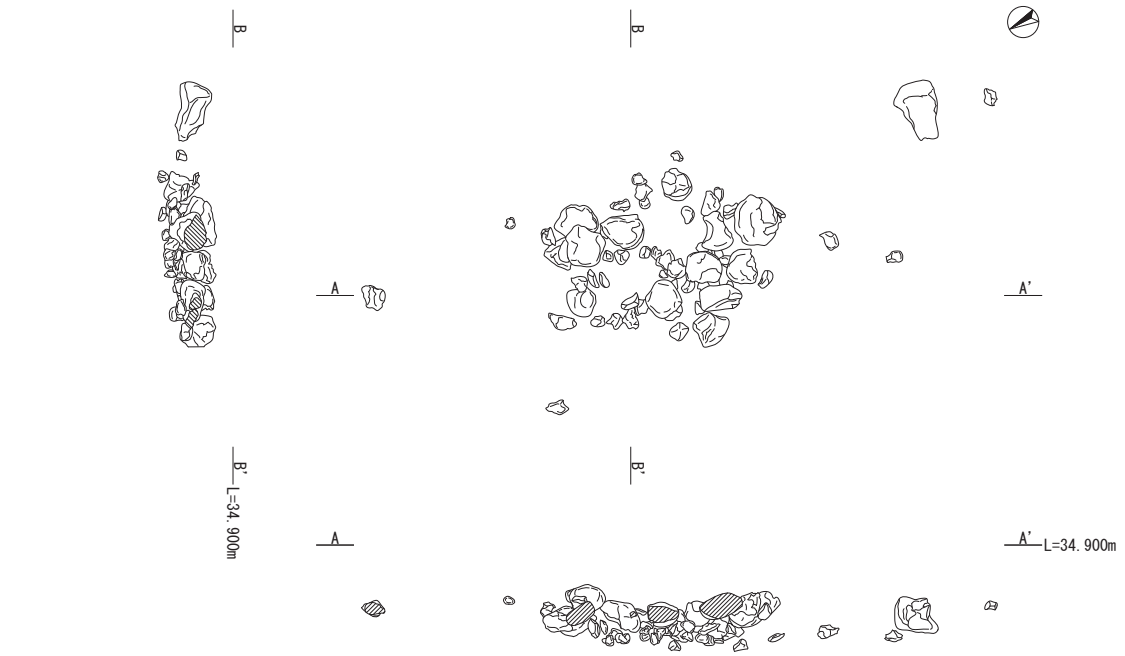
集石105号



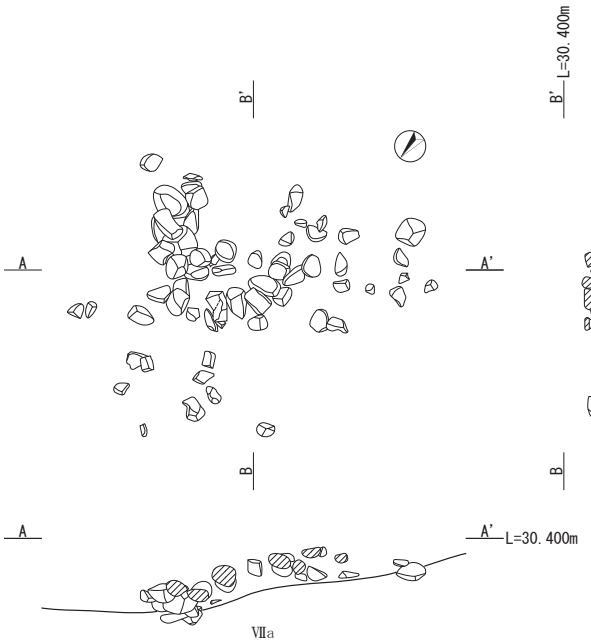
集石106号



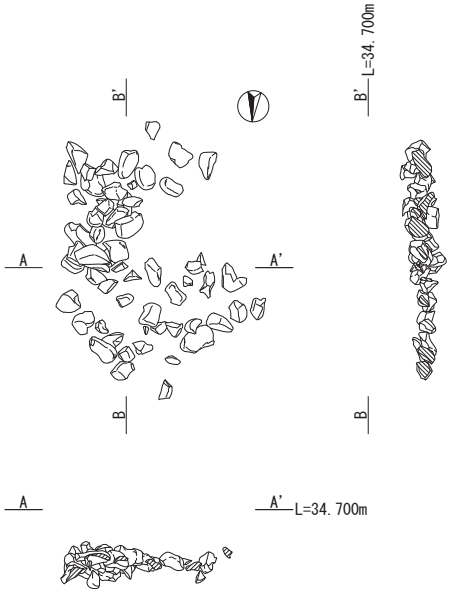
第57図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石33



集石108号



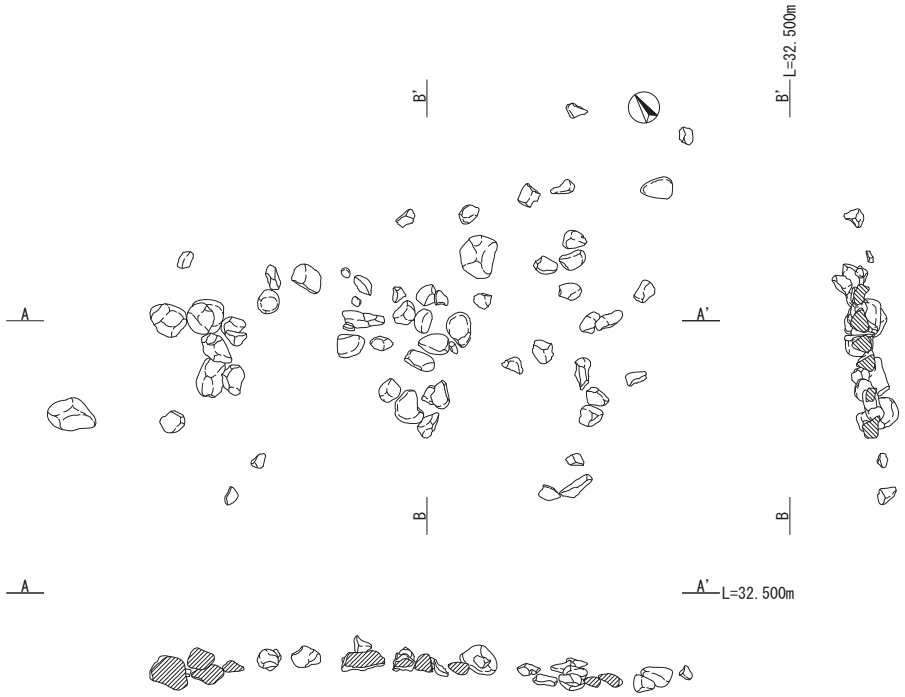
集石109号



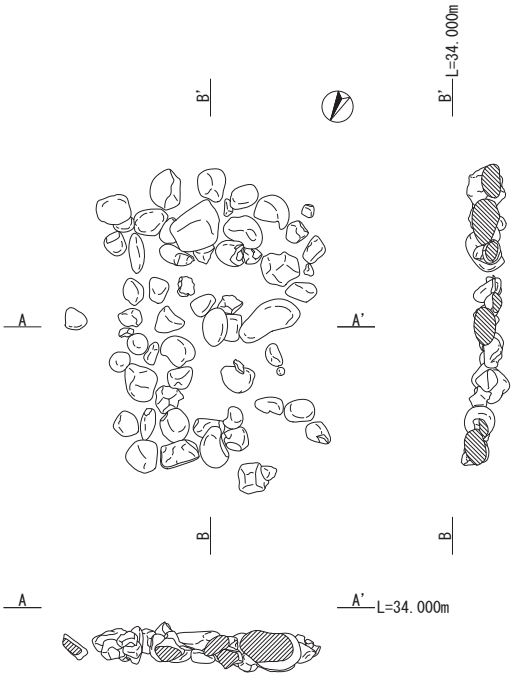
集石110号



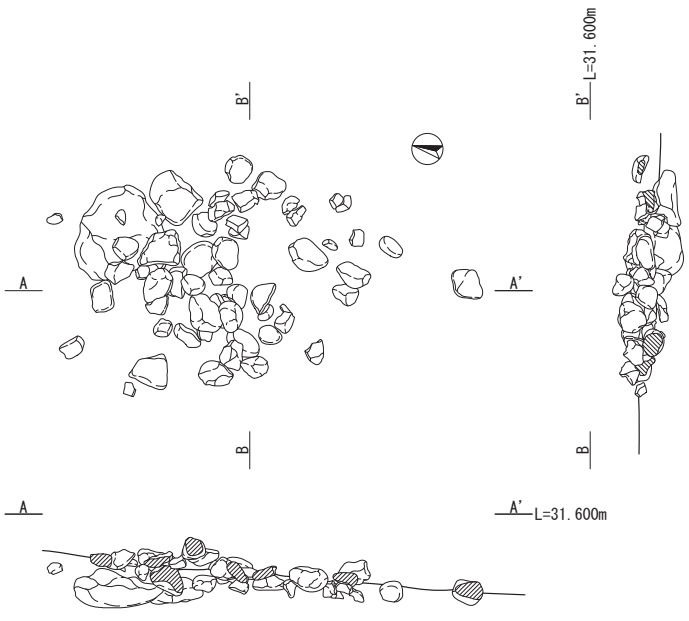
第58図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石34



集石111号



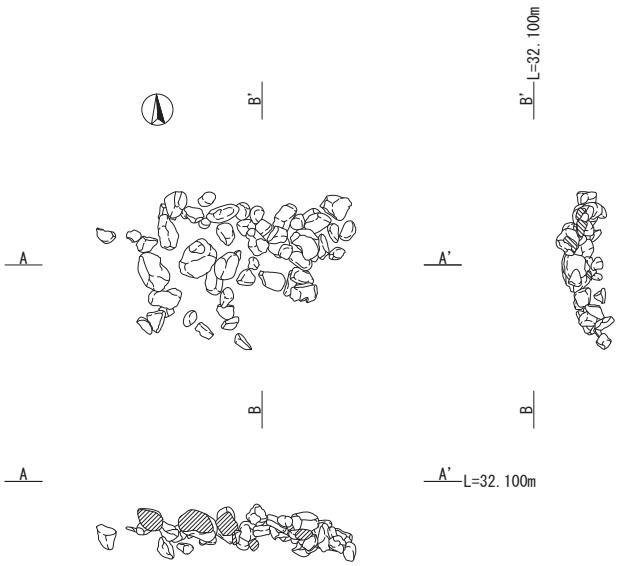
集石112号



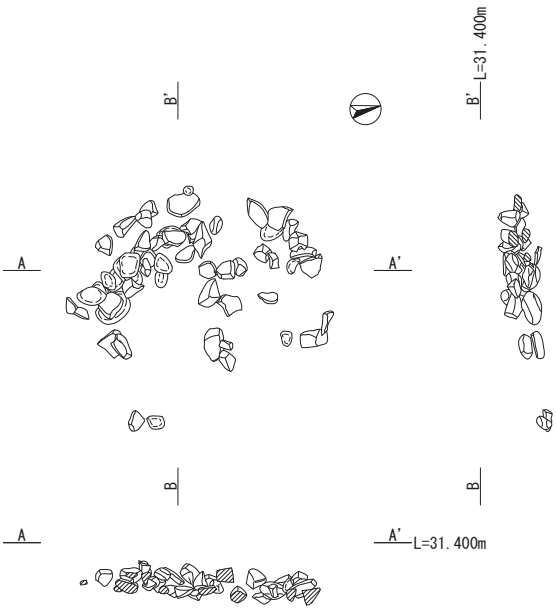
集石113号



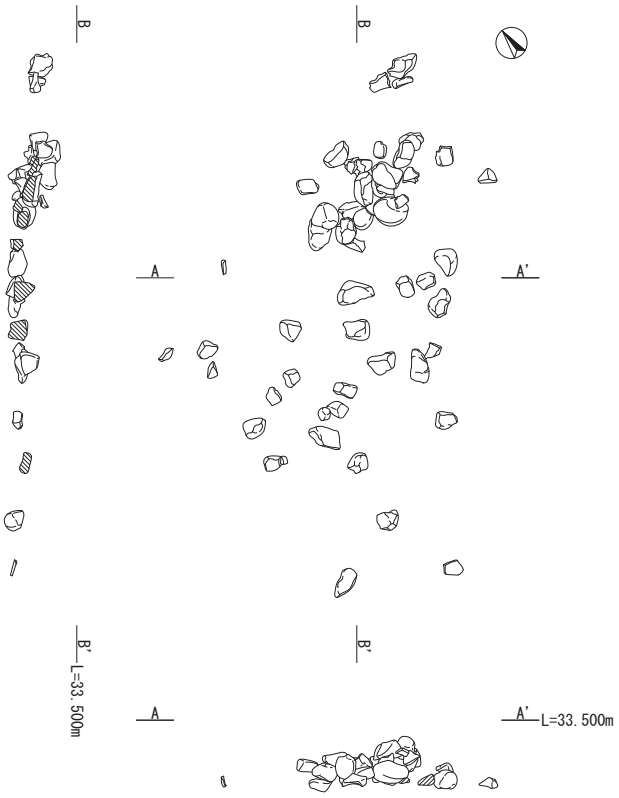
第59図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石35



集石114号



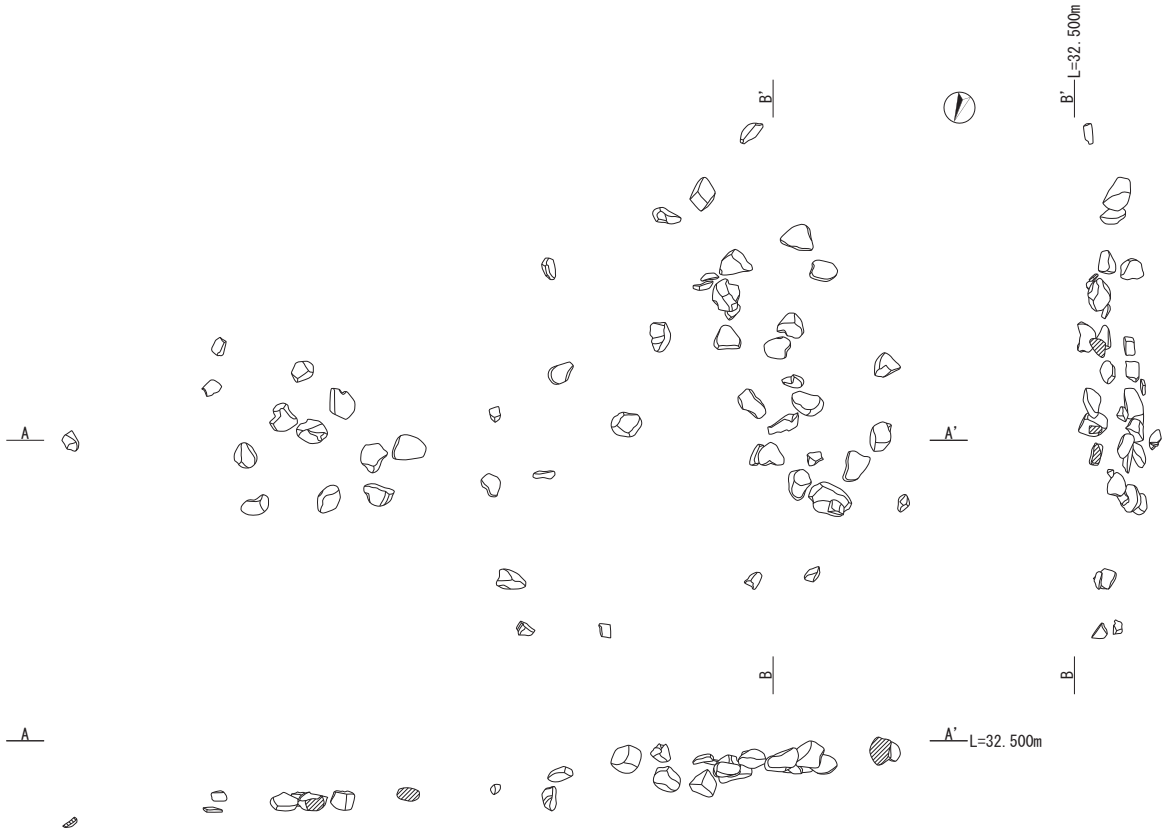
集石115号



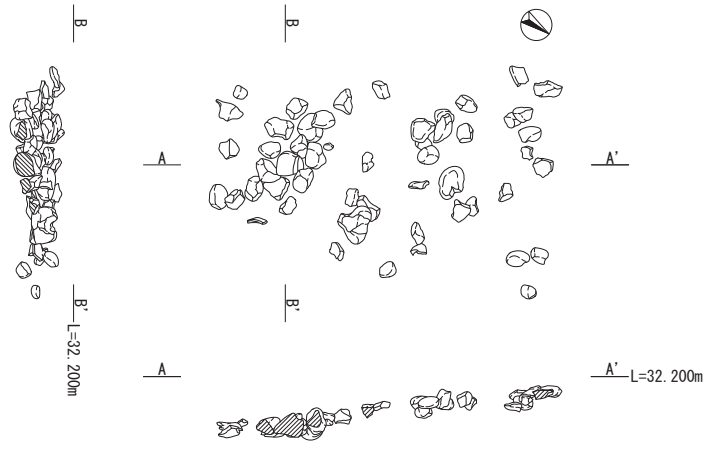
集石116号

0 1m

第60図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石36



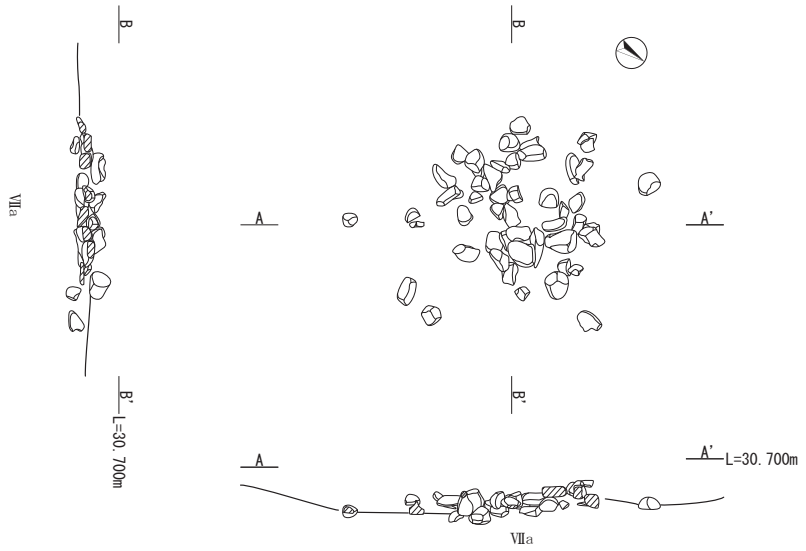
集石117号



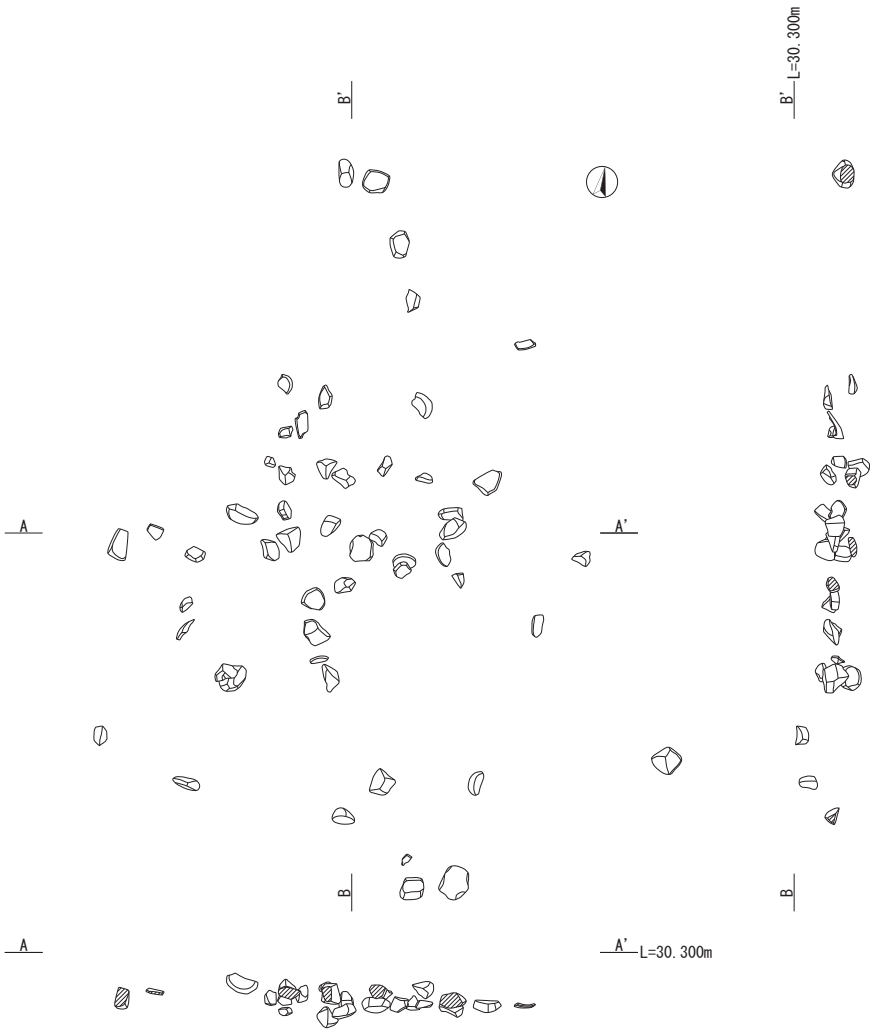
集石118号



第61図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石37



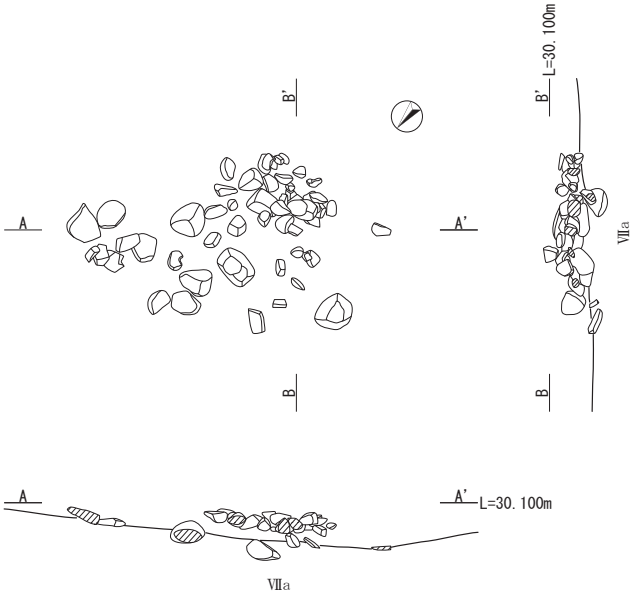
集石119号



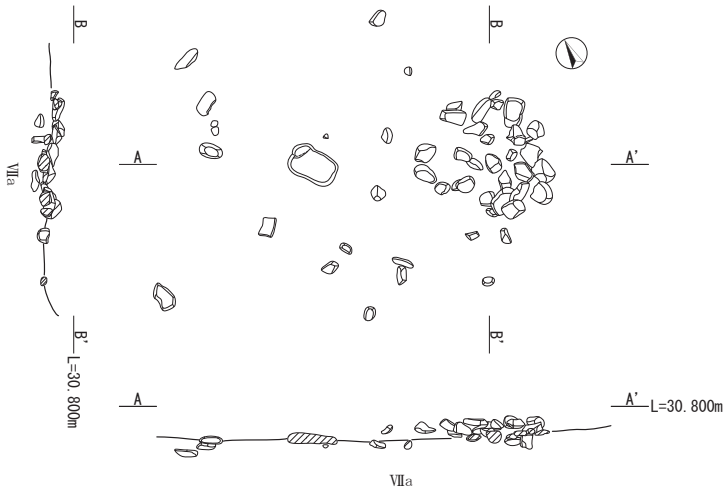
集石120号

0 1m

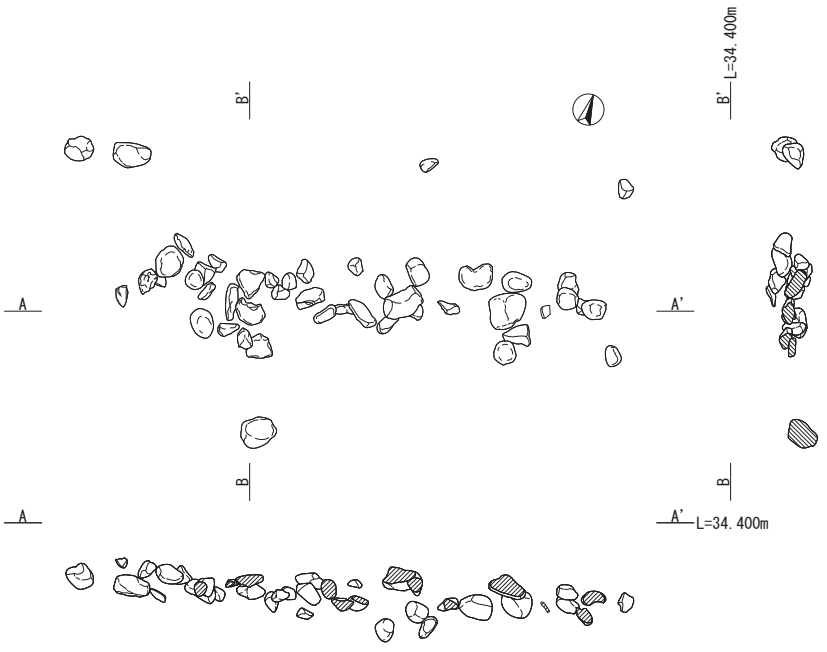
第62図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石38



集石121号



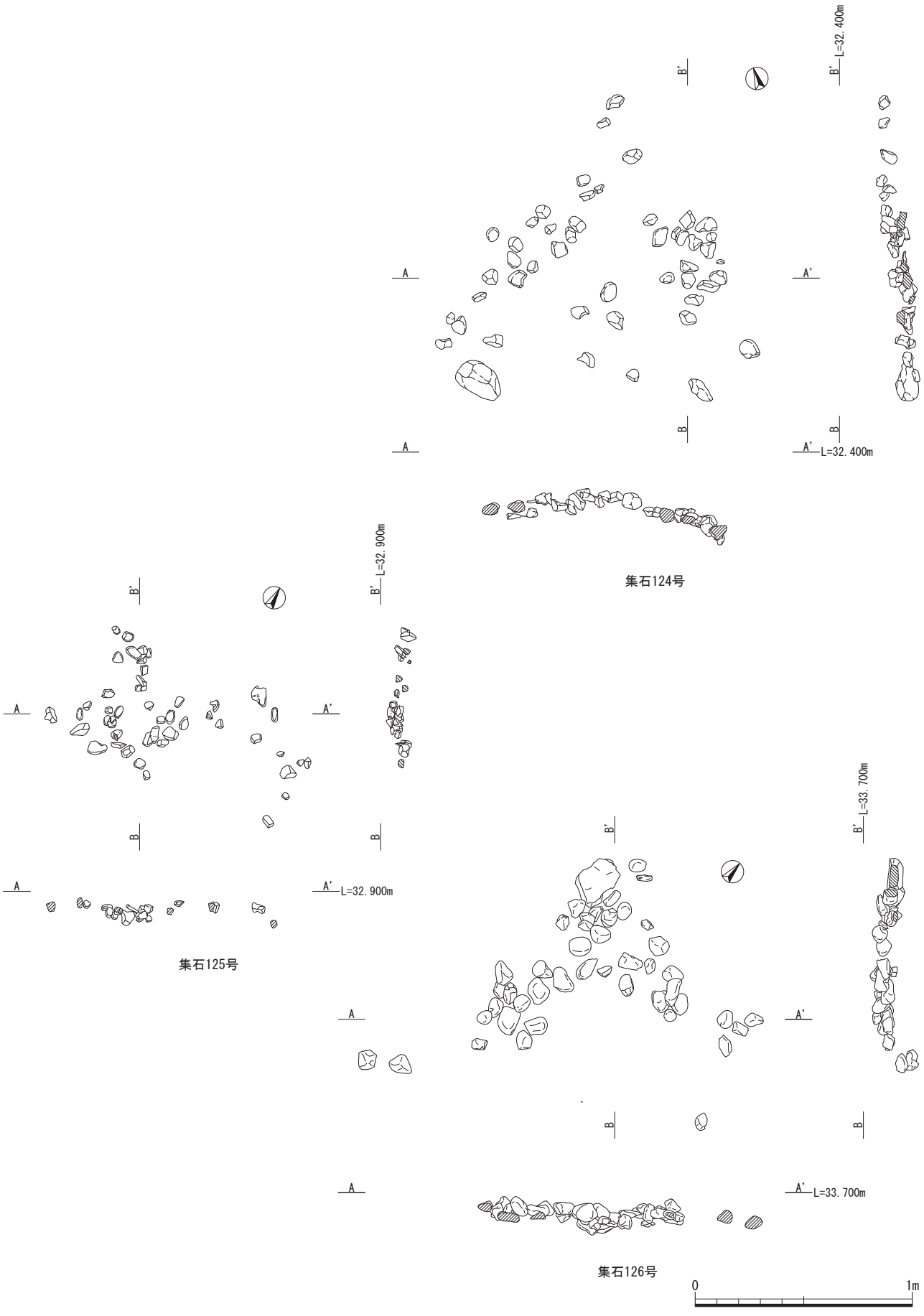
集石122号



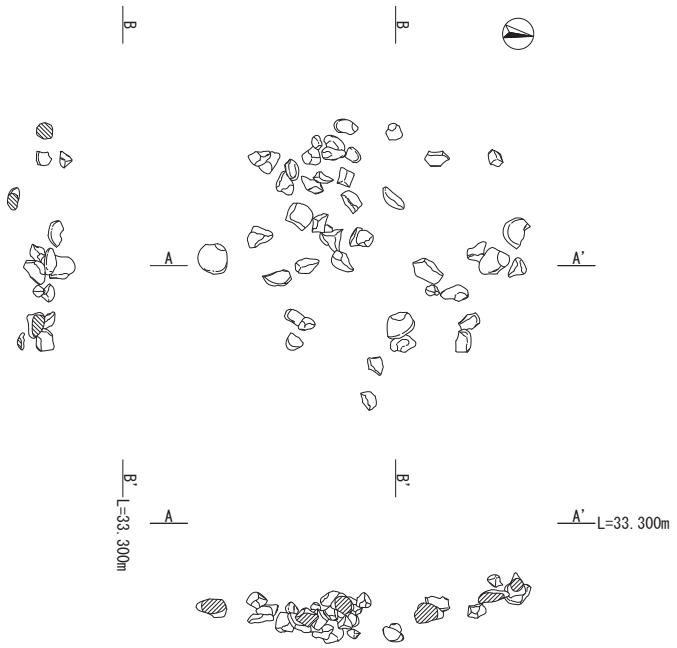
集石123号



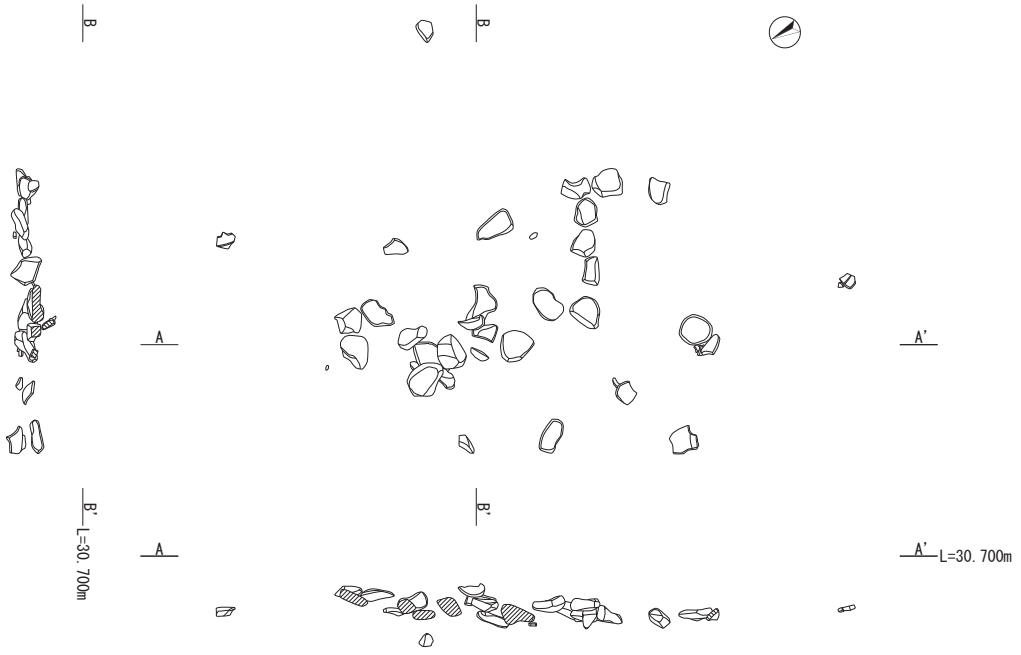
第63図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石39



第64図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石40



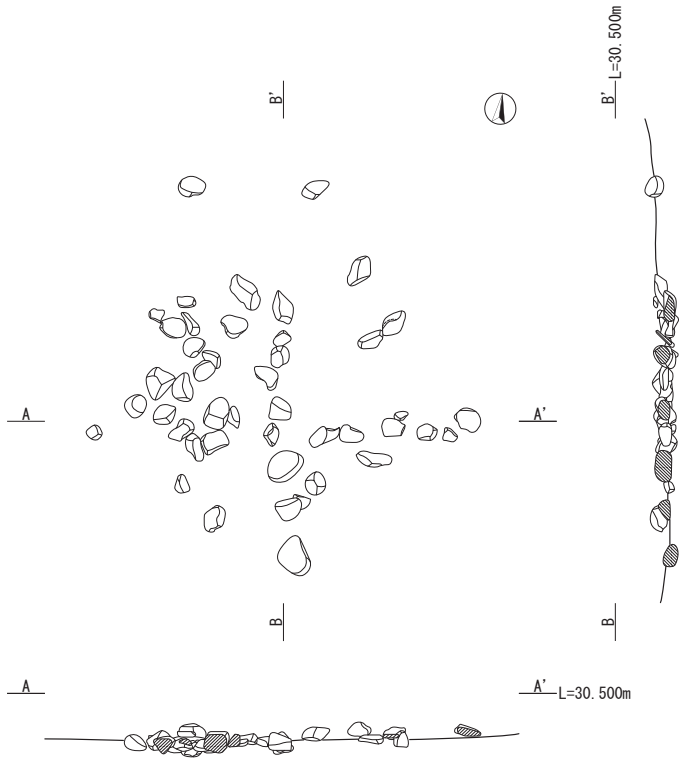
集石127号



集石128号



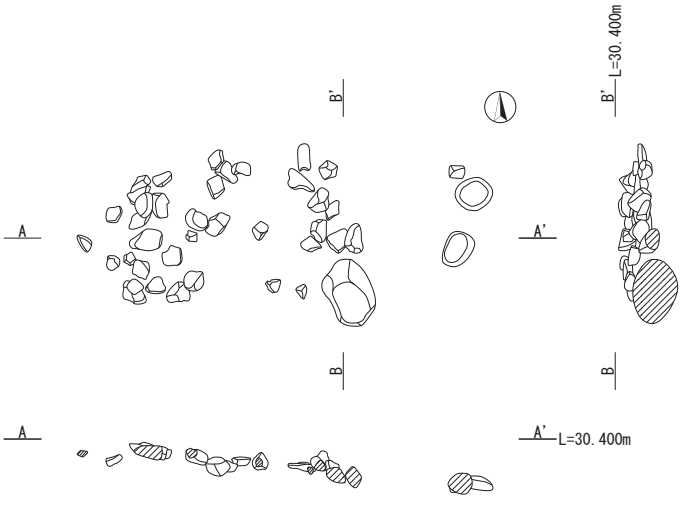
第65図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石41



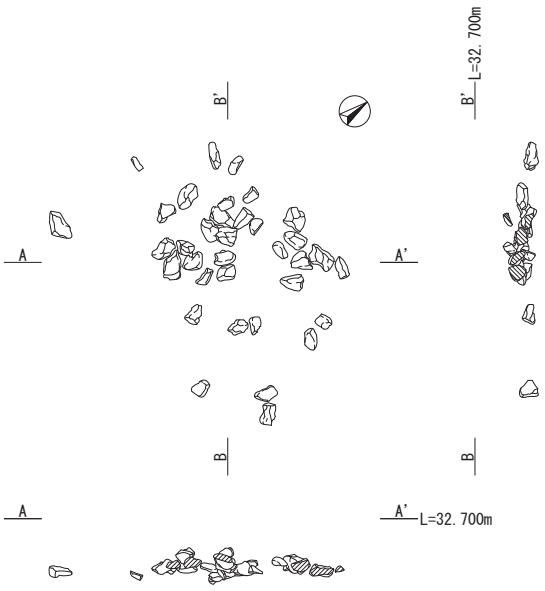
集石129号



集石130号



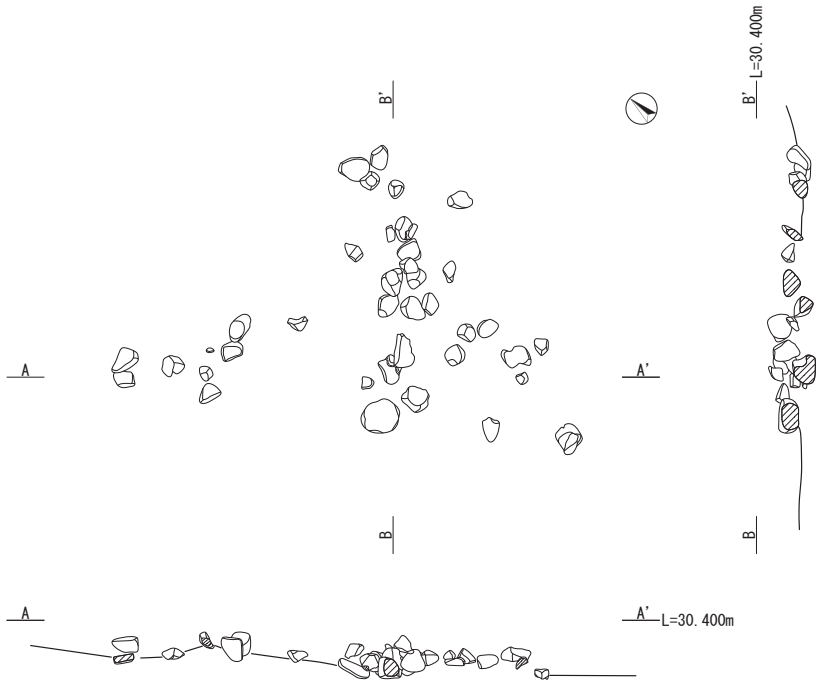
集石131号



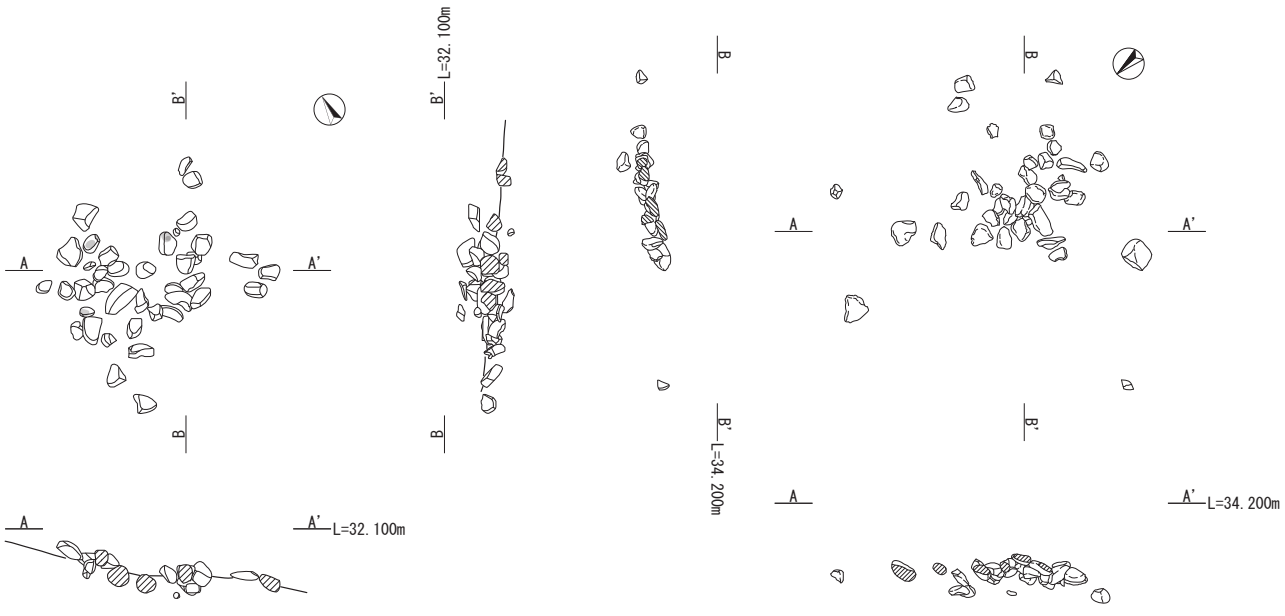
集石134号

0 1m

第66図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石42



集石132号

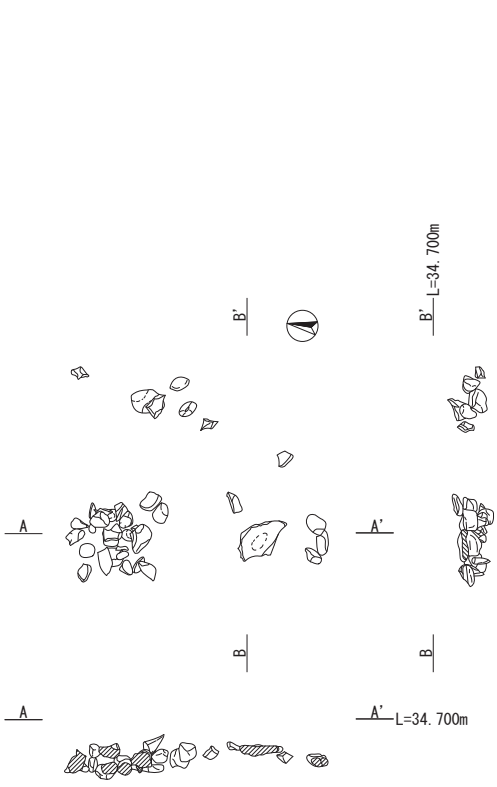


集石133号

集石135号



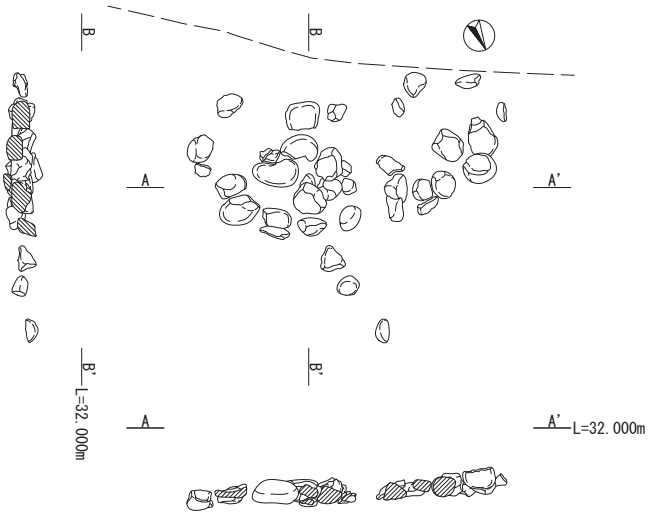
第67図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石43



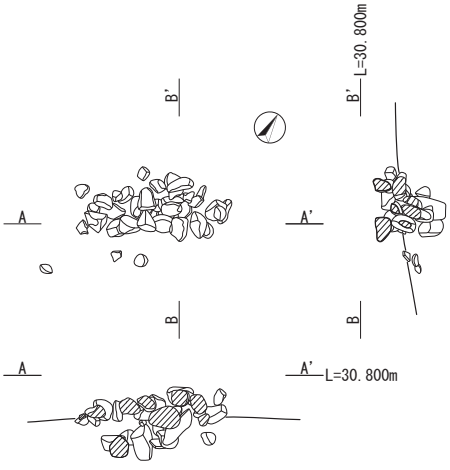
集石136号



集石137号



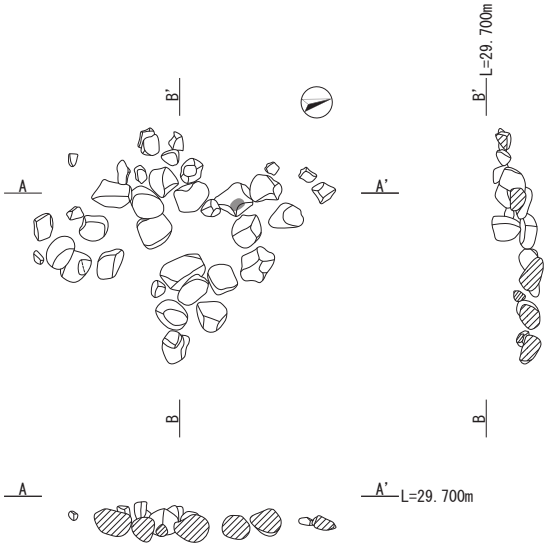
集石138号



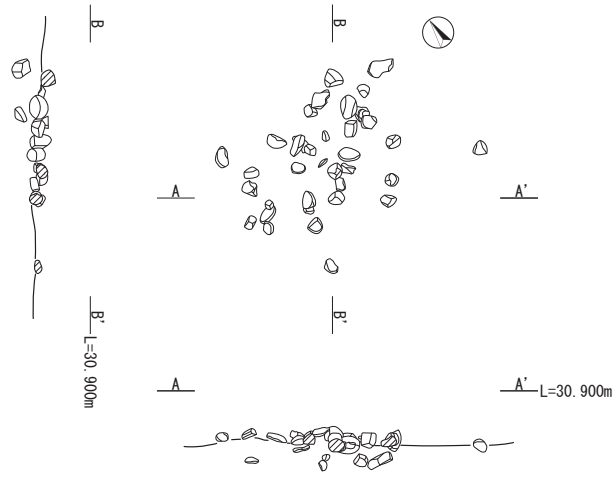
集石139号



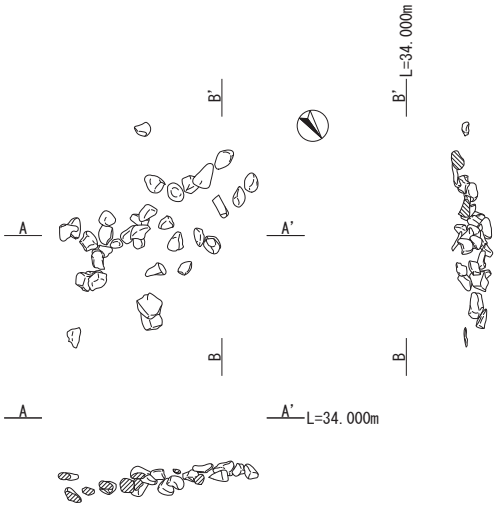
第68図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石44



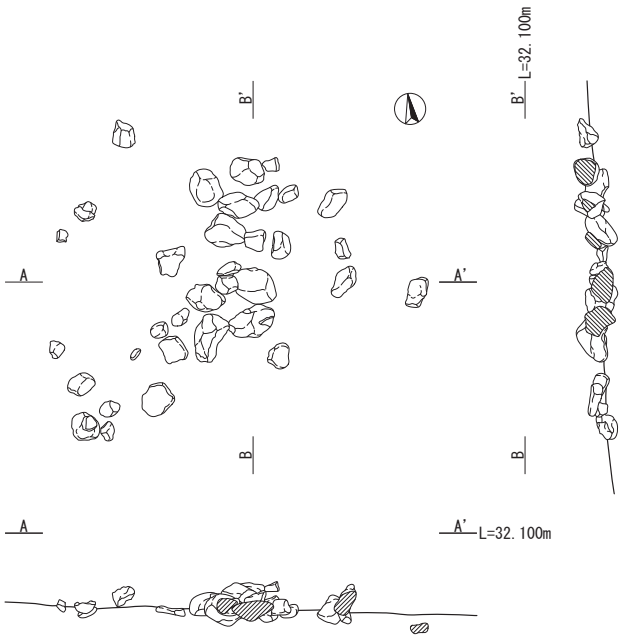
集石140号



集石141号



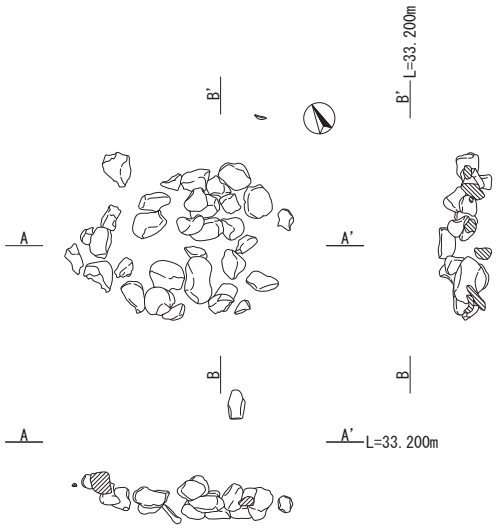
集石142号



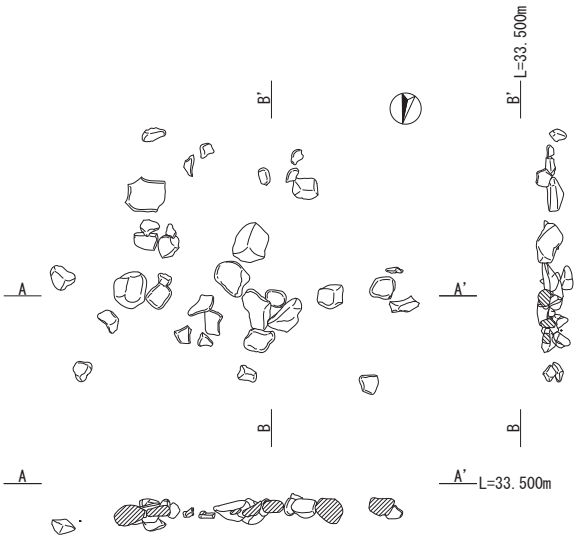
集石143号



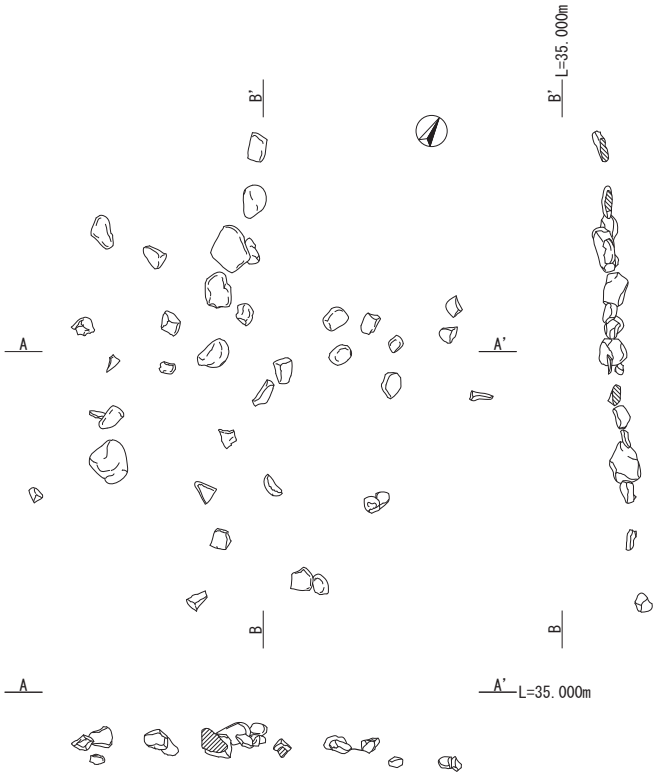
第69図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石45



集石144号



集石145号



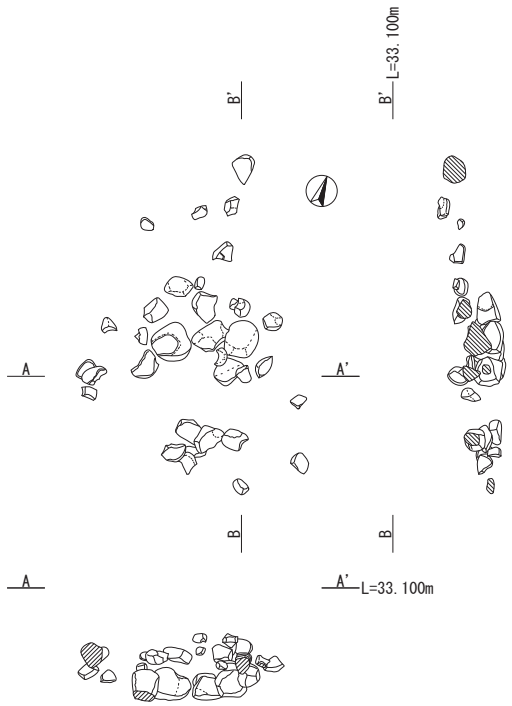
集石146号



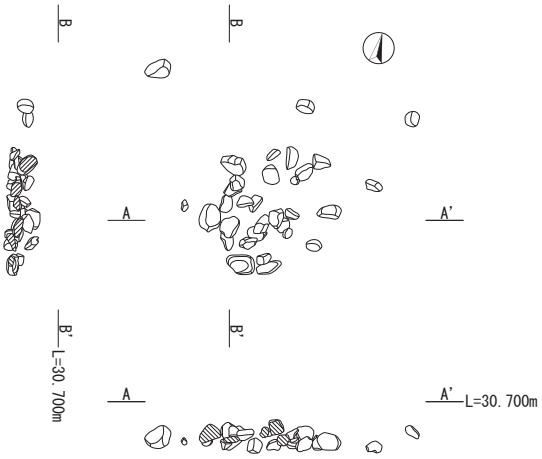
集石147号



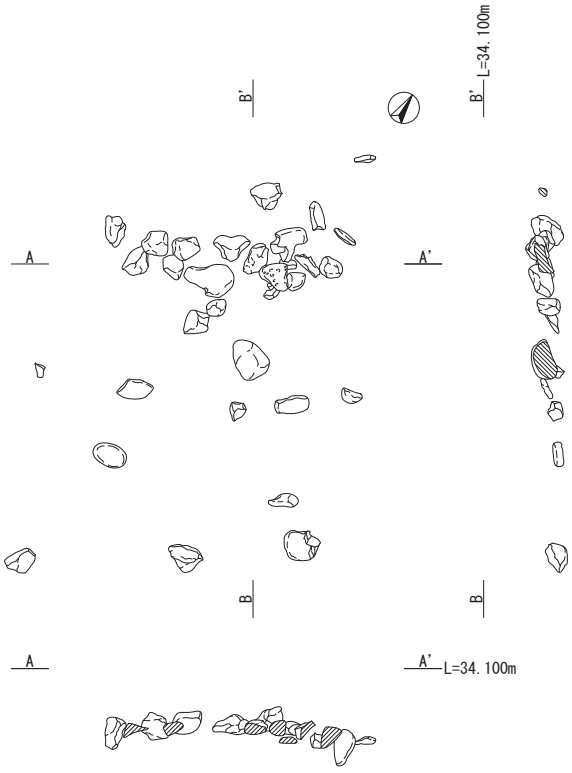
第70図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石46



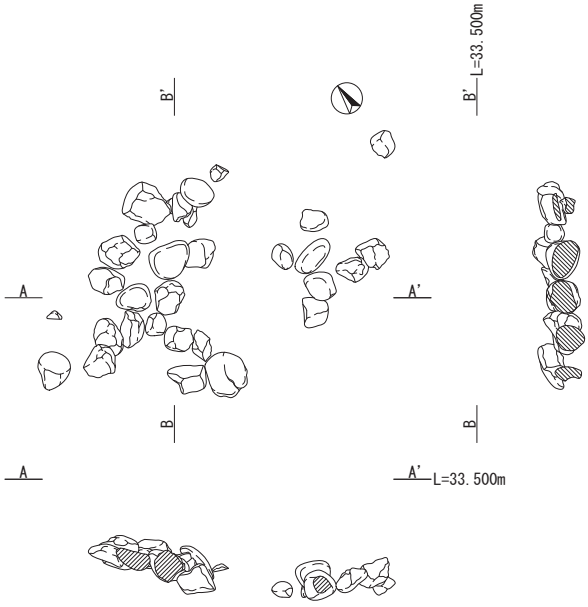
集石148号



集石149号



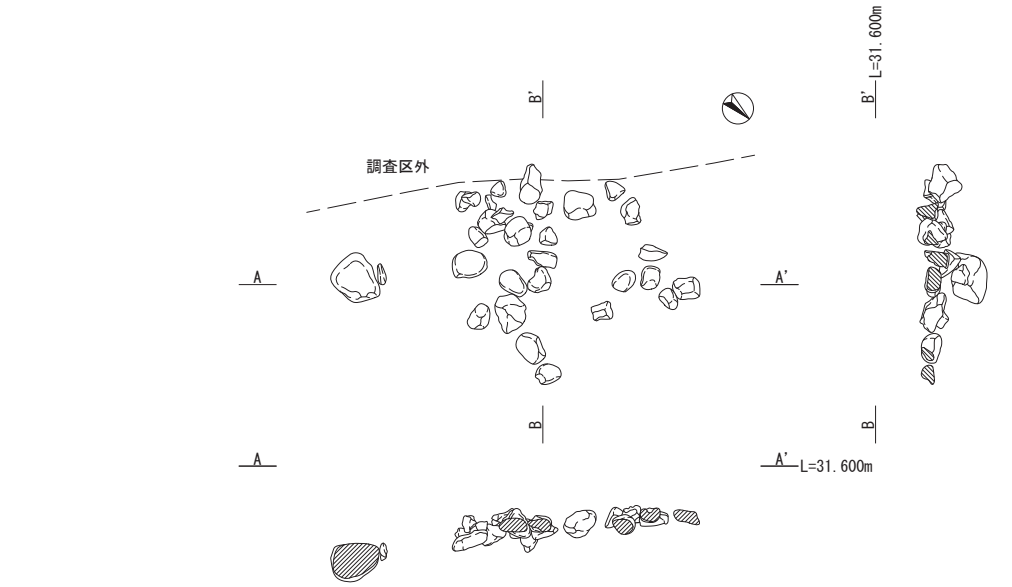
集石150号



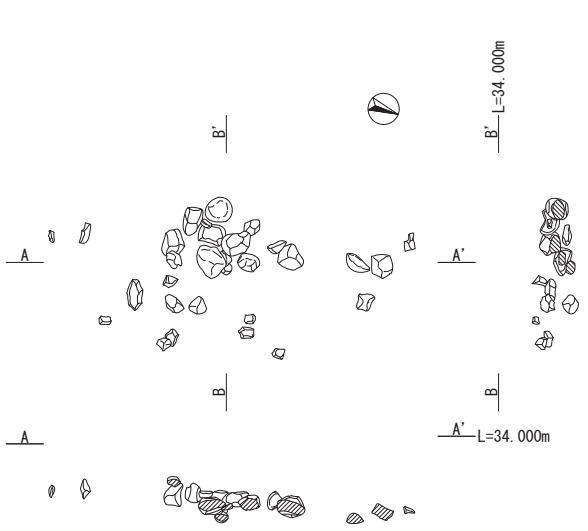
集石151号



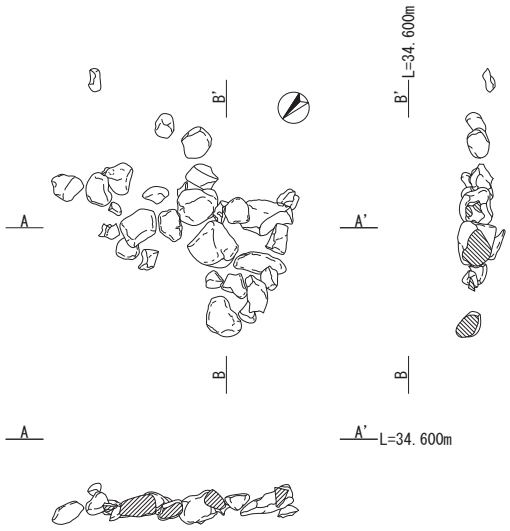
第71図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石47



集石152号



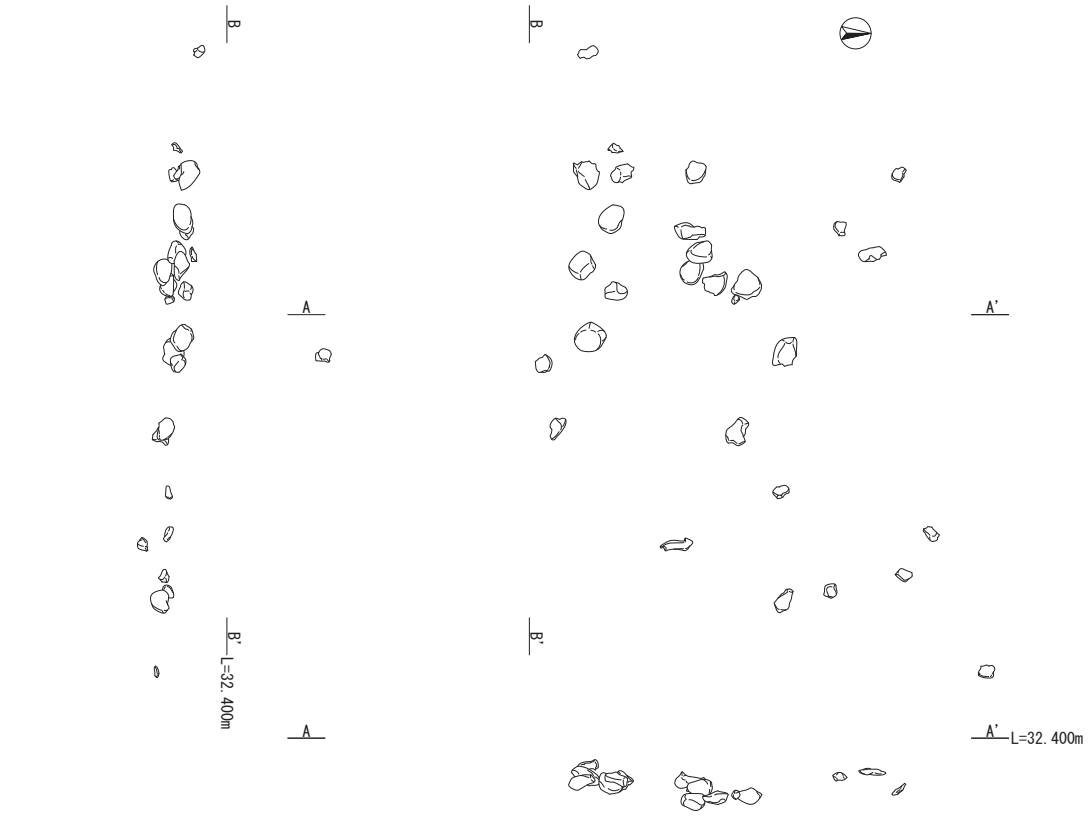
集石153号



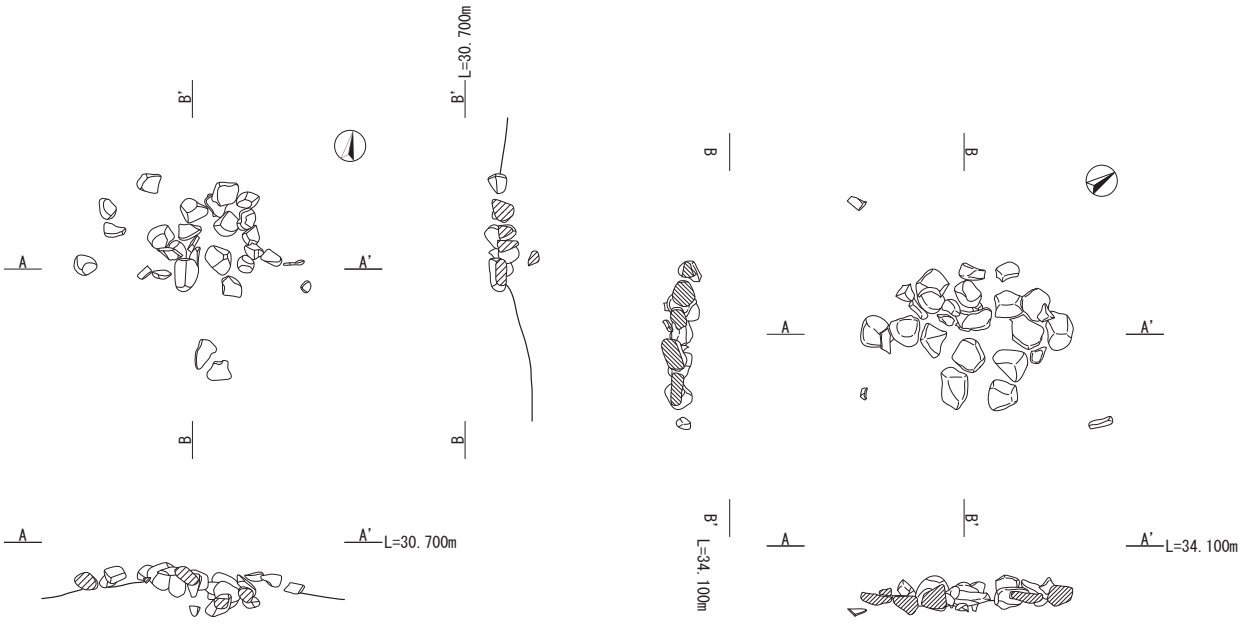
集石154号



第72図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石48



集石155号

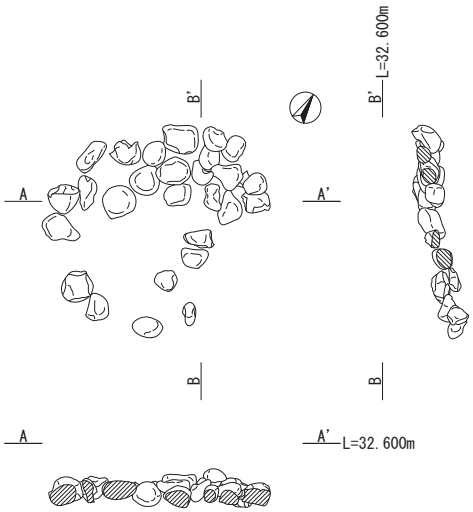


集石156号

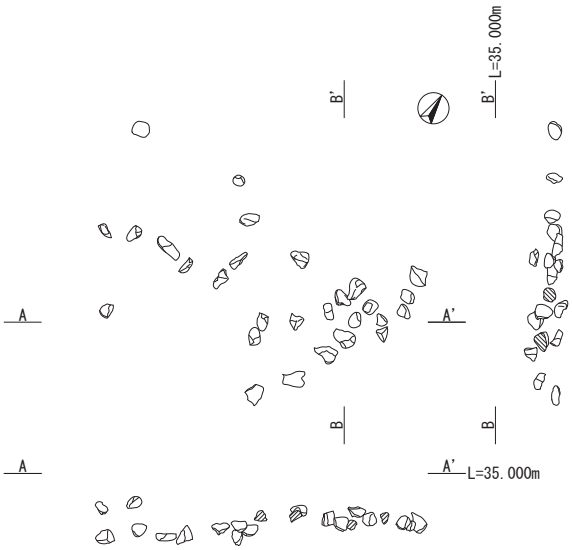
集石157号



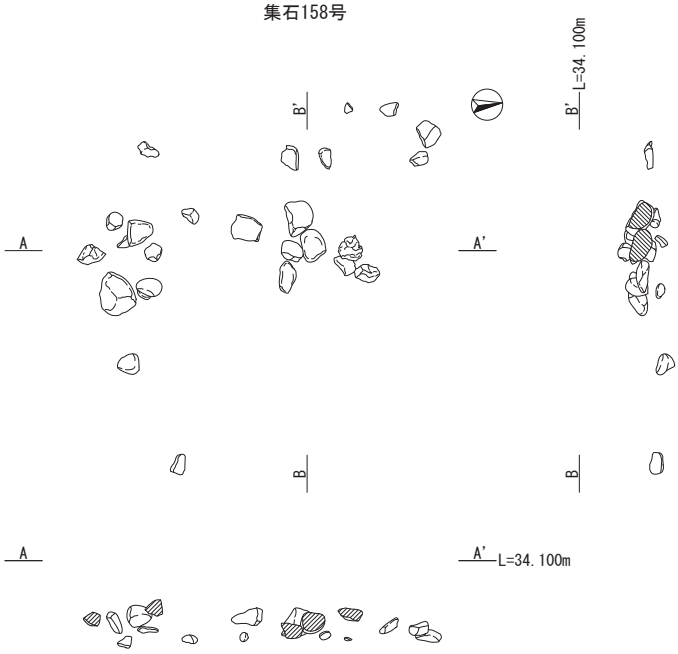
第73図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石49



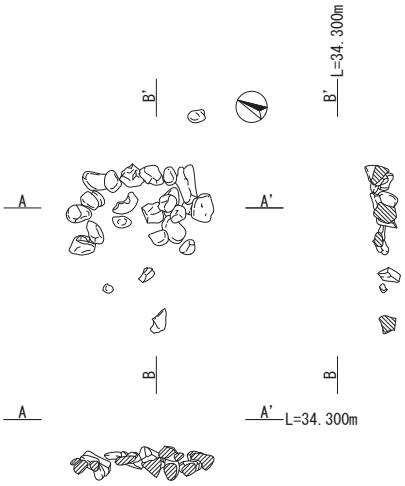
集石158号



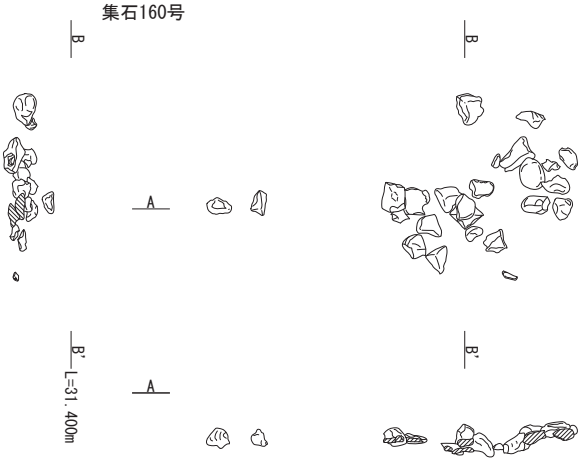
集石159号



集石160号



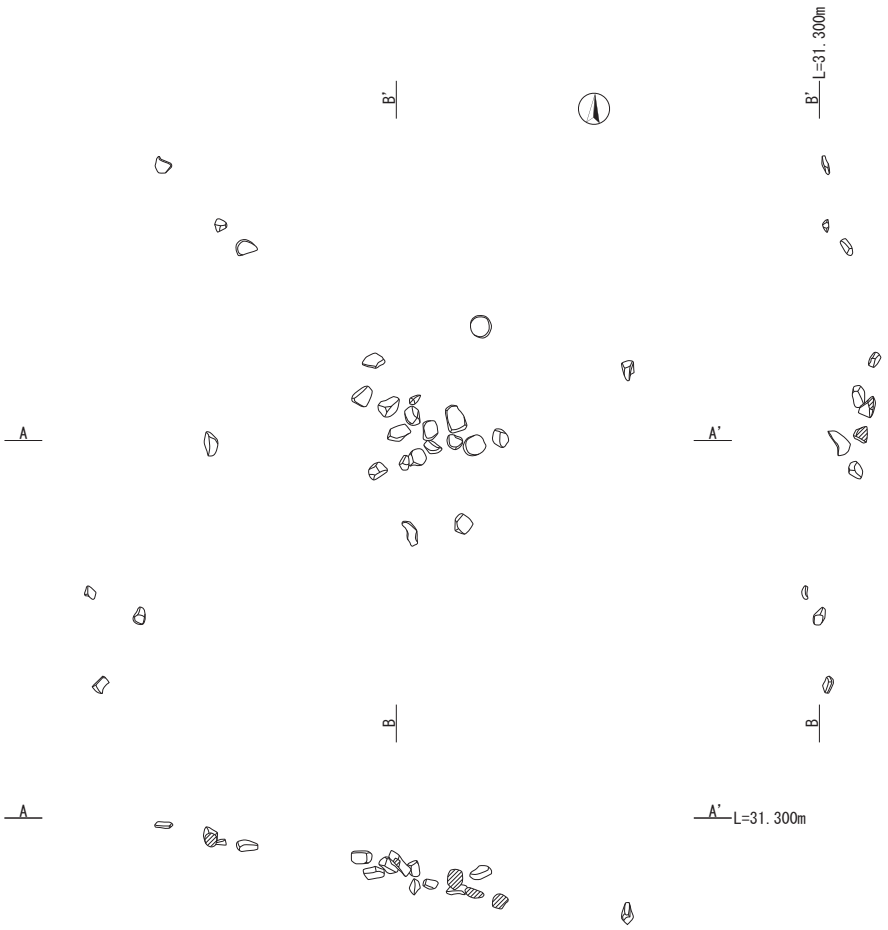
集石161号



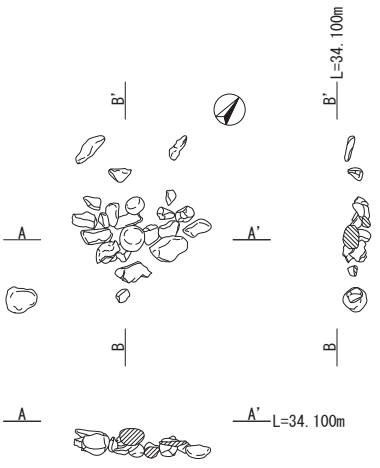
集石162号



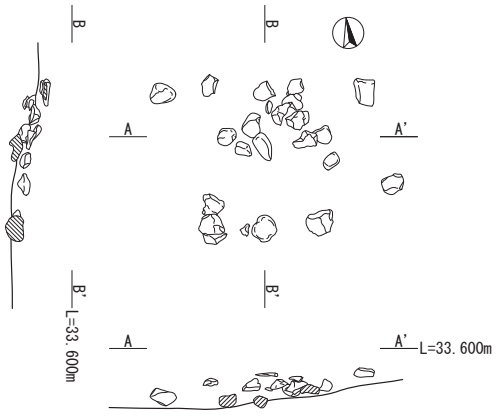
第74図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石50



集石163号



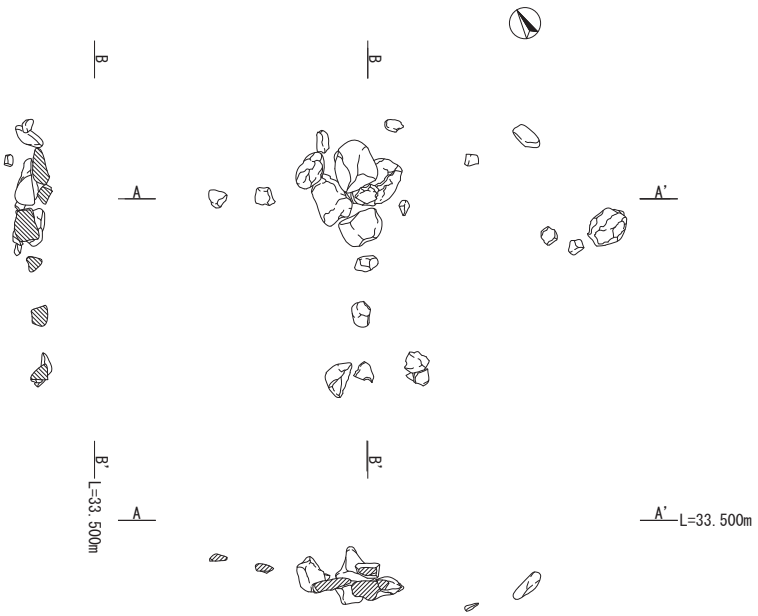
集石164号



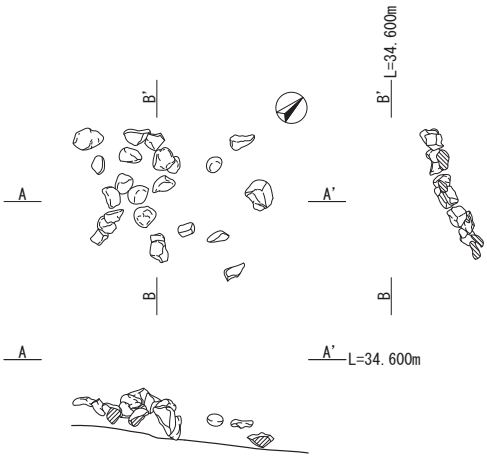
集石165号



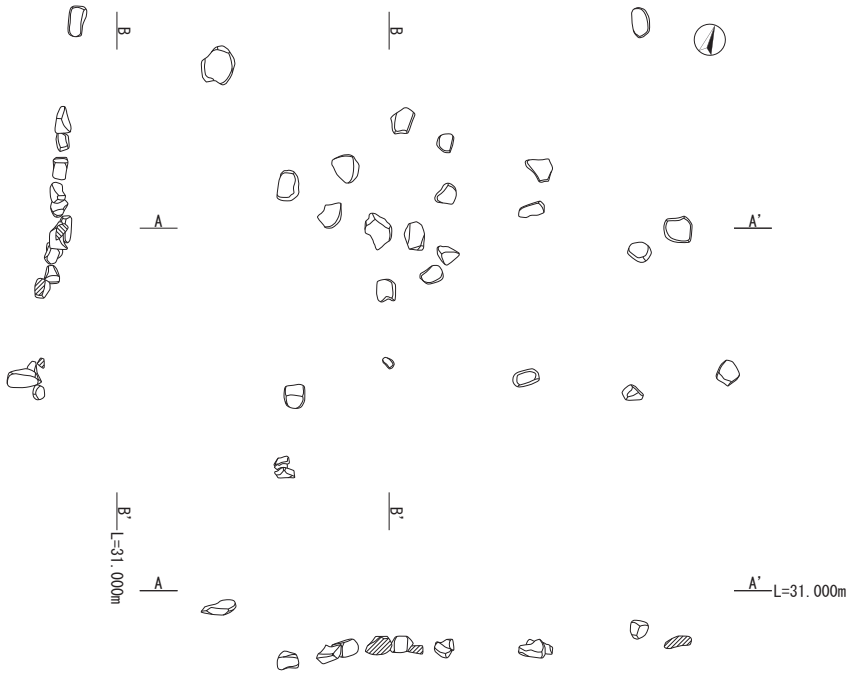
第75図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石51



集石166号



集石167号



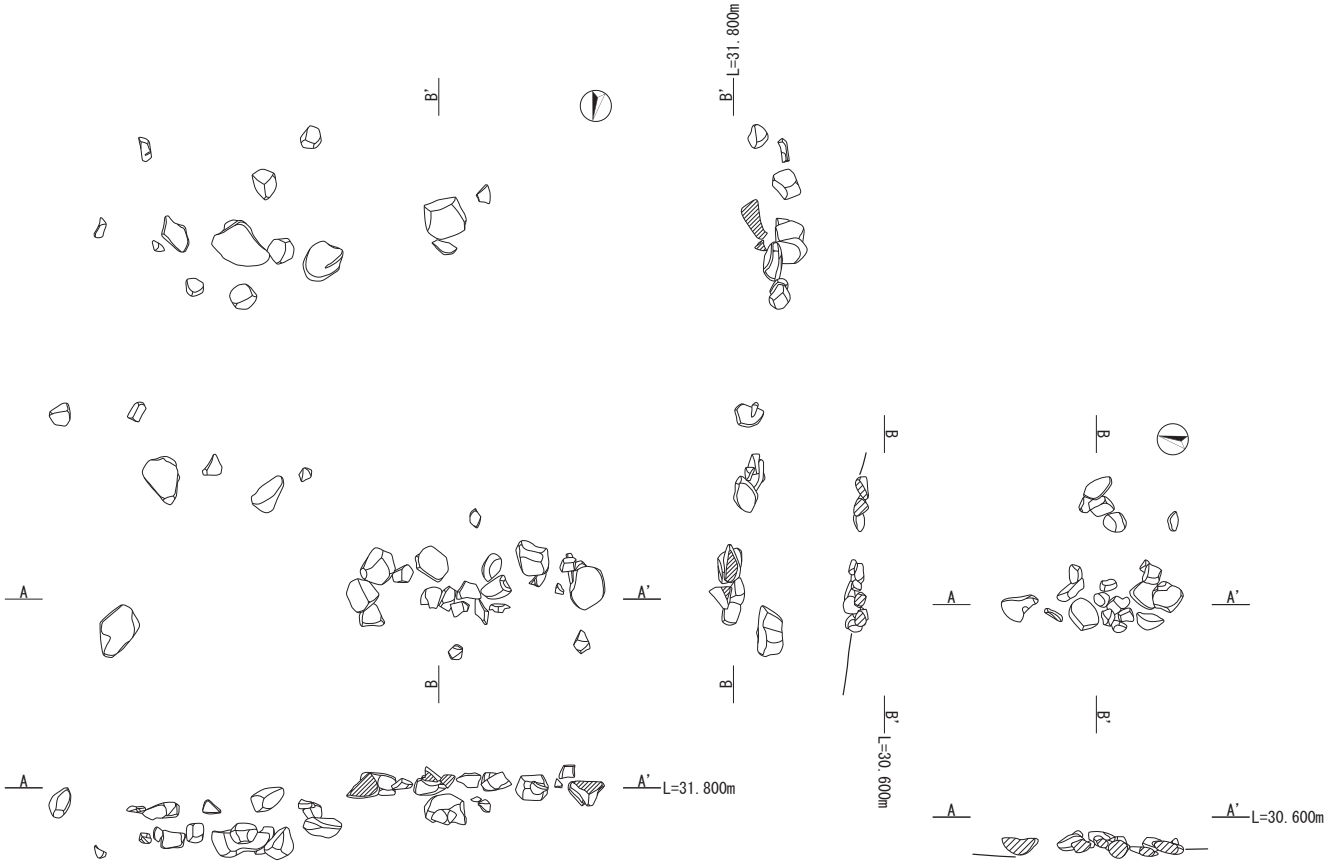
集石168号



第76図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石52



第77図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石53

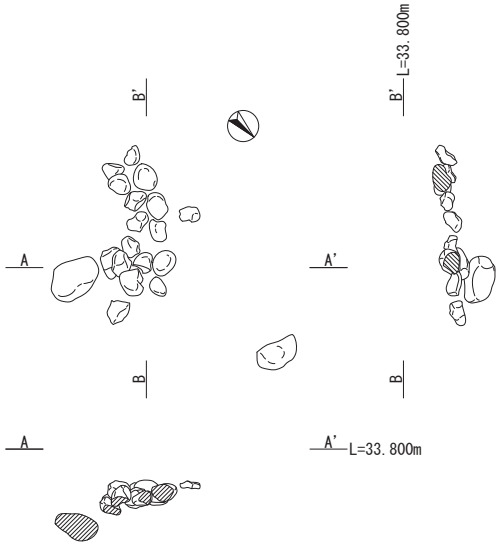


集石172・173号　　集石174号

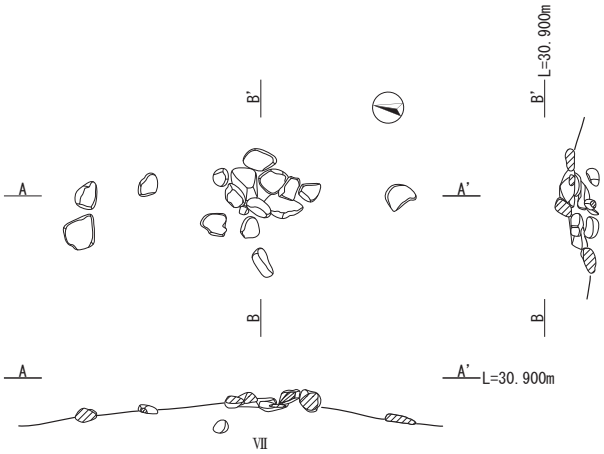
集石175号　　集石176号

0　1m

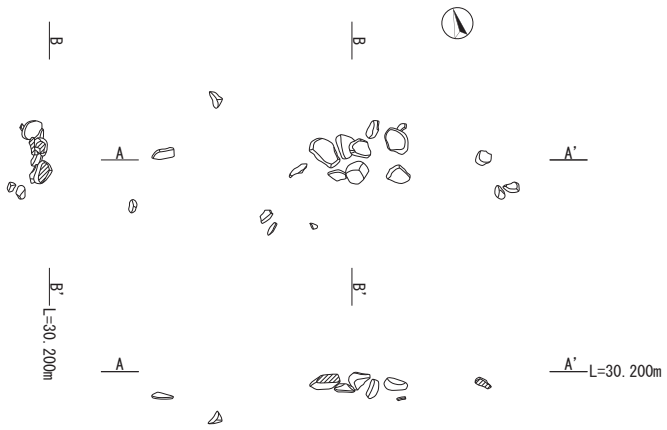
第78図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石54



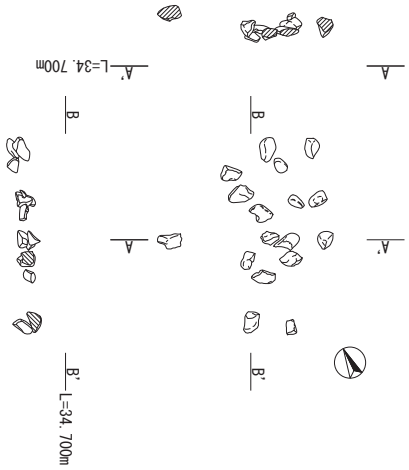
集石177号



集石178号



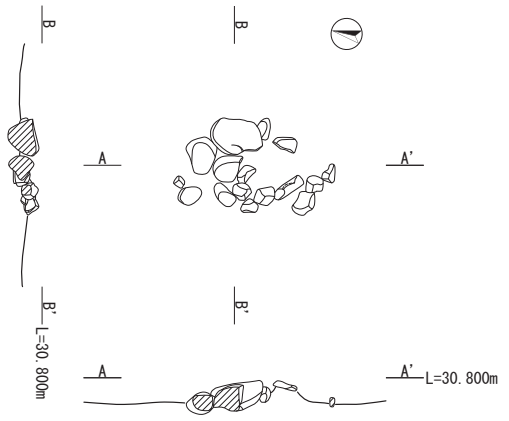
集石179号



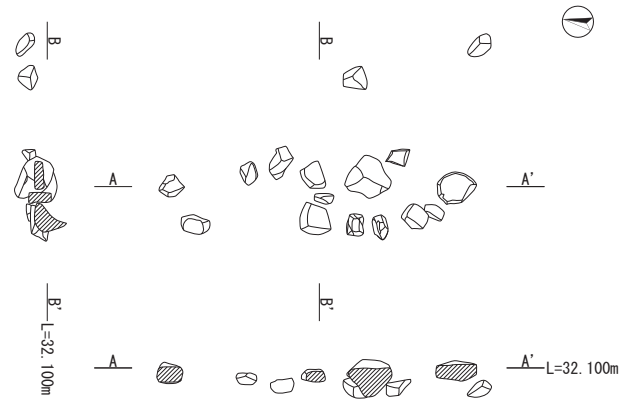
集石181号



第79図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石55



集石182号



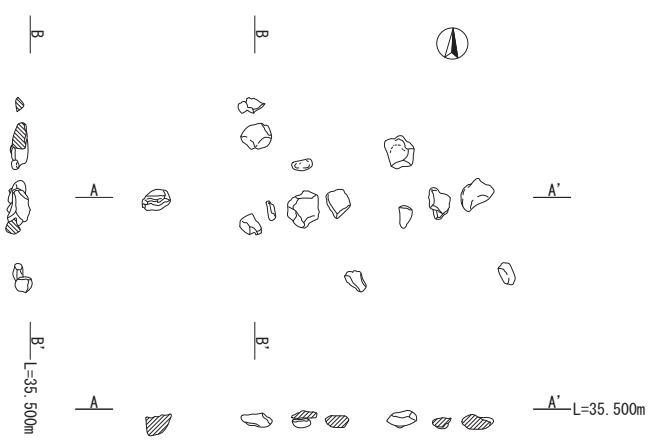
集石183号



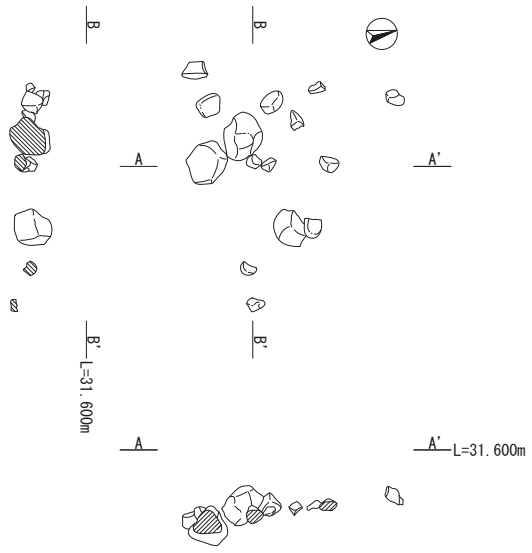
集石180号



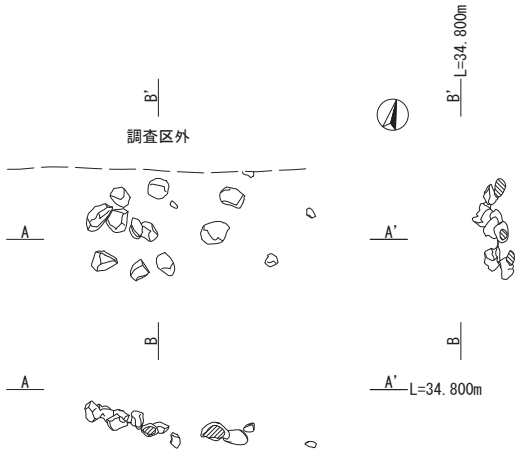
第80図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石56



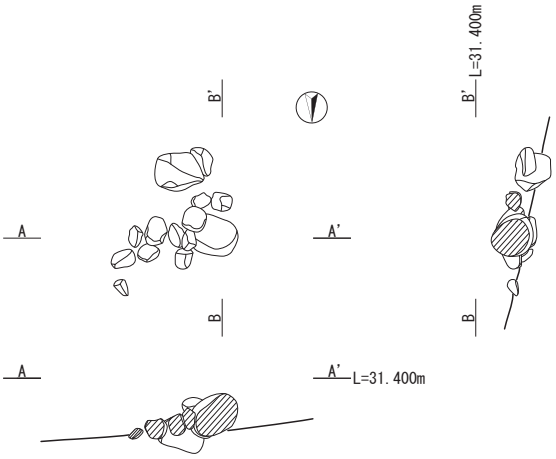
集石184号



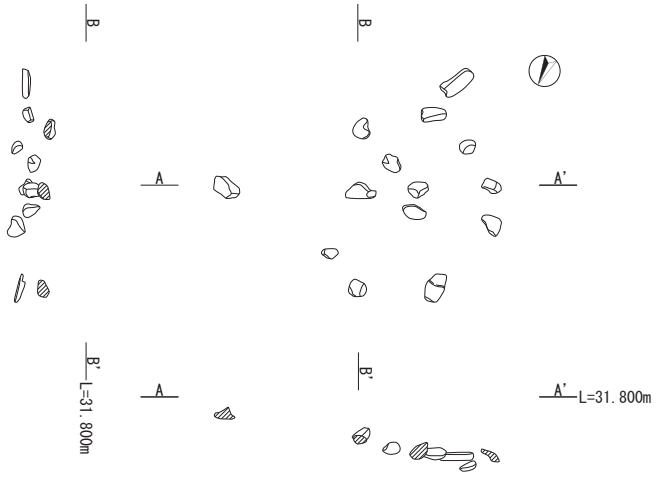
集石185号



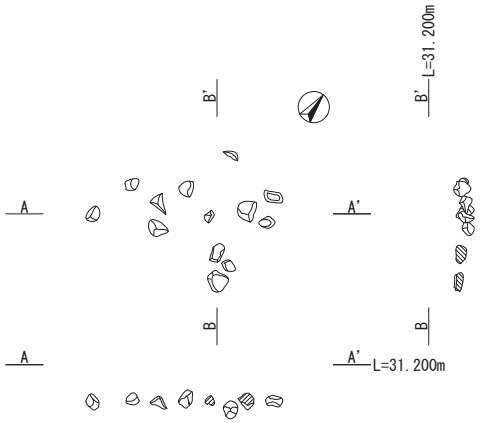
集石186号



集石187号



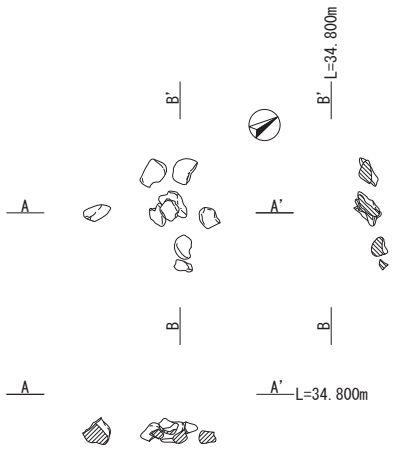
集石188号



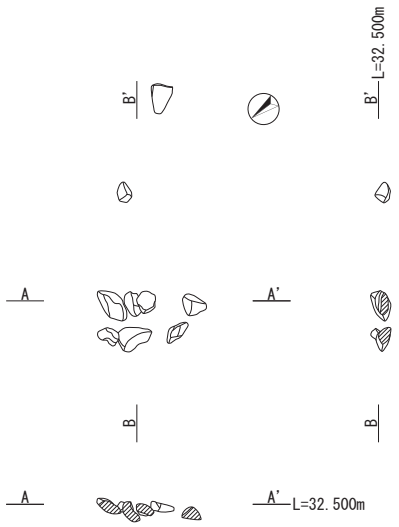
集石189号



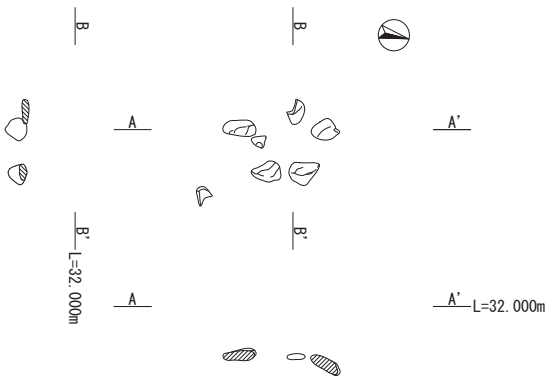
第81図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石57



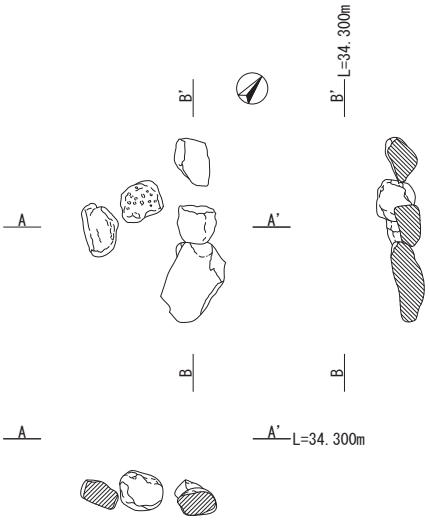
集石190号



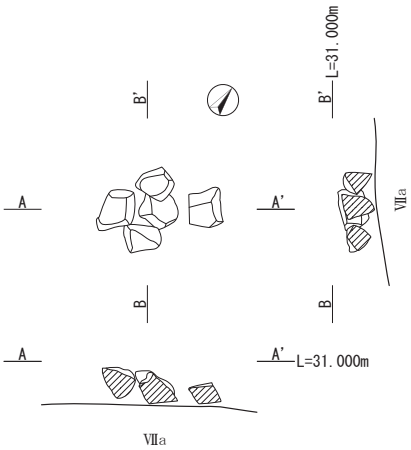
集石191号



集石192号



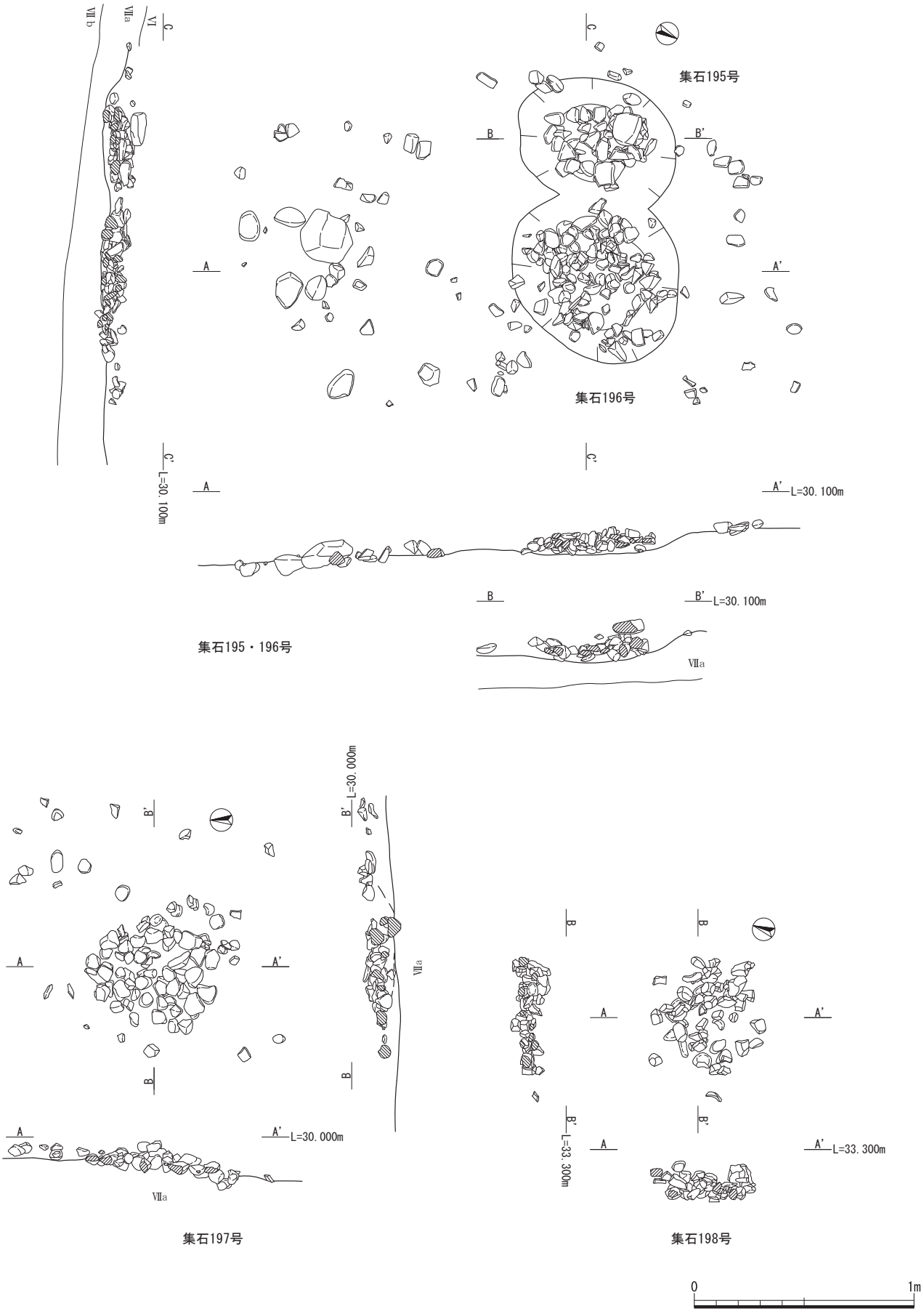
集石193号



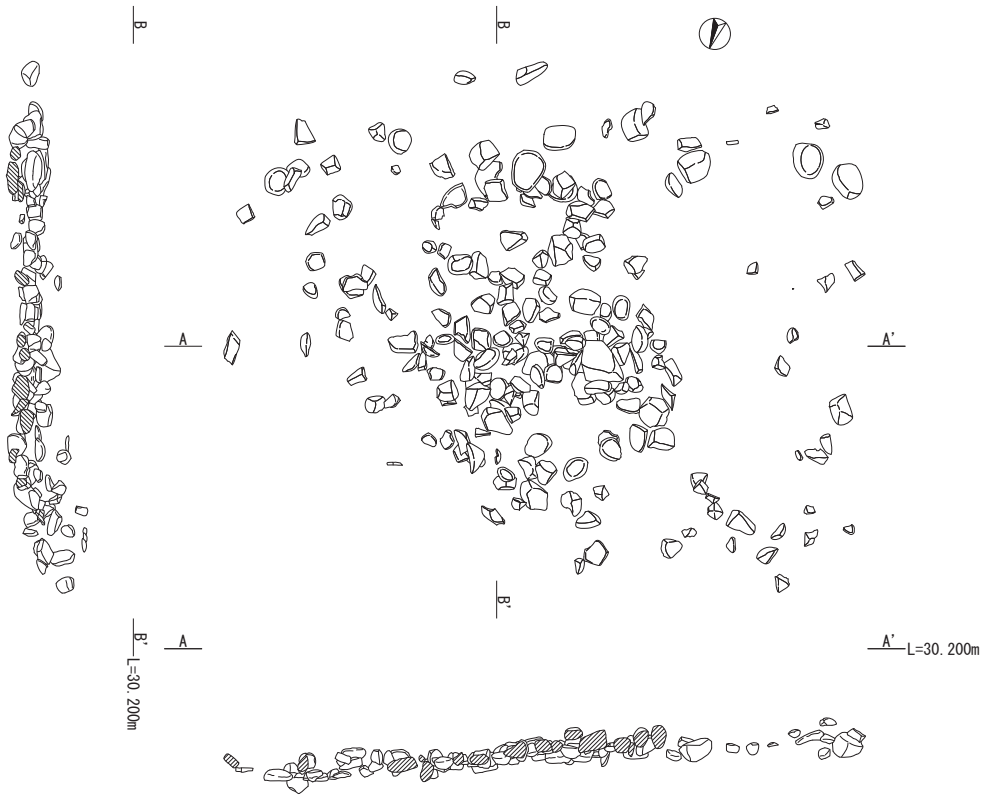
集石194号



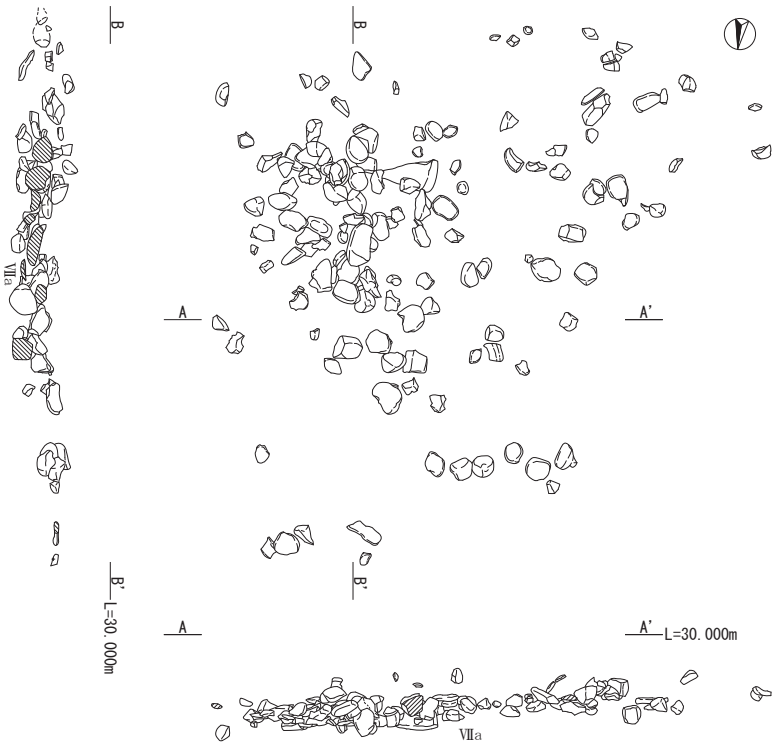
第82図　縄文時代早期Ⅶａ層検出集石58



第83図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石１



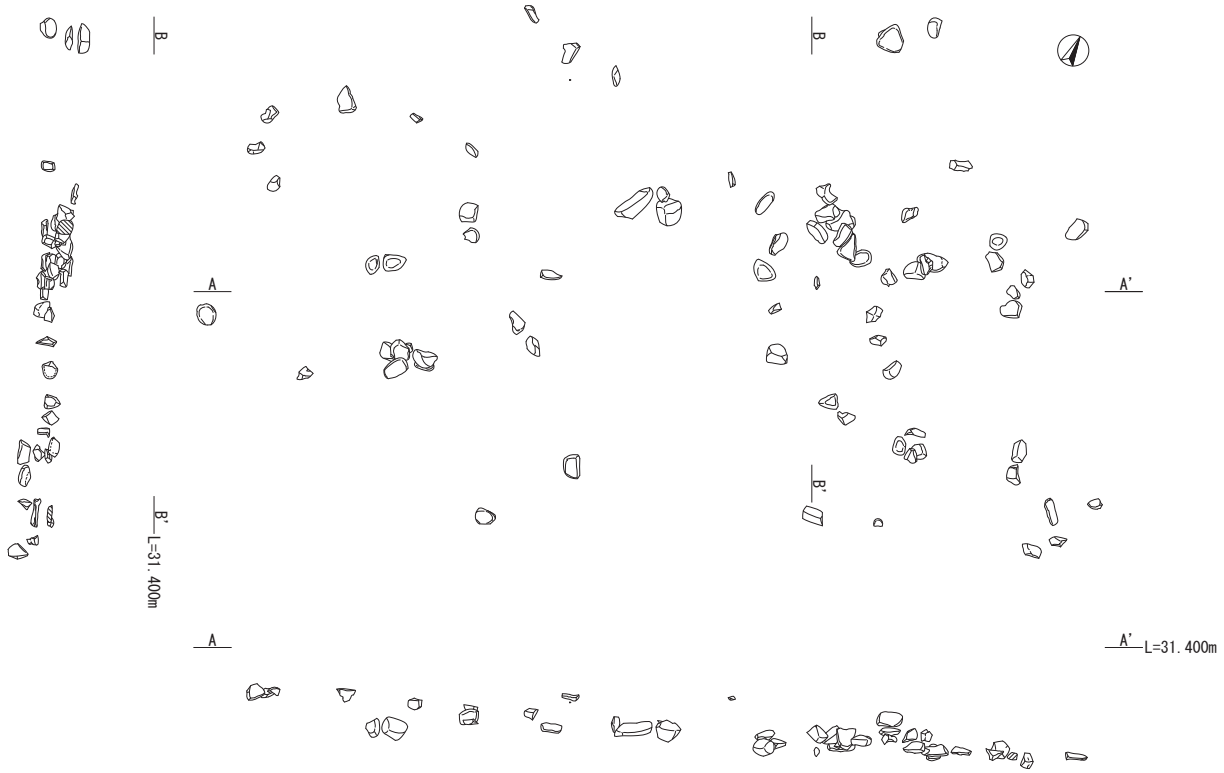
集石199号



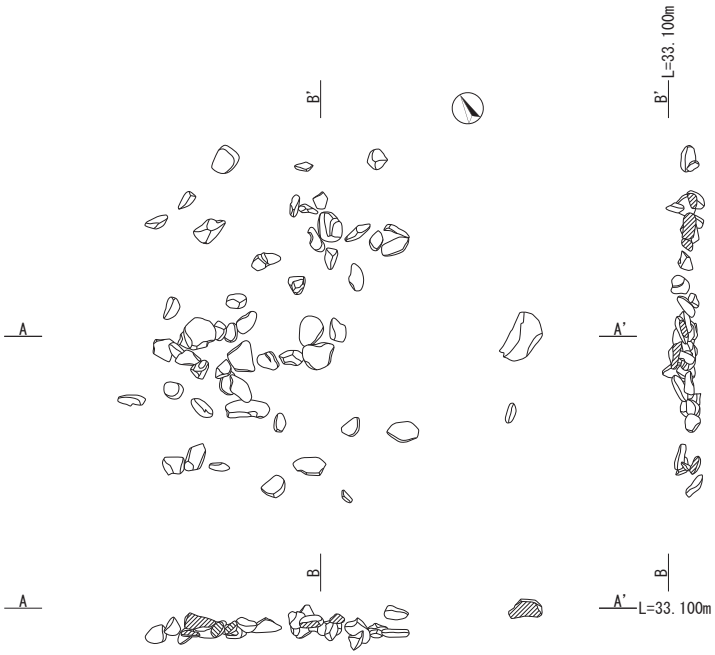
集石200号



第84図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石２



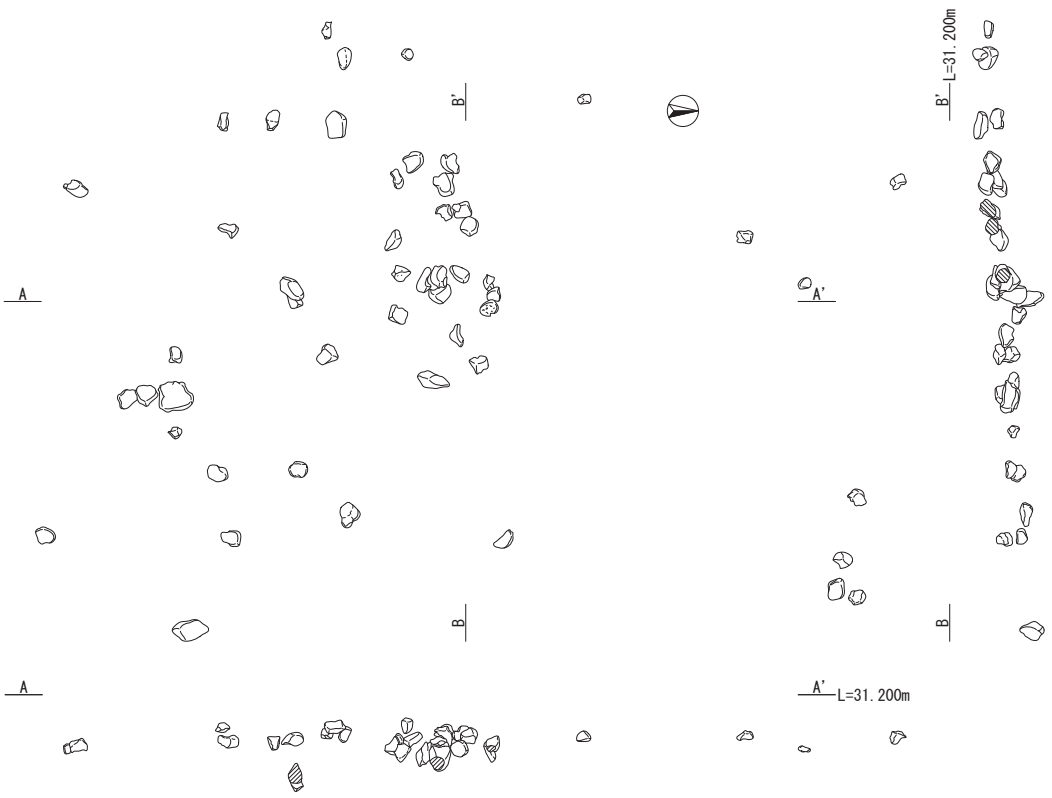
集石201号



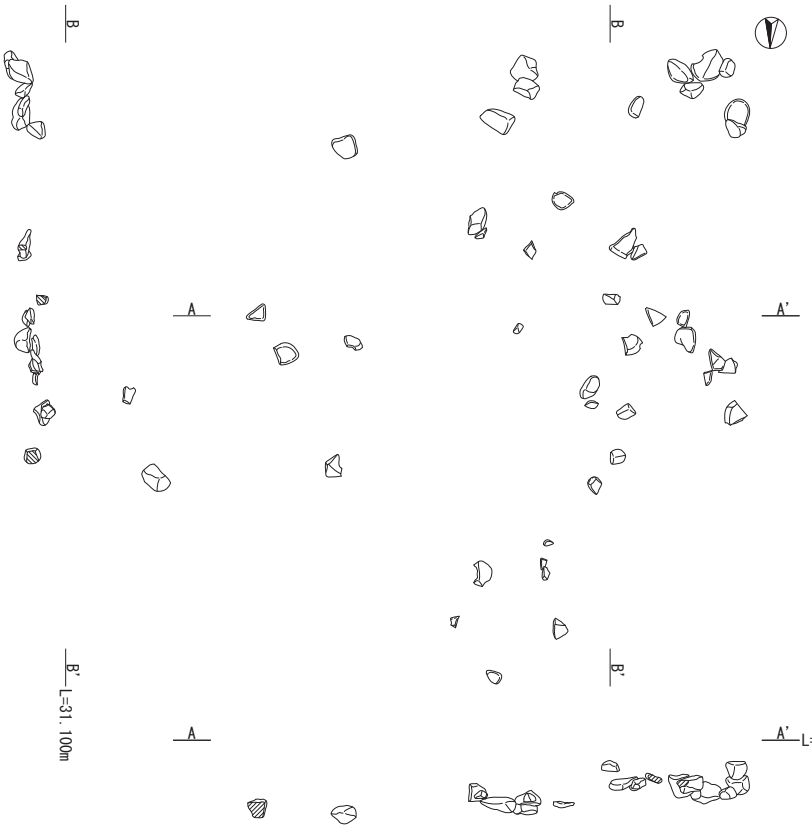
集石202号



第85図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石３



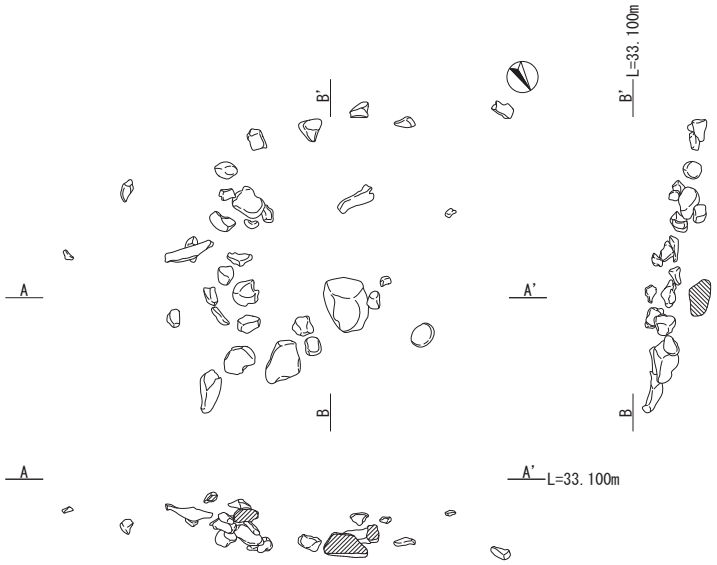
集石203号



集石204号

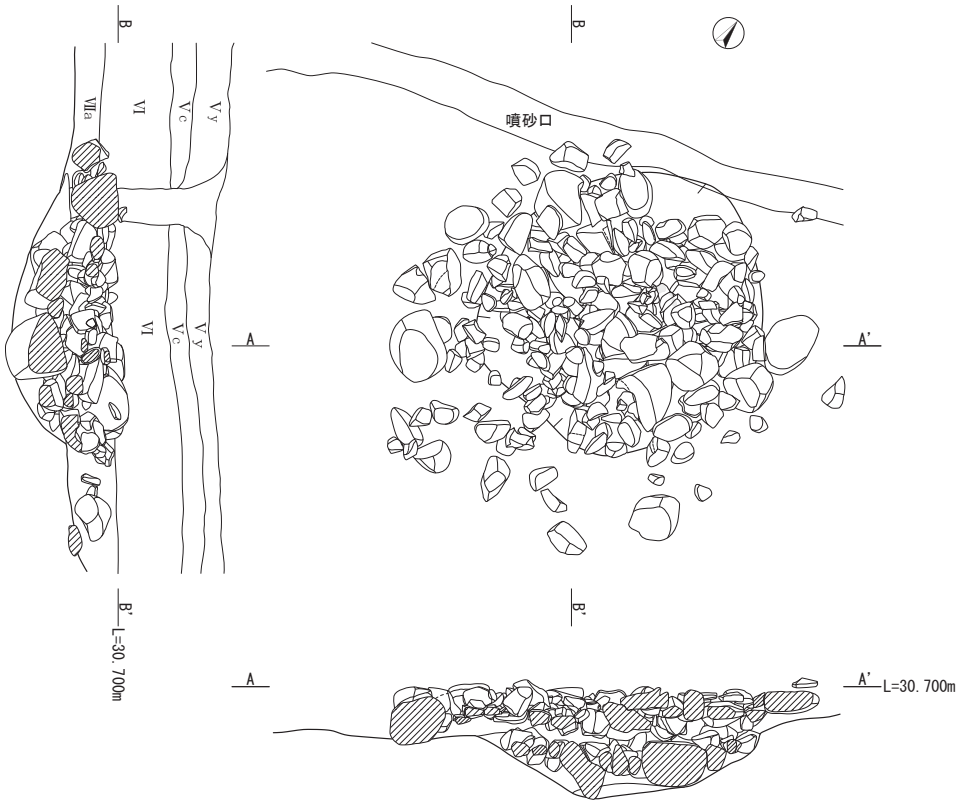
0 1m

第86図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石４



集石205号

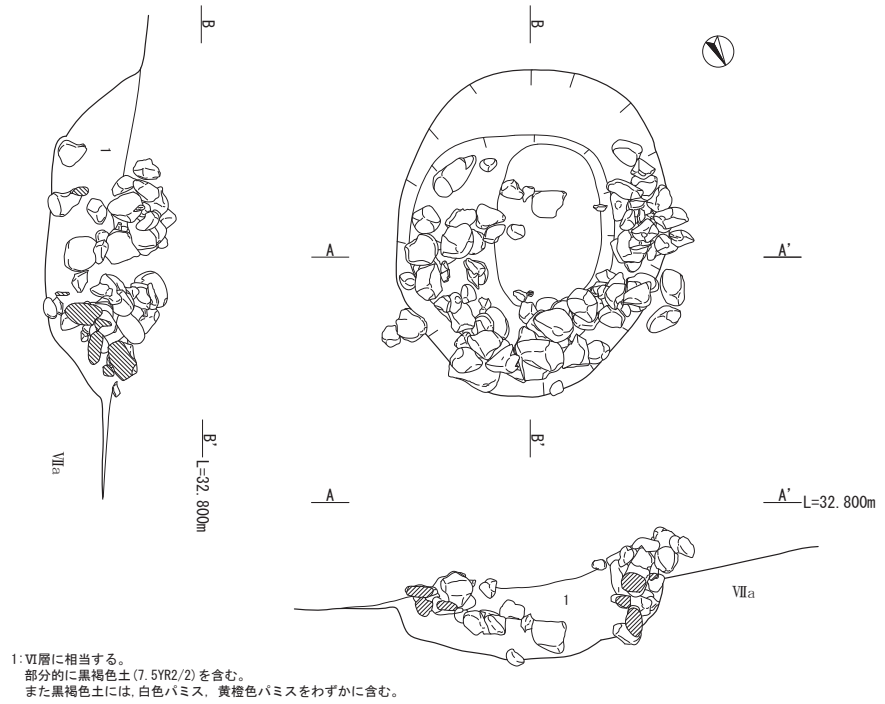
第87図　縄文時代早期Ⅶａ層上位検出集石５



集石206号

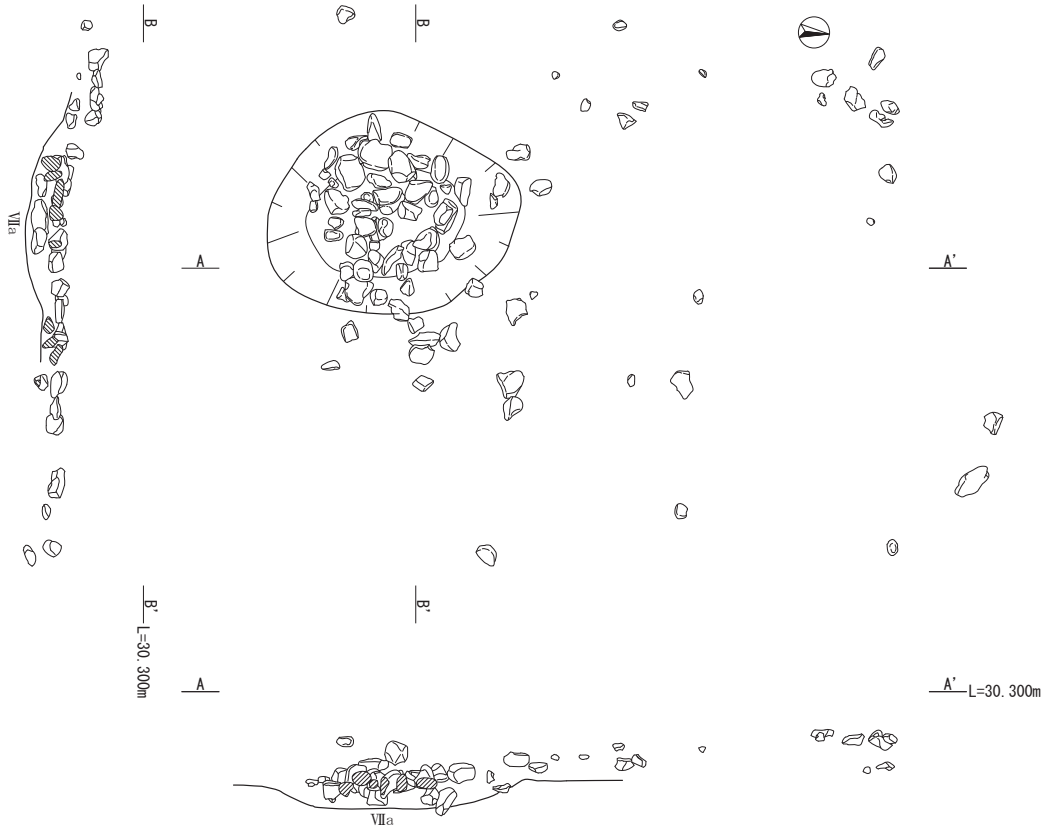


第88図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石１



1:VI層に相当する。
部分的に黒褐色土(7.5YR2/2)を含む。
また黒褐色土には,白色パミス,黄橙色パミスをわずかに含む。

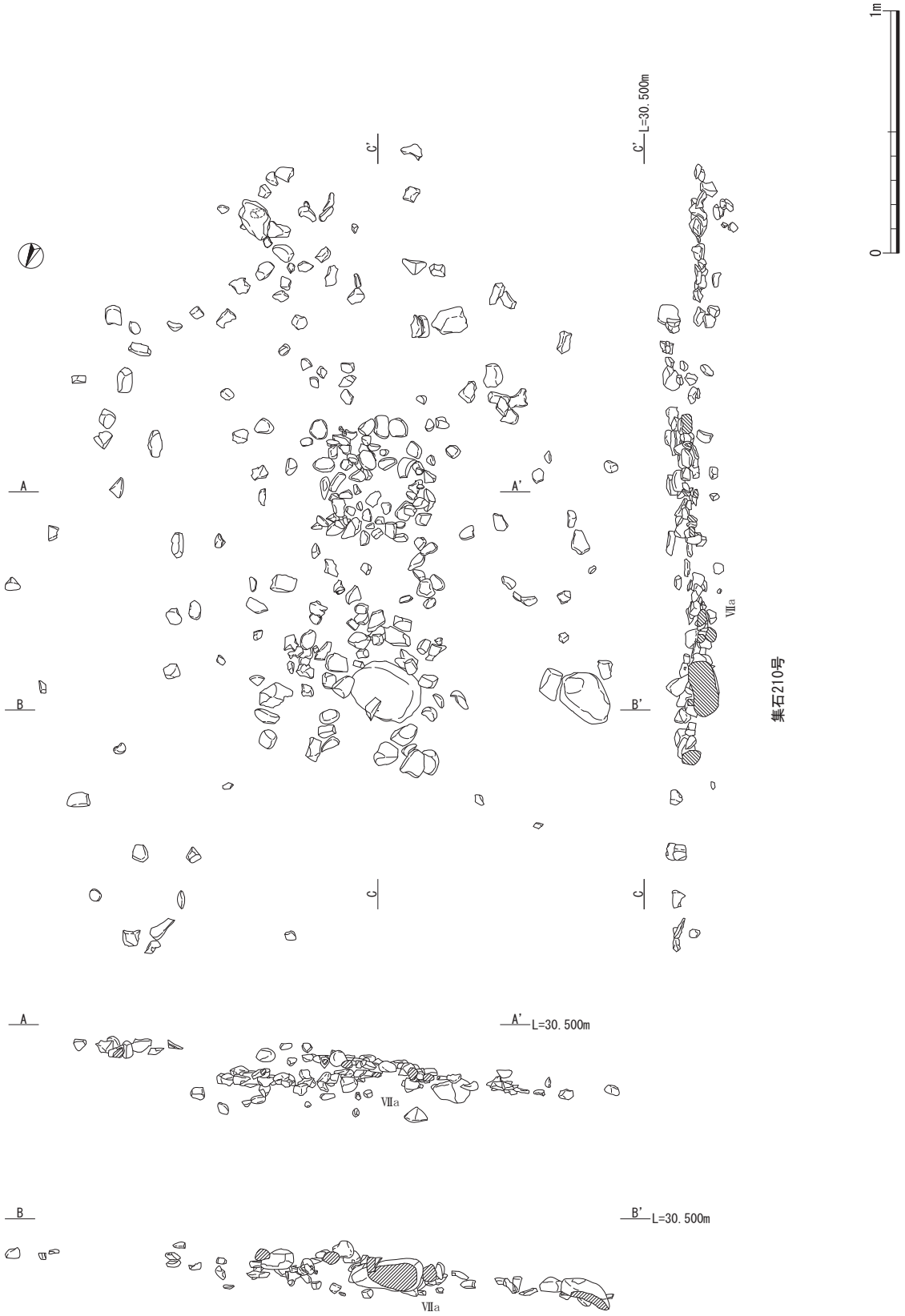
集石207号



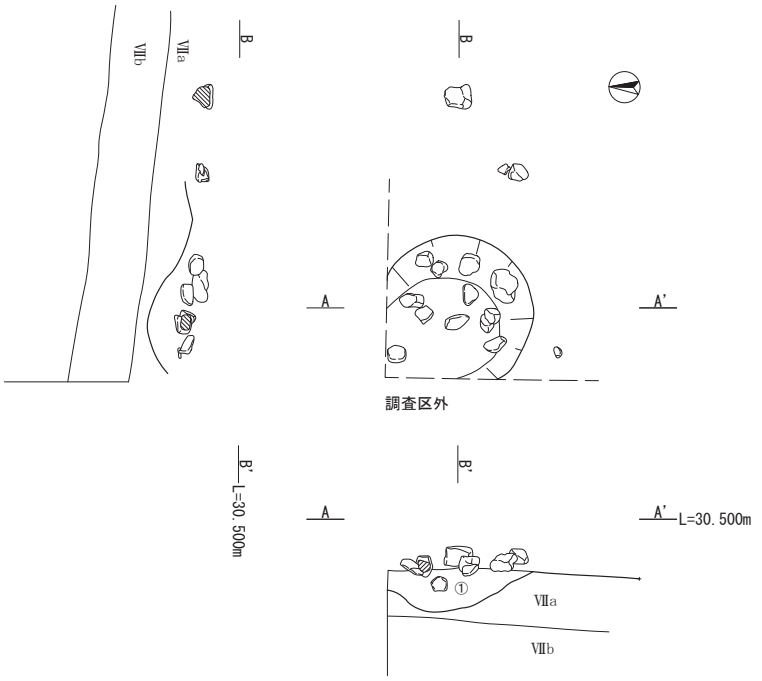
集石208号



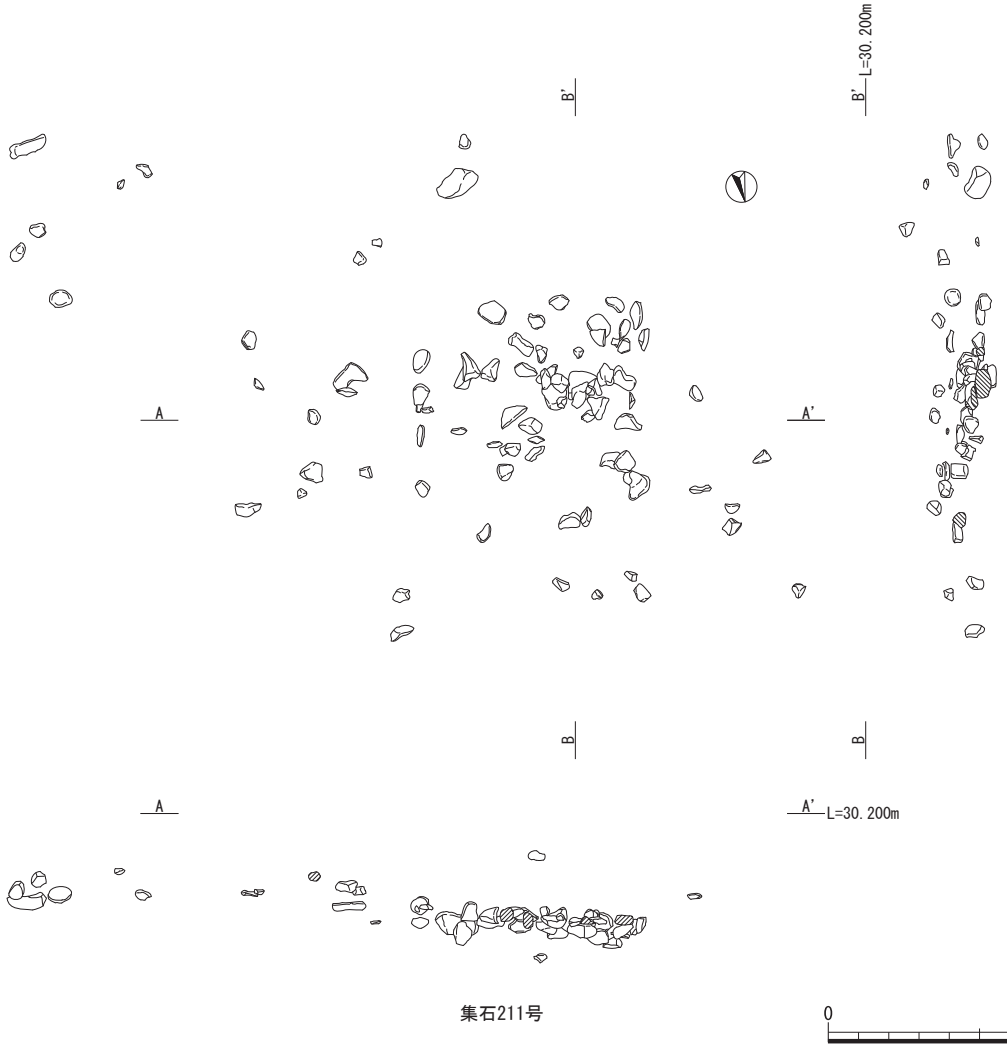
第89図　縄文時代早期VI層下位検出集石２



第90図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石３



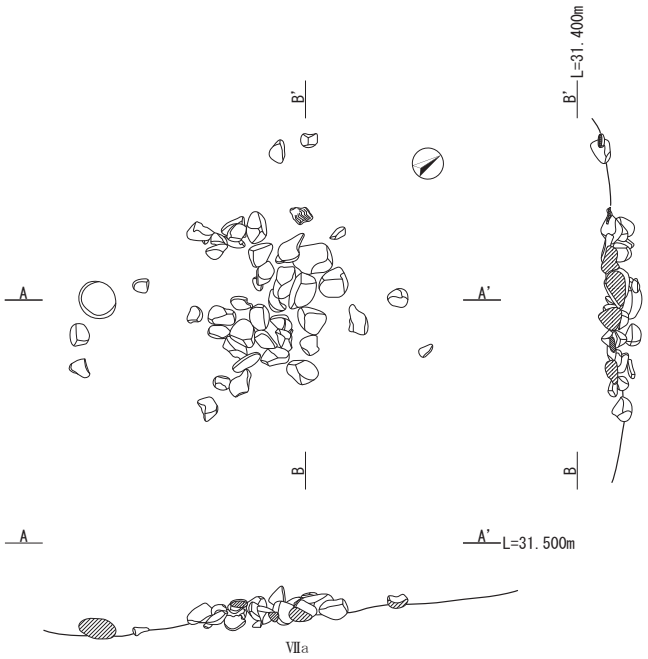
集石209号



集石211号

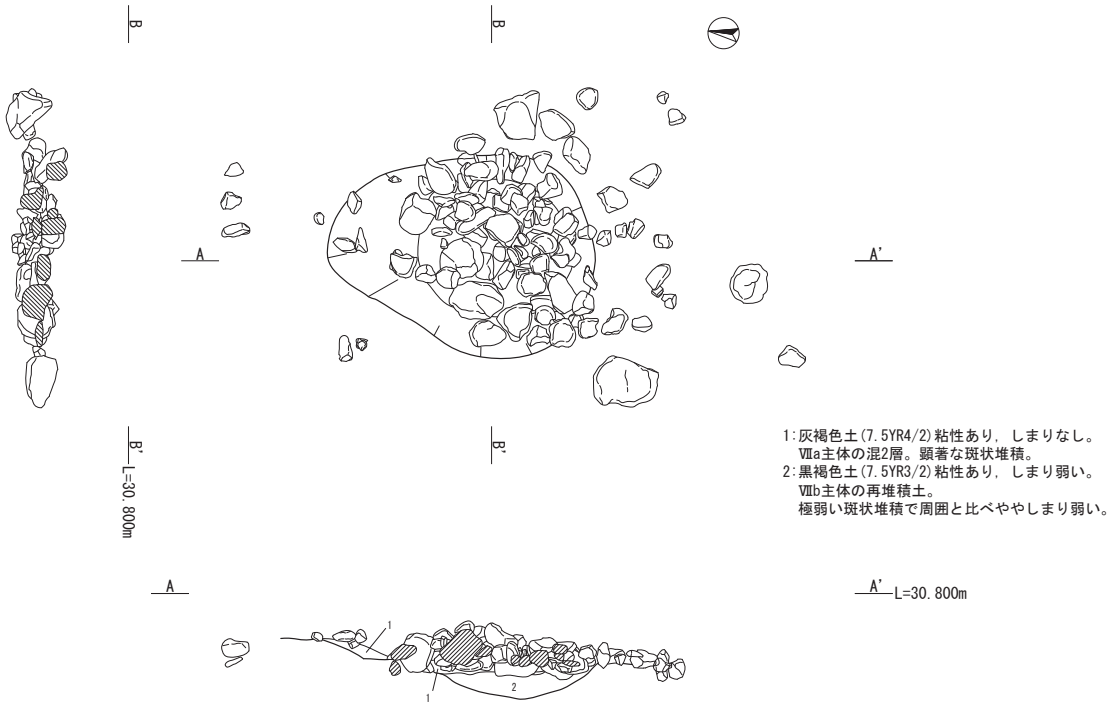
0 1m

第91図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石４



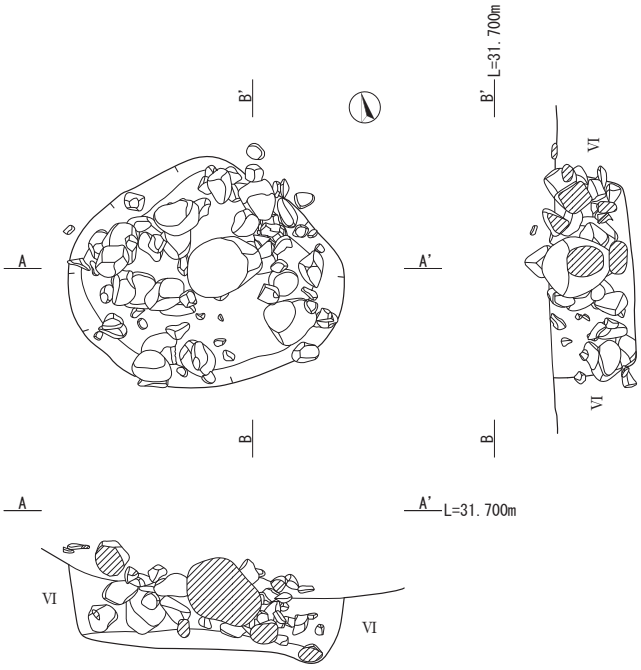
集石212号

第92図　縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石５

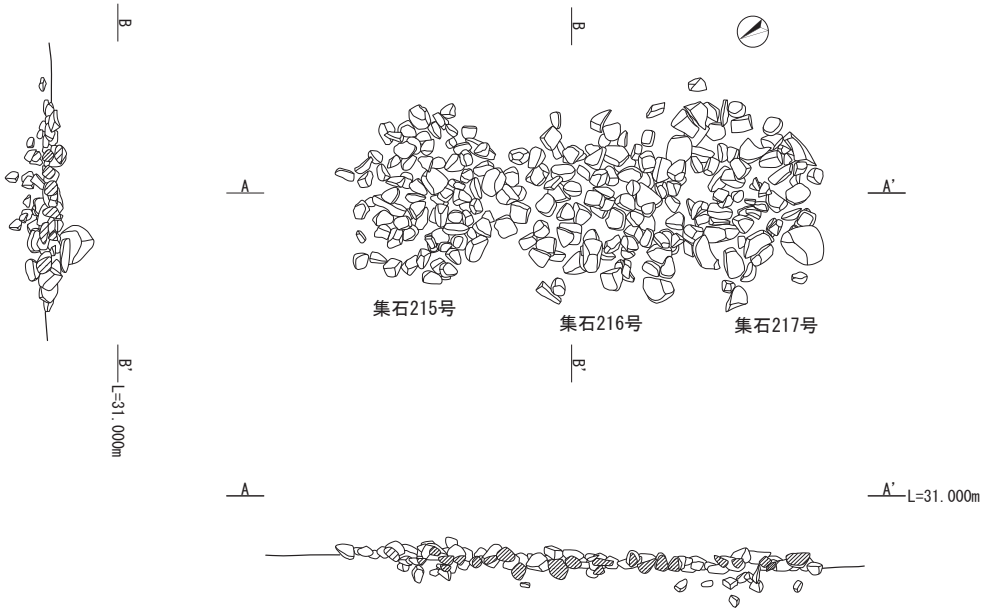


集石213号

第93図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石１



集石214号



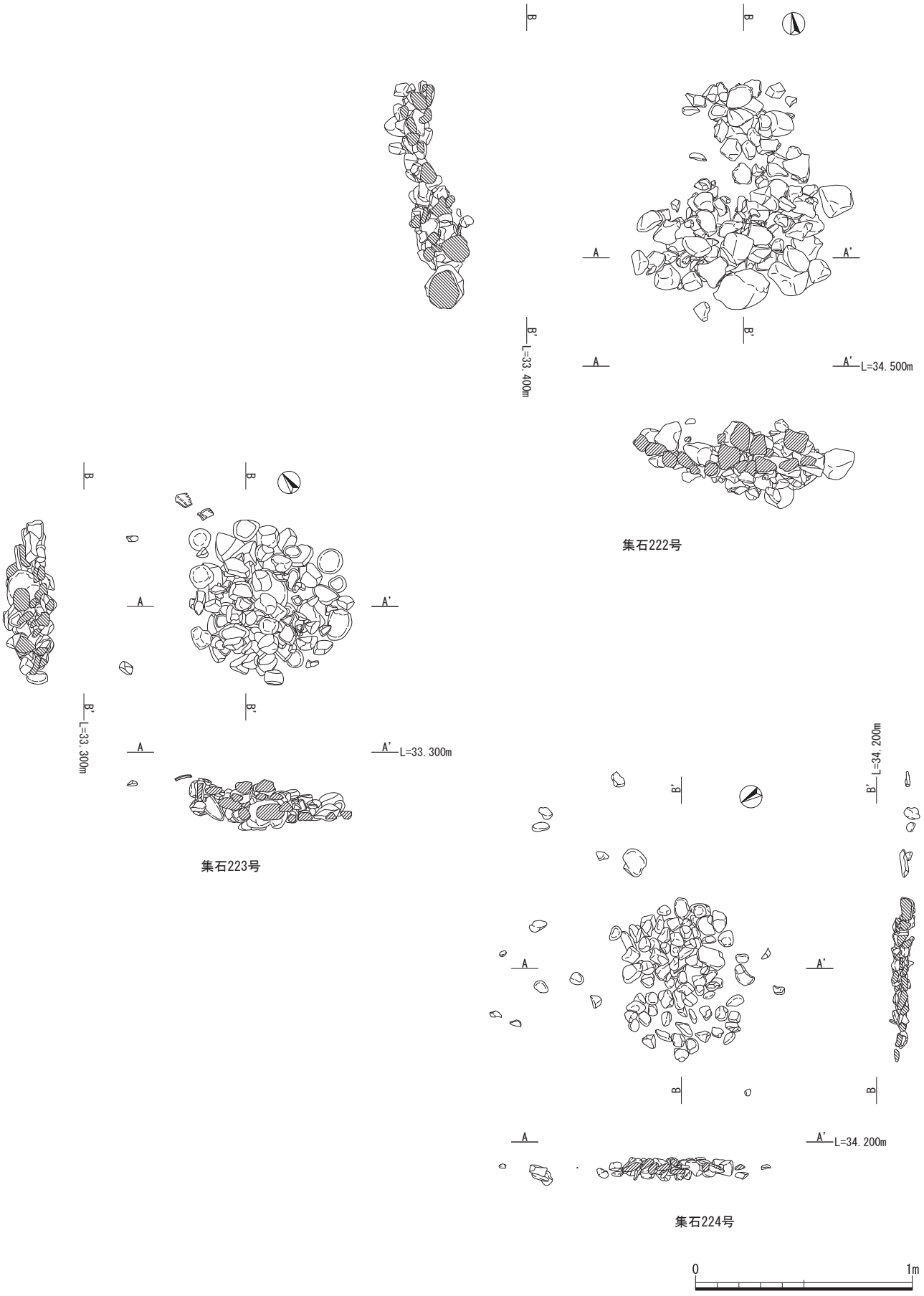
集石215・216・217号

0 1m

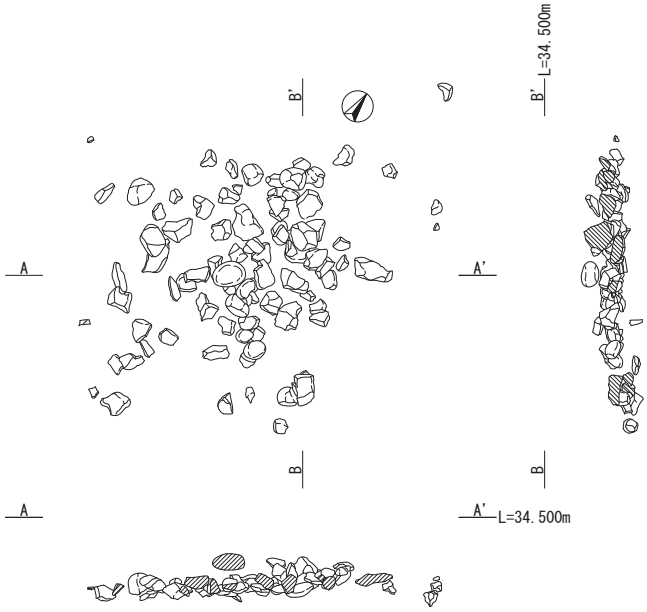
第94図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石２



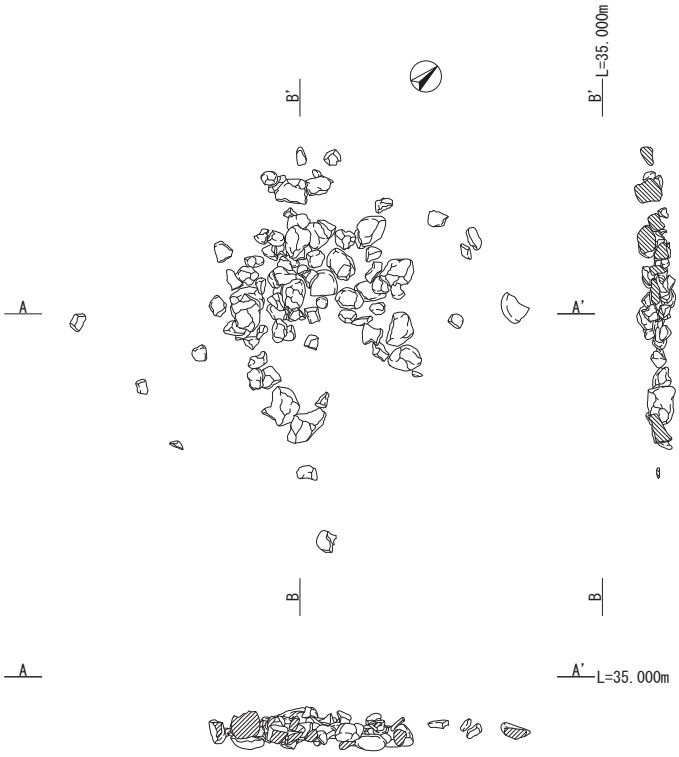
第95図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石３



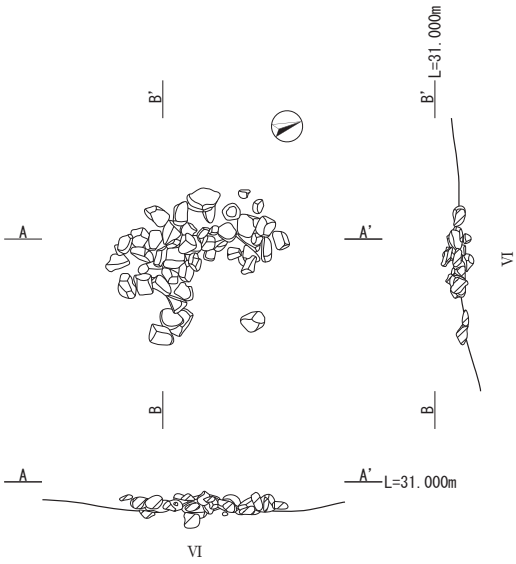
第96図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石４



集石225号



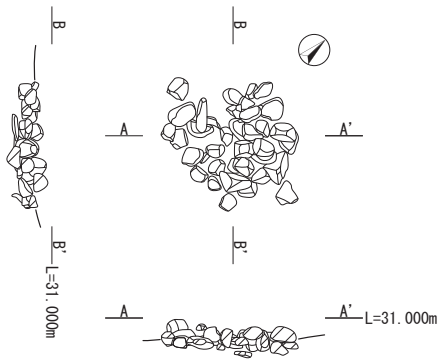
集石226号



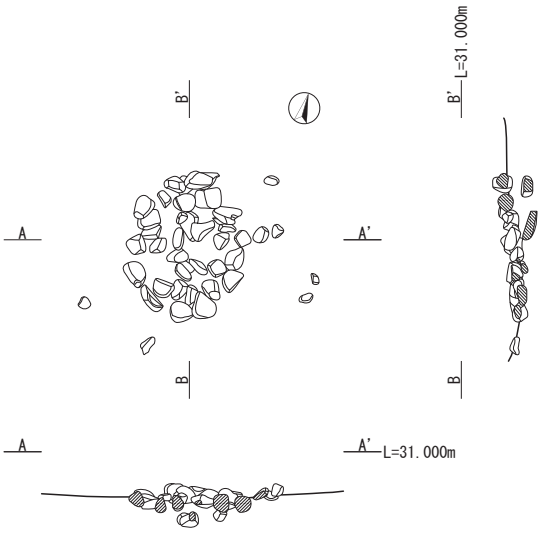
集石227号



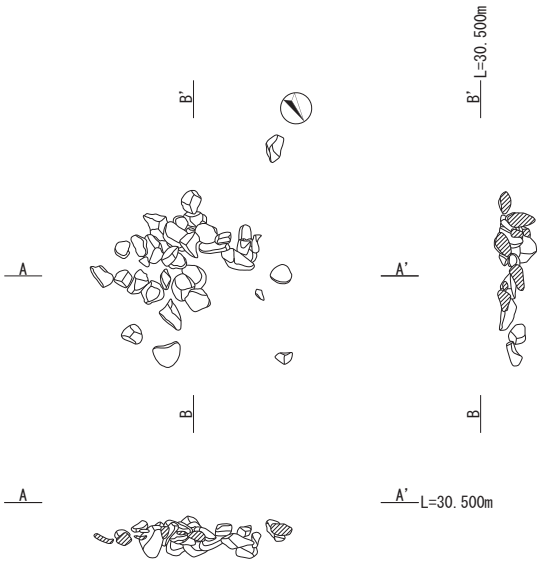
第97図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石５



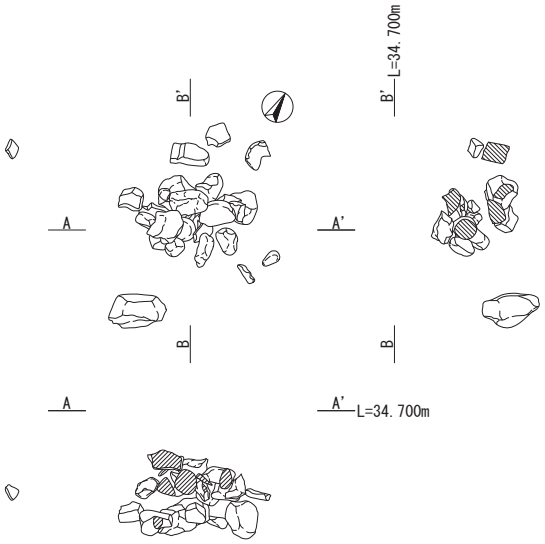
集石228号



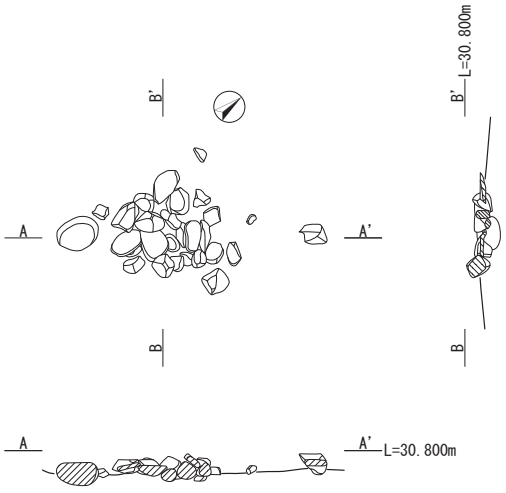
集石229号



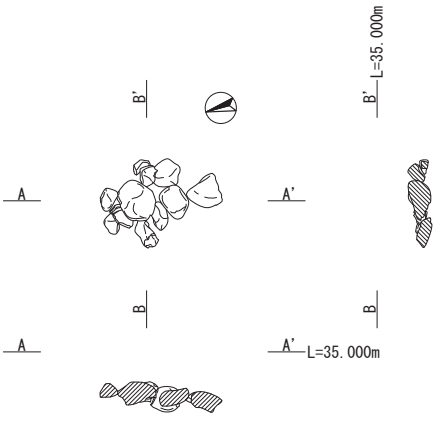
集石230号



集石231号



集石232号

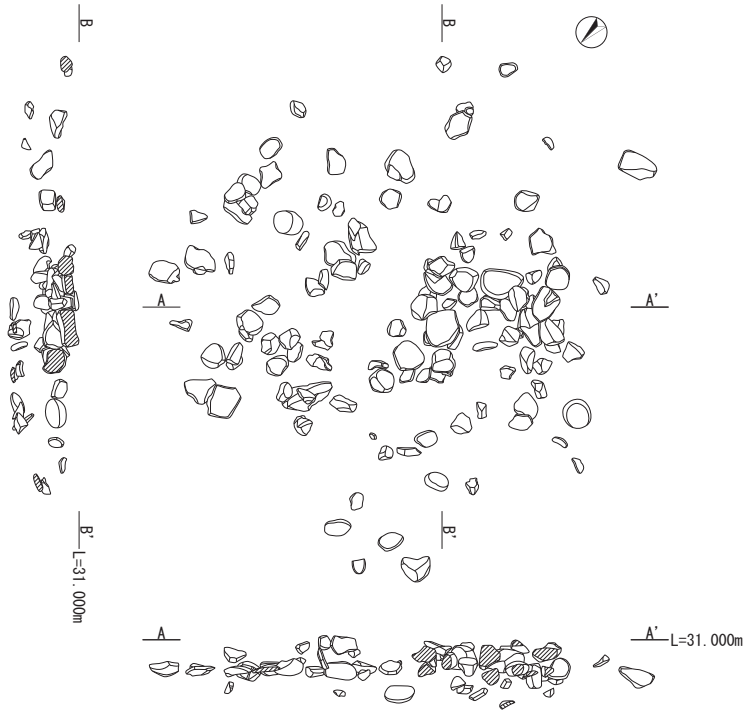


集石233号

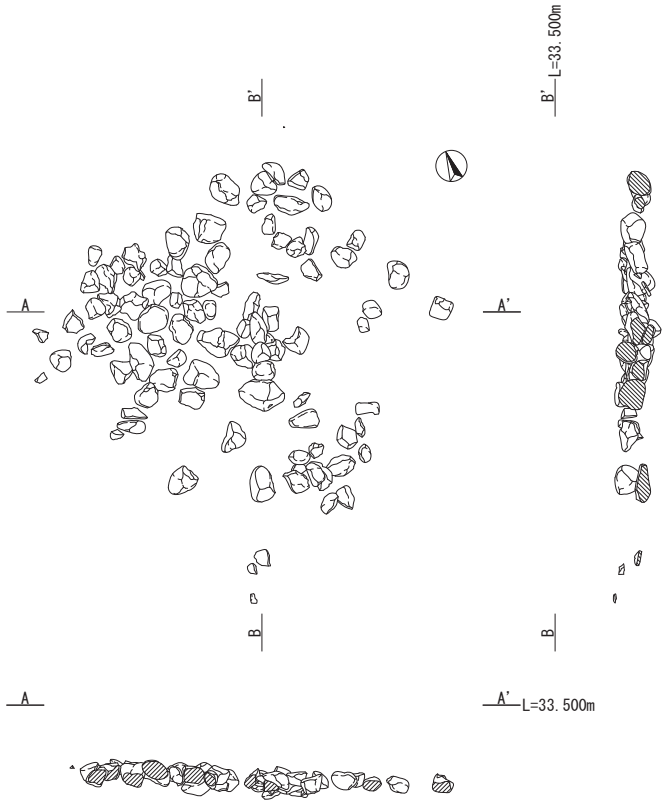


第98図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石６

第99図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石７



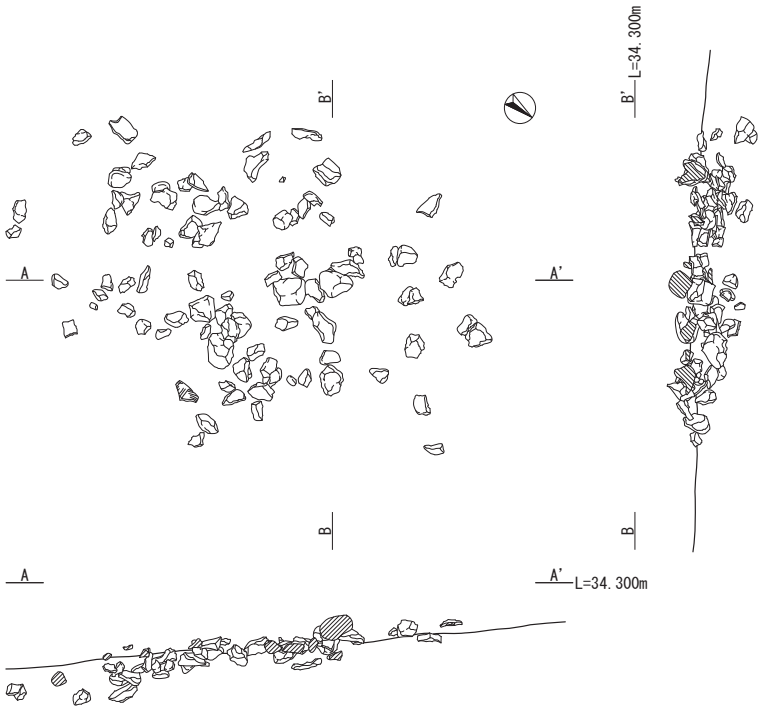
集石235号



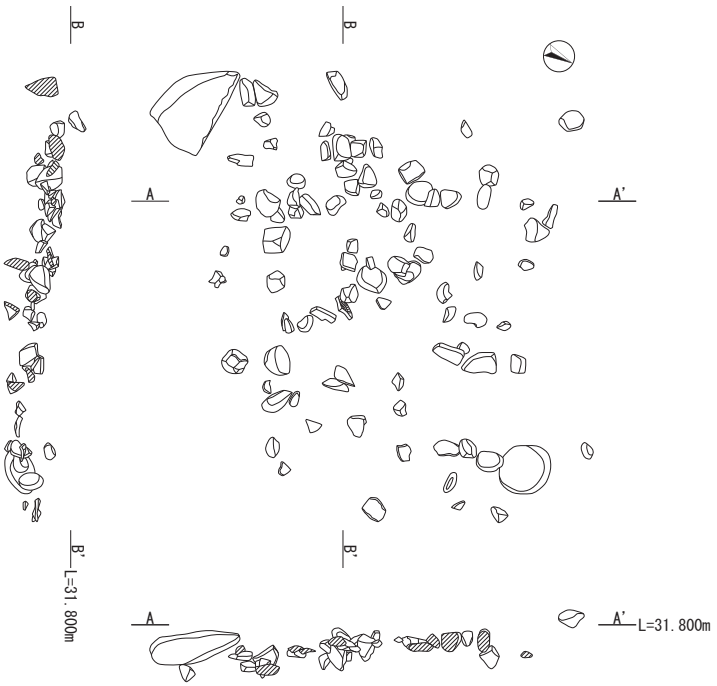
集石236号



第100図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石８



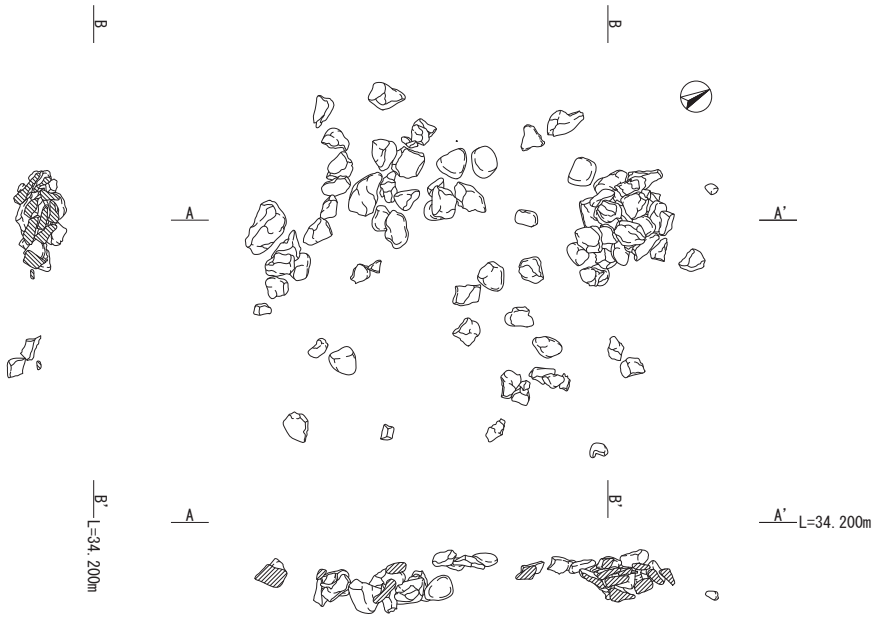
集石237号



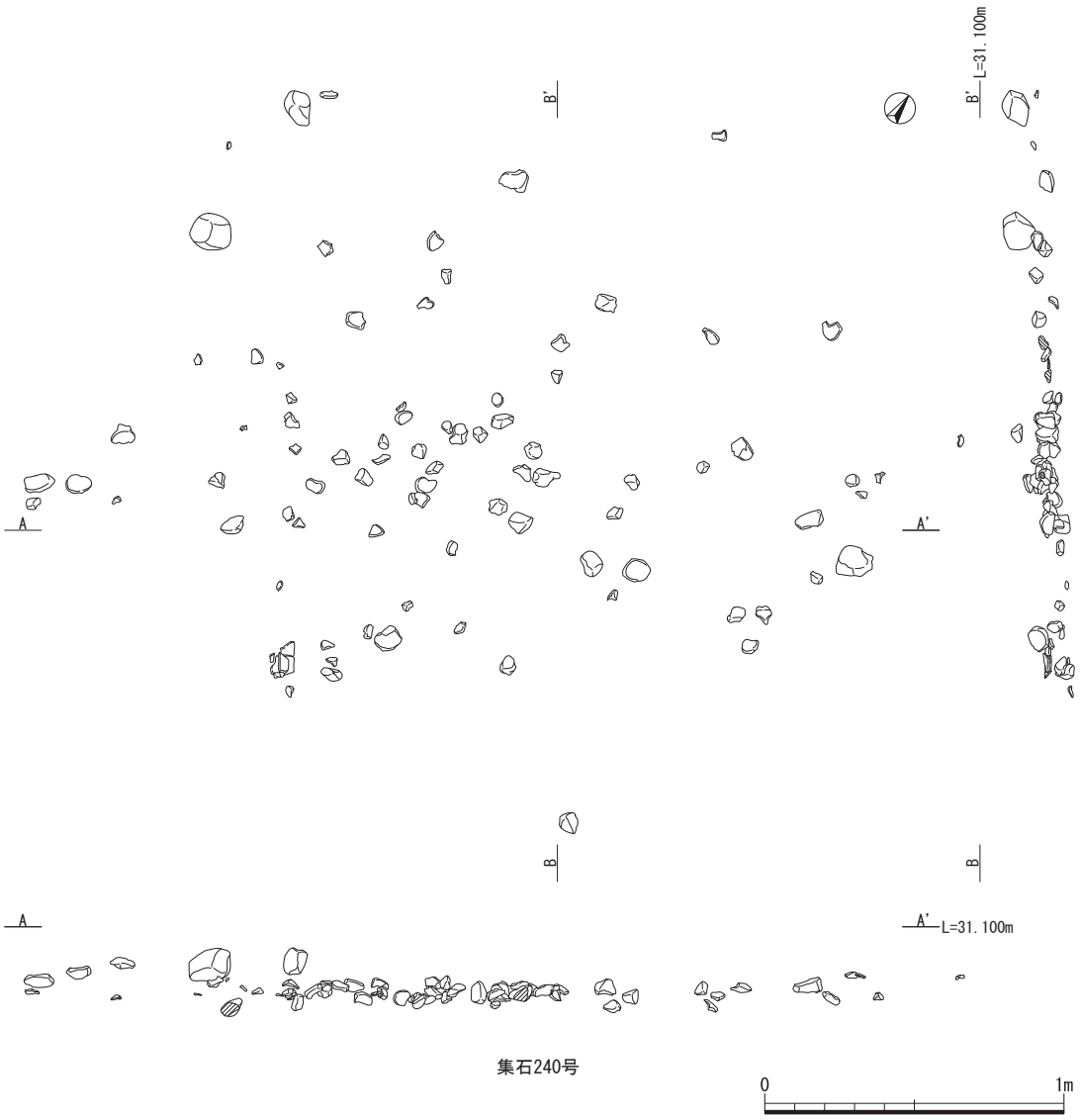
集石238号

0 1m

第101図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石９

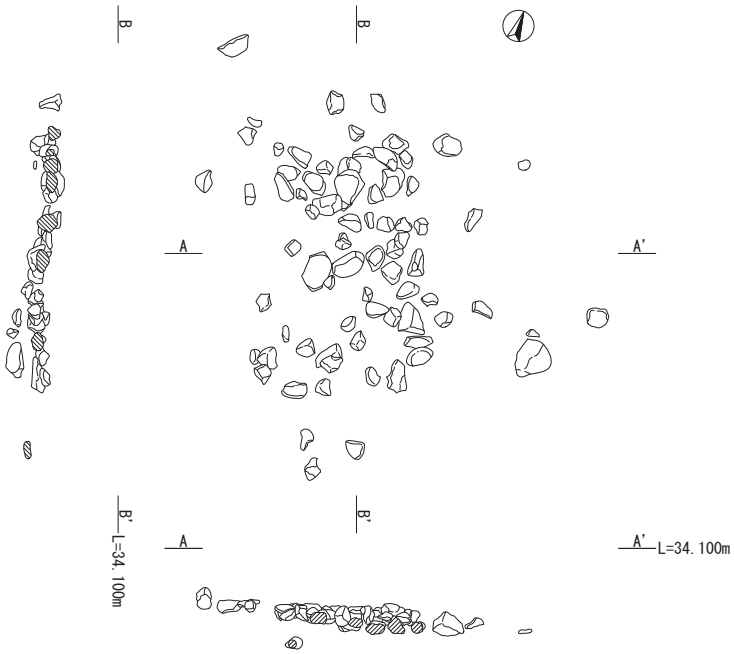


集石239号

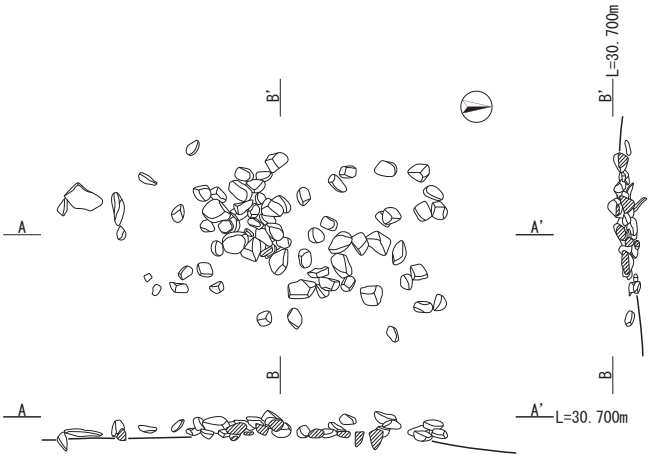


集石240号

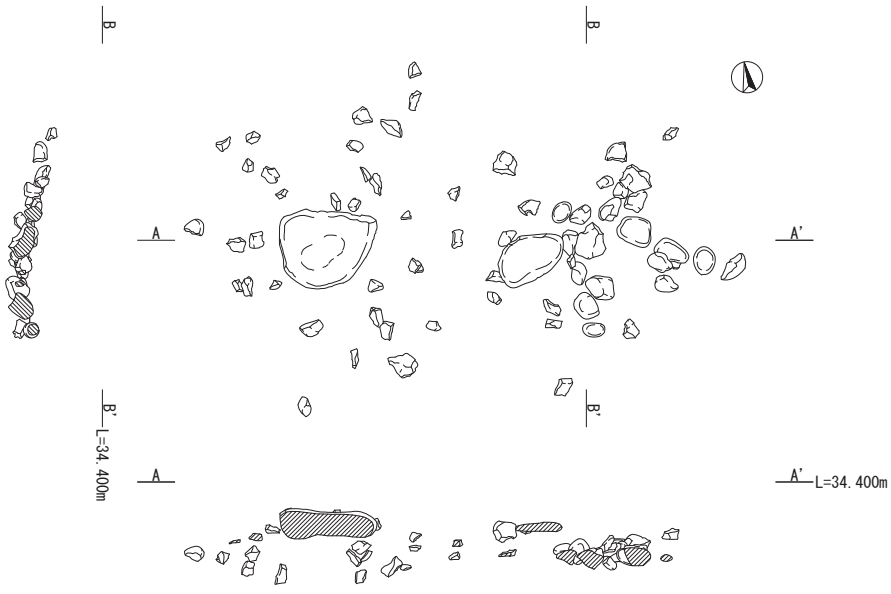
第102図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石10



集石241号



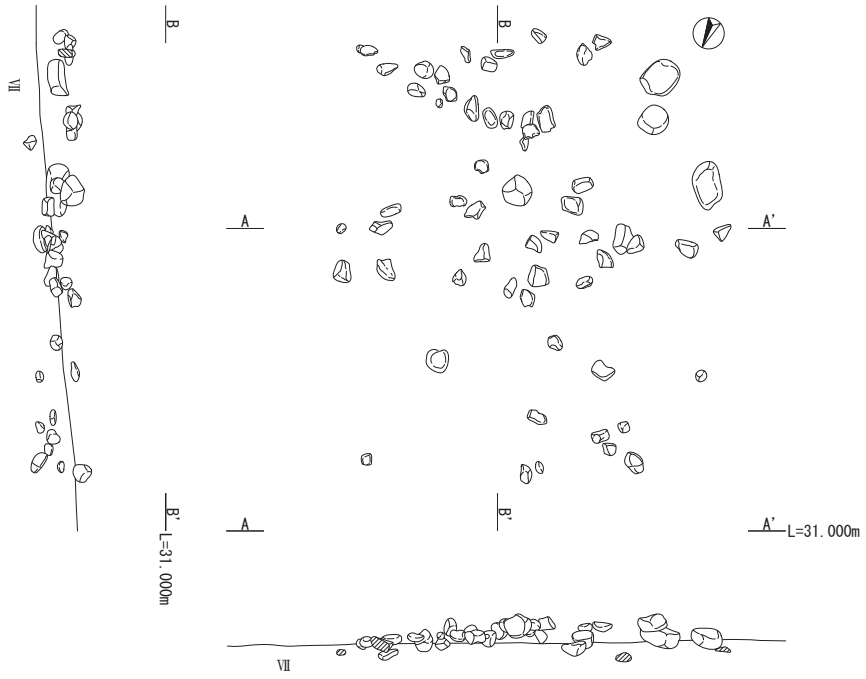
集石243号



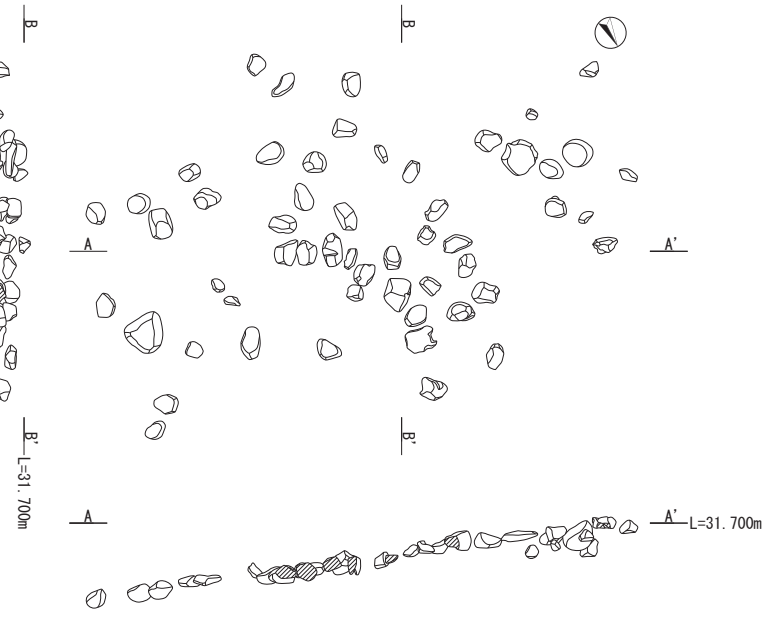
集石242号



第103図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石11



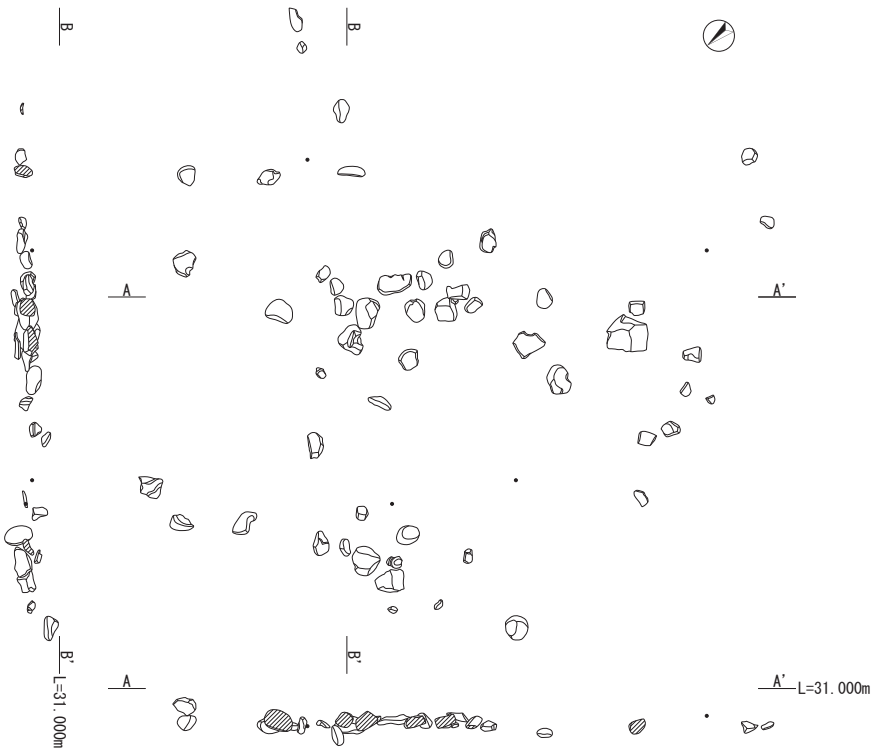
集石244号



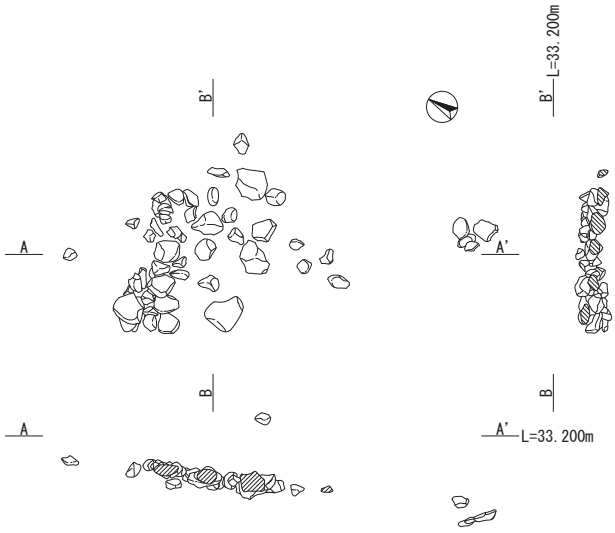
集石245号

0 1m

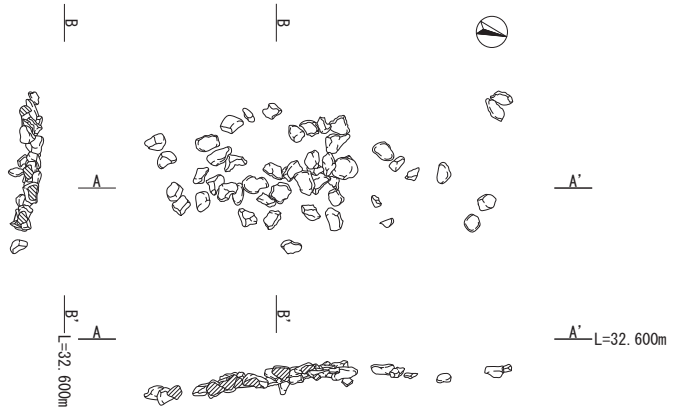
第104図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石12



集石246号



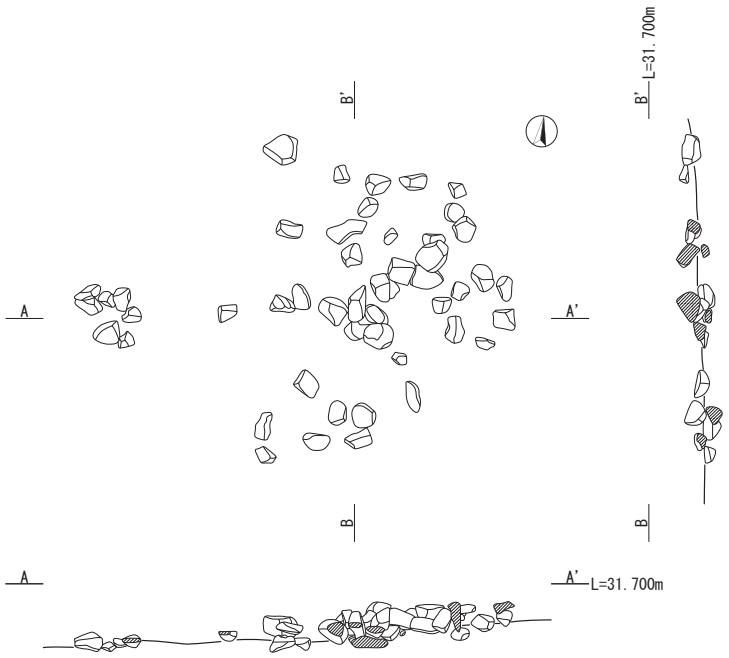
集石247号



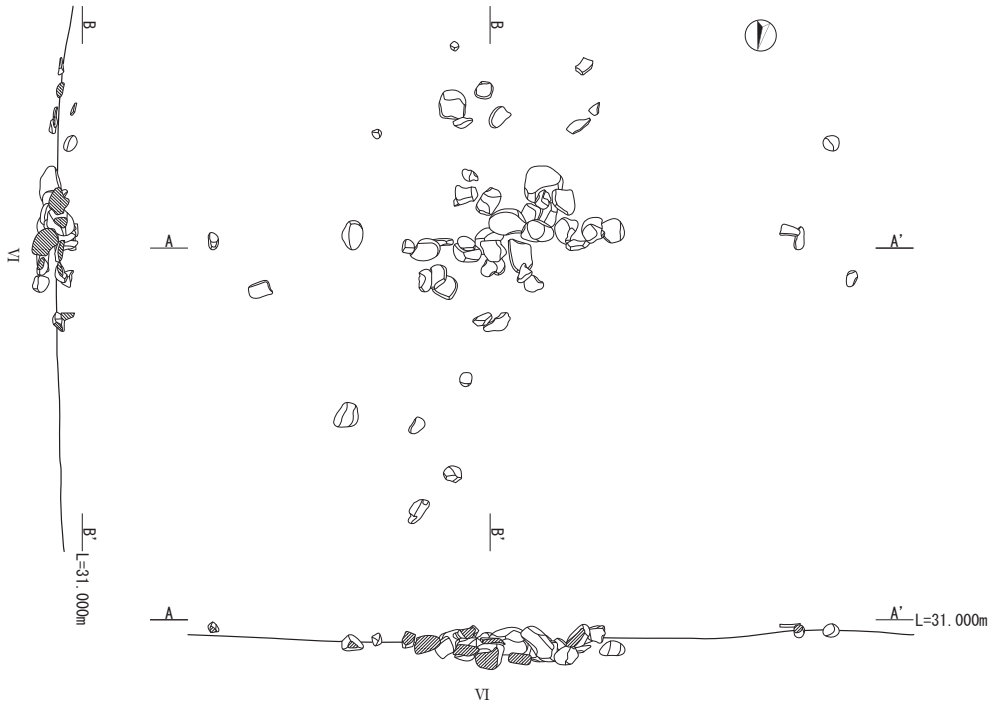
集石250号



第105図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石13



集石248号



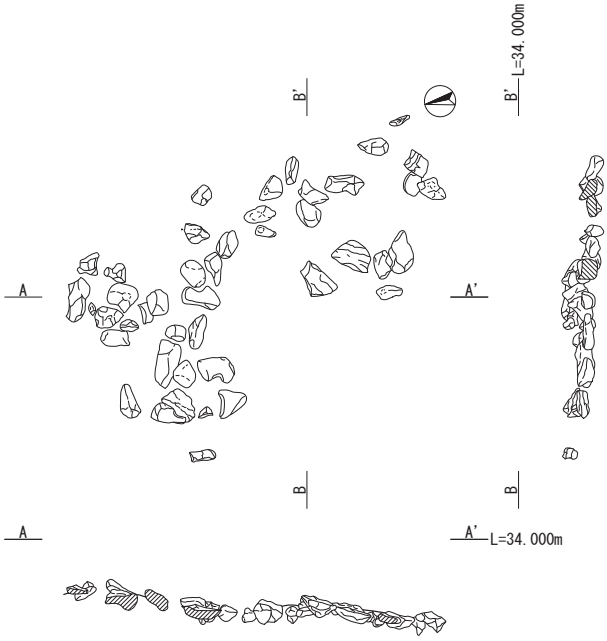
集石249号



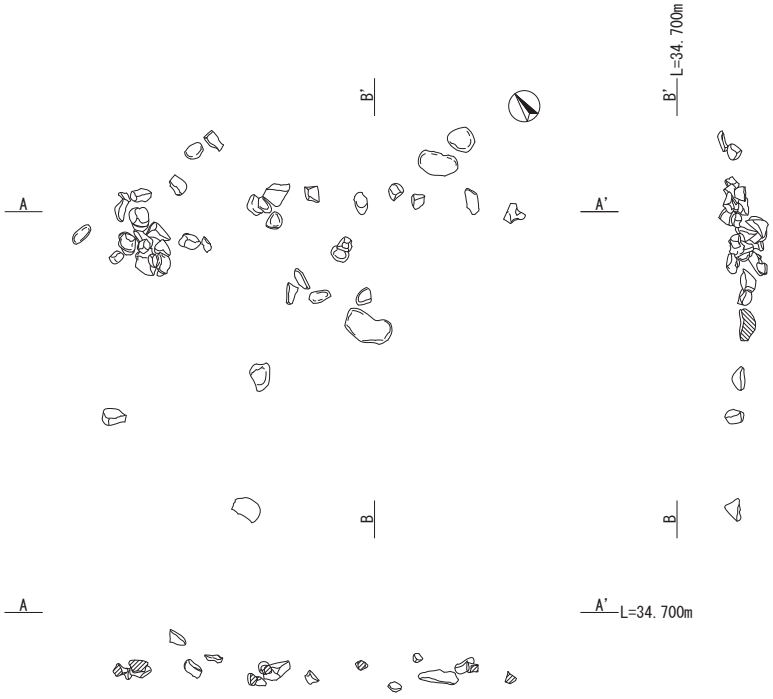
第106図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石14



集石251号



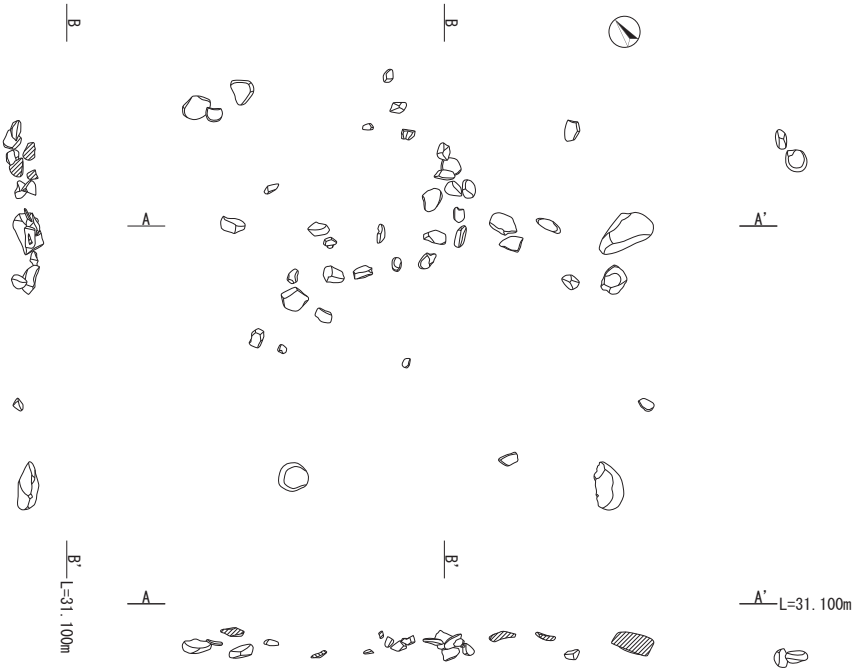
集石252号



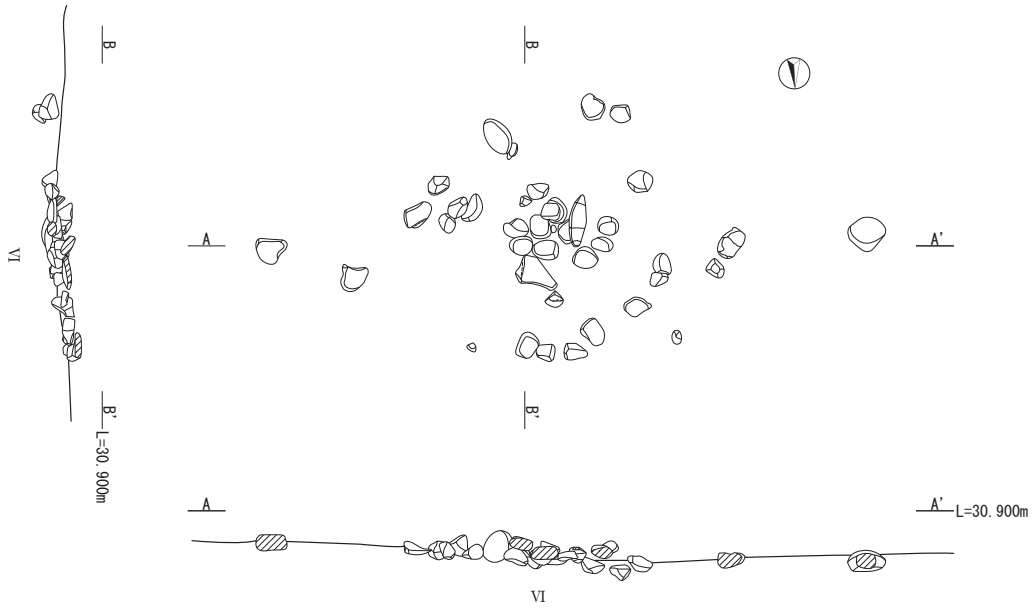
集石253号



第107図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石15



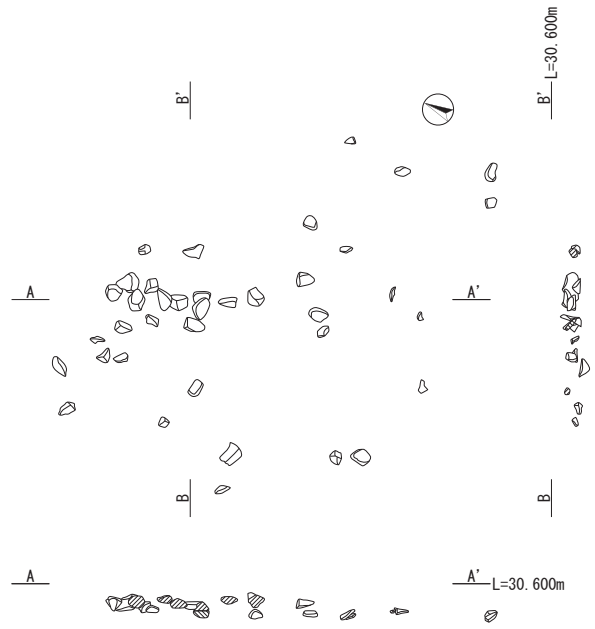
集石254号



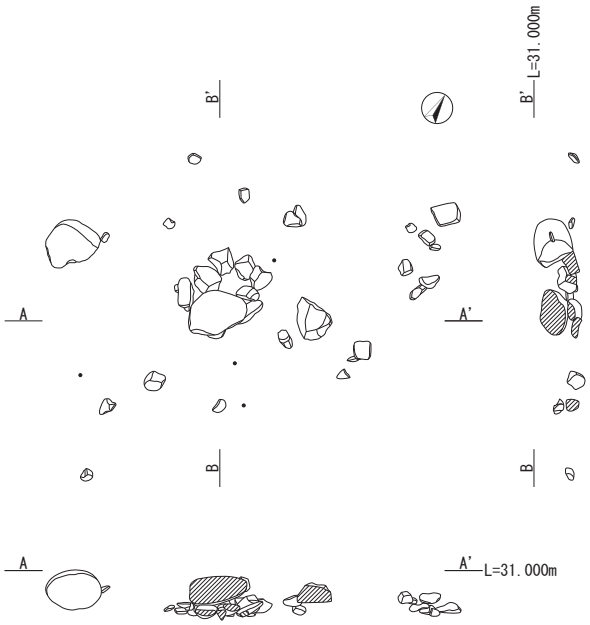
集石255号



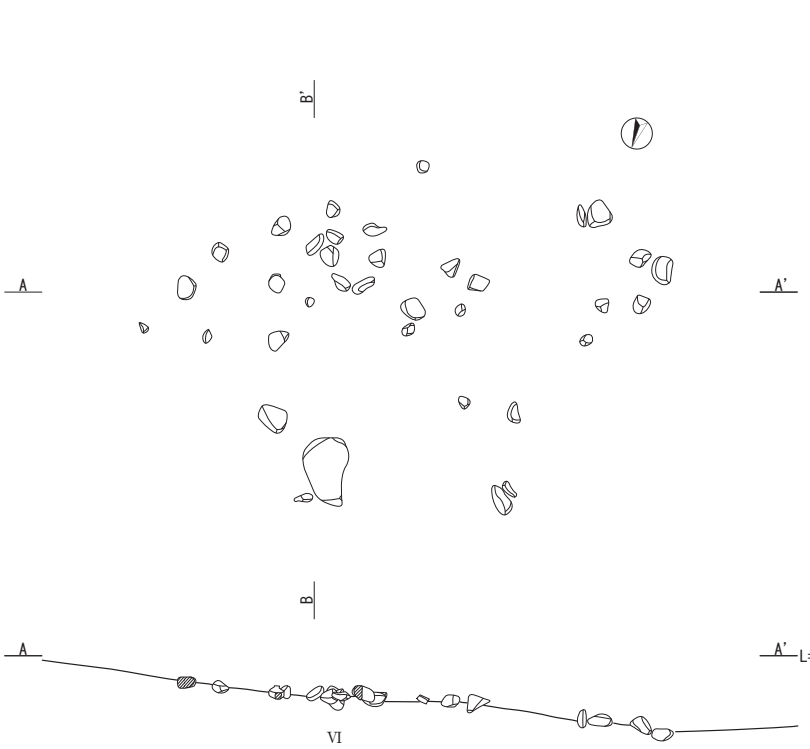
第108図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石16



集石256号



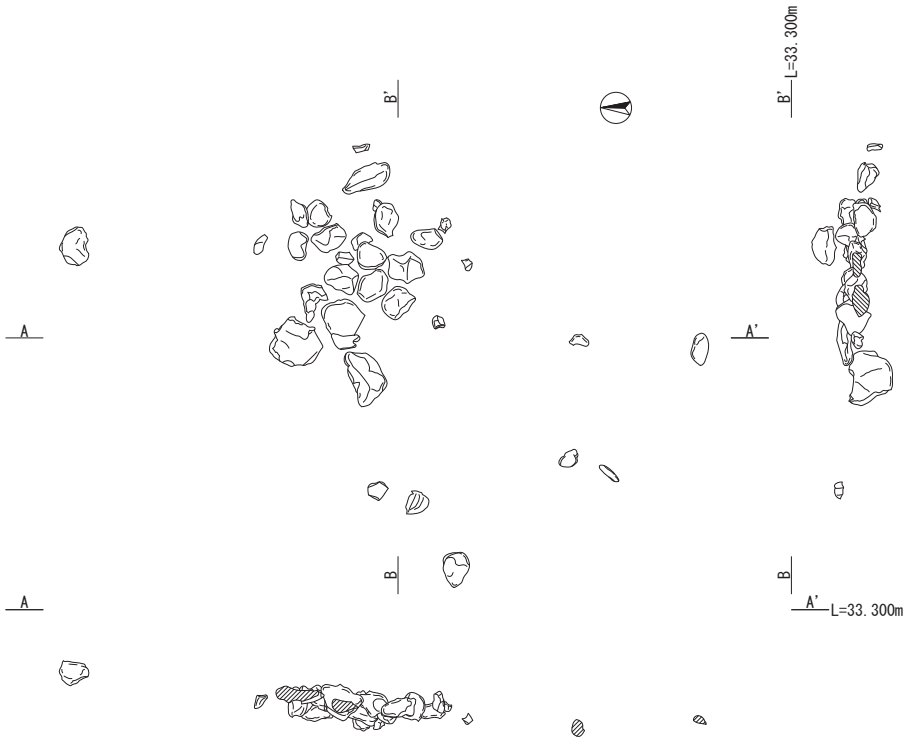
集石258号



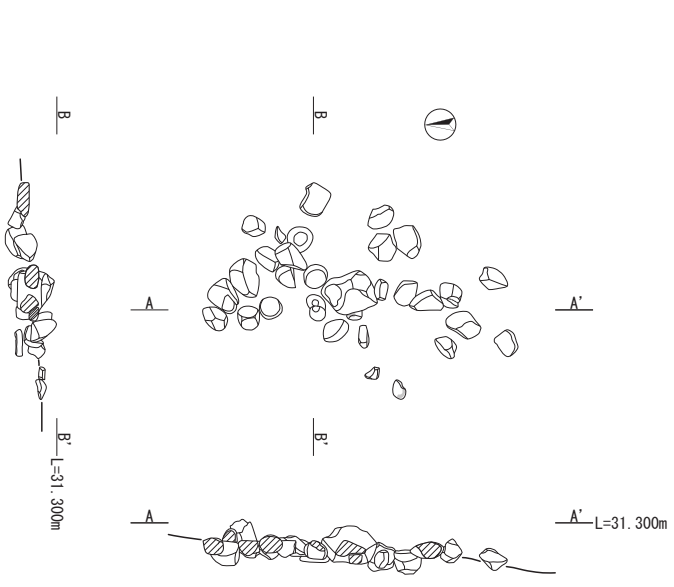
集石257号



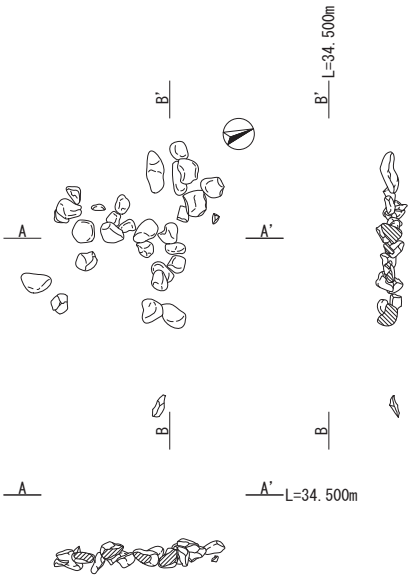
第109図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石17



集石259号



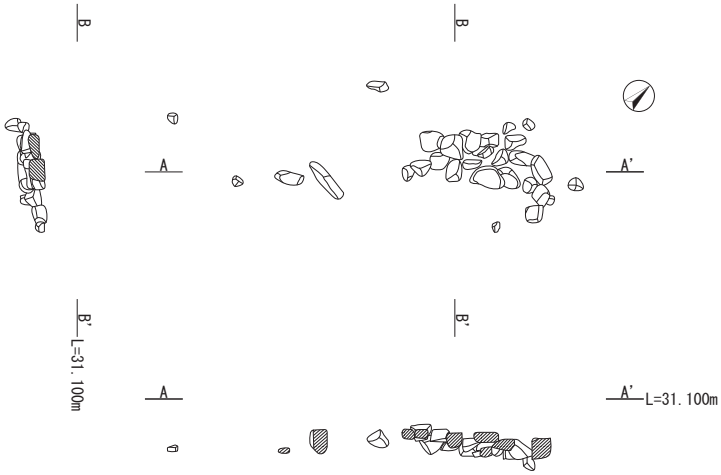
集石260号



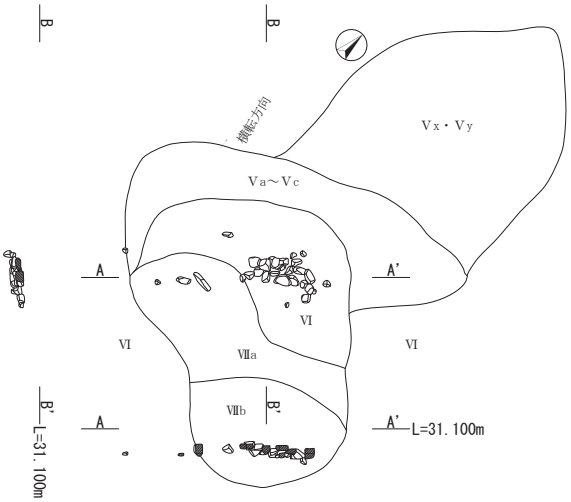
集石262号



第110図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石18

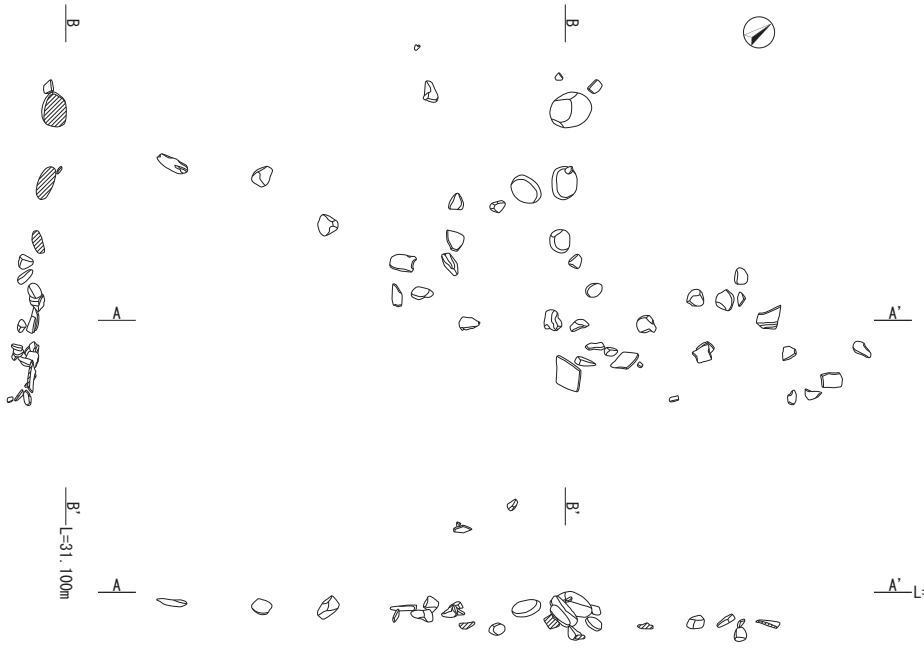


集石261号



集石261号横転状況

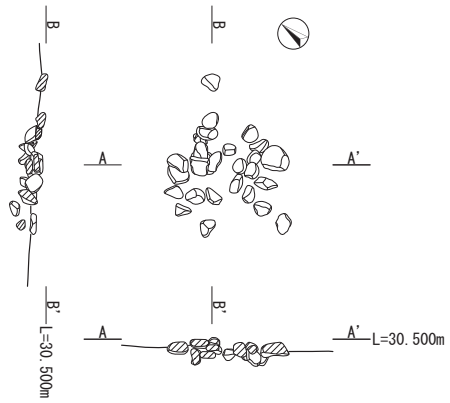




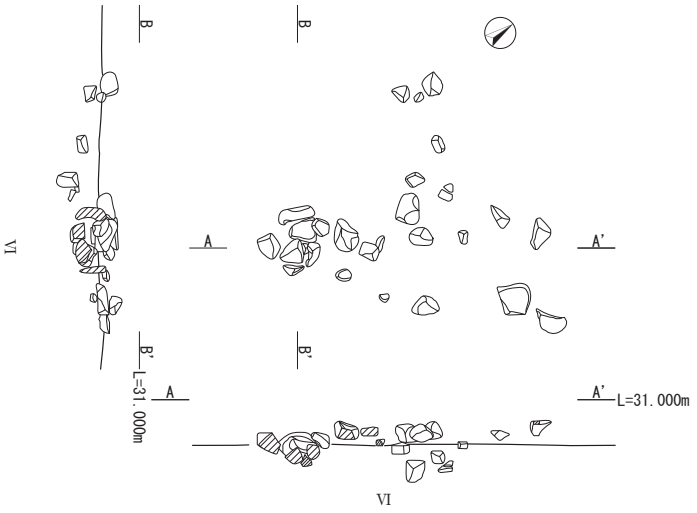
集石264号



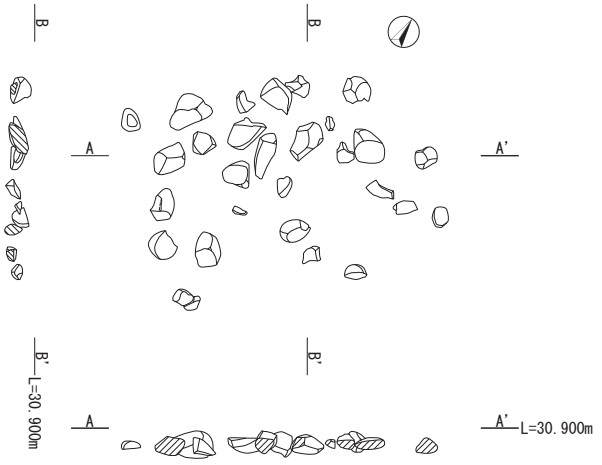
第111図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石19



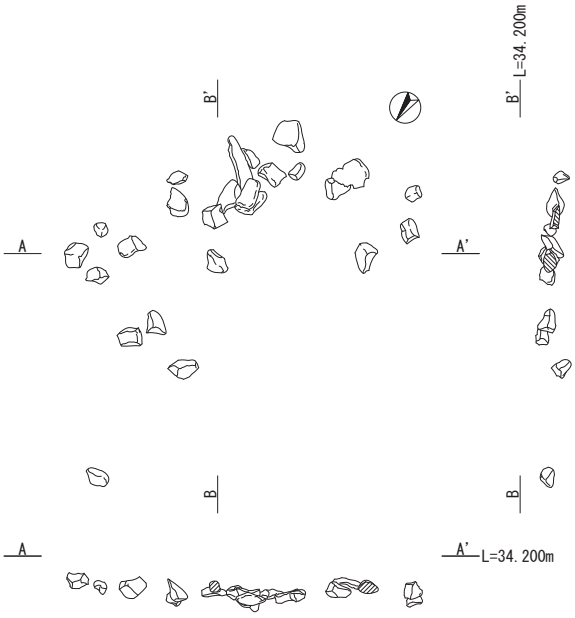
集石263号



集石266号



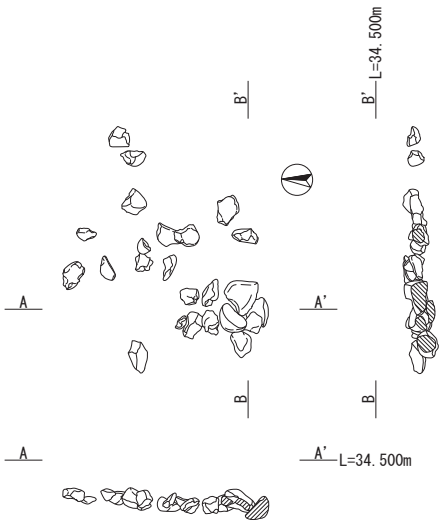
集石265号



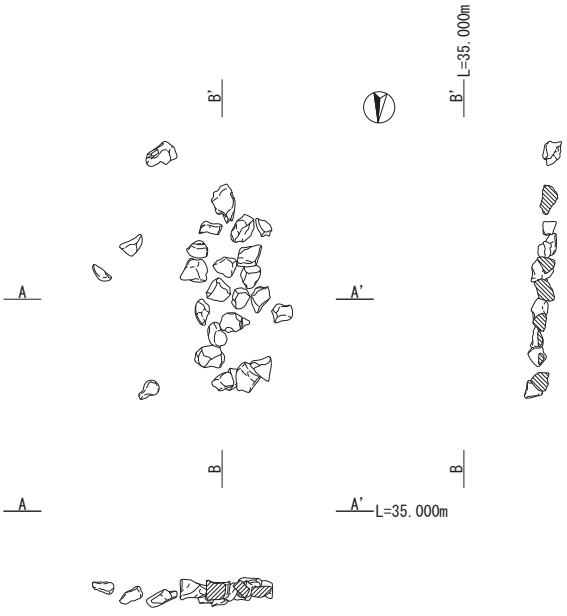
集石267号



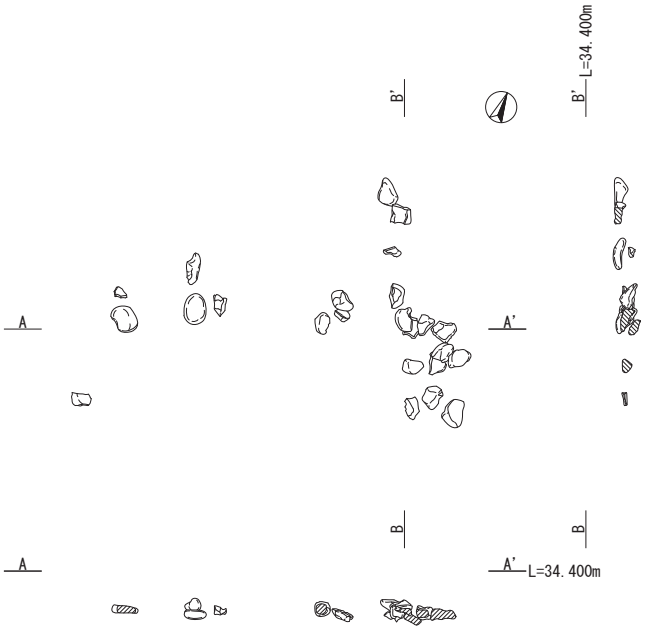
第112図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石20



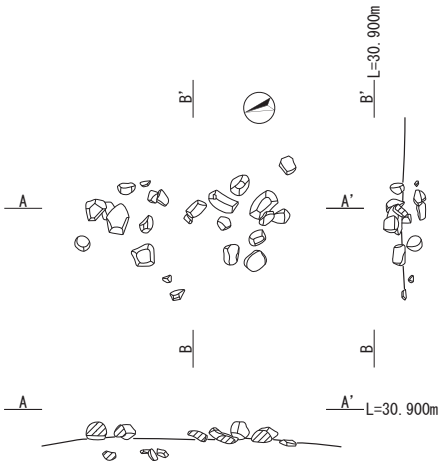
集石269号



集石268号



集石270号



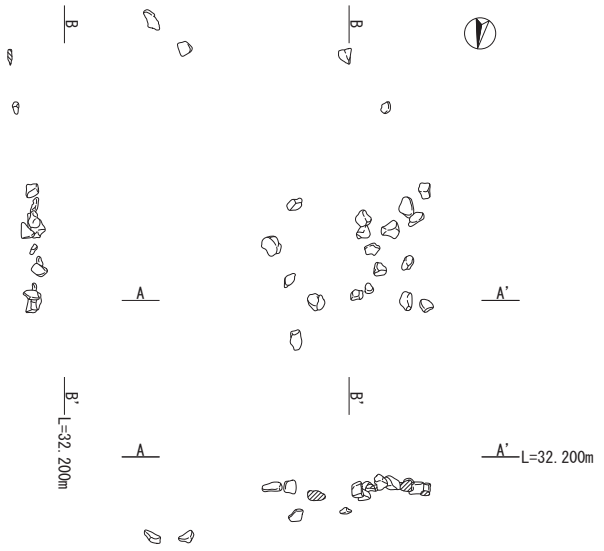
集石272号



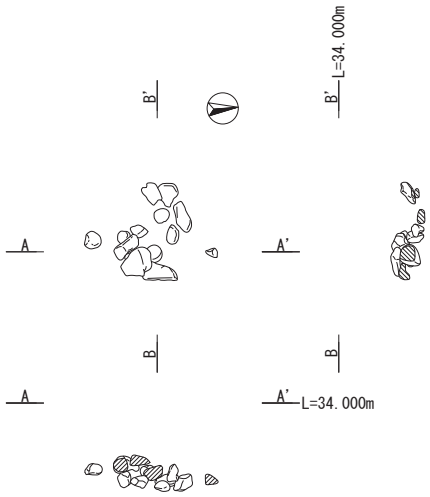
第113図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石21



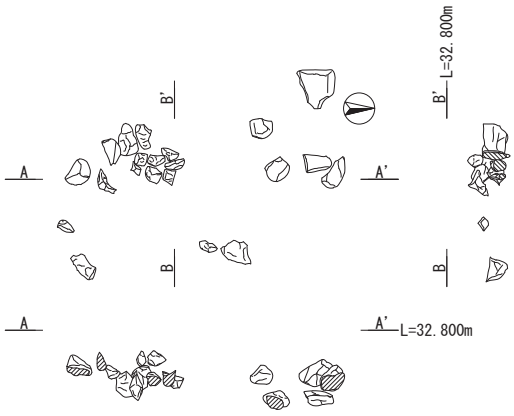
集石271号



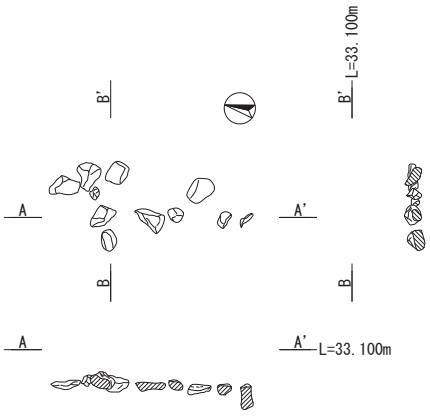
集石273号



集石275号



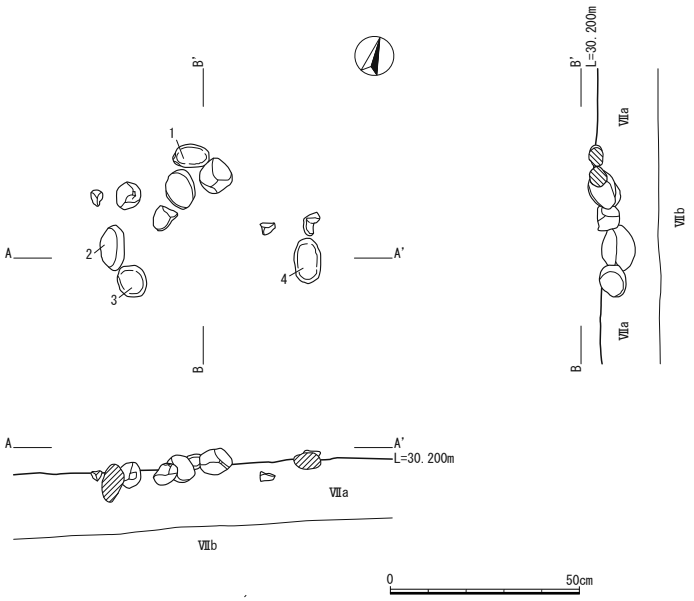
集石274号



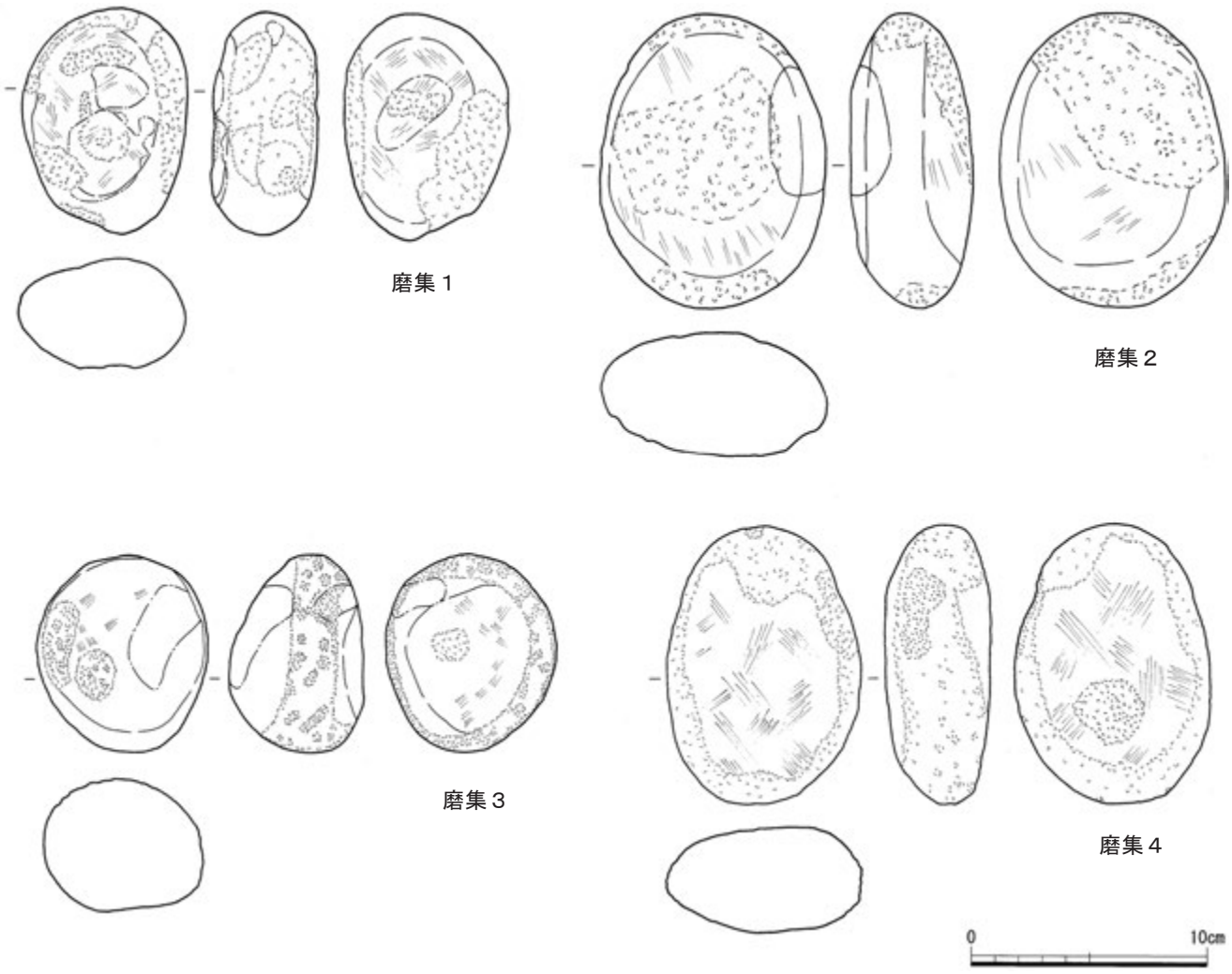
集石276号



第114図　縄文時代早期Ⅵ層検出集石22



第115図　磨石集積



第116図　磨石集積出土石器

第10表　縄文時代早期集石１

挿図番号	遺構番号	検出区	層	土器	掘込	礫の集中	礫数	礫石材								礫の大きさ						備考
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～５cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量	
14	1	H27	Ⅶb		○	○	140	37	26%	56	40%	46	33%		139	35	73	3	1	0	112	
	2	G31		1	○	○	93	65	70%	20	22%	5	5%	2	92	8	28	2	0	0	38	
	3	K30			○	○	82	48	59%	15	18%	18	22%		81	10	56	1	0	2	69	炭化物
15	4	G31			○	○	80	60	75%	12	15%	8	10%		80	28	36	0	0	0	64	
	5	I27			○	○	59	34	58%	20	34%	5	8%		59	4	26	18	0	0	48	被熱・炭化物
	6	G28			○	○	56	17	30%	24	43%	15	27%		56	17	30	2	0	0	49	
	7	M33			○	○	54	－	－	－	－	－	－	－	0	3	33	14	0	0	50	
16	8	L35			△		9	－	－	－	－	－	－	－	0	1	7	1	0	0	9	
	9	I28				○	105	58	55%	37	35%	10	10%		105	6	53	17	7	2	85	被熱
	10	J30				○	54	44	81%	5	9%	5	9%		54	12	27	5	0	0	44	
17	11	L31				△	50	－	－	－	－	－	－	－	0	13	30	5	1	0	49	
18	12	L32･33				○	46	－	－	－	－	－	－	－	0	6	36	4	0	0	46	
17	13	J31				○	35	22	63%	7	20%	5	14%		34	2	24	7	2	0	35	
18	14	K30				○	31	10	32%	18	58%	3	10%		31	6	19	6	0	0	31	炭化物
19	15	L31				○	23	13	57%	9	39%	1	4%		23	0	19	3	0	0	22	
	16	J31				○	14	7	50%	5	36%	2	14%		14	0	9	3	2	0	14	
20	17	M32	Ⅶb上		○	○	129	－	－	－	－	－	－	－	0	11	100	8	4	0	123	
21	18	M32			○	○	62	－	－	－	－	－	－	－	0	11	42	3	1	0	57	
	19	M32			○	△	53	－	－	－	－	－	－	－	0	12	27	7	3	1	50	
20	20	M32					21	－	－	－	－	－	－	－	0	3	18	0	0	0	21	
22	21	L35	Ⅶa下			○	9	8	89%	1	11%	0	0%		9	0	1	8	0	0	9	
	22	M32					124	－	－	－	－	－	－	－	0	25	84	5	2	0	116	
	23	M33					115	－	－	－	－	－	－	－	0	16	79	7	3	1	106	
23	24	L32･33		3			109	68	62%	23	21%	11	10%	7	109	12	72	17	1	0	102	土器細片ほか
	25	E31					44	28	64%	13	30%	3	7%		44	1	40	3	0	0	44	
24	26	M33					39	－	－	－	－	－	－	－	0	3	26	3	0	0	32	
	27	J33		1			30	－	－	－	－	－	－	－	0	5	18	6	0	0	29	被熱
25	28	I・J27	Ⅶa		○	○	302	－	－	－	－	－	－	－	0	31	141	54	11	4	241	
	29	J30			○	○	229	－	－	－	－	－	－	－	0	30	91	42	13	7	183	被熱
26	30	M34		12	○	○	200	139	70%	46	23%	9	5%	6	200	8	74	77	8	33	200	塞ノ神式・倉園B式
	31	J27			○	○	166	－	－	－	－	－	－	－	0	45	73	10	4	0	132	
27	32	L32･33			○	○	147	80	54%	65	44%	1	1%	1	147	－	－	－	－	－	0	
	33	J27			○	△	141	22	16%	83	59%	36	26%		141	45	63	7	0	0	115	
28	34	I28			○	○	107	55	51%	36	34%	15	14%	1	107	3	41	39	4	0	87	被熱
	35	G31		1	○	○	104	61	59%	29	28%	12	12%	2	104	2	21	39	13	11	86	炭化物
29	36	G34			○	△	82	51	62%	24	29%	6	7%	1	82	12	62	6	0	0	80	
	37	L34			○	△	81	52	64%	16	20%	11	14%	2	81	25	40	1	0	0	66	
	38	E30		1	○		76	44	58%	24	32%	7	9%		75	17	44	0	0	0	61	
30	39	M35			○		76	－	－	－	－	－	－	－	0	11	51	15	0	0	77	
	40	M32			○		74	－	－	－	－	－	－	－	0	10	44	12	5	3	74	炭化物
31	41	K31		1	○		61	36	59%	19	31%	6	10%		61	2	40	10	0	3	55	
	42	L34			○		44	31	70%	6	14%	3	7%	4	44	3	19	12	2	0	36	
	43	L34			○		28	11	39%	2	7%	1	4%	6	20	2	21	2	1	0	26	
32	44	J32		1	○		102	－	－	－	－	－	－	－	0	19	77	1	0	0	97	被熱
	45	L33			○		73	－	－	－	－	－	－	－	0	31	58	4	0	0	93	
	46	L33			○		20	－	－	－	－	－	－	－	0							
33	47	J32		1	○		18	－	－	－	－	－	－	－	0	2	13	2	0	0	17	
34	48	F33･34				○	526	276	52%	175	33%	72	14%	3	526	－	－	－	－	－	0	
	49	F33･34				○	526									－	－	－	－	－	0	
	50	F33･34				○	526									－	－	－	－	－	0	
35	51	L29				○	471	326	69%	55	12%	83	18%	6	470	196	154	24	5	3	382	
	52	J・K29				○	246	116	47%	60	24%	68	28%	2	246	18	131	29	7	11	196	
36	53	L32･33		2		○	175	84	48%	40	23%	38	22%	13	175	23	100	38	2	0	163	石坂式
	54	M31				○	130	62	48%	50	38%	13	10%	1	126	18	80	5	0	1	104	炭化物
37	55	C27				○	121	86	71%	25	21%	10	8%		121	6	62	29	0	0	97	被熱
	56	L31		1		○	111	76	68%	23	21%	11	10%	1	111	3	35	34	13	4	89	前平式

第11表　縄文時代早期集石２

挿図番号	遺構番号	検出区	層	土器	掘込	礫の集中	礫数	礫石材								礫の大きさ						備考
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～５cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量	
38	57	L32･33		1		○	90	80	89%	7	8%	2	2%	1	90	8	42	21	3	0	74	石坂式
	58	H29		1		○	100	67	67%	25	25%	7	7%		99	15	67	12	2	0	96	
39	59	J30				○	84	72	86%	8	10%	2	2%		82	9	49	9	0	0	67	
	60	I31				○	80	71	89%	6	8%	2	3%	1	80	3	38	19	12	0	72	
40	61	F28				○	77	47	61%	13	17%	17	22%		77	7	22	26	5	2	62	
	62	F28				○	77	56	73%	20	26%	1	1%		77	6	49	16	0	0	71	
41	63	D25				○	72	61	85%	10	14%	1	1%		72	5	37	25	1	0	68	
	64	CD26				○	69	45	65%	23	33%	1	1%		69	0	44	15	2	2	63	
	65	J29		1		○	66	33	50%	28	42%	4	6%		65	39	18	1	0	0	58	
42	66	B33		2		○	64	57	89%	2	3%	4	6%	1	64	2	29	32	1	0	64	
	67	B28				○	60	－	－	－	－	－	－	－	0	1	31	20	2	0	54	
	68	L31				○	56	42	75%	12	21%	2	4%		56	2	34	8	1	0	45	
43	69	J29				○	48	22	46%	20	42%	4	8%		46	4	28	15	0	0	47	
	70	F33				○	48	6	13%	36	75%	6	13%		48	0	32	11	0	0	43	
	71	E35				○	45	15	33%	26	58%	4	9%		45	1	20	13	3	0	37	
44	72	J29				○	43	31	72%	4	9%	8	19%		43	4	27	8	0	0	39	
	73	I34				○	34	27	79%	4	12%	3	9%		34	0	32	1	0	0	33	
	74	C27				○	32	－	－	－	－	－	－	－	0	1	18	8	5	0	32	被熱
	75	K31				○	28	25	89%	2	7%	1	4%		28	2	13	10	0	0	25	
	76	I34				○	27	22	81%	5	19%	0	0%		27	3	20	4	0	0	27	
45	77	K32				○	25	20	80%	5	20%	0	0%		25	0	21	4	0	0	25	被熱
	78	H30				○	24	24	100%		0%		0%		24	0	13	11	0	0	24	
	79	K30				○	24	16	67%	6	25%	2	8%		24	2	15	2	2	0	21	
	80	K28				○	22	7	32%	8	36%	7	32%		22	1	18	1	0	0	20	
46	81	L33		6			250	132	53%	63	25%	35	14%	20	250	28	174	42	5	1	250	石坂式・塞ノ神式
	82	E28					219	151	69%	51	23%	13	6%	2	217	11	150	26	3	0	190	
47	83	G33					177	－	－	－	－	－	－	－	0	11	137	25	4	0	177	
	84	L33		3			159	95	60%	58	36%	3	2%	3	159	29	109	5	0	1	144	塞ノ神式
48	85	G29	Ⅶa				140	91	65%	38	27%	11	8%		140	8	99	7	1	0	115	
	86	L33		2			123	72	59%	29	24%	22	18%		123	39	59	8	0	1	107	塞ノ神式
49	87	H31		7			119	75	63%	25	21%	12	10%		112	5	86	20	1	0	112	
50	88	L31		1			111	61	55%	25	23%	23	21%	1	110	6	68	14	2	2	92	
	89	C27					109	70	64%	20	18%	19	17%		109	6	87	6	0	1	100	
51	90	H29		1			95	50	53%	25	26%	19	20%		94	7	69	13	0	0	89	
	91	G29					88	－	－	－	－	－	－	－	0	13	71	4	0	0	88	
52	92	H32					83	－	－	－	－	－	－	－	0	14	52	10	1	2	79	被熱
	93	LM34					83	50	60%	17	20%	16	19%		83	8	51	14	0	1	74	被熱
53	94	I J34					83	54	65%	18	22%	10	12%	1	83	13	50	13	1	0	77	
	95	LM33		3			82	42	51%	25	30%	13	16%	2	82	12	62	8	0	0	82	石坂式
54	96	L32･33		4			75	46	61%	16	21%	4	5%	9	75	4	58	13	0	0	75	石坂式
	97	L33		2			77	43	56%	20	26%	11	14%	3	77	9	60	3	0	0	72	吉田式・被熱
	98	L31		4			72	－	－	－	－	－	－	－	0	2	53	8	0	0	63	前平式
55	99	H30					72	61	85%	9	13%	2	3%		72	2	49	19	0	0	70	
	100	H29		1			71	50	70%	15	21%	5	7%		70	1	47	18	1	0	67	
	101	J29					71	36	51%	24	34%	10	14%	1	71	10	40	7	0	0	57	
56	102	G29					66	34	52%	22	33%	8	12%	2	66	2	48	5	2	0	57	
55	103	L31					66	46	70%	9	14%	11	17%		66	0	50	1	1	1	53	
56	104	L34					66	34	52%	15	23%	9	14%	8	66	4	50	7	2	1	64	
57	105	L34		1			65	30	46%	24	37%	8	12%	3	65	7	49	8	0	0	64	石坂式
	106	C28					65	31	48%	17	26%	16	25%		64	15	42	8	0	0	65	
56	107	L35					65	14	22%	14	22%	25	38%	12	65	10	42	8	0	0	60	
58	108	H28					63	39	62%	18	29%	6	10%		63	18	20	11	2	0	51	
	109	M32					63	34	54%	18	29%	7	11%	4	63	6	48	7	0	0	61	
	110	H28					62	18	29%	37	60%	7	11%		62	6	47	7	0	0	60	
59	111	L30					61	40	66%	13	21%	6	10%	1	60	4	43	13	1	0	61	
	112	I30					60	54	90%	4	7%	3	5%		61	3	28	25	1	1	58	

第12表　縄文時代早期集石３

挿図番号	遺構番号	検出区	層	土器	掘込	礫の集中	礫数	礫石材								礫の大きさ						備考
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～5cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量	
59	113	M31					60	39	65%	10	17%	11	18%		60	3	28	14	2	1	48	
60	114	L31					57	37	65%	10	18%	9	16%		56	7	38	8	0	0	53	
	115	I33					57	－	－	－	－	－	－	－	0	3	48	6	0	0	57	
	116	I31		1			54	38	70%	14	26%	2	4%		54	2	36	7	0	0	45	
61	117	CD34					52	31	60%	15	29%	6	12%		52	1	37	14	0	0	52	
	118	L31		4			52	28	54%	14	27%	9	17%		51	3	41	3	0	0	47	加栗山式
62	119	L34					51	29	57%	7	14%	12	24%	3	51	6	39	4	0	0	49	
	120	J34		3			51	35	69%	12	24%	3	6%	1	51	2	45	4	0	0	51	石坂式・被熱
63	121	M33		1			50	30	60%	9	18%	9	18%	2	50	9	29	8	0	0	46	石坂式・被熱
	122	K33･34		2			49	29	59%	14	29%	5	10%	1	49	14	33	1	1	0	49	塞ノ神式
	123	I29					48	28	58%	11	23%	7	15%	1	47	0	34	10	0	0	44	
64	124	L31					48	27	56%	19	40%	2	4%		48	3	4	40	0	1	48	
	125	K31					46	29	63%	9	20%	8	17%		46	14	32	0	0	0	46	
	126	I30					45	32	71%	9	20%	4	9%		45	0	33	11	0	1	45	
65	127	I31					45	31	69%	8	18%	6	13%		45	2	37	3	0	0	42	
	128	I35		7			30	1	3%	22	73%	3	10%		26	1	15	14	0	0	30	塞ノ神式・被熱
66	129	L33					45	23	51%	15	33%	7	16%		45	3	32	10	0	0	45	
	130	I28					44	34	77%	5	11%	5	11%		44	5	39	0	0	0	44	
	131	L33					41	24	59%	7	17%	9	22%	1	41	5	30	4	0	1	40	
67	132	L33					40	23	58%	6	15%	9	23%	2	40	4	34	2	0	0	40	
	133	L31･32					39	31	79%	7	18%	1	3%		39	4	34	1	0	0	39	
66	134	I30					38	6	16%	21	55%	11	29%		38	3	34	1	0	0	38	
67	135	I29					38	20	53%	11	29%	7	18%		38	7	23	3	0	0	33	
68	136	C27					38	－	－	－	－	－	－	－	0	4	31	1	1	0	37	
	137	C27					38	－	－	－	－	－	－	－	0	5	22	8	1	1	37	被熱
	138	L31					37	25	68%	8	22%	4	11%		37	0	24	9	1	0	34	
	139	K33		1			37	23	62%	11	30%	1	3%	2	37	13	22	2	0	0	37	塞ノ神式・被熱
69	140	K34･35	Ⅶa				37	29	78%	4	11%	4	11%		37	3	16	18	0	0	37	被熱
	141	L34					37	20	54%	16	43%	1	3%		37	14	23	0	0	0	37	
	142	H30					35	17	49%	9	26%	9	26%		35	1	30	0	0	0	31	
	143	L31					35	23	66%	6	17%	6	17%		35	2	17	11	3	0	33	
70	144	K30					35	28	80%	6	17%	1	3%		35	1	20	13	1	0	35	
	145	J30					35	25	71%	5	14%	2	6%	1	33	2	26	6	0	0	34	
	146	J29					35	29	83%	4	11%	2	6%		35	1	28	5	1	0	35	
	147	C27					35	－	－	－	－	－	－	－	0	5	12	12	0	0	29	
71	148	K30					34	28	82%	5	15%	1	3%		34	1	25	6	0	0	32	
	149	I34					34	23	68%	9	26%	2	6%		34	3	29	0	0	0	32	
	150	I29					33	19	58%	12	36%	2	6%		33	1	11	14	1	0	27	
	151	I31					31	26	84%	3	10%	2	6%		31	1	8	18	2	0	29	
72	152	M31					31	25	81%	4	13%	2	6%		31	0	21	6	1	0	28	
	153	H30					30	15	50%	9	30%	2	7%	4	30	8	19	1	0	0	28	被熱
	154	I29					30	13	43%	7	23%	10	33%		30	1	12	10	4	0	27	
73	155	K32		1			30	－	－	－	－	－	－	－	0	3	24	3	0	0	30	被熱
	156	L34					30	15	50%	8	27%	7	23%		30	1	26	3	0	0	30	被熱・横転
	157	J29					29	16	55%	5	17%	8	28%		29	2	12	11	0	0	25	
74	158	K31					28	22	79%	5	18%	1	4%		28	0	18	10	0	0	28	
	159	J27					28	－	－	－	－	－	－	－	0	4	24	0	0	0	28	
	160	I29					27	19	70%	5	19%	2	7%	1	27	1	18	6	0	0	25	
	161	I29					26	20	77%	3	12%	3	12%		26	1	22	2	0	0	25	
	162	H33					26	－	－	－	－	－	－	－	0	2	16	6	0	0	24	被熱
75	163	C35					26	16	62%	8	31%	2	8%		26	4	22	0	0	0	26	
	164	I30					24	10	42%	10	42%	4	17%		24	1	16	5	0	0	22	
	165	I31					24	8	33%	10	42%	6	25%		24	2	21	1	0	0	24	
76	166	I31					24	13	54%	10	42%		0%		23	1	12	5	4	0	22	
	167	H29					23	17	74%	4	17%	2	9%		23	0	21	2	0	0	23	被熱
	168	I34					23	16	70%	5	22%	1	4%	1	23	1	19	3	0	0	23	

第13表　縄文時代早期集石４

挿図番号	遺構番号	検出区	層	土器	掘込	礫の集中	礫数	礫石材								礫の大きさ						備考
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～５cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量	
77	169	Ｊ30					22	19	86%	2	9%	1	5%		22	0	9	11	2	0	22	
	170	Ｋ29					22	15	68%	6	27%	1	5%		22	1	13	8	0	0	22	
	171	Ｌ31		2			22	10	45%	5	23%	5	23%		20	0	11	9	0	0	20	
78	172	H34･35					21	17	40%	12	28%	13	30%	1	43	2	13	3	4	0	21	
	173						22									2	14	5	0	0	22	
	174	Ｌ33					21	13	62%	2	10%	3	14%	3	21	2	13	6	0	0	21	
	175	Ｌ35					21	14	67%	4	19%	1	5%	2	21	3	12	6	0	0	21	
	176	H28					20	11	55%	3	15%	6	30%		20	1	15	3	1	0	20	
79	177	Ｇ29					19	19	100%	0	0%	0	0%		19	0	15	1	1	0	17	
	178	Ｋ34					18	8	44%	10	56%	0	0%		18	1	11	5	0	0	17	石坂式・被熱
	179	Ｊ34		1			18	6	33%	9	50%	3	17%		18	7	10	1	0	0	18	
80	180	Ｅ32					18	10	56%	3	17%	4	22%	1	18	0	16	1	0	1	18	
79	181	H29	Ⅶa				17	6	35%	7	41%	4	24%		17	0	17	0	0	0	17	
80	182	Ｌ34		1			16	11	69%	2	13%	2	13%	1	16	1	11	3	1	0	16	
	183	Ｄ34					16	10	63%	4	25%	2	13%		16	0	12	3	1	0	16	被熱
81	184	Ｆ27					15	13	87%	1	7%	2	13%		16	0	11	4	0	0	15	
	185	Ｋ32					15	－	－	－	－	－	－	－	0	1	11	1	2	0	15	
	186	Ｂ27					15	－	－	－	－	－	－	－	0	4	10	1	0	0	15	
	187	Ｋ32					14	12	86%	1	7%	1	7%		14	0	11	1	2	0	14	
	188	ＢＣ34					14	7	50%	6	43%	1	7%		14	0	12	2	0	0	14	
	189	Ｇ33					13	－	－	－	－	－	－	－	0	3	10	0	0	0	13	被熱
82	190	H29					9	2	22%	3	33%	4	44%		9	0	8	1	0	0	9	被熱
	191	Ｄ33					9	2	22%	2	22%	5	56%		9	0	7	2	0	0	9	
	192	Ｇ33					7	－	－	－	－	－	－	－	0	1	4	2	0	0	7	
	193	Ｉ29					5	3	60%	2	40%	0	0%		5	0	0	1	3	1	5	被熱
	194	Ｌ32					5	5	100%	0	0%	0	0%		5	0	0	3	2	0	5	
83	195	M33			○	○	243	－	－	－	－	－	－	－	0	49	154	14	2	1	220	
	196	M33			○	○		－	－	－	－	－	－	－	0							
	197	M33				○	93	－	－	－	－	－	－	－	0	11	71	8	0	0	90	
	198	Ｊ30				○	58	40	69%	8	14%	9	16%		57	7	44	2	0	0	53	
84	199	M33	Ⅶa上	1			197	－	－	－	－	－	－	－	0	21	142	24	1	0	188	
	200	M33					144	－	－	－	－	－	－	－	0	29	96	13	1	0	139	
85	201	Ｋ33					76	－	－	－	－	－	－	－	0	8	64	2	0	0	74	
	202	Ｃ32					54	6	11%	40	74%	8	15%		54	1	45	7	1	0	54	
86	203	Ｊ33					52	－	－	－	－	－	－	－	0	5	44	3	0	0	52	被熱
	204	Ｋ33					45	－	－	－	－	－	－	－	0	8	32	5	0	0	45	被熱
87	205	M33					33	－	－	－	－	－	－	－	0	4	22	4	3	0	33	
88	206	Ｋ36			○	○	216	109	50%	38	18%	40	19%	29	216	13	118	43	15	6	195	
89	207	Ｇ32			○	△	101	－	－	－	－	－	－	－	0	11	54	32	3	0	100	
	208	Ｌ33			○	○	90	－	－	－	－	－	－	－	0	18	65	7	0	0	90	
91	209	M33	Ⅵ下		○		16	－	－	－	－	－	－	－	0	2	13	1	0	0	16	
90	210	M33					240	－	－	－	－	－	－	－	0	45	168	21	2	2	238	
91	211	M33		2			76	－	－	－	－	－	－	－	0	17	55	4	0	0	76	
92	212	M31･32		1			46	28	61%	18	39%	0	0%		46	1	33	10	0	0	44	手向山式
93	213	M35			○	○	113	－	－	－	－	－	－	－	0	16	75	17	3	1	112	
94	214	Ｌ32			○	○	86	59	69%	24	28%	2	2%	1	86	15	38	16	2	1	72	
	215	ＬM35		1		○	252	147	58%	39	15%	30	12%	36	252	50	162	11	0	0	223	塞ノ神式
	216					○																
	217					○																
95	218	M33	Ⅵ	1		○	232	152	66%	37	16%	30	13%	13	232	18	60	1	1	0	80	
	219														0	64	60	1	0	0	125	前平式
	220	Ｋ28				○	157	54	34%	76	48%	27	17%		157	29	77	39	1	0	146	
	221	Ｊ31				○	149	93	62%	29	19%	25	17%	1	148	12	120	11	1	0	144	
96	222	Ｋ28				○	136	59	43%	51	38%	24	18%		134	10	59	32	6	2	109	
	223	Ｊ30		2		○	104	71	68%	17	16%	16	15%		104	6	55	28	4	1	94	塞ノ神式
	224	Ｉ30				○	102	56	55%	21	21%	21	21%	2	100	6	69	8	0	0	83	炭化物

第14表　縄文時代早期集石５

挿図番号	遺構番号	検出区	層	土器	掘込	礫の集中	礫数	礫石材								礫の大きさ						備考
								安山岩(数/%)		ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～５cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量	
97	225	J 28		2		○	96	27	28%	49	51%	16	17%	1	93	8	64	11	0	0	83	
	226	G 29				○	84	47	56%	32	38%	5	6%		84	11	45	10	1	0	67	
	227	L 34				○	53	30	57%	10	19%	9	17%	4	53	9	37	1	0	0	47	
98	228	L 34				○	50	30	60%	13	26%	6	12%	1	50	0	44	3	0	0	47	
	229	L 34				○	43	33	77%	8	19%	2	5%		43	6	34	0	0	0	40	
	230	M33		1		○	36	29	81%	7	19%	0	0%		36	2	29	4	0	0	35	
	231	I 29				○	29	20	69%	8	28%		0%		28	1	15	7	1	0	24	被熱
	232	K34･35				○	28	14	50%	10	36%	3	11%	1	28	1	19	8	0	0	28	
	233	I 27				○	12	－	－	－	－	－	－	－	0	0	7	3	0	0	10	炭化物
99	234	C D26		3			128	81	63%	37	29%	10	8%		128	62	13	45	2	0	122	志風頭・石坂
100	235	L 34･35		1			125	70	56%	42	34%	9	7%	4	125	8	93	15	1	0	117	塞ノ神式
	236	K30					97	58	60%	25	26%	9	9%		92	6	71	16	1	0	94	
101	237	K28					92	45	49%	40	43%	6	7%		91	10	71	8	0	0	89	
	238	L 31･32		8			89	48	54%	32	36%	8	9%	1	89	14	65	6	1	1	87	塞ノ神式
102	239	K28					88	40	45%	28	32%	20	23%		88	6	49	20	3	0	78	
	240	K33					86	－	－	－	－	－	－	－	0	32	47	2	1	0	82	被熱
103	241	K29					77	47	61%	14	18%	11	14%		72	9	55	10	0	0	74	
	242	K28					73	29	40%	28	38%	16	22%		73	14	47	5	0	2	68	
	243	L M33		4			70	57	81%	12	17%	1	1%		70	12	56	2	0	0	70	塞ノ神式
104	244	M32					60	－	－	－	－	－	－	－	0	10	46	3	1	0	60	
	245	L 32					56	44	79%	9	16%	3	5%		56	1	45	8	0	0	54	
105	246	L 35		2			54	26	48%	20	37%	3	6%	5	54	12	39	3	0	0	54	塞ノ神式
	247	K30					54	－	－	－	－	－	－	－	0	14	31	5	0	0	50	
106	248	L 31･32		1			52	31	60%	16	31%	5	10%		52	0	40	7	0	0	47	
	249	L 35		2			51	42	82%	6	12%	3	6%		51	4	40	6	0	0	50	塞ノ神式
105	250	L 31	VI	1			50	30	60%	9	18%	7	14%		46	2	46	0	0	0	48	
107	251	J 28					45	32	71%	4	9%	8	18%		44	5	29	10	0	0	44	被熱
	252	K29					44	19	43%	18	41%	7	16%	1	45	2	27	15	0	0	44	
	253	D28					44	29	66%	10	23%	5	11%		44	4	38	1	1	0	44	
108	254	L 35		1			43	15	35%	25	58%	3	7%		43	8	33	0	2	0	43	塞ノ神式・被熱
	255	M34		1			39	31	79%	5	13%	3	8%		39	3	30	5	1	0	39	塞ノ神式
109	256	L 33		2			36	20	56%	13	36%	3	8%		36	10	26	0	0	0	36	塞ノ神式
	257	L 33		1			35	26	74%	8	23%	1	3%		35	7	26	2	0	1	36	
	258	L 35		5			34	15	44%	13	38%	1	3%	5	34	11	14	5	1	1	32	塞ノ神式
110	259	K30					33	14	42%	10	30%	9	27%		33	4	14	12	3	0	33	
	260	K32					33	27	82%	5	15%	1	3%		33	0	25	7	1	0	33	
111	261	K L34					31	27	87%	2	6%	2	6%		31	6	19	2	1	0	28	横転
110	262	H29					30	20	67%	7	23%	3	10%		30	3	25	2	0	0	30	
112	263	L 33					28	14	50%	5	18%	5	18%	4	28	2	24	0	0	0	26	
111	264	K32･33		20			27	13	48%	14	52%	0	0%		27	4	19	4	0	0	27	塞ノ神式
112	265	K L34		1			27	10	37%	12	44%	4	15%	1	27	1	15	10	1	0	27	被熱
	266	K34		1			26	16	62%	8	31%	2	8%		26	4	15	7	0	0	26	塞ノ神式
	267	D28					25	－	－	－	－	－	－	－	0	1	18	5	0	0	24	
113	268	I 28					25	－	－	－	－	－	－	－	0	0	21	3	0	0	24	
	269	I 29					24	11	46%	12	50%	1	4%		24	1	18	5	0	0	24	被熱
	270	J 28					24	15	63%	6	25%	2	8%		23	0	21	2	0	0	23	炭化物
114	271	E 27					23	10	43%	7	30%	6	26%		23	1	14	7	0	0	22	
113	272	L 34		1			23	15	65%	2	9%	3	13%	3	23	5	17	1	0	0	23	土器細片ほか
114	273	K32					22	－	－	－	－	－	－	－	0	4	18	0	0	0	22	被熱
	274	J 31					21	10	48%	6	29%	3	14%		19	2	15	4	0	0	21	被熱
	275	H31					14	10	71%	4	29%		0%		14	2	8	3	0	0	13	
	276	I 30					11	6	55%	4	36%	1	9%		11	1	8	2	0	0	11	被熱

集石内出土土器（第117・118図）

集石２号からは１類土器が出土している。集石44・54・98・238号からは２類土器が出土している。**集石54－１**は口縁部上端に刺突文が施されず，貝殻条痕文のみで文様が施されている。集石98・238号出土は２ｂ類土器の口縁部片である。集石118・250号からは４類土器が出土している。**集石118－１**は４ａ類土器であり，補修孔が確認できる。**集石250－１**は横位方向の貝殻刺突文が施されている胴部片である。集石87・145号からは５類土器が出土している。集石41・120・237号からは６類土器が出土している。集石111・114号からは７類土器が出土している。集石146号からは９類土器が出土してい

第15表　集石内出土土器観察表

挿図番号	集石（遺物）番号	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
			外面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第117図	集石２－１	1類	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	集石13－１	7類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	集石41－１	6類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	
	集石44－１	2類	貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	集石54－１		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄橙	良	
	集石87－１	5類	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	集石98－１	2類	刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	２ｂ類土器
	集石111－１	7類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		淺黄橙色	淺黄橙色	良	
	集石114－1		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	集石118－1	4類	楔形突帯 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	４ａ類土器
	集石120－1	6類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	明赤褐色	良	
	集石145－1	5類	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		灰褐色	淺黄橙色	良	
第118図	集石146－1	9類	沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	集石171－1	12類	貝殻刺突文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	にぶい褐色	良	
	集石171－2		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	集石198－1		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい赤褐	良	
	集石223－1		貝殻刺突文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい褐色	良	
	集石236－1		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	褐色	良	
	集石237－1	6類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	集石238－1	2類	刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	２ｂ類土器
	集石246－1	12類	貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	ナデ	○	○	○		○		黒褐色	橙色	良	
	集石250－1	4類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	明赤褐色	良	
	集石264－1	12類	沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	褐色	良	
	集石264－2		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	褐色	良	
	集石270－1		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	

る。集石171・198・223・236・246・264号からは12類土器が出土している。集石270号からは，やや太めの沈線文を曲線的に施した土器が出土している。小片のため詳細は不明である。

磨石集積出土石器（第116図　磨集１～４）

磨集１～４は磨・敲石である。**磨集１**は楕円形を呈する礫を素材としている。表面に凹みを持ち，裏面中央にも浅い凹みが見られる。下面に集中して敲打痕が見られ，上面・右側面にはわずかに確認できる。表裏面の一転破線は被熱痕である。**磨集２**は扁平な楕円形を呈する礫を素材としている。表裏面に集中して敲打痕が見られ，上下面にはわずかに確認できる。表面の一転鎖線は被熱痕が見られる。**磨集３**は表面左半に敲打痕が見られ，側面にも全周にわたって確認できる。表裏面の一点鎖線は被熱痕である。**磨集４**は扁平な楕円形を呈する礫を素材としている。裏面下半に浅い凹みを持つ。側面は全周にわたって敲打痕が見られる。表裏面を磨面として利用している。

集石内出土石器

集石13（第119図　集１）

集１は扁平な礫を素材とした磨・敲石である。上下面と右側面に敲打痕が見られる。

集石23（第119図　集２）

集２は扁平な楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。敲打痕は右側面に集中して見られる他，左側面・下面にも確認できる。

集石24（第119図　集３）

集３は楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。右側面に敲打痕が集中して見られる。表裏面を磨面として利用している。

集石26（第119図　集４）

集４は小形の礫を素材とした磨・敲石である。上面から右側面にかけて集中して敲打痕が見られる。

集石51（第119図　集５）

集５は軽石製品である。長さ約43cm，幅約29cm，厚さ約23cmを測る大型品で，横断面がいびつな逆三角形状を呈している。上面は平坦になるように加工されており，中央から下端にかけて浅い溝状の凹みを持つ。

集石56（第120図　集６）

集６は石匙であり，石匙２に分類される。横長の剥片を素材とし，素材の打面側に摘部が，また，末端側に湾曲した刃部が作出されている。

集石119（第120図　集７）

集７は小形の礫を素材とした磨・敲石である。表面中央に凹みを持ち，裏面にも浅い凹みが見られる。上面に敲打痕が集中して見られ，両側面・下面にも確認できる。裏面下半を欠失している。

集石150（第120図　集８）

集８は楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。両側面に敲打痕が見られ，表面にもわずかに確認できる。

集石222（第120図　集９）

集９は台石である。断面が三角形状を呈した礫を素材としている。表面を作業面として利用しており，敲打痕が広く見られる。

集石270（第120図　集10）

集10は扁平な楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。側面のほぼ全周にわたって敲打痕が見られる。

第16表　磨石集積及び集石内出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	遺構名	出土区	層　位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備　考
116	磨集１	磨・敲石	安山岩４	磨石集積	L33	Ⅶ	9.50	7.00	4.50	401.00	5	
	磨集２	磨・敲石	安山岩４	磨石集積	L33	Ⅶ	12.40	9.50	5.20	798.00	10	
	磨集３	磨・敲石	安山岩４	磨石集積	L33	Ⅶ	8.40	7.20	5.60	419.00	9	
	磨集４	磨・敲石	安山岩４	磨石集積	L33	Ⅶ	11.70	8.20	4.40	527.00	1	
119	集１	磨・敲石	安山岩４	集石13	J31	Ⅶb	10.20	8.50	4.50	607.00	34	
	集２	磨・敲石	安山岩４	集石23	M33	Ⅶa下	10.00	8.00	4.40	541.00	36	
	集３	磨・敲石	安山岩４	集石24	L35	Ⅶa	11.60	8.80	5.30	864.00	69	
	集４	磨・敲石	安山岩４	集石26	M33	Ⅶa下	5.70	5.40	3.70	160.00	28	
	集５	軽石製品	軽石	集石51	L29	Ⅵ	4302.00	29.00	22.50	5250.00	402	
120	集６	石匙2	安山岩１b	集石56	L32	Ⅶa	3.05	6.60	0.70	9.30	16	
	集７	磨・敲石	砂岩１	集石119	L34	Ⅵ	8.25	7.40	3.80	280.00	1	
	集８	磨・敲石	安山岩４	集石150	I29	Ⅶa	11.20	8.60	4.70	731.00	32	
	集９	台石	安山岩４	集石222	K28	Ⅵ	16.50	19.30	8.00	3064.00	67	
	集10	磨・敲石	安山岩４	集石270	J28	Ⅵ	9.70	7.70	4.10	506.00	20	



集石2-1



集石13-1



集石41-1



集石44-1



集石54-1



集石98-1



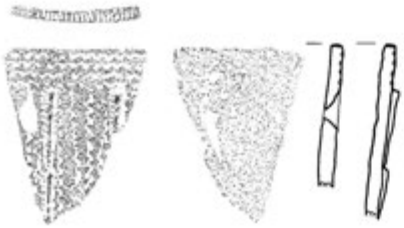
集石87-1



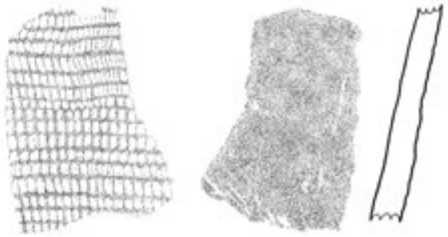
集石111-1



集石114-1



集石118-1



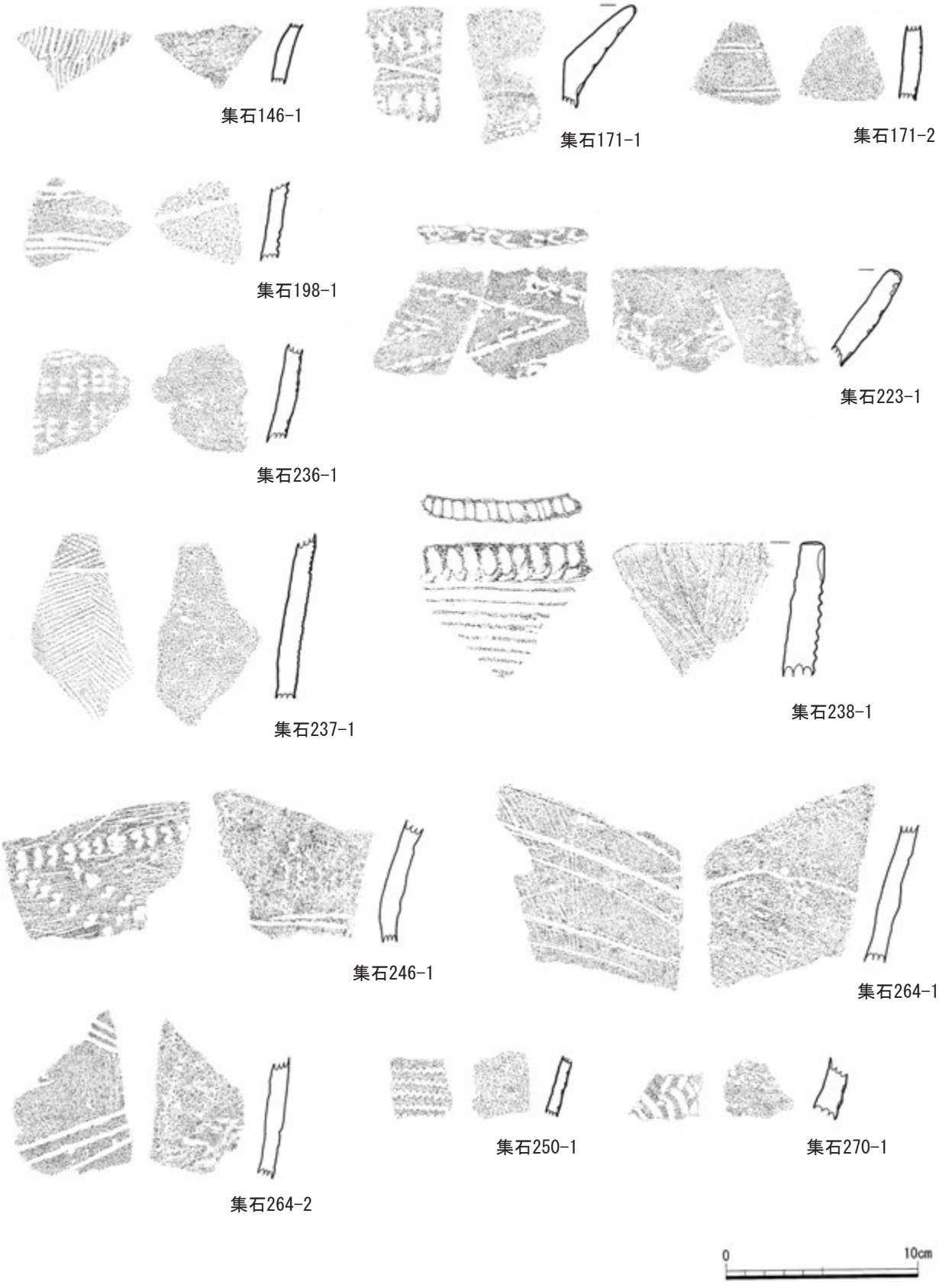
集石145-1



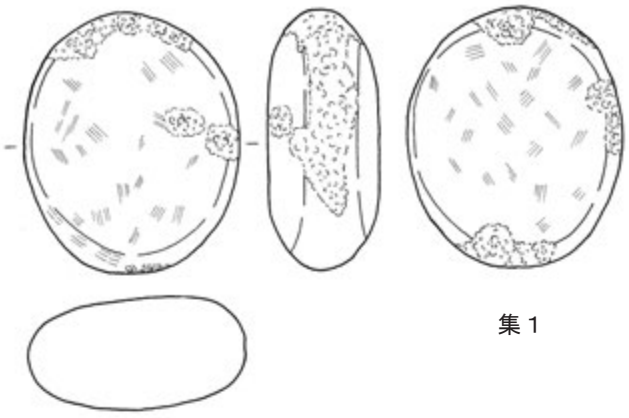
集石120-1



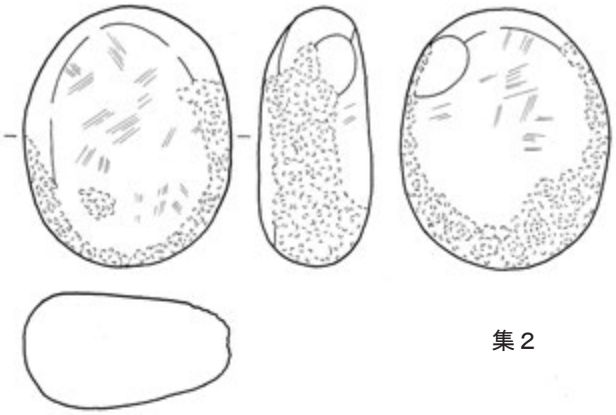
第117図　集石内出土土器１



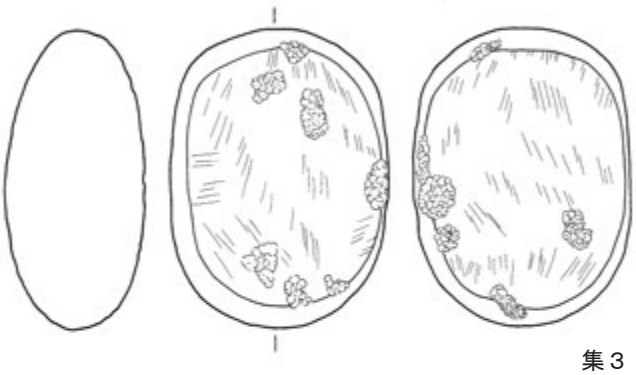
第118図　集石内出土土器２



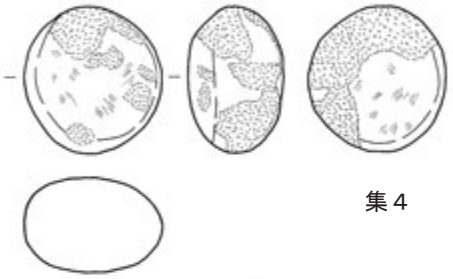
集１



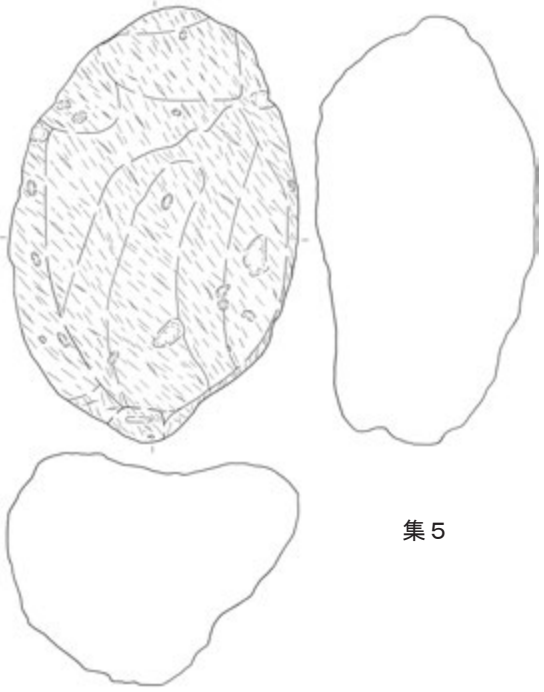
集２



集３



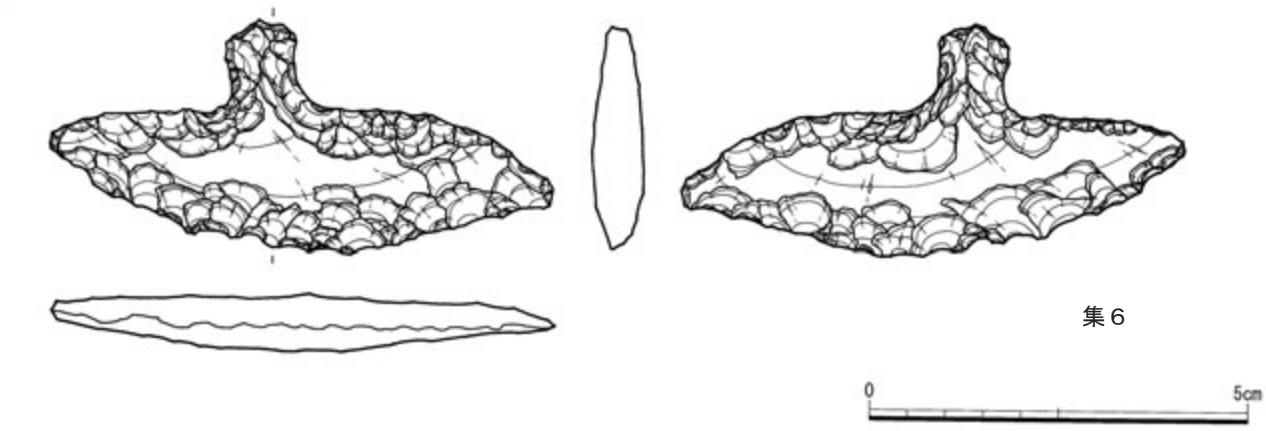
集４

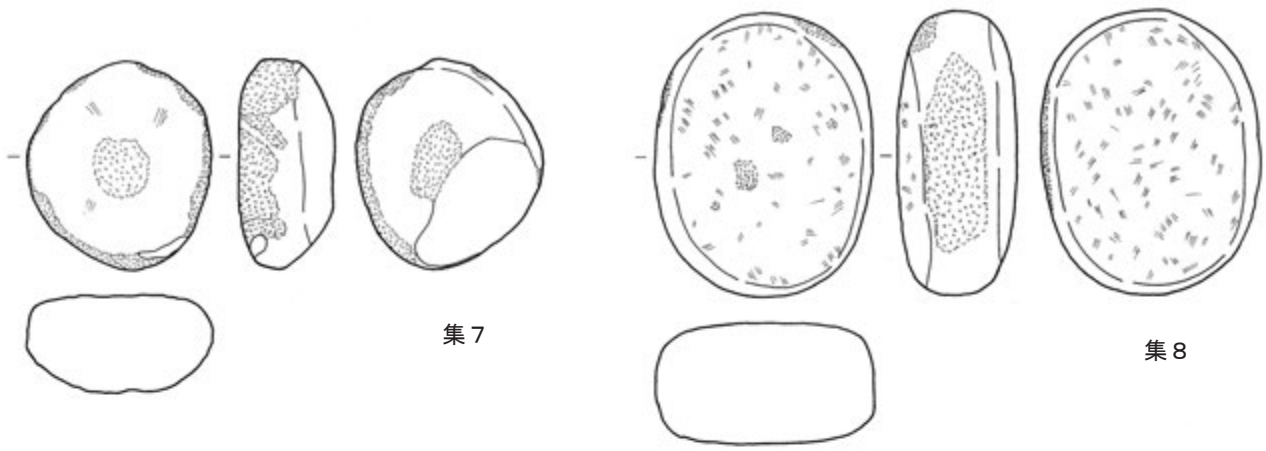


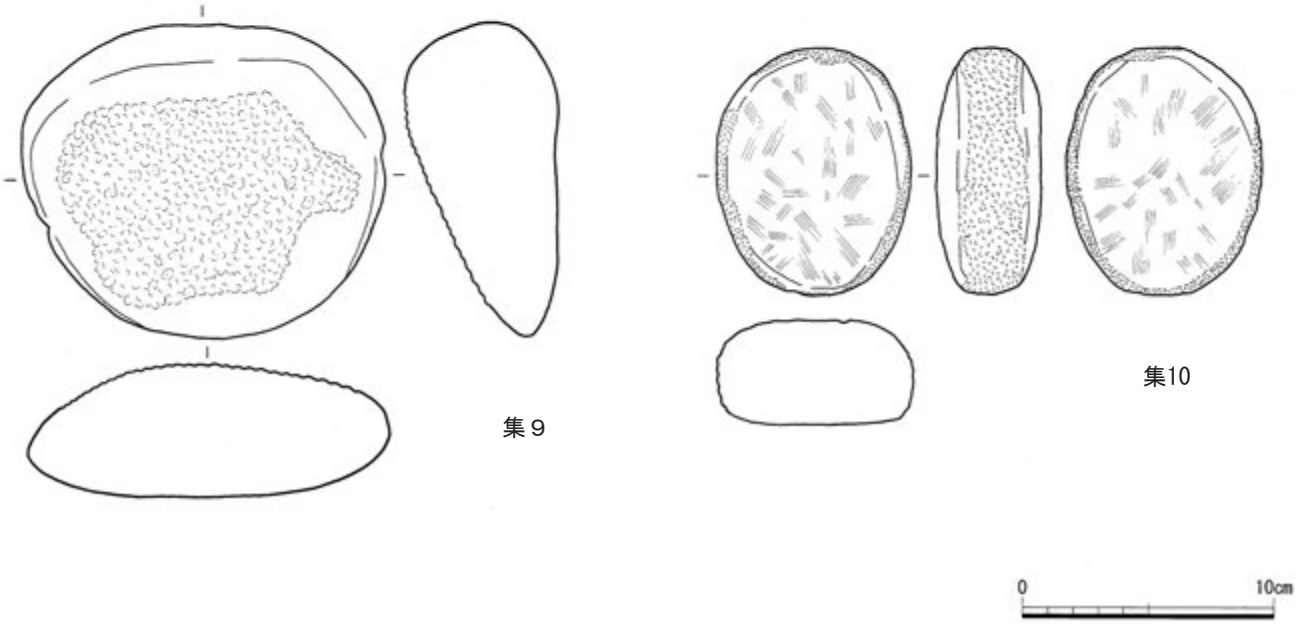
集５

第119図　集石内出土石器１









第120図　集石内出土石器２

（２）縄文時代早期連穴土坑・土坑

縄文時代早期の土坑はⅧ層上面を中心に33基検出された。調査区の南東部から多く検出されているが，調査区の全域で確認されている。33基の土坑のうち，**土坑１～８**の８基についてはブリッジが残存していることから，いわゆる連穴土坑であると考えられる。また，**土坑９～12**の４基の土坑は一部にくびれ部を持ち，その形状から連穴土坑の可能性が非常に高く連穴土坑として扱う。連穴土坑は調査区の南東部から多く検出されている。調査区の北西部でも一定数が密集して検出されているが，連穴土坑は検出されていない。

連穴土坑（第122～127図　連穴土坑１～12）

連穴土坑は12基検出されている。連穴土坑１～８はⅧａ層である薩摩火山灰層を利用したブリッジ部分が残存している。

連穴土坑１はＪ35区のⅧａ層上面から検出された。東西方向を長軸とし，煙道側（西側）の円形土坑が，焚口側（東側）の楕円形土坑とトンネルでつながっている形状である。煙道側の円形土坑は直径38㎝を測り，トンネル部へ向かい約45度の角度で傾斜している。断面図のとおり，トンネル部は最も深く掘り込まれており，検出面から深さは38㎝である。最深部は平坦に整形されている。トンネル部やその周辺で焼土等は確認できなかった。ブリッジ部分は幅12㎝，厚さ16㎝であり，Ⅷａ層がしっかりと残存している。焚口側の楕円形土坑は長軸111㎝，短軸55㎝を測り，トンネル最深部から東側の立ち上がりに向かい緩やかに立ち上がる形状をしている。埋土は単一埋土であり，明黄褐色パミスを多量に含むⅦ層起源の黒褐色砂質土が堆積している。この明黄褐色パミスについては，採取しテフラ分析をおこなっている。また，床面からは炭化物が出土していたため，年代測定をおこなっている。焚口側の楕円形土坑の埋土中程から倉園Ｂ式土器と考えられる土器片が１点出土している。

連穴土坑２はＬ35区のⅧａ層上面から検出された。ブリッジ部分より東側は上部を樹痕による撹乱を受けている。東西方向を長軸とし，煙道側の円形土坑が，焚口側のややいびつな楕円形土坑とトンネルでつながっている形状である。煙道側の円形土坑は直径40㎝を測り，急角度で掘り込まれたのちトンネル部へ向かい緩やかに傾斜する。床面は焚口側の楕円形土坑の中程で最も深くなるが，そこからほぼ水平に東側壁面まで行き，撹乱を受けはっきりとはしないが，煙道側とほぼ同じ角度で立ち上がると考えられる。ブリッジ部分はⅧａ層が幅10㎝で残存している。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑３はＫ34区のⅧａ層上面で検出された。東西方向を長軸とし，煙道側の円形の土坑が，焚口側の楕円形土坑とトンネルでつながる形状をしている。煙道側の円形土坑は直径約35㎝を測り，床面に向けて垂直に掘り込まれている。連穴土坑１や２と異なり，掘り込みは一気に最深部に達し，焚口側の楕円形土坑の中程から東側に向けて緩やかに傾斜する。最深部の床面の深さは，検出面から45㎝である。楕円形土坑の東側はステップ状の段が形成され，煙道側と同じくほぼ垂直に立ち上がる。ブリッジ部分はⅧａ層がしっかりと残存しており，幅21㎝，深さ18㎝を測る。焚口側の楕円形土坑は長軸116㎝，短軸66㎝である。埋土はレンズ状堆積を呈す。埋土中からは礫が数点出土しているが，どれも中程よりも上位からの出土であり，流れ込みと考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑４はＫＬ32区のⅧａ層上面から検出された。煙道側の円形土坑が，焚口側の楕円形土坑とトンネルでつながる形状をしている。煙道側の円形土坑は直径23㎝のほぼ正円をなす。床面に向けて緩やかに傾斜し，床面はほぼ平坦であり，焚口側ではやや急に立ち上がる。ブリッジ部分は幅６㎝と狭いが辛うじてⅧａ層が残存している。埋土中には礫が出土しているが，どれも自然礫であり，流れ込みと考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑５はＬ31区のⅧａ層上面から検出された。煙道側は長軸約55㎝，短軸約30㎝のいびつな楕円形をなし，焚口側の楕円形土坑とトンネルでつながる。煙道側からの掘り込みは急角度で落ち込み床面に達し，焚口側の立ち上がりまでほぼ平坦であるが，トンネル部分でわずかに高まりを持つ。焚口側は約45度の角度で立ち上がる。特徴的なのはブリッジ部分であり，幅10～20㎝，厚さ13㎝でⅧａ層が残存しており，その形状から土坑使用時の形状をほぼ保っていると考えられる。埋土はレンズ状堆積を呈し，礫が数点出土しているが，いずれも自然礫の流れ込みである。トンネル部分の床面には極わずかに焼土が確認されている。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑６はＧ33区Ⅷａ層上面から検出された。周囲には他に連穴土坑はなく，ほぼ単独で検出されている。また，円形の窪地の中に作られているという特徴を持ち，検出面から床面までの深さも，他と比較して深い。煙道側の長軸48㎝，短軸32㎝の楕円形小土坑が，焚口側の長軸130㎝，短軸55㎝の楕円形土坑とトンネルでつながる形状をしている。床面はほぼ平坦であり，煙道側・焚口側ともに急角度で立ち上がる。トンネル部分から焚口側にかけてはしっかりとした焼土が確認されている。焼土からは少量であるが炭化物も出土している。遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑７はＪ28区のⅧａ層上面から検出された。煙道側は長軸30㎝，短軸25㎝のいびつな長方形状の土坑で

あり，角部がトンネルと接合する。検出面から深さ約12㎝の床面はほぼ水平であるが，煙道側のトンネル部付近がやや下がる。ブリッジは幅６～10㎝，厚さ６㎝でⅧａ層が残存している。トンネル部分には埋土２が堆積しているが，この埋土２は不自然な堆積状況を示しており，また非常によくしまっているため，人為的に成形された可能性が高い。この埋土２は煙道側の立ち上がり付近でも確認でき，埋土２と床面のやや下がる部分の形状がきれいにつながる。煙道側のトンネル出口を部分的に深く成形したかった，もしくはトンネル部分を狭くしたかった，のどちらかの可能性が考えられる。床面は煙道側，焚口側ともに，ほぼ垂直に立ち上がる。焚口側は底辺35㎝，高さ70㎝の，ややいびつな二等辺三角形状の土坑である。埋土１，２中には１～３㎜程度の炭化物が確認された。焼土・遺物は出土していない。

連穴土坑８はＪ27区のⅧａ層下位から検出された。煙道側は，長軸32㎝，短軸27㎝のいびつな長方形状の土坑であり，約45度の角度で床面へと傾斜する。床面はほぼ水平であるが，ブリッジ直下から煙道側はやや掘り下げられている。ブリッジは幅14～20㎝，厚さ15㎝で，Ⅷａ層が非常によく残存している。床面は焚口側ではほぼ垂直に立ち上がる。埋土は主に煙道側から流入したと考えられる堆積状況を示している。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑９～12は土坑の一部にくびれ部を持つ土坑群であり，ブリッジは残存していないが，その形状から連穴土坑の可能性が高い土坑である。

連穴土坑９はＪ35区のⅧａ層から検出された。長軸約140㎝，短軸55㎝を測り，東側1/4の部分にくびれ部を持つ。床面は東側に向けて緩く傾斜する形状を呈し，立ち上がりは東西ともに約45度の角度で立ち上がる。埋土中には礫が出土しているが，いずれも自然礫であり，埋土の中程から上位で出土している点からも，流れ込みと考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑10はＬ35区のⅧａ層中から検出された。長軸185㎝，短軸55㎝を測り，北側1/6の部分にくびれ部を持つ。床面は北側に段を作り，くびれ部から傾斜し最深部へと下がり，最深部から南側へは緩やかに傾斜し上がっていく。立ち上がりは南北ともに急角度で立ち上がる。埋土はレンズ状堆積を呈し，埋土４から石坂式土器が出土している。また，礫も出土しているが，床面付近出土の物も含めて，いずれも自然礫である。焼土・炭化物の出土は見られなかった。

連穴土坑11はＬ33区Ⅶｂ層中から検出された。遺構の東側1/3の上部は撹乱を受けており残存していない。長軸約150㎝，短軸約40㎝を測り，西側1/5の部分にくびれ部を持つ。断面形状からも連穴土坑の可能性を指摘できる。埋土中の礫は自然礫である。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑12はＬ32区Ｘ層中から検出された。土坑の床面付近のみの検出であり，本来はさらに上位から掘り込まれていたと考えられる。長軸約210㎝，短軸約70㎝を測り，東側1/7の部分にくびれ部を持つ。２つの焼土域を持ち，焼土ａは暗褐色土中に３㎝程度の焼土ブロックを含む範囲である。焼土ｂはブロックではなく，全体的に薄い褐色土を示す範囲である。焼土域は広いが炭化物の出土は極わずかである。西側の埋土中に礫が集中して出土しているが，いずれも自然礫である。遺物の出土は見られなかった。

土坑（第128～137図　土坑13～33）

土坑は土坑13～33の21基が検出されている。

土坑13はＫ35区Ⅷａ層上面で検出された。形状はいびつな楕円形で，長軸120㎝，短軸45㎝を測る。埋土はレンズ状堆積を呈し，Ⅶ層起源の埋土が堆積している。礫が数点出土しているが，いずれも自然礫である。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑14はＬ35区Ⅷａ層上面で検出された。形状は部分的にいびつではあるが，隅丸方形状を呈し，長軸約125㎝，短軸約70㎝を測る。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑15はＫ32区Ⅷａ層上面で検出された。形状は楕円形を呈し，長軸約150㎝，短軸約55㎝を測る。埋土はレンズ状堆積を呈し，Ⅶ層起源の埋土が堆積している。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑16はＫ31区Ⅷａ層上面で検出された。いびつな楕円形状を呈し，長軸約165㎝，短軸55㎝を測る。埋土は土坑15に非常によく似た堆積状況である。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑17はＬ32区Ⅷａ層中から検出された。きれいな楕円形を呈し，長軸約115㎝，短軸50㎝を測る。埋土はレンズ状堆積を呈し，土坑がⅨ層下位まで掘り込まれているせいか，下位にはⅨ層起源の埋土が堆積している状況が確認できる。埋土３から上位はⅦ層起源の埋土である。薩摩火山灰の大型のブロックが出土していることから，調査担当者は，この薩摩火山灰の大型ブロックが「崩落した連穴土坑のブリッジ部分であると考えられる」としている。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑18はＬ32区Ⅷａ層上面で検出された。隅丸方形状を呈し，長軸約120㎝，短軸約65㎝を測る。埋土は南側から流入したと考えられるが，埋土１と２の堆積状況は自然堆積とは考えにくく，埋土１の部分は後から別の土坑を掘り込んだ可能性が考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑19はＤ34区Ⅷａ層上面で検出された。東側は樹痕の影響を受けてはいるが，前後関係はあいまいである。

楕円形を呈し，長軸約105㎝，短軸約80㎝を測る。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑20はＤ34区Ⅷａ層上面で検出された。楕円形を呈し，長軸約90㎝，短軸約65㎝を測る。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑21はＧ35区Ⅷａ層上面で検出された。隅丸方形状を呈し，長軸約105㎝，短軸約75㎝を測る。埋土は単一埋土で，Ⅶ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑22はＨ35区Ⅷａ層上面で検出された。隅丸方形状を呈し，長軸約110㎝，短軸約70㎝を測る。Ⅸ層上位まで掘り込まれ，埋土は単一埋土で，Ⅶ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑23はＩ33区Ⅷａ層上面で検出された。きれいな隅丸方形状を呈し，長軸約175㎝，短軸約125㎝を測る。埋土は単一埋土で，Ⅶ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑24はＪ34区Ⅷａ層上面で検出された。いびつな隅丸方形状を呈し，長軸約105㎝，短軸約55㎝を測る。Ⅸ層まで掘り込まれ，埋土は単一埋土であり，隣接するグリッドにある土坑１と類似している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑25はＫ32区Ⅷａ層上面で検出された。楕円形状を呈し，長軸約145㎝，短軸約125㎝を測る。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑26はＬ33区Ⅶｂ層中で検出された。遺構の西側は撹乱の影響を受けている。隅丸方形状を呈し，長軸約250㎝，短軸約125㎝を測る。埋土はⅦａ層起源の埋土が堆積している。縄文時代早期の土坑としては最大の大きさである。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑27はＧ27区Ⅷａ層上面で検出された。方形状を呈し，長軸約170㎝，短軸約150㎝を測る。土坑の南東部は，長方形状にさらに一段下がる形状をしている。埋土は単一埋土で，Ⅶａ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑28はＣ28区Ⅷａ層上面で検出された。北西角部のみ潰れたような隅丸方形状を呈し，長軸約80㎝，短軸約40㎝を測る小型の土坑である。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

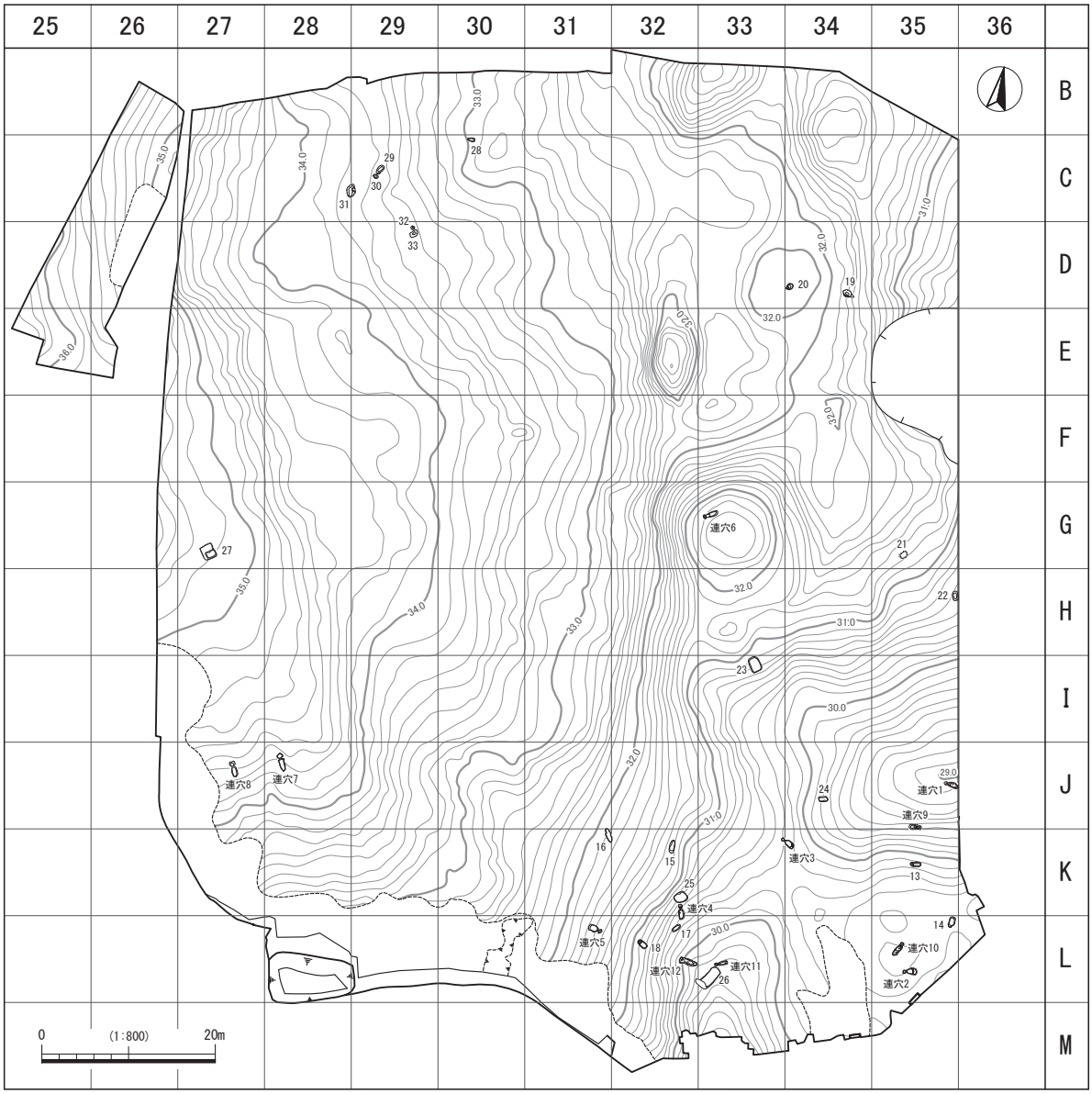
土坑29はＣ29区Ⅷａ層上面で検出された。楕円形を呈し，長軸約120㎝，短軸約60㎝を測る。南側に段を１段設けている。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑30はＣ29区Ⅷａ層上面で検出された。土坑29とは隣接している。楕円形を呈し，長軸約60㎝，短軸約40㎝と小型の土坑である。埋土は土坑29と類似している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑31はＣ29区Ⅷａ層上面で検出された。ややいびつな楕円形を呈し，長軸約140㎝，短軸約95㎝を測る。埋土は単一埋土で，Ⅶａ層起源の埋土が堆積しているが，所々に薩摩火山灰層であるⅧａ層のブロックが混ざる。炭化物が極微量ではあるが出土している。遺物の出土は見られなかった。

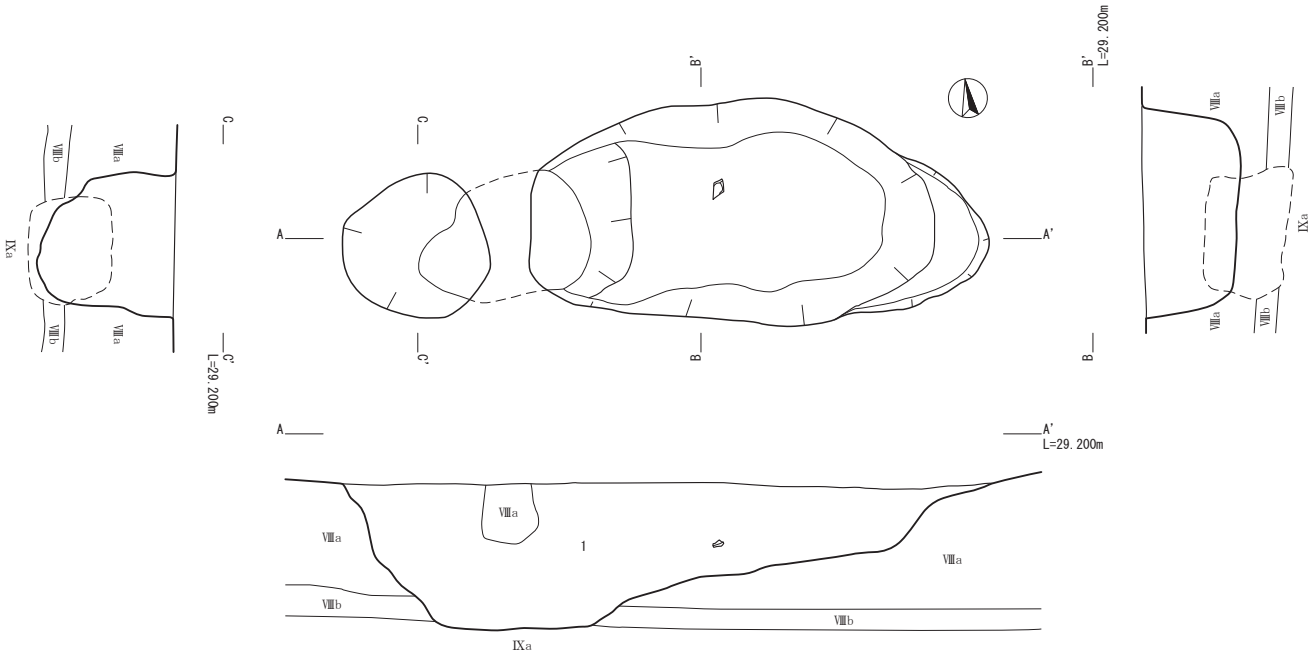
土坑32はＤ29区Ⅷａ層上面で検出された。直径約45㎝の小型の円形土坑である。縄文時代早期の土坑としては最小の土坑となる。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑33はＤ29区Ⅷａ層上面で検出された。当初，北側に小型の円形土坑である土坑32が検出されていたため，連穴土坑の可能性をもって調査が行われたが，２つの土坑はつながらず単独の土坑であることが判明した。ややいびつながら隅丸方形状を呈し，長軸約95㎝，短軸約60㎝を測る。埋土堆積状況からすると，埋土２はⅦａ層起源の埋土であるが，埋土１はアカホヤ火山灰起源の土であるため，縄文時代前期以降に別の遺構が作られた可能性が考えられる。炭化物・遺物の出土は見られなかった。



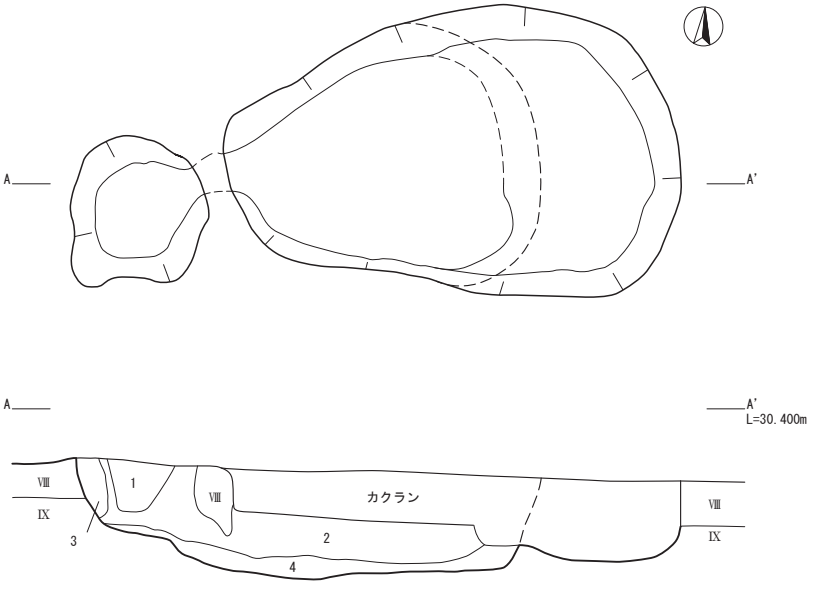
Ⅷ層上面コンタ図

第121図　縄文時代早期　連穴土坑・土坑配置図



1:黒褐色砂質土(10YR3/1)粘性なし，しまりあり。径1～5mm程度の明黄褐色パミスを多量，径1mmの灰黄褐色パミスを少量含む。

連穴土坑１

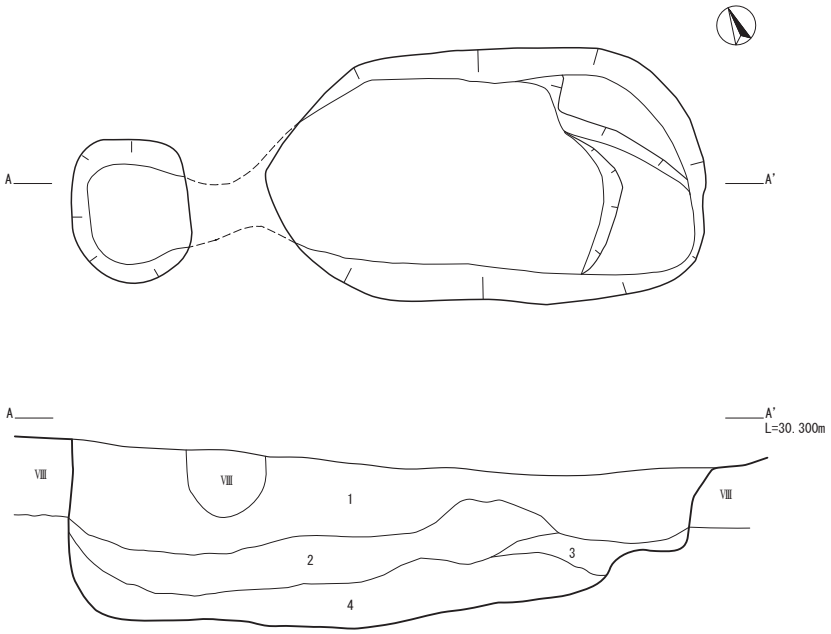


1:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり，しまりややあり。径1mm程度の白色パミスを若干含む。2とよく似ているがしまりやや弱く，白色パミスを若干含む。
2:極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性あり，しまりあり。Ⅸ層を主体とする再堆積土。1と比べやや粘り強く，しまりもある。パミスをほとんど含まない。
3:暗褐色土(7.5YR3/4)粘性あり，しまりややあり。2とⅧ層の混土層。
4:極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性強い，しまりあり。Ⅸb層主体の再堆積土。2と比べ粘り強く粒子細かい。パミスをほとんど含まない。

連穴土坑２

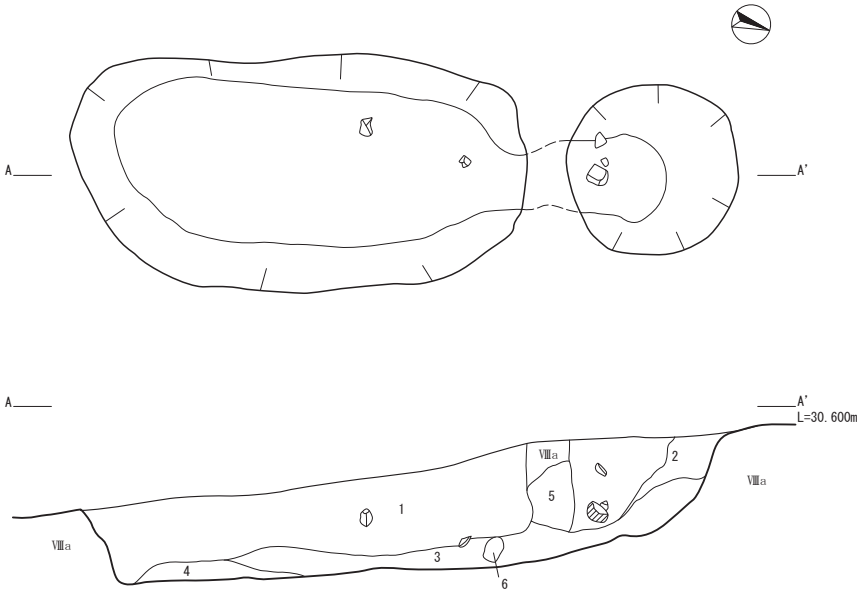
0 1m

第122図　縄文時代早期Ⅷa層検出連穴土坑１



1:黒褐色土(7.5YR2/2)やや粘性あり，しまりあり。径1㎜程度の白色パミスを中量，径2～3㎜程度の黄色パミスを少量含む。
径5～10㎜程度の薩摩火山灰ブロックを極少量含む。弱い斑状堆積でⅦ層を主体とする混土層。
2:暗褐色土(7.5YR3/3)粘性あり。ややしまりあり。径1㎜程度の白色パミスを少量，径2～3㎜程度の黄色パミスをごく少量
含む。弱い斑状堆積でⅨ層を主体とする混土層。
3:暗褐色土(10YR3/3)やや粘性あり，ややしまりあり。薩摩火山灰起源の再堆積層。わずかながら水平方向にラミナ状の堆積
がみられ踏み込み土の可能性がある。
4:黒褐色土(7.5YR2/2)粘性強い，ややしまりあり。パミス等はほとんど含まない。Ⅸ層主体の再堆積層である。

連穴土坑３

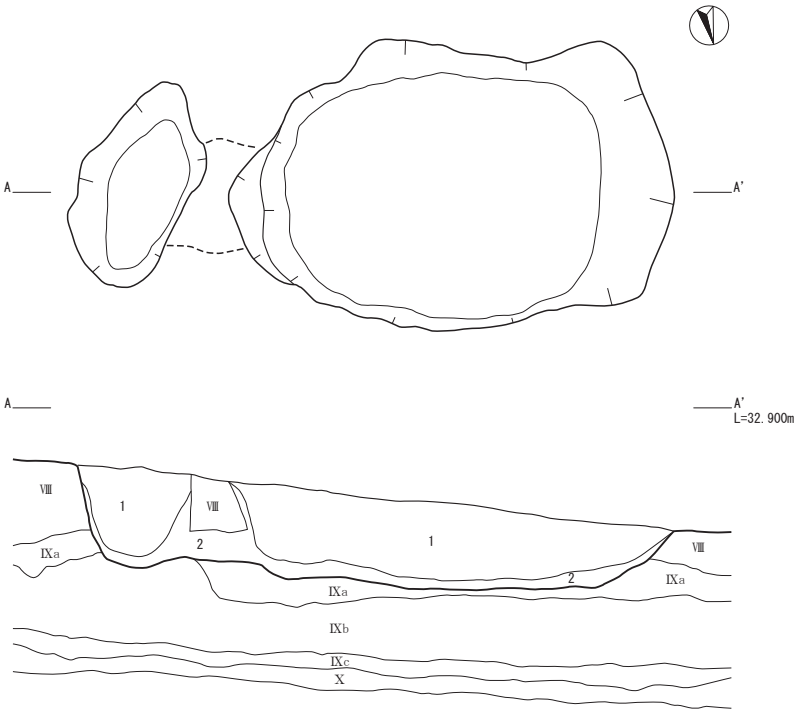


1:黒褐色土(10YR3/1)粘性あり，ややしまる。径1㎜程度の白色パミスと径2～3㎜程度の黄色パミスを中量含む。
2:黒褐色土(2.5Y3/1)粘性あり，ややしまる。径1㎜程度の白色パミスを少量含む。
3:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり，しまる。パミスをほとんど含まない。
4:極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性あり，しまる。薩摩火山灰がブロックで少量混じる。
5:暗灰黄色土(2.5Y4/2)と明黄褐色土(10YR7/6)が斑に混じる。粘性なし，しまりなし。
6:にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性あり，しまる。

連穴土坑４

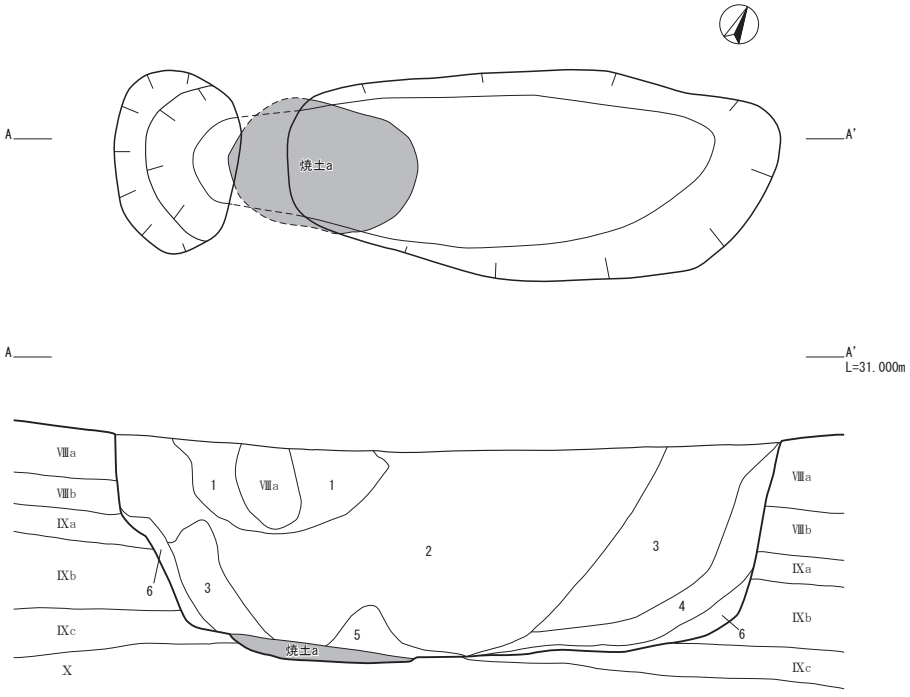
0　1m

第123図　縄文時代早期Ⅷa層検出連穴土坑２



1:黒褐色土(10YR3/1)粘性なし。径1～2㎜程度のパミスの混じりあり。
2:黒褐色土(5YR2/1)粘性なし。

連穴土坑５

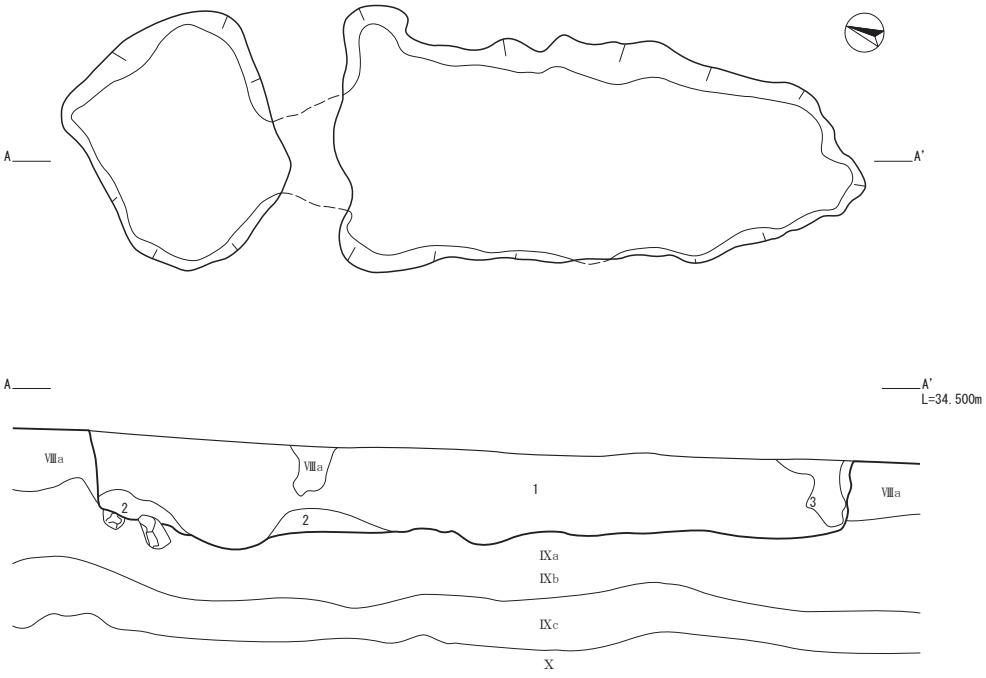


1:黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり，しまり強い。極小～小の黄橙色パミスを全体的に含むが2より少ない。
2:黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり，しまり強い。極小～小の黄橙色パミスを全体的に含む。3とは黄橙色パミスの量で分層した。
3:黒褐色土(10YR3/1)やや粘性あり，しまり強い。1と同様な黄橙色パミスを含むが2より少ない。
4:黒褐色土(10YR3/1)やや粘性あり，しまりは非常に強い。若干の黄橙色パミスを含む。
5:黒褐色土(10YR2/3)粘性あり，ややしまりあり。黄橙色パミスを含まない。
6:暗茶褐色粘質土(Ⅸc層)。
焼土a:暗茶褐色土(2.5YR)。

連穴土坑６

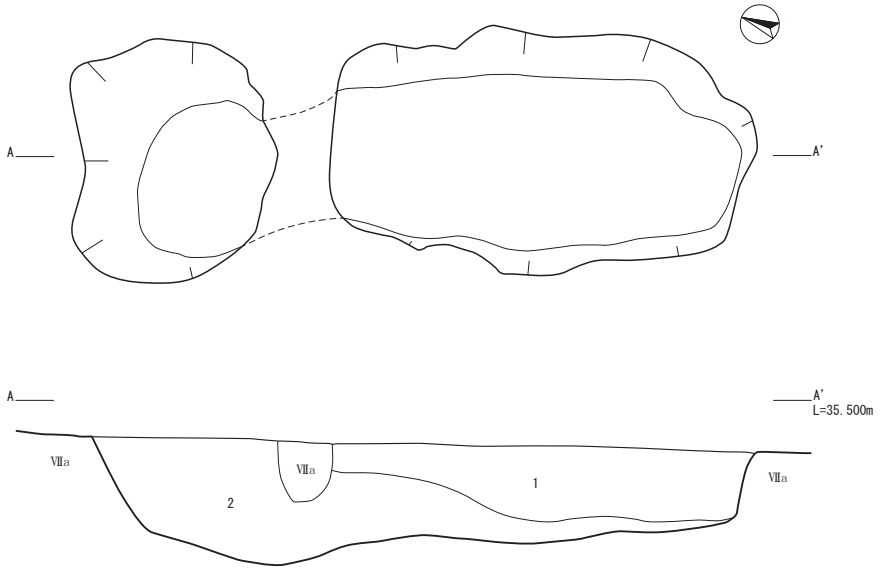


第124図　縄文時代早期Ⅷa層検出連穴土坑３



1:褐色土(10YR4/4)粘性なし，ややしまりあり。径2mm～1cm大の明黄褐色(10YR7/6)パミスおよび極小の白色パミスを極わずかに含む。
2:黒褐色土(7.5YR3/1)やや粘性あり，しまり強い。極小の白色パミスを極わずかに含む。
3:暗褐色土(7.5YR3/3)粘性なし，ややしまりあり。径2mm～1cm程度の明黄褐色(10YR7/6)パミスおよび極小の白色パミスを極わずかに含む。

連穴土坑７

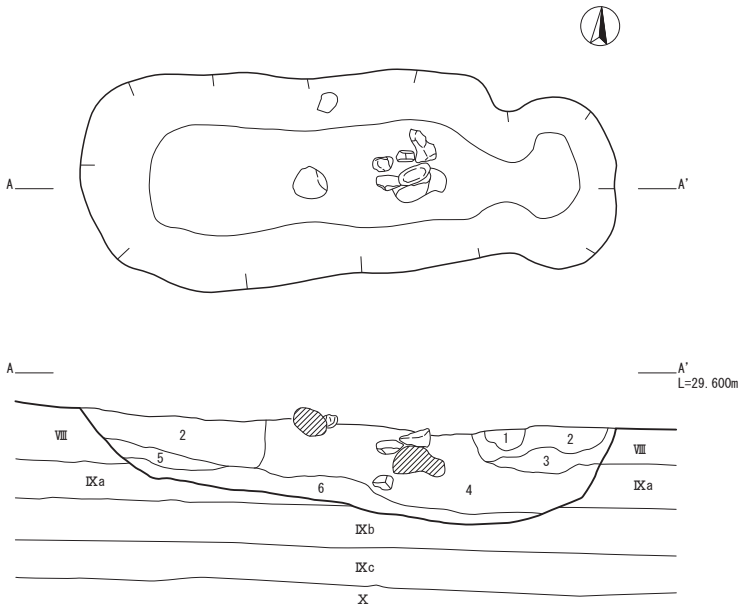


1:黒色土(10YR2/1)白い微粒物が見られる。径2～5mm程度の黄色パミスを含む。
2:黒褐色土(10YR2/2)やや粘性あり。1の土が少し含まれるが，白い微粒物や黄色パミスはあまり見られない。

連穴土坑８

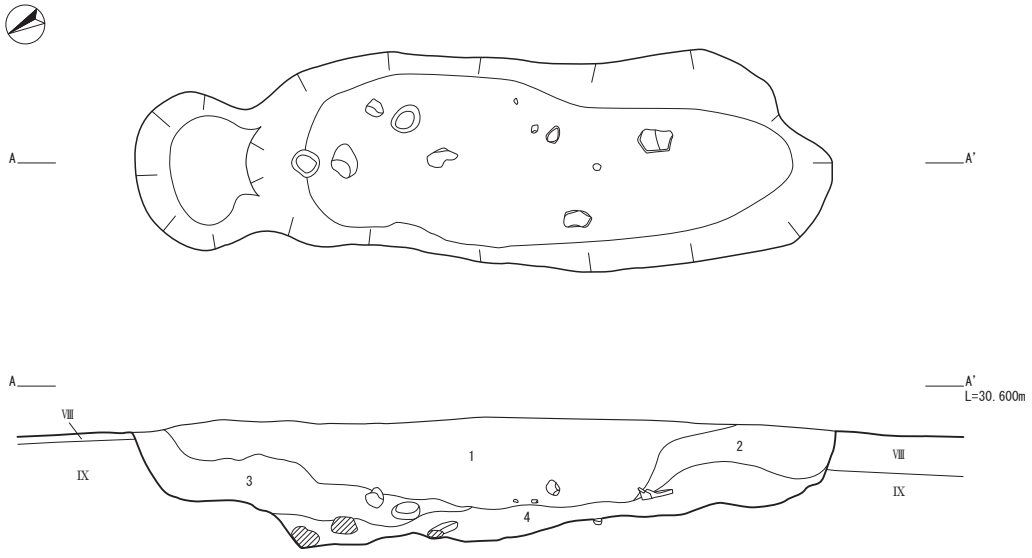


第125図　縄文時代早期Ⅶa層検出連穴土坑４



1:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性弱い，しまり弱い。薩摩火山灰起源のブロック状堆積。
2:黒色土(7.5YR2/1)粘性弱い，しまりあり。径1mm程度の白色パミス少量，径2～3mm程度の黄色パミスを中量含む。Ⅷb層堆積土。
3:暗褐色土(7.5YR3/3)径1mm程度の灰褐色パミスを多量，径3～4mmの黄橙色パミス(薩摩火山灰)を少量含む。Ⅷb層堆積土。
4:黒褐色土(7.5YR2/2)粘性あり，しまり弱い。Ⅸ層を主体とし1の土が少量入る。
5:暗褐色土(7.5YR3/3)粘性弱い，ややしまりあり。 径1mm程度の灰褐色パミスを多量に含む。Ⅷb層起源とみられるが，
径3mm程度の黄橙色パミスを含まず，横方向のラミナ構造がみられる点で3とは異なる。
6:黒褐色土(5YR2/2)粘性強い，しまりあり。Ⅸa層＋Ⅸb層起源。4と比べしまりあり，粘性かなり強いが，地山より，しまり弱い。

連穴土坑９

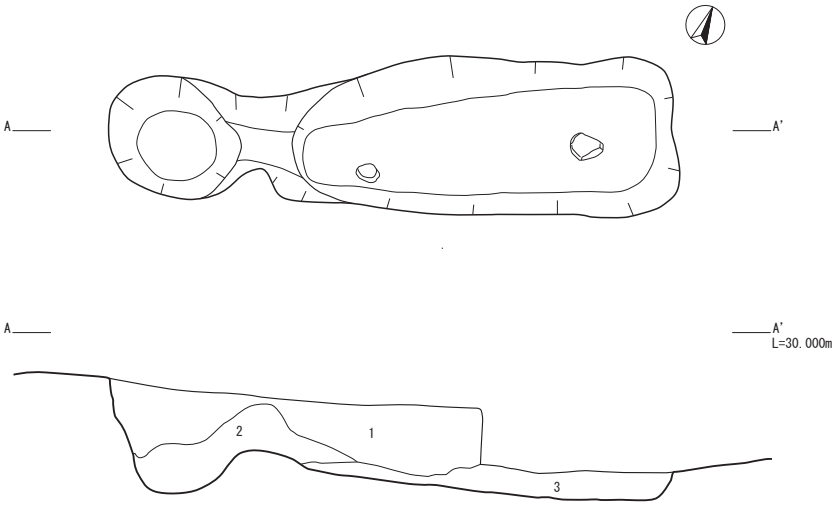


1:灰黄褐色土(10YR4/2)粘性あり，ややしまる。黒褐色土(10YR3/1)がブロックで混ざる。径1mm程度の白色パミスを中量と径2～3mm程度の黄色パミスを少量含む。
2:にぶい黄褐色土(10YR4/3)粘性あり，ややしまる。径1mm程度の白色パミスと径2～3mm程度の黄色パミスを少量含む。
3:暗灰黄色土(2.5Y4/2)粘性あり，ややしまる。径1mm程度の白色パミスと径5mm程度の黄橙色パミスを少量含む。
4:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり，しまる。パミス等をほとんど含まない。Ⅸ層主体の再堆積土。

連穴土坑 10

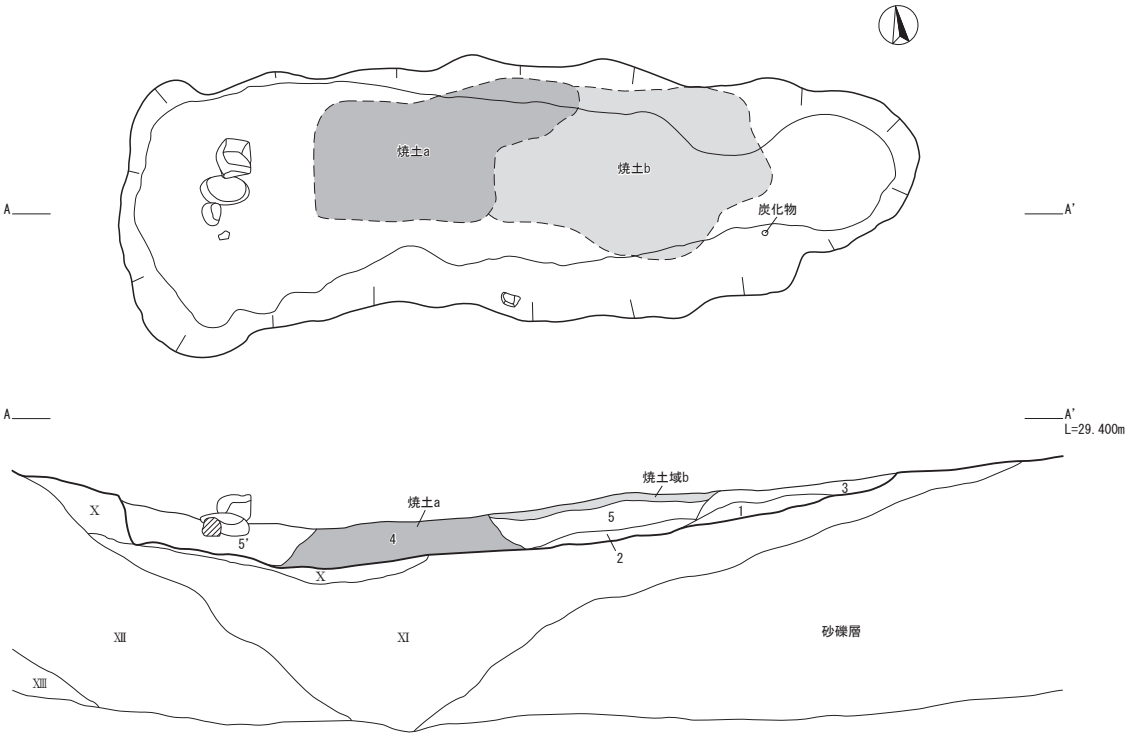
0　1m

第126図　縄文時代早期Ⅶa層検出連穴土坑５



1:黒褐色土(7.5YR2/2)粘性あり，しまりあり。径1mm程度の白色パミス中量と径2～3mm程度の黄色パミスを少量含む。Ⅶb層主体。弱い斑状堆積。所により径2～4cm程度の薩摩火山灰ブロックを少量含む。
2:暗褐色土(7.5YR3/3)粘性あり，ややしまりあり。径1mm程度の白色パミスと径2～3mm程度の黄色パミスを微量含む。1よりやや明るい。弱い斑状堆積。
3:灰黄褐色土(7.5YR4/2)やや粘性弱い，ややしまり弱い。Ⅶb層主体の再堆積土だが，径1mm程度の白色パミスと径2～3mm程度の黄色パミスともにほとんど含まない。土色は2よりさらに明るい。

連穴土坑 11



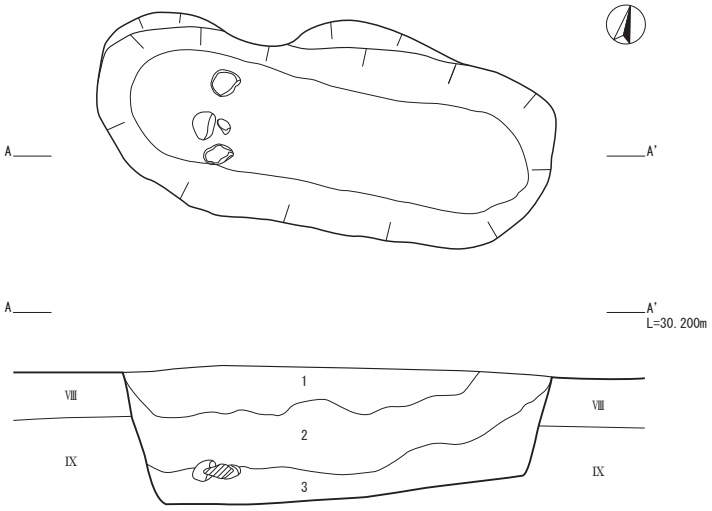
1:褐色土(7.5YR4/4)粘性あり，しまり強い。Ⅺ層の砂礫と思われる礫が多く入り，Ⅹ層の土を多く含む。
2:暗褐色土(7.5YR3/4)粘性あり，しまり強い。Ⅺ層の礫が混ざる。1より礫は少ない。
3:暗褐色土(7.5YR3/4)粘性あり，しまり強い。礫は入らない。
4:暗褐色土(7.5YR3/4)粘性あり，しまり強い。焼土と思われる褐色土(7.5YR4/6)が混じる。炭化物もまばらに含む。
5:暗褐色土(7.5YR3/3)粘性強い，しまり強い。上部はかすかに褐色。
5':極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性強い，しまり強い。Ⅸ層（チョコ層）。

焼土a:褐色土(7.5YR4/6)2～3cm大の焼土と思われるブロックがまばらに混じる範囲。
焼土b:ブロック状でなく，チョコ層と焼土がほぼ完全に混ざった(全体的にうすい褐色)。

連穴土坑 12

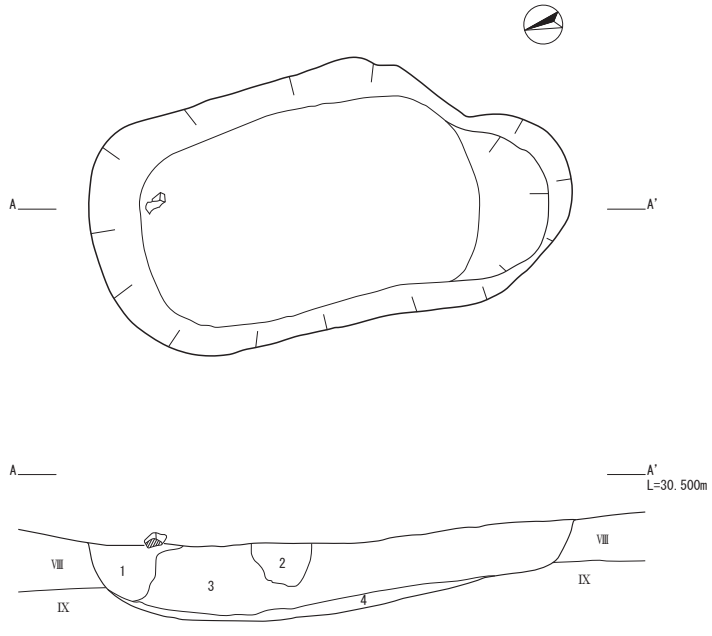


第127図　縄文時代早期Ⅶa層検出連穴土坑６



1:黒褐色土(7.5YR2/2)しまり強い。径1mm程度の白色粒を多く含む。径1～3mm程度の橙色パミスも混じる。
2:暗褐色土(7.5YR3/4)しまり弱い。径1mm程度の白色粒をまばらに含む。若干径1cm程度の橙色パミスを含む。
3:極暗赤褐色土(5YR2/4)やや粘性あり，しまり弱い。径1mm程度の白色粒を極わずかに含む。

土坑 13

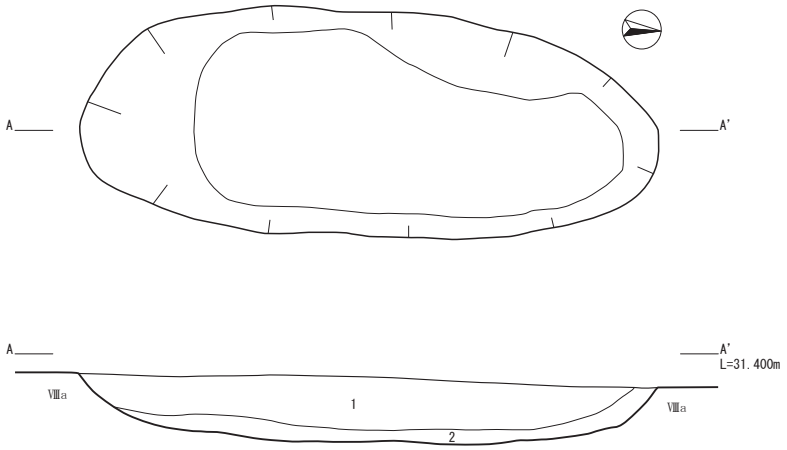


1:黒褐色土(7.5YR1/3)粘性あり，しまりあり。径1mm前後の白色パミス，径2mm程度の黄色パミス，径8～10mm程度の黄橙色パミス(薩摩火山灰)を含む。
2:極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性あり，ややしまりあり。径1mm程度の白色パミスを少量，径2mm程度の黄色パミスを少量含む。
3:暗褐色土(7.5YR3/3)粘性あり，しまり弱い。Ⅸ層起源の再堆積土。
4:極暗褐色土(5YR2/3)粘性強い，ややしまりあり。Ⅸb層と3の混ざり。パミス等はほとんど含まない。

土坑 14

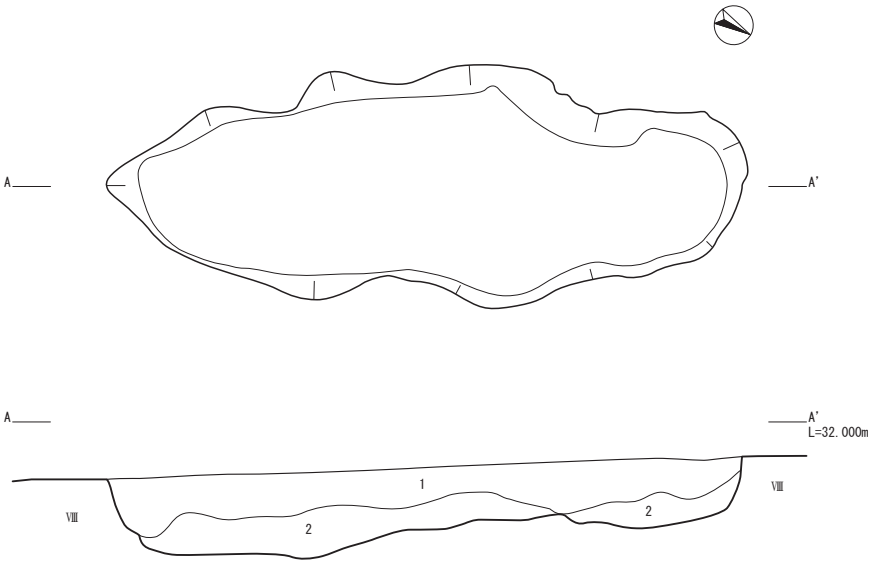


第128図　縄文時代早期Ⅶa層検出土坑 1



1:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり，しまりあり。径1mm以下の白色パミスを少量含む。径1mm以下のP12かP13を少量含む。
2:黒褐色土(10YR2/2)1より粘性強い，しまりあり。径1mm以下の白色パミスを少量含む。

土坑 15

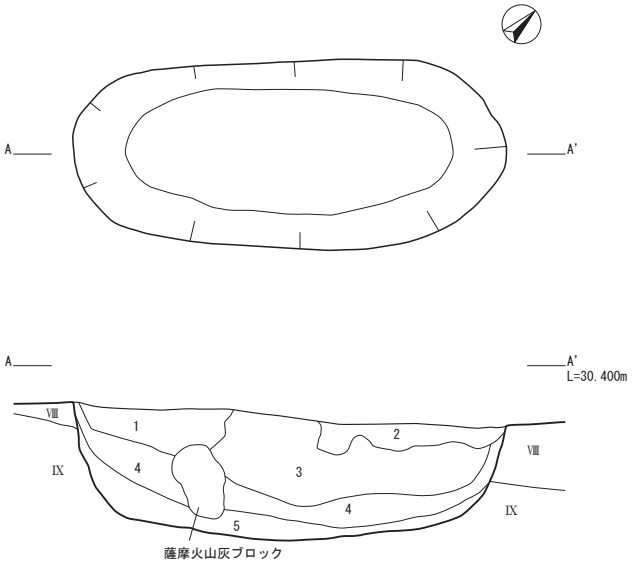


1:黒褐色土(10YR2/3)やや粘性あり。白色の微粒物を含んでいる。Ⅶ層相当。
2:黒褐色土(10YR2/2)粘性あり。白色の微粒物をわずかに含んでいる。Ⅶ層とⅨ層の混土か。

土坑 16

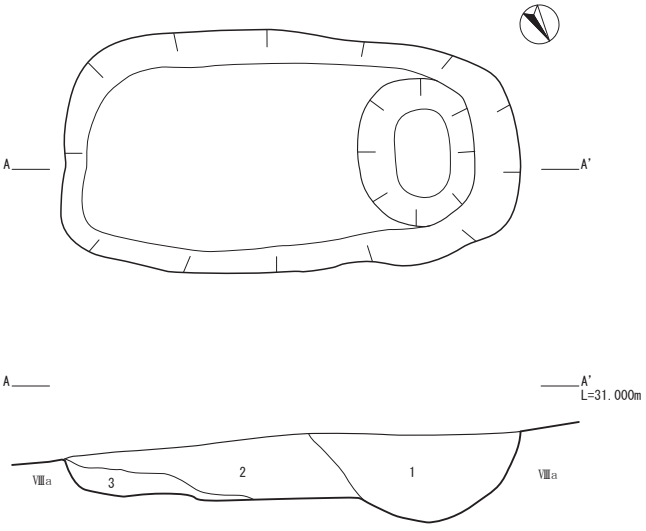


第129図　縄文時代早期Ⅶa層検出土坑２



1:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり，しまりあり。径1mm程度の白色パミスを微量含む。Ⅸ層とⅧb層の混ざり。
2:黒褐色土(10YR3/2)粘性弱い，しまりあり。径2～3cm程度の薩摩火山灰ブロックを中量含む。3と似るが，薩摩火山灰ブロックの粒子がやや細かい。
3:黒褐色土(10YR3/2)粘性弱い，しまりあり。径3～4cm程度の薩摩火山灰ブロックを中量含む。2より薩摩火山灰ブロックがやや多い。
4:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり，しまりあり。1よりやや粒子が細かく，パミスはほとんど含まない。Ⅸ層主体の再堆積土。
5:極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性強い，しまりあり。4よりさらに粒子が細かく，パミスはほとんど含まない。Ⅸb層主体の再堆積土。

土坑 17

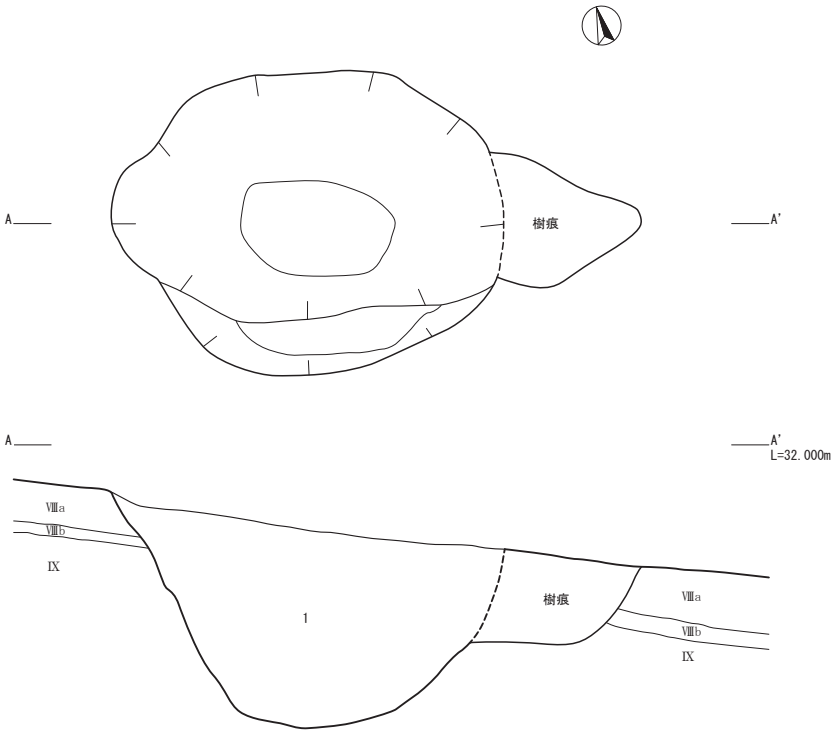


1:黒褐色土(7.5YR2/2)粘性あり，しまり弱い。径1mm程度の白色パミスを中量，径2～3mm程度の黄色パミスを少量含む。Ⅷb層主体。やや顕著な斑状堆積。
2:黒褐色土(7.5YR3/1) 粘性あり，しまりあり。径1mm程度の白色パミスを少量含む。弱い斑状堆積。Ⅸ層主体。
3:黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり，しまりあり。径1mm程度の白色パミスを極少量含む。

土坑 18

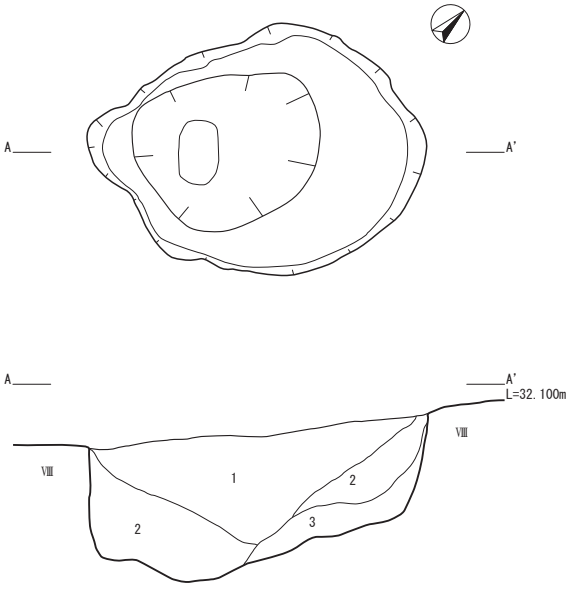
0 1m

第130図　縄文時代早期Ⅷa層検出土坑３



1:黒褐色土(10YR3/2)やや粘性あり，しまりなし。黄褐色土(10YR5/6)径1mm程度の極小の桜島パミスを少量含む。

土坑 19

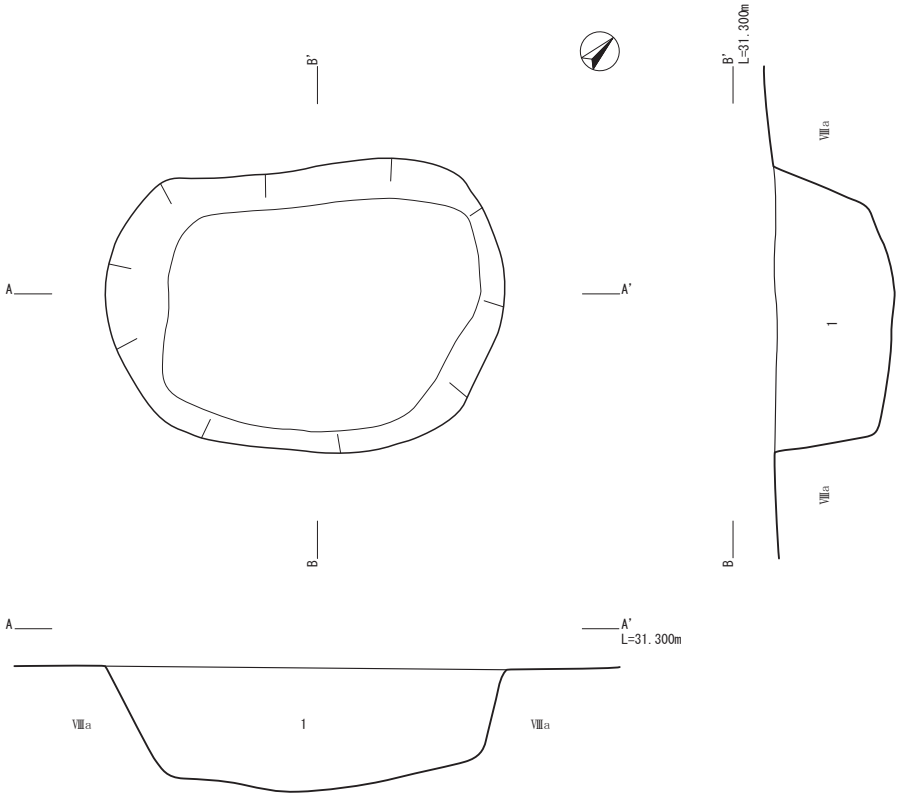


1:黒褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性なし，しまりふつう。小さな橙色パミスを中量含む。
2:極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性なし，ややしまりなし。パミスなし。
3:暗褐色粘質土(7.5YR3/3)粘性あり，パミスなし。

土坑 20

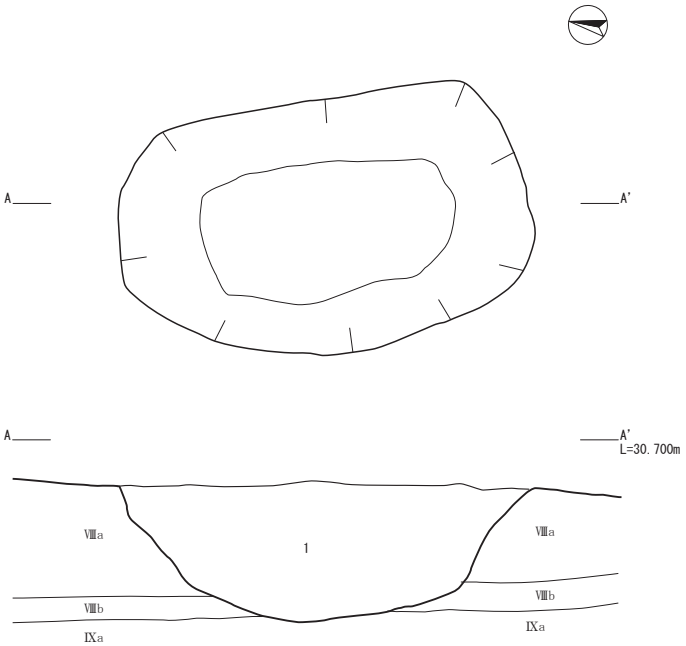
0 1m

第131図　縄文時代早期Ⅷa層検出土坑４



1:黒褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性なし，しまりあり。径1～3mm程度の橙色パミスを含む。

土坑 21

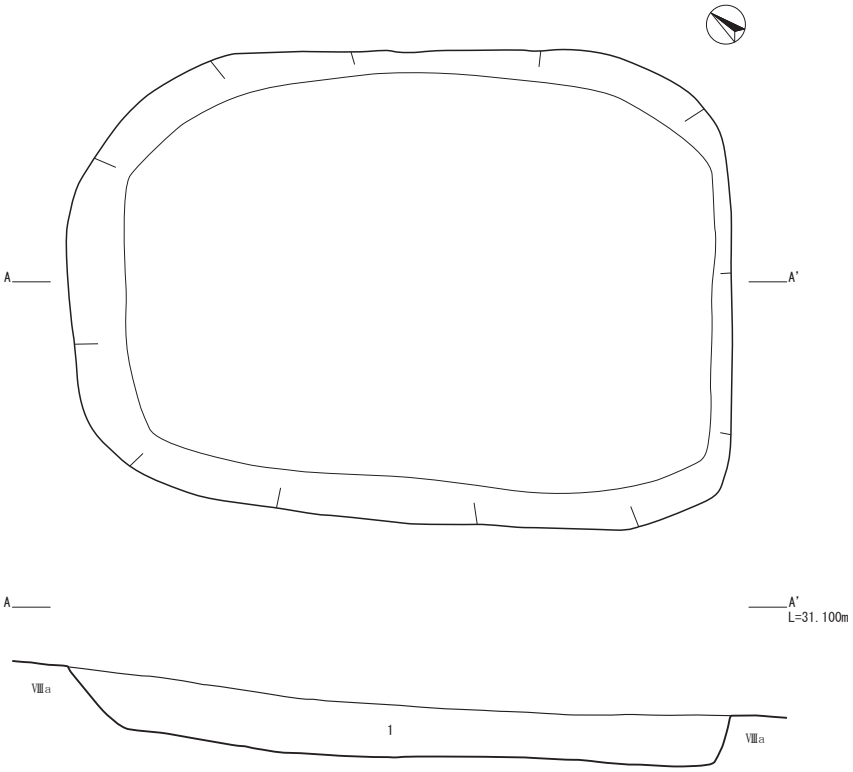


1:黒色土(7.5YR2/1)やや粘性あり，ややしまりあり。

土坑 22

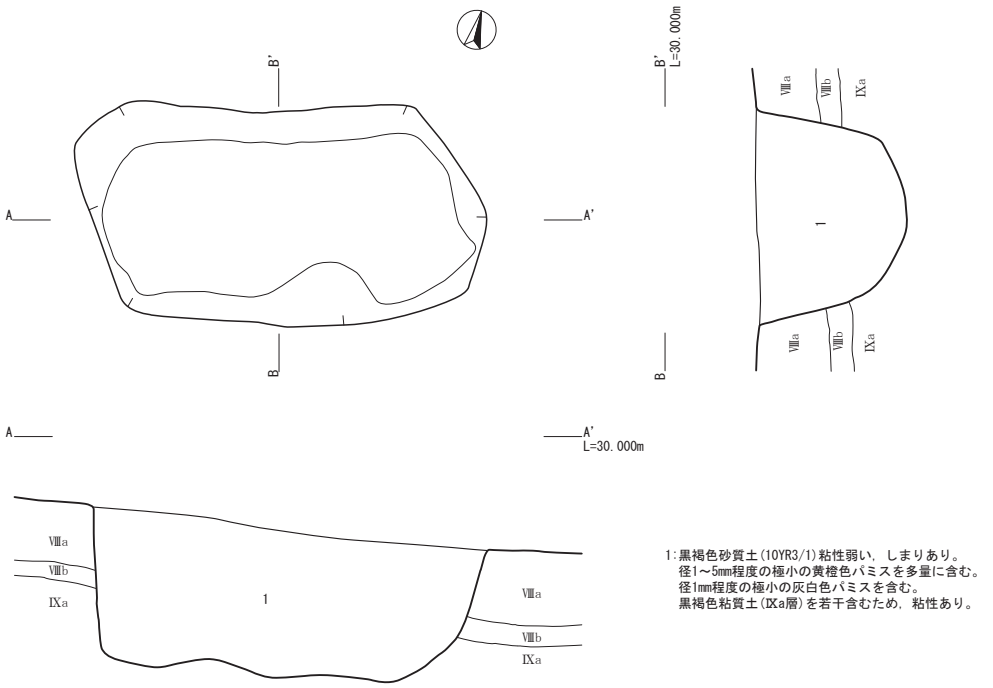


第132図　縄文時代早期Ⅶa層検出土坑５



1:黒褐色土(7.5YR2/2)若干粘性あり，しまり強い。Ⅸb層土が混入している。黄橙色パミスを含む。

土坑 23

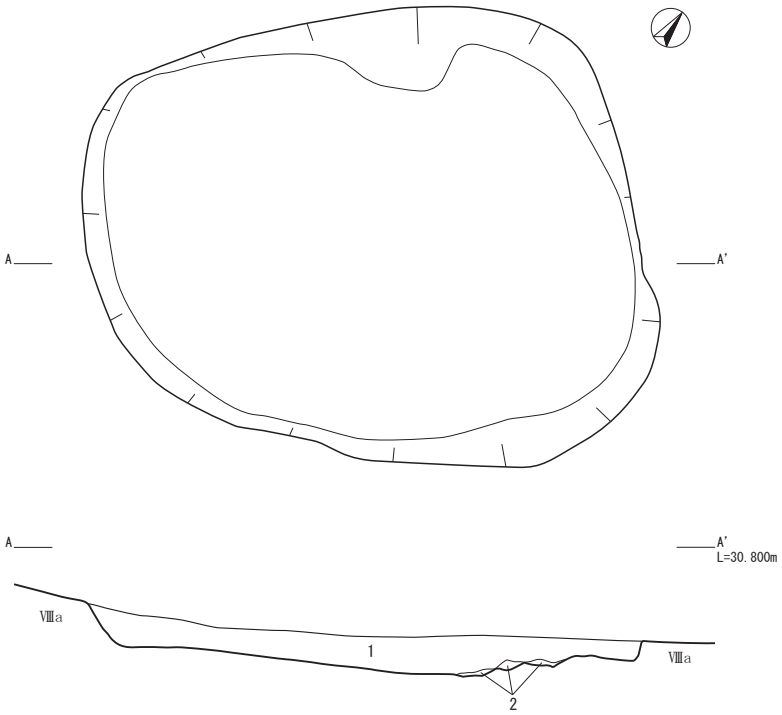


1:黒褐色砂質土(10YR3/1)粘性弱い，しまりあり。
径1～5mm程度の極小の黄橙色パミスを多量に含む。
径1mm程度の極小の灰白色パミスを含む。
黒褐色粘質土(Ⅸa層)を若干含むため，粘性あり。

土坑 24

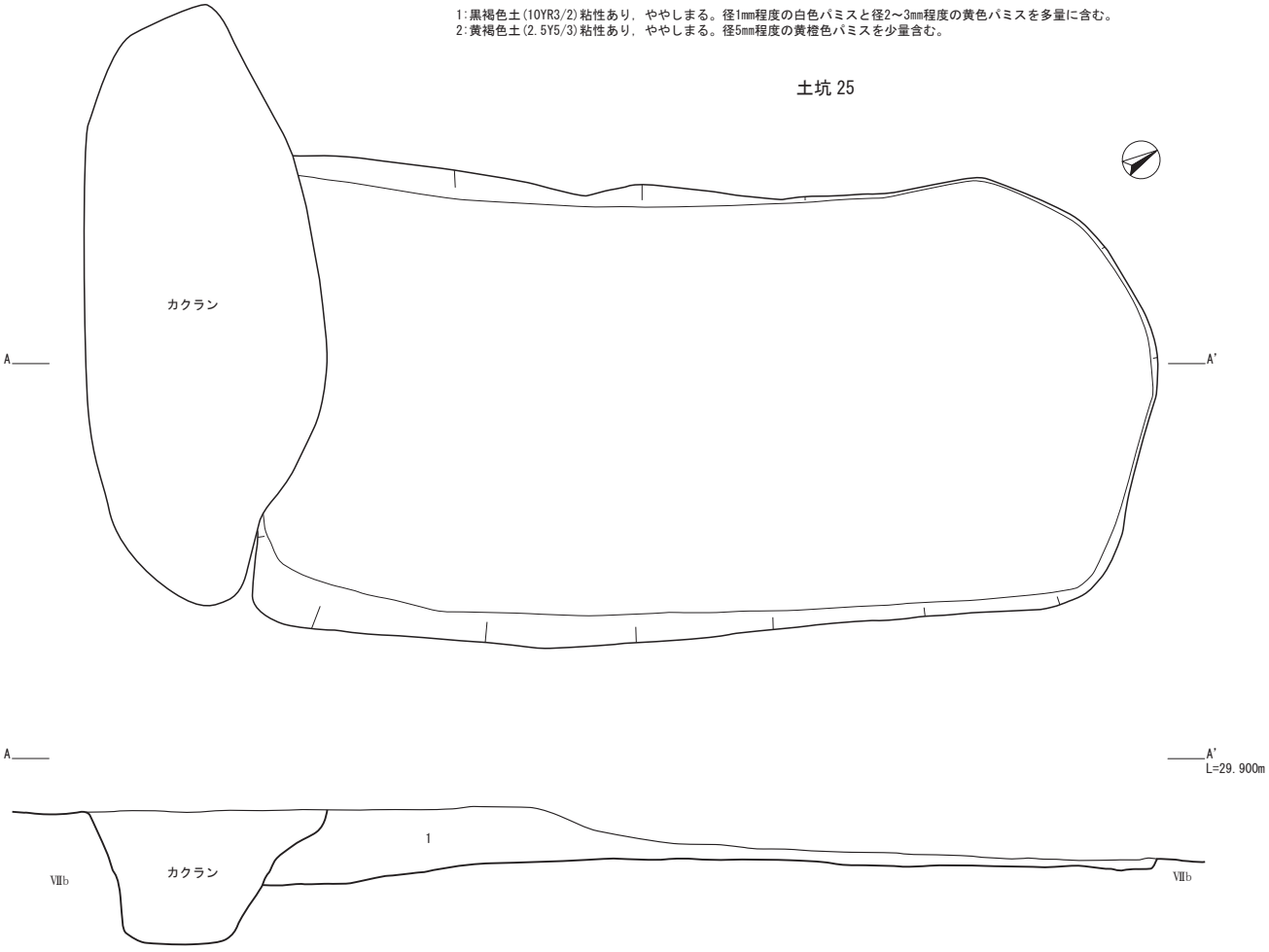


第133図　縄文時代早期Ⅷa層検出土坑６



1:黒褐色土(10YR3/2)粘性あり，ややしまる。径1mm程度の白色パミスと径2～3mm程度の黄色パミスを多量に含む。
2:黄褐色土(2.5Y5/3)粘性あり，ややしまる。径5mm程度の黄橙色パミスを少量含む。

土坑 25

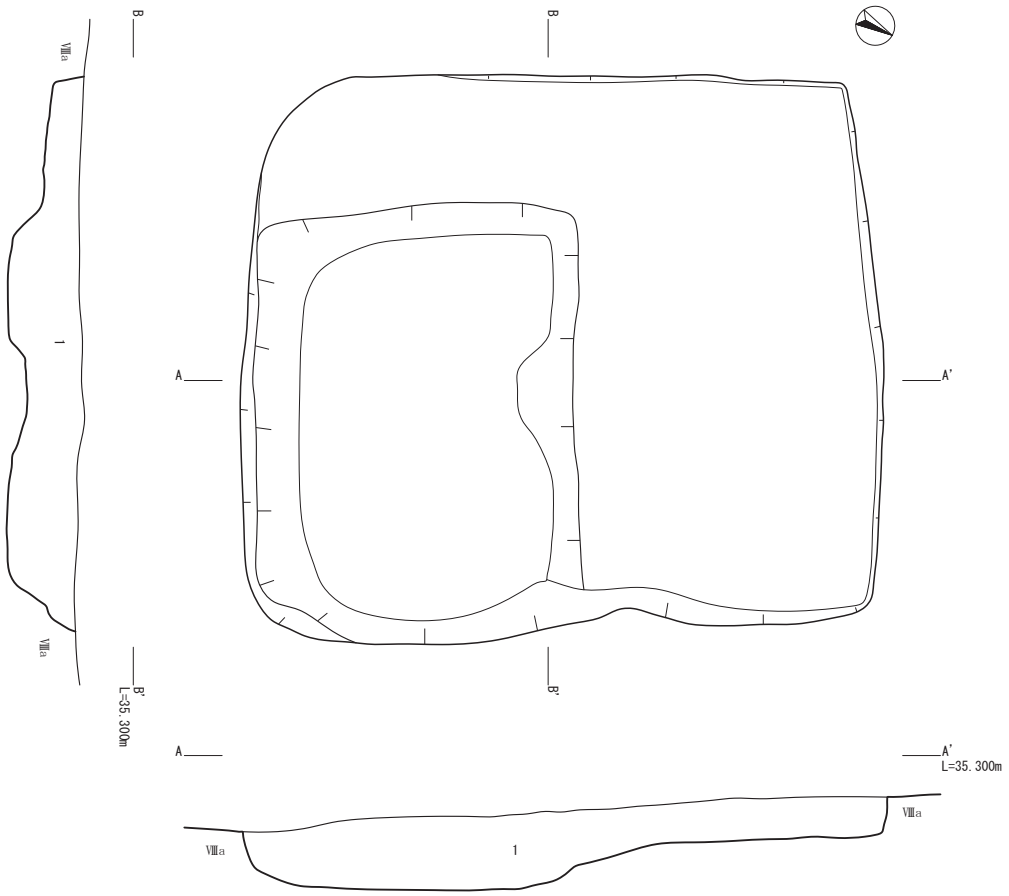


1:黒褐色土(10YR3/2)粘性あり，しまりあり。径1mm程度の白色パミスを少量含む。

土坑 26

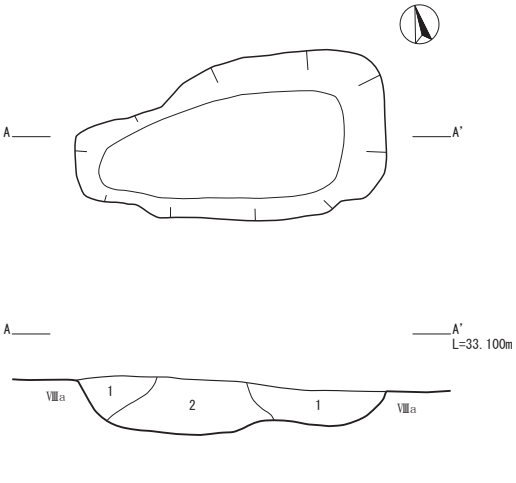
0 1m

第134図　縄文時代早期Ⅶa層検出土坑７



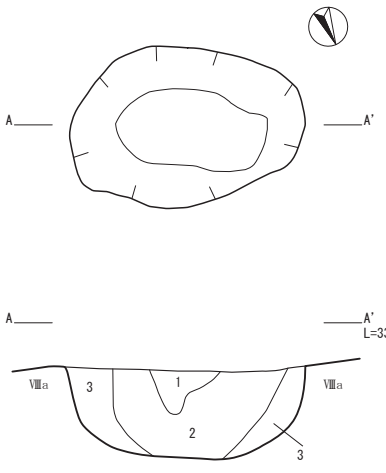
1:黒褐色土(10YR2/3)粘性あり，しまり強い。白色粒と薩摩火山灰ブロックを極わずかに含む。

土坑 27



1:黒色土(7.5YR2/1)しまりあり。径1㎜以下の白色パミスを少量含む。径5㎜以下の黄色パミスをわずかに含む。
2:黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり，しまりなし。1が少量混在する。下面から検出面までややまだらに見られる。

土坑 28

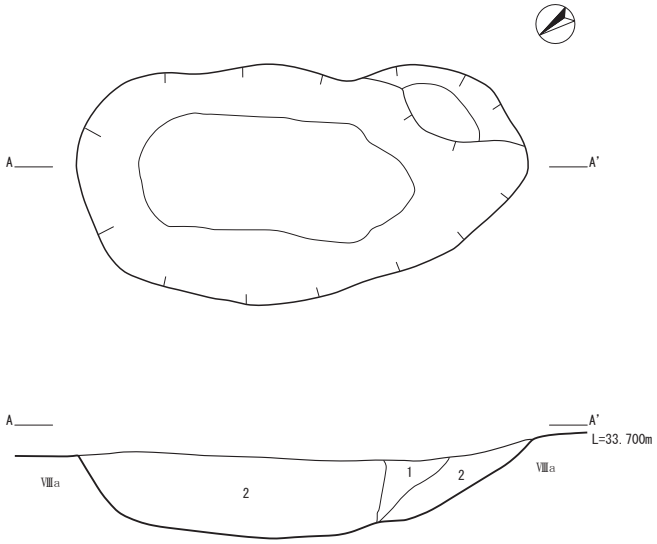


1:黒褐色土(10YR2/2)粘性あり，ややしまり強い。白色パミスと黄橙色パミスを極わずかに含む。
2:黒褐色土(10YR3/2)粘性あり，しまりあり。黄橙色パミスと白色パミスを極わずかに含む。
3:黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり，しまりあり。黄橙色パミスと白色パミスをわずかに含む。

土坑 30

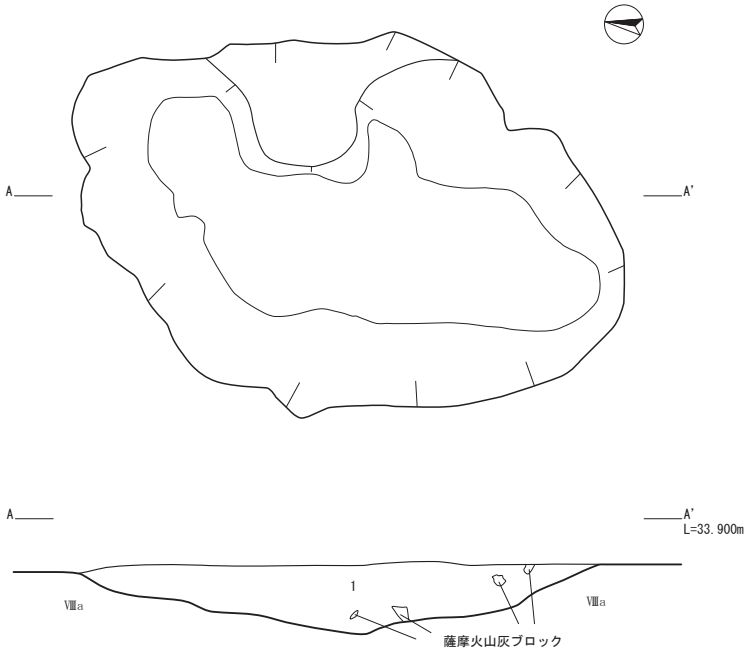
0 1m

第135図　縄文時代早期Ⅷa層検出土坑８



1:黒褐色土(10YR2/2～10YR2/3)若干粘性あり，しまり強い。黄橙色パミスを極わずかに含む。
2:黒褐色土(10YR3/2)～暗褐色土(10YR3/3)の中間，粘性あり，しまりあり。Ⅸa層に該当する土が混入している。

土坑 29

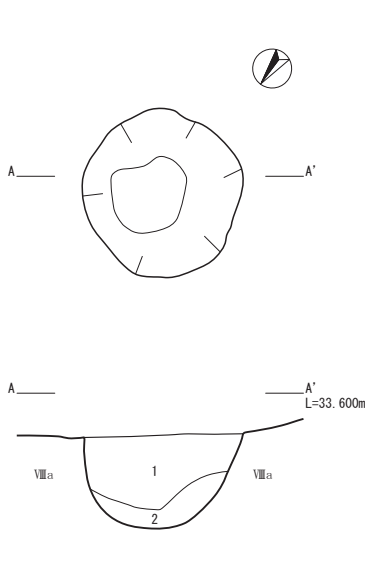


1:黒褐色土(10YR2/2)粘性あり，しまりあり。極わずかではあるが径1㎜以下の極小白色粒，径1㎜以下の極小炭化物，
径5～20㎜程度の薩摩火山灰を含む。

土坑 31

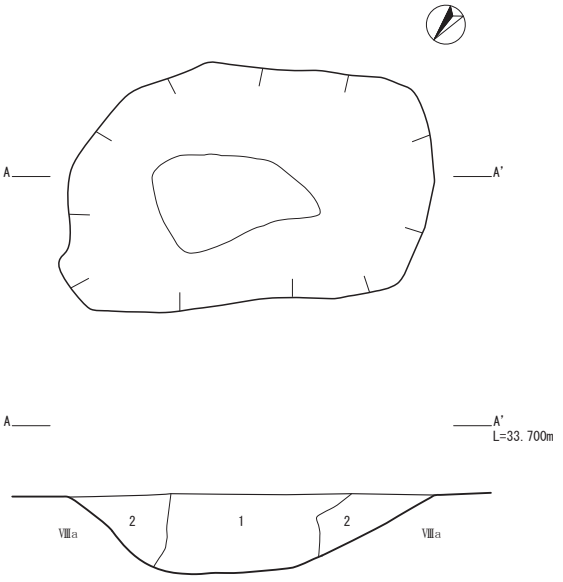
0 1m

第136図　縄文時代早期Ⅶa層検出土坑９



1:黒褐色土(10YR2/2～10YR2/3)若干粘性あり，しまり強い。
黄橙色パミス(極小)を極わずかに含む。
2:暗褐色土(10YR3/3)粘性あり，しまり弱い。

土坑 32



1:にぶい黄褐色土(10YR5/3)粘性あり，ややしまりあり。極小～小の黄橙色パミスを極わずかに含む。
2:黒褐色土(10YR2/2)粘性なし，しまり強い。極小の黄橙色パミスを極わずかに含む。

土坑 33

0 1m

第137図　縄文時代早期Ⅷa層検出土坑10

第17表　縄文時代早期土坑

挿図番号	遺構番号	区	層	長さ（cm）		長軸方向	出土遺物	備考
				長軸	短軸			
122	1	J35	Ⅷa	170	60	東西		連穴土坑（ブリッジ残存）
	2	L35	Ⅷa	160	75	東西		連穴土坑（ブリッジ残存）
123	3	L33	Ⅷa	165	65	東西		連穴土坑（ブリッジ残存）
	4	KL32	Ⅷa	170	60	南北		連穴土坑（ブリッジ残存）
124	5	L31	Ⅷa	160	75	北西－南東		連穴土坑（ブリッジ残存）
	6	G33	Ⅷa	175	55	東西		連穴土坑（ブリッジ残存）
125	7	J28	Ⅷa	200	65	東西		連穴土坑（ブリッジ残存）
	8	J27	Ⅷa	175	65	東西		連穴土坑（ブリッジ残存）
126	9	J35	Ⅷa	140	55	東西		（連穴土坑の可能性）
	10	L35	Ⅷa	185	55	東西		（連穴土坑の可能性）
127	11	L33	Ⅷb	150	40	東西		（連穴土坑の可能性）
	12	L33	X	210	70	東西		（連穴土坑の可能性）
128	13	K35	Ⅷa	120	45	東西	石坂式	（連穴土坑の可能性）
	14	L35	Ⅸ	125	70	北東－南西		（連穴土坑の可能性）
129	15	K32	Ⅷa	150	55	南北		（連穴土坑の可能性）
	16	K31	Ⅷa	165	55	南北		（連穴土坑の可能性）
130	17	L32	Ⅷa	115	50	北東－南西		（連穴土坑の可能性）
	18	L32	Ⅷa	120	65	南北		（連穴土坑の可能性）
131	19	D34	Ⅷa	105	80	—		
	20	D34	Ⅷa	90	65	—		
132	21	G35	Ⅷa	105	75	—		
	22	H35	Ⅷa	110	70	—		
133	23	I33	Ⅷa	175	125	—		
	24	J34	Ⅷa	105	55	—		
134	25	K32	Ⅷa	145	120	—		
	26	L33	Ⅷa	250	125	—		
135	27	G27	Ⅷa	170	145	—		
	28	C30	Ⅷa	80	40	—		
136	29	C29	Ⅷa	120	60	—		
135	30	C29	Ⅷa	60	40	—		
136	31	C28	Ⅷa	140	95	—		
137	32	D29	Ⅷa	45		—		
	33	D29	Ⅷa	95	60	—		

２　遺物

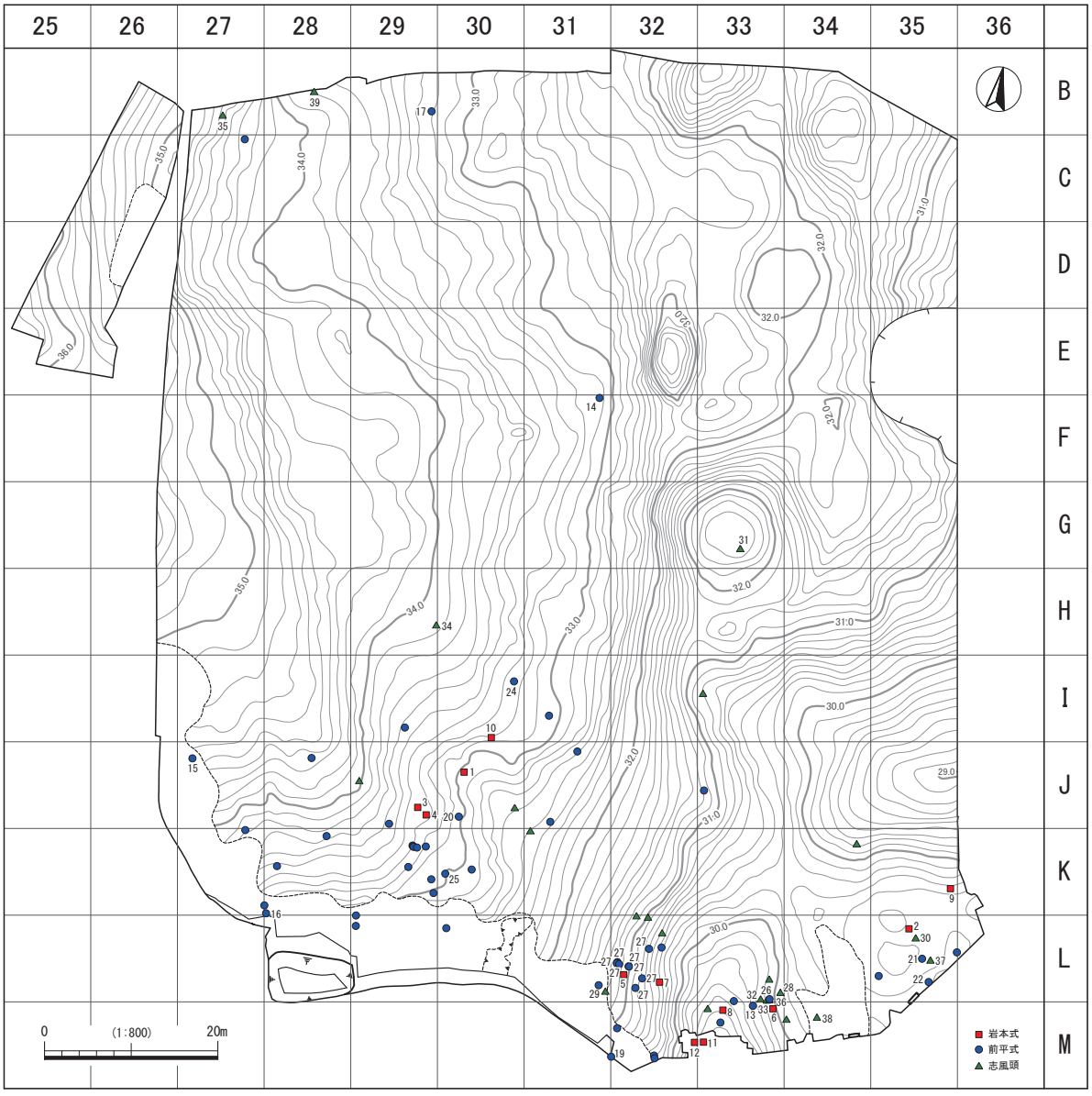
（１）土器

１類土器（第138・139図　１～12）

１類土器は，わずかに外傾する口縁部を持つ円筒形土器である。破片でしか出土していないため，全体の器形は分からないが，深鉢型を呈すと考えられる。口唇部は内傾もしくは平坦に整形される。口唇部から口縁部上端の，いわゆる角の部分に刺突文を施すものが見られ，それらには口縁部が鋸歯状を呈するものが見られる。文様は口縁部上端に刺突文を施す。器面調整は丁寧なナデ調整，もしくは貝殻条痕調整後にナデ調整を行なっている。ナデ調整が弱く，貝殻条痕調整が薄く残るものも見られる。１類土器の胎土はどれも非常によく似て雲母の混入が見られない点が挙げられる。出土した割合で，同様の混和材を含んでおり，特徴としては調査区の南側のみから出土しており，この出土状況は縄文時代草創期土器の出土域と重なる。

１は口縁部上端に縦位の貝殻腹縁による刺突文と，殻頂部を用いた貝殻刺突文の２種類の刺突文を施す土器である。口縁部から口唇部にかけても殻頂部を用いた刺突文を１列施しており，その影響で口唇部がわずかに小波状を呈している。口縁部上位と無文帯の境目には横位の貝殻復縁による刺突文が１条施されている。器面調整は内外ともにナデ調整が行われており，外面のナデ調整には工具痕が残っているため工具ナデ調整が行われたと考えられる。内面口縁部上端は強く指押さえが行われており，大きく凹む部分も見られる。

２は口唇部が欠落しているが，１と同様の文様や器面



Ⅷ層上面コンタ図

第138図　１～３類土器分布図

調整が施されている土器である。施文原体の貝殻が異なるようであり，１と比較してやや差異が見られる。また，器壁の厚さも若干異なる。１と同一個体なら途中で施文原体が変わった可能性が考えられる。

３は口縁部上端に殻頂部を用いた刺突文が３列施される土器である。１列目の刺突文は口縁部上端から口唇部にかけて施されている。また，わずかにではあるが縦位の貝殻腹縁刺突文も確認でき，１や２と同様に文様が施されると考えられる。無文帯との境目には横位の貝殻腹縁刺突文が１列施されている。器面は丁寧な工具ナデが行われており，口唇部も丁寧にナデられている。この口唇部の丁寧なナデ調整が１・２と異なることから別個体と考えられる。内面は器面が大きく剥落している。

４も１～３と同様の文様や器面調整が施される土器である。

５は口唇部及び口縁部上端に貝殻刺突文を施す土器である。口縁部上端の貝殻腹縁を用いたと考えられる刺突文は右上から左下へ斜位に施されている。無文帯との間に特に区画は設けていないが，刺突文の下端がきれいに揃っているため，刺突文を施した後に，胴部の器面調整を行なったと考えられる。内外面ともに工具ナデが行われている。口唇部もナデ調整が行われ，内傾する。

６は口縁部上端に１列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。口唇部にも刺突文が施されているが，施文原体は不明である。口唇部の刺突文はやや深く施されるため，口唇部は見た目鋸歯状を呈している。器面は内外面ともに工具ナデ調整が行われている。口縁部上端の刺突文直下が，やや凹み文様の下端が揃っているため，刺突文を施文後に器面調整を行なったと考えられる。１と同様に内面口縁部上端は指押さえが行われており，やや凹む。

７は口縁部上端から口唇部にかけて１列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。外面の器面調整には部分的に貝殻条痕が残り，貝殻条痕調整後にナデ調整を行なったと考えられる。内面は丁寧なナデ調整が行われている。

８は波状口縁を呈す土器である。摩滅が激しく施文原体は不明であるが，口縁部上端に１列の縦位刺突文が施されている。また，部分的に口縁部上端から口唇部にかけても刺突文が施されているようである。内外面及び口唇部に工具ナデ調整が行われている。

９は口縁部上端に１列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。口縁部上端から口唇部にかけても刺突文が施されており，口唇部がわずかに鋸歯状を呈している。口縁部上端の文様直下は大きく凹み，明らかに文様を施文後に無文部に器面調整を行なったことが確認できる。器面調整は内外面ともに貝殻条痕調整後にナデ調整が行われており，部分的には丁寧に貝殻条痕をナデ消しているが，貝殻条痕調整が残る部分も多く，ムラが目立つ。口唇部もナデ調整が行われている。

10は口縁部上端及び，口縁部上端から口唇部にかけて斜位の刺突文を施す土器である。施された刺突文の内部にわずかに節が確認できるため，施文は貝殻を用いているのが分かるが，刺突文が細いため，特に口唇部にかけての文様はキザミのようにも見える。破片資料ではあるが，破片の右側では口縁部上端と，口唇部にかけての刺突文がきれいに１列ずつ施されているが，破片の左側は２列の刺突文が一体化している。これはただ単に雑に文様を施文しているのではなく，部分的に意図してそのような施文を行なっている可能性も考える必要がある。器面調整は外面は工具ナデ調整，内面は丁寧なナデ調整が行われている。

11は欠損が多い資料であるが，口縁部上端から口唇部

第18表　１類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様（口縁部）	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第139図	1	J30	Ⅶb	1類土器	貝殻刺突文	工具ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	
	2	L35	Ⅵ		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	3	J29	Ⅶa		貝殻刺突文	工具ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	4	J29	Ⅵ		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	5	L32	Ⅶa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	6	M33	Ⅶa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	7	L32	Ⅵ		貝殻刺突文	貝→ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	8	M33	Ⅶa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		褐色	黒褐色	良	
	9	K35	Ⅶa		貝殻刺突文	貝→ナデ	貝→ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	にぶい橙色	良	
	10	I30	Ⅶa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい橙色	良	
	11	M33	Ⅶb		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	石英粒やや大
	12	M32	Ⅶb		貝殻刺突文	貝→ナデ	貝→ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	

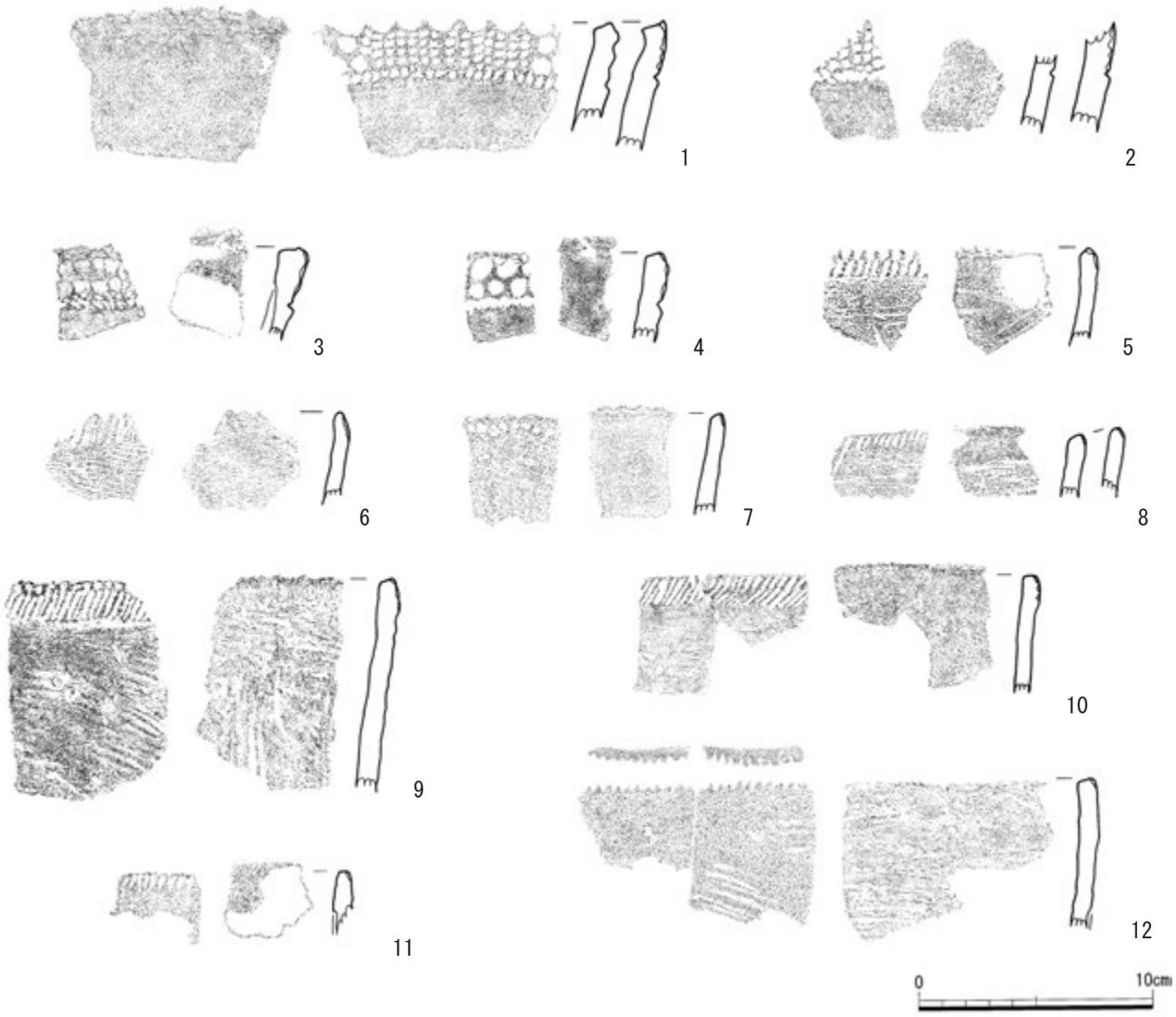
にかけて１列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。器面調整は内外面ともにナデ調整を行なっている。出土した１類土器はどれも似たような胎土を持つが，この11だけは混入される石英の粒の大きさが他と比較して大きいのが特徴である。

12は口縁部上端から口唇部にかけて１列の貝殻刺突文を施す土器である。刺突文内部にわずかに節が確認できる。器面調整は内外面ともに，貝殻条痕調整後にナデ調整が行われており，わずかに貝殻条痕が確認できる。口唇部にもナデ調整が行われている。

２類土器（第138・140・141図　13～26）

２類土器は，平底の底部を持ち，口縁部に向かいわずかに外傾する器形を持つ深鉢型土器である。口唇部は内傾するもの，丸みを持つもの，平坦に整形されるものが見られる。文様は口縁部上端に棒状工具による刺突文を施し，口縁部上端から口唇部にかけて，もしくは口唇部に刺突文や押圧文を施している。器面調整は貝殻条痕調整が行われており，貝殻条痕調整は斜位や横位方向に行われている。口唇部が内傾もしくは丸みを持ち，胴部の器面調整が主に斜位の貝殻条痕調整により行われるものを２ａ類土器，口唇部を平坦に整形し，胴部の器面調整が横位の貝殻条痕調整により行われるものを２ｂ類と細分した。２類土器は調査範囲の南側を中心に出土しており，中心から北側には，極少量を除き，ほとんど出土していない。

13～18は２ａ類土器である。13は口縁部上端に縦位の刺突文を１列施す土器である。口唇部にも刺突文を施す。胴部外面には横位の貝殻条痕調整が行われている。胴部の貝殻条痕調整が浅く，１類の可能性も考えられたが，器面が全体的に摩滅しているため２類とした。内面はナデ調整が行われている。上述のとおり器面が摩滅してい



第139図　１類土器

るため，刺突文の施文原体は不明である。

14は口縁部上端から口唇部にかけて棒状工具により刺突文が施される土器である。外面は斜位の貝殻条痕による器面調整，内面は工具ナデによる器面調整が行われている。他の２類土器と比較して全体的に施文が粗く，内面の器面調整も雑である。また，土器の色調も他の２類と比較して暗い色調であり，異なっているのが特徴である。

15は口縁部上端及び，口縁部上端から口唇部にかけて２列の刺突文を施す土器である。刺突文ははっきりとは分からないが貝殻の殻頂部で行われていると考えられる。外面は横位の貝殻条痕による器面調整，内面は工具ナデによる器面調整が行われている。内面の器面調整は口縁部上端のみ横方向に，それよりも下位は斜位方向に調整が行われている。15はアカホヤ火山灰よりも上位のＶａ層より出土しており，本来はⅦ層にあったものが何らかの原因で浮き上がったと考えられる。後述の17も同様である。

16は口唇部が丸みを帯びる土器である。口縁部上端に２列の棒状工具による刺突文を施し，胴部外面には斜位方向の貝殻条痕調整が施される。内面は工具ナデによる器面調整が行われている。

17も口唇部が丸みを帯びる土器である。部分的に口唇部に１条の沈線文のようなものが確認できるが，意図して施した文様かどうかははっきりしない。口縁部上端に２列の棒状工具刺突文，その下位に順に横位の貝殻条痕調整，斜位の貝殻条痕調整が行われている。貝殻条痕調整は先に斜位の調整が行われ，その後，刺突文との境界に横位の調整が行われたことが文様の重なりから分かる。内面は全体的に斜位方向の工具ナデ調整が行われている。

18は口縁部上端に２列の棒状工具刺突文，外面器面調整を斜位の貝殻条痕調整，内面器面調整を工具ナデ調整で行う土器である。

19～23は２ｂ類土器である。19は口縁部上端に１列の棒状工具刺突文を施し，胴部には横位の貝殻条痕調整が行われる。内面はナデ調整が行われている。外面の横位貝殻条痕調整の一部が曲線的に見える部分があり，次の３類土器の可能性も考えられるが，はっきりしないため２ｂ類土器とした。

20は平坦に整形した口唇部に棒状工具によると考えられる押圧文を施す土器である。刺突文ほど文様がはっきりせず，施文原体を押し当てている様に見えるため，ここでは押圧文とする。21～23も同様の押圧文が口唇部に確認できる。刺突文の下位にはわずかではあるが横位の貝殻条痕調整が確認できる。内面は工具ナデ調整が行われている。

21は口縁部上端に２列の棒状工具刺突文が施される土器である。文様の形状から見ると，先に下段の刺突文から施されている可能性が考えられる。刺突文の下位には横位の貝殻条痕調整が行われているが，刺突文直下の２条の貝殻条痕のみ深く調整が行われており，刺突文との区画の意味で意図的にそのようにした可能性が考えられる。内面は工具ナデ調整が行われている。部分的に調整方向が縦位方向になり，器面の薄さから考えてケズリが行われた可能性も考えられる。

22も21と同様の文様・器面調整を呈す土器である。刺突文直下の２条の貝殻条痕のみが強調して施されている。土器の色調，口唇部の押圧文の施され方から21とは別個体の土器片と判断できるが，非常に類似した土器である。内面調整は工具ナデ調整が行われているが，口縁部上端のみ貝殻条痕調整後にナデ調整をしたと考えられ，貝殻条痕の筋が薄く残存しているのが確認できる。

23は口唇部が破損している２類土器である。他の２類土器と違い，細めの棒状工具により刺突文が数列施されている。刺突文の施され方は雑であり，一部は文様が潰れてしまっている。刺突文は貝殻条痕調整後に施された可能性があり，刺突文列の間に横位の貝殻条痕が確認できる。外面は横位の貝殻条痕調整，内面はナデ調整が行われている。

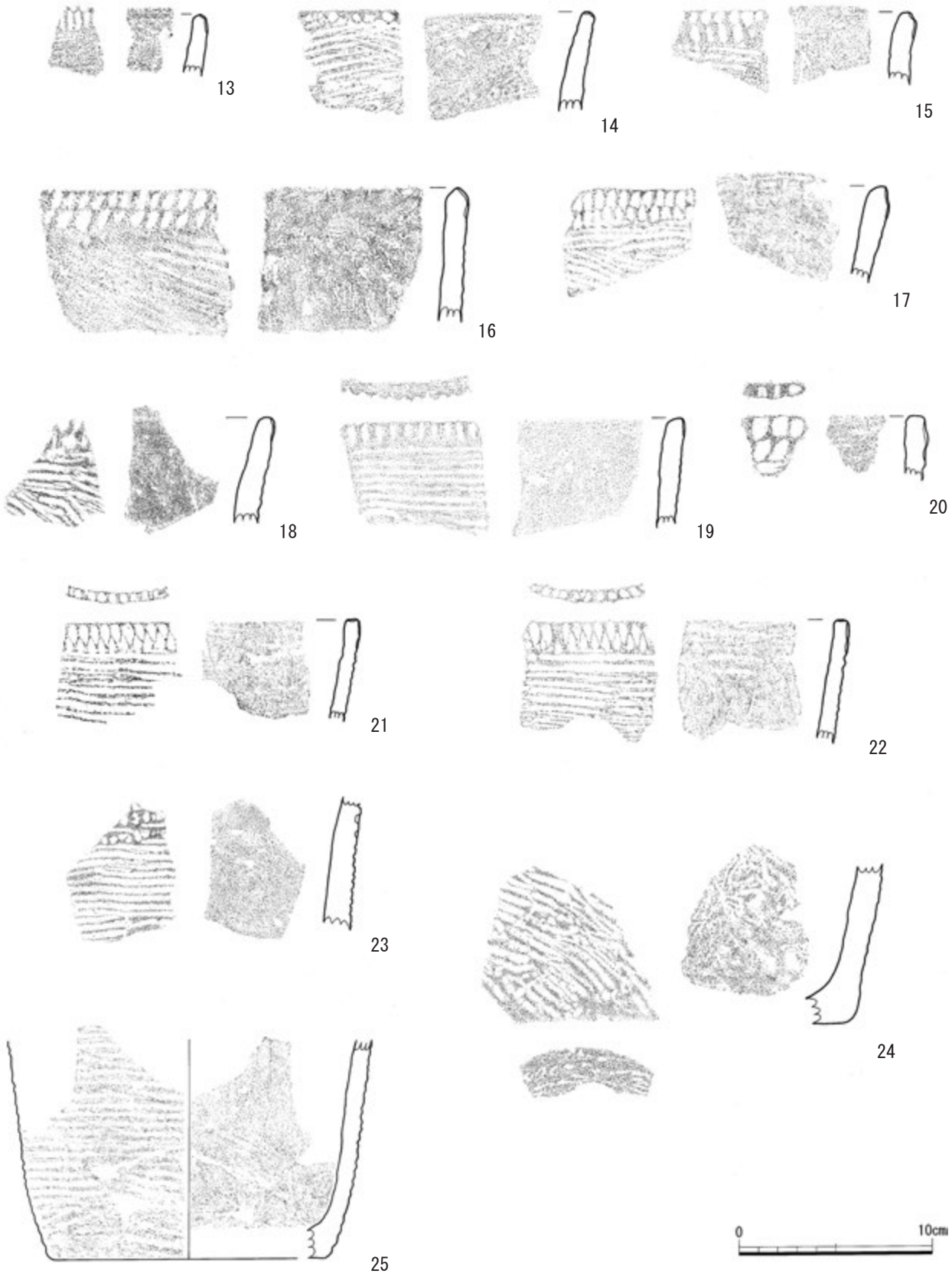
24～26は２類土器の胴部から底部の資料である。24は外面に粗めの斜位貝殻条痕調整を行なう土器である。貝殻条痕の施され方から２ａ類の底部である可能性が高い。内面は斜位方向の工具ナデ調整が行われている。胎土に特徴があり，他の２類土器と比較して，混和材の量が多く，また粒子が大きいのが特徴である。底部の器壁の厚みは胴部と同等である。

25は胴部に横位の貝殻条痕調整が行われている土器である。底部付近になると一部斜位方向の調整が見られる。内面は工具ナデ調整が行われている。底部の器壁は厚く，胴部の器壁の約1.8倍の厚みを持つ。

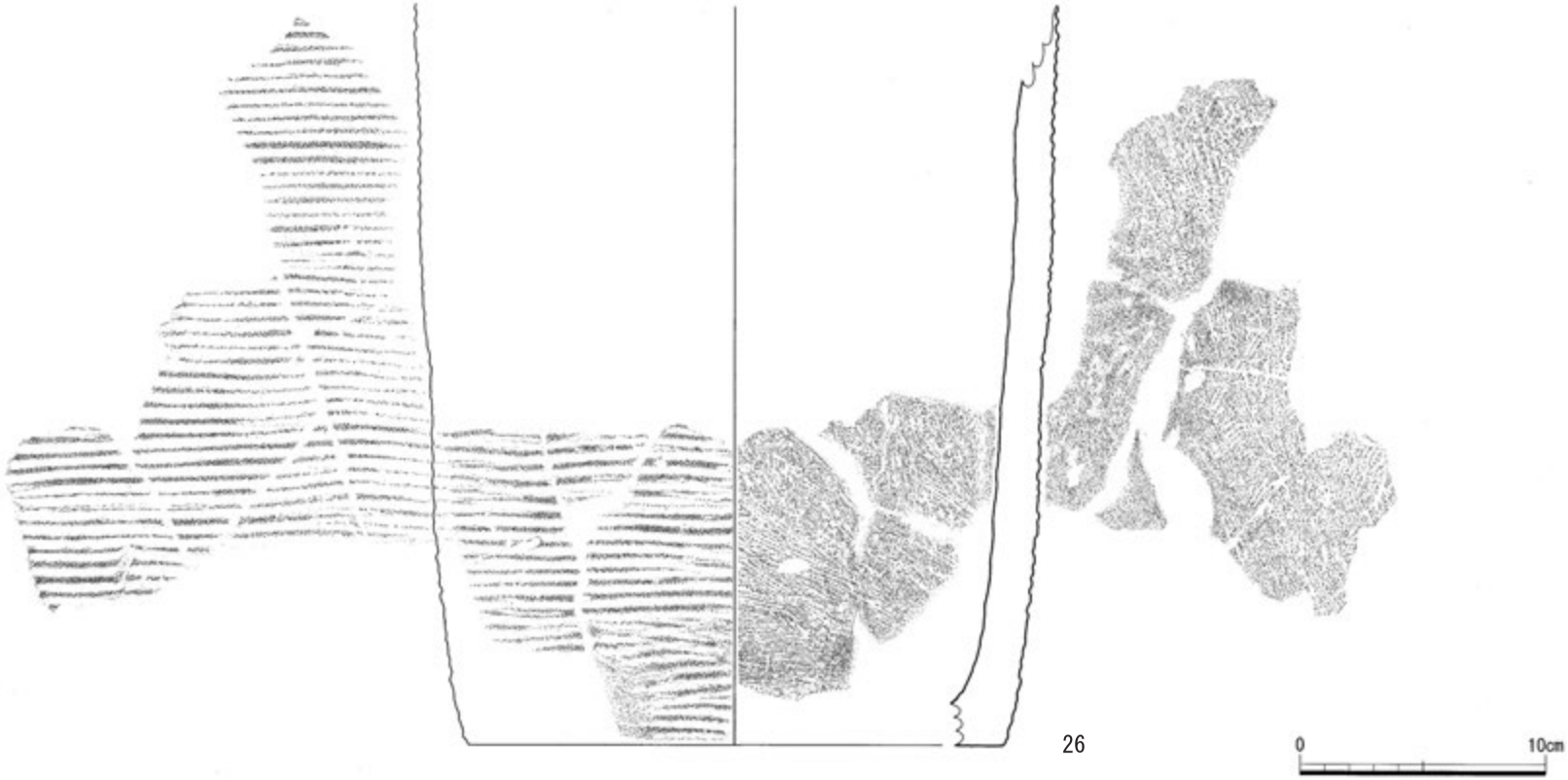
26は大型の２類土器である。底径21.9cmを測り，残存している部分で器高は約30cmとなる。外面胴部中ほどから底部まで，横位の貝殻条痕調整が施されている。内面はケズリ気味の工具ナデ調整が縦位・斜位方向に行われている。胴部の器壁は1.5cmと厚く，底部も同等に厚い。

３類土器（第138・142図　27～37）

３類土器は底部片こそ出土していないが，緩い波状口縁を呈す角筒形土器と，円筒形土器が出土している。口縁部片は１点のみ出土しており，角筒形土器の口縁部である。角筒形土器の文様は基本的には２類土器と同様に，口縁部上端に刺突文を施し，外面胴部には文様を兼ねると考えられる貝殻条痕調整が施されている。２類と異なる点は，胴部貝殻条痕調整の上から，沈線文・流水文・刺突文等が施される点である。内面調整はケズリが行われるものが多く，そのせいか２類と比較して器壁が薄い



第140図　２類土器１



第19表　２類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様（口縁部）	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第140図	13	M33	Ⅶb	2a類土器	刺突文	貝殻条痕	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	14	F31	Ⅵ		刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		暗褐色	にぶい黄褐	良	
	15	J27	Ⅴa		貝殻刺突文	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		浅黄橙色	にぶい黄褐	良	
	16	K28	Ⅵ		刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		褐色	橙色	良	
	17	B29	Ⅳa		刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	18	J27	Ⅶa		刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄褐	良	
	19	M32	Ⅵ	2b	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	明赤褐色	良	

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様（口縁部）	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
第140図	20	J30	Ⅶb	2b類	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	黒褐色	良	
	21	L35	Ⅶa		刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	22	L35	Ⅶa		刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良	
	23	I30	Ⅶa	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄橙	良	
	24	K30	Ⅶa		—	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		赤褐色	褐色	良	混和材多
	25	L33	Ⅶb		—	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		浅黄橙色	浅黄橙色	良	
141図	26	L32	Ⅶa		—	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	

ものが主体的である。円筒形土器は胴部片のみが出土している。角筒形土器と同様に，胴部の貝殻条痕調整の上から，沈線文・流水文・刺突文等が施されている。３類土器の出土分布域は２類土器の分布にほぼ重なる。

27～31は角筒形土器である。27は緩い波状口縁を呈す角筒形土器である。口唇部は平坦に整形され，貝殻腹縁を使った押圧文が施されている。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が１列施され，胴部には横位の貝殻条痕調整が行われている。横位貝殻条痕調整の上には，貝殻を用いた縦位の沈線文や，斜位沈線文が「X」字状に施されている。また，土器の角部には横位貝殻刺突文が施されている。内面はケズリ，その後ナデ調整が行われている。

28・29・30はどれも若干斜位気味の横位貝殻条痕調整の上から，貝殻を用いて縦位方向の流水文を施す土器である。内面はどれも縦方向のケズリ，その後ナデ調整が行われている。

31は角筒形土器の角部片である。若干丸みを帯びた角部と胴部に，貝殻を用いて縦位方向の流水文が施されている。内面はケズリ後ナデ調整である。29・30・31は胎土中に白色の粒子が混ざる。

32～36は円筒形土器である。32は胴部の横位貝殻条痕調整の上から，貝殻を用いた斜位沈線文と，縦位方向に貝殻刺突文が施される。横位貝殻条痕調整を含めて，施文はやや粗い。内面は縦位方向の貝殻を用いたケズリ，その後ナデ調整が行われているが，ナデ消しとまではいかず，貝殻条痕が残る。胎土中には赤色の粒子が混ざる。

33は横位の貝殻条痕調整の上から，貝殻を用いて斜位の沈線文が施されている。内面は工具ナデが行われている。

34は横位の貝殻条痕調整の上から，貝殻を用いた斜位の沈線文と，横位貝殻刺突文が施されている。内面は工具ナデのように見えるが，凹凸が激しく，ケズリ後ナデ調整が行われていると考えられる。

35は横位の貝殻条痕調整の上から，横位貝殻刺突文が施されている。内面は丁寧にナデ調整が行われているが，その前にケズリが行われている様である。

36・37は器形のはっきりしない小破片である。ともに横位の貝殻条痕調整の上から，貝殻を用いた沈線文や波状文が施され，内面はケズリ後ナデ調整が行われている。器壁の厚さ等から，いずれも角筒形土器の可能性が高い。36の胎土中には白色の粒子が混ざる。

４類土器（第143～146図　38～52）

４類土器は小破片のみが22点出土した。そのうち15点を図化している。３類と同じく角筒形土器と円筒形土器の２種類が出土している。３類土器と異なる点は，文様を連続した貝殻刺突文のみで施す点である。また，角筒形土器は地文の貝殻条痕調整がナデ消され，器壁が３類よりもさらに薄くなっている。円筒形土器も貝殻条痕調整がナデ消されているが，なかには貝殻条痕調整が残るものも見られる。角筒形土器・円筒形土器ともに，楔形の貼り付け突帯が施されるものも見られる。口縁部上端，胴部に連続貝殻刺突文で文様を施すものを４ａ類，口縁部上端のみに連続貝殻刺突文で文様を施し，胴部には楔形の貼り付け突帯のみ施すものを４ｂ類，４ａ類と類似するが胴部の連続貝殻刺突文を密に施すものを４ｃ類とし細分した。

38～43は４ａ類土器である。38～40は角筒形土器である。38は角筒形土器の口縁部片である。緩い波状口縁を呈し，平坦もしくはやや外傾気味に整形された口唇部には細かな刻目が施される。口縁部上端には横位の連続した貝殻刺突文が３条施されている。小破片であるため，

第20表　３類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第142図	27	L33	Ⅶa	３類土器	貝殻刺突文ほか	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良	角筒形土器
	28	L33	Ⅶa		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		褐色	にぶい黄褐	良	角筒形土器
	29	L33	Ⅶb		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良	角筒形土器
	30	H29	Ⅵ		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	にぶい黄褐	良	角筒形土器
	31	G33	Ⅶb		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	暗褐色	にぶい褐色	良	角筒形土器
	32	L31	Ⅶb		沈線文・刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	橙色	明赤褐色	良	円筒形土器
	33	L35	Ⅶa		沈線文	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	暗褐色	良	円筒形土器
	34	L35	Ⅵ		沈線文・刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	円筒形土器
	35	M33	Ⅵ		刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	円筒形土器
	36	B28	Ⅵ		沈線文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい黄褐	良	（角筒形土器）
	37	M34	Ⅶa		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	黒褐色	良	（角筒形土器）

口縁部上端以下の文様は確認できない。器面調整は，外面は貝殻条痕調整後ナデ調整が行われており，極わずかに貝殻条痕の痕跡が確認できる。内面はナデ調整が行われている。器壁は４㎜と薄い。

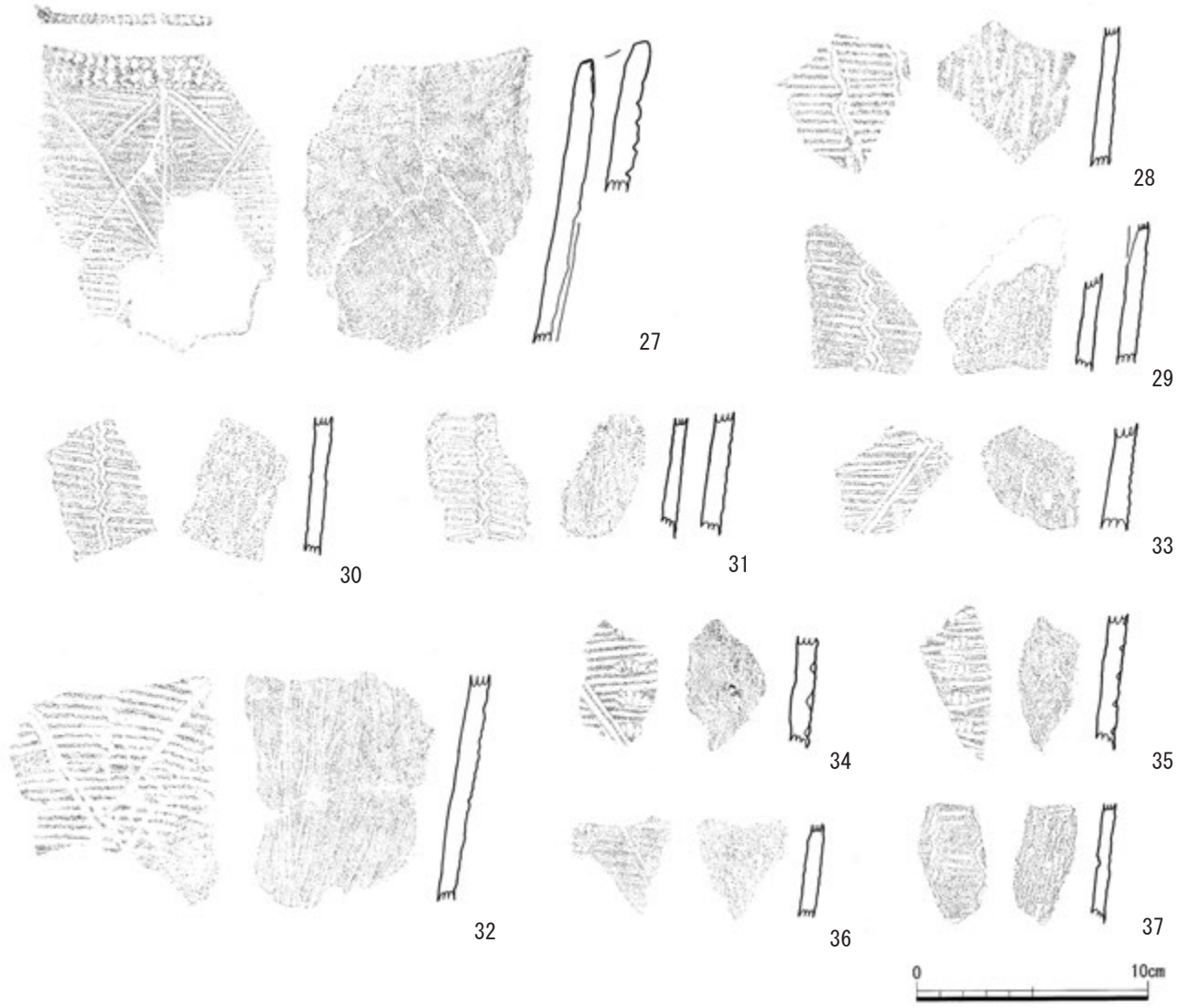
39は角筒形土器の口縁部片である。平坦に整形された口唇部はやや内傾しキザミが施される。口縁部上端には３条の横位貝殻刺突文が施され，その下位には幅２㎜程度の精緻な楔形突帯が張り付けられている。３条目の横位貝殻刺突文の上に貼り付け突帯が施されていることから，突帯が後から施されたことが分かる。貼り付け突帯の両側には沈線文が確認できる。器面調整は内外ともにナデ調整が行われている。

40は角筒形土器の胴部片である。楔形突帯が張り付けられており，その両側及び周囲に縦位及び斜位の貝殻刺突文が施されている。器面調整は，外面は丁寧なナデ調整が行われているが，うっすらと貝殻条痕が確認できるため，貝殻条痕調整後にナデ調整が行われたと考えられる。内面器面調整はナデ調整が行われている。器壁の厚さは４㎜と薄い。胎土中に雲母が混ざるのが特徴である。

41～45は円筒形土器である。41・42は円筒形土器の口縁部片である。41は摩滅が激しく口唇部の文様は確認できない。42は平坦に整形された口唇部に刻目を施している。41・42ともに口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が３条施されている。41の胴部には縦位・斜位の貝殻刺突文が施されている。器面調整は41・42ともに，内外ともナデ調整が行われている。

43～45は円筒形土器の胴部片である。43には縦位の連続貝殻刺突文が施されている。器面調整は，外面は斜位の貝殻条痕調整がはっきりと行われている。内面はケズリ後ナデ調整が行われている。胎土には３類に土器にも見られた白色の粒子が混ざる。

44の器面は特に外面が摩滅しており，楔形突帯の痕跡



第142図　３類土器

は確認できるがはっきりとはしない。ただ，楔形突帯の両側に細かな円形の刺突文が施されているのが確認できる。この楔形突帯の両側に施される刺突文は40でも確認できる。文様は器面の摩滅が激しいため一部分しか確認できないが，縦位の連続貝殻刺突文が施されている。器面調整は，内外面ともにナデ調整が行われている様である。器壁の厚さは３㎜と薄い。胎土中に雲母が混ざるのが特徴である。

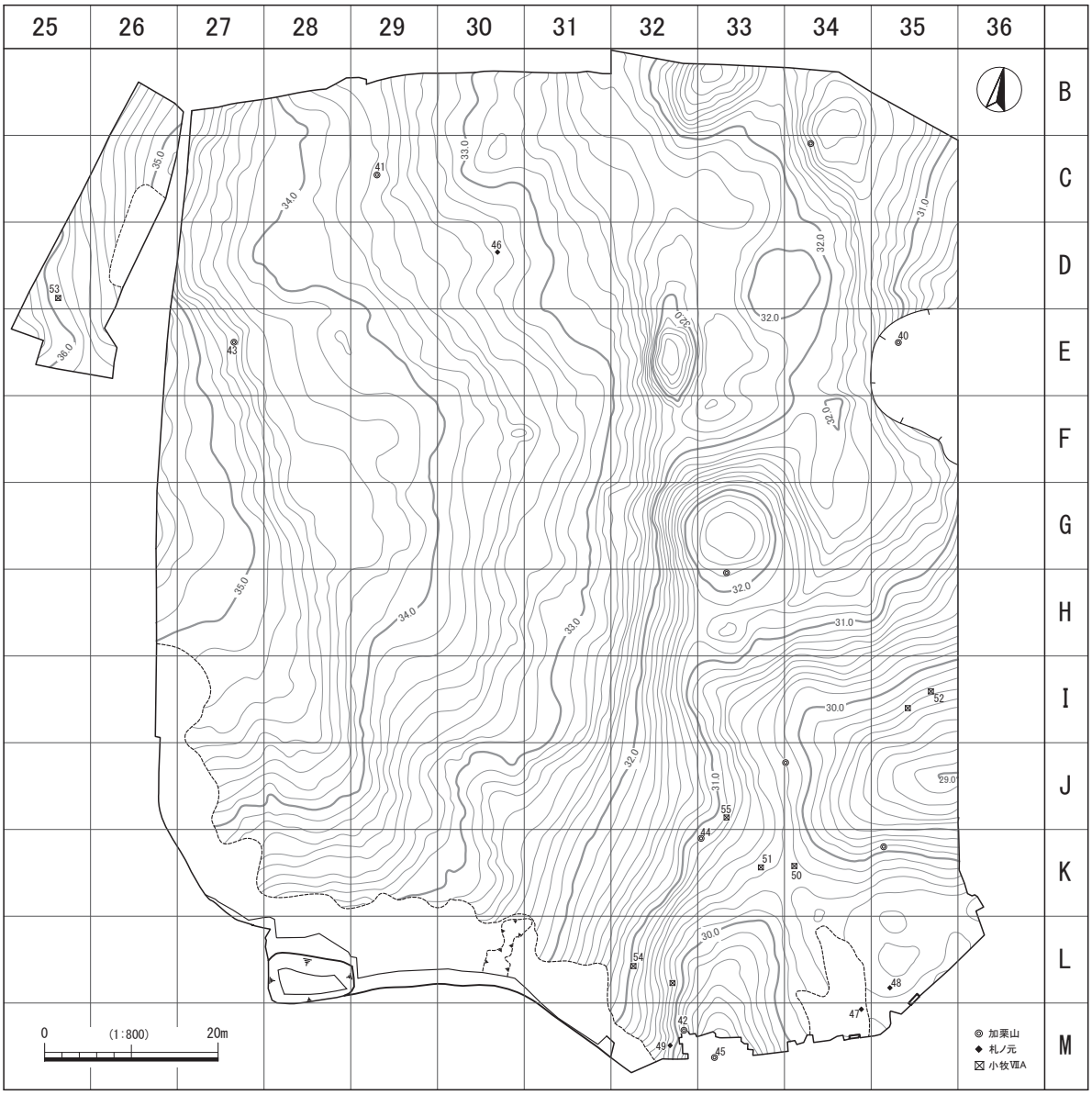
45は外面の器面が激しく摩滅しているが，縦位の連続貝殻刺突文と，斜位の貝殻条痕調整が確認できる。器面が摩滅しているため，貝殻条痕調整後にナデ調整を行ったかは不明である。内面はナデ調整が行われている。

46～47は４ｂ類土器である。張り付けられる突帯が４ａ類と比較すると，楔形というよりはややボテッとした太めの形状の突帯となる。

46は口縁部片である。平坦に整形した口唇部に丁寧にキザミを施している。口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が２条施される。その下位には太めの楔形突帯が張り付けられている。器面調整は内外面ともに工具ナデ調整が行われている。

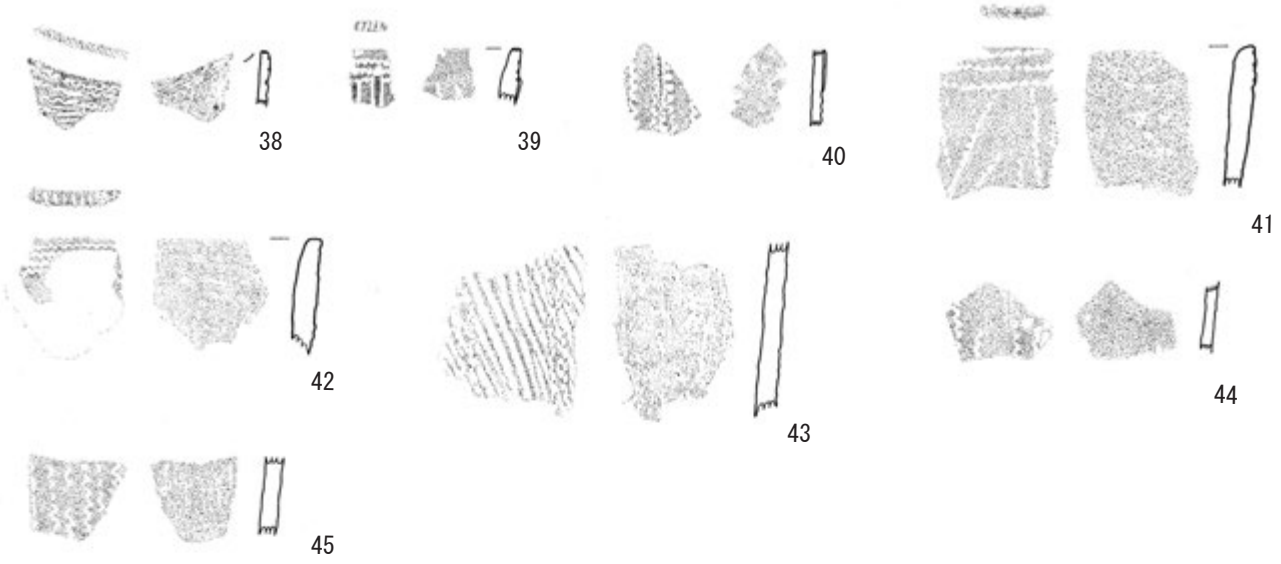
47は胴部片である。細めの楔形突帯が貼り付けられているが，他に文様は確認できない。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われており，内面には指頭圧痕も確認できる。胎土は石英の割合がやや多いのが特徴である。

48～52は４ｃ類土器である。文様等の特徴は４ａ類土器に類似するが，主に縦位の連続貝殻刺突文を隙間なく器面全体に施すのが特徴である。器形は５点全て円筒形土器である。

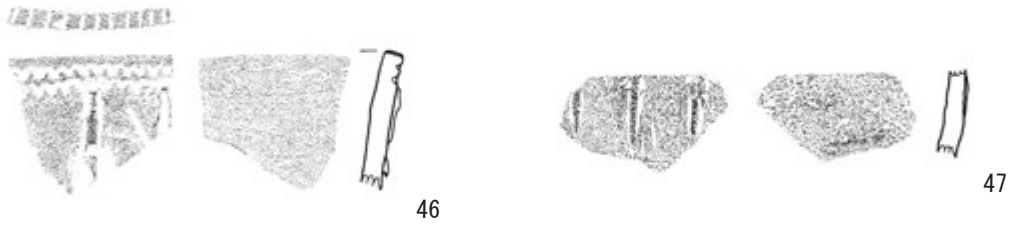


Ⅷ層コンタ図

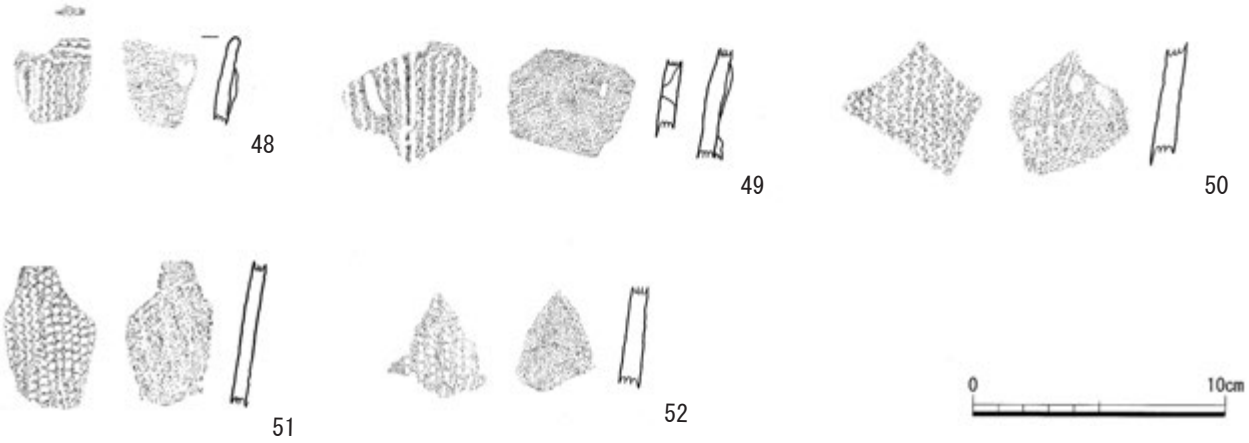
第143図　４類土器分布図



第144図　４ａ類土器



第145図　４ｂ類土器



第146図　４ｃ類土器

48は口縁部片である。丸みを帯びた口唇部には刻目が施されている。口縁部上端には，横位の連続貝殻刺突文が３条施されている。その下位には楔形突帯と，縦位の連続貝殻刺突文が隙間なく施されている。器面調整は内外ともにナデ調整が行われている。

49～52は胴部片である。49は楔形突帯と，縦位の連続貝殻刺突文が隙間なく施文されている。縦位の連続刺突文の上位にわずかではあるが，横位の貝殻刺突文が確認できることと，楔形突帯から口縁部に近い胴部片であることが分かる。また，縦長の擦り切り技法により作られた補修孔が確認できる。この補修孔は主に外面からのみ穿孔されているのが特徴である。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

50・51は縦位の連続貝殻刺突文が隙間なく施される土器である。器面調整は外面はともにナデ調整，内面は50はケズリ後ナデ調整，51はナデ調整が行われている。

52は底部付近と考えられる資料である。縦位の連続貝殻刺突文の下位に，斜位の貝殻条痕もしくはキザミが確認できる。器面調整は外面がナデ調整，内面がケズリ後ナデ調整が行われている。

５類土器（第147～149図　53～68）

５類土器は口縁部がやや外反する平底の円筒形土器である。文様は口縁部上端に貝殻刺突文もしくは貝殻押引文が施され，胴部には貝殻押引文もしくは貝殻条痕文が施される。口唇部は平坦に整形されるものが多く，キザミが施される。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土は他の土器と比較して角閃石が目立たない。

53～59は口縁部上端に貝殻刺突文，胴部に貝殻押引文が施される土器である。

53は口縁部がほぼ１/２程度残存している土器である。口径は約26.7㎝を測る。平坦に整形された口唇部はやや外傾し，キザミが施されている。口縁部上端には横位の貝殻連続刺突文が２条，その下位には貝殻を２回押し引いた貝殻押引文が間隔を空けて施されている。胴部には貝殻押引文が施されているが，摩滅が激しく下位にいくほど文様ははっきりとしない。胎土には石英・長石が多く含まれている。

54は口縁部から胴部下半までが残存している土器である。口径は約27㎝を測り，53とほぼ同じような口径を持つことが分かる。文様も53と同様の文様が施されている。胴部には押引文を連続して浅く施す条痕文風の押引文と，押引文を刺突しながら押引く，刺突文風押引文の２種類の貝殻押引文が施されている。補修孔が１か所確認でき，擦り切り技法により穿孔が施されている。穿孔は外面側からのみ行われており，内面側からの穿孔の痕跡は見られない。器面調整は内外面ともにナデ調整が施されているが，内面には指ナデの痕跡も確認できる。胎土には極わずかに雲母が確認できる。

第21表　４類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第144図	38	E35	Ⅶa	4a類土器	連続貝殻刺突文	貝→ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	黒褐色	良	角筒形土器
	39	C29	Ⅶa		連続貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	明赤褐色	良	角筒形土器
	40	M32	Ⅶa		連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	貝→ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	角筒形土器
	41	M34	Ⅵ		連続貝殻刺突文	ナデ	不明	○	○	○		○		にぶい黄橙	褐色	良	円筒形土器
	42	L35	Ⅵ		連続貝殻刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	円筒形土器
	43	E27	Ⅶa		連続貝殻刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	黒褐色	良	円筒形土器
	44	K33	Ⅶa		連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		褐色	褐色	良	円筒形土器
	45	M33	Ⅶb		連続貝殻刺突文	貝殻条痕	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい褐色	良	円筒形土器
第145図	46	D30	Ⅶa	4b類	連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	明赤褐色	良	
	47	M32	Ⅵ		楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	◎	○	○		○		極暗赤褐色	極暗赤褐色	良	石英が多い
第146図	48	K34	Ⅵ	4c類土器	連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	49	K33	Ⅶa		連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	50	I35	Ⅵ		連続貝殻刺突文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	51	D25	Ⅵ		連続貝殻刺突文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	52	L32	Ⅵ		連続貝殻刺突文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	暗赤褐色	良	

55も平坦に整形されたやや外傾する口唇部にキザミが施される。口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が２条施され，その下位には斜位の貝殻刺突文がやや幾何学的に施される。貝殻刺突文は部分的には押し引かれる。胴部は摩滅が激しく文様がほとんど確認できないが，貝殻刺突文が連続して施されている。

56は55と同様の器形・文様を持つ土器である。胴部文様は連続した貝殻刺突文と貝殻押引文の２種類の文様が施されている。

57・58は口縁部上端に横位の貝殻連続刺突文が３条施されている。胴部には54と同様に２種類の貝殻押引文が施される。

59は外傾する丸みを帯びた口唇部にキザミが施される。口縁部上端には横位の貝殻連続刺突文が２条施されている。この横位の貝殻連続刺突文は他と比較してより直線的に施されている。胴部には貝殻押引文が施されているが摩滅が激しい。

60～64は胴部に貝殻条痕文が施される土器である。

60は口縁部から胴部下半までの資料である。平坦に整形された口唇部は外傾し無文である。口縁部上端には４条の横位連続貝殻刺突文，胴部には貝殻条痕文が施されている。胎土には１～２㎜程度の白色の小礫が大量に含まれている。

61は口縁部に貝殻押引文２条，その下位に連続貝殻刺突文１条，さらにその下位に上段とは逆方向の貝殻押引文と３種類の文様が施されている。中段の貝殻刺突文を挟んで，上段と下段の貝殻押引文は施される方向も違うが，貝殻の大きさも異なる。また，下段の貝殻押引文に関しては，深い押引文が１条のみ施されていることからも，施文原体である貝殻は原型を保っていない可能性が考えられる。胴部には貝殻条痕文が施される。胎土には雲母が含まれている。

62はわずかに口縁部が破損している胴部片である。こちらも63と同様に口縁部には３種類の文様が施され，胴部には貝殻条痕文が施される。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われているが，内面には指ナデの痕跡が確認できる。

63は丸みを帯びた口唇部に鋸歯状のキザミが施されている。口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が３条，胴部には貝殻条痕文が施されている。

64の口唇部は丸みを帯び無文である。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が連続して１列施されている。口縁部直下は剥落しているが，わずかに貝殻条痕文が確認できる。胎土は，他の５類土器と比較して白色の小礫が目立つ。

65は口縁部に連続貝殻刺突文を３条施し，その下位に縦位の貝殻刺突文を１列施している。胴部には文様は確認できない。

66～68は口縁部片のみの破片資料であり，胴部の文様は不明である。

66は２条の貝殻押引文の下位に，１条の連続貝殻刺突文が施されている。

67は口縁部に２種類の刺突文が施されている。特に２列目の刺突文は形状が半円状となっている。施文原体は不明であるが，棒状工具の可能性も考えられる。

68は底部片である。胴部には貝殻条痕文が施され，底部付近にはキザミが１列施されている。底面は丁寧にナデ調整が施されている。

６類土器（第150～162図　69～149）

６類土器は約600点の土器片が出土した。口縁部の形態から，６ａ類：口縁部が外反するものと，６ｂ類：口縁部が外傾するものに分類した。口縁部が完全に直行するものは確認されていない。口縁部には貝殻刺突文を施し，胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。底部資料は少ないが，外面の底部付近には横位の貝殻条痕が施され，平底を呈している。

69～97は６ａ類土器であり，口縁部が外反する。

69は口唇部が欠けているが，口縁部資料であり，口縁部上端に「く」の字状に貝殻刺突文を施す土器である。胴部には貝殻条痕が確認できる。内面はナデ調整が行われている。

70～82は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施す土器である。

70～74の口唇部にはキザミもしくは刺突文が施される。71は斜位貝殻刺突文の下位に，横位貝殻刺突文が１条施され，胴部の綾杉状の貝殻条痕文との文様区画となっている。75・78も同様である。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。76は残存状況が悪いが，口縁部に「く」の字状に貝殻刺突文が施されていると考えられる。

79は口唇部が欠けているが，外反すると考えられる資料である。斜位の貝殻刺突文の下位には，綾杉状の貝殻条痕文が施されており，その文様から小型の貝殻を用いて施されたと考えられる。内面はナデ調整が行われている。

80は内面に段を設ける資料である。内面の口縁部付近は大きく削られている。他の部分は内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。

81は波状口縁を呈す口縁部片である。外反する口縁部は，胴部と比べやや肥厚，丸みを帯びる口唇部には刺突文が施されている。口唇部刺突文は貝殻を用いて施されていると考えられるが，摩滅が激しくはっきりしない。口縁部には斜位の貝殻刺突文が施されているが，「く」の字状になる可能性が高い。内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。

82は波状口縁を呈す口縁部から胴部にかけての資料で

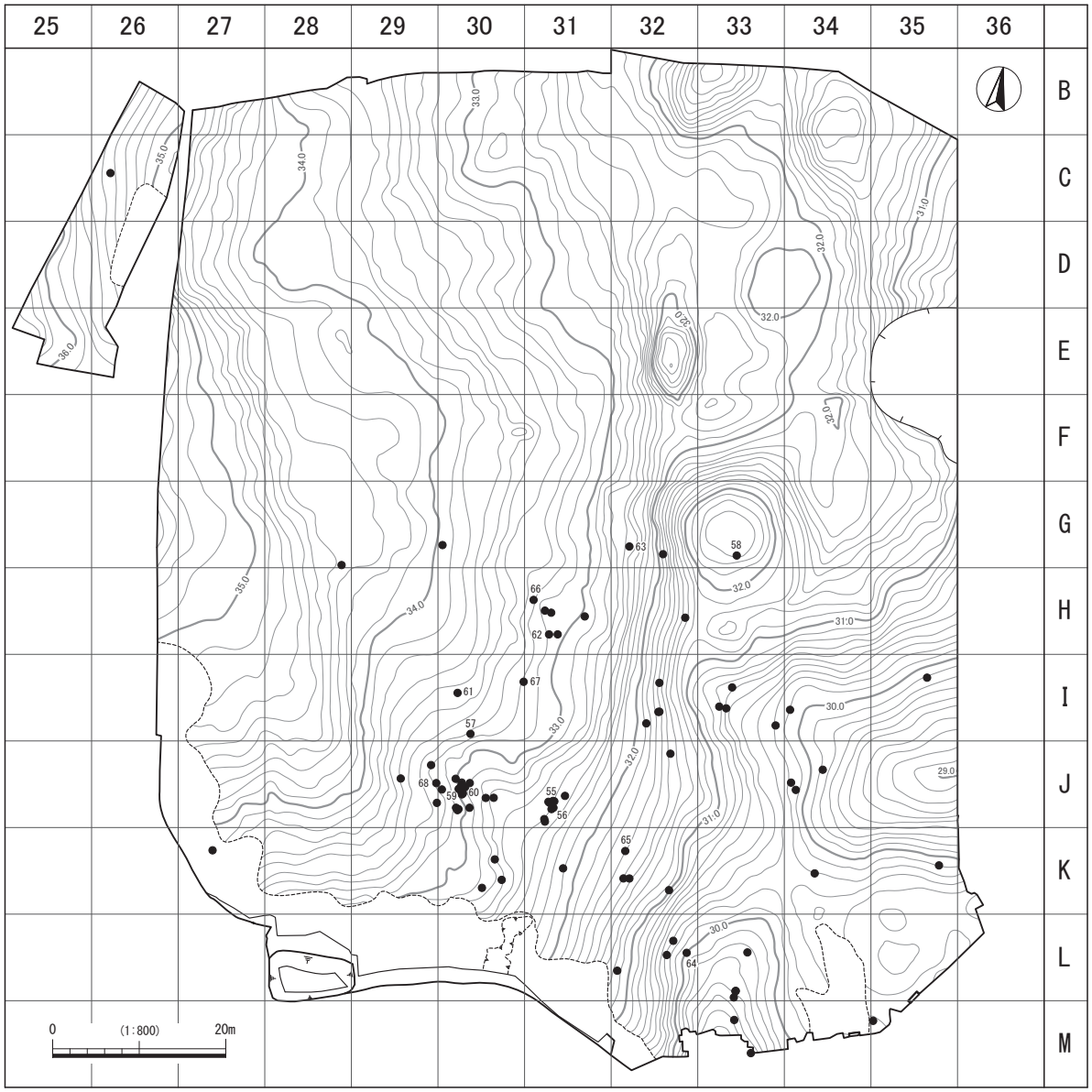
ある。波頂部はやや肥厚し，口唇部には刺突文が施されている。口縁部には斜位方向の貝殻刺突文が施されているが，他の資料と違い，短い刺突文が２列施されているようである。胴部は無文であるが，わずかに貝殻条痕が確認できるため，貝殻条痕調整を行った後に，ナデ消し調整を行った可能性が考えられる。内面は丁寧なナデ調整が行われている。補修孔が１か所確認でき，内外面から回転穿孔が行われている。穿孔方向は水平ではなく，外面から内面へ，やや下方向に向けて穿孔が行われている。

83～91は口縁部に横位の貝殻刺突文を施す土器である。４条～２条の貝殻刺突文が施される。

83は口縁部から底部まで確認できる資料である。口径31.2cm，器高22.7cm，底径22.2cmを測る。計算では満杯の状態で12.83ℓが入る容量である。やや外傾する口唇部は平坦に整形され，文様は施されない。口縁部上端には３条の横位貝殻刺突文が施され，胴部には下向きの弧状の貝殻条痕文が底部まで施されている。確認できる範囲では４列ほど施されているようである。底部は一部しか残存していないが，平底を呈する。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われており，特に外面のナデ調整は非常に丁寧に行われている。

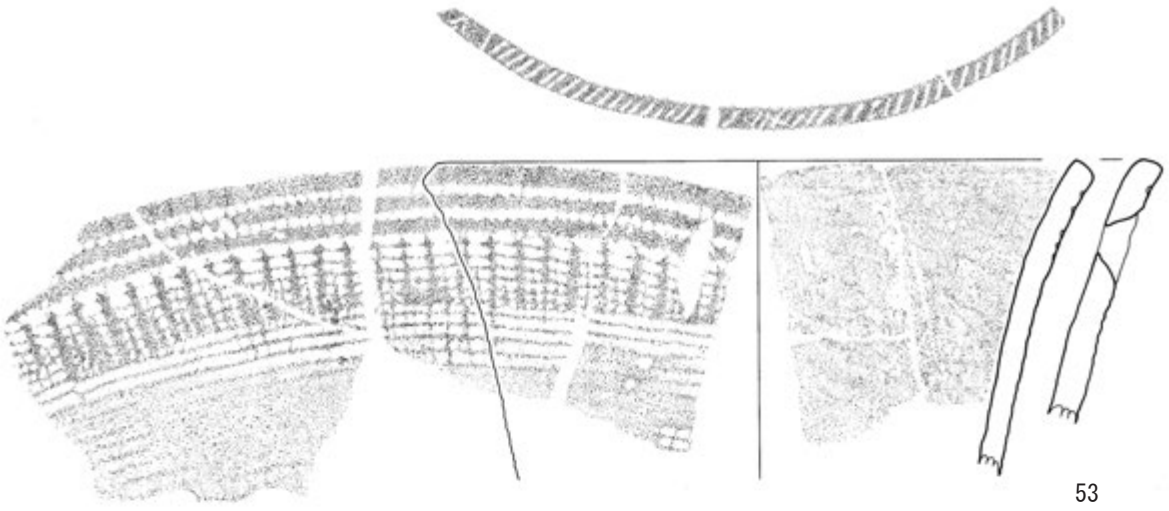
84は83と同一個体の口縁部片である。補修孔が１か所確認でき，縦方向の擦り切り技法による穿孔が行われている。穿孔の８割は外面からの穿孔である。

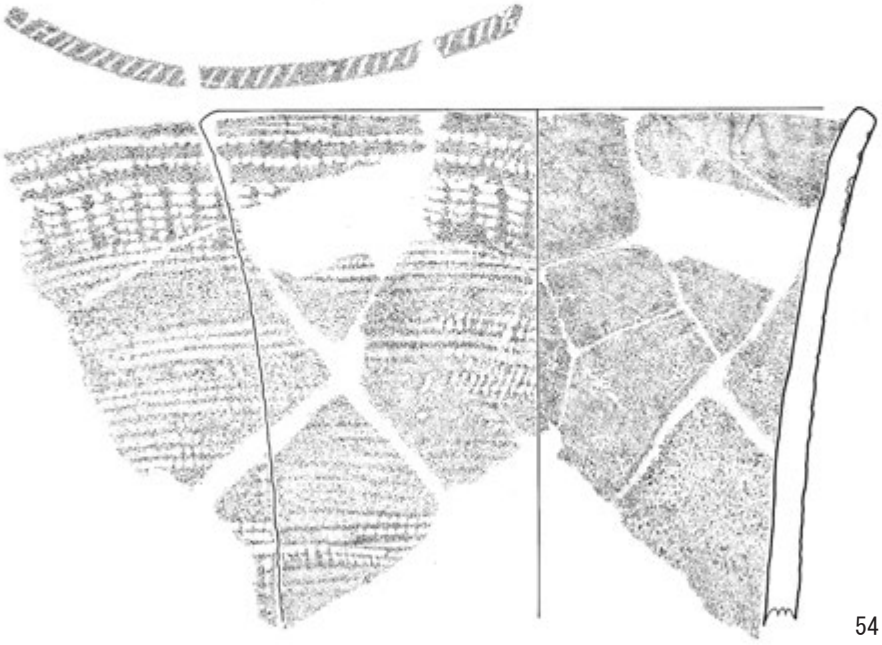
85は丸みを帯びた口唇部を持つ土器である。口縁部上端にやや密に３条の横位貝殻刺突文を施し，その下位に斜位貝殻刺突文が施されている。内外面ともにナデ調整

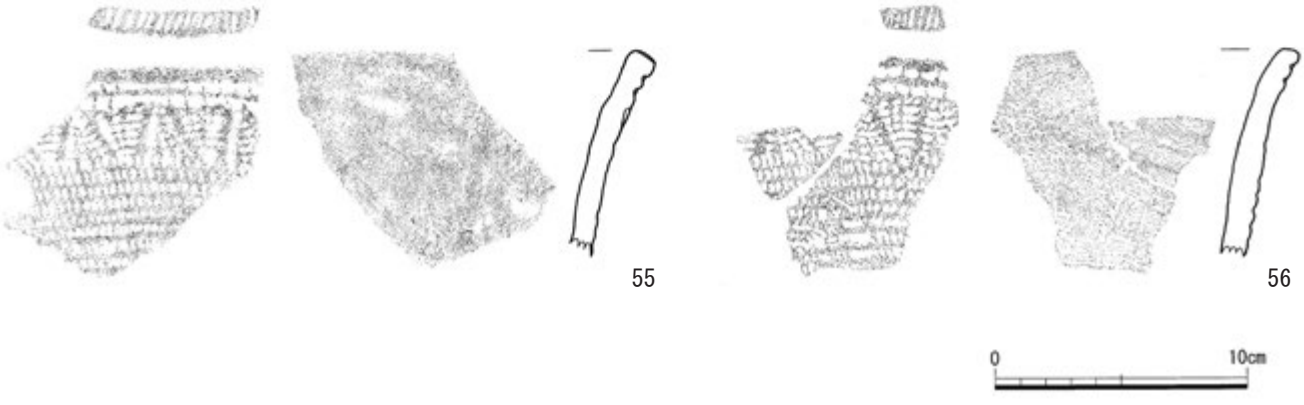


Ⅷ層上面コンタ図

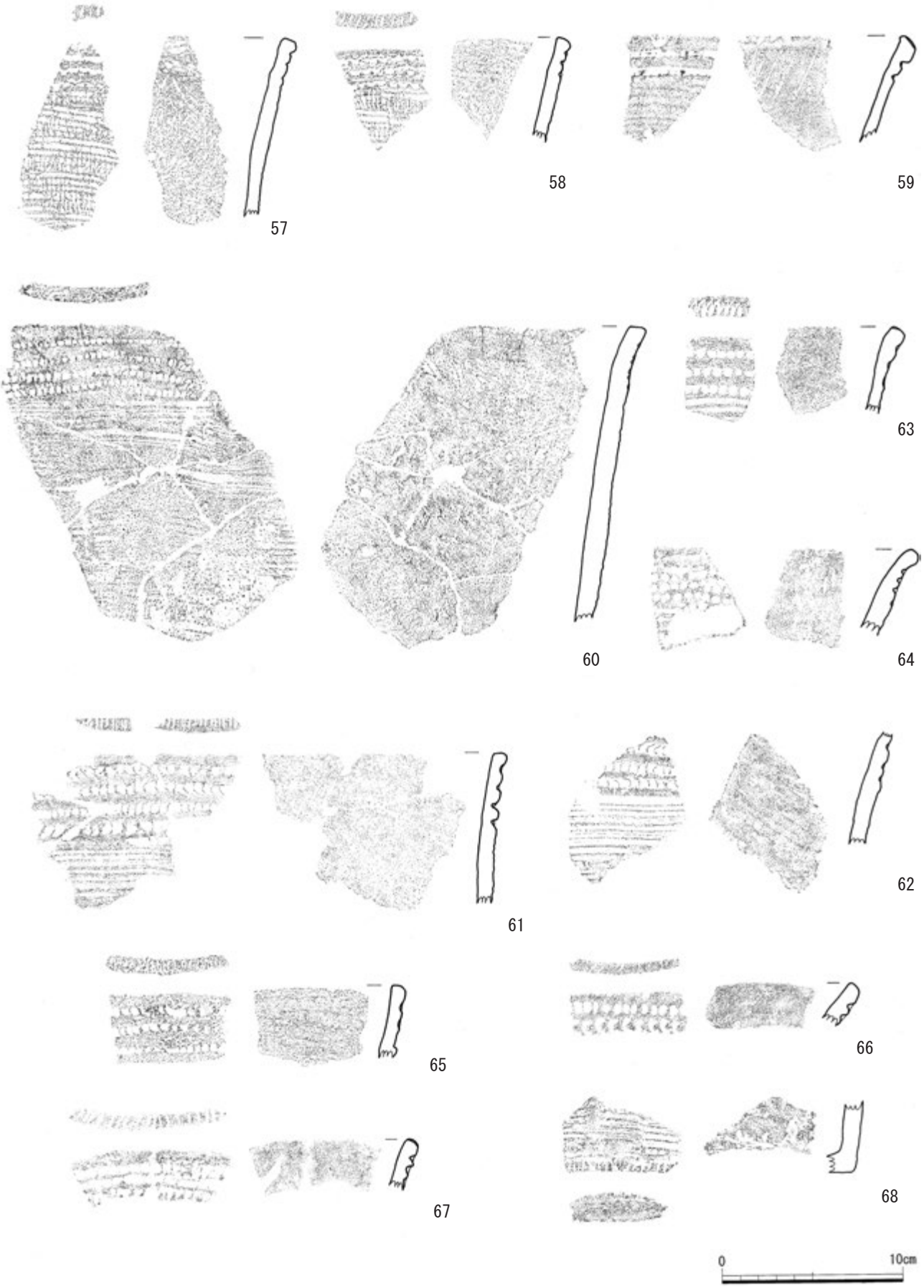
第147図　５類土器分布図







第148図　５類土器１



第149図　５類土器２

が行われている。

86も85と同様の文様が施されるが，こちらの横位貝殻刺突文は４条である。肉眼ではほとんど確認できないが，口唇部にはキザミが施されているようである。

87～91は口縁部に２条の横位貝殻刺突文を施す土器である。器面調整はすべて内外面ともにナデ調整が行われている。

87～89の口唇部にはキザミもしくは刺突文が施されている。

87は外傾し，やや丸みを帯びた口唇部にキザミを施す土器である。口縁部の２条の横位貝殻刺突文の下位には，斜位方向の短い刺突文が１列施されている。胴部にははっきりとしないが綾杉状の貝殻条痕文が施されているようである。

88は外傾し，やや丸みを帯びた口唇部に貝殻刺突文を施す土器である。口縁部には同じ貝殻を用いて貝殻刺突文が施されているが，横位と言うよりは，やや斜位気味の短い刺突文列が２列施されている。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。

89は丸みを帯びた口唇部にキザミを施す土器である。口縁部の２条の横位貝殻刺突文の下位には，斜位の貝殻刺突文が１列施されている。この斜位の貝殻刺突文は，貝殻条痕の上から施されており，二重施文となっている。

90は横位貝殻刺突文の下位に，貝殻刺突文が１列施されている。

91は口縁部上端の文様がはっきりとはしないが，横位の貝殻刺突文のようにも見える土器である。

92は波状口縁を呈す土器である。波頂部には瘤状突起が張り付けられている。波状の口縁部に沿うように横位の貝殻刺突文が１条施されており，その下位にも間隔を空けて，横位の貝殻刺突文がもう１条施されている。胴部には縦位の貝殻条痕が確認でき，２条目の横位貝殻刺突文は，この貝殻条痕の上から施されている。瘤状突起の直下では貝殻条痕が確認できないため，貝殻条痕は全面に施されているわけではないようである。

93と94は同一個体である。平坦に整形した口唇部にはキザミが施され，口縁部には２列の貝殻刺突文が施される。胴部には縦位と斜位の貝殻条痕文が施されている。93には補修孔が１か所確認でき，回転穿孔により穿孔されている。内外面からほぼ同程度の割合で穿孔されているが，穿孔位置が内外で微妙にズレたためか，補修孔自体はややいびつな形状をしている。器面調整は内外面と

第22表　５類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第148図	53	J31	Ⅶa	5類土器	貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	◎	◎	○		○		褐色	にぶい橙色	良	補修孔あり
	54	J31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ 指ナデ	○	○	○	△			にぶい橙色	にぶい橙色	良	雲母は極少量
	55	I30	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○				黒褐色	にぶい橙色	良	
	56	J33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	△				にぶい黄橙	にぶい橙色	良	
第149図	57	J30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	58	J30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	△				灰黄褐色	灰黄褐色	良	
	59	I30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	△	○			にぶい黄褐	にぶい黄褐	良	
	60	D26	Ⅶa上		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		◎		橙色	にぶい黄褐	良	白色小礫多
	61	H31	Ⅶa		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			明赤褐色	にぶい橙色	良	
	62	G32	Ⅵ		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ 指ナデ	○	○	○	△	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良	
	63	L32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	△				灰黄褐色	にぶい黄橙	良	
	64	K32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		黒褐色	黒褐色	良	
	65	H31	Ⅶa		貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎			にぶい褐色	にぶい黄褐	良	
	66	I30	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	△	△	△				にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	67	L33	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		橙色	にぶい赤褐	良	
	68	I29	Ⅶa		貝殻条痕文 キザミ	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	灰褐色	良	

もにナデ調整が行われている。

95は外傾する口唇部に貝殻刺突文を施し，口縁部には口唇部と同じ貝殻を用いて，縦位の貝殻刺突文を１列施している。縦位貝殻刺突文は地文の貝殻条痕調整の上から施されている。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面はナデ調整が行われている。

96は丸みを帯びた口唇部に貝殻刺突文を施す土器である。同じ刺突文が口縁部にも縦位・斜位方向に施されている。

97は波状口縁を呈す土器である。波頂部は肥厚する。外面には貝殻条痕のみが確認できる。内面はナデ調整が行われている。

98～140は６ｂ類土器であり，口縁部が外傾する。

98～104は平坦に整形，もしくはやや丸みを帯びた口唇部にキザミを施し，口縁部に「く」の字状に貝殻刺突文を施し，胴部には綾杉状の貝殻条痕を施す土器である。どれも口縁部はわずかに外傾，もしくは外傾している。

98・99・101は口縁部の貝殻刺突文と，胴部の綾杉状の貝殻条痕文の間に，横位の貝殻刺突文を施し，文様を区画している。内面はどれもナデ調整が行われている。

105～112は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施し，胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す土器である。口唇部は平坦に整形，もしくは丸みを帯び，キザミを施すものと無文のものが見られる。

105は口径30.6㎝を測る口縁部片である。口唇部は丸みを帯び，キザミが施されているが，キザミは部分的に施され，無文の部分も見られる。口縁部に斜位の貝殻刺突文，胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。文様は全体的に薄く施され，はっきりしない。これは使用による摩滅等ではなく，製作段階からこのような文様の施し方をしたものと考えられる。外面器面調整は丁寧なナデ調整が行われている。内面器面調整もナデ調整が行われている。胎土は大量の小礫が含まれ，特に内面の口縁部付近では，ナデ調整により小礫が引っ張られた痕跡が顕著に残る。雲母も含まれている。105の口縁部には一部突帯が剥がれたような部分があり，口唇部もその部分はわずかに隆起しているようである。

106・107は口唇部にキザミを施す土器である。106は横位の貝殻刺突文により，口縁部文様と胴部文様の区画が行われている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

108～112の口唇部は無文である。108は横位の貝殻刺突文により，口縁部文様と胴部文様の区画が行われている。全て器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

113～135は口縁部に横位の貝殻刺突文を施す土器である。ほとんどが口縁部上端に３条もしくは２条の貝殻刺突文を施し，胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施すものであるが，縦位の貝殻条痕文等を施すものも見られる。また，口縁部の刺突文を施す部分にナデ調整を施さず，貝殻条痕の上から刺突文を施すものも見られる。内面は全てナデ調整が施されている。

113は口縁部に瘤状突起を持つ土器である。口縁部は約１／２が残存しており，瘤状突起は２か所に作られていると考えられる。丸みを帯びながら外傾する口唇部にはキザミ，口縁部上端には６列の横位貝殻刺突文が施されている。胴部には綾杉状を意識したと考えられる貝殻条痕文が施されているが，やや文様が崩れ，部分的には縦位や横位の貝殻条痕文も確認できる。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

114～119は口縁部に３条の横位貝殻刺突文を施す土器である。

114・115の口唇部には刺突文が施される。

116～135は口縁部に３条もしくは２条の横位貝殻刺突文を施す土器である。

116～126の口唇部には，キザミもしくは刺突文が施される。

130は口縁部の２条の横位貝殻刺突文の下位に，横位貝殻刺突文とは異なる施文原体により，刺突文が１列施されている。刺突文の形状より，棒状工具を用いたようにも見えるが，６類土器は一連の文様を貝殻を用いて施していることからも，貝殻を利用して刺突文を施している可能性も考えられる。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されるが，文様はやや崩れている。

132～135は口縁部に２条の横位貝殻刺突文が施されているが，２条の貝殻刺突文列間がやや開く土器である。口唇部は全て無文である。２条の横位貝殻刺突文は，貝殻条痕の上から施されている。

136は胴部と比較して口縁部がわずかに肥厚する土器である。やや外傾する口唇部にはキザミが施され，口縁部には１列の縦位貝殻刺突文が施され，その下位に横位の貝殻刺突文が１条施され，胴部の貝殻条痕文との文様区画となっている。内外面ともにナデ調整が行われている。

137は波状口縁を呈す土器であり，波頂部が肥厚し，瘤状突起となる。口唇部にはキザミが施されているが，摩滅が激しく，肉眼ではほとんど確認できない。口縁部には貝殻刺突文が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。

138・139は同一個体と考えられる土器である。口唇部は外傾もしくは，やや丸みを帯び無文である。口縁部には，大きめの貝殻を用いて縦位の貝殻刺突文が施されている。胴部には貝殻条痕が確認できる。内外面ともにナデ調整が行われ，器面が大きく剥落しているのが特徴である。

140はやや内傾する無文の口唇部を持ち，口縁部から

胴部にかけて，綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面は丁寧なナデ調整が行われている。

141～147は胴部片である。

141は上部に３条の横位貝殻刺突文が，下部に横位方向の貝殻条痕文が確認できることから，口縁部付近から底部付近まで確認できる資料である。残存部のみで器高は30.2cmを測り，推定される器高は約31cmである。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が丁寧に施され，内面の器面調整は丁寧なナデ調整が行われている。

142は１条の横位貝殻刺突文が確認できる胴部片である。回転穿孔による補修孔も１か所確認できる。

143は貝殻条痕文が確認できるが，条痕が薄く，これは摩滅等の後天的な影響ではなく，施文時から薄く施されたと考えられる。割れ口は上下とも接合面で外れたと考えられ，非常に滑らかな断面形状となっている。

144はナデ調整が行われた胴部に，貝殻条痕文が施されている。貝殻条痕文は綾杉状に施されていると考えられるが，施文は粗い。内面は貝殻条痕調整後にナデ調整が行われている。

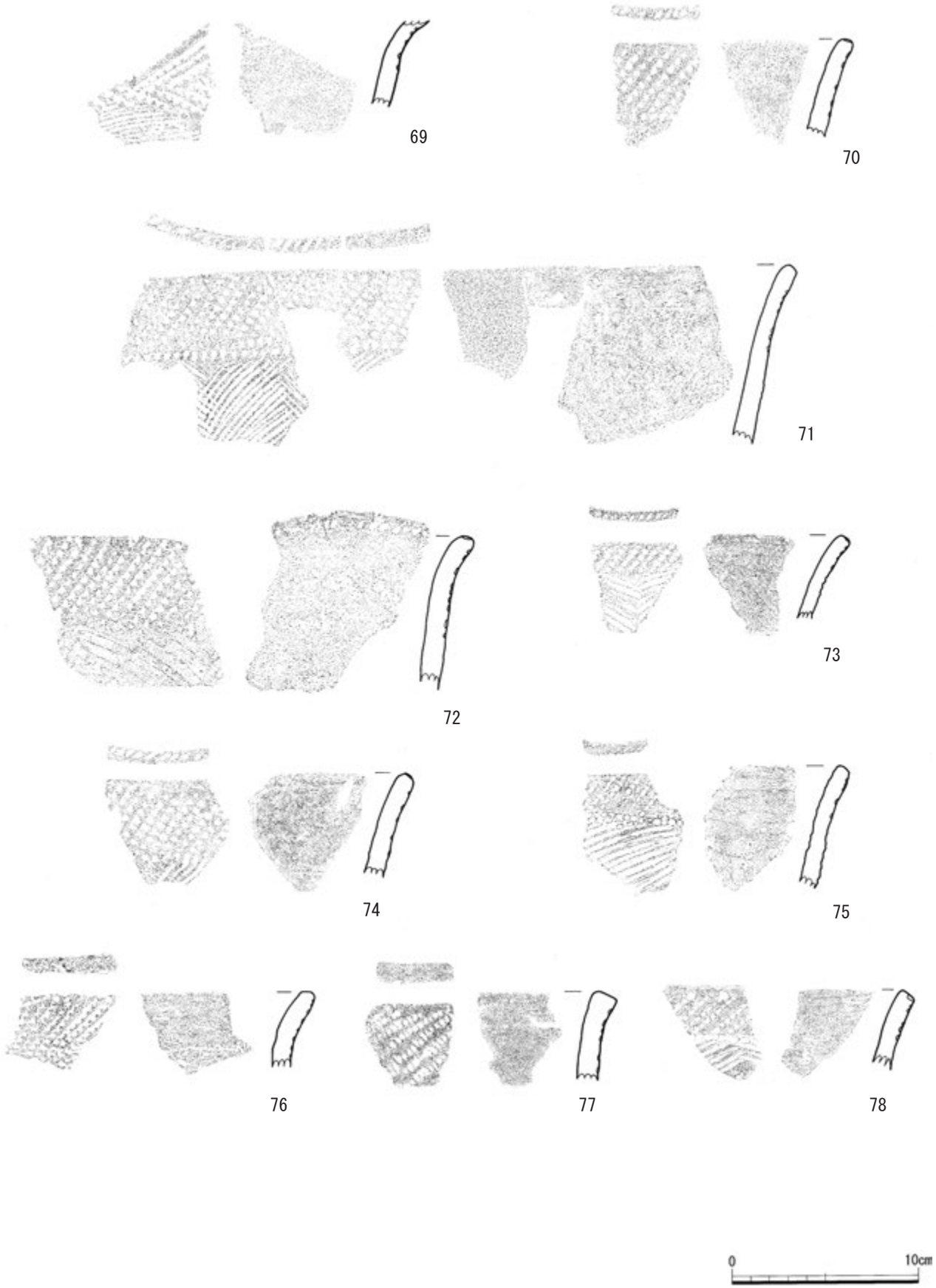
145は胴部から底部付近の破片である。残存部での器高は20.7cmであり，底部径は約14.4cmである。胴部には綾杉状を意識したと考えられる斜位方向の貝殻条痕文が施されているが，施文は粗い。底部付近は横位の貝殻条痕文が施されている。斜位の貝殻条痕文が横位貝殻条痕文に切られており，施文順位は横位貝殻条痕文が後から施されていることが分かる。内面は丁寧なナデ調整が行われている。

146・147は底部付近の破片資料である。ともに内面は

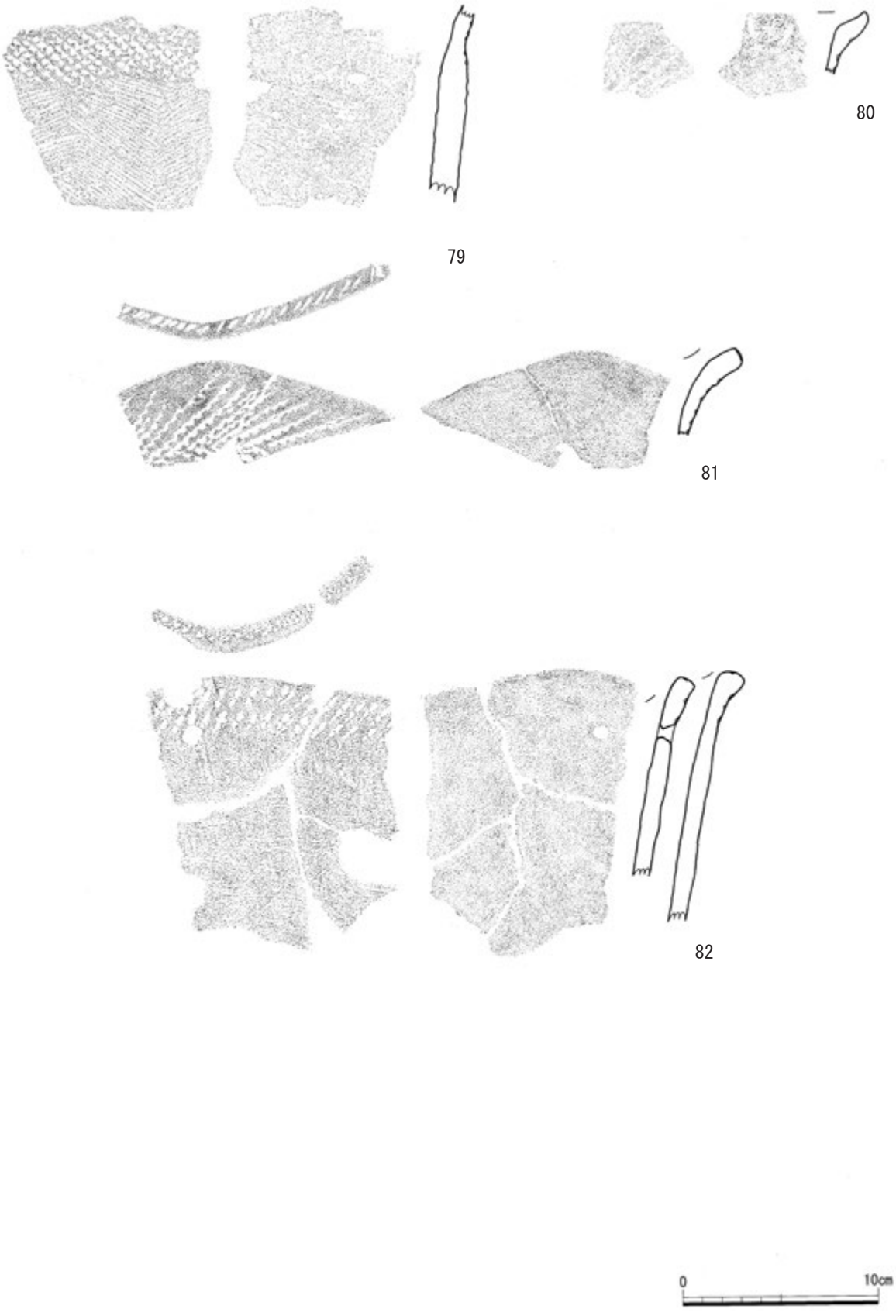


Ⅷ層コンタ図

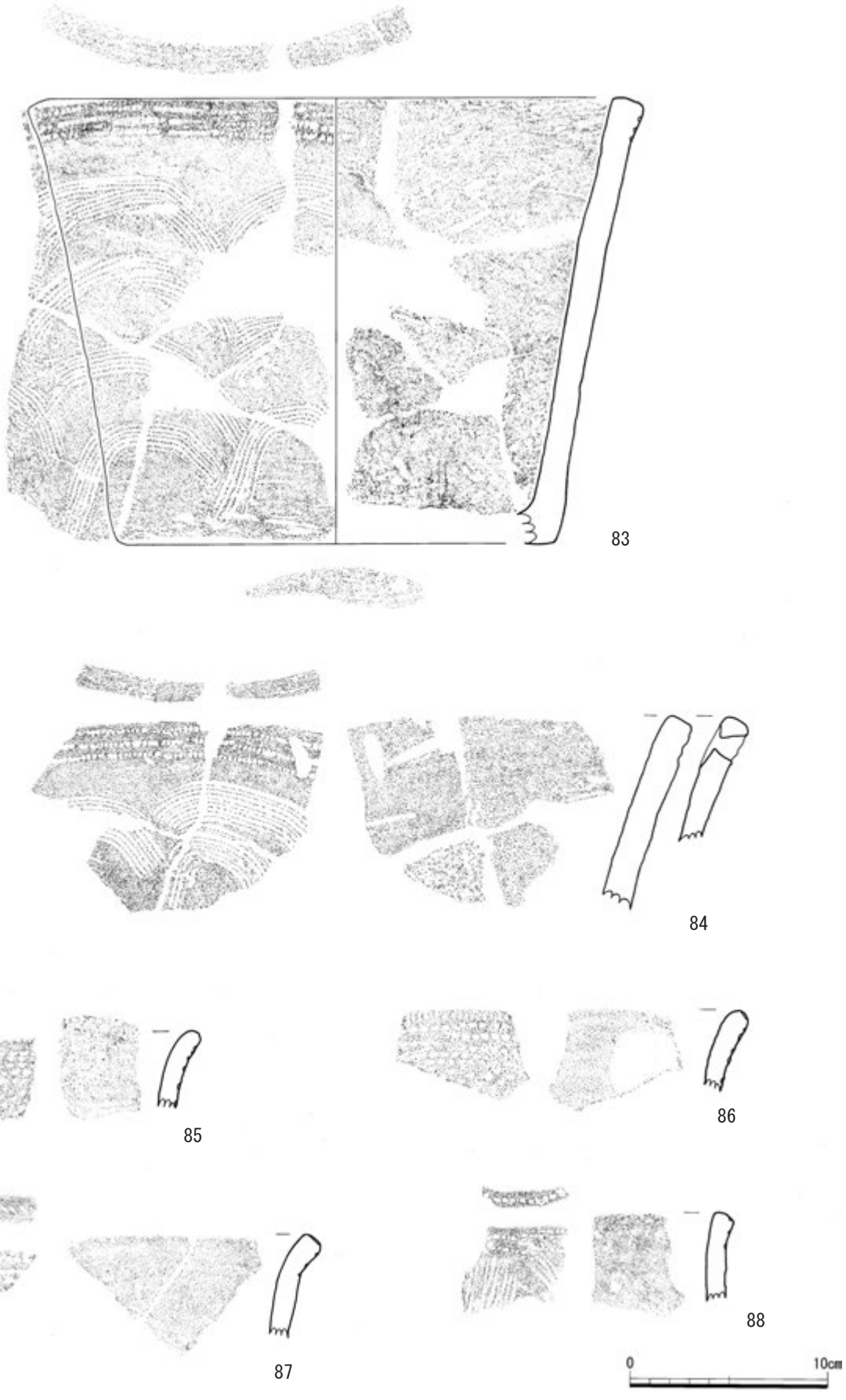
第150図　６類土器分布図



第151図　６類土器１



第152図　６類土器２



第153図　６類土器３



89



90



91



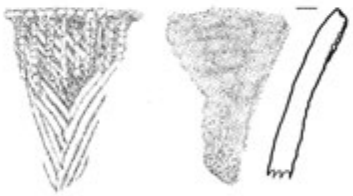
92



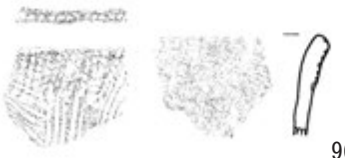
93



94



95



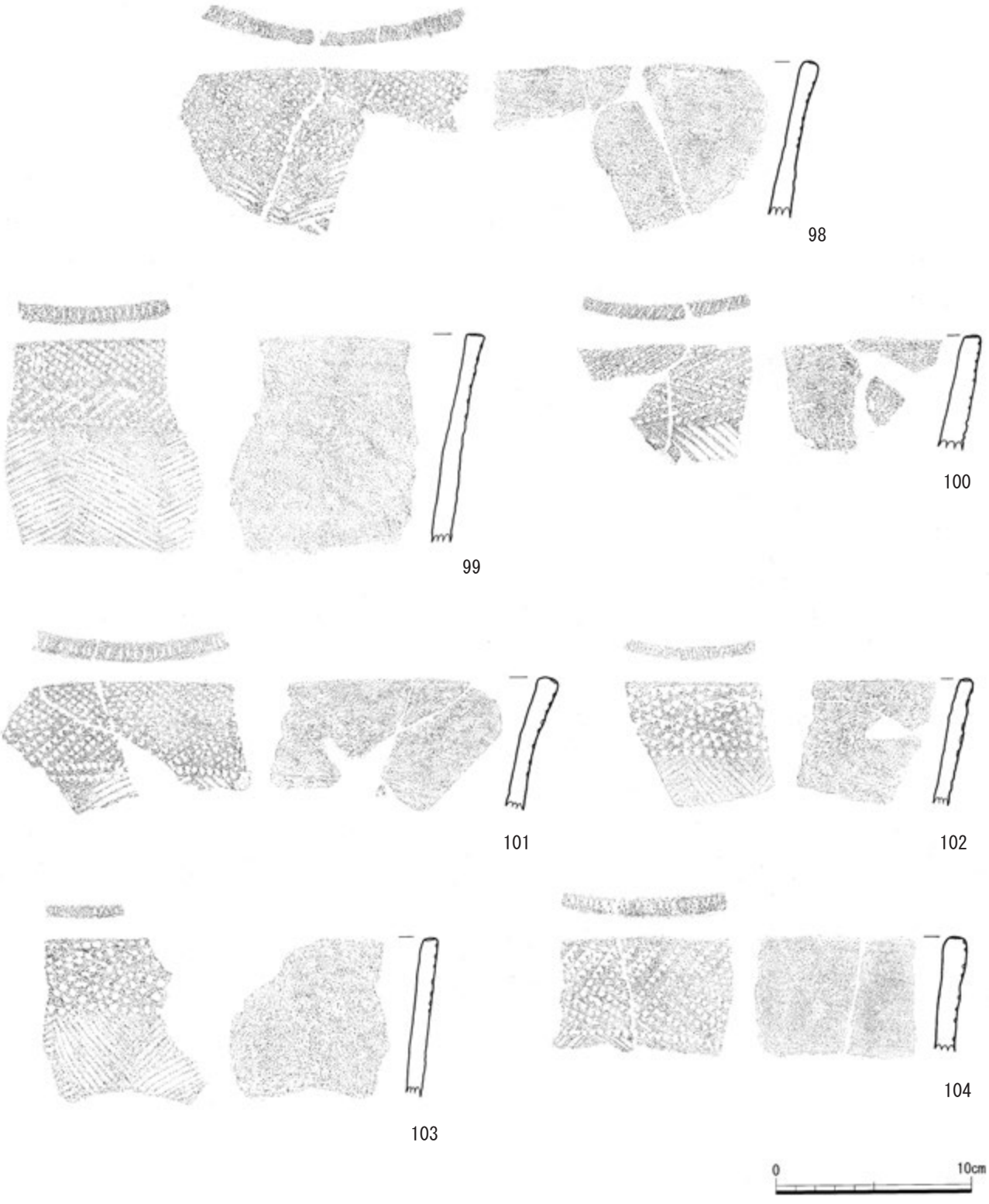
96



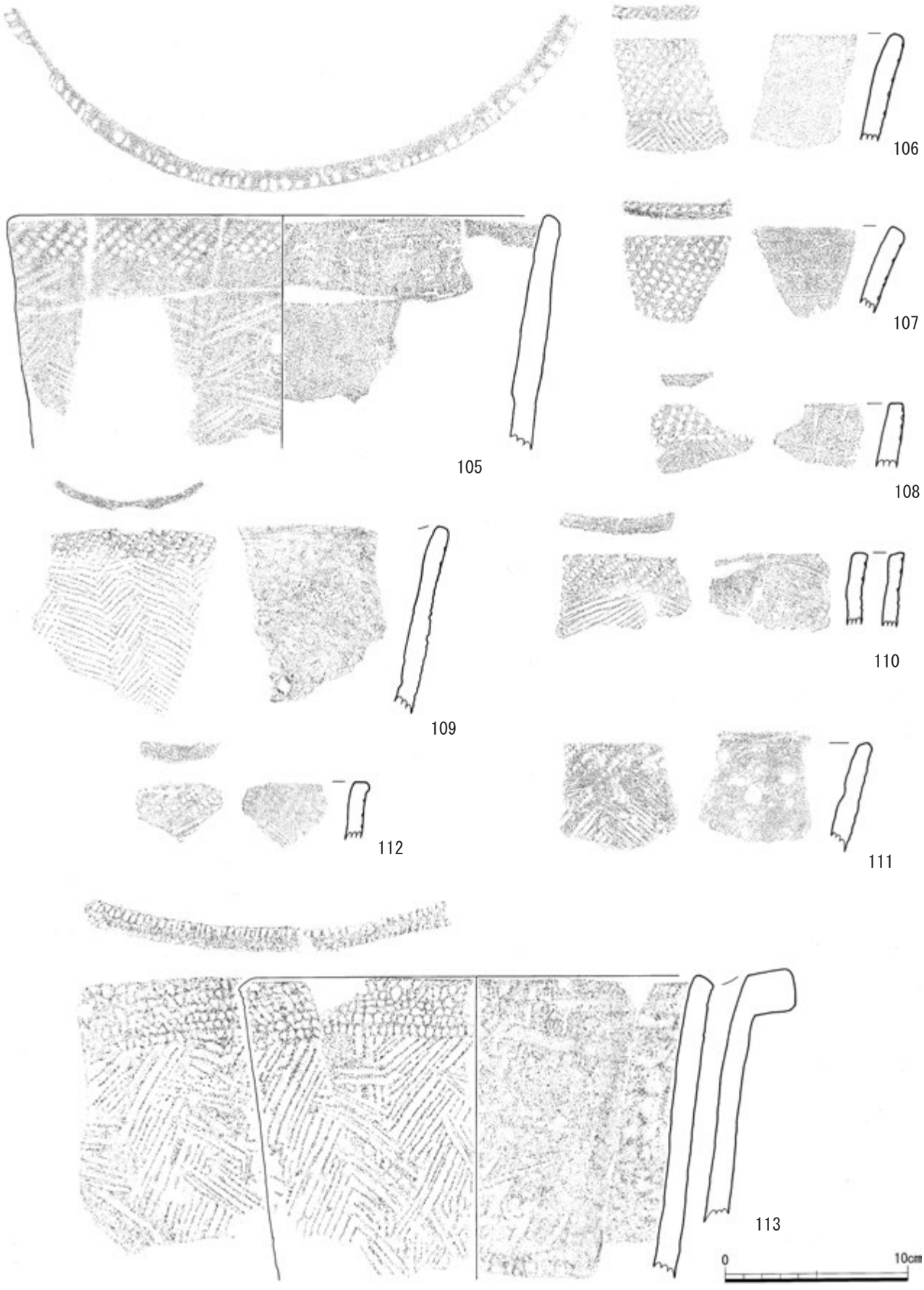
97



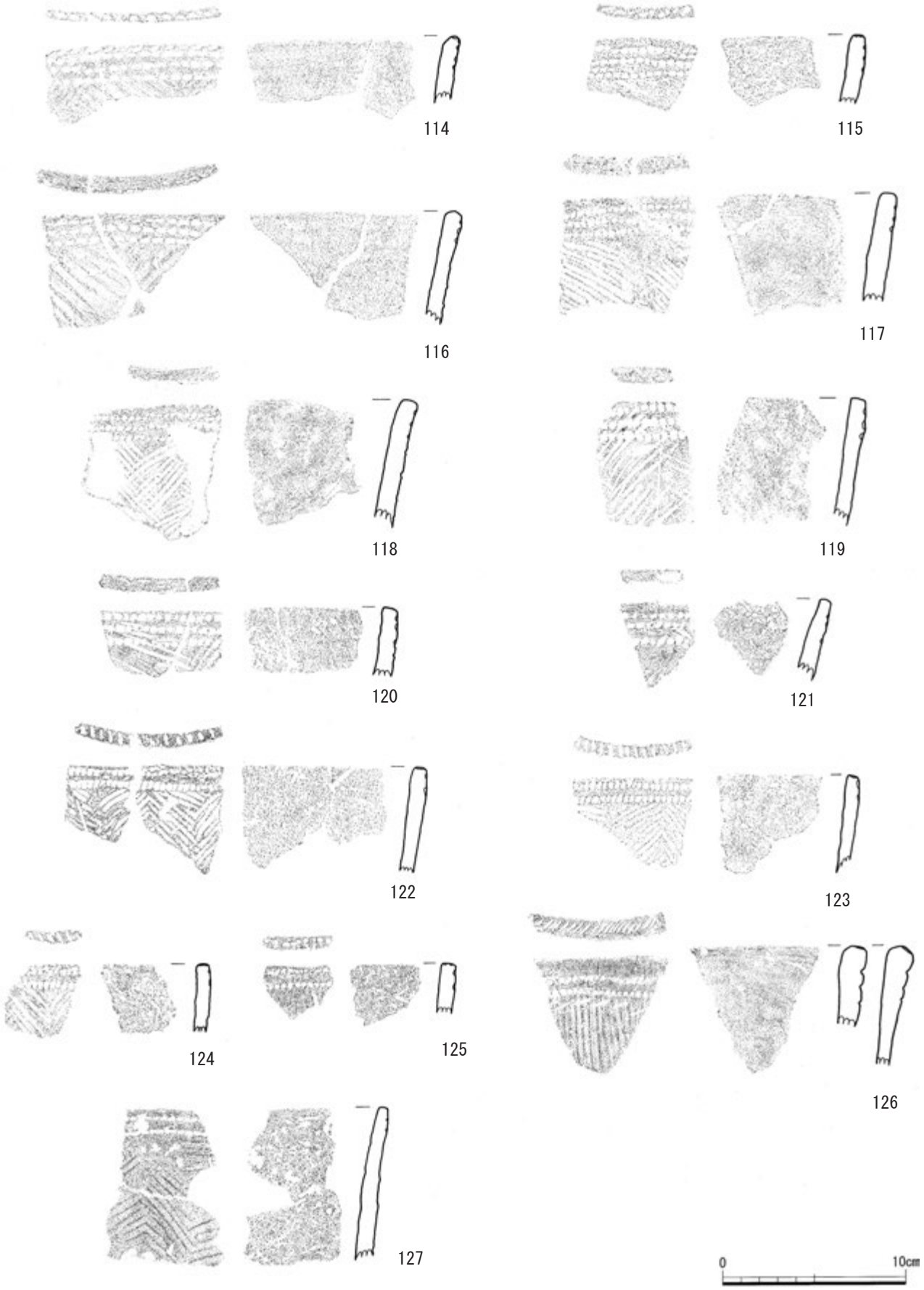
第154図　６類土器４



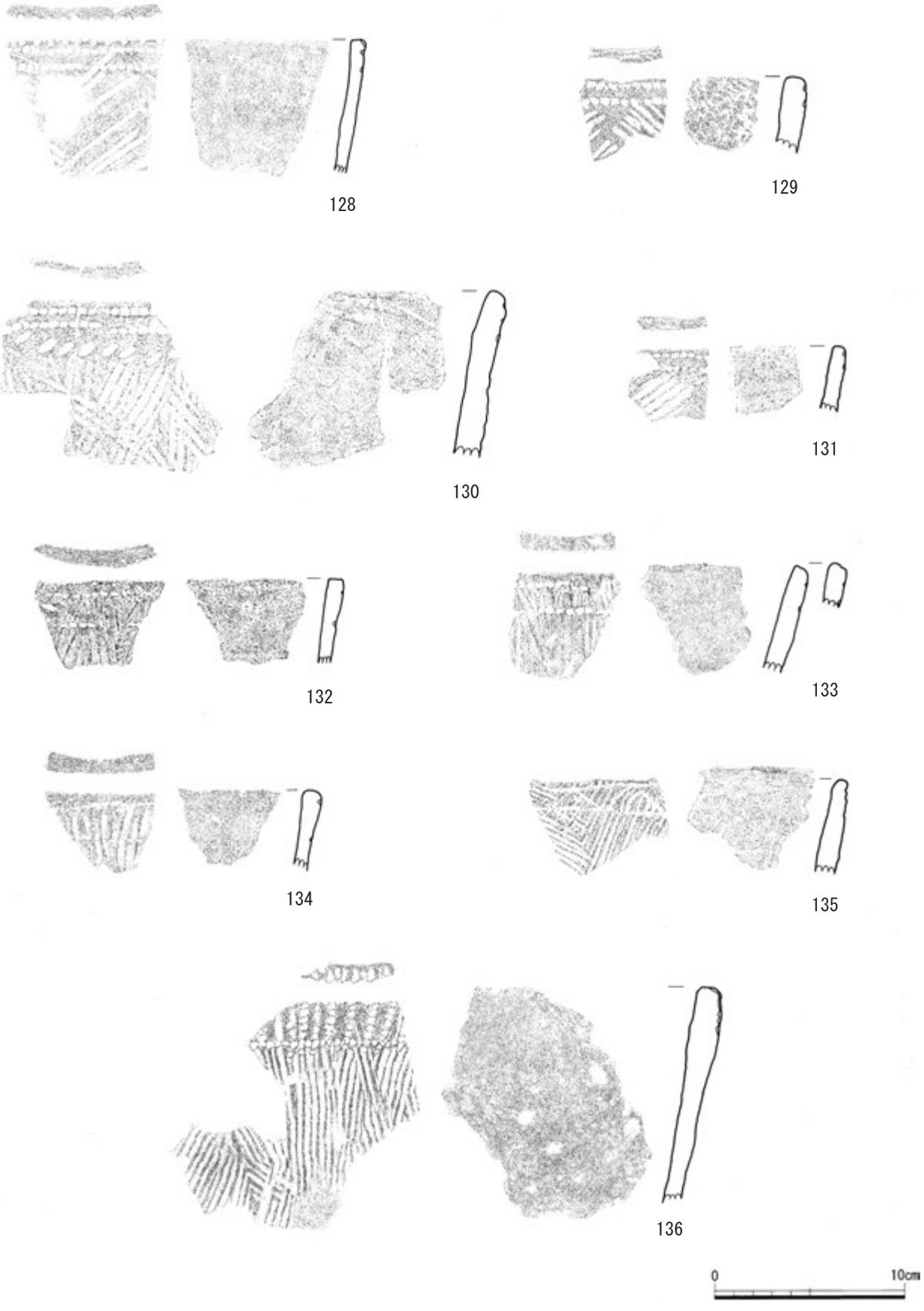
第155図　６類土器５



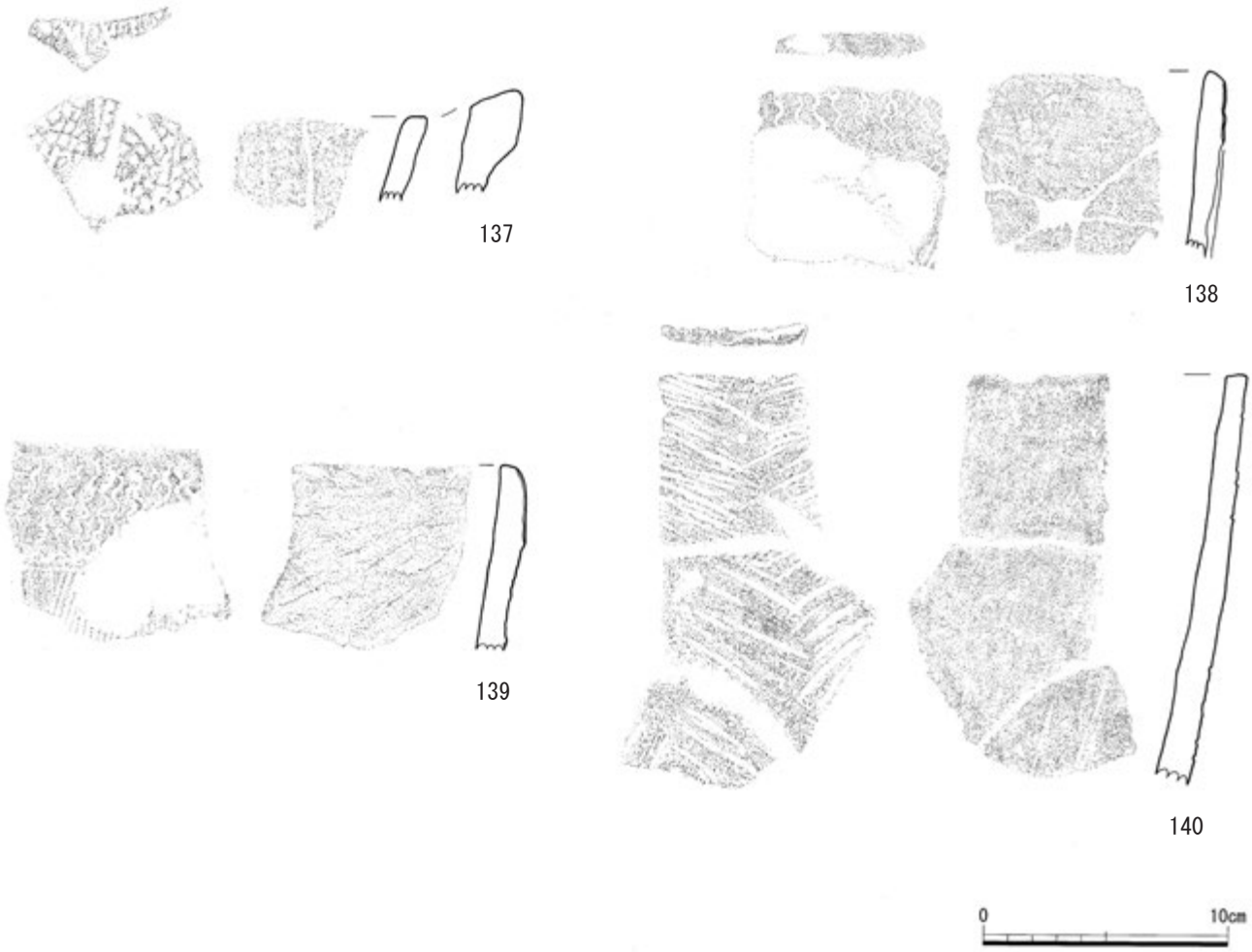
第156図　６類土器６



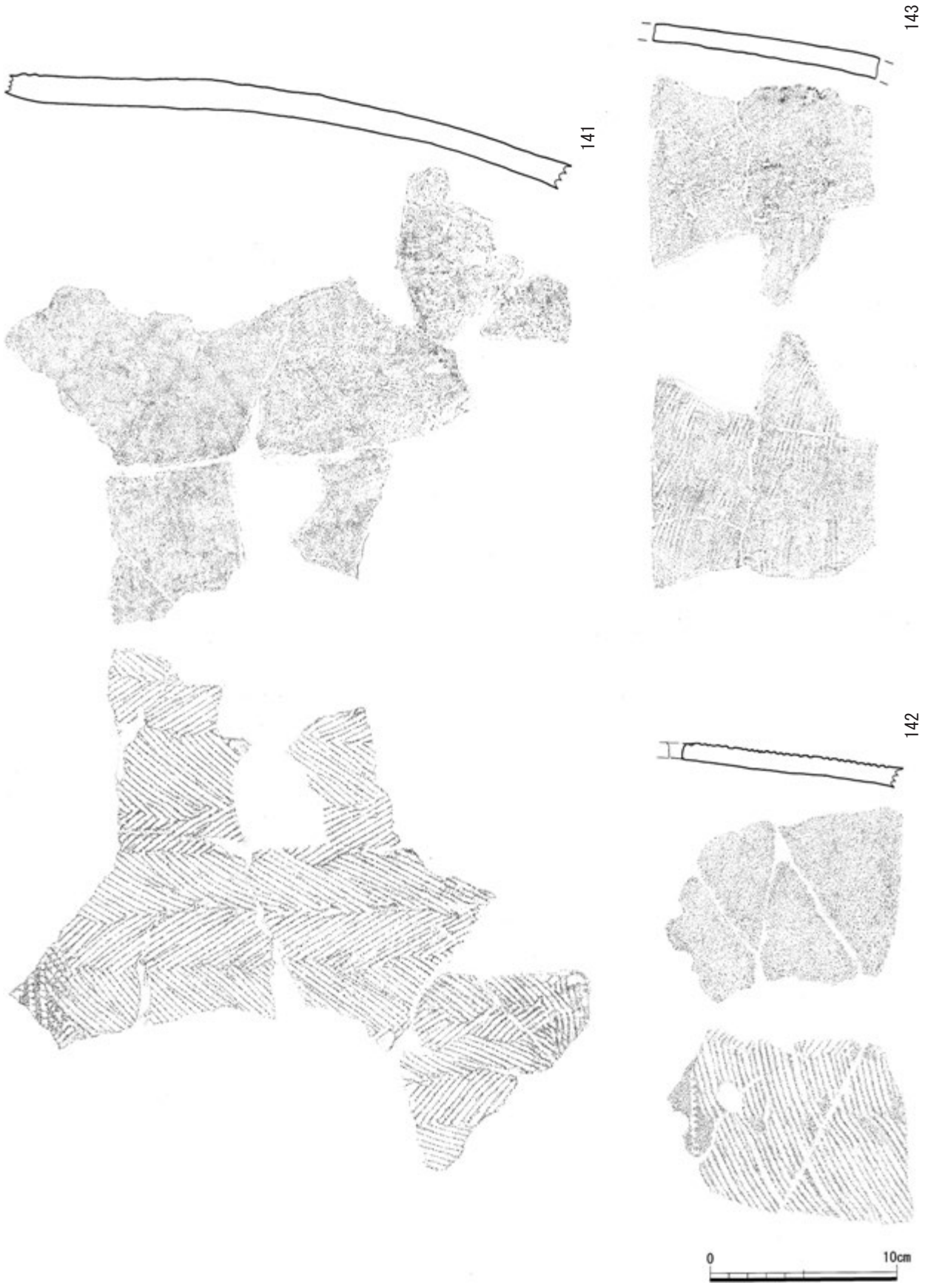
第157図　６類土器７



第158図　６類土器８



第159図　６類土器９



第160図　６類土器10



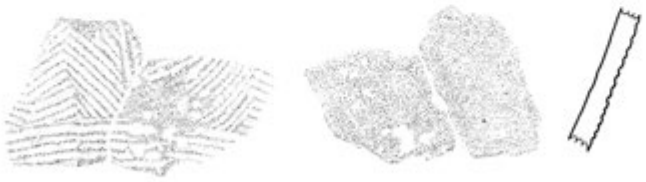
144



145



146



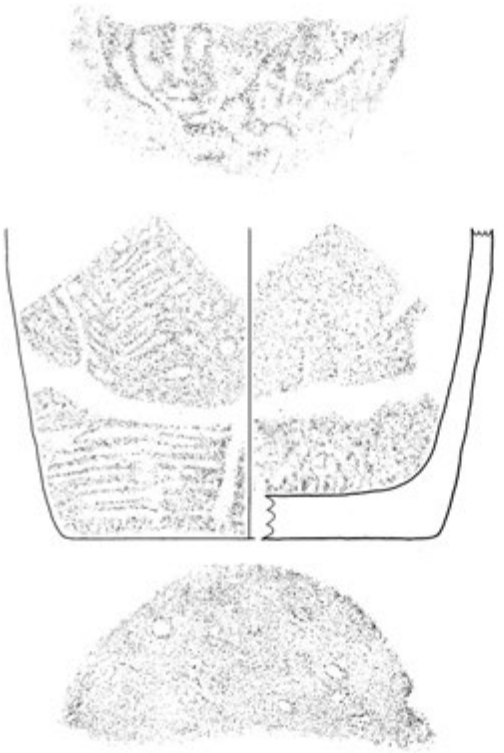
147



第161図　６類土器11



148



149



第162図　６類土器12

第23表　６類土器観察表１

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第151図	69	I29	Ⅶb	6a類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい赤褐	良	
	70	H30	Ⅵ		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	71	B28	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	72	K34	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	73	D33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	74	E29	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	にぶい橙色	良	
	75	C31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	
	76	I33	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	77	L32	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	78	B27	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	1cm程の礫混入
第152図	79	H33	Ⅶa	6a類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	80	I29	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		暗赤褐色	にぶい赤褐	良	
	81	K32	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい赤褐	にぶい橙色	良	
	82	K31	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	暗褐色	良	
第153図	83	L32	Ⅶa	6a類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	84	L32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	補修孔あり
	85	I33	Ⅵ		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	86	G33	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	87	L33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	橙色	良	
	88	C30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	にぶい褐色	良	
第154図	89	G35	Ⅶa	6a類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	にぶい赤褐	良	波状口縁
	90	—	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	91	B29	Ⅶb		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	灰褐色	良	外面にスス
	92	I30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	波状口縁
	93	L32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	にぶい褐色	良	補修孔あり
	94	L32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	95	M33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい赤褐	良	
	96	L33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		橙色	にぶい褐色	良	
	97	J33	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	—	○	○	○		○		暗赤褐色	明赤褐色	良	
第155図	98	L32	Ⅶa	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	99	L35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	100	I32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	暗褐色	良	
	101	J35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良	
	102	G31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	103	G31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい褐色	良	
	104	M33	Ⅶb上		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		暗褐色	橙色	良	

第24表　６類土器観察表２

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第156図	105	C28	Ⅶa	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	106	C28	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		灰褐色	にぶい橙色	良	
	107	H29	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	にぶい橙色	良	
	108	L31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい褐色	明赤褐色	良	
	109	K35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	110	M32	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ 後ナデ	○	○	○	○			にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	111	M32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	112	M32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			橙色	にぶい褐色	良	
	113	M34	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい赤褐	良	
第157図	114	K32	Ⅵ	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐色	にぶい黄褐	良	
	115	L34	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	
	116	M33	Ⅶa下		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	
	117	L32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	118	L32	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	にぶい褐色	良	
	119	M31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい黄褐	良	
	120	J35	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	△		にぶい褐色	灰褐色	良	
	121	J30	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	122	K34	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	123	K33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	△	○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	124	K35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ 後ナデ	○	○	○	△	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	125	I35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	126	F30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	127	I28	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
第158図	128	L34	Ⅶa	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	
	129	J31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			灰褐色	にぶい橙色	良	
	130	J35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	131	M33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	132	I30	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	133	I30	Ⅶb		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	波状口縁
	134	J29	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	にぶい橙色	良	
	135	G31	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	灰褐色	良	
	136	G31	Ⅶb		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい褐色	にぶい赤褐	良	

丁寧なナデ調整が行われている。

146の外面には，丁寧なナデ調整の後に，綾杉状の貝殻条痕文が部分的に施されている。下位には貝殻刺突文が確認でき，底部付近と考えられる。

147は胴部に綾杉状の貝殻条痕文，底部付近に横位の貝殻条痕文が施されている。

148・149は底部片である。ともに胴部に綾杉状の貝殻条痕文，底部付近に横位の貝殻条痕文が施されている。底部は平底を呈し，ナデ調整が行われている。

148の綾杉状の貝殻条痕文は部分的であり，施文が浅い。器面調整は外面はナデ調整，内面は縦方向のケズリ後ナデ調整が行われている。

149は底部径15cmを測る。胴部の厚さ約９㎜に対し，底部の厚さは約18㎜と厚い。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

７類土器（第163・164図　150～161）

７類土器は斜位の貝殻刺突文や，斜位の沈線文を主とする文様構成を持つ土器である。貝殻刺突文のものを７ａ類，沈線文のものを７ｂ類とする。

150～157は７ａ類土器である。150・151は口縁部片である。

150はやや外傾する平坦に整形した口唇部に貝殻刺突文を施す。一見,キザミのようにも見えるが,よく観察すると貝殻刺突文であることが分かる。口縁部には斜位の貝殻刺突文を連続で横位羽状に施している。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

151は文様構成等は150と同様であるが，口唇部がやや内傾する。

152～156は胴部片である。

152は斜位の貝殻刺突文と，横位の貝殻刺突文が施されている。横位の貝殻刺突文の下位には文様は確認できないことと,下部の割れ口の形状から，底部付近の破片である可能性が考えられる。

153は７類土器の中では最も大きな破片資料である。貝殻刺突文を羽状に２列施し,その下位には貝殻腹縁を用いた縦位方向の短い条線文を施している。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には雲母が含まれている。

154は羽状の貝殻刺突文，155は斜位の貝殻刺突文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

156は羽状の貝殻刺突文の間に，横位の貝殻刺突文を１条施している土器である。破片資料であるため，この文様が羽状の貝殻刺突文を区画しているのか，または魚骨状の貝殻刺突文となるかは不明である。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

157は底部付近の破片資料である。横位の貝殻刺突文が密接に施されている。貝殻刺突文は連続して施されず,線状にはならない。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には雲母が含まれている。

158～161は７ｂ類土器である。

158・159は口縁部片である。

158は内傾する平坦に整形した口唇部を持つ土器であ

第25表　６類土器観察表３

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第159図	137	G31	Ⅶa	6b類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	橙色	良	
	138	M33	Ⅵ		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良	
	139	K35	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	140	M34	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	明赤褐色	良	
第160図	141	C26	Ⅵ	6類胴部	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	明赤褐色	良	
	142	L34	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	にぶい橙色	良	
	143	C28	Ⅶb		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	橙色	良	
第161図	144	K34	Ⅵ	6類胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	145	G31	Ⅶb		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		明赤褐色	にぶい赤褐	良	
	146	H33	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	147	B33	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	灰褐色	良	
162図	148	L32	Ⅶa	6類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎	○		にぶい橙色	にぶい黄褐	良	底部
	149	I34	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	底部

る。口唇部は無文であり，丁寧なナデ調整が行われている。口縁部はやや肥厚し，内湾する。口縁部上端には２列の刺突文が施されている。施文原体は不明であるが，形状は直径２㎜程の円形を呈し，棒状工具の可能性が高い。その下位には，斜位短沈線文を組み合わせた羽状文が２列施されており，さらにその下位には２列の刺突文が確認できる。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われているが，内面は口縁部上端の約1.5㎝の幅で，横位方向の混和材の流れが顕著に確認できるため，口縁部付近のみケズリ後ナデ調整が行われたと考えられる。

159は器形は158と同様であるが，口縁部付近は明らかに肥厚しており，口縁部付近で1.3㎝，残存部の最下部で７㎜と，口縁部付近の厚みが約２倍となっている。文様は斜位の短沈線文を組み合わせた羽状文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

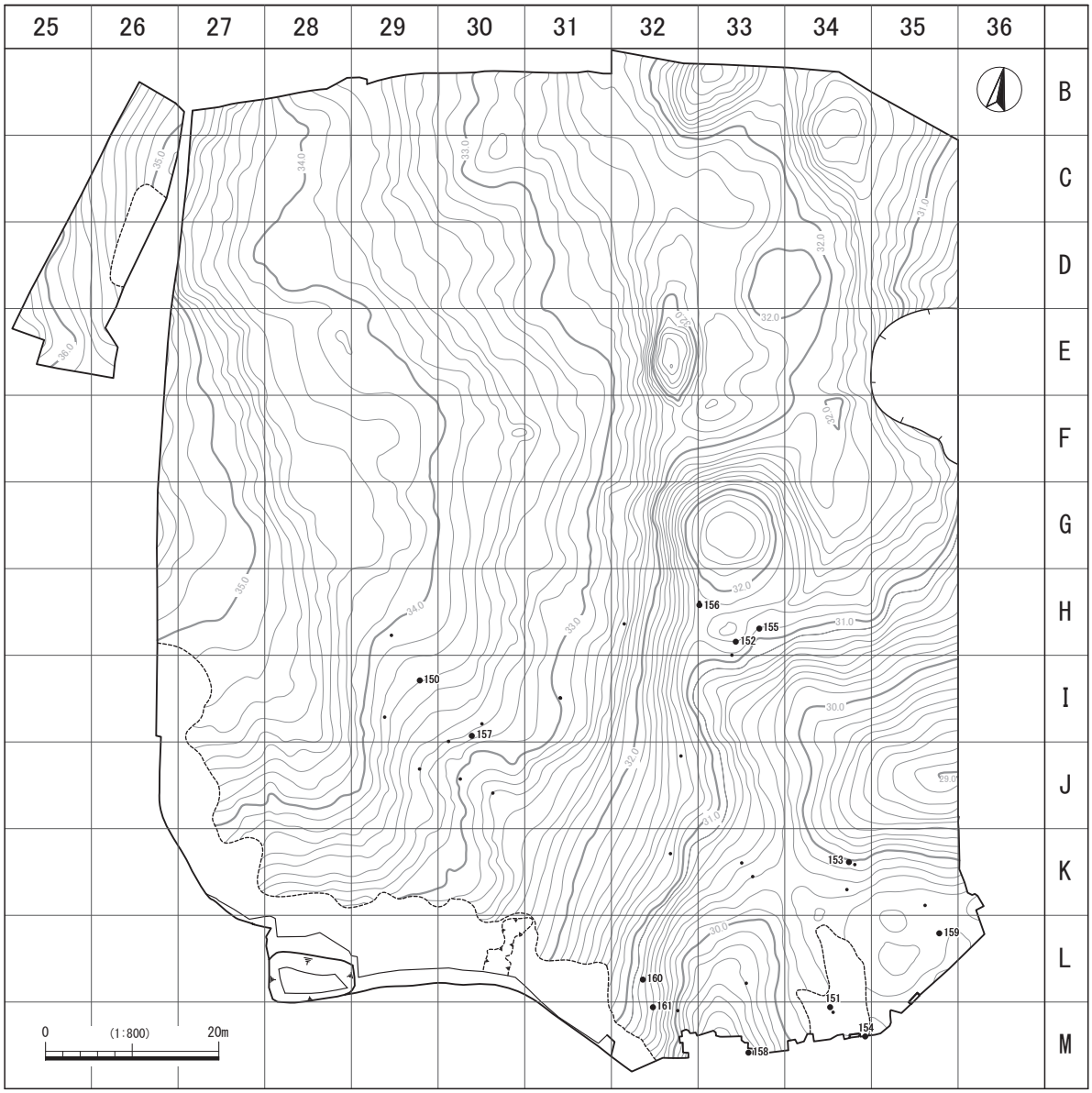
160・161は胴部片である。ともに斜位の短沈線文を組み合わせた羽状文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

８類土器(第165・166図　162～169)

８類土器は回転施文具により押型文を施す土器である。

162～165は口縁部片である。

162・163の口唇部は丸みを帯び，外傾し，一見するとキザミを施しているようにも見えるが，口縁部に施されている押型文と同じ施文原体である回転施文具を用いて文様が施されている。口縁部は回転施文具を横位方向に転がすことにより，山形押型文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。



Ⅷ層コンタ図

第163図　７類土器分布図

164は平坦に整形され，外傾する口唇部にキザミが施されている。口縁部には回転施文具により山形押型文が施されている。器面調整は外面はナデ調整，内面は口縁部上端2.4cm幅はナデ調整が行われているが，その下位はケズリが行われている。

165は丸みを帯びた口唇部にキザミが施されている。文様・器面調整は164と同様であり，内面は口縁部上端はナデ調整，その下位はケズリが行われている。そのため，ケズリが行われている部分は，口縁部上端よりも２㎜程度器壁が薄くなっている。

166～169は胴部片である。166～168を見ると，口縁部付近とは違い回転施文具を縦方向や斜位方向に転がし文様を施している。166は器壁が薄く９類土器に近い特徴を持つ。

169は下部に無文帯が確認でき，また下部の器壁が厚くなっているため底部付近の資料であると考えられる。回転施文具により円形押型文が施されている。

９類土器（第165・167図　170～172）

９類土器は８類土器と同じく回転施文具により押型文が施される土器であるが，８類土器と比して，器壁が薄く，口縁部が大きく外反し，胴部にくびれを持つ土器である。

170・171は口縁部片である。口唇部はともに丸みを帯びるが，170はやや平坦な部分も見られる。器壁は薄く５㎜程度の厚みしか持たない。外面には縦位方向の山形押型文が施される。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には雲母が多く含まれている。

172は胴部片である。くびれ部を持つ。外面には縦位方向の山形押型文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

10類土器（第165・168図　173）

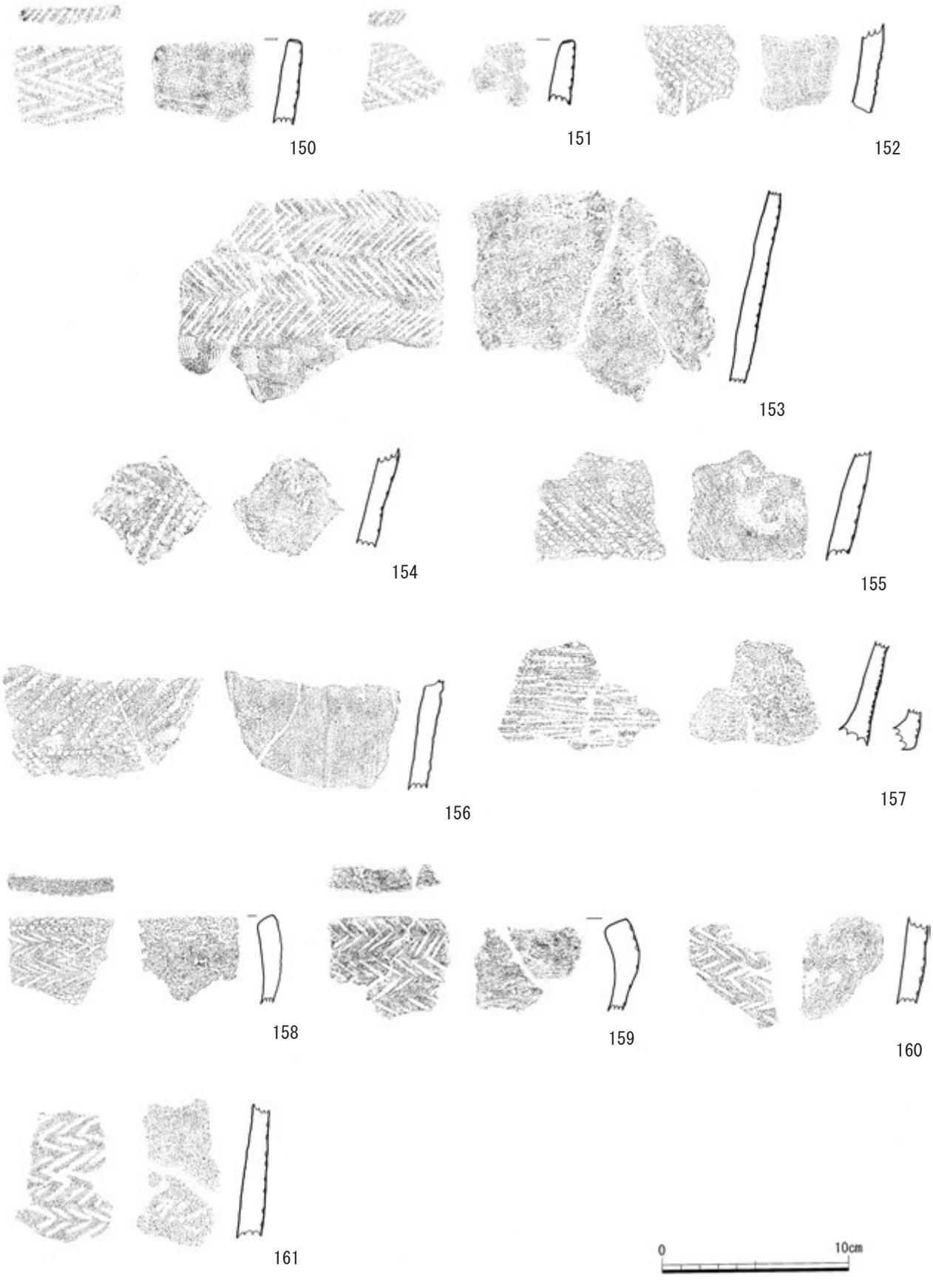
173は回転施文具により撚糸文を施す土器である。口縁部から胴部が残存するほぼ完形品であるが，底部のみが欠けている。器形は口縁部が外反し頸部ですぼまり，胴部上位がやや膨らんで胴部下位ですぼまる器形を呈す。口縁径25cm，底部は欠損しているが，残存部分の器高21.5cm，器壁の厚さは口縁部から底部までほぼ均等で約10㎜を測る。文様は口縁部上端から胴部にかけて，３～４条の撚糸文を縦位の連弧状に施す。文様は部分的に８の字状になっている部分も見られる。また連弧状や８の

第26表　７ａ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第164図	150	I29	Ⅶa	7a類土器	貝殻刺突文（羽状）	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	
	151	M34	Ⅶa		貝殻刺突文（羽状）	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	152	H33	Ⅶa		貝殻刺突文（斜位・横位）	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい褐色	良	
	153	K34	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	灰褐色	良	
	154	M34	Ⅶa		貝殻刺突文（羽状）	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	155	H33	Ⅶa		貝殻刺突文（斜位・横位）	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	褐色	良	
	156	H33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	157	I30	Ⅵ		貝殻刺突文（横位）	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	黒褐色	良	

第27表　７ｂ類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第164図	158	M33	Ⅶa	7b類土器	刺突文 短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	159	L35	Ⅶa		短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	△	○		にぶい褐色	黒褐色	良	
	160	L32	Ⅶa		短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	161	L32	Ⅵ		短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎	○		橙色	にぶい褐色	良	



第164図　７類土器

字文様の中心を通る直線的な太い撚糸文様を確認できる。胴部が最も膨らむ部分には，縦位の連弧状の撚糸文に重ねて，横位または斜位の撚糸文が連弧状に施されている。内面は無文である。器面調整は内外面ともナデ調整が行われている。焼成は堅く緻密である。色調は内外面ともに橙色で，口縁部から胴部上位外面の広い範囲に黒斑が見られる。胎土には１㎜以下～2㎜程の雲母が多く含まれている。

11類土器（第169・170図　174～179）

11類土器は２本の並行する沈線間に撚糸文を施す土器である。全体的に器壁が薄く，文様は精緻であり，内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

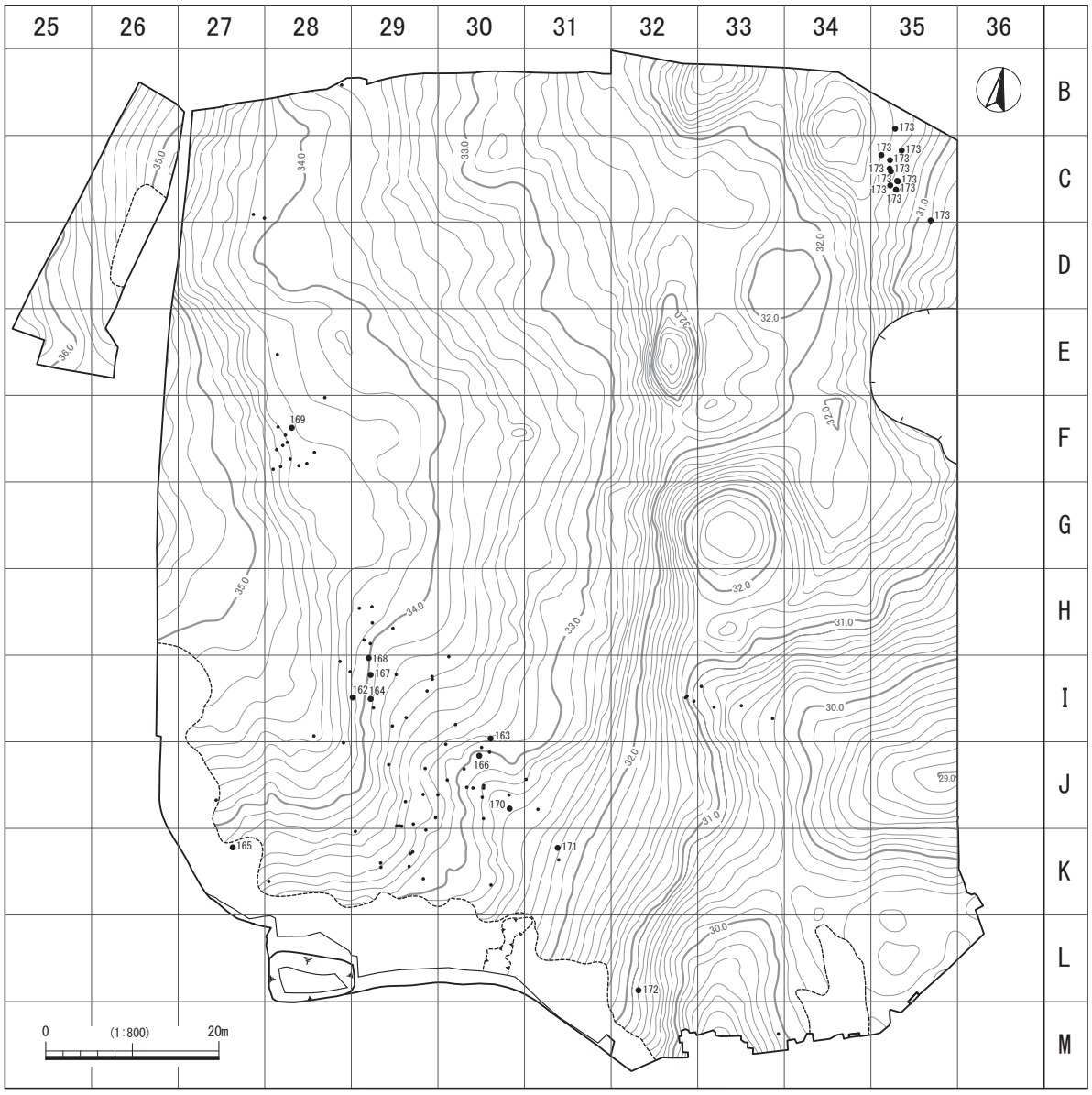
174は口縁部片である。口唇部は外傾し刺突文が施されている。器面には沈線文で文様区画を行った中に条痕文（一部，撚糸文）が施されている。一部の文様が区画の外に確認できるため，条痕文を施した後に区画を施したと考えられる。

175は頸部片である。沈線文と２種類の刺突文が施されている。内外面ともに非常に丁寧なナデ調整が行われている。

176～178は胴部片である。176は横位・斜位の貝殻条痕文，刺突文，縦位の撚糸文が施されている。施文の順番は撚糸文をまず施し，その後に他の文様を施している。

177は撚糸文が施されている。文様の区画はない。

178は沈線文の区画の中に撚糸文が施されている。こ



Ⅷ層コンタ図

第165図　８～10類土器分布図

ちらも176と同様に撚糸文を施した後に，沈線文を施していると考えられるが，一部，区画内に無文部分も確認できる。外面は丁寧なナデ調整が行われている。内面はケズリが行われ，調整は粗い。胎土に雲母が含まれている。

179は底部片である。178と同一個体の可能性が高い。底部付近ほど文様区画内の無文部分が多くなる。底部は平底で，部分的にしか残存していないが，胴部よりも器壁が薄い。器面調整は外面が丁寧なナデ調整，内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

12類土器（第171～180図　180～233）

12類土器は縄文時代早期の遺物の中で最も多く出土した土器である。基本的には施文原体として貝殻を用いて文様を施している。

180～197は主として貝殻条痕で文様が施される土器である。180は底部以外が確認できる資料である。器形は胴部が膨らんで立ち上がり，頸部でくびれ口縁部がやや外反する。口唇部には貝殻によるキザミを施し，口縁部から頸部にかけては横位の貝殻条痕文を施す。頸部には横位の貝殻刺突文を１列施し，それを文様区画とし，胴部には斜位の貝殻条痕を菱形状に施している。器面調整は内外面ともにケズリ後ナデ調整である。

181は胴部下半までが確認できる資料である。器形は口縁部が膨らみ，頸部以下がすぼまる形状を呈している。口唇部には刺突文，口縁部上端には横位貝殻条痕，その下位には貝殻刺突文が施される。その下位から頸部にかけては楕円状や斜位の貝殻条痕文が施される。頸部から胴部半ほどまでには４列の貝殻刺突文が間隔を空けて施されており，その下位には貝殻条痕文が弧状に施される。全体的に貝殻条痕文の施文は粗い。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

第28表　８類土器観察表

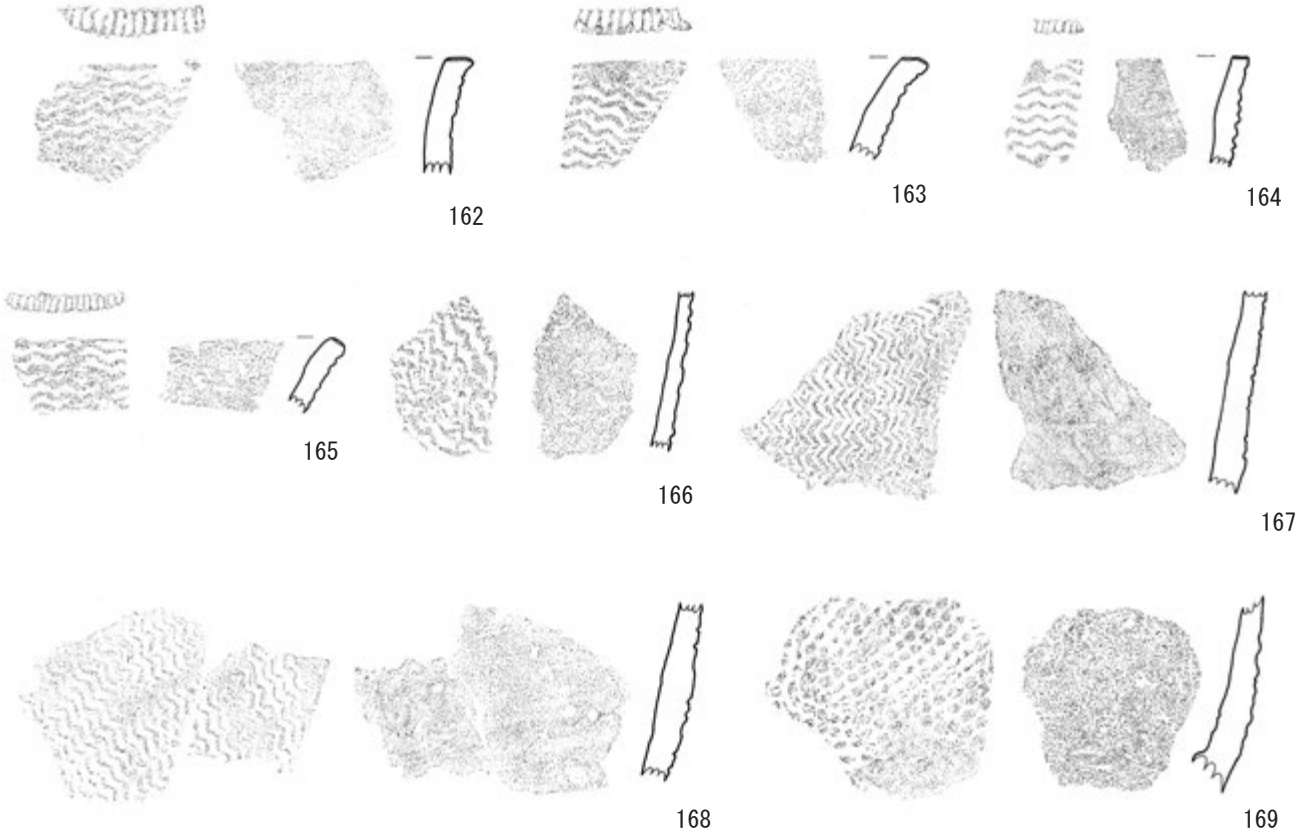
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第166図	162	I29	Ⅶb	8類土器	山形押型文	ナデ	ナデ				○	◎		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
	163	K27	Ⅳa		山形押型文	ナデ	ナデ				○	◎		にぶい黄褐	黒褐色	良	
	164	I29	Ⅵ		山形押型文	ナデ	ナデ ケズリ			△	○	◎		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
	165	K27	Ⅳa		山形押型文	ナデ	ナデ ケズリ	○	○		○	◎		にぶい橙色	にぶい黄褐	良	
	166	J30	Ⅶa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○		○	○		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	大きめの石英が混入
	167	I29	Ⅶa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○		○	○		橙色	黒褐色	良	大きめの石英が混入
	168	H29	Ⅶa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○		○	○		にぶい橙色	灰褐色	良	大きめの石英が混入
	169	F28	Ⅶa		円形押型文	ナデ	ナデ	◎	○		○	○		橙色	灰褐色	良	大きめの石英が多く混入

第29表　９類土器観察表

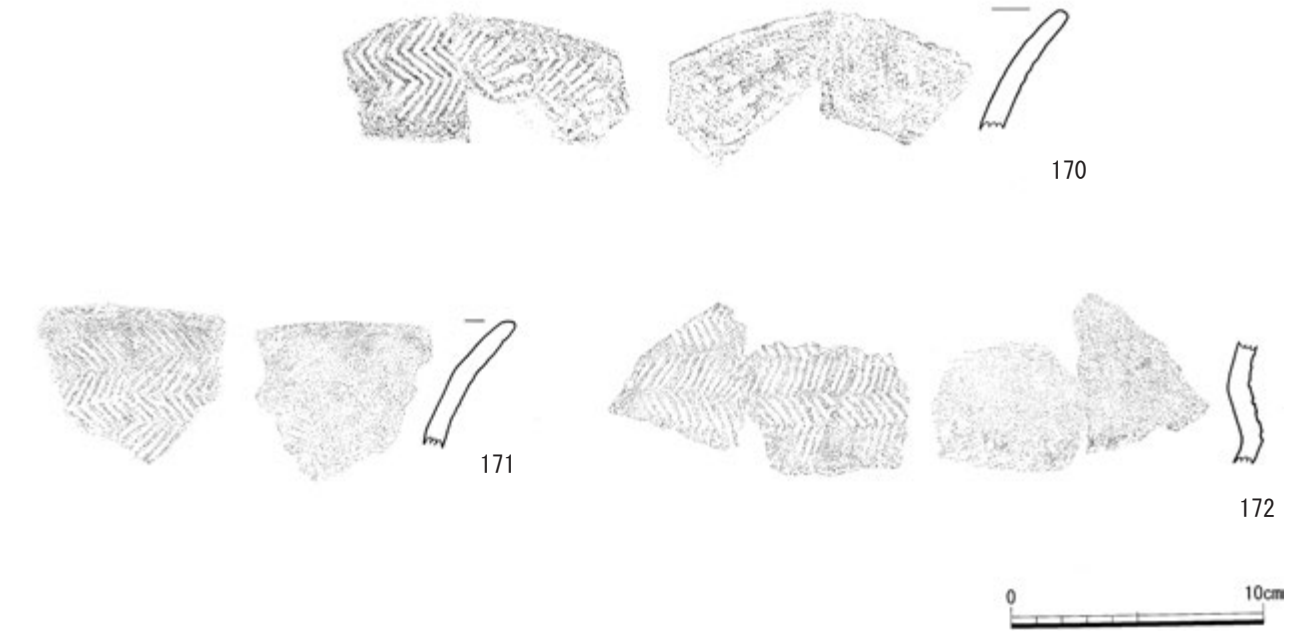
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第167図	170	J30	Ⅶa	9類土器	山形押型文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい黄褐	良	
	171	K31	Ⅶa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	橙色	良	
	172	L32	Ⅶa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	

第30表　10類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
168図	173	C35	Ⅵ	10類	変形撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	褐色	良	



第166図　８類土器



第167図　９類土器

182は口縁部から胴部の破片である。口縁部が外反する器形を呈す。口唇部は残りが悪いが，部分的に刺突文が確認できる。口縁部には斜位の貝殻条痕文が施され，沈線文による区画が行われている。頸部には２列の貝殻刺突文が施され，胴部には斜位の貝殻条痕文が施される。胴部文様に関しては区画の有無ははっきりしない。器面調整は外面は貝殻条痕後ナデ調整，内面は貝殻条痕もしくはケズリ後ナデ調整が行われている。

183は口唇部に刺突文，口縁部に横位の貝殻条痕文が施される。

184～186は口唇部に刺突文，口縁部に横位・斜位の貝殻条痕文が施される。185の文様の一部は曲線を描く。

187は口唇部に間隔を空けたキザミを施す。口縁部上端には先端の細い工具で沈線文が施され，その下位には貝殻条痕文が施されている。

188は口唇端部に貝殻刺突文が施されている。口縁部には貝殻刺突文，貝殻押引文，縦位貝殻条痕文の順で文様が施されている。

189・190は口縁部上端に貝殻刺突文が１列，その下位には斜位の貝殻条痕文が施されている。

191～197は貝殻条痕文が施されるが，施文が粗い一群であり，施文のはっきりしないものも見られる。

198～205は主として沈線文で文様が施される土器である。198は外反する口縁部片である。口唇部にキザミを施し，口縁部には沈線文による区画の中に斜位沈線文を施している。器面調整は内外面ともに貝殻条痕後ナデ調整が行われているが，外面には条痕がはっきりと確認できる。

199は口縁部上端に刺突文，その下位には斜位沈線文が交差するように施されている。

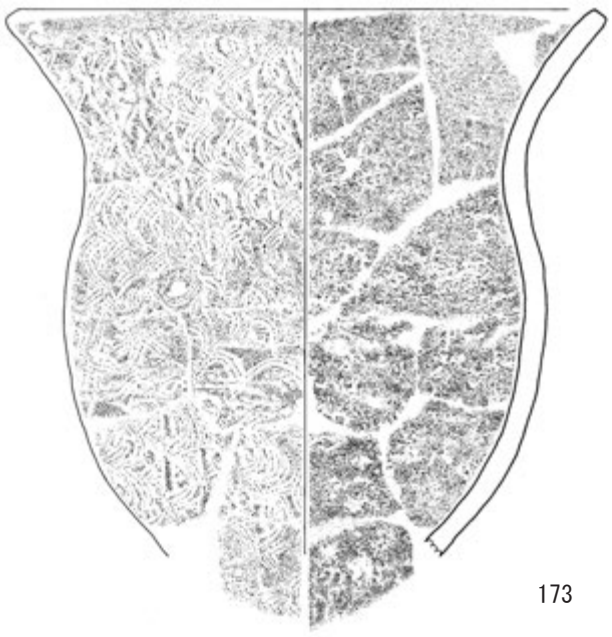
200は口縁部上端に横位沈線文，その下位に斜位沈線文を交差するように施している。文様は粗い。

205は胴部片である。横位貝殻条痕文の下位に沈線文が格子状に施されている。胎土には雲母が見られる。

206～216は主として連続した貝殻刺突文により文様が施される土器である。206は口縁部から胴部下半までの資料である。口縁部は外反し，頸部がわずかにくびれ，胴部がわずかに張る器形を呈す。口縁部から頸部にかけては４列の貝殻刺突文が横位に連続して施されている。胴部には沈線文による区画の中に，斜位の貝殻条痕文が「く」の字状に施されている。器面調整は内外面ともに貝殻条痕後ナデ調整が行われているが，全体的に器面調整は粗く，特に内面は下位ほど貝殻条痕が残る。

207は口縁部から胴部半ほどまでの資料である。頸部に稜を持ち，口縁部が外傾する器形を呈す。外傾する口唇部には貝殻刺突文が施され，口縁部から頸部に２列の貝殻刺突文が施されている。胴部には横位・斜位の貝殻条痕文が施される。器面調整は外面はナデ調整，内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。

208は口縁部から胴部半ほどまでの資料である。くび



第168図　10類土器

れを持たず，ほぼ直行する口縁部は胴部上半からすぼまる器形をしている。口唇端部に貝殻刺突文を施し，口縁部には４列の貝殻刺突文を施す。胴部には横位の貝殻条痕文が７条確認でき，その下位には縦位や斜位方向の貝殻条痕文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

209～216は口縁部片である。209・210は口縁部が「く」の字に屈曲する。

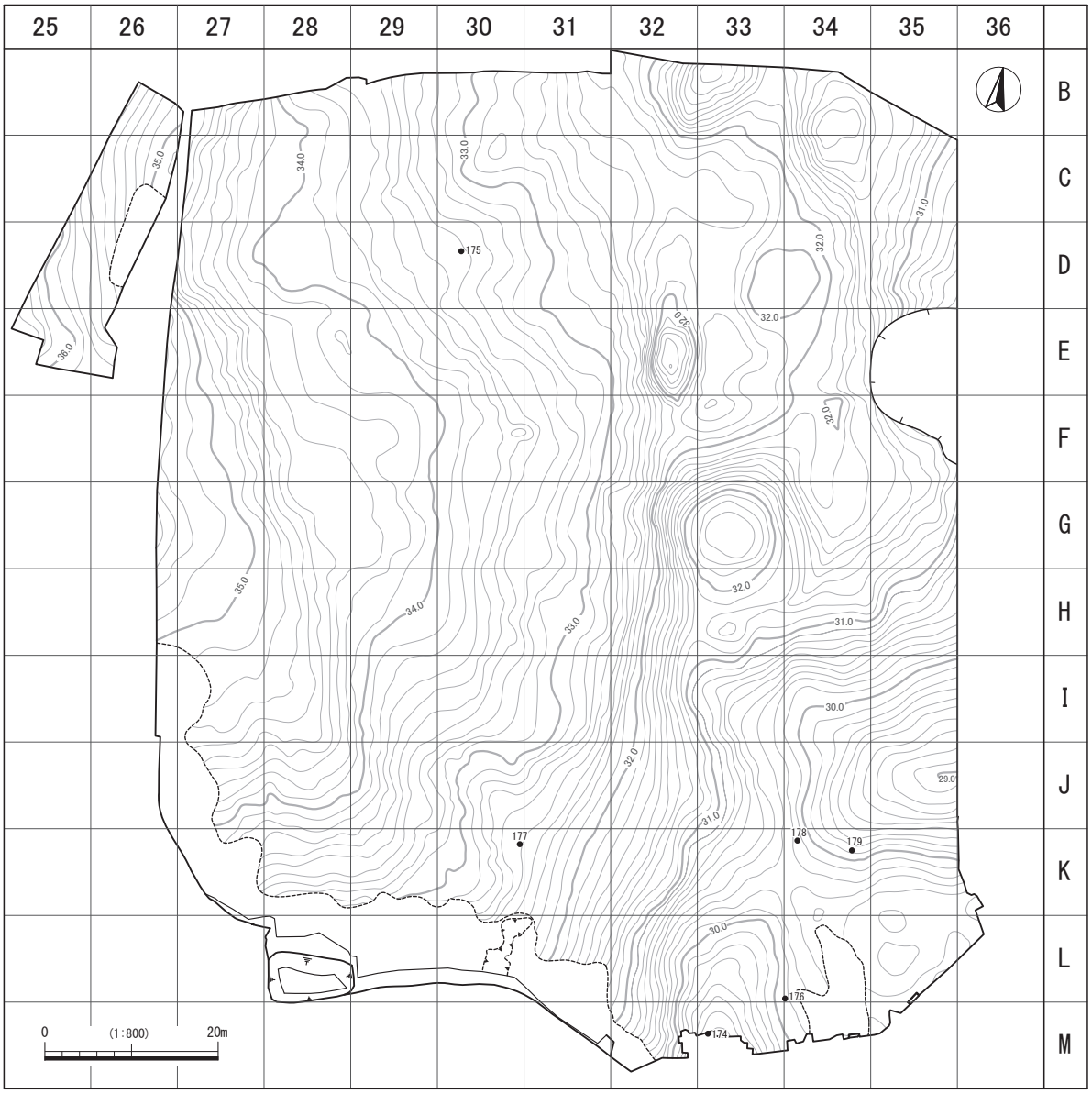
211は波状口縁を呈し，連続した貝殻刺突文が横位や縦位に施される。

212・214・215は連続した貝殻刺突文が斜位・横位に施されているが，一部は押引文のように施されている。

217～220は無文部分が多い土器である。部分的に貝殻刺突文・貝殻条痕文などが施されている。

221～226は貝殻押引文が施される土器である。

221は口縁部から底部付近までが残存する資料である。口径約25.5㎝，残存している器高約30㎝を呈し，胴部がわずかにくびれる器形を呈している。波状口縁であり，残存している波頂部は２か所であるが，本来は４か所に波頂部を持つと考えられる。口唇は丸みを帯び，明確な文様は確認できない。器面に施される文様は２つの文様帯から成り，文様帯は２列の貝殻押引文により区画されている。口縁部上端から胴部のくびれ部までの第１文様帯には，斜位・縦位の貝殻押引文が施され，それらに区画された空間に円形または半円形の貝殻押引文が施される。胴部くびれ部から胴部下半までの第２文様帯には，斜位の貝殻条痕文が「X」字状に施されている。横位の貝殻押引文で区画された第２文様帯の下位から底部にか



Ⅷ層コンタ図

第169図　11類土器分布図

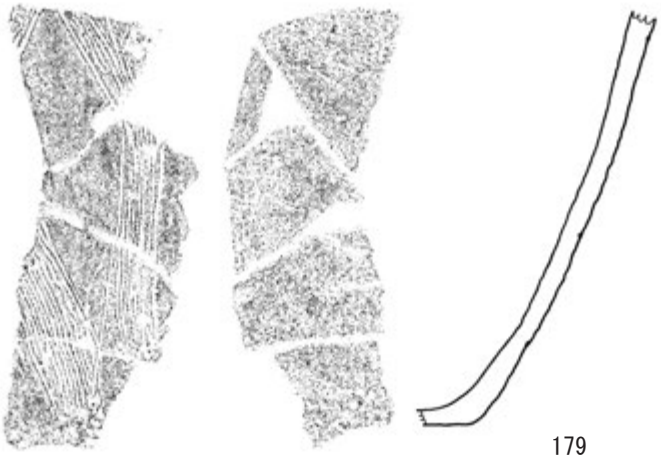














第170図　11類土器

けては無文帯と考えられる。器面調整は外面はナデ調整，内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。

222は口縁部から胴部半ほどまでが残存する資料である。器形は頸部でわずかに屈曲し，口縁部もわずかに外反する器形を呈している。波状口縁を呈し，４か所に波頂部を持つと考えられる。口唇部は丸みを帯び，文様は確認できない。口縁部上端に連続した貝殻押引文を１列，その下位には斜位・縦位の貝殻条痕文や曲線文が施されている。貝殻条痕文の下位には胴部半ほどまで，４列の連続した貝殻押引文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には５㎜程の礫が含まれている。

223は外傾する口縁部片である。口縁部上端に貝殻刺突文を１列巡らし，下位には貝殻条痕文と貝殻押引文が交互に施されている。器面調整は外面はナデ調整，内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

224・225は波状口縁を呈す口縁部片である。

227～231は胴部片である。

232は底部付近の胴部片，233は底部片である。ともに無文である。

232は下部に底部との接合面が確認できる資料であり，このことから底部とは側面で接合するのではなく，底部に乗せる形で接合していることが分かる。器面調整は外面はナデ調整，内面は胴部でケズリが行われ，底部付近ではケズリ後ナデ調整が行われている。

233は上げ底状の底部を持つ資料である。底部の縁側約２cm程が平坦に整形され，その内側は中心部で約１cm程の上げ底状になっている。文様は斜位の貝殻条痕文が確認できる。器面調整は外面がケズリ後ナデ調整で，全体的に調整が粗いが，底部付近はやや丁寧な横方向のナデ調整が行われている。内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。底部の器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

13類土器（第181・183図　234～240）

13類土器は土器の器面に，刺突を施した短い突帯を張り付ける土器である。基本的に器壁が厚いのが特徴である。

234は口縁部片である。口唇部は内傾し無文である。やや外傾する口縁部に４本の突帯が横位に張り付けられている。突帯には貝殻を用いて施されたと考えられる刺突文が施されている。器面調整は外面は貝殻条痕後ナデ調整が行われ，部分的に貝殻条痕が残る。内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

235～240は胴部片である。236は縦位の突帯が張り付けられている。突帯には貝殻刺突文が確認できる。

237・238には部分的に貝殻押引文が施されている。

240は横位の短い突帯が張り付けられており，刺突文が施されている。器面には幅の短い横位貝殻条痕文が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。

14類土器（第181・184図　241～244）

14類土器はナデ調整が行われた器面に，ミミズばれ状の突帯を施す土器である。約40点程の破片が集中して出土しており，文様・器壁の厚さ・調整・胎土などの共通点からすべて同一個体の破片資料であると考えられる。器壁は５～７㎜程度と薄い。

241は口縁部片である。丸みを帯びる口唇端部には刺突文が施されている。口縁部上端には５条のミミズばれ状の突帯が巡り，下位にはミミズばれ突帯により曲線文などが施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

242～244は胴部片である。どれもミミズばれ状の突帯により曲線文が施されている。

15類土器（第181・185図　245～247）

15類土器は器面全体に貝殻条痕文で文様が施される土器である。出土量は少ない。

第31表　11類土器観察表

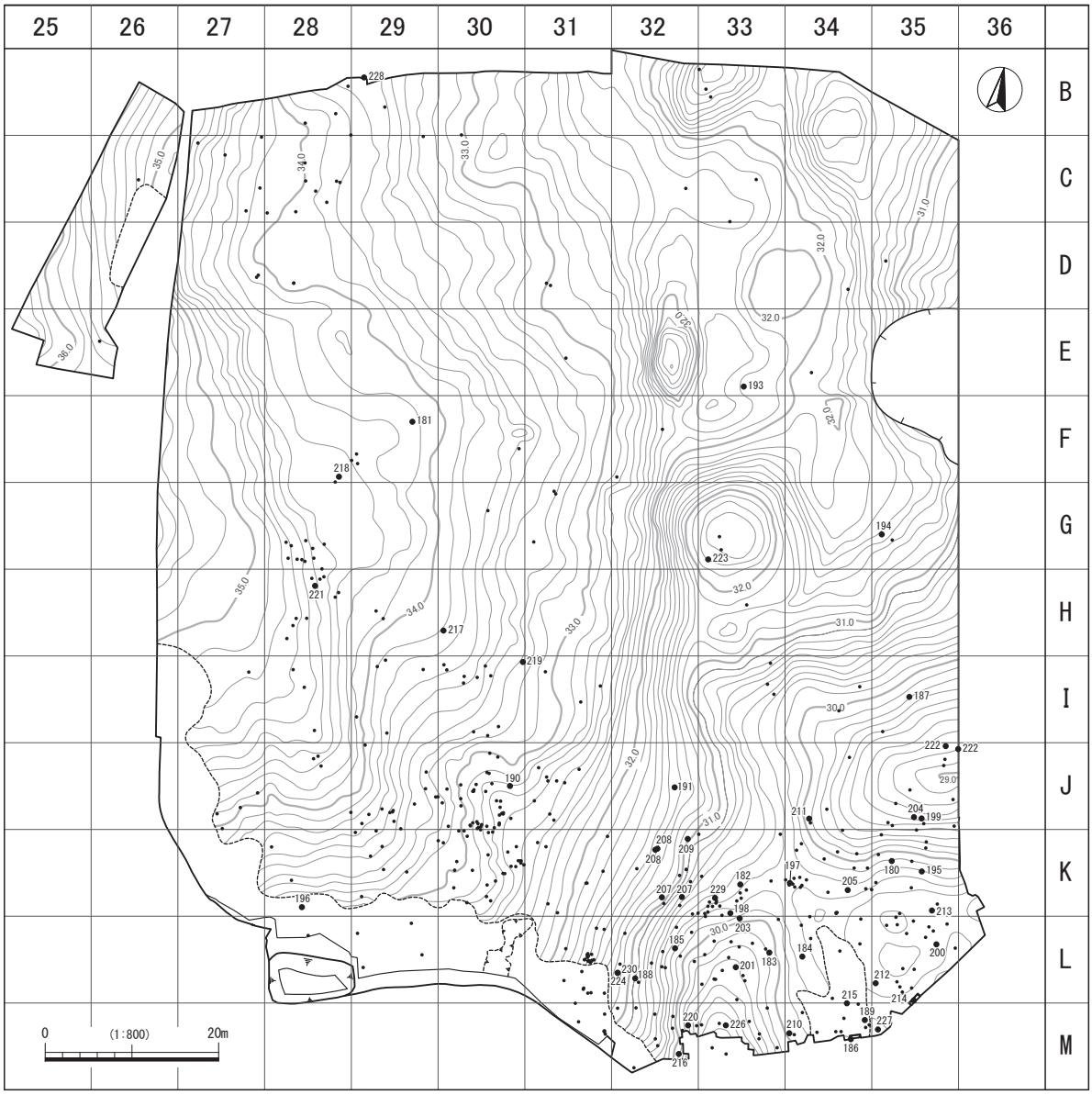
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第170図	174	M33	Ⅶa	11類土器	撚糸文沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	175	L33	Ⅶa		撚糸文沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	176	L34	Ⅶa		撚糸文貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	にぶい褐色	良	外面スス付着
	177	K30	Ⅵ		撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	178	K34	Ⅶa		撚糸文沈線文	ナデ	ケズリ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	褐灰色	良	
	179	K35	Ⅵ		撚糸文沈線文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	褐灰色	良	

245は口縁部片である。外傾する口縁部は，極わずかに肥厚している。口唇部は内傾し，無文である。口縁部上端に横位の貝殻条痕文が施されている。その下位には，破片資料であるためはっきりはしないが，斜位の貝殻条痕文が綾杉状に施されているようである。器面調整は外面は丁寧なナデ，内面はケズリ，一部ケズリ後ナデ調整が行われている。内面調整は口縁部上端のみ横方向のケズリが行われ，その下位は斜位方向のケズリが行われている。調整の重なり具合から，口縁部の横方向のケズリを最後に行ったのが分かる。

246・247は胴部片である。ともに縦位の貝殻条痕文の上から曲線気味の斜位貝殻条痕文を施している。器面調整は246の内面は非常に丁寧なナデ調整，247の内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。３点の資料は調整・色調や胎土が異なることから少なくとも３個体の15類土器が存在していたことが確認できる。

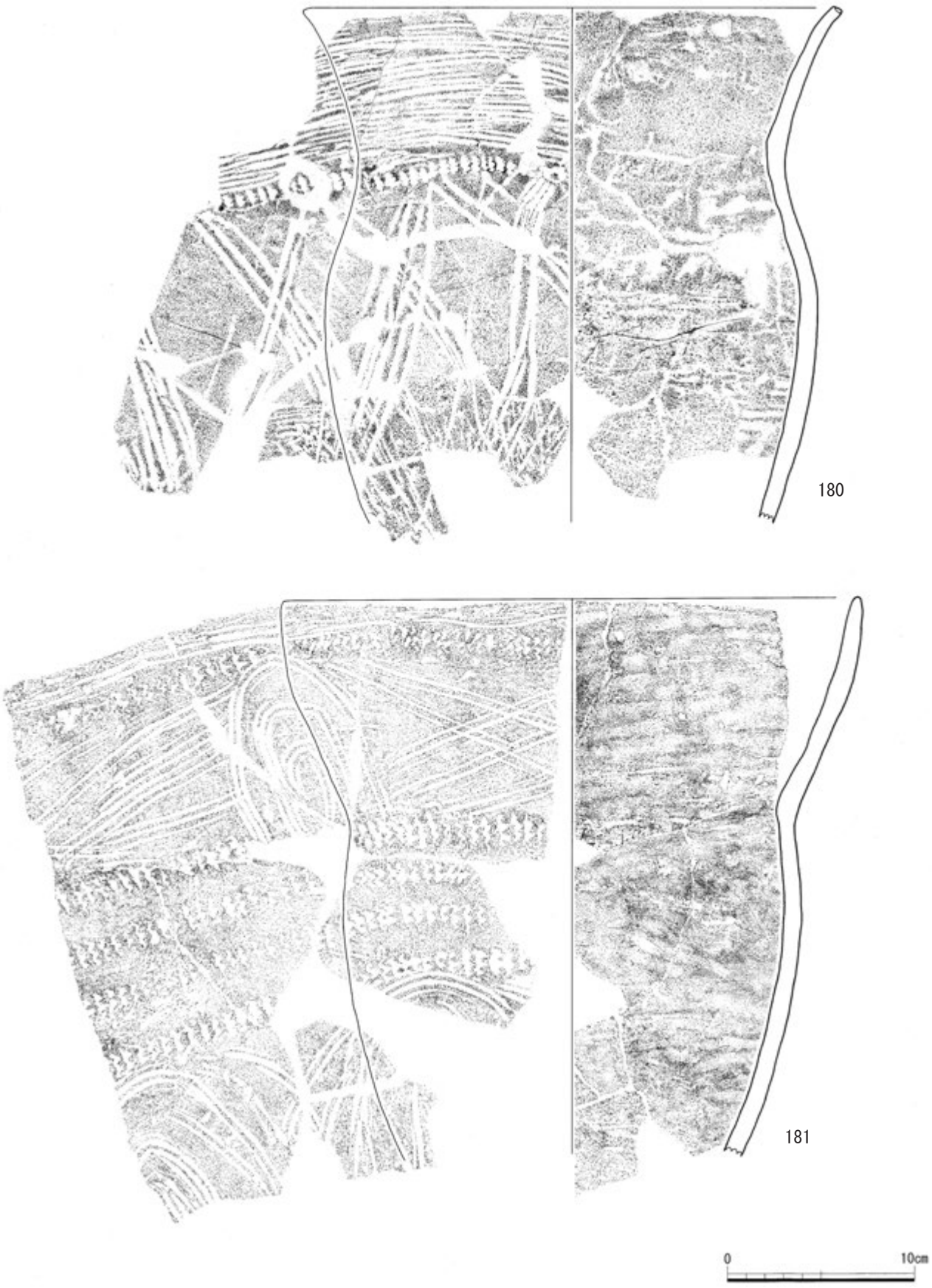
その他の土器(第181・185図　248・249)

248・249は型式不明の土器である。ともに調査区の南側L33区のⅥ層(縄文時代早期後半)から出土している。小破片であるため土器の上下ははっきりしない。半円状の突帯文が丁寧に張り付けられており，突帯には刺突文などは確認できない。突帯の断面形状は山形であり，半円形の頂部が最も高く３～４㎜，端部にいくほど低くなり，最端部では１㎜程度の高さしかない。貝殻条痕調整が行われているが，突帯の周辺は突帯を張り付けたた

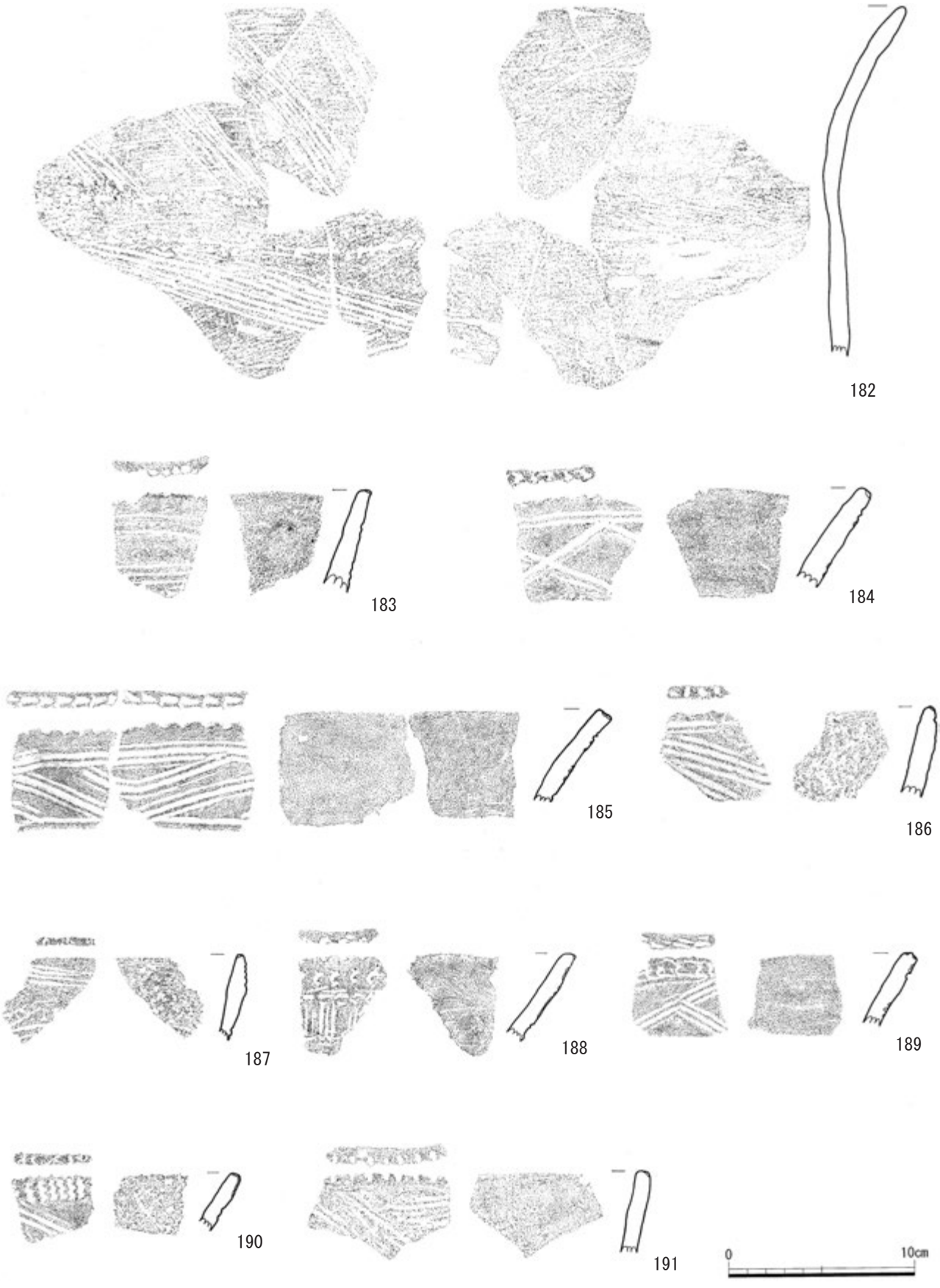


Ⅷ層コンタ図

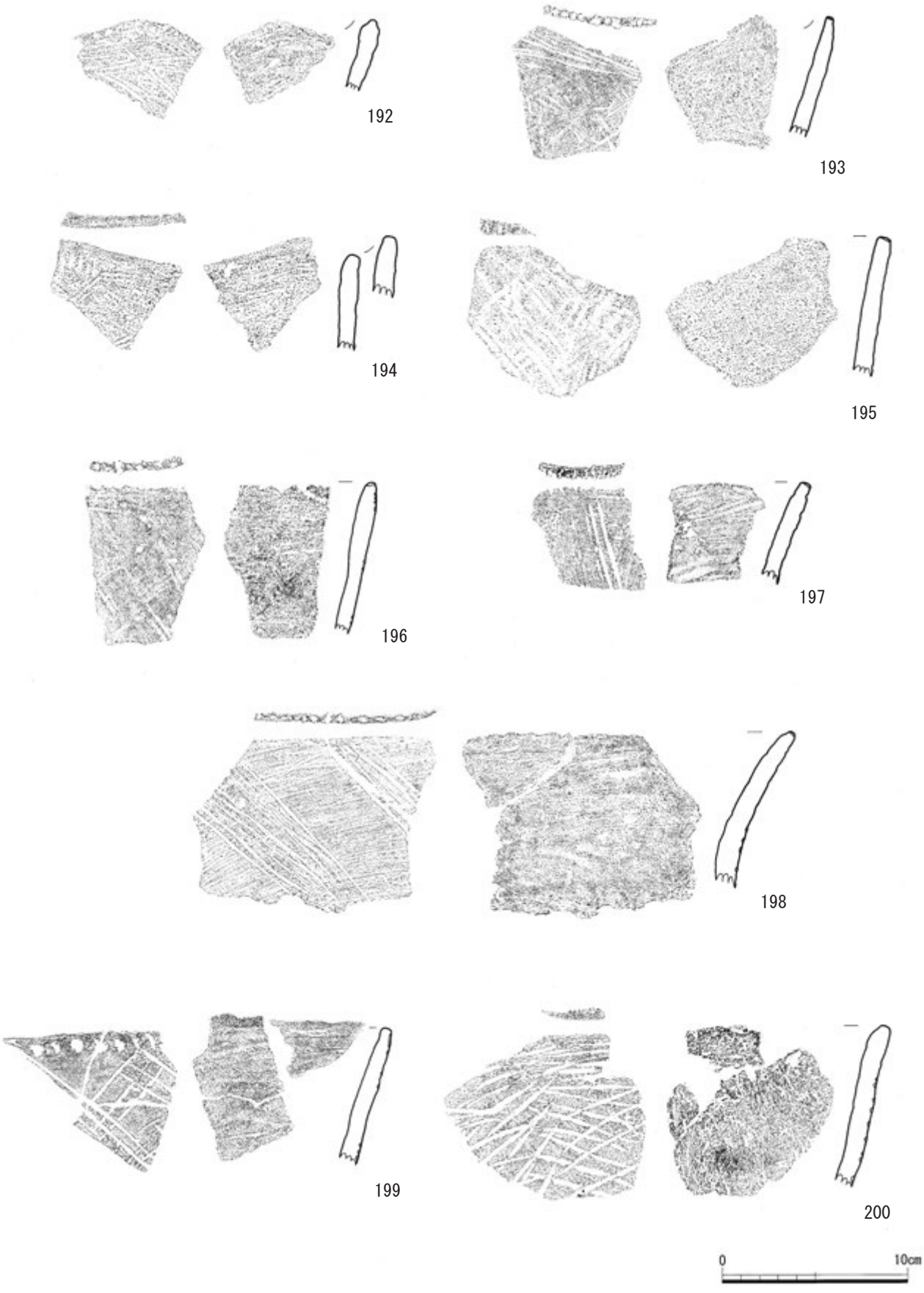
第171図　12類土器分布図



第172図　12類土器 1



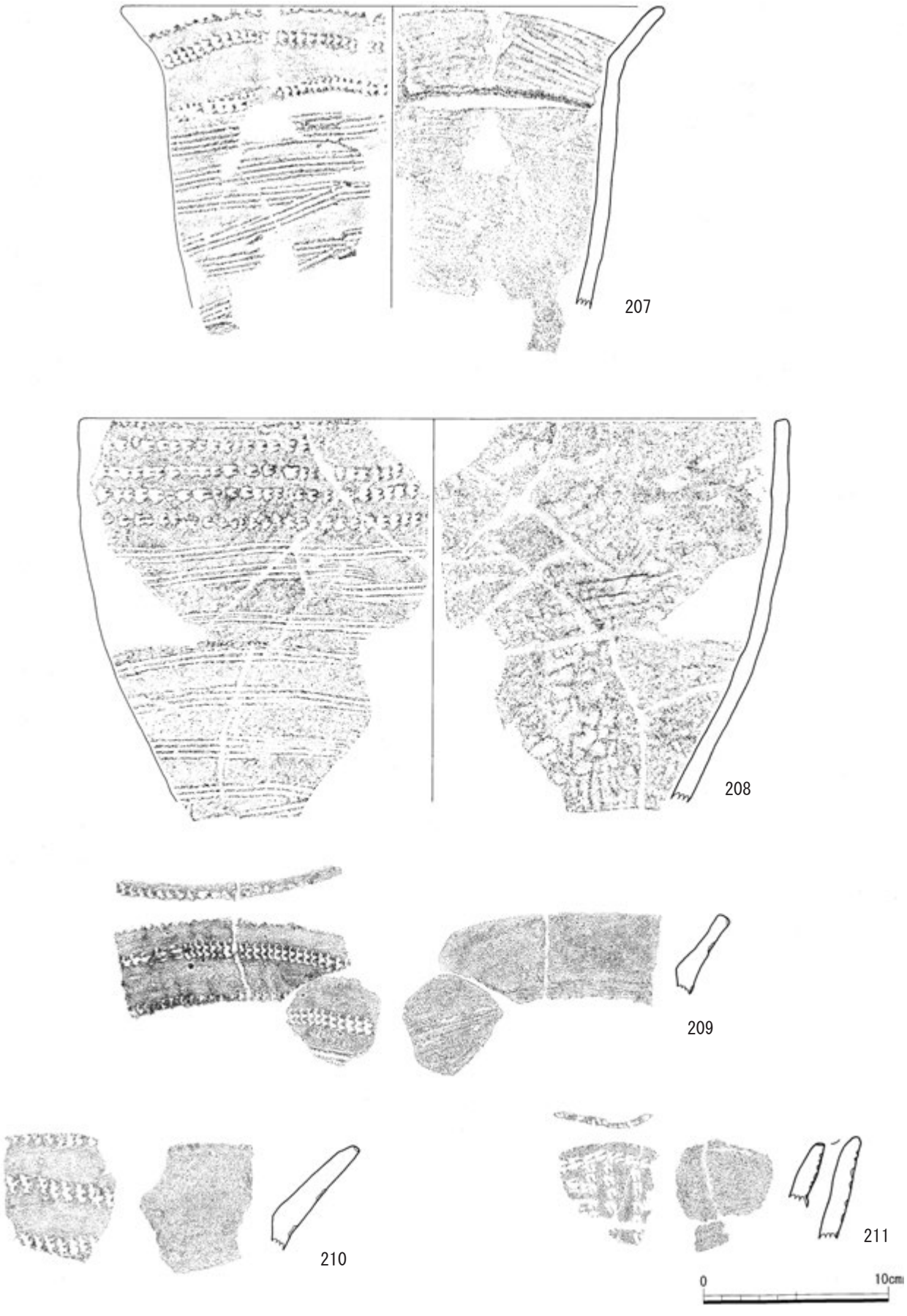
第173図　12類土器２



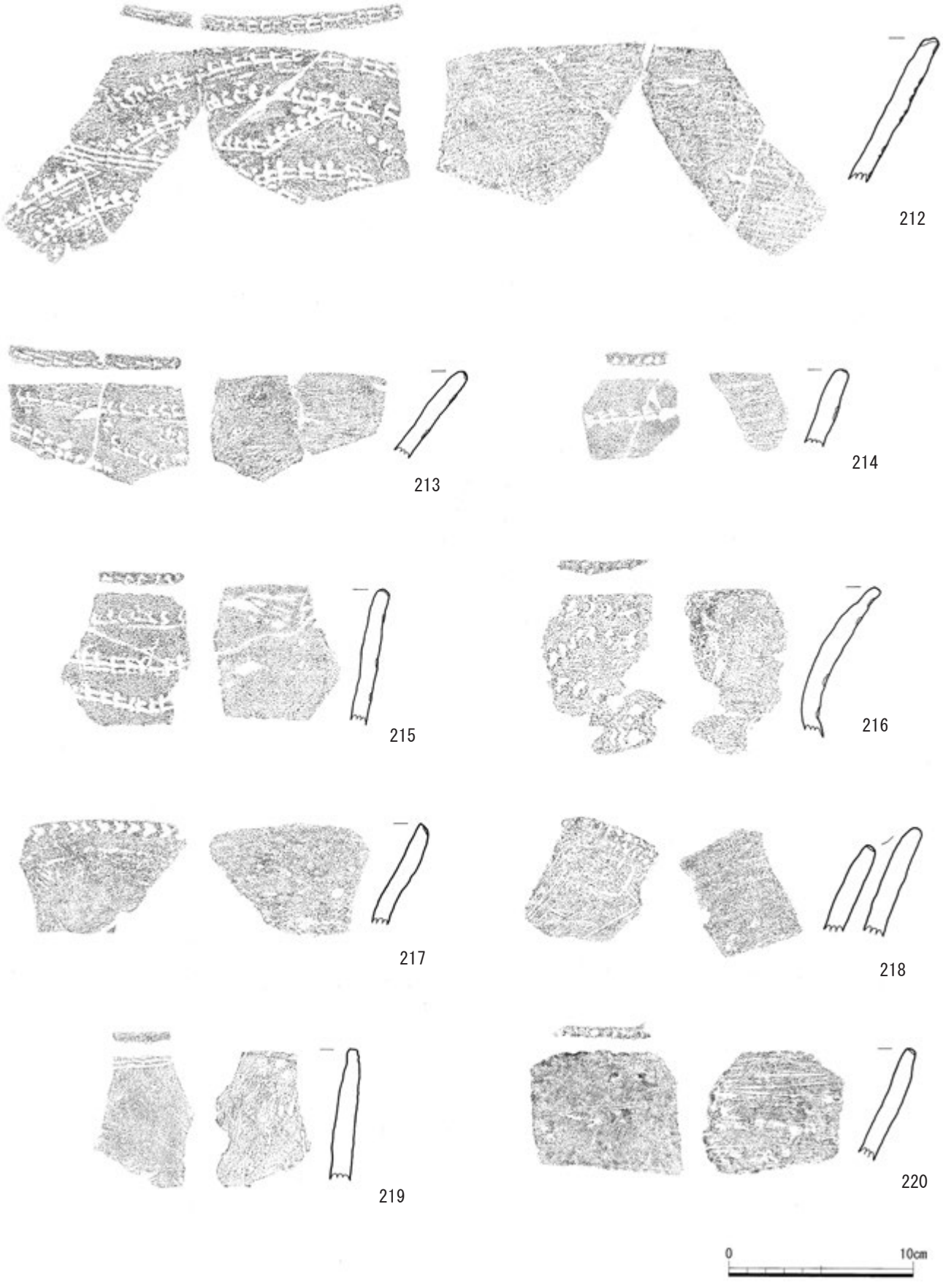
第174図　12類土器３



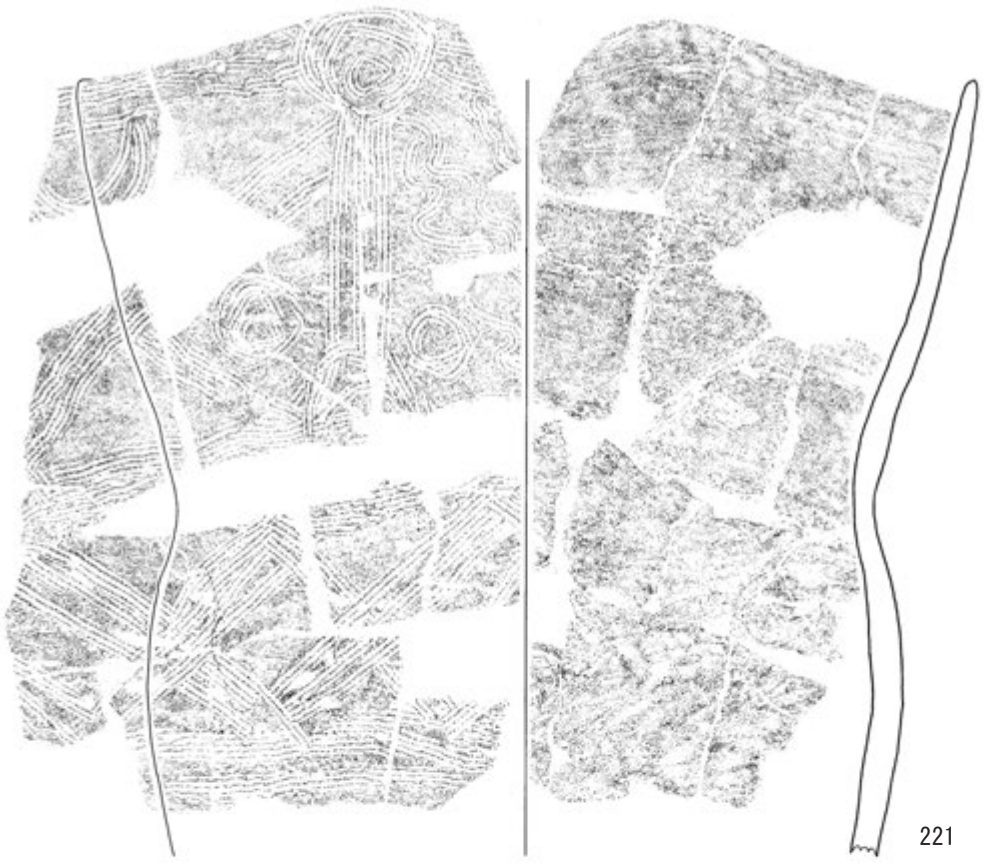
第175図　12類土器４

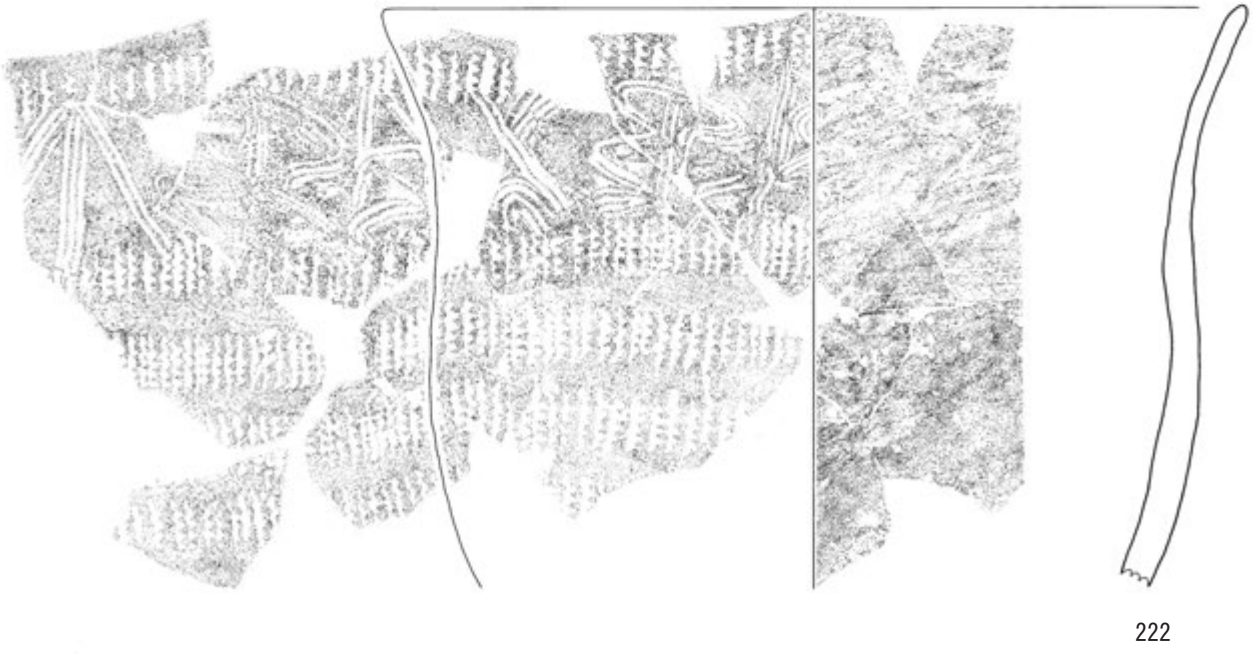


第176図　12類土器５

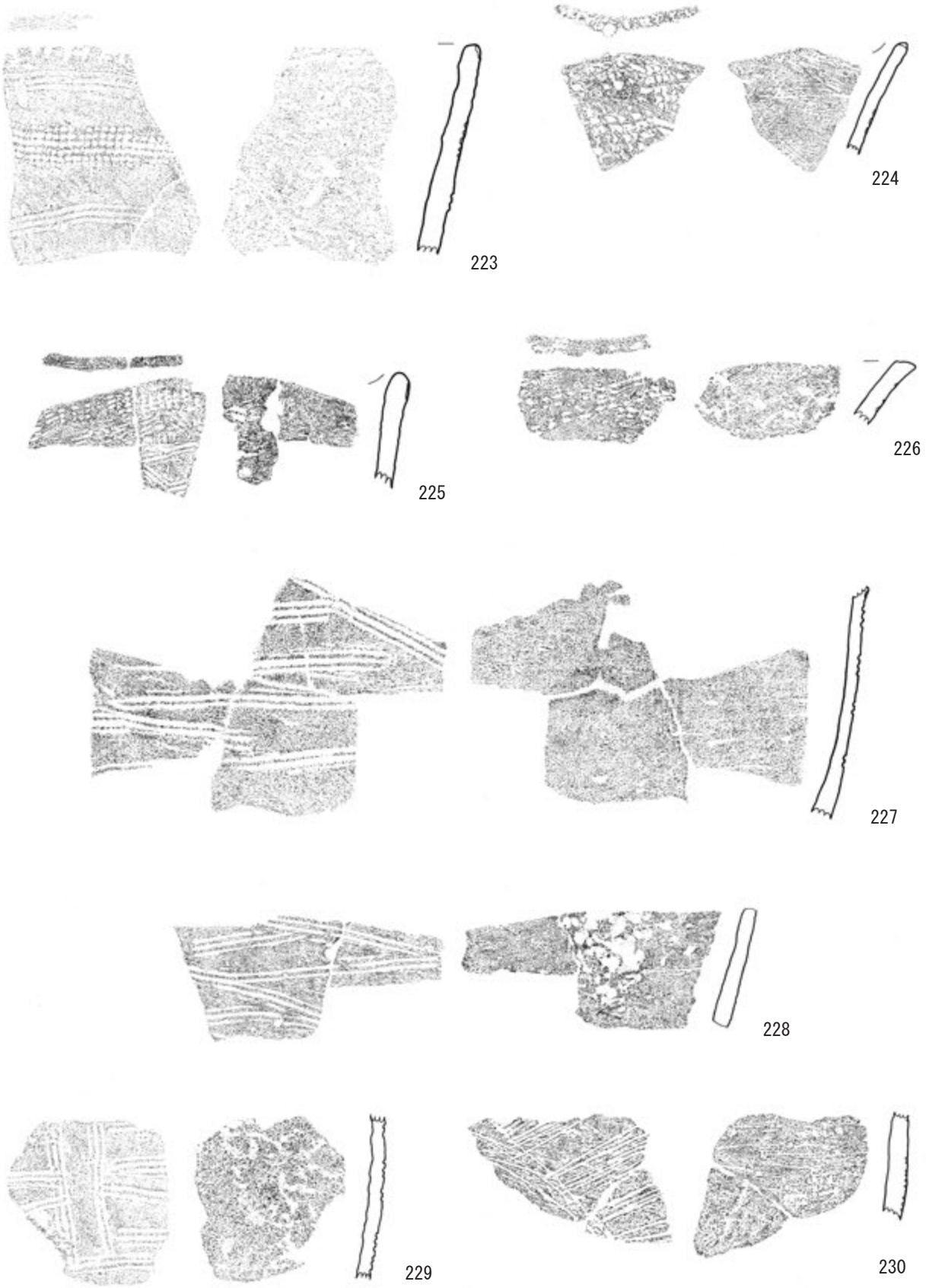


第177図　12類土器６





第178図　12類土器 7



第179図　12類土器８

0　10cm



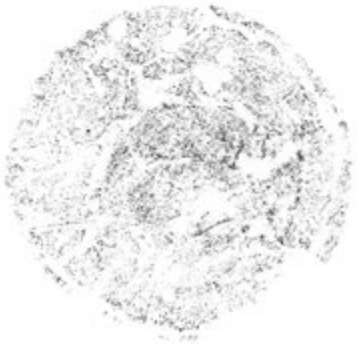
231



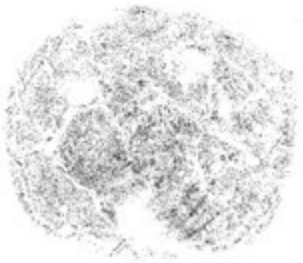
232



233



233　底部外面



233　底部内面



第180図　12類土器９

第32表　12類土器観察表１

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第172図	180	K35	Ⅵ	12類土器	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		灰褐色	にぶい黄褐	良	
	181	F29	Ⅵ		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	灰褐色	良	
第173図	182	K33	Ⅶa		貝殻条痕文 貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい橙色	良	
	183	L33	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	浅黄橙色	良	
	184	L34	Ⅴa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		黒褐色	にぶい橙色	良	
	185	L32	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい赤褐	良	
	186	M34	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	187	K35	Ⅶa		貝殻条痕文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	188	L32	Ⅵ		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐色	にぶい橙色	良	
	189	M34	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	190	J30	遺構内		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	暗赤褐色	良	古墳時代遺構内
	191	J32	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	◎	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
第174図	192	G36	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ ケズリ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	193	E33	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	橙色	良	
	194	—	—		貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	195	K35	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	白色粒子多い
	196	K28	Ⅴa		貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	197	K34	Ⅵ		貝殻条痕文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	198	K33	Ⅵ		沈線文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	
	199	J35	Ⅶa		貝殻刺突文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	灰褐色	良	
	200	L35	Ⅶa		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	黒褐色	良	
第175図	201	L33	Ⅶa		沈線文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	202	—	—		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		—	—	良	
	203	L33	Ⅵ		沈線文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	黒褐色	良	
	204	J35	Ⅵ		貝殻刺突文 沈線文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	黒褐色	良	
	205	K34	Ⅵ		沈線文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい橙色	良	
	206	K33	Ⅶa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	明赤褐色	良	
第176図	207	K32	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	208	K32	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	209	K32	Ⅵ		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	210	M34	Ⅶa		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	211	J34	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	

め，貝殻条痕がナデ消されている。内面は貝殻条痕調整が行われており，胎土には雲母を含む。特徴から２点は同一個体と考えられる。

耳栓・垂飾品（第182・186・187図　250～254）

250～253は耳栓である。どれも破損しており，完形品はない。全て調査区の南側Ｌ33～35区のⅥ層から出土している。内外面および側面は，程度は異なるがどれも屈曲する。器面調整はナデ調整が施されている。

251は直径5.2cm，厚さは２cmを測り，無文である。

252は直径5.6cmと4.5cmと内外面で異なる径をもつ。厚さは1.4cmを測り，無文である。

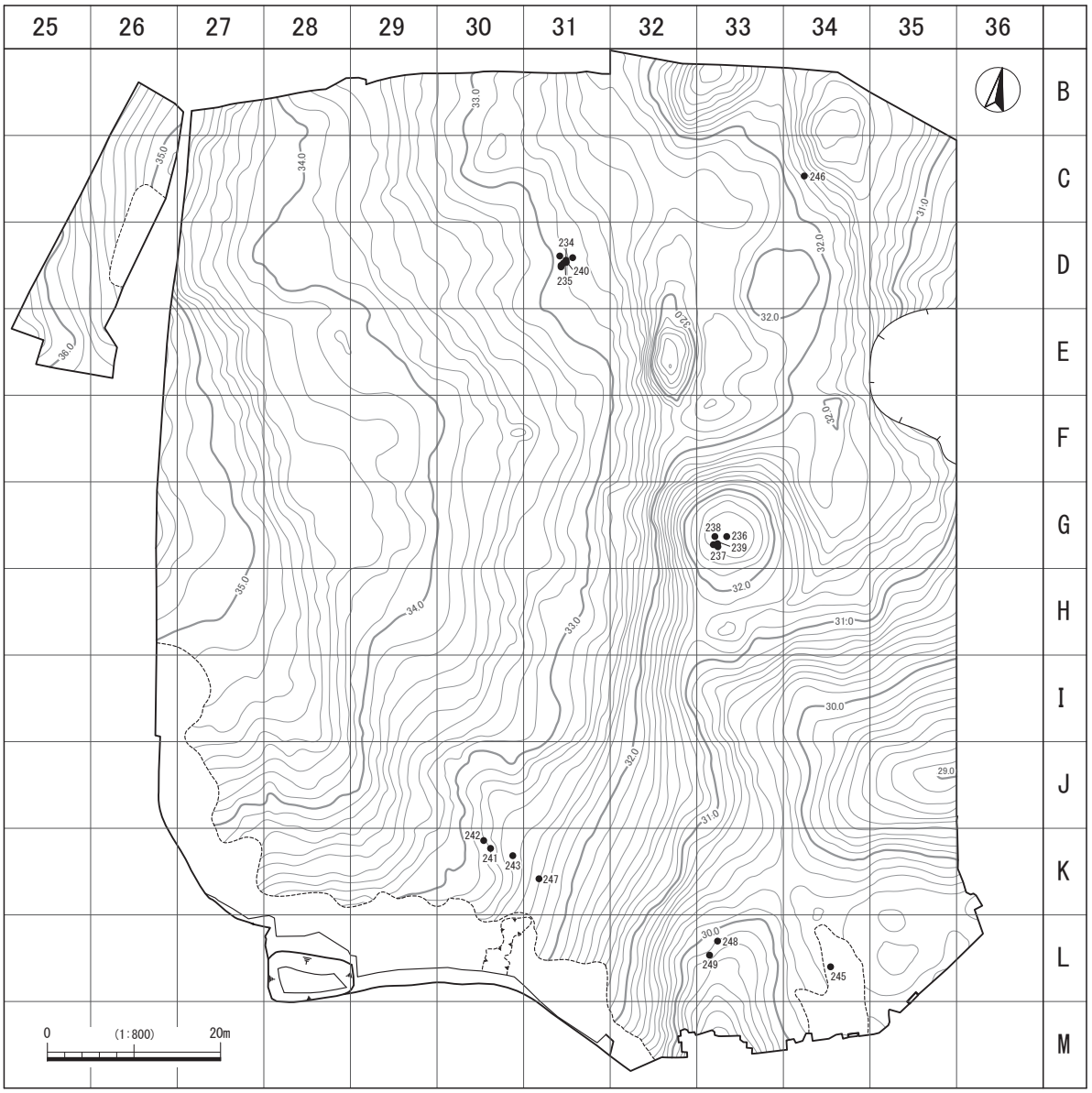
253は直径５cmと4.2cmと内外面で異なる径をもつ。厚さは２cmを測る。片方の面に円形の沈線文が施され，その中は同じく沈線文が格子状に施されている。

254は直径4.8cmと4.6cmと内外面でほぼ同程度の径をもち，厚さは1.6cmを測る。片方の面に先端の尖った工具により細沈線文で曲線文が施されている。また，側面にも細沈線文により鋸歯文が施されている。

254は頁岩製の垂飾品である。当初は玦状耳飾りと考えていたが，切れ目にあたる部分がなく，穿孔の上下ともに破損しているため，垂飾品とした。穿孔は両面から均等に行われている。

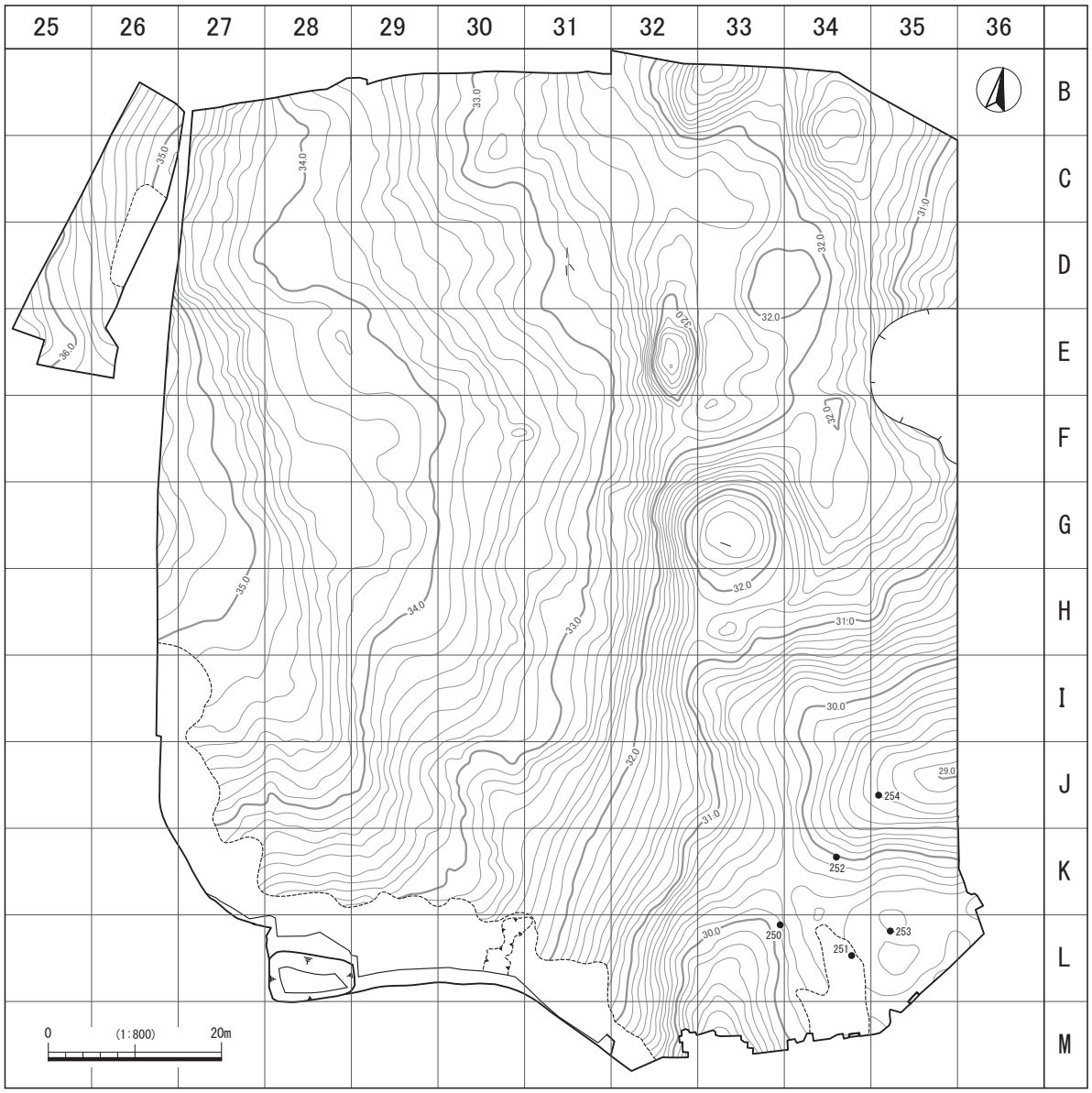
第33表　12類土器観察表２

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第177図	212	M35	Ⅵ	12類土器	貝殻刺突文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	213	M34	Ⅵ		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	214	L35	Ⅶa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	215	L34	Ⅵ		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄褐	良	
	216	M32	Ⅵ		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎	○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	217	K30	Ⅵ		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	218	F28	Ⅵ		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	灰黄褐	良	
	219	I30	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄褐	良	
	220	M32	Ⅵ		無文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐色	にぶい橙色	良	
第178図	221	H28	Ⅵ		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	222	J35	Ⅶa		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
第179図	223	G33	Ⅶa		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	明赤褐色	良	
	224	L32	Ⅵ		貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		灰褐色	灰褐色	良	
	225	—	—		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		—	—	良	
	226	M33	Ⅶa		貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		灰褐色	灰褐色	良	胴部
	227	M35	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		灰褐色	にぶい橙色	良	胴部 白色粒子多い
	228	K33	Ⅵ		貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	にぶい褐色	良	胴部 白色粒子多い
	229	K33	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	暗褐色	良	胴部
	230	—	—		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		—	—	良	胴部
第180図	231	L32	Ⅵ		貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	胴部
	232	K33	Ⅵ		無文	ナデ	ナデ ケズリ後ナデ	○	○	○		○		橙色	灰褐色	良	底部付近
	233	K35	Ⅵ		無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	底部



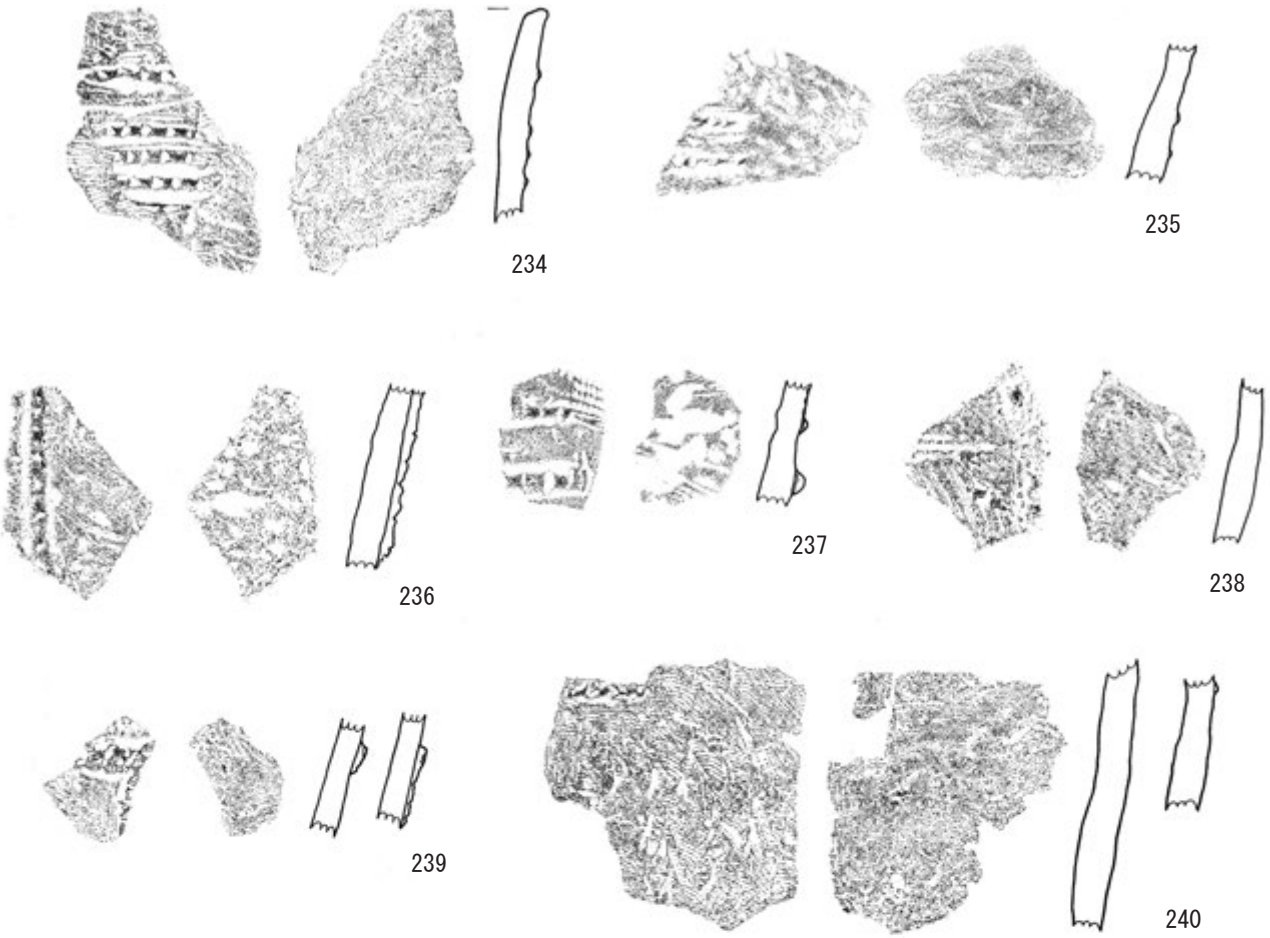
Ⅷ層上面コンタ図

第181図　13～15類土器分布図

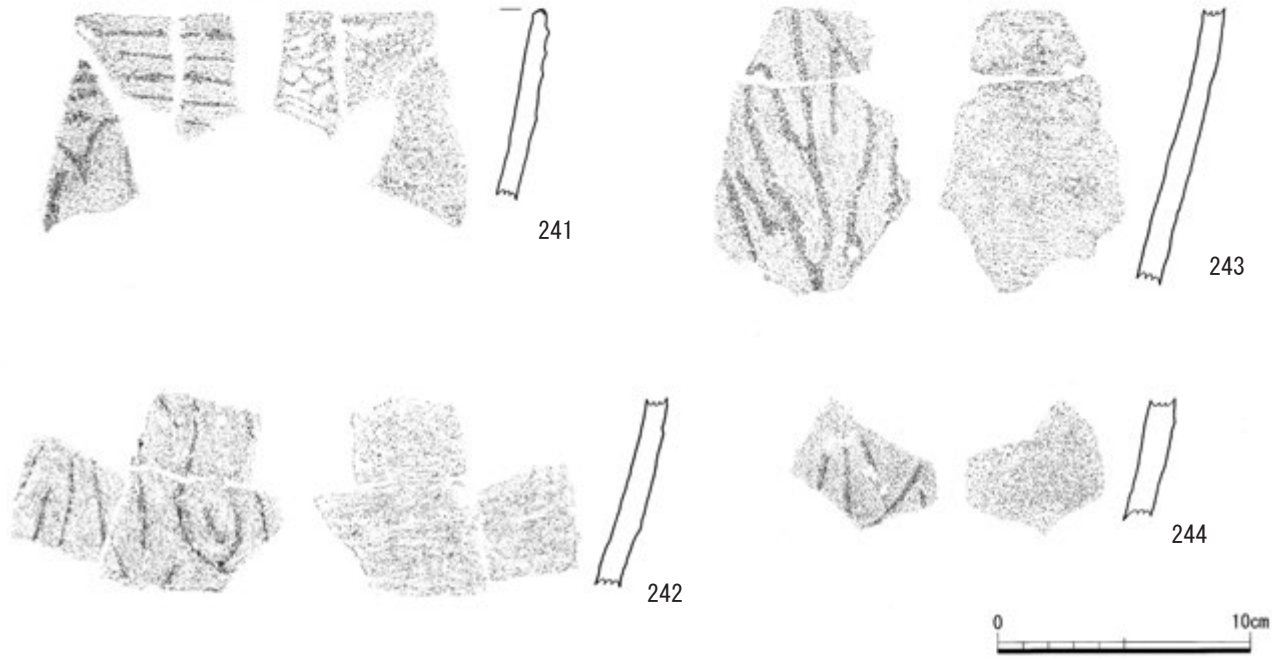


Ⅷ層上面コンタ図

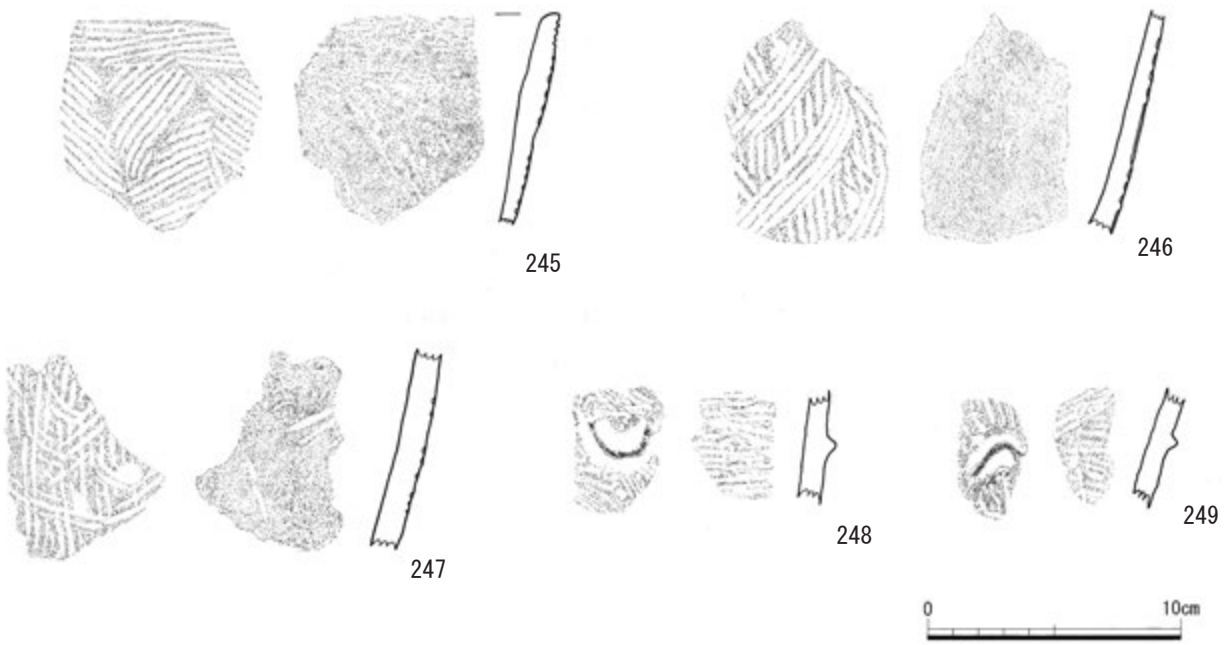
第182図　耳栓・垂飾品分布図



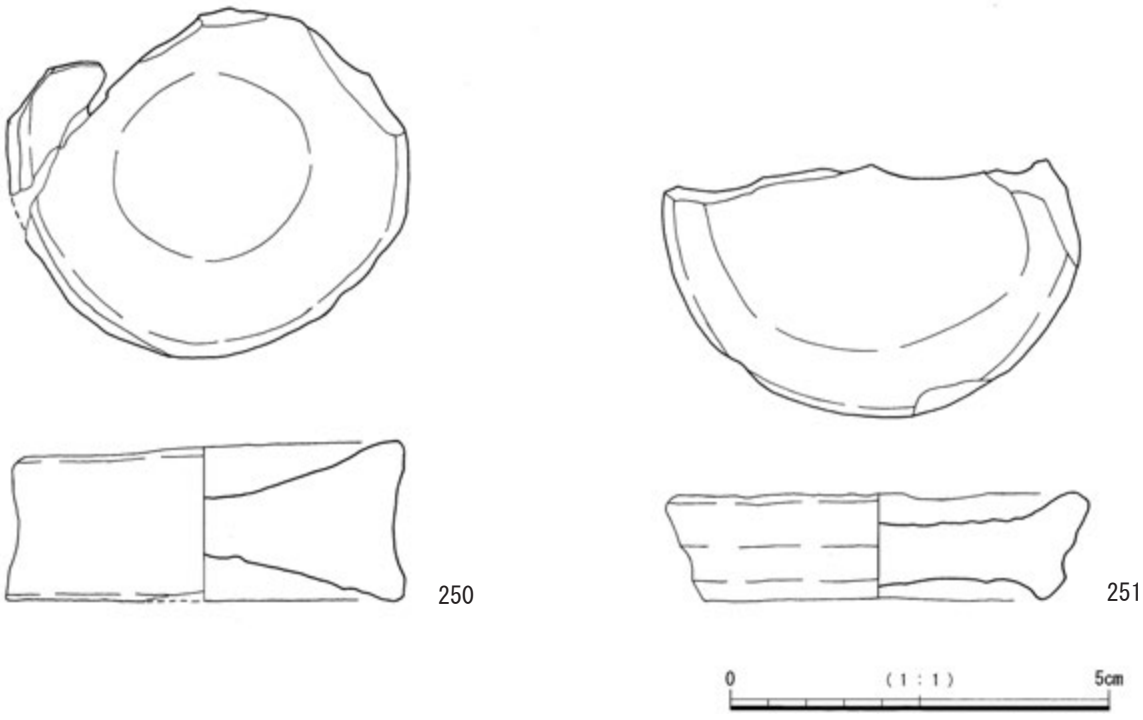
第183図　13類土器



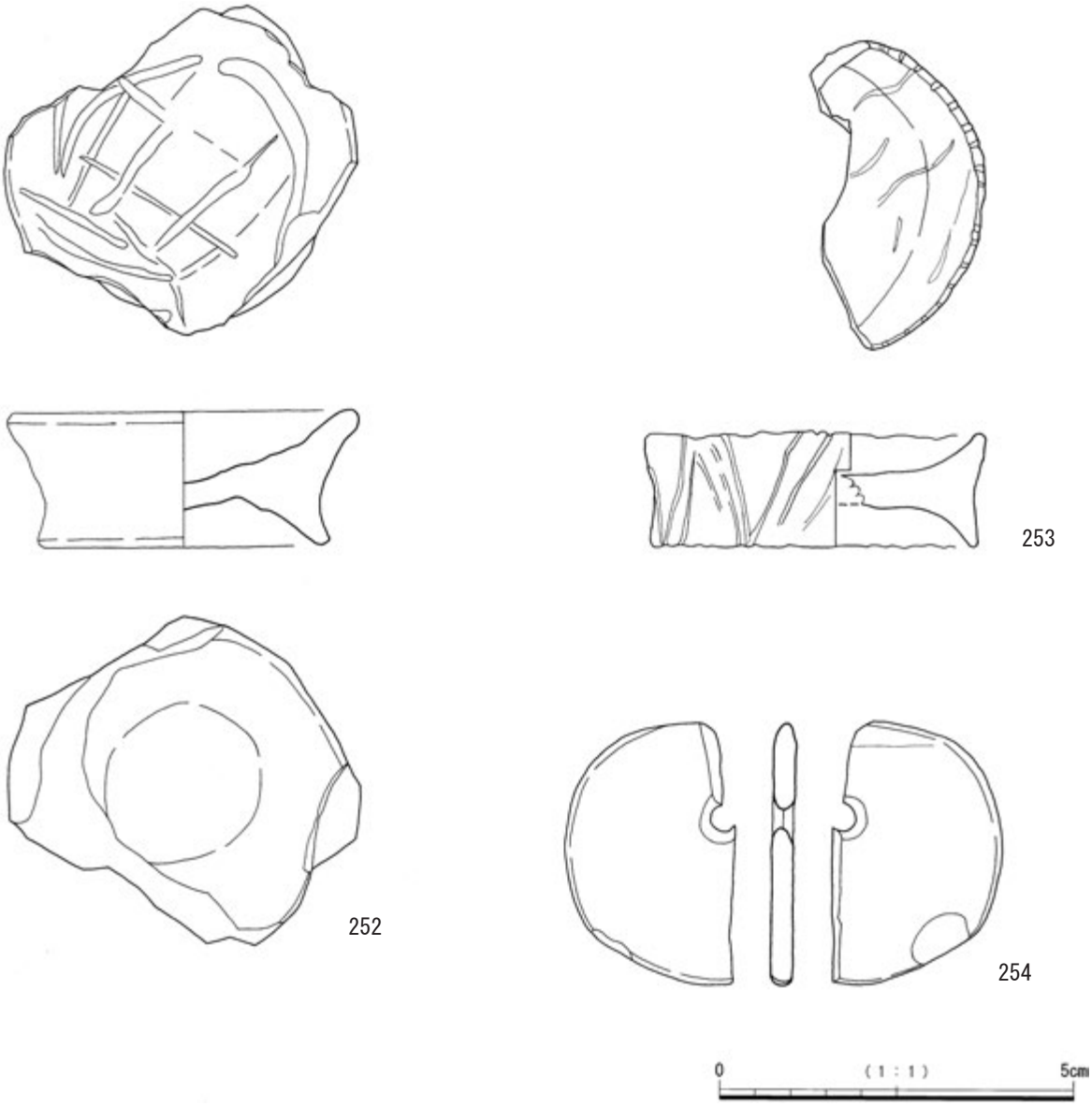
第184図　14類土器



第185図　15類土器・その他土器



第186図　耳栓１



第187図　耳栓２・垂飾品

第34表　13類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第183図	234	D31	VI	13類土器	突帯文（貝殻刺突）	貝殻条痕後ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	235	—	VI		突帯文（貝殻刺突）	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	236	G33	VI		突帯文（貝殻刺突）	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	橙色	良	
	237	G33	VI		突帯文貝殻押引文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	238	G33	VI		突帯文貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄褐	良	
	239	G33	VI		突帯文（貝殻刺突）	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	240	D31	VI		突帯文貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰黄褐色	良	

第35表　14類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第184図	241	K31	Ⅵ	14類土器	ミミズばれ突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	242	K30	Ⅵ		ミミズばれ突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	243	K30	Ⅵ		ミミズばれ突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	244	K30	Ⅵ		ミミズばれ突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	

第36表　15類土器・その他土器・耳栓観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第185図	245	L34	Ⅶa	15類土器	貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		浅黄橙色	浅黄橙色	良	
	246	C34	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	灰黄褐色	良	
	247	K31	Ⅶa		貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	248	L33	Ⅵ	その他	突帯文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○	○		橙色	灰黄褐色	良	
	249	L33	Ⅵ		突帯文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○	○		橙色	灰黄褐色	良	
第186図	250	L33	Ⅵ	耳栓	無文	ナデ		○	○	○		○		にぶい橙色		良	
	251	L34	Ⅵ		無文	ナデ		○	○	○	○	○		にぶい赤褐		良	
第187図	252	K34	Ⅵ		沈線文	ナデ		○	○	○		○		褐灰色		良	
	253	L35	Ⅵ		沈線文	ナデ		○	○	○		○		橙色		良	

（２）石器

Ⅶｂ・Ⅶａ層及びⅥ層は，縄文時代早期に比定される層位である。石器は両層位合わせて111点を図化した。報告に際しては，遺物を出土層位別及び器種別に掲載し，図化した遺物については遺物分布図を作成して掲載した。なお，Ⅶｂ・Ⅶａ層から出土した遺物については，Ⅶ層出土石器として合わせて報告する。

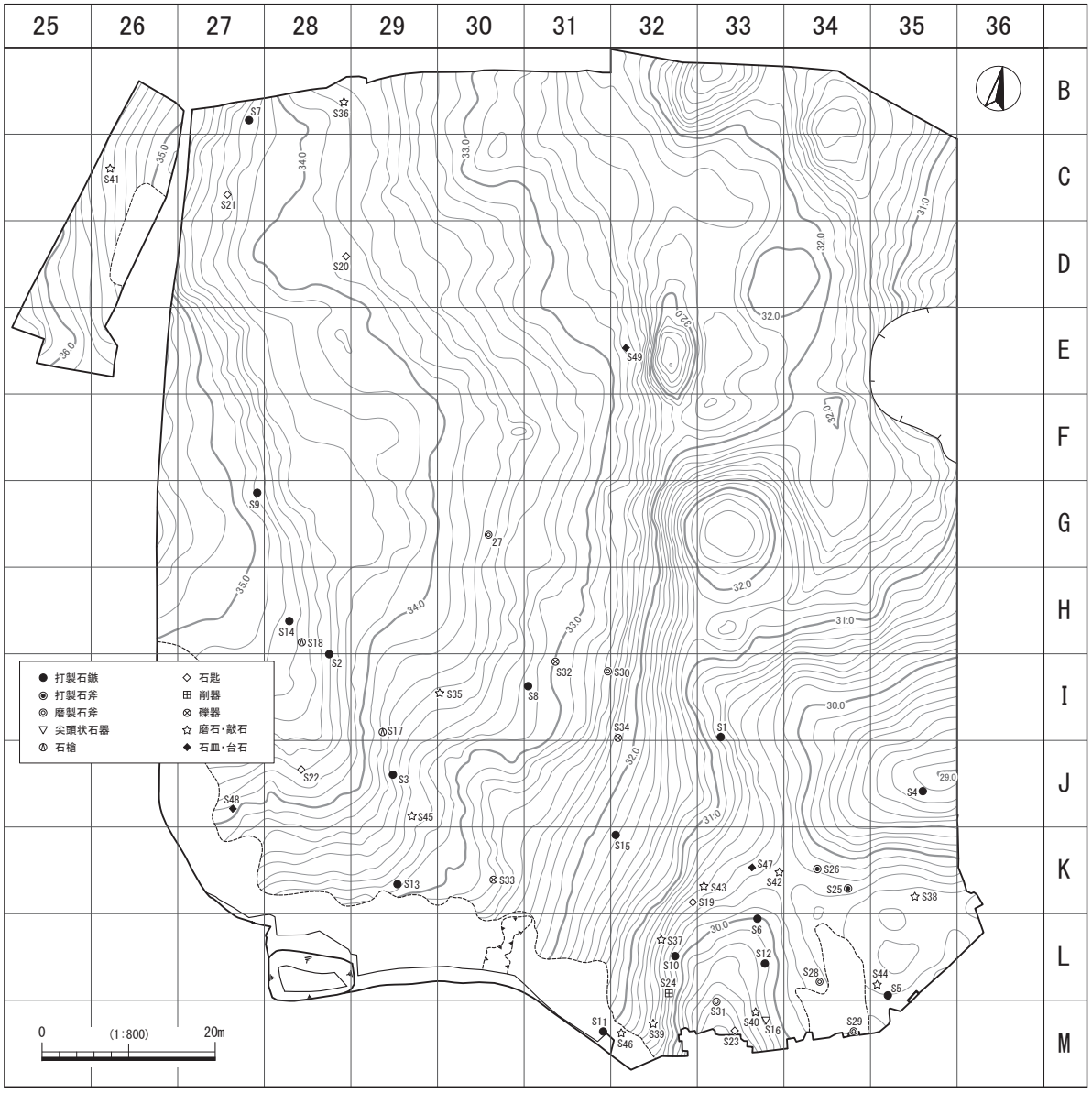
Ⅶ層出土石器（第188図）

本層位からは，打製石鏃32点，尖頭状石器１点，石槍２点，石匙９点，削器３点，打製石斧３点，磨製石斧６点，礫器８点，磨・敲石59点，石皿・台石13点，石核１点，剥片類４点が出土しており，そのうち，49点を図化した。図化した石器類の遺物分布を見ると，主な分布域が２か所に分かれる。１か所はⅠ区以南の調査区南部であり，もう１か所はＢ～Ｄ26～28区の調査区北西部である。調査区北東部では遺物の分布はほとんど見られない。遺物は散在した状況で分布しているが，調査区南東部で分布がやや密になる傾向が見られる。遺物分布を器種別に見ると，磨・敲石はＫ～Ｍ32～35区でまとまった分布が見られるが，その他の器種については散在した状況である。

打製石鏃（第190図　Ｓ１～Ｓ15）

Ｓ１～Ｓ15は打製石鏃であり，Ｓ１・Ｓ２は１類，Ｓ３～Ｓ９は２類，Ｓ10は３類，Ｓ11～Ｓ15は５類に分類される。

Ｓ１は形状が正三角形を呈し，基部に抉りは見られない。裏面に自然面を残す。Ｓ２は形状が正三角形を呈し，



Ⅷ層上面コンタ図

第188図　Ⅶ層出土石器分布図

基部に抉りは見られない。先端部と左脚端部を欠失している。裏面には素材の剥離面が残る。Ｓ３は形状が二等辺三角形を呈し，基部には浅く抉りが入る。先端部を欠失している。Ｓ４は裏面に主剥離面を大きく残している。先端部と左脚端部の一部を欠失している。Ｓ５は側縁中央で浅くくびれる形状を呈している。基部の抉りは浅い。Ｓ６は両側縁部の中央から下半にかけてわずかに鋸歯状を呈している。Ｓ７は基部に「U」字状に抉りが入り，左脚部を欠失している。Ｓ８は基部に浅く抉りが入る。先端部と左脚端部を欠失している。Ｓ９は大型の石鏃であり，基部には深く抉りが入る。先端部と左脚部を欠失している。非常に細かい二次加工が施されている。Ｓ10は五角形状を呈し，基部には「U」字状の抉りが入る。肩部が下位に位置し，肩部から脚部にかけて幅が狭まる。表面中央には研磨の跡と思われる擦痕が確認できる。裏面には主剥離面が残る。Ｓ11は打製石鏃の未製品であり，表裏面ともに粗い剥離が残る。Ｓ12はいわゆる「トロトロ石器」に類似しているが，摩滅等は見られない。先端部を欠失しており，両脚部は左右非対称である。Ｓ13は横に広い二等辺三角形を呈し，基部には浅く抉りが入る。Ｓ14は側縁部がわずかに内湾しており，基部には浅く抉りが入る。左右非対称である。左脚部を欠失している。Ｓ15はＳ12と類似したものであり，先端部と脚部を欠失している。

尖頭状石器（第191図　Ｓ16）

Ｓ16は尖頭状石器である。節理を有する中型の剥片を素材としており，三角形状に整形されている。右側縁は表裏面から連続した二次加工が施され，緩やかな弧状を呈する等，両側縁で二次加工や形状の相違が見られる。右側等刃部とする石匙の再利用品の可能性が考えられる。

石槍（第191図　Ｓ17・Ｓ18）

Ｓ17・Ｓ18は石槍である。Ｓ17はほぼ完形品であり，丁寧な両面加工が施されている。上半部と比べ下半部がやや広で，基端部が尖る形状である。Ｓ18はＳ17と類似した形状であるが，基部は尖らない。尖頭部を欠失している。

石匙（第192図　Ｓ19～Ｓ23）

Ｓ19～Ｓ23は石匙であり，Ｓ19～Ｓ21は１類，Ｓ22～Ｓ23は２類に分類される。Ｓ19は三角形状を呈しており，摘み部から胴部にかけて浅い抉りを有している。摘み部には自然面を残し，刃部には角度の浅い二次加工が施されている。Ｓ20は横長の剥片を素材にしており，素材の末端側に刃部が形成されている。Ｓ21は小型で，二次加工は部分的に施されるのみである。Ｓ22は小型でやや厚みのある剥片が素材であり，右側面に折断面を有している。Ｓ23は刃部幅が広い形状である。

削器（第193図　Ｓ24）

Ｓ24は削器である。ホルンフェルス製の横長の剥片を素材にしており，素材の末端側に連続した二次加工が施されて直線状の刃部が作出されている。素材の打面は除去されている。両側縁にも二次加工が施されている。

打製石斧（第193図　Ｓ25・Ｓ26）

Ｓ25・Ｓ26は打製石斧であり，いずれも１類に分類される。Ｓ25は器厚が薄く，短冊形を呈する。ほぼ全面に自然面を残している。裏面の右側面には角度の浅い二次加工が平行に施されており，両側面で加工が異なっている。Ⅶａ層出土だが，上層からの混入の可能性もある。Ｓ26は刃部が欠失しているが，短冊形を呈すると想定される。器厚は厚い。両側縁粗整形後に細加工が施されて整形されている。裏面には自然面を残す。

磨製石斧（第194図　Ｓ27～Ｓ31）

Ｓ27～Ｓ31は磨製石斧であり，Ｓ27～Ｓ29は２類，Ｓ30・Ｓ31は３類に分類される。Ｓ27は刃部片であり，基部を欠失している。研磨により刃部が作出されている。刃部から側縁部にかけて摩滅・摩耗が確認される。Ｓ28は基部を欠失している。刃部の表面には使用時の剥離痕と思われる研磨後の剥離痕が確認できる。Ｓ29は刃部片である。両側縁には潰れ痕が確認できる。Ｓ30は鑿状を呈する小型の石斧である。基部を欠失している。自然面を有するやや薄手の剥片が素材である。刃部と側縁部に摩耗が見られる。Ｓ31は鑿状を呈する。全体的に風化が進んでいるが，表面や右側縁等に研磨痕が確認できる。刃部には使用痕と思われる剥離が見られる。

礫器（第195図　Ｓ32～Ｓ34）

Ｓ32～Ｓ34は礫器である。Ｓ32は扁平な角礫を素材とし，両側縁に裏面側から二次加工が施されて刃部が作出されている。上面及び裏面には自然面をそのまま残している。Ｓ33は三角形状を呈する角礫の一辺に片面加工の刃部が作出されている。裏面下半部には敲打痕に類似した跡が部分的に確認できる。Ｓ34は扁平な角礫の一辺に片面加工が施されて，弧状を呈する刃部が作出されている。刃部の作出以外の二次加工は見られない。

磨・敲石（第195～197図　Ｓ35～Ｓ46）

Ｓ35～Ｓ46は磨・敲石である。Ｓ35は裏面中央に凹みを持ち，表面中央にも浅い凹みが見られる。側面には敲打痕が確認でき，表裏面には磨面が見られる。Ｓ36は扁平な円礫を素材としている。表裏面を磨面として利用し，側面は全周にわたって敲打痕が見られる。裏面上半に欠損箇所が見られる。Ｓ37は扁平な礫を素材としている。敲打痕は主に両側面に見られ，表裏面には磨面が確認される。Ｓ38は表裏面を磨面として利用している。Ｓ39は棒状を呈する礫を素材としている。素材の両端を敲石として利用しており，敲打痕は側面まで広がって見られる。Ｓ40は表面中央に浅い凹みを持ち，裏面や側面に敲打痕が見られる。Ｓ41は大半が欠損しており，残存長は5.5cmを呈する。表裏面に磨面や敲打痕が見られる。Ｓ

42は表面中央にはやや浅い凹みが見られる。S43は楕円形を呈する礫を素材としている。側面下半を中心に敲打痕が見られる。S44は側面に敲打痕が確認でき，表裏面にも敲打痕が見られる。S45は楕円形を呈する。両側面及び上面に敲打痕が確認できる。S46は表裏面に主に磨面が見られ，敲打痕は部分的に確認できる。

石皿（第197図　S47～S49）

S47～S49は石皿類である。S47は表裏面及び右側面の３面に研磨面が形成されており，研磨面はわずかに凹む程度の緩やかな曲面状を呈している。また，表裏面には部分的に敲打痕が確認できることから，石皿から砥石に転用された資料と考えられる。当初は石皿として利用されていたと考えられるため，石皿に分類している。S48は緩やかな凹みを持つ石皿片であり，両側面及び下半部を欠失している。S49は扁平な礫を素材とした大型の石皿で，表面中央に浅い凹みが見られる。表面の右下には欠損箇所が見られる。

Ⅵ層出土石器（第189図）

本層位からは，打製石鏃65点，磨製石鏃１点，石匙18点，削器３点，石錐５点，異形石器１点，打製石斧４点，磨製石斧４点，礫器８点，磨・敲石68点，石皿・台石10点，軽石製品３点及び剥片類５点が出土しており，そのうち，62点を図化した。図化した石器類の遺物分布を見ると，主な分布域が３か所に分かれる。１か所はＩ～M33～35区の調査区南東部であり，残り２か所はH～Ｊ28～30区の調査区南西部，及び，Ｂ～H32～35区の調査区北東部である。遺物分布を器種別に見ると，石鏃は33区以東に，磨・敲石はK・M34・35区に分布のまとまりが見られる。

打製石鏃（第198～199図　S50～S64）

S50～S64は打製石鏃であり，S50は１類，S51～S63は２類，S64は５類に分類される。S50は形状が正三角形を呈し，基部はわずかに外湾する。表裏面ともに中央に素材の剥離面を残す。S51は形状が二等辺三角形を呈し，基部には抉りが入る。両側縁がわずかに弧状を呈する。S52は形状が二等辺三角形を呈し，基部には抉りが入る。両脚部は左右非対称になっている。S53は側縁中央から脚部にかけて鋸歯状になっている。S54は側縁中央にわずかにくびれが入る。S55は形状が二等辺三角形を呈し，基部には抉りが入る。S56は先端部と脚部を欠失しているが，二等辺三角形を呈すると想定される。S57は形状が二等辺三角形を呈し，側縁部中央がわずかにくびれる。先端部と右脚端部が欠失している。S58は形状が二等辺三角形を呈し，基部には抉りが入る。右脚端部が欠失している。S59は基部にわずかに抉りが入る。S60は形状が二等辺三角形を呈し，基部には抉りが入る。S61は形状が二等辺三角形を呈する。左脚部が欠失している。S62はやや大型の石鏃であり，基部には抉りが入る。裏面には主剥離面が残り，両側縁部の下半で浅くくびれが入り，脚部で弧状を呈する。S63は左半部を欠失している。側縁部には深く剥離が施される。S64は「トロトロ石器」に類似しているが，摩滅は見られない。左脚部を欠失している。

磨製石鏃（第199図　S65）

S65は磨製石鏃である。基部にわずかに抉りが入る。基部に研磨後にできた剥離痕が見られる。先端部から右側縁部の上半を欠失している。

石匙（第199～203図　S66～S76）

S66～S76は石匙であり，全て２類に分類される。S66は素材剥片の末端側に刃部が作出されている。左右非対称形を呈しており，摘み部は欠損している。S67は横長の剥片の打面部に小さな摘み部が作出されている。刃部は弧状を呈している。S68は刃部が直線状を呈しており，摘み部を部分的に欠失している。風化の進んだ素材を使用しており裏面中央には剥落痕が見られる。二次加工はやや粗雑である。S69は厚みのある素材を使用しており，三角形状を呈する。刃部右端は欠損である。S70は縦長の剥片を横位に用い，片方の側縁に刃部が作出されている。右側縁には素材の打面が残されている。素材の剥離面を大きく残している。S71は横長の剥片の末端側に直線状の刃部が作出されている。左半を欠失している。S72は薄手の剥片が素材と思われるが，風化が著しく剥離痕はやや不明瞭である。素材の剥離面を大きく残している。幅の広い摘み部で，刃部は弧状を呈している。S73は刃部がやや屈曲して左右非対称形を呈している。刃部加工は左側縁から刃部中央付近まで施されており，刃部右半は素材の縁辺をそのまま刃部に利用している。右側縁に部分的に欠損が見られる。S74は裏面が素材の主要剥離面であり，横長の剥片の末端側に刃部が作出されている。両側縁及び摘み部は欠損している。S75は細身・横長の石匙であり，裏面に素材の主要剥離面を据え，素材の末端側に直線状の刃部が作出されている。S76は扁平で自然面を大きく残す剥片を素材に利用している。両側縁を欠損している。

削器（第204図　S77）

S77は削器である。縦長の剥片の片側縁に表裏面側から二次加工が施されて刃部が作出されている。左側面は自然面で素材の打面であり，上面にも自然面を残す。右側面は折断面である。

石錐（第204図　S78・S79）

S78・S79は石錐である。S78は摘み状の頭部と長い錐部を持つ定型的な石錐で，摘み部には素材の剥離面をそのまま残している。S79は三角形状を呈しており，裏面に主要剥離面を残している。先端部を欠損している。

異形石器（第204図　S80）

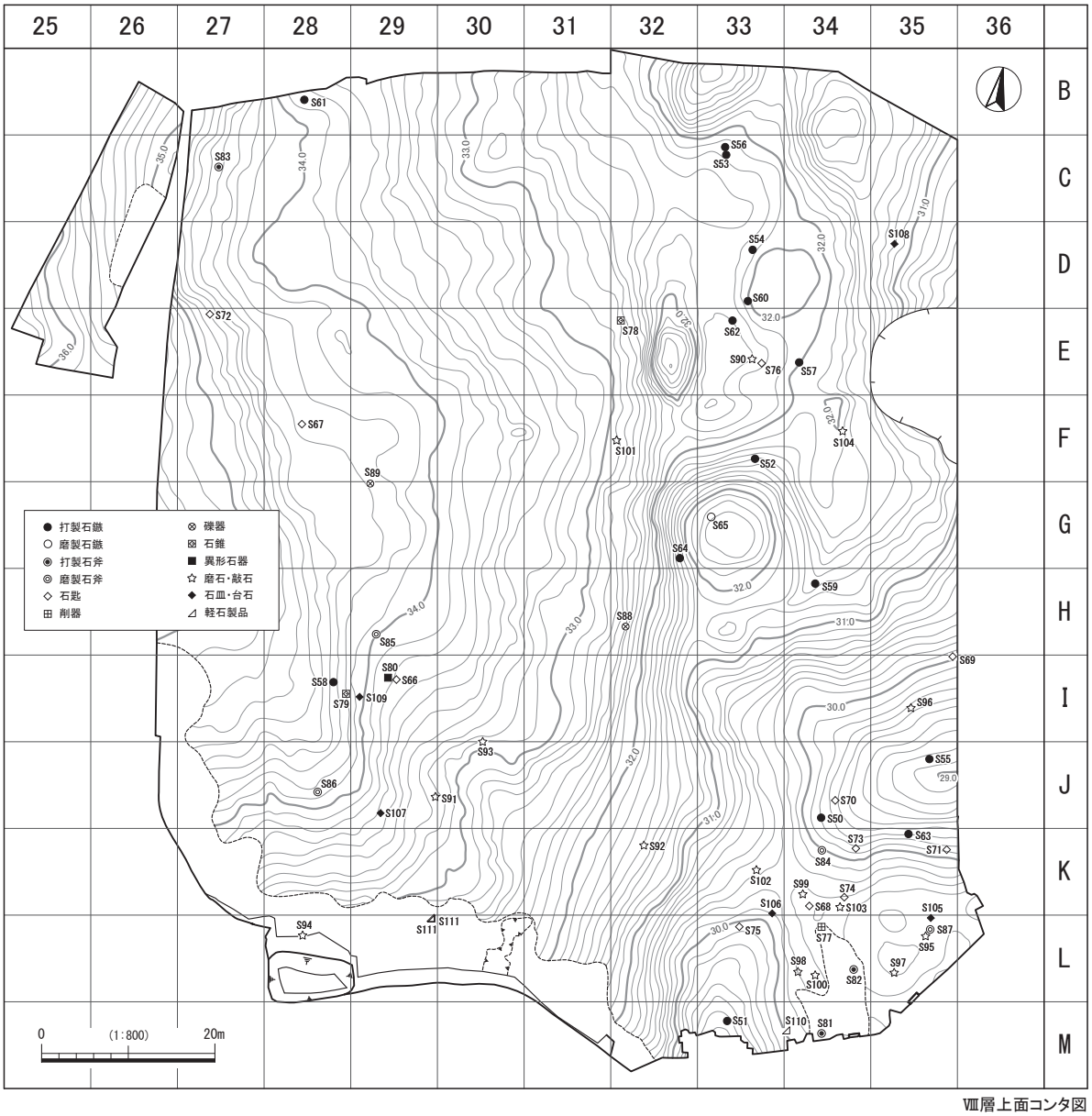
S80は異形石器である。「U」字状を呈するが左右非対称であり，右側縁から左側縁に向かうにつれて幅が広くなる。用途は不明である。

打製石斧（第204・205図　S81～S83）

S81～S83は打製石斧であり，いずれも２類に分類される。S81は撥形を呈する石斧である。表裏面ともに研磨痕が見られ，研磨後に刃部を作出していることから，磨製石斧を転用したものと考えられる。基部と側縁部に自然面が部分的に残る。側縁下半に緩やかなくびれが見られる。S82は扁平な礫を素材としており，撥形を呈する。刃部と基部に部分的に剥離が見られる。側縁部中央に緩やかなくびれが見られる。S83は扁平な礫を素材とする石斧であり，撥形を呈する。全体的に摩滅が見られ，刃部にも部分的に摩滅が確認できる。

磨製石斧（第206図　S84～S87）

S84～S87は磨製石斧であり，S84・S85は１類，S86は２類，S87は３類に分類される。S84は刃部が蛤刃を呈する石斧である。基部に自然面が部分的に残る。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。S85は刃部が蛤刃を呈する石斧であり，器厚は薄い。表面には，風化による剥落痕が部分的に見られる。S86は短冊形を呈する石斧で，研磨は基部にまで及んでいる。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕や摩滅が見られる。両側縁部には装着痕と思われる摩滅が確認される。S87は鑿状を呈する小型の石斧である。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。



Ⅷ層上面コンタ図

第189図　Ⅵ層出土石器分布図

礫器（第207図　S88・S89）

S88・S89は礫器である。S88は節理を有する楕円礫を素材としたもので，一部を残して縁辺に沿うように裏面側から二次加工を施し，片刃の刃部が作出されている。S89は三角形状を呈する礫の一辺に片刃の刃部が作出されている。

磨・敲石（第207～209図　S90～S104）

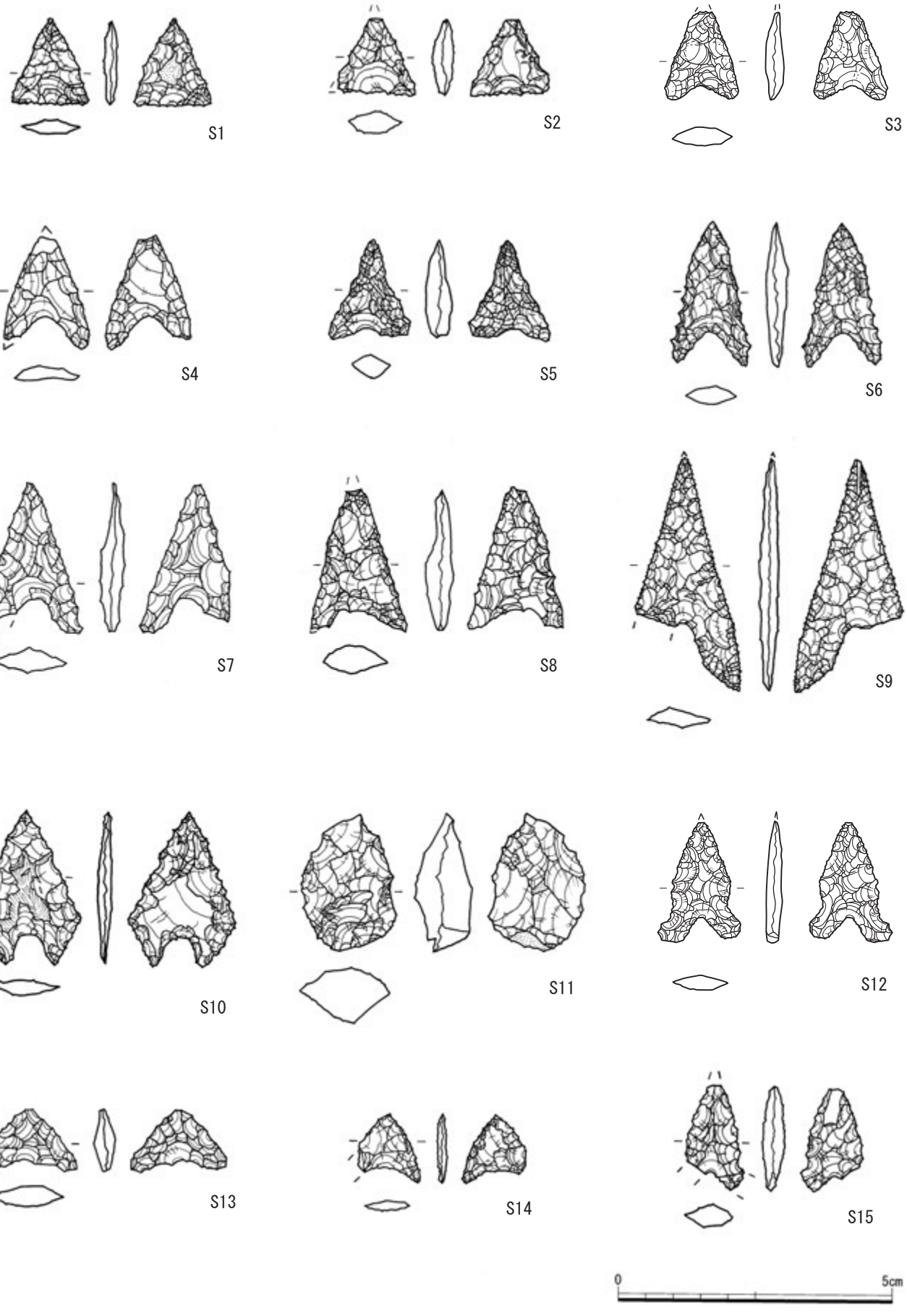
S90～S104は磨・敲石である。S90は側面上部と下部を中心に敲打痕が見られる。S91は楕円形を呈する小型の磨石であり，表裏面は磨面として利用している。S92は表裏面を磨面として利用し，裏面には部分的に欠失が見られる。S93は上面と右側面を中心に敲打痕が見られる。S94は表裏面を磨面として利用しており，側面のほぼ全面に敲打痕が見られる。S95は側面の大半に敲打痕が見られ，表裏面を磨面として利用している。裏面には欠失が一部見られる。S96は大半が欠失している。敲打痕は裏面の左側縁部と上面に見られる。S97は楕円形を呈する礫を素材としている。表面に浅い凹状の敲打痕を持ち，側面にもほぼ全面に見られる。S98は扁平な楕円形を呈する礫を素材としている。裏面の左側縁上部に敲打痕が見られ，下面にも確認できる。表面の右側縁上部を欠失している。S99は敲打痕が側面のほぼ全面に見られ，表裏面にも部分的に確認できる。S100は上面と表面右側縁下部に敲打痕が見られる。S101は扁平な円礫を素材としている。表裏面を磨面として利用しており，敲打痕は右側面から下面にかけて確認できる。S102は表裏面を磨面として利用している。右側面下半に欠失が部分的に見られる。S103は楕円形を呈する礫を素材としている。側面のほぼ全面に敲打痕が見られ，裏面下半に欠失が部分的に見られる。S104は扁平な楕円形を呈する礫を素材としており，表面中央に浅い凹みを持つ。左側面と下面に敲打痕が見られ，裏面の側縁部にも部分的に確認できる。

石皿（第209～211図　S105～S109）

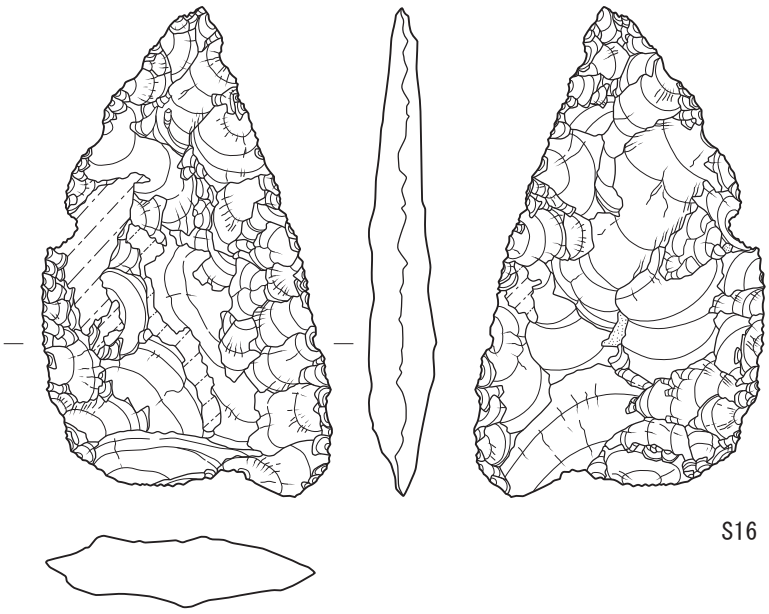
S105～S109は石皿である。S105は表裏面に敲打痕が見られる。大半を欠失している。S106は表面にわずかに凹みが見られる。大半を欠失している。S107は表裏面に緩やかな凹みを持ち，下半部を部分的に欠失している。裏面中央には敲打痕が見られる。S108は扁平な礫を素材とした大型の石皿である。表面には敲打痕が部分的に確認できる。上半部と下半部の一部，左側面を欠失している。S109は大型の石皿である。表面に緩やかな凹みが見られ，中央には敲打痕が確認できる。右側面を欠失している。

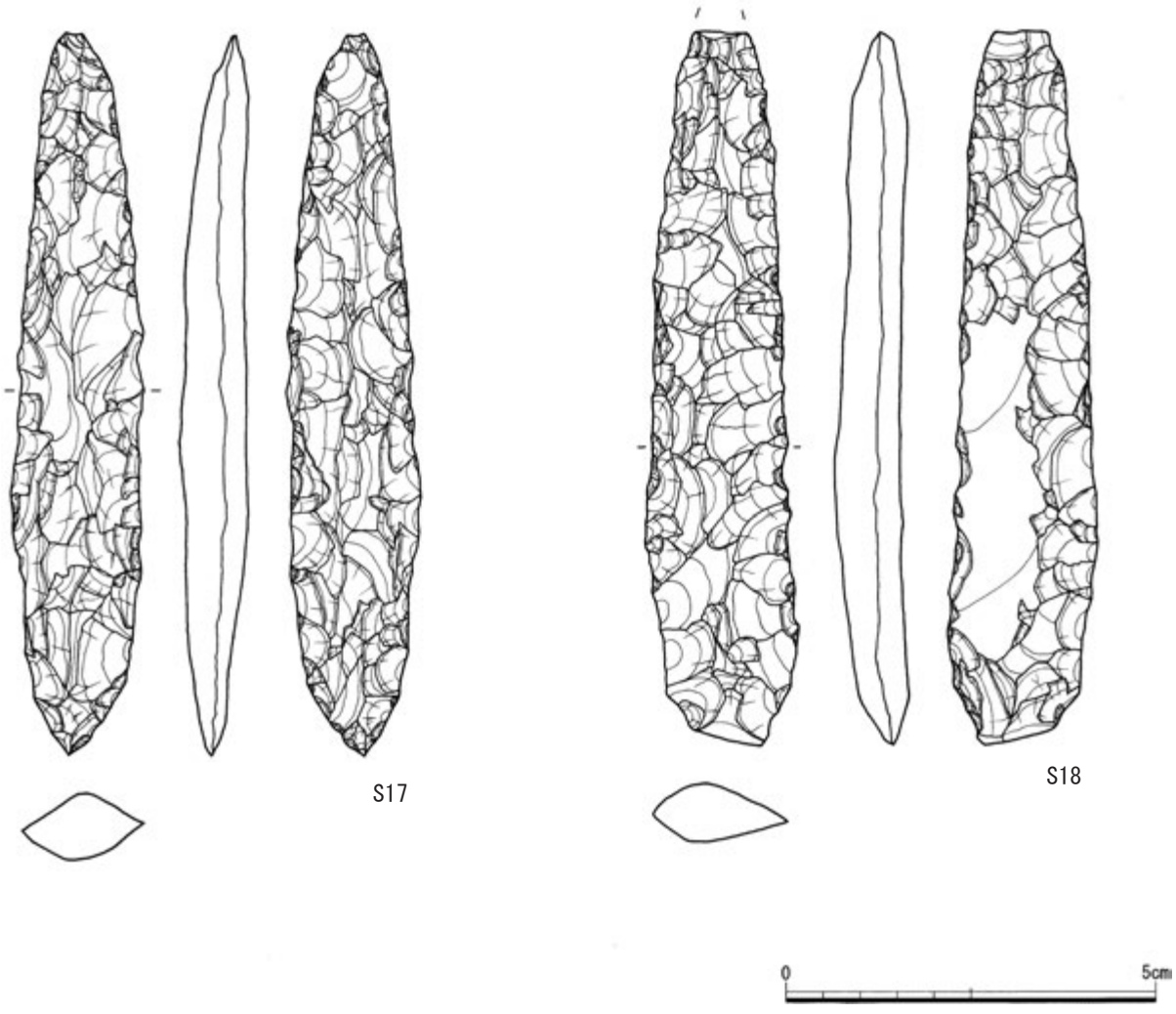
軽石製品（第211図　S110・S111）

S110・S111は軽石製品である。S110は扁平で円形を呈する軽石製品である。穿孔等は確認できない。S111は正面に浅い凹みを持ち側面観が船底状を呈するもので，全長約13.0cmを測る。

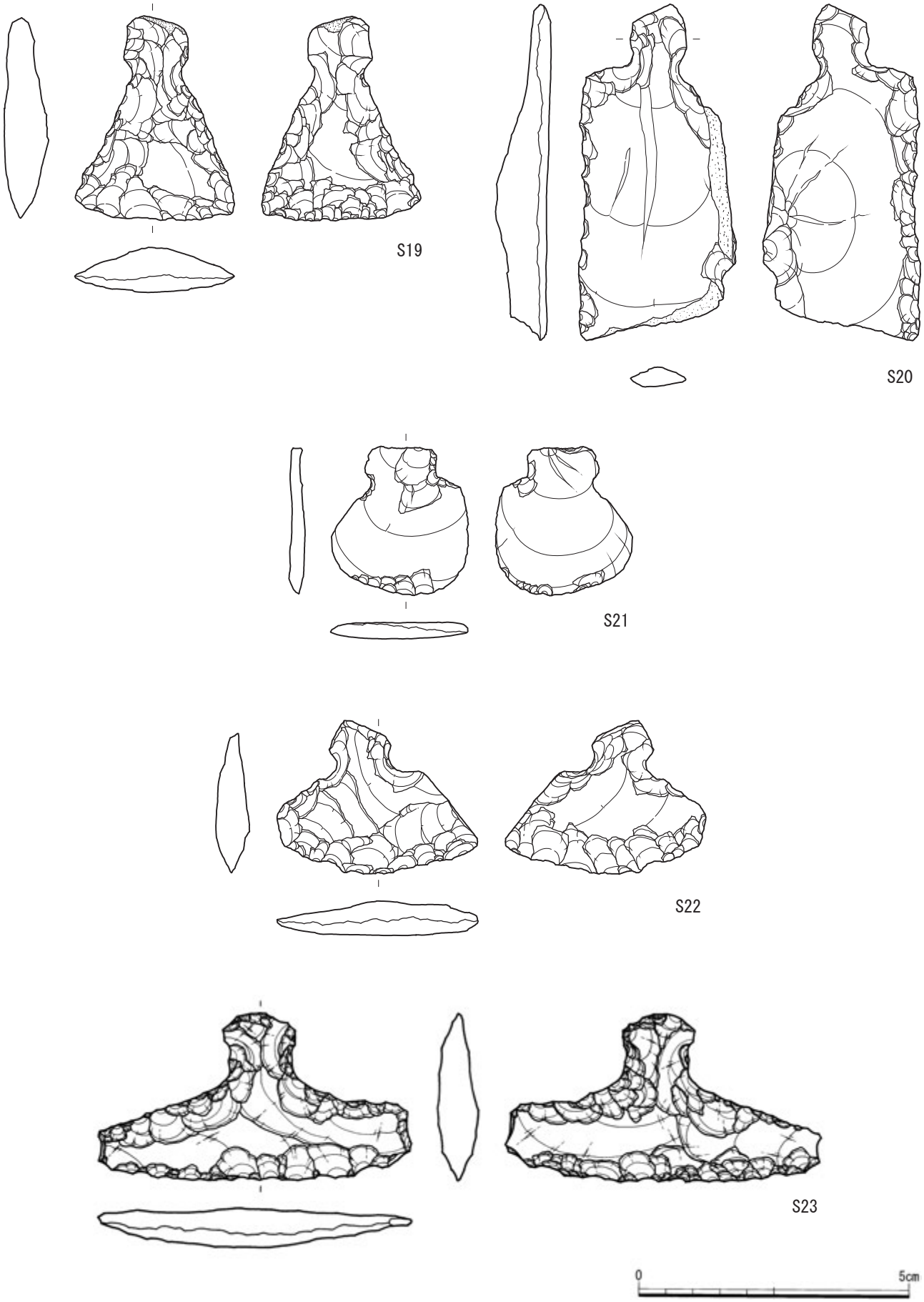


第190図　Ⅶ層出土石器１

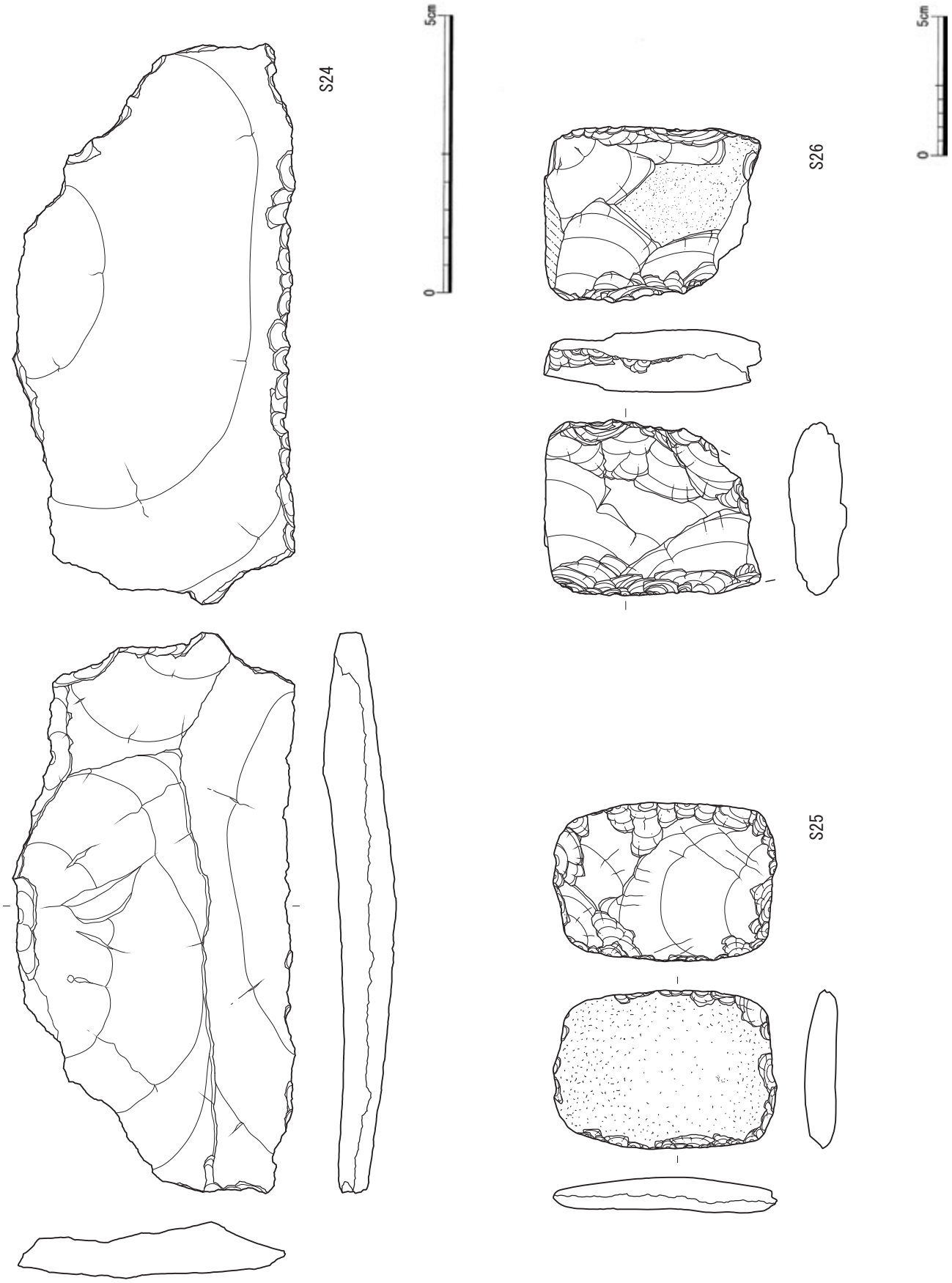




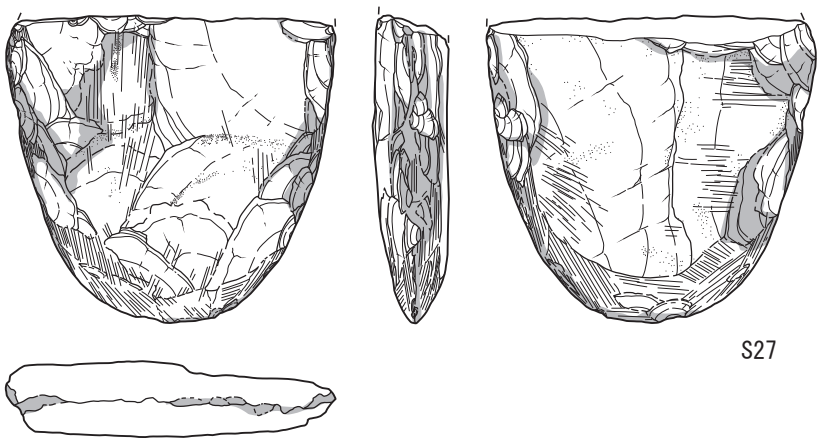
第191図　Ⅷ層出土石器２

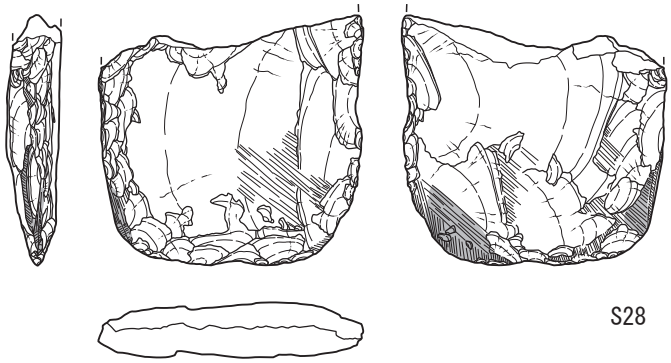


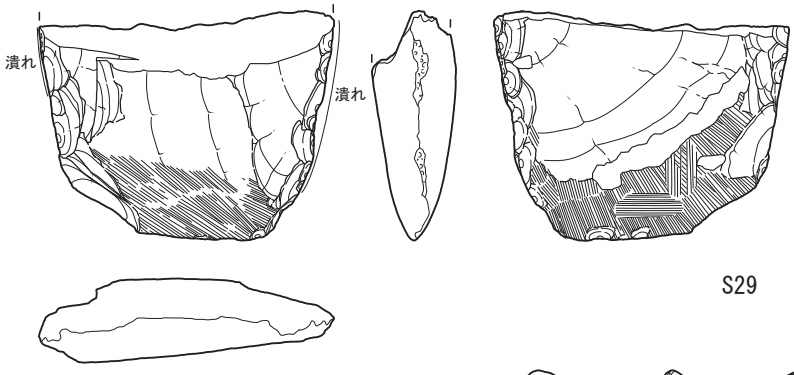
第192図　Ⅶ層出土石器３

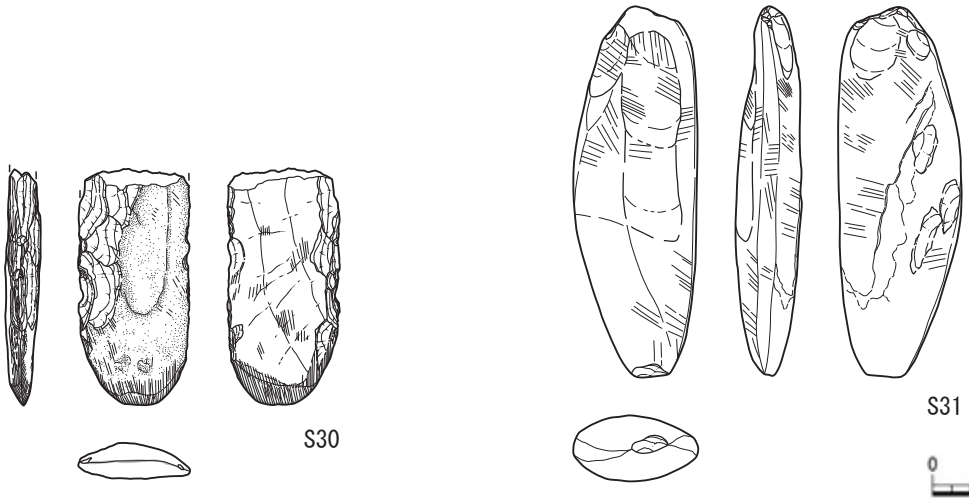


第193図　Ⅶ層出土石器４

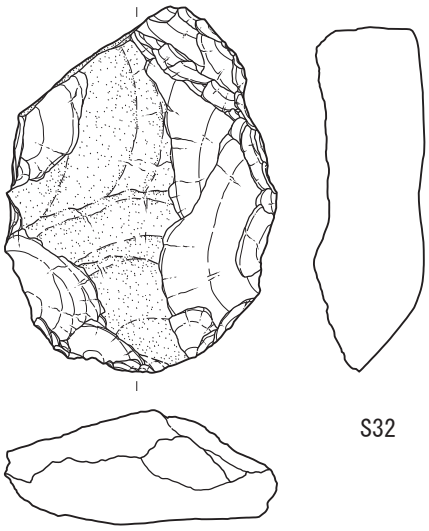


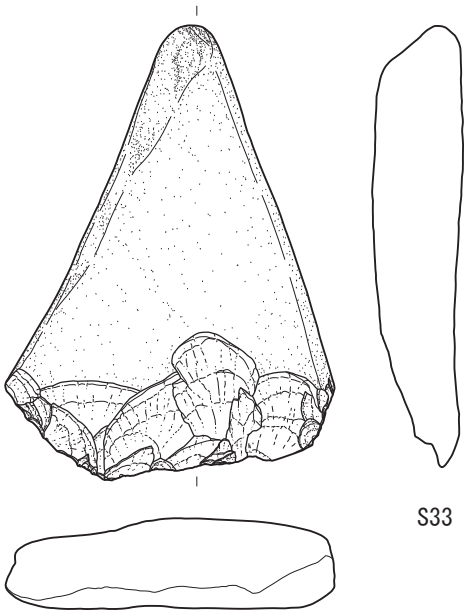


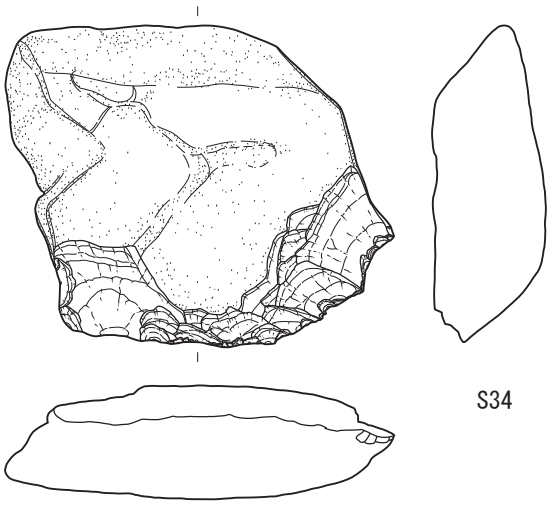


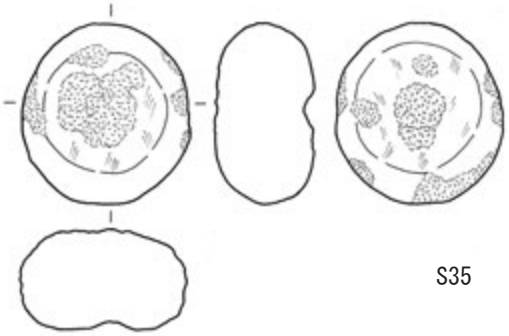


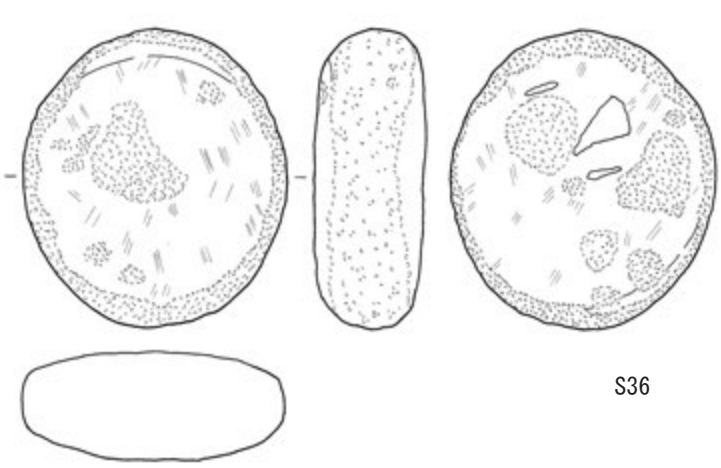
第194図　Ⅶ層出土石器５

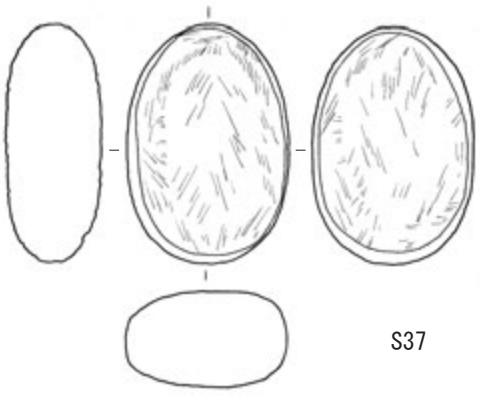






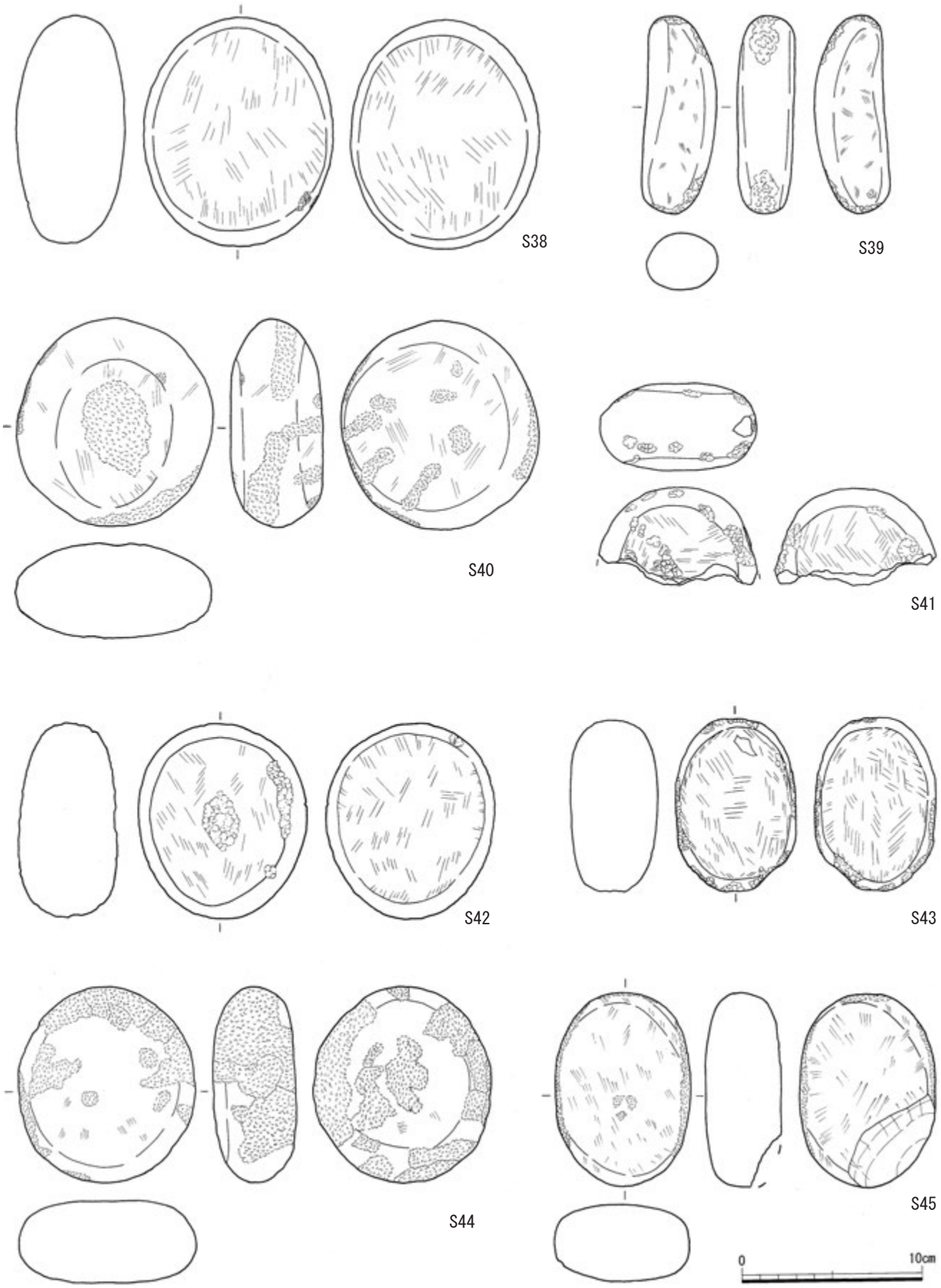




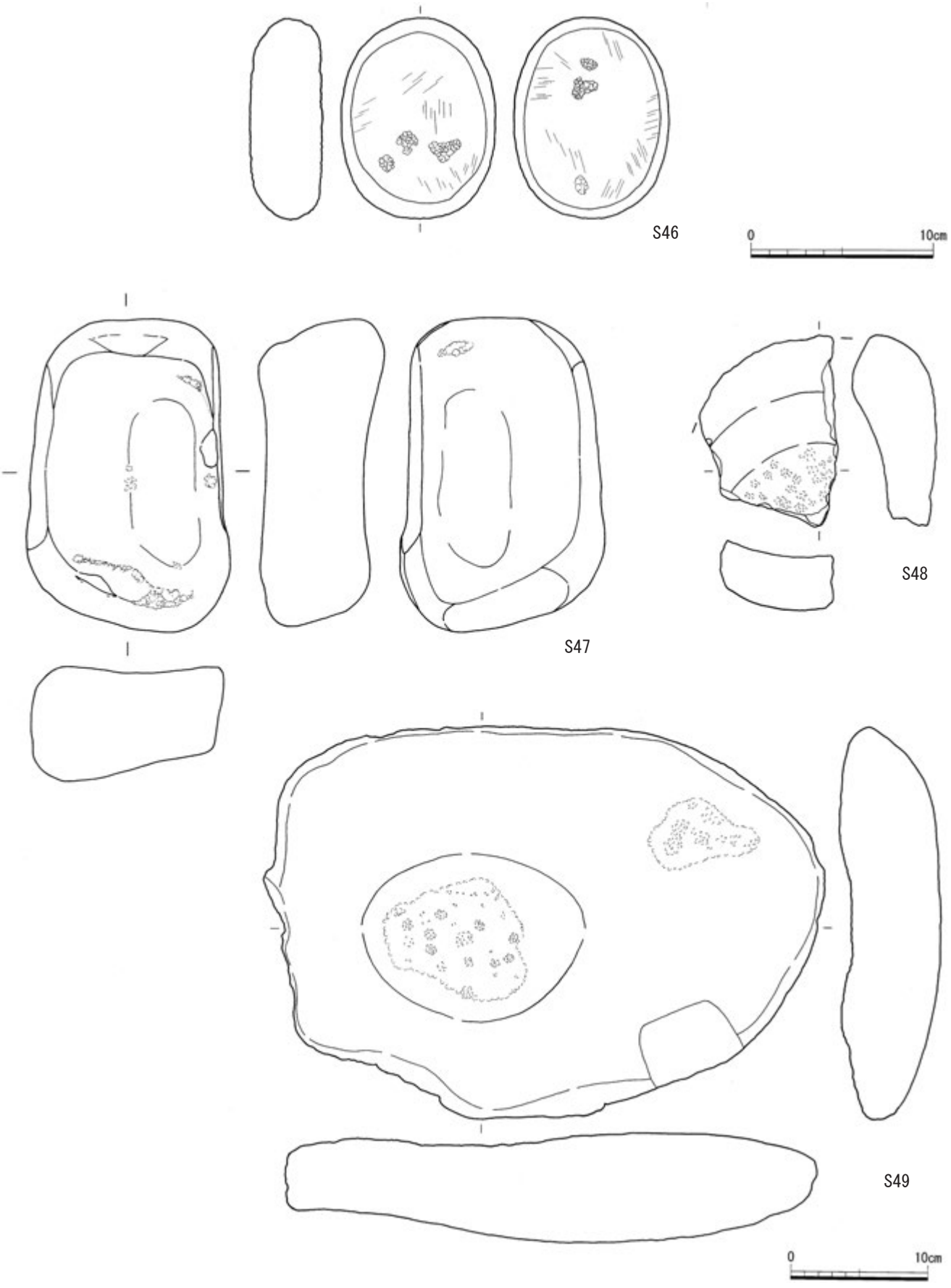




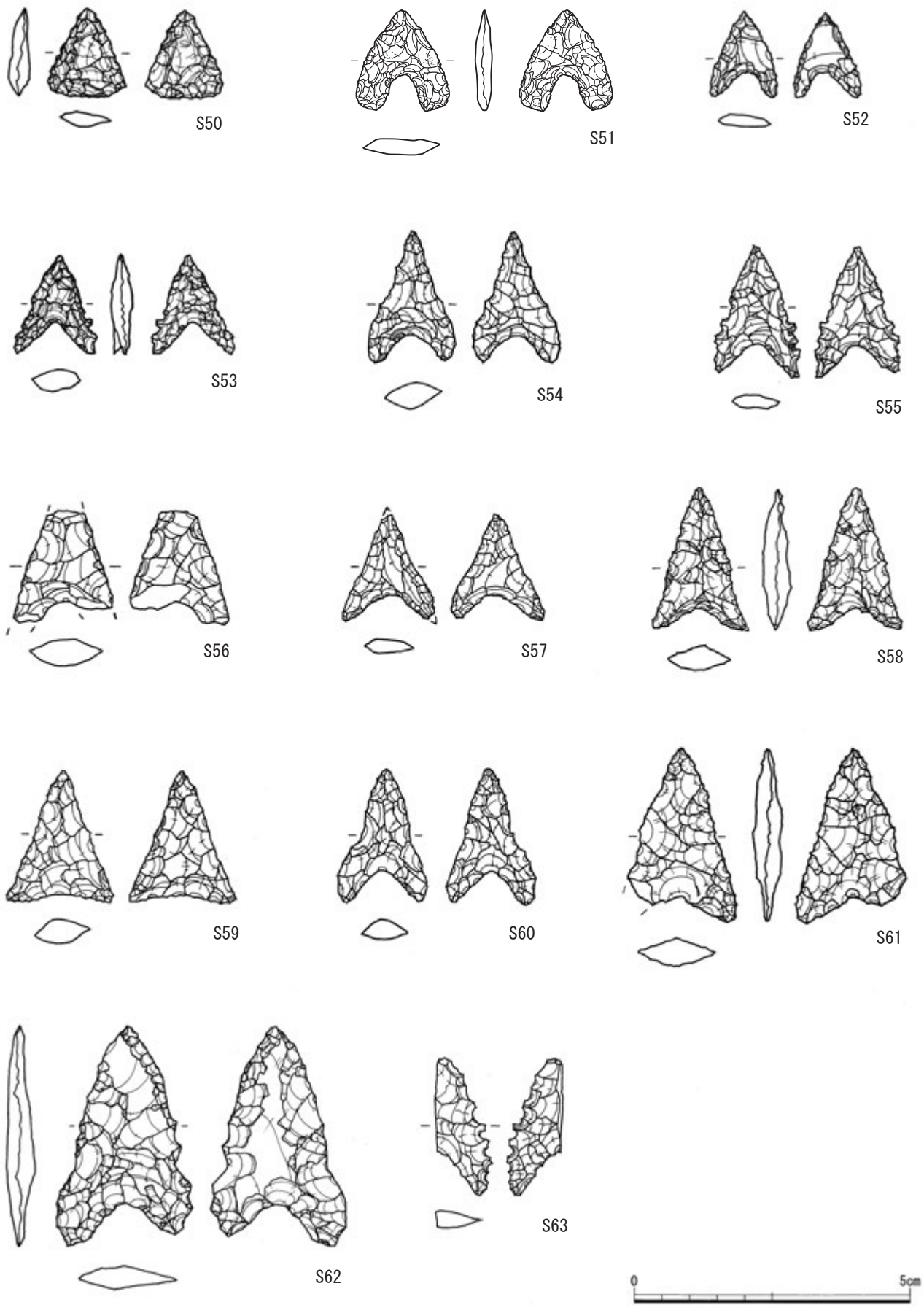
第195図　Ⅷ層出土石器６



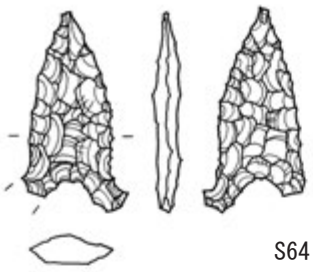
第196図　Ⅶ層出土石器７



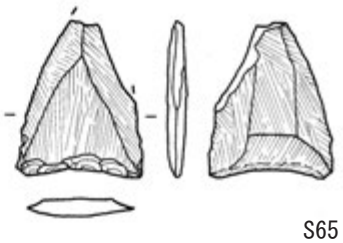
第197図　Ⅷ層出土石器８



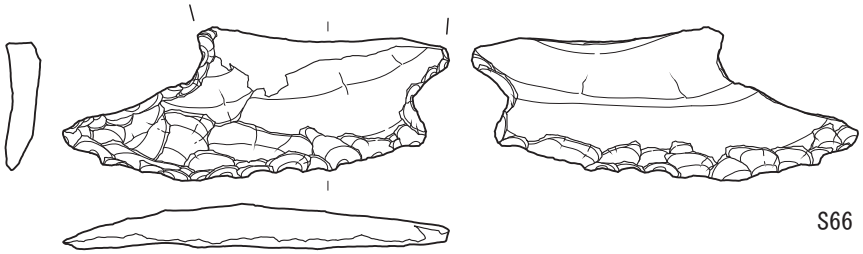
第198図　Ⅵ層出土石器１



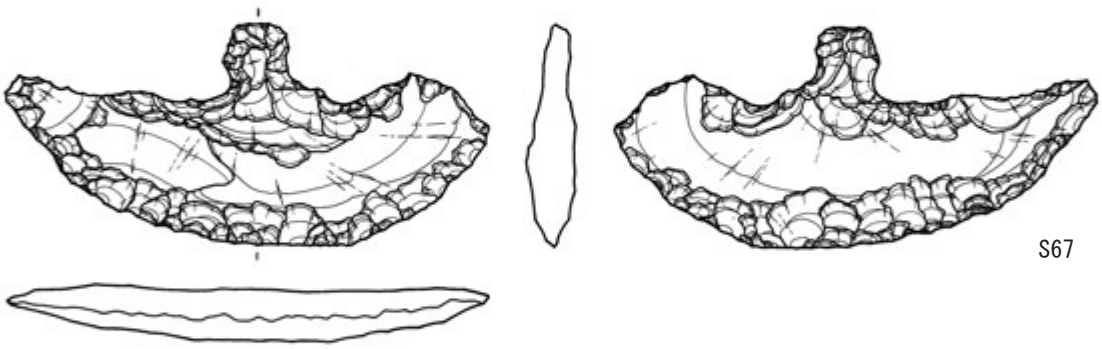
S64



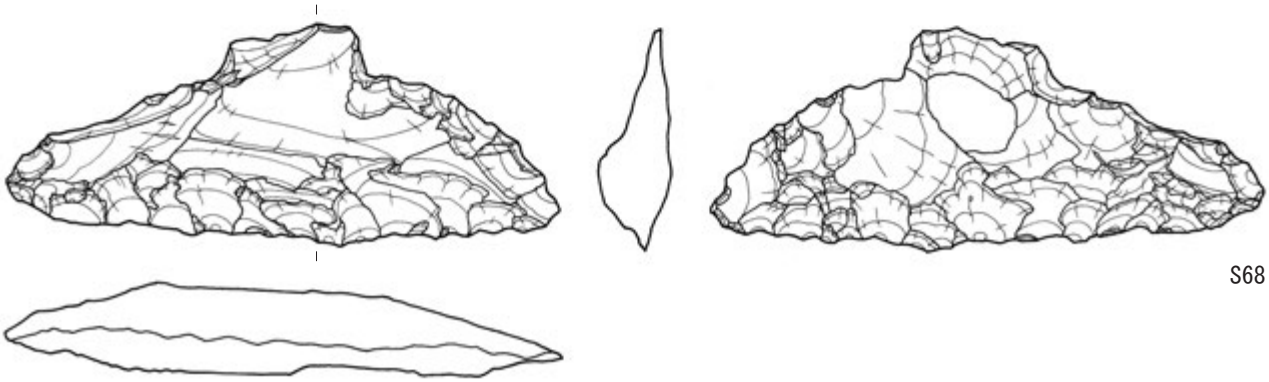
S65



S66



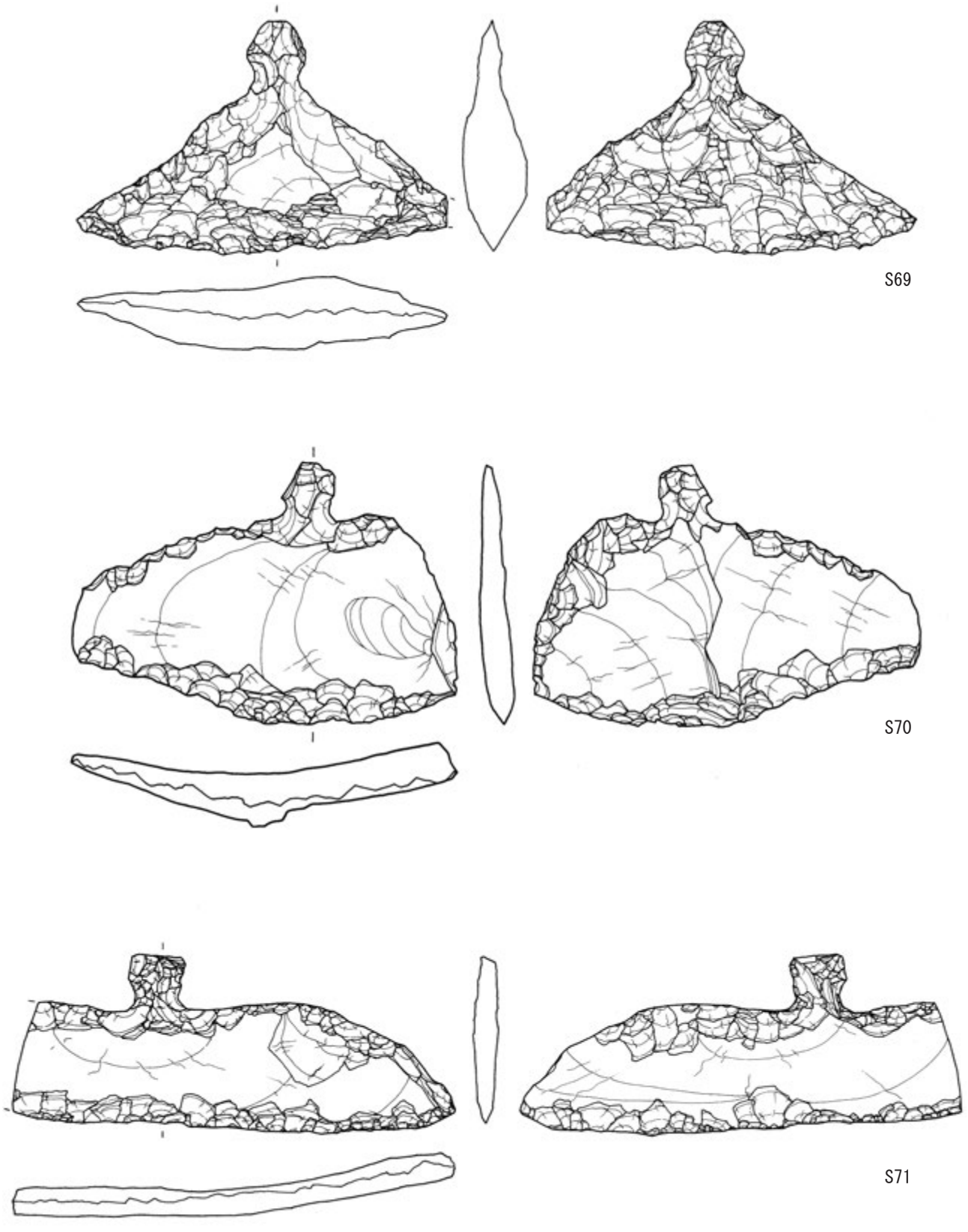
S67



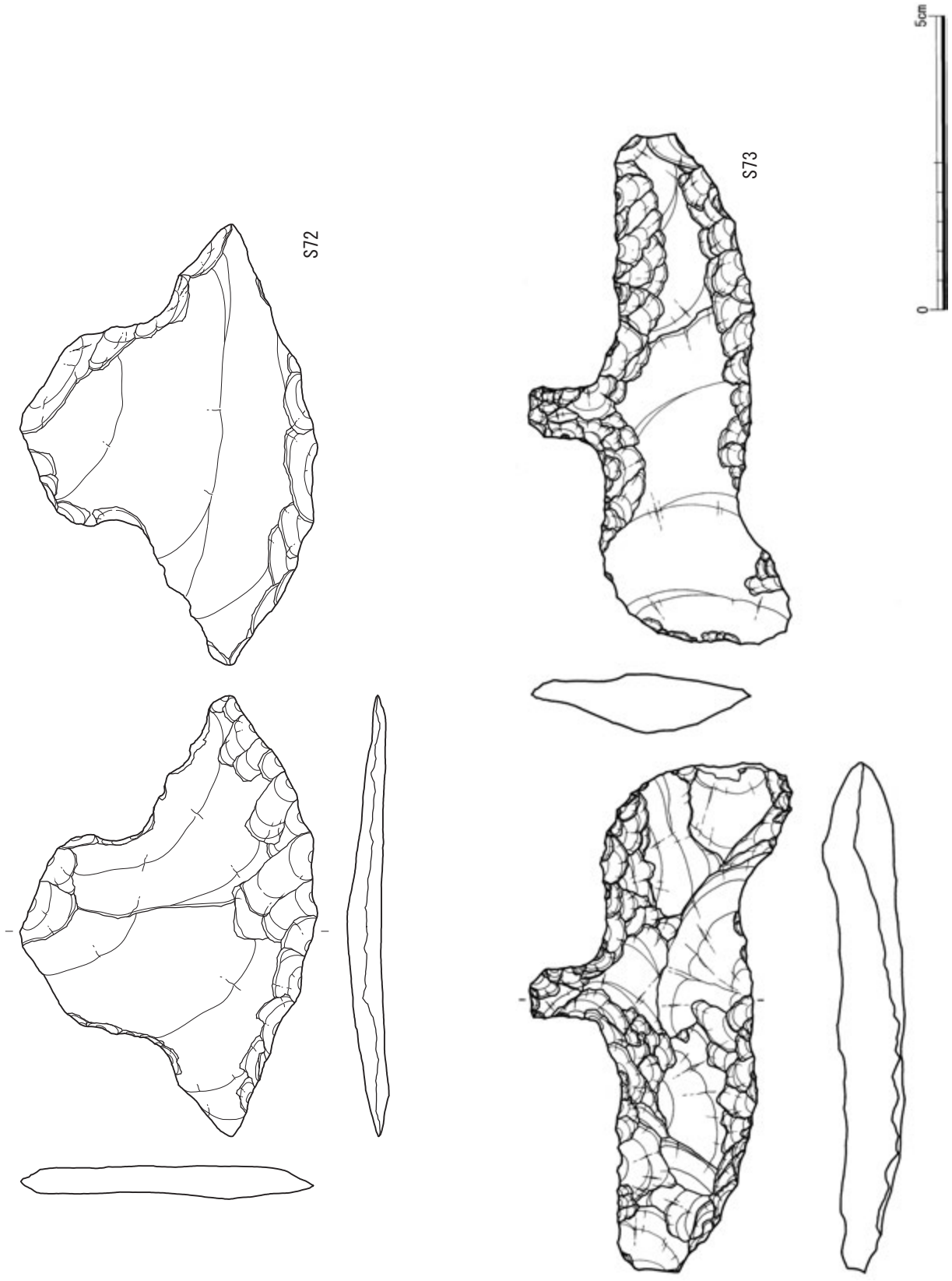
S68



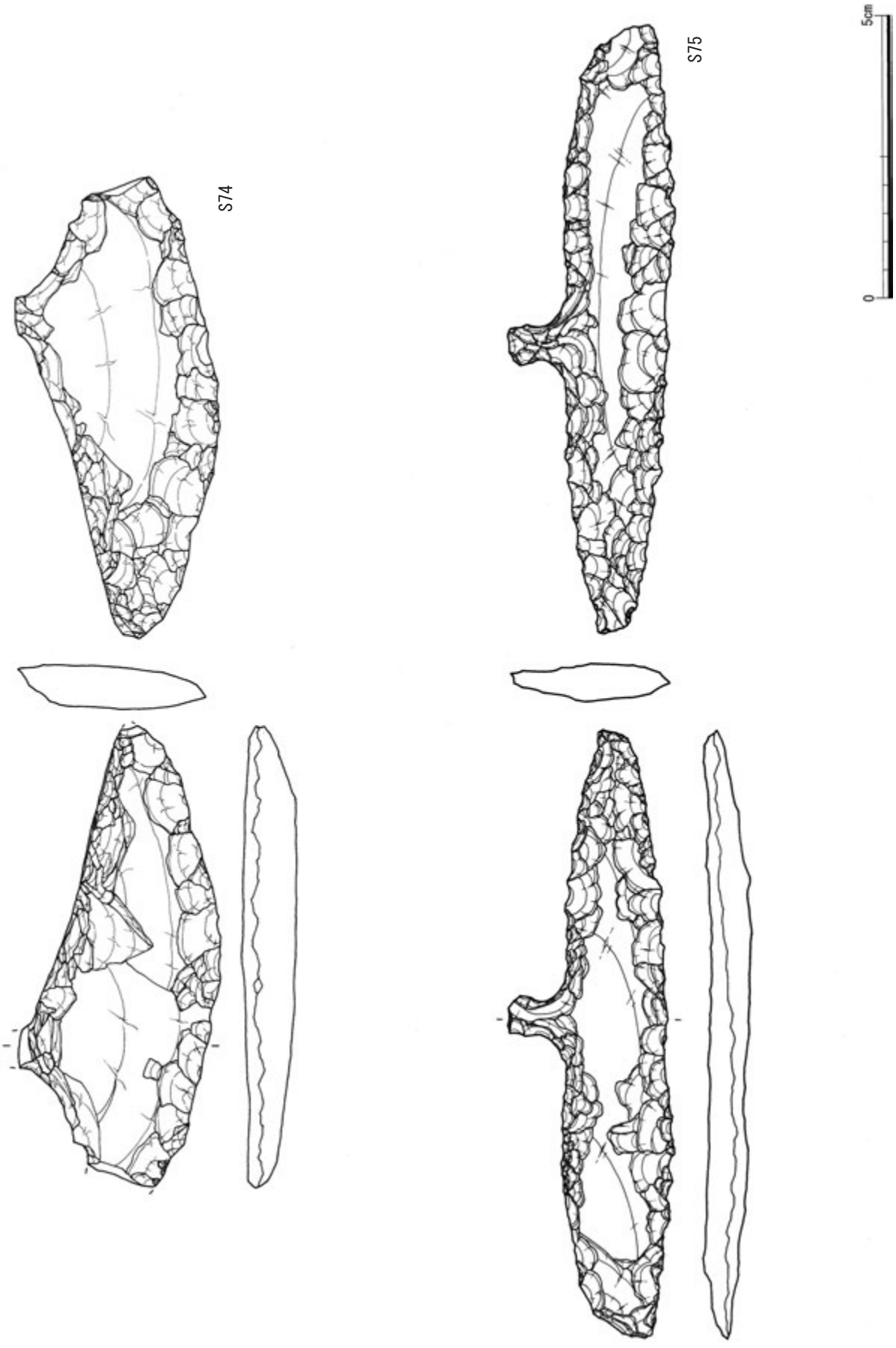
第199図　Ⅵ層出土石器２



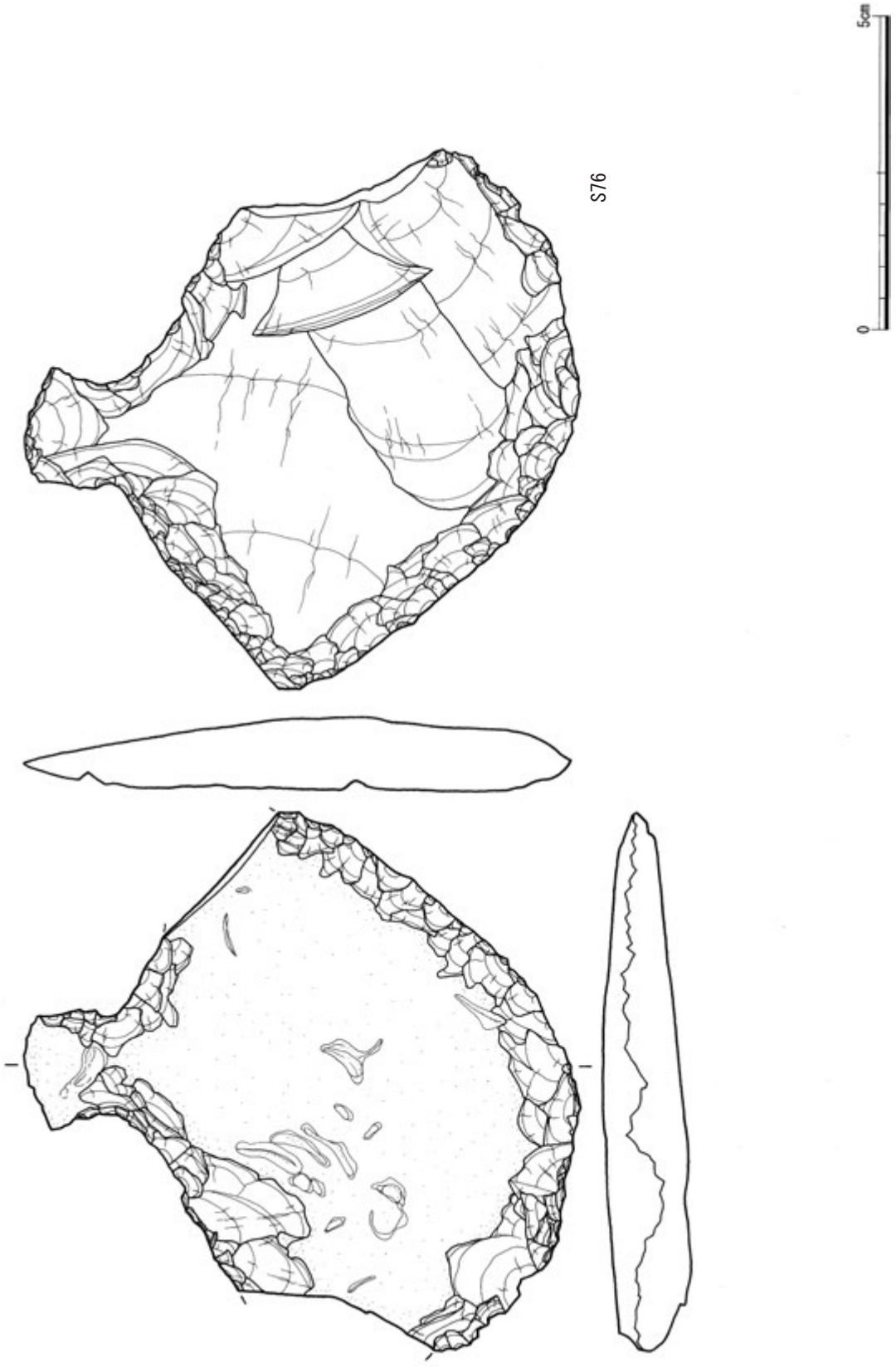
第200図　Ⅵ層出土石器３



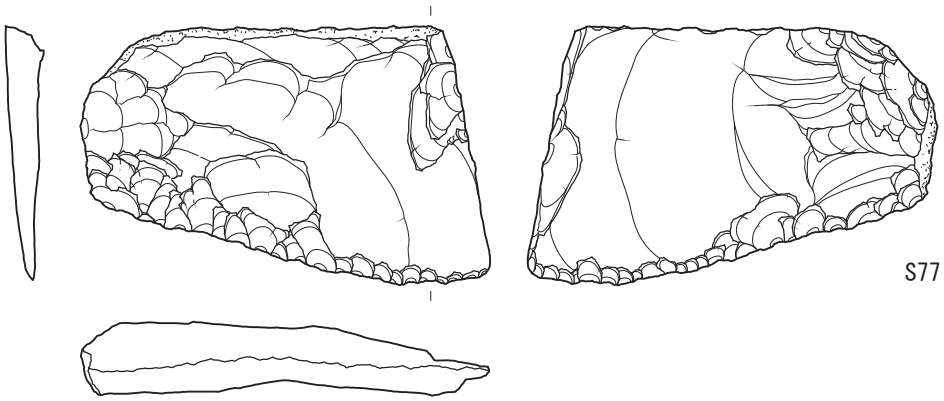
第201図　Ⅵ層出土石器４

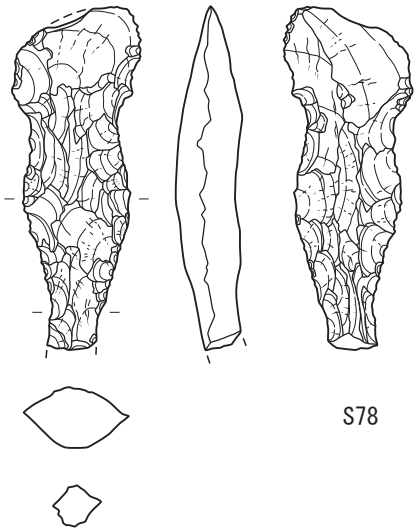


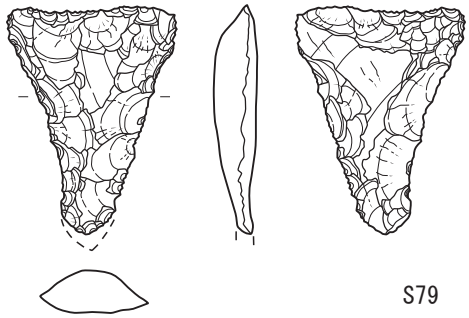
第202図　Ⅵ層出土石器５

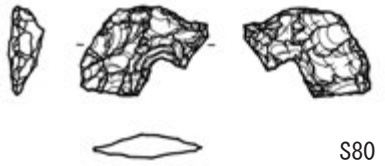


第203図　Ⅵ層出土石器６

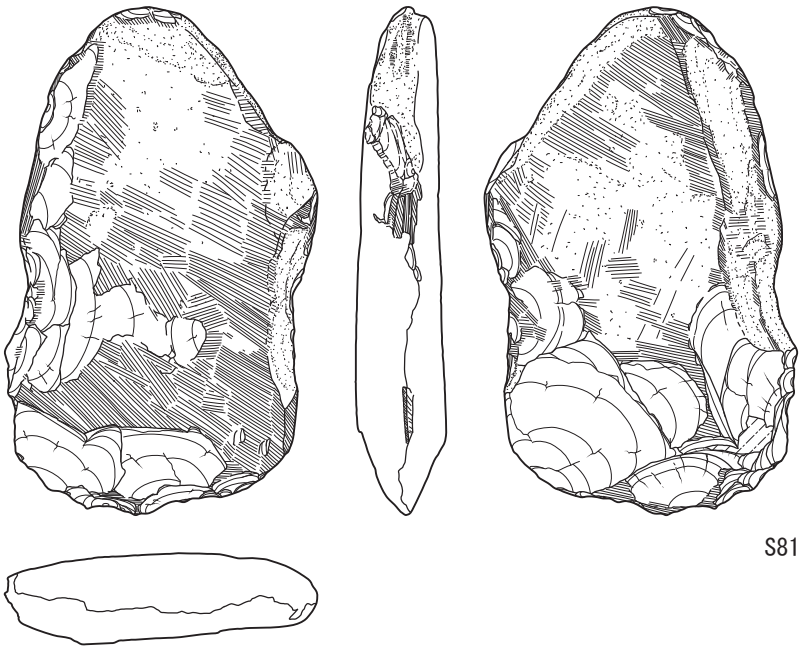






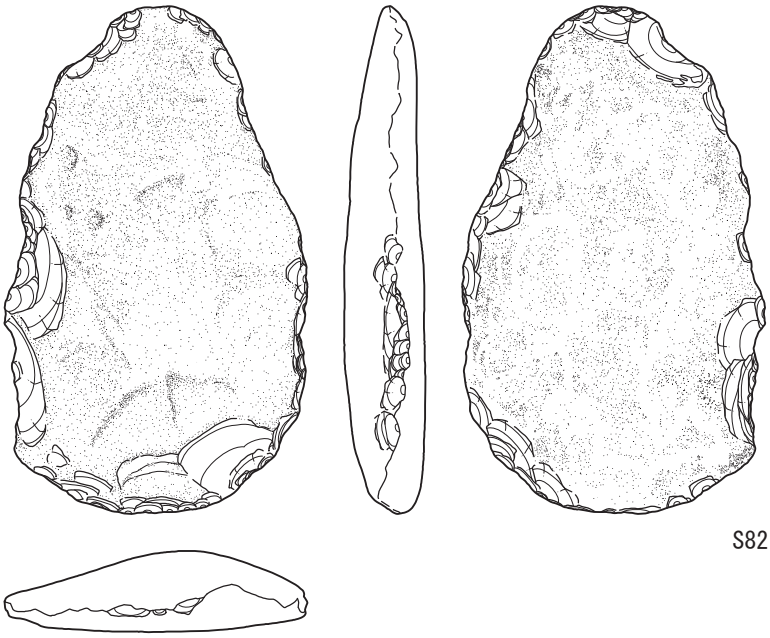


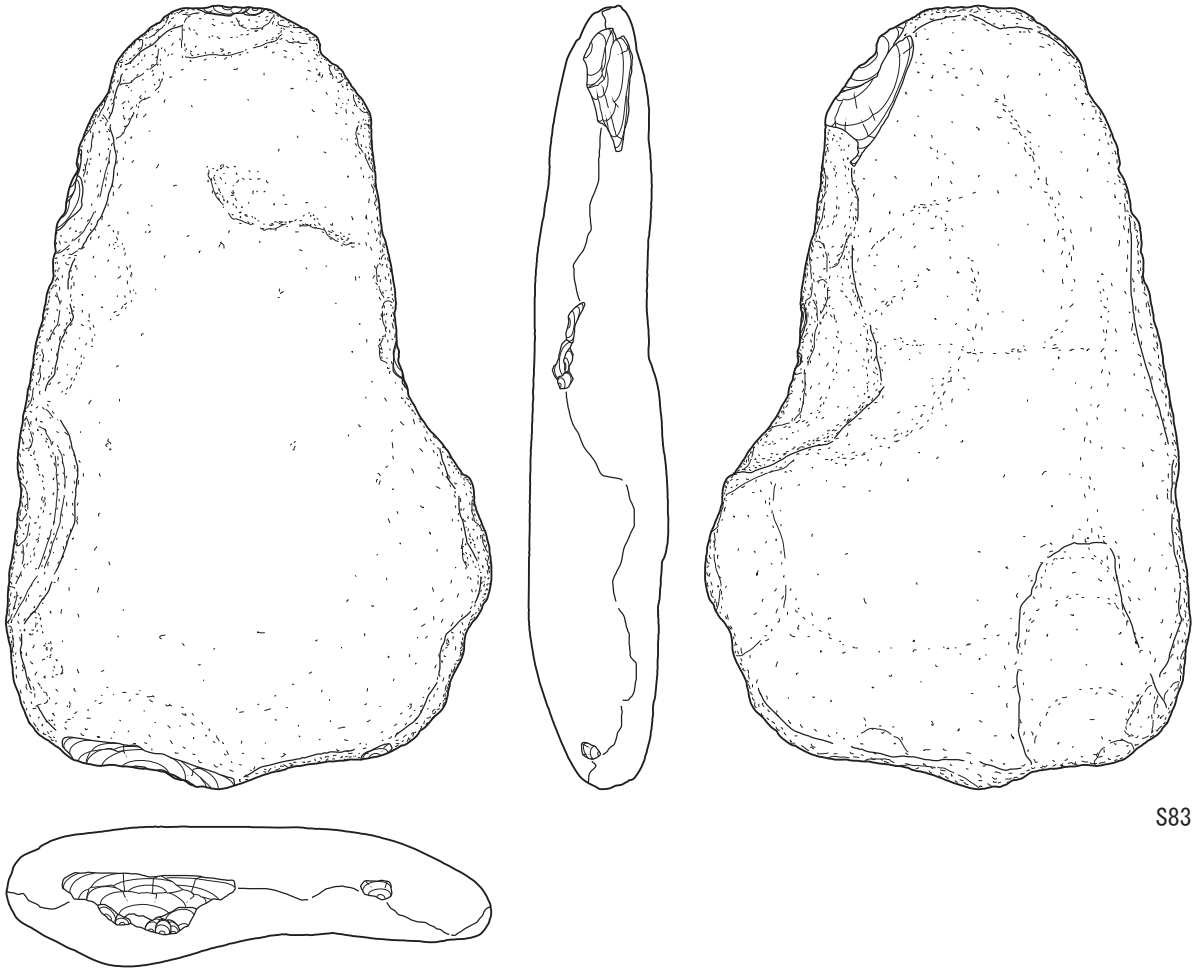




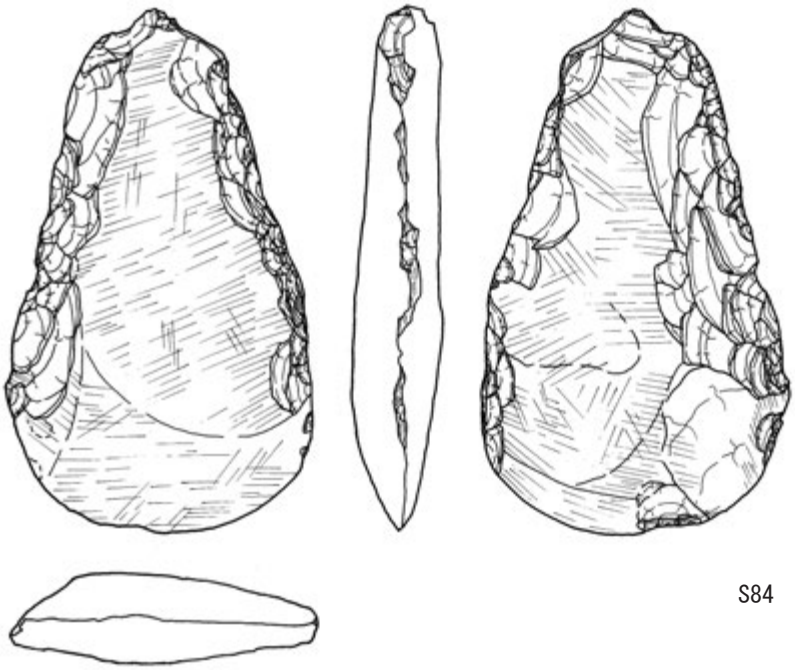


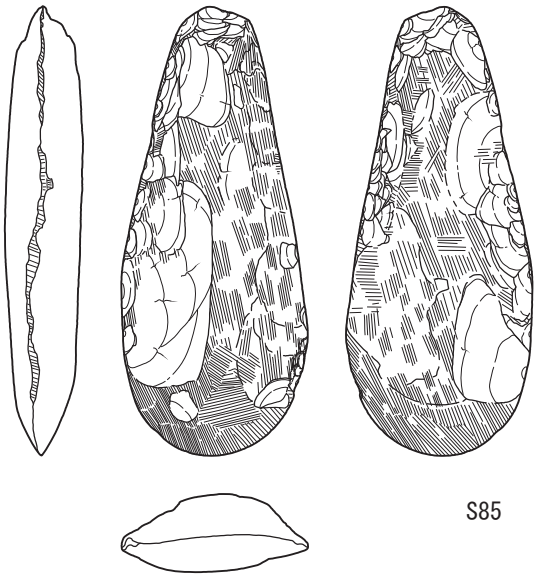
第204図　Ⅵ層出土石器７

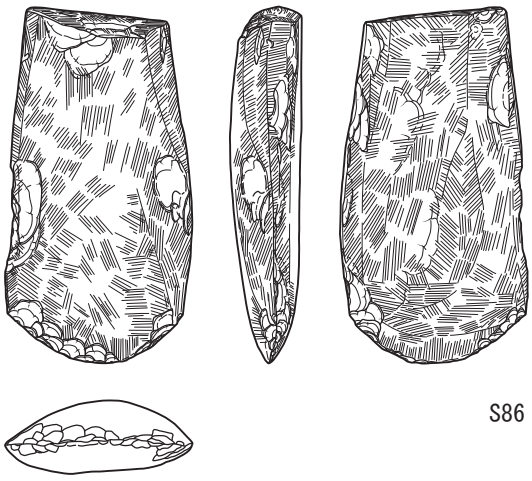


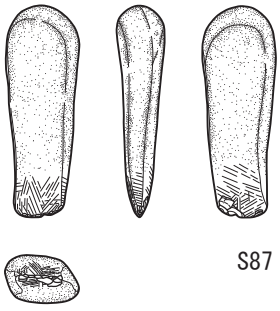


第205図　Ⅵ層出土石器８



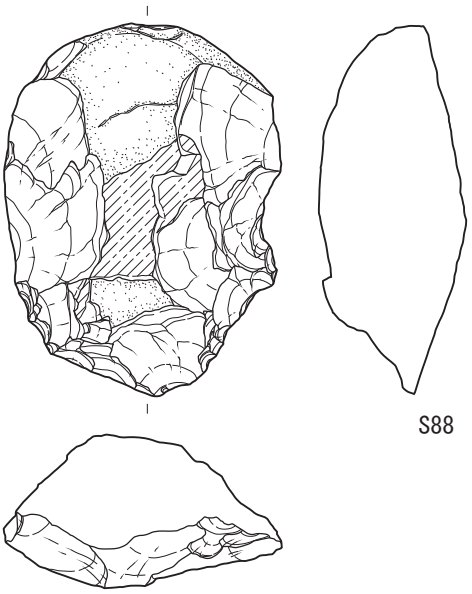


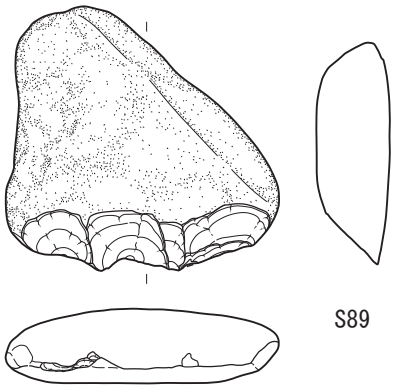


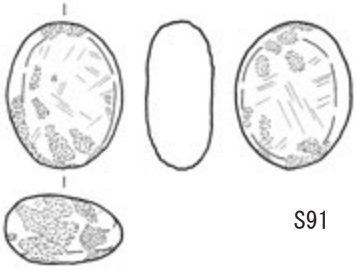


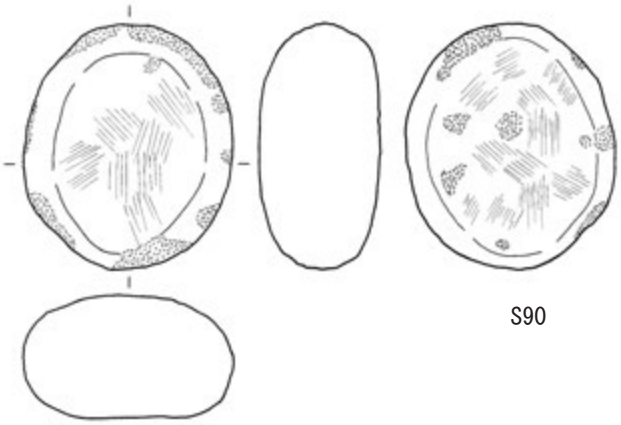


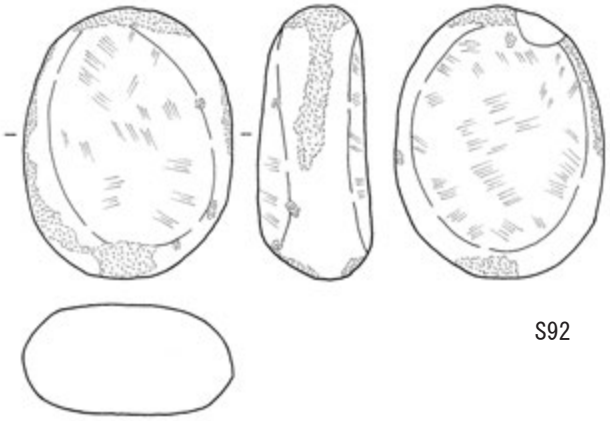
第206図　Ⅵ層出土石器９

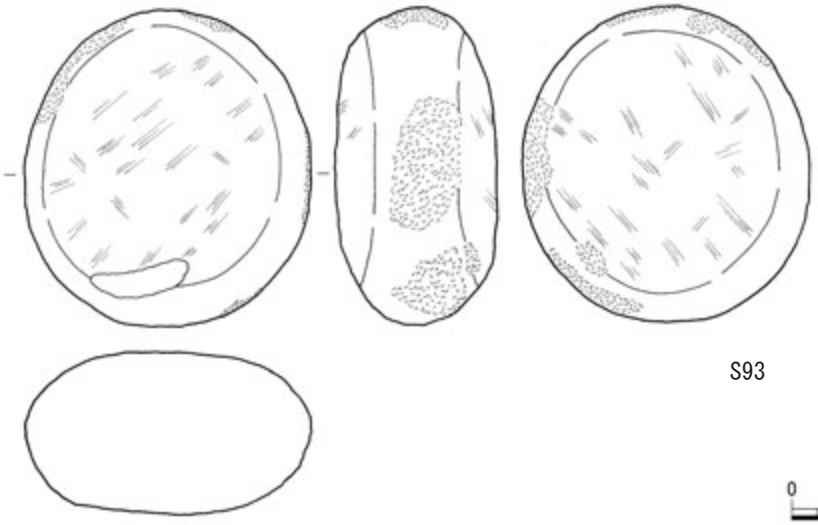






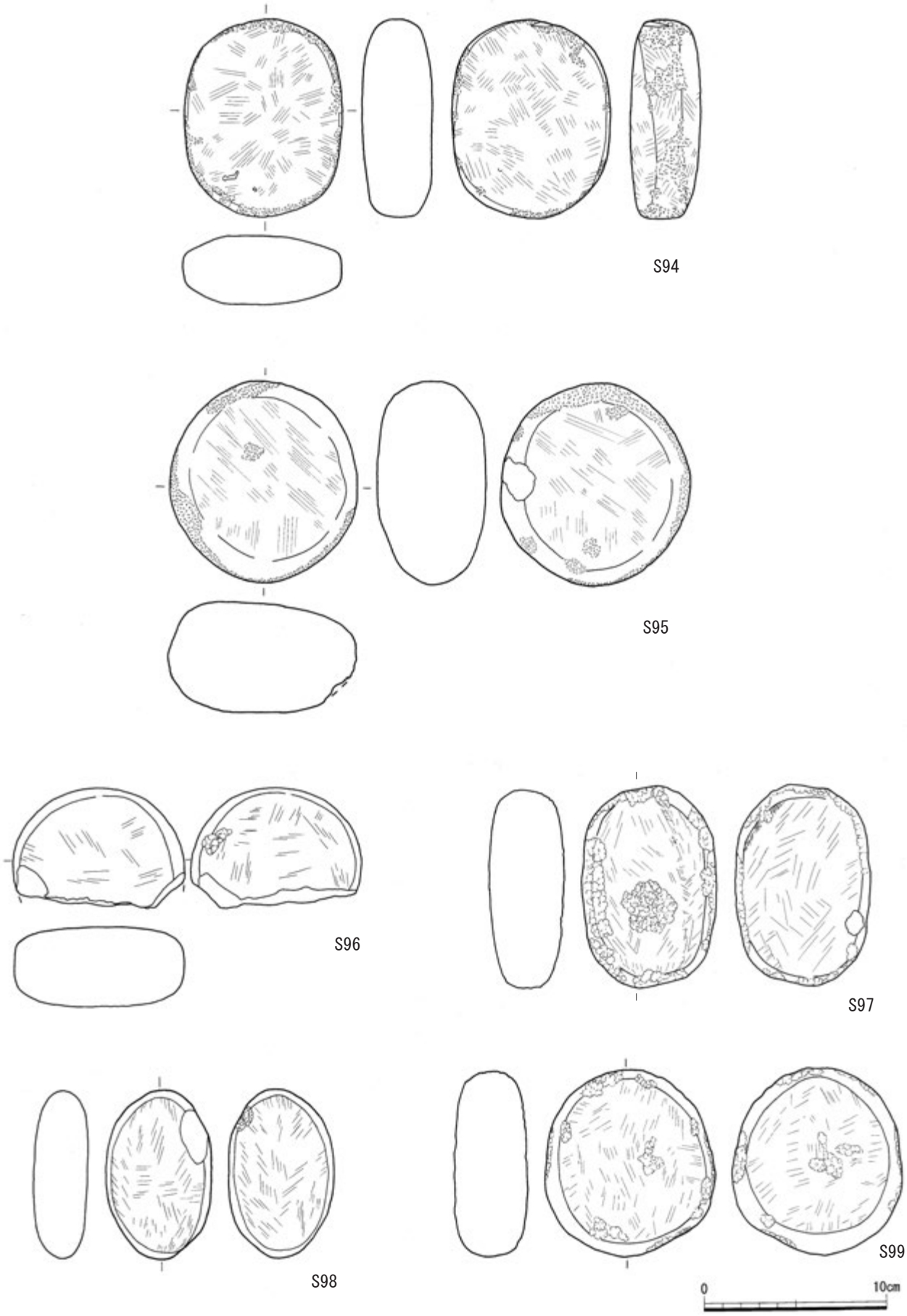








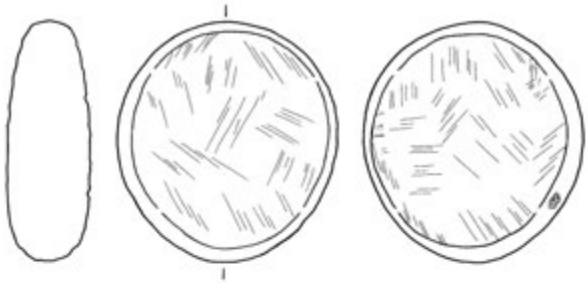
第207図　Ⅵ層出土石器10



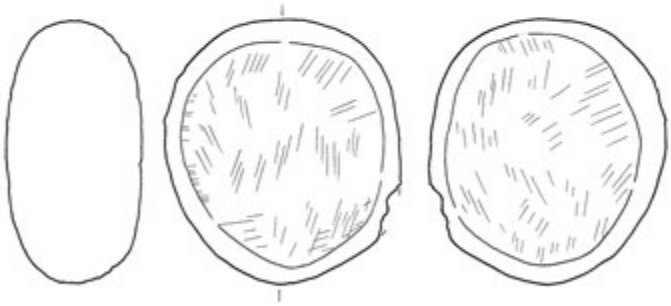
第208図　Ⅵ層出土石器11



S100



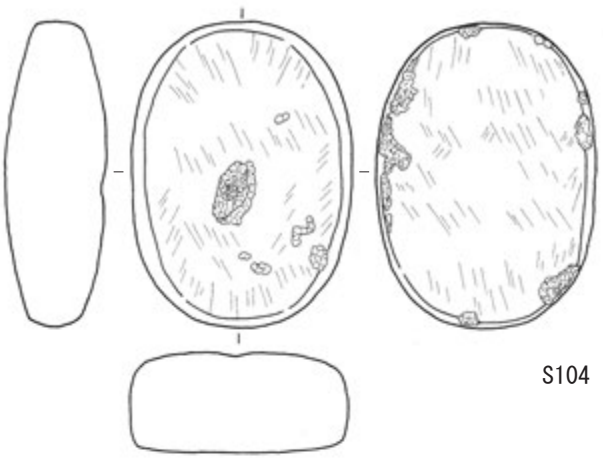
S101



S102

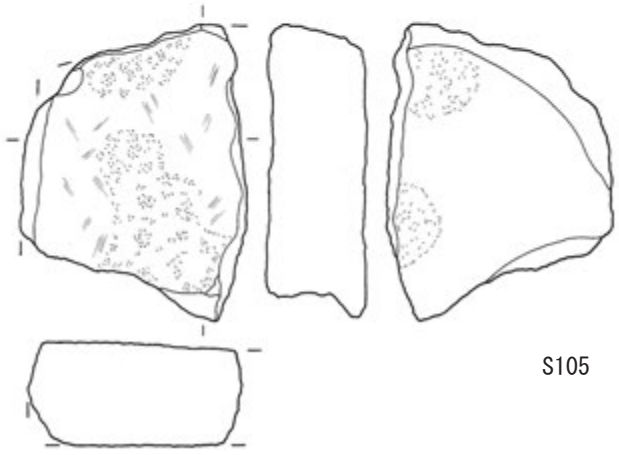


S103

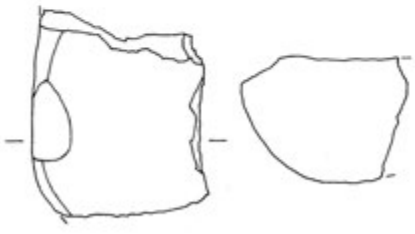


S104





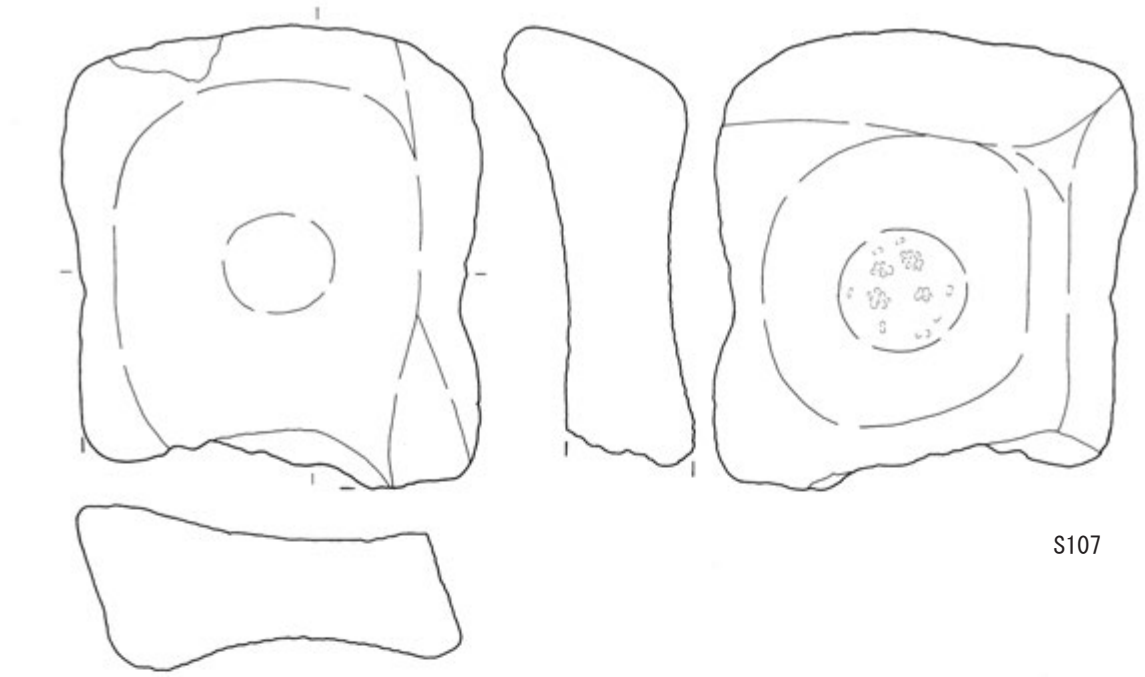
S105

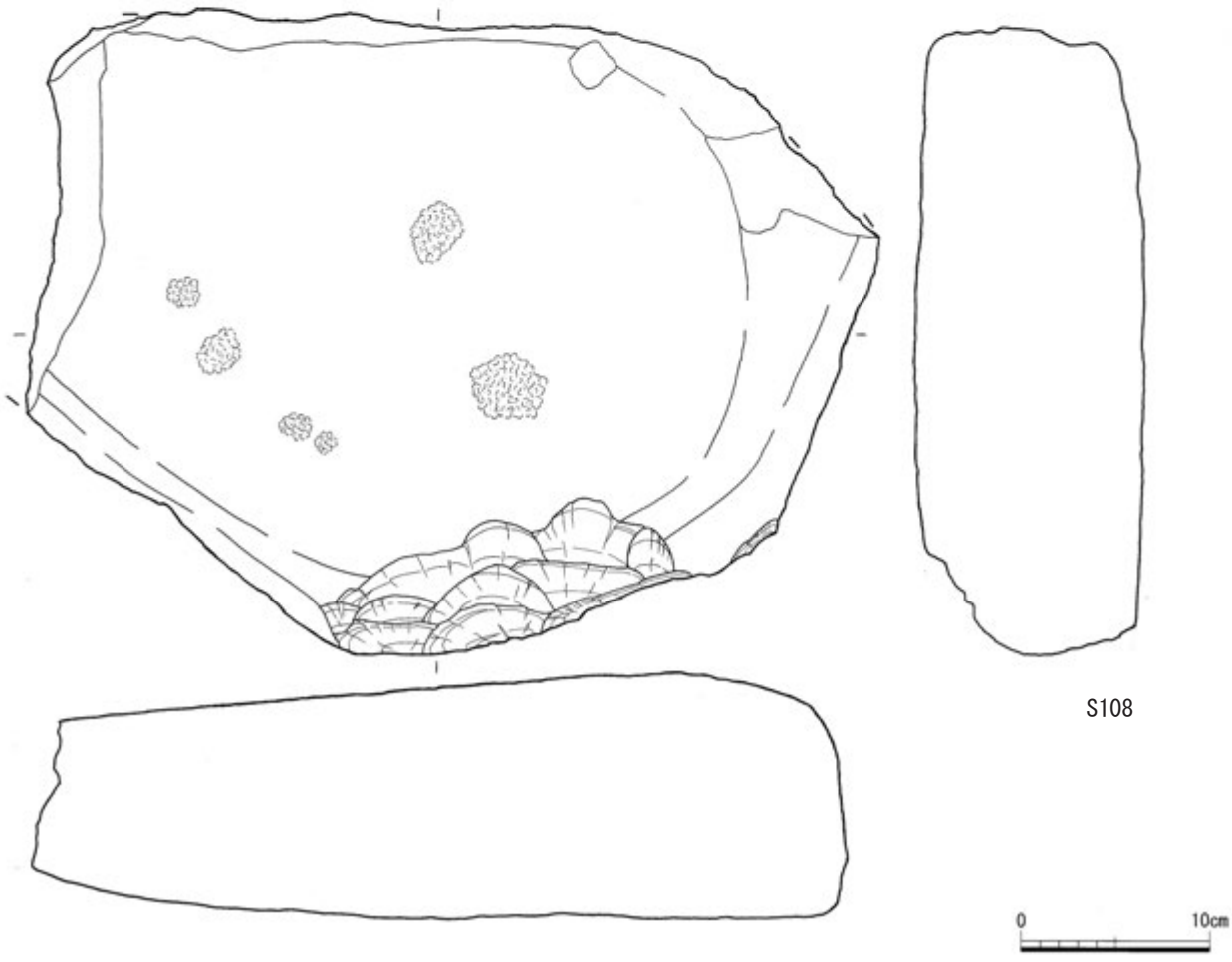


S106

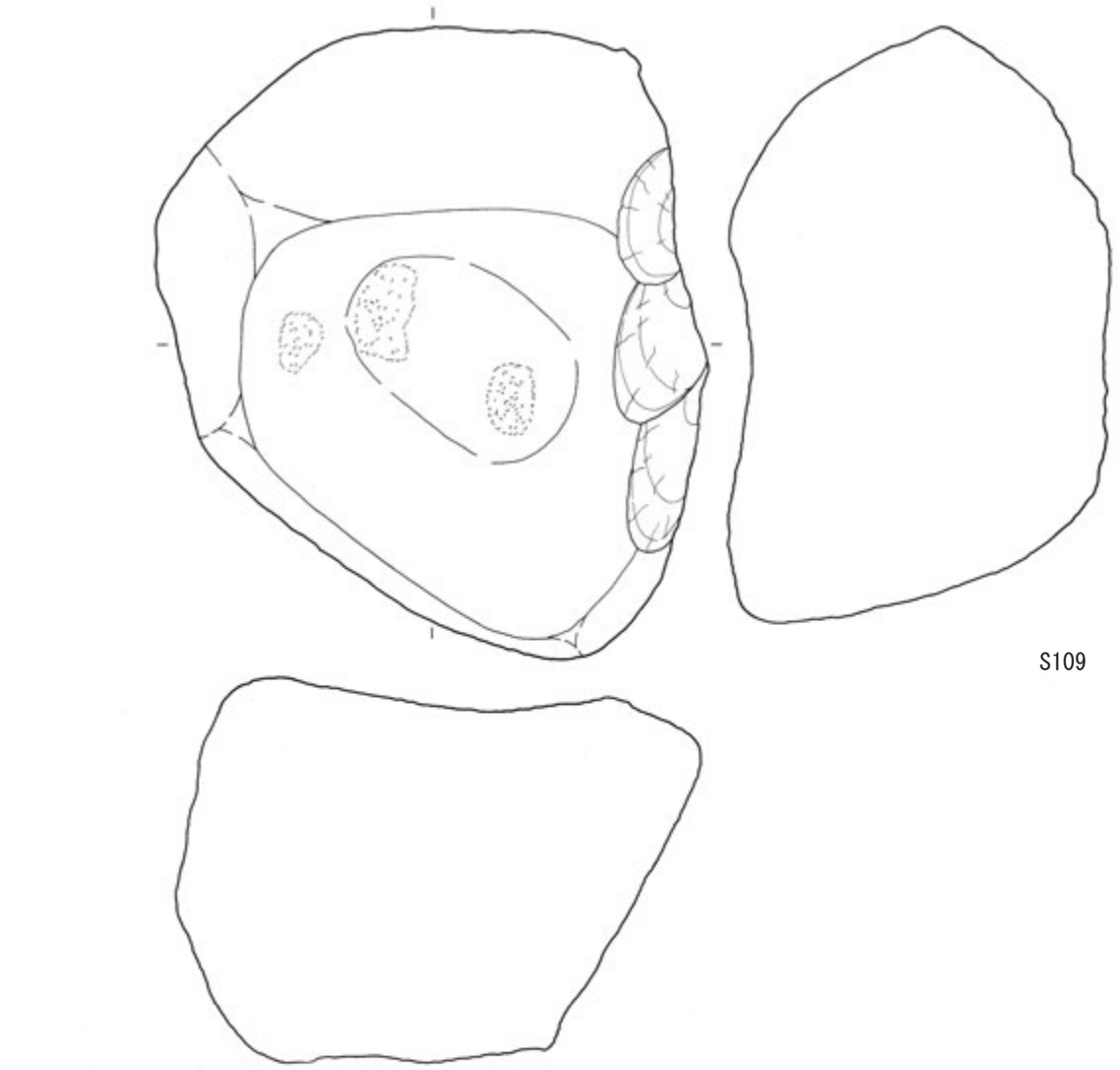


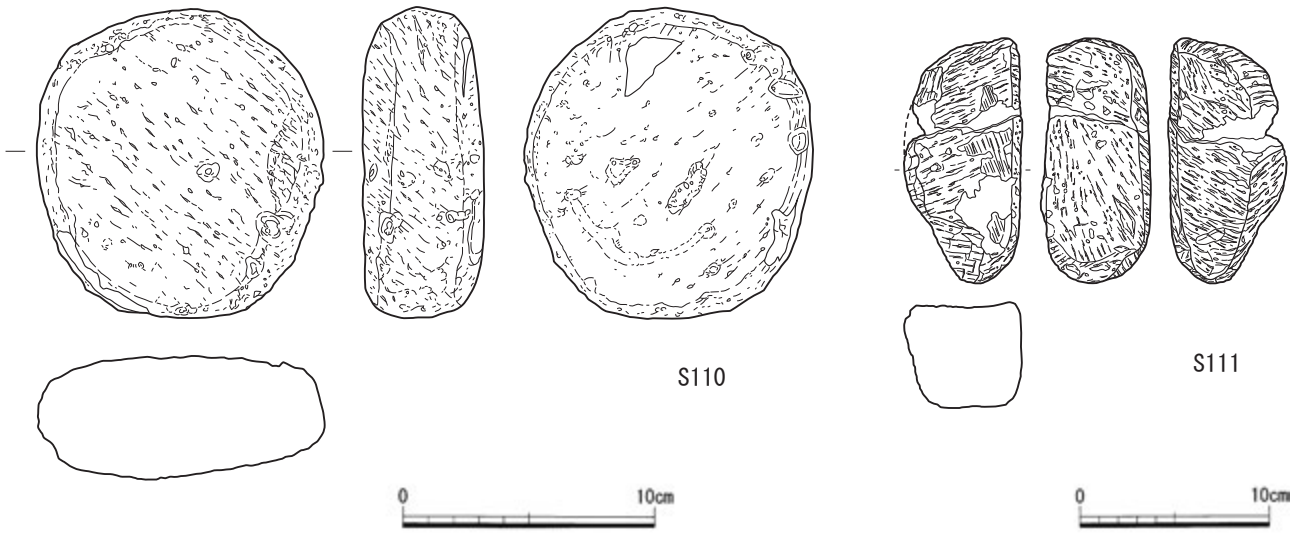
第209図　Ⅵ層出土石器12





第210図　Ⅵ層出土石器13





第211図　Ⅵ層出土石器14

第37表　Ⅶ層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層　位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備　考
190	S１	打製石鏃１	チャート	J33	Ⅶa	1.60	1.35	0.25	0.41	70837	
	S２	打製石鏃１	安山岩１b	I28	Ⅶb	1.40	1.40	0.40	0.62	96399	
	S３	打製石鏃２	安山岩２	J29	Ⅶa	1.60	1.30	0.30	0.60	96512	
	S４	打製石鏃２	安山岩１b	J35	Ⅶa	2.04	1.54	0.29	0.60	27314	
	S５	打製石鏃２	安山岩１b	L35	Ⅶa	1.80	1.50	0.50	0.63	57564	
	S６	打製石鏃２	安山岩１b	L33	Ⅶa	2.70	1.40	0.40	0.84	55449	
	S７	打製石鏃２	安山岩４	B27	Ⅶa	2.70	1.70	0.45	1.09	77949	
	S８	打製石鏃２	黒曜石７	I31	Ⅶa	2.55	1.75	0.50	1.20	111082	
	S９	打製石鏃２	チャート	G27	Ⅶa	4.30	1.95	0.35	1.74	101718	
	S10	打製石鏃３	頁岩５	L32	Ⅶb	2.80	1.95	0.25	1.10	60102	
	S11	打製石鏃５	黒曜石２	M31	Ⅶa	2.50	1.70	1.00	3.35	101585	
	S12	打製石鏃５	黒曜石６	L33	Ⅶb	2.20	1.50	0.30	0.60	61896	
	S13	打製石鏃５	黒曜石１	K29	Ⅶa	1.10	1.80	0.35	0.47	86456	
	S14	打製石鏃５	安山岩１a	H28	Ⅶb	1.30	1.10	0.20	0.20	87690	
	S15	打製石鏃５	黒曜石６	K32	Ⅶa	1.90	1.05	0.40	0.60	63531	
191	S16	尖頭状石器	メノウ系	M33	Ⅶa	6.50	3.80	0.90	18.90	74020	
	S17	石槍	安山岩１b	I29	Ⅶb	9.70	1.80	0.90	14.58	96427	
	S18	石槍	安山岩１b	H28	Ⅶa	9.60	2.05	0.80	20.00	87165	
192	S19	石匙１	安山岩１b	K32	Ⅶa	3.80	3.00	0.80	6.90	57230	
	S20	石匙１	安山岩１b	D28	Ⅶa	6.20	2.90	1.00	13.00	75619	
	S21	石匙１	安山岩１b	C27	Ⅶa	2.80	2.50	0.30	2.30	75307	
	S22	石匙２	安山岩１b	J28	Ⅶa	2.80	3.70	0.60	5.70	85828	
	S23	石匙２	安山岩１b	M33	Ⅶa	3.10	5.75	0.75	8.50	58777	
193	S24	削器	安山岩４	L32	Ⅶa	5.10	10.10	1.30	54.90	58484	
	S25	打製石斧１	頁岩１	K34	Ⅶa	8.10	5.80	1.30	83.90	55845	
	S26	打製石斧１	頁岩１	K34	Ⅶa	7.80	6.40	2.20	147.40	57602	
194	S27	磨製石斧２	頁岩２	G30	Ⅶb	8.10	8.70	2.00	195.00	109700	
	S28	磨製石斧２	頁岩２	L34	Ⅶa	6.60	7.00	1.40	87.90	59262	
	S29	磨製石斧２	頁岩１	M34	Ⅶa	6.10	7.80	2.20	115.20	57554	
	S30	磨製石斧３	頁岩７	I31	Ⅶa	6.30	3.00	1.00	23.20	110999	
	S31	磨製石斧３	頁岩１	L33	Ⅶa	9.80	3.30	1.75	72.40	63414	
195	S32	礫器	ホルンフェルス	I31	Ⅶa	14.50	10.80	4.50	798.00	111013	
	S33	礫器	砂岩１	K30	Ⅶa	18.10	13.10	3.60	943.00	85227	
	S34	礫器	ホルンフェルス	I32	Ⅶa	12.80	15.50	4.50	1079.00	70286	
	S35	磨・敲石	安山岩４	I30	Ⅶa	7.10	6.60	3.95	243.00	96024	
	S36	磨・敲石	砂岩１	B28	Ⅶa	11.70	10.40	4.40	681.00	77886	
	S37	磨・敲石	安山岩４	L32	Ⅶa	9.40	6.30	3.80	327.00	57260	
196	S38	磨・敲石	安山岩４	L35	Ⅶa	12.10	10.40	6.10	1235.00	55867	
	S39	磨・敲石	安山岩４	M32	Ⅶ	10.85	4.20	3.25	210.00	53681	
	S40	磨・敲石	安山岩４	M33	Ⅶa	11.40	108.00	5.10	840.00	58225	
	S41	磨・敲石	安山岩４	C26	Ⅶa	5.40	8.70	4.35	298.00	42219	
	S42	磨・敲石	花崗岩	K33	Ⅶa	10.80	9.30	5.50	830.00	55456	
	S43	磨・敲石	安山岩４	K33	Ⅶa	9.50	6.64	4.83	479.00	57234	
	S44	磨・敲石	花崗岩	L35	Ⅶa	10.70	9.80	4.60	720.00	58818	
	S45	磨・敲石	安山岩４	J29	Ⅶa	10.60	7.40	4.20	490.00	83123	
197	S46	磨・敲石	安山岩４	M32	Ⅶ	11.00	8.40	3.90	566.00	53127	
	S47	石皿・台石	砂岩２	K33	Ⅶ	23.00	14.80	9.20	4820.00	52901	
	S48	石皿・台石	安山岩４	J27	Ⅶa	13.90	10.10	3.80	807.00	86912	
	S49	石皿・台石	凝灰岩	E32	Ⅶa	28.60	41.00	7.90	9520.00	28601	

第38表　Ⅵ層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層　位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備　考
198	S50	打製石鏃1	安山岩1b	J34	Ⅵ	1.65	1.45	0.40	0.60	26273	
	S51	打製石鏃2	安山岩2	M33	Ⅵ	1.80	1.70	0.30	0.80	60921	
	S52	打製石鏃2	黒曜石4	F33	Ⅵ	1.53	1.21	0.24	0.30	25902	
	S53	打製石鏃2	安山岩1b	BC33	Ⅵ	1.80	1.50	0.40	0.48	25666	
	S54	打製石鏃2	黒曜石6	D33	Ⅵ	2.36	1.58	0.50	0.78	25598	
	S55	打製石鏃2	安山岩1b	J35	Ⅵ	2.36	1.51	0.26	1.00	27295	
	S56	打製石鏃2	黒曜石4	C33	Ⅵ	2.01	1.79	0.51	1.37	25435	
	S57	打製石鏃2	安山岩1b	E34	Ⅵ	1.92	1.66	0.29	0.59	26193	
	S58	打製石鏃2	頁岩5	I28	Ⅵ	2.55	1.70	0.50	1.00	88217	
	S59	打製石鏃2	チャート	H34	Ⅵ	2.37	1.91	0.52	1.62	26134	
	S60	打製石鏃2	黒曜石6	D33	Ⅵ	2.42	1.62	0.39	0.93	25394	
	S61	打製石鏃2	黒曜石6	B28	Ⅵ	3.15	2.00	0.50	1.80	67131	
	S62	打製石鏃2	黒曜石6	E33	Ⅵ上	4.00	2.50	0.50	2.82	24927	
	S63	打製石鏃2	黒曜石4	K35	Ⅵ	2.46	1.00	0.39	0.61	25353	
199	S64	打製石鏃5	黒曜石7	G32	Ⅵ	2.70	1.35	0.40	0.86	65785	
	S65	磨製石鏃	頁岩4	G33	Ⅵ	2.05	1.65	0.25	0.90	64538	
	S66	石匙2	安山岩1b	I29	Ⅵ	2.00	5.10	0.60	5.00	95041	
	S67	石匙2	安山岩1a	F28	Ⅵ	2.90	6.30	0.60	9.91	99739	
	S68	石匙2	安山岩1b	K34	Ⅵ	2.90	7.30	0.90	16.90	53734	
200	S69	石匙2	安山岩1b	I35	Ⅵ	4.10	6.55	1.30	17.90	25368	
	S70	石匙2	安山岩1b	J34	Ⅵ	4.60	6.80	0.60	19.90	25486	
	S71	石匙2	安山岩1b	K35	Ⅵ	3.20	7.80	0.50	10.60	27348	
201	S72	石匙2	粘板岩	D27	Ⅵ	5.00	7.50	0.70	18.90	76136	
	S73	石匙2	安山岩1b	K34	Ⅵ	4.45	8.65	1.00	28.70	49927	
202	S74	石匙2	安山岩1b	K34	Ⅵ	4.70	8.10	0.85	24.80	49234	
	S75	石匙2	安山岩1a	L33	Ⅵ	2.95	10.70	0.70	17.40	47150	
203	S76	石匙2	安山岩1b	E33	Ⅵ	8.80	8.65	1.25	93.30	25313	
204	S77	削器	安山岩1b	L34	Ⅵ	3.40	5.40	1.00	17.80	51883	
	S78	石錐	安山岩1b	E32	Ⅵ	(4.50)	1.70	0.80	5.10	25609	
	S79	石錐	安山岩1a	I28	Ⅵ	3.00	2.20	0.60	3.30	89624	
	S80	異形石器	黒曜石1	I29	Ⅵ	1.15	1.65	0.35	0.50	89836	
	S81	打製石斧2	頁岩4	M34	Ⅵ	13.40	8.30	2.40	360.00	55354	
205	S82	打製石斧2	頁岩2	L34	Ⅵ	13.40	8.00	2.10	300.00	58246	
	S83	打製石斧2	頁岩2	C27	Ⅵ	20.70	12.80	3.70	1160.00	75328	
206	S84	磨製石斧1	頁岩3	K34	Ⅵ	13.80	8.00	2.50	300.00	48832	
	S85	磨製石斧1	頁岩1	H29	Ⅵ	11.90	4.90	2.00	132.80	97395	
	S86	磨製石斧2	頁岩8	G28	Ⅵ	9.40	5.00	1.90	129.00	79870	
	S87	磨製石斧3	頁岩4	L35	Ⅵ	5.60	1.95	1.25	15.10	48100	
207	S88	礫器	ホルンフェルス	H32	Ⅵ	14.80	11.00	6.10	980.00	64431	
	S89	礫器	ホルンフェルス	G29	Ⅵ	10.50	10.80	2.90	405.00	104663	
	S90	磨・敲石	安山岩4	E33	Ⅵ	9.65	8.25	4.80	530.00	26963	
	S91	磨・敲石	安山岩4	J29	Ⅵ	5.80	4.60	2.70	82.00	83217	
	S92	磨・敲石	砂岩2	K32	Ⅵ	10.75	8.20	4.45	585.00	63512	
	S93	磨・敲石	花崗岩	I30	Ⅵ	12.50	11.30	6.40	1343.00	110707	
208	S94	磨・敲石	安山岩4	K28	Ⅵ	10.70	8.65	3.90	574.00	82192	
	S95	磨・敲石	安山岩4	L35	Ⅵ	11.00	10.20	6.00	950.00	55906	
	S96	磨・敲石	安山岩4	I35	Ⅵ	6.60	9.30	4.30	438.00	27260	
	S97	磨・敲石	安山岩4	L35	Ⅵ	10.95	7.25	4.10	432.00	54692	
	S98	磨・敲石	安山岩4	L34	Ⅵ	9.15	5.70	2.90	230.00	54384	
	S99	磨・敲石	安山岩4	K34	Ⅵ	10.20	9.30	4.10	549.00	54724	
209	S100	磨・敲石	安山岩4	L34	Ⅵ	10.30	9.95	4.40	654.00	55380	
	S101	磨・敲石	安山岩4	E32	Ⅵ	9.40	8.60	3.30	391.00	26144	
	S102	磨・敲石	安山岩4	K33	Ⅵ	10.45	9.40	5.40	785.00	54761	
	S103	磨・敲石	安山岩4	K34	Ⅵ	10.90	8.70	4.25	656.00	54427	
	S104	磨・敲石	安山岩4	F34	Ⅵ	12.10	8.25	4.10	663.00	27073	
	S105	石皿・台石	花崗岩	L35	Ⅵ	15.70	12.00	5.30	1410.00	48095	
	S106	石皿・台石	安山岩4	K33	Ⅵ	10.90	9.40	6.70	1102.00	51903	
210	S107	石皿・台石	安山岩4	J29	Ⅵ	24.50	22.20	9.50	6360.00	83036	
	S108	石皿・台石	安山岩4	D35	Ⅵ	34.20	45.20	13.00	23900.00	26349	
211	S109	石皿・台石	安山岩4	I29	Ⅵ	34.00	29.70	20.80	24100.00	89660	
	S110	軽石製品	軽石	M34	Ⅵ	4.10	3.80	1.60	6.20	54397	
	S111	軽石製品	軽石	L30	Ⅵ	13.00	6.30	5.60	96.50	79605・79606	

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（38）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保遺跡４　Ａ地点

縄文時代早期編（第１分冊）

発 行 年 月　　2021年３月

編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
ＴＥＬ　0995-70-0574　ＦＡＸ　0995-70-0576

印　　刷　　株式会社　あすなろ印刷
〒899-0041　鹿児島市城西2-2-36
ＴＥＬ　099-214-3757　ＦＡＸ　099-214-3758


鹿児島県